

---

# 偏屈さんと一緒

ロッカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偏屈さんと一緒

### 【Nコード】

N17500

### 【作者名】

ロツカ

### 【あらすじ】

異世界に落ちたら猫になっていた！？  
いろいろ言われたり（非対称だの、それは犯罪だろ！など）するけど、やっぱりあの人の側にいたい！気になるのに素直になれない男と恋に仕事に元気な猫、基 女の子の物語です。

## 登場人物 紹介（前書き）

今さら感漂ってますが「誰だおまえ」的になったらどうぞ。

## 登場人物 紹介

### ドミニオン自治領国

「ガツクさん・・・最近マジおかしいよ?・・・大丈夫?」

モモコ

猫 ピンク色のふわふわの毛 茶色にグリーンが入った目 いつも半開きの口  
成獣だがこの世界では規格外に小さい。ので子供だと思われる。ツッコミ属性だが能天気で抜けている。最近、アルコールが入るとガツクを凌ぐ最強の存在になる事が判明した。

「俺はアイツを誰とも分かち合うつもりはない。たとえ1分1秒でもな。」

ガツク・コクサ

男 37歳 短い黒髪 黒目 2m78cmの大男 攻撃専門部隊  
「雷桜隊」を率いる大将

軍部最強の男。顔は整っているが、それを凌いで漏れ出るアツチ系のオーラ。モモコ以外は目に入らず、モモコに関する事では心狭く、嫉妬深く、暴走しがち。最近ヤンデレ男の呼び名が高い。

「おいおい、俺が間違えるはずないだろ？」

ホクガン・ラウンド

男 37歳 長く濃い金髪 金色の目 2m76?の大男 第3代  
ドミニオン自治領国国主

普段はボンクラのサボり魔だがカリスマ性は抜群。イベント好き。空気は読めるが読む気はない。デリカシーもない。常に物事を面白い面白くないかで判断する。ガツクとダイスは幼馴染。

「何じゃい、やりすぎるな等とやかましい事を言う気じゃねえじゃろっな？」  
など

ダイス・ラズ

男 37歳 銀色に黒が混ざる短い髪 濃い青い目 2m77?の

大男 遊撃部隊「霧藤隊」を率いる大将

浅黒い肌と独特の訛りは南部特有のもの。モテるがテンレイの事になると自他共にヘタレ認証済み。実は三人の中で一番の常識人。シヨウの飼い主。

「あなた達軍部は本当に無作法者の集まりねえ もう少しどうにか  
ならないのかしら。」

テンレイ・ラウンド

女 27歳 プラチナブロンドの長く波打つ髪 エメラルドグリーン  
の目 「奥」の管理責任者

動物大好き。モモコ大好き。可愛いモノは好きだが厳つい軍部は嫌い。相手によって慈愛の女神になったり、参謀になったり、鬼監督になったり（主にガツク達、厳つい男ども）する。頑固でホクガン・ガツク・ダイスに容赦ない。

「またしよぼくれおってからに。今度はどうしたんじゃア。」

シヨウ

男 6歳（人間でいうと30歳ぐらい）ドーベルマン（軍用犬種）  
顔はめっちゃ怖いが知的で紳士な犬。モモコにとってこの世界のお父さんの存在。物語中一番男らしい。ダイスの飼い犬。

「そのボンクラ国主！！待てえ！！」

デウスカ・コールド

男 25歳 短い黒髪 青い目 ホクガンの補佐官  
ツッコミ担当。名門大学を卒業後、国主の補佐官というエリート街道まっしぐらのはずが、ホクガンを捕獲する事に明け暮れる毎日になるとは・・・

「あなたには国主の自覚があるんですか？いえないですよね」

レキオス・トラスト

男 24歳 肩までの薄い金髪 アイスブルーの目 ホクガンの補

佐官

デユスカと苦楽を共にする宥め担当。のはずが最近デユスカと一緒にキレル事が多くなった。普段は冷静沈着の人。

「ガツクさん、あの・・・いえなんでもありません。」

カイン・ケンブリック

男 25歳 短い赤茶色の髪 茶色の目 ガツクの補佐官

軍校在学中たまたま視察に来ていたガツクの目にとまり、卒業後引き抜かれるという不運に見舞われた人。ガツクと目を合わせられようになるまで3年を費やす。

「テンレイさん、お茶にしませんか？」

リンドウ・オゼロ

男 25歳 濃い茶色の肩までの髪 (金のメッシュ入り) 藍色の目 テンレイの補佐官

可愛いものや甘い物が大好きなオトメン。でもテンレイに構われているモモコはちょっと嫌い。テンレイにほのかな想いを抱いている。一見優男風だが腕っ節は結構強い。

「あなたのはただの夜遊びです。今日中にこの書類を片付けて下さい。」

リコ・クアン

女 26歳 肩までの金髪 青い目 ダイスの補佐官  
常に冷静沈着、無表情。仕事をさぼりがちなダイスを捕獲でき、デスクにつかせる事が出来る。これは特技になるのか思案中。

「俺はなんてくじ運がないんだ。」

ダイナン・ギャッツ

男 28歳 短い黒髪 濃い緑の目 雷桜隊少将

少将になったばかりの若い将校。実はガツクとモモコのミスマッチ具合に結構早めに慣れた。実力があり、率先して行動するが空回りしがち。よくガツクに扱かれている。ガツクの事は怖いがすごく尊敬してる。

シラキ・デイグニー

女 62歳 白茶の肩までの髪 薄い青い目 諜報部隊 雨牡丹隊  
大将

隊士達を時には厳しく、時には優しく導く軍部の重鎮。ガツクも頭が上がらない総所のおっかさんの存在

グレン・ハーデッド

男 40歳 短い金髪 琥珀色の目 守護部隊 波桔梗隊大将

穏やかで気さくな隊士達の相談役。普段は温厚だが、有事の際は軍部一隊士の数が多い波桔梗隊を速やかに動かし、鉄壁の防御布陣を敷く武人。愛妻家。



ジエン・ガトウ

男 25歳 長い銀髪 紫色の目 武器開発製作部隊 雪董隊大将  
軍部始まって以来の天才。驚異の超スピード出世だが他の軍部と  
比べるとすごく地味な部隊のため本人も周りもあんまり意識はない。  
リンドウとカインは親友。ガツクと目を合わせられるようになる事  
が今年の目標。眼鏡。

ベリアル帝国

「こ、国主殿！からかうのもいい加減にして下さい！」

エルヴィ・フレク

女 25歳 短い銀髪 ベリアル帝国軍 第一軍隊副隊長

元はコロナ妃付きの近衛兵だったがベントに熱心にスカウトされ  
帝国軍に席を置く事に。趣味は強者と戦う事。ホクガンと一勝負し  
た後、ホクガンに対して挙動不審な態度を取るようになる。後にし  
ばしば同情される立場となる。

「久しぶりだなガツク！！お前と再び戦えるこの日を！！待ちわび  
ていたぞ！！」

ルーザー・ベント

男 42歳 真っ赤な短い髪 赤茶色の目 ベリアル帝国軍 第一軍隊軍隊長

ガツク達よりデカイ3m09cm。見た目通りの暑苦しい性格でガツクの好敵手を一方的に名乗っているが、何度勝負をしても勝てた事はない。当初モモコのせいでガツクが腑抜けになったと思い込んでいたが一人と一匹と勝負をした際、モモコの勇敢さに心を打たれモモコを認めた。こんなんだが隊員達には絶大な支持を受けている。現在お見合い59連敗中。

「旦那、聞き分けのねえ事言わねえで下せえ。ちとやりすぎですぜ。」

ロー・レルモ

男 36歳 短い黒髪 銀黒の目 ベリアル帝国軍 第一軍隊軍隊長補佐官

本来なら副隊長を任される実力だが、ベントのストッパー役に徹する為補佐官になった。ガツク達とも親交が深い気のいい男。モモコに認知されていない。

「・・・もう・・・帰っていいですか・・・？」

エミリオ・トーレ

男 26歳 短いウエーブがかかった金髪 薄い緑の目 ベリアル帝国軍 第一軍隊隊員

実力はあるが常時眠たげな顔と言動で全くやる気なさそうな草食

系男子。今回の武道会参加もそんなエミリオに渴を入れるため、ベントが勝手に申し込んだという経緯がある。モモコが人語を解する事をすぐに見抜く鋭い面も。

ワイズム・ベリアル：男 62歳 ベリアル帝国 国王

酸いも甘いも噛み分けた知力の王。その卓越した執政力は帝国の内外に響き渡るほど。茶目っ気もあり、ホクガン達を高く評価している。

## ゼレン国

ノーフエ・ポートラム：男 33歳 砂色のやや長めの髪 薄い青色の目 ゼレン国軍 第5軍隊大佐

グリード・ハーヴィング：男 40歳 坊主な黒髪 茶色の目 ゼレン国軍 第9軍隊中佐

モルデイ・コーク：男 34歳 短い茶色の髪 碧の目 ゼレン国軍 第12軍隊中佐

モモコ・クロックス：女 20歳 念願の出版社就職もトラックに刎ねられ死ぬ。

## 1 - 1 落ちてきました(前書き)

この小説は温いですがR15的な表現があります。あと軍隊もでてきますので流血等などの表現もあります。ので 大丈夫!どんとこい!な方のみお読みください。

1 - 1 落ちてきました

「・・・やああああああ！！」

澄み切った青い空 遙か上空から声が降ってくる

「みぎやあああああああ！！」

しかも聞くに耐えられない奇声で

ここはドミニオン自治領国、奥の中庭。その中心にある いつも人々に涼しさや癒しを与えてくれる噴水にそれは落ちた。

ドバツシャアアアン！！という音に何事だと注目する人々。

その目にじたばたと水面を激しくゆらす、たぶん生物が映った。すぐさま近くにいた男性がひろいあげ、ゲエゲエするそれを目の高さまでもちあげしげしげとよく見る。

「へえ こりや珍しいく猫だ。」

この世界で猫は大変珍しい生き物だった。

1・2 わたしというものは(前書き)

女の子視点です

私の名前は、モモコ・クロックス。イギリス人と日本人のハイフだ。年は20才。大学生だったけど途中退学した。念願だった出版社に内定が決まったからだ。

それは勤め始めてすぐの頃だった。

昨夜降った雨のせいで霧が立ち込め視界は最悪、おまけに雨までまた降り始め、母に傘を渡されながら「気をつけてね。」といわれていたのに。

あと数ブロックで会社という所で私はトラックに撥ねられたらしい。激痛と衝撃に混濁する意識のなか私は私の血を見た。道路に流れ広がる深紅。そこから先は覚えていない。たぶん死んだんだろう。

だって 今 落ちてるから！空から！たぶん地上に！地上しかないだろ！お前はどこに向かっているんだ！とひとりボケツッコミをして現実逃避をしても落ちる速度は変わらない。

そうこうしているうちに覚えてきた。もちろん地上が。

「ぎゃあああああああ！！誰かあ！！助けてー！！死ぬう！！」

あ 私 死んでたんだった

水音と共に息ができない状態にびっくりしてもがきまくる。なんだこれなんだこれ！水？と認識する前になにかにすくいこまれた。次から次へと起こることに脳みそがついていけず混乱しまくる私。ついでに水を吸い込んでしまったらしくむちゃくちゃ気管が苦し  
い！

「へえ こりゃ珍しい猫だ。」

ん？人の声だ。あれえ おつかしいな私は死んだはずじゃ・・・は  
っ！！これが噂に聞く天国！？

涙と鼻水、そして口からもなにかを垂れ流してる（まあヨダレだ  
けど）私はゆっくり目を開けた。

ぼやけて定まらない視界が徐々にひらけるとそこには男の人がいた。  
ひと癖ありそうなでも頼りがいがありそうな人。私よりは年上そう。  
鮮やかな金髪に金の眼をしている。

私を抱き上げてじろじろと眺めまわす。その様子になんとなく違和  
感をおぼえながら、

「あ、あの、降ろしてください」と 言ってみた。しかし 私の口  
からでた言葉は・・・

「みやあつお」

・・・・・・んん？んん？あれ？あれえ？今なんか猫みたい  
な言語でなかったか？

気を取り直してもう一度 「降ろしてください。」 「みやあお」。

・！！！！！！ どう、どうなっているんだ！もしかや精神的な病か  
自分にそんな繊細な部分があったとは驚き！ばかなことを考えてな  
いで状況をみる自分！その後、何度か話しかけてはみるものの全て  
「にゃあ」だの「ぎにゃあ」にしか聞こえない自分の声に困惑しま  
くる私がいた。



1・2 わたしというものは(後書き)

まだ猫になっていることに・・・

1 - 3      なんともな方々です

猫をすくい上げたのは ドミニオン自治領国国主 ホクガン・ラウンドだった。

奇妙な鳴き声（にしか聞こえない）に加えたばたする猫を前から後ろからひとしきり調べ上げ、

一言、

「メスだな。」

その瞬間、何とも言えない空気がただよったがホクガンは気にしない。

「テンレイを呼んでくれ。」

「・・・わかりました。」

補佐官であるデユスカは奥の管理者であり

ホクガンの妹でもあるテンレイ・ラウンドに連絡した。

「うむ、美人じゃないが愛きょうはあるな。今はすごい顔だが。」

「あとちょっと丸いな 全体的に。」

人間の女性が聞いたら殴打ものの発言をかましている上司をあきれ顔で見ながら。

実際、広場にいる幾人かの女性の皆さんの目が冷たい。

気づいているのかいないのか 気づいていても気にしない国主のひとり事くにしてはでかい>は続く。

「うーんこいつの毛色は何色だ？汚れているのか地毛なのかわからんな。」

「暴れるなって はは、元気な奴だ。ほんとはオスなのか？もう一度調べてみるか。」

軽くセクハラまではいつてきた。猫はさっきまでのじたばたなど比ではないほど暴れまくっている。そこには殺意があった。

国主と猫の片方はほのぼの、もう片方は殺意あふれるやりとりをそろそろ止めようとした時、待ち人はやってきた。

「お兄様、なにしたらっしやるの。」

兄より薄いプラチナブロンドにエメラルドグリーンの瞳をいぶかしげにしながら。

「まあ猫じゃないの！かわいい！」 とたんにはしゃぐテンレイと、

「そうか？」 国主……。

「びしょぬれじゃない。このままでは風邪をひいてしまっわ、早く温めてあげないと。」  
有無を言わず猫をかつさらうと柔らかなジャケットにやさしく包み込む。

猫は新たに登場した人物に警戒しているのか、おとなしくされるがままだ。そして、

「この子は責任を持って私が管理いたしますから、国主はとっとと政務にはげんでください。」

では「ごきげんよう」と去って行った。

「ちょっとあれひどくないか？」

「国主、会議の時間です。」  
部下も容赦ない。

ホクガンはハアとため息をおとしてから、

「次の会議って軍部のだろ？行きたくないな。しかも5時間ぐらいだって？なぜそんなに・・・」

「あんたが前回サボったからだろうが！！おかげで俺とレキオスは  
っ・・・うつうつ。」

涙目になってしまった同僚の肩を優しくたたいて、もう一人の補  
佐官であるレキオスは

「ジエンとグレンさん、そして珍しく出席していたダイスさんは笑  
って許してくれましたが、

ガツクさんが・・・。」  
と青い顔をしてうつむいた。

～ 前回の会議 ～

「・・・逃げられただと？」

いつも威圧感を惜しみなく発してるそれにさらに圧力をかけながら  
ガツク・コクサは二人を見た。

ここは軍部専用会議場。本日はかねてから懸念されていた隣国からの不法侵入と先の地震でもろくなつた陸橋部分の増強、それらに使われる素材の精査について会議する予定であった。

「お前たちはあのボンクラに、仕事をさせるためにいるのを忘れたか。」

「これで何回めだ？無能はいらん。」

「他の部の会議もすっぱかしている様だな。どういう事だ？」

テーブルに肘をつき、指を組んで睨みつける。

死神も兜を脱いで土下座しそうな声でメッタ切り。

言葉もなく竦みあがる二人。その顔色は青いを通り越して白い。

「それくらいにしてあげな ガツク。」

もう一人が声をあげた。シラキ・デイグニーである。

「いないものはしょうがない、進めるものだけでもやってしまおうじゃないか。今からホクガンを捜しに行ったら朝になっちまうよ。」

「まさに天の声。」

「確かにそうですが・・・」

女性でありながらも数々の武勲をたて、時には優しく時には厳しく隊員たちを導く軍部の重鎮（御年62歳）にはガツクも頭が上がらない。

二人は生き返った・・・が しかし。

「今度逃げられたら 俺がお前達を狩りに行くぞ。そしてホクガンは一生監禁して仕事をさせてやる。」

上司の監禁はいいが（むしろ大歓迎だ）軍部一の攻撃力をもつ男に命を狙われるハメになった。

1 - 3      なんとまあ方々です（後書き）

えっと 大変言いにくいのですが、ガック・コクサがモモコのお相手になります。

初登場が脅して始まるというなんとも・・・

## 1 - 4 気づきました

前回の会議の様子を聞いて、

「やはり行きたくない。」と言い出した国主を二人は両脇からガツチリ固めて連行して行った。

会議場では待ち構えていたガツクによって、素っ裸で巨大な氷柱を抱かされた上ブリザードの中を行軍させられるかの様な会議が行われた。(休息なし)

全行程が済み急いで退出しようとするホクガンの肩をガツチリ掴んだガツクは言った。

「ホクガン 話がある。」

ガツクの執務室の隣は応接室になっているが、たまに いやよくある頻度でホクガンとダイスの説教部屋になる。

「お前は仮にも一国の主だぞそれをなんだ会議はサボるは書類わ溜めるわこれでは若いやつらに示しがかんいつまでも根なし草のようにフラフラしおって大体日頃の生活からして・・・」

(俺ってこの国で一番偉かったような・・・しかしよく2時間も説教できるなコイツも)

聞く体勢はもちろん正座である。



ところ変わってテンレイに奪取されたモモコは重大なことに気づいていた。

(手が！猫っぽくなってる！ってどうか猫になってる！)

ここ一番びっくり仰天な事実である。なんだこれどうしてこんなこととあわてるモモコと

「カワイイ〜じゃれてるわ。」

まったく見当違いの方向にいるテンレイ。当然ではあるのだが。テンレイの私室らしい部屋に入り、優しくタオルで拭いてもらい、ブラシで毛並みを整えてもらうと

「まあ！あなたってピンク色をしているのね！」

(えええー！ピンク！？?)

「ただでさえ珍しいのに輪にかけてめずらしいわ。」

「猫じゃないです！私 人間です！」と叫ぶも 悲しいかなでた言葉は

「みゃお！にゃあにゃあ！」だった。

「大丈夫。わかってるわ。」

(えっ！)

「お腹がすいたんでしょ？今持ってくるから待ってて。」

ガクーツ！一瞬の期待は一瞬で消えた。

なにがいかしら〜と鼻歌を歌いながらテンレイは去った。

一人 いや一匹残されたモモコはきよろきよろと辺りを見渡し、事実を確かめようと 鏡台を見つけるとバランスを崩しながらなんとか到着した。恐々 鏡を覗き込んでみると

「うそでしょ……」

そこにはピンク色をした猫がいた。ひげは白い。瞳は茶色にグリーンがはいっている。

「瞳の色は一緒だなあ・私これからどうなるんだろう……」

ここで己の姿を直視したモモコは現実を受け入れ・受け入れ・受け入れられるかあ！！

どおうなつとるんじゃああ！！！死んだとおもったら！空から落ちて！水に落ち！男に拾われ暴言を吐かれ！あの男いつかクロス！美女に優しくされ！これはいい！しまいには猫になっていただとおお！

・・どうりであの人達が大きく見えたはずだよ・あの人達が大きいんじゃないかって私が小さいんだ。

納得したくはないが納得した。

モモコが動揺しつつも現実を受け入れようとした時、テンレイがミルクとふやかしたオートミールを持ってきた。慣れない口で四苦八

苦しなから飲み、鼻から噴出したモモコは

本当は夢才チ・・・なわけないか・・・鼻 痛いしな・・・

笑い転げるテンレイを見ながらまたもや現実をしかも全力で拒否し  
かかった。

モモコは 猫になったから皆が大きく見えたと思ったのだが、  
この国の平均身長は男性が2mほど、女性が180?ほど、そして  
恐ろしいことにこれから出会う事になるであろうガツクは、2m7  
8?の大男なのをまだ知らない。

1・4 気づきました(後書き)

猫だとしても鼻から噴出はまずいですかねえ

ドミニオン自治領国は大小の島が点在する内海にある。島々を鉄橋や陸橋などで繋ぎ、雑多な人種と卓越した航海術をもつ海の民であった。民が選んだ代表は国主を選出、強力な軍隊と優秀なその他の部を要する。身分に差はなく実力があればどんどん登用する。

若くして国主になったホクガンは、普段はサボリ魔のボンクラだが絶大なカリスマ性を持ち、豊富な知識と決断力、突飛な発想（ひらめきといえ！もしくはインスピレーション！）で政治を運用するやり手である。

そして 幼馴染であるガツクとダイスは、こちらも軍部で攻撃部隊の雷桜隊をガツクが、遊撃部隊の霧藤隊をダイスが預かる大将の地位にいた。

ちなみにその他の各部隊の大将を守護部隊の波桔梗隊をグレン・ハーデット、武器開発製作部隊の雪董隊をジエン・ガトウ、諜報部隊の雨牡丹隊をシラキ・デイグニーが務める。

これらの部署が詰める白亜の巨大な城を総所と呼ぶ。

モモコの飼主となったテンレイは総所の「奥」といわれる 主に要人へのレセプション、イベントの計画と準備、食事等の管理、総所内の清掃管理、事務管理にいたるまで雑多な事柄を一手に引き受けさばきまくる大変優秀な女性である。

モモコは一応、珍しい生き物なので大切に飼われていた。

テンレイの やや少女趣味の部屋の中で外に出ることはないものの平穏な日々を過ごす。

ただ自堕落に過ごしているわけではなく 書物などを呼んでこの世界について学んでいた。

それでわかった事はここは自分の世界ではない事。不思議なことに喋っている言葉や物やその意味、文字などは一緒なのにモモコのいた世界とはまるで違うのである。

ますます混乱しそうな状態ではあるのだが、静かな環境におかれたのがよかったのか充分理解できた。

テンレイについてわかった事は先の仕事の事と年齢27歳、そしてかわいそうなことにあの男の妹であること。

奴の顔はあれからまだみていないが。

テンレイは今年37歳になる国主のことを「お兄様も早くいい伴侶をみつけてくれればいいのに・・・」とっているがあのデリカシーのなさでは無理だろうなあというのがモモコの意見だ。

あと他に軍部と仲が悪いらしい。

国を守るという自負があるからか、細々とした奥の仕事を軽んじるところがあるらしい。

特に雷桜隊とは廊下などで出くわせば一触即発な感じになるらしく、お互い フン！ってな場面になるらしい。らしいらしいといっているのはまだ雷桜隊を見たことないから。

まあ こんなところ（テンレイの私室。完璧ナワバリ内である）までこないだろうけど。



1 - 6 とりあえず平穩？です

そんなこんなで3か月が過ぎそれなりに猫として順応し、コモモという名前をもらい（ピンクだから。桃に。あと小さいから。）テンレイとも仲良く・・・

「コモモ！見てみてカワイイでしょ これ。」レースがふんだんについた猫用の服を持ってきた。

「お揃いの帽子もあるのよー」「これまたレースの・・・  
していた。

奥の職員の皆さんからもかわいがられ、

「テンレイさん、こっちもよくありません？」「こちらはチャイナ風の猫用の服。

「あら コモモちゃんにはこっちの方が似合うと思うわ！ねえテンレイさん！」セーラー風。猫用。

「迷っちゃいますねえ。こんなものも作ってみました。」魚の着ぐるみ風。猫用。

総所の制服のデザインや縫製をしている服飾専門の方々もコモモ用に猫用の服を作ってくる。

「テンレイさん、コモモちゃんって生魚 無理でしたよね。ムニエルにしてみました。もちろん薄味です。」



総所の胃袋を預かる厨房の方々も猫なのに猫の好む食材を食べないモモコのために特別メニューを作ってくる。

「テンレイさぁん 今度コモモちゃんをかこんでお茶会しません？」  
事務管理部の方々。

「コモモ！今日もかわいいねえ。」清掃管理部の方々。

「なごむわ〜。癒される。」メイドの方々。

とにかく奥全体でかわいがっていた。

（なんか猫も悪くないような気がしてきたなあ。ムフフ。生まれ変わったと思えばいいかな。ご飯も薄味だけど逆に素材のおいしさを堪能できるっていうかおいしいし。これ以上太らないように気をつけないと。）

モモコ 人間時代？ の時もちょっと丸かった。

あと3キロ減ったら！二の腕もうちよつと細く！太もも3センチどうにかならないか！という感じで。

なので、今のいたれりつくせりはありがたいんだが・・・という具合だ。

（でも着せ替えは正直キツイ。）

そんな皆のアイドル（失笑）モモコを180度違う冷たい視線で見ることがいた。

テンレイの補佐官 リンドウ・オゼロである。ちなみに男性。奥は仕事柄女性が多いが、男性も数は少ないが在籍している。

そんなことより、彼はこのところ不愉快な思いをしていた。

理由は上司の豹変にある。

前までは奥のこれからのことを論じたり、お昼休みにはお茶を飲んだり、手作りの菓子をもらったり、仕事が終わった後も楽しくおしゃべりに盛り上がりたりして過ごしていたのに、それらが一切なくなってしまうたのである。

お前 最初の論じるゝ以外は全部遊んでるじゃねーかなどと言つてはいけない。

上司は最近飼いだしたペットに夢中で、仕事以外の時間は全てその憎いペットにあてるようになり、

リンドウが、

「テンレイさん、新しいお茶が入ったんですよ。これから一緒にどうぞです?」

と誘つても、

「ごめんなさいねゝコモモに似合うリボンがお店から届いたからちよつと合わせてくるわ。」

となる始末。

おまけに奥の女性からもちやほやされまくりなんてうらやましい

っ！

僕もテンレイさんと着せ替えごっこしたり、ご飯をあぐんされたり、みんなから今日もかわいいね！って言われたいのにっ！

要するにちきもちである。

1 - 6      とりあえず平穩?です(後書き)

また変なキャラでした

1 - 7 決心は固いです

知らぬところで妬みを買ったモモコは、近頃深刻な悩みを抱えていた。

1週間ほど前、いつものようにテンレイにご飯をあぐんされていると（食べるのがへったクソなので。だからといってこれはやりすぎだとモモコは思う。つか恥ずかしい）フラッとホクガンがやってきた。

何やってんのお前らの顔をしたので思わず身構えたモモコだったが、テンレイに何かの書類を見せて質問し始めたので、珍しく仕事のことだとおもわれる。

ホクガンはたまにこうやって自ら動くクセがあり、これもまた補佐官2人の悩みであった。

テンレイがそれに答えて、またホクガンが質問して・・・というやり取りがしばらく続いた後  
納得したホクガンがドアに向かい、モモコがホッとしたその時！

ホクガンはっ！！

「しかしそいつ太ったな。」

爆弾を落として帰って行った。

・・・爆心地はおそろしいほどの静寂に包まれたという。

その後 石化したモモコを

「そ そんなんでもないわよコモモ。お兄様ってほら、目が穢れて  
いるから（ひどっ！）」

よく見えてないのよ。そ それに猫は デ・・ふつくらとしていた  
ほうがかわいいと思うわ！」

必死に慰めるテンレイの姿があった。

（やっぱり・・・やっぱりね。最近お腹のあたりがヤバいなあと思  
っていたのよ。テンレイさんもきつとわかってたんだろっな。お洋  
服のほうも若干キツかったし）

気にしていた事をズバリ指摘され モモコは激しくショックを受  
け、落ち込んだ。

（こうなったら・・・やるしかない アレを・・・！）

食事の時いちいちカロリーを気にしたり、万歩計つけてウォーキ  
ングしたり、夜8時以降は食べないようにしたり、・・・ようはダ  
イエットである。

（うーん ご飯は薄味でそんなにカロリー高くなさそう。あとはお  
やつを我慢して・・・）

モモコ 現代の女の子らしくケーキやスナック菓子やジュースの  
類が大好きである。

しかしさすがにこの世界にもスナック菓子はなく、あったとしても  
猫にはやらないだろう。

でもケーキやクッキーなどはあったのでたまに食べていた。そしてなにより モモコの至宝、モモコの世界の中心、これさえやっとならば気分は上々の  
モモコの大好物 チョコレート様もあった。

他国との交流も盛んなドミニオンには貿易品も大量に流通しており、総所にも出回ってくる。

テンレイが管理する奥はそれらもさばいて他の部に届けることをしていた。

なので仕事柄 チョコレートも当然手に入る。

こちらの世界にきた当初はこれでチョコともお別れかと暗澹としていたのだが、翌日テンレイが食べているのを目撃、必死のアピールの末、一日 粒二個まで とのお許しがでた。

(チョコもやめるか・・・ううん一粒までなら・・・ううん)

激しい葛藤の結果、きつぱりやめることにした。

(最大の原因はこれだな運動不足、間違いない。)

テンレイは基本モモコを部屋の外を単独で歩かせない。

部屋の中では放し飼いだがお茶会などのお呼ばれに行く時は必ず抱っこ。もしくはキャリアーで運ぶ。

モモコは猫だが中身は猫ではないので猫用のおもちゃには見向きもしない。

というよりは困る。

20歳の仮にも大人がそれで遊べる気になっただら問題があるようなないような。

とにかく、運動らしい運動をしてなかった。

（よし！走ろう！）

テンレイの部屋は広い。

寝室、ウォークインクローゼット、居間、応接間、簡潔なキッチンルームなどが回遊できる造りになっている。

そこをモモコは走った。

しかしテンレイに何事かというふうに見られたので、（ぐうたらしていた飼い猫が急に部屋をぐるぐる走り始めたら当然であろう）なるべく不在を狙って走った。

だが思うように成果がでない。

これは走る距離が足りないのではないか。

猫の体では腹筋はおろか、腕立て伏せもできない。やってできないことはないかもしれんが、  
万が一テンレイに見つかったら医者行きであろう。

大騒ぎは勘弁してくれ。ただやせたいだけなのだ。

（もっと走りたい。でも空間がない。やせない。またホクガン（呼び捨て）にバカにされる。ムカツク。）

途中なんか入ったが、とりあえずダイエットは行き詰まった。



1・7 決心は固いです(後書き)

モモコはピンクつってもうっすらな程度。白がややかってる感じですよ。

1 - 8 出会いました

「最近 コモモの様子がおかしいのよねえ。」

敬愛する上司の口から憎いペットの名前が出た瞬間、リンドウの手にあったクッキーは粉々になった。

「どうしたの？」

「いえ・・・それよりペットがどうかしたんですか？」

ここはテンレイの執務室。

2人はお茶の時間には早すぎる休息を取っていた。

朝からため息をついている上司が気になったリンドウが無理やりいられたのだ。

上司は仕事のデキる女性である。膨大な仕事の量を次々と消化するかたわら、

国主がバカバカしいイベントを思いついたり、ガツク大将率いる雷桜隊がいちゃもんつけてきたり、ダイス大将が奥で女性問題を起こしたりしても、裏で手を廻して潰したり、倍返しにしたり、今度やったらブツを切るぞと脅したりして対処してきた。

その他ようような事も涼しい顔でこなしてきたのである。

こんなに悩み深そうな上司をリンドウはいままで見た事がない。なにかよほどの事があったに違いないと心配して聞いてみると上記の言葉がでた。

「あのね、リンドウ君。」

「……はい。」

「コモモはね、人の言葉がわかるの。」

「……まで、とか ふせ、とかですか？」

「いいえ 人が話している内容とかよ。それどころか文字も読めるんじゃないかとも思うの。」

「……。。。」

おい！ ペットオ！ 何しちゃってくれてんだよ！！

国主を鼻であしらい、あのガツク大将に面と向かって文句……いや意見をいい、ダイス大将は無視する

頭脳明晰にして豪胆、慈悲深い？ 僕の上司をこんなにして！

「……それはどうかと……」

「ちょっと聞いてよ！」

「……はい。」

上司いわく、国主がやって来てペットに「太ったな」と言って帰って行った。それを聞いたペットは落ち込み、その後おやつを食わず、部屋中を走り回っているらしい。

「まるでダイエットですね。」

「でしょう！？お兄様の言葉がショックだったんだわ〜 かわいいそのなコモモ。飼い主として不甲斐ないわ……。私もコモモの言葉がわかればいいのに……。」

ちよつとペットオオ！お前は僕の上司を何処に連れていくつもりなんだよー！

上司がアツチの世界にいったらどうしてくれるんだ！

「そうですね……。無理なダイエットは体を壊しやすいですし、獣医に相談してみてもはどうでしょう。」

なんとか無難な答えを返して休息は終わった。

その日の深夜、奥でボヤ騒ぎが起き テンレイが事後処理を終えて部屋に帰ってきた時、

コモコの姿はどこにもなかった。

〜2時間前〜

コモコが物音に起きると、すでにテンレイはドアの向こうに消えるところだった。

何か緊急な事でもあったのだろうか。

前にも一度こうして出て行った事があった。

テンレイさんも大変だなあとおもったところでドアがかすかに開いていることに気づく。

あんまり慌てて閉め忘れたらしい。

(不用心だよね・・・よしっ！あたしが閉めよう！)

と、ドアに近づき、

(日頃お世話になってるお返しに・・・こんな事ぐらいしかできない自分が情けない・・・)

前足で閉めようとして、ふと外が気になった。

(そういえば一人で出た事なかったなア・・・ちよつと覗いてみよう。)

ドアの隙間から顔を出してみる。

(おおー！夜はまた趣が違うな！)

そして部屋の中から一步、また一步と踏み出しついには完全に外に出た。

テンレイの部屋前にある庭園は格子状の天井があり、そこからバレーボールほどの丸い外灯を吊るしてある。それらが灯つてとても幻想的だ。

モモコがうつとり見惚れていると、なんのひょうしかドアが閉まった。

モモコは仰天した。

(げげー！！閉まった！どうしよう！)

しばらくドアを開けようと奮闘したが、猫のしかも規格外に小さい(元の世界では普通。この世界では子猫よりは大きいかな程度)

モモコではどうにもならない。  
諦めてテンレイを待つ事にした。

(しかし暇だな・・・ハッ！いい事考えた！)

こういう場面でいい事は、たいてい事態を余計にややこしくする  
ものだがモモコの場合もちろんそうなる。

モモコは左右に伸びる長〜い回廊を見た。

(ここでウォーキングすればいいじゃん！ダイエットにもなるし、  
暇も潰せるし、一石二鳥！)

モモコはまず左に行ってみる事にした。

歩くよりは早い速度で進み、ようやく曲がり角まで来て、結構あつ  
たなあとも来た道を振り返り、そして前を見た瞬間、

「おどね、どこのモンじゃあ・・・ここらで見ない顔じゃのう。」

自分の5倍・・・いや10倍はでかいドーベルマンがいた。

「あわ・・・あわ・・・あわわわわわ」

青ざめ、震えるモモコ。

「泡？泡なんぞついたりやせんぞ？」

ドーベルマンはモモコをもっとよく見ようと背を屈めた。

ドーベルマンとしては誰かの飼い猫が迷い込んだのだらうと思いい、  
もし自分の知っている人であつたらそこまで送って行ってやるうと

まことに親切な事を考えていた。  
よく見ればまだ子供である。しかもめったにいない猫だ。

そんな紳士な事をドーベルマンが考えているとは露ほどにも思っていないモモコ。

犬が身を動かした時、恐怖にかられ思わず前に駆け出した。

「またんか!!」

続く怒声・・・に聞こえる声を背にますますスピードを上げるモモコ。

もちろんドーベルマンも追いかける。

このままでは迷子どころか行方不明者になってしまう。  
総所は広い上に入り組んでいる。

(どこかケガをして野たれ死ぬのがオチじゃ！見失う前に保護せんといけんのう！)

ドーベルマンは至極まっとうな考えをもって追いかけて来ているのだが、  
いかんせん顔が怖い。

モモコは死に物狂いで逃げた。

かなりの距離を走り、モモコの足がもつれ、息も絶え絶えになってきた。

(やばいっ・・・追いつかれる・・・！)

モモコは生垣をやっとこさ乗り越えジャンプした。

その時後ろから、

「待て！そこは・・・！」

ドーベルマンが声をあげたがモモコは聞いていなかった。

バツチャアアン！！

モモコは吸い込まれるように暗い水面に消えた。

慌てる犬を置いて、モモコは動かぬ足を必死で動かす。浮き沈みを繰り返して、やっと足が底を捉えた。

ぼたぼたと滴を落とし、ヨロヨロとよろけながら、歩を進める。そしてどこかの建物の壁にもたれるように倒れた。

どれくらいそうしていただろう。

ふと人の声が聞こえたと思ったら持ち上げられた。

「誰だ 人の玄関前に雑巾を捨てたのは。」

雑巾？失礼な・・・と抗議しようとしたモモコは

「ぶえつつくしよい！！」

盛大なくしゃみをした。

持ち上げた雑巾に手足らしきものがついてる事に気づき、ちよつど目の高さまでもってきた

ガツクは顔中にモモコのヨダレや鼻水、池の水やらを浴びた。



「貴様……。」

ガツクは瞬間、人を殺す目つきになったが相手が小動物なのを見てとると怒りをおさめた。

「どうしたものか……。」

ぶらさげたままの生き物は気を失っていた。

1 - 8 出会いました（後書き）

うむ！」「最悪な出会い編」終了！よし次い！

## 2 - 1 ピンクもあるんです

今でこそ平和で豊かなドミニオンだが、60年程前、列強の国々の争いに巻き込まれた事があった。

戦争が終結した時には、属国となったが激しい抵抗の末、自治領国としての権利を勝ち取る。

闘争に次ぐ闘争で、国は疲弊し荒廃していたが、持ち前の陽気さとバイタリテイで隆盛な復興を遂げた。

幼い頃、それらの話を聞き、先人達の活躍に感動したガツクは、軍人を目指す。

彼ら彼女らの志しを今度は自分が守る。

もう二度と祖国の地を他国に踏み荒らさせはしない。

それから彼は精進した。

幼稚園から大学まである軍部専門校に入学し（ちなみにここでホクガンとダイスに出会う）

体を鍛えに鍛え、軍略を学び、多種多様な武器を使いこなせるよう訓練し、時には実践を交えながら卒業まで過ごす。

首席で卒業した後は、自身最大の得手を生かすべく 攻撃専門部隊・雷桜隊に所属。  
次々と任務を遂行し、いまだドミニオンを狙う他国の軍どもを黙らせてきた。

武勲に武勲を重ね、遂には30歳という若さで大将を就任。  
冷徹な判断力と迅速な行動で隊を率いてきた。

そんな国と軍部一筋に生きてきた彼は、

今まで生き物を飼った事がなかった。

ここで、あ、モモコ死んだな。と思った諸君。

その予感は的中する。

小動物を手にぶら下げたまま浴室に行き、（この扱いでなんかもう・

。。。）  
しばし熟考。

ソレをタライに入れる。

そして自身の顔を拭いて、寝室に向かった。

コートやスーツの上着を脱ぎ捨て、ワイシャツの袖を捲りあげながら、浴室に戻った。

タライにお湯を注ぎ、泥や池の水、細かなゴミなどを洗い流してやり、タライのお湯が濁ってくると取り換えたりする。（案外まともだな。）

そして

おもむろに洗濯用洗剤で洗い始める。（うおおい！！）

生き物を飼った事などないガツクがペット用シャンプーの存在を知るはずもなく、

雑巾と見間違える　雑巾と似ている　雑巾と素材が似ているんだろう（洗濯用）洗剤で洗うか

どついう頭の構造しとるんだ的な判断となった。

これでもまだましだったのかもしれない。最初、彼は洗濯機で洗うかタライで洗うか迷った。

テンレイがこの事を知ったらどうなるか想像もしたくない。

さすがあのホクガンの親友というか類は友を呼ぶというか、残るドイツもこんな傾向であるう。きつと

そんなこんなでもモモコの汚れを落としていくうちに地毛である薄皮

ンクが見えてきた。

ここでガツクの頭に最初の？がつく。

ザバツとお湯をかけ、もう一度よく見てみる。

やはりピンク色だ。

自然界にこのような色が存在するだろうか……いや鳥類にはいたかも……

しかしこれは明らかに哺乳類……捕食には向いていないのでは……

いや、自分は動植物に関心がなかったからな……あるのかもしれん。

そう納得すると、今度はタオルでいささか乱暴に拭いてやる。(テ  
ンレイの悲鳴が聞こえるような……

と、手の中の小動物が身動きした。

手を止めて見ていると 小動物は小さく身震いし、目を覚ました。  
目をパチパチさせながら、辺りを見渡し、自分を包んでるタオルと  
手に気づいた。

手をゆっくりたりどりガツクの顔まできた。

そして小動物がびっくりした様に目を見開いて自分を見た時、

ガツクの身の内に何かの衝撃が走る。

固まって動かないガツクを、不思議そうに顔を傾げて小動物は一声

鳴いた。

「にゃあお。」

鳴き声で我に返ったガツクはそんな鳴き声をする動物を思い出す。

「お前 猫か。」

2 - 1      ピンクもあるんです（後書き）

ガツクは国を守るいう意志を4歳頃からもっていました。

そのひたむきさで突き進んで気が付いたら軍部の最上位近くまでいた という感じです。その猪突猛進ぶりを今後モモコに向ける予定です。

あと彼の中では犬を指して「これは犬だろ？」と疑問形で始めるぐらいの関心具合です。



モモコが部屋のどこにもいないことを確認したテンレイは、一路ホクガンの部屋を指す。

総所には深夜といえど働く人々もいる。

走るテンレイを見た人は、まだボヤがあつたのか！？とか別件の緊急事態か！とも思ったが誰も声をかけられない。

その表情には何か止めるのを憚れるものがあつた。

なのでホクガンの私室前に立っていた衛兵達も目を逸らして大人しく扉を開けた。

国主がまた何かやらかしたんだろうと。

それに国主はちつとやさつとじゃ死にそうにもないからちよつと殺されても大丈夫！

4人は互いをグツジョブ！と確認し合つて、持ち場に戻つた。

それお前らが其処に立っている意味あんのかと言いたいところだが、こんな事結構あつた。(昼夜問わない訪問。怒鳴りこみとも言う)

バタアアン！！

勢いよく寝室のドアが開かれ、入ってきた妹のあまりの形相に思わず逃げ出したホクガンをむんずと捕まえ、逃げないように椅子に口ープでぐるぐる巻きに縛り付けてから、テンレイは叫んだ。

「お兄様のっ！お兄様のせいよっ！お兄様なんか殺してやるっ！」

そしてナイトテーブルを持ち上げホクガンの頭上に振り下ろそうとした。

「待て！待て待て！！俺が何をした！」

思い当たる事がたくさんあり過ぎるのは確かだが、どれの事かわからない。

知っておかないと対処もできない。

冷静なのか、よくある事なので（奇襲？違うか）麻痺してるのか取りあえずホクガンは聞いてみた。  
するとカツと眼を見開いたテンレイは、

「コモモが……。」

と、地を這うような声で言ったあとテーブルを放り出し、（ナイトテーブルはホクガンの耳をかすった後壁に激突して四つに割れた。気に入ってたのに……ホクガンはちよつと涙が出た。）

「コモモが出ていったのよお〜！！」

とワツと泣き崩れた。

「猫が？でも猫は結構ぶらぶら出歩くもんだろっ？そのうちフラッと帰ってくるさ。それよりなぜ俺が非難され……。」

ホクガンは「非難されなきゃならんだ。」と最後まで言えなかった。

非難のあたりでテンレイにギンツと凄まれたから。

「忘れましたの？この前、コモモに太つたと言ったじゃない！」

「えっ……言った……か？」

「なんですって!？」

「あー！！言った言った！確かに言ったな！」（危ない危ない。・・・言ったっけ？）

「コモモはすぐく落ち込んでいたのよ！それに無茶なダイエットなんかして！それを苦に・・・！コモモ！早まっちゃ駄目！自殺なんてしちゃ駄目よ！」

「勝手に殺すなよ。」

「お兄様は黙ってて！」

「はい。」

しばらくモモコの身を案じるテンレイに付き合ったホクガンは1時間後ようやく解放された。そして手足をさすりながら、

「そんなに心配なら軍部に要請して捜してもらおうか？」

公私混同も甚だしいことを提案する。

だが、テンレイは別の理由でこれを断る。

「軍部ですって！とんでもない！ただでさえあちらにはバカにされてるのに彼らに猫を捜してだなんて！」

絶対にお断りよ。ガツクに格好の材料を与える事になるわ。ダイスにも付け入る隙をね。」

他はマトモなのはどうしてあの二人の隊はああなのかしら・・・まったく・・・この前も・・・ブツブツ呟くテンレイを見ながら、

（まあ 昔から仲が悪いというか、意地の張り過ぎなんじゃないか？まったくいい大人が。）

全員に お前が言っな！！とシバかれそうな事を考えていた。

テンレイは最後に絶対に軍部には漏らさない事、他の部から漏れる事も考えられるので、他の部にも喋らない様にしつこいぐらい念を押して、やっと帰って行った。

「出ていったねえ……。」

テンレイは普段はホクガンが政務に集中できるよう、雑務を全て片づけてくれるありがたいスタッフだが

たまにこうやって昼夜を問わずキレる事がある。

まあ 大体ホクガンその他2名のせいだ。

「人の言葉がわかると難儀な事になるな、コモモ。」

妹が帰り、やっと寝る事ができたホクガンだが1時間後デユスカに叩き起こされる。

「国主、仕事の時間ですよ！起きて下さい！」

ホクガンに思いつきり鬱憤をぶつけたテンレイは、夜が薄まった回廊を足早に歩きながら、心に決めていた。

（コモモはきつと見つけてみせる！奥の威信にかけてでも！）

威信のかけ方が違う……という理屈はテンレイには通じない。

その日のうちに 奥に緊急招集をかけ コモモ捜索隊を結成。そして最高機密として扱うことを確認。

ペットがいなくなった事に戸惑っていたリンドウは、

「リンドウ君は軍部のジエン君、カイン君と仲が良かったわね？」

「は、はい。」

「彼らにも漏らしちゃ駄目よ？」

「わ、わかってます！」

いつになく鋭いテンレイの目にビビりながら誓った。

その頃……大事おおいになりつつある事を知らないモモコは、  
ガツクの用意したミルクをもろに気管に入れ激しくむせていた。

2 - 2 秘密です（後書き）

ホクガンは軍校を中途退学し、法務大学に入り直し国主を目指しました。

普段はだらけていますが、見るべき事は見えています。

それでも有り余る周囲への迷惑・・・

ガツクはモモコと目があつた瞬間、衝撃を感じたが、モモコは、

(怖っ！こ、こ、この人怖い！た、たぶんこの人に助けてもらったんだらうけど。)

ある意味 別の衝撃を受けていた。

ガツクはモモコを凝視していたが、モモコは目があつた瞬間、速攻そらした。

それでも勇気をだし、モモコは目の前の人物をもう一度観察した。

(目はあわせない)

短かくて黒い髪、黒い目。

日本人を彷彿とさせる色彩だが顔の造作が全然違う。

(あのまま、水に濡れてそのままだったら凍えて死んじゃってたかも。そうじゃなくても衰弱してた。

それを助けてもらった・・・んだらう・・・け・・・ど。)

ガツクは怖い。

おそらく整っている方ではあるんだらう。

だがにじみ出るいかにもカタギではありませんよ、

完璧アツチ側の人間ですオーラというか

いつでも臨戦態勢というか空気かなんかが、整っているを彼方に打ち上げ

二度と戻ってこれないような感じにしていた。

ガツクと目をあわせて会話ができるのはホクガンとダイス、テン





のであまりの背の高さに茫然とした。

(ヒヨオオオオ!!高い高いむちゃ高い!!ジェットコースターみたいだったぞ!フワツとした!)

テンレイに抱えられた時も高いなと思ったが、ガツクのはその比ではない。

タオルで包んだまますたすた歩きやがて寝室にきた。

そつとモモコをベッドに降ろし、タオルを取ると自身は出て行った。

一人になったモモコはベッドを見て

(なんじゃこれー端が見えないぞーキングサイズばかりしてるでしょキングサイズに言いつけちゃうからなー)

あまりのでかさに思わず思考が棒読みだ。

ガツクは大男だ。なので当然ベッドも大きい。そのベッド横4メートル縦5メートル。

(どんだけ寝相悪いんだよ。あ、あれかー彼女来た時のためか。よっ色男!憎いねっ!はああああ・・もうやめよどうでもいいじゃん・・。)

ほんとにどうでもいい。

モモコがくだらない感想をぐだぐだ続けているとガツクが戻ってきた。

手にカップらしき器をもってきていて、それをモモコの前に置く。

モモコはガツクを見、器を見た。器にはミルクが入っている。

もう一度ガツクを見た。そしてすぐ目を逸らした。怖いから。

( よつするにこれを飲めっていうことですか？そついや喉乾いたかも。追いかけられたし。 )

モモコはここでミルクを飲み前述の通りになる。

まだ上手く飲めないの？と思つた諸君。違つのだ。

モモコはなんとか飲み物だけは 飲めるようになった。

それは熱かつた。ものすごく熱かつたのだ。

ミルクの風味も味も消し飛び煮えたぎつたようなそれ。

( なんてー！あんた普通に器持つてたじゃん！適温だと思つじやん！動物虐待かあー！ )

ベッドの上で七転八倒するモモコをちよつと驚いた顔で見つてガツクは、

「熱かつたか。すまん。」

一応謝つた。

( ユ・ル・サ・ン！！猫つてね！猫舌なんだよ！？動物は皆熱いものが苦手なだけで数多の動物を押しつけて「ね・こ・舌」つてつくぐらいキング・オブ・猫舌なの！許さん！ )

ちよつと主観が入っているそれを痺れる舌を使って必死に訴えるが、

「はにゃー！ふにゃー！ふぎー！」

にしかガツクには聞こえない。

しばらく抗議していたが言ってもムダなことはよく知っているの  
で、

やがてモモコは不貞腐れて寝た。

そんなモモコを興味深そうに見ていたガツクは、ふと周囲が白ん  
じている事に気づいた。

（もう朝か・・・今から寝ても寝なくても一緒だな。着替えて戻  
るか。）

音もたてずに着替え終わるとモモコの頭をそつと撫で、静かに出  
て行った。

朝もやの中を隙のない身のこなしで歩きながら、気分が高揚して  
いる事に気づき苦笑する。

面白いものを拾った・・・さてアレをどうするか・・・

2 - 4 廊下を走ってはいけません

走ったり、泳いだり、洗われたり、激熱ミルクを飲んだりして  
疲れきっていたモモコは昼ごろ、ようやく目を覚ました。

寝ぼけ眼で辺りを見回しギョっとしたが、昨夜の事を思い出し脱力  
した。

（あゝ、そっか、そうだった。私ってほんとに・・・テンレイさん  
心配してるかな・・・）

（ここどこら辺なんだろ。たぶん、いや完璧迷子だよね。）

モモコの行動範囲は、テンレイの私室とお茶会とかの往復に限られ  
ていたため、その辺りの事など全くといっていいほどわからずにい  
た。

もし把握できていたとしても、総所は広域で入り組んでいる。一人  
で戻るには無理があった。

（テンレイさん優しいからな。たぶん捜してくれてるんだろうけど・  
・・・いつまでかなあ・・・ふう。）

考えれば考えるほどマイナスな方向に傾いていく。のでモモコは考  
える事をやめた。

（なんとかなるだろ！大丈夫！やるぞ私！）

さて前向きになったところでモモコはこの家を探検する事に決め  
た。

あの大男の家でモモコのサイズでは探索より探検の方がふさわしい。  
モモコはまず、ベッドから降りて正面にある掃き出し窓に近寄り外

を見てみた。

どうやら庭のようではある。どことなく日本庭園にちかいような趣だ。

(うーん。この世界はもとの所とびっくりするほど似てるモノが多  
いなあ・・・私が捜してるのかな。無意識に。)

結構思い切りがいいというか、順応性が高いというか、馴染みすぎだろ自分と思わなくもないモモコだが、やはり時たまホームシックにもなる。死という究極の体験をした上、まるで見知らぬ世界に落ちてきたのだ。しかも猫の姿というおまけ付き。精神錯乱を起こしたとしても不思議ではない。

しかし、猫になっていた、という事が悪いように作用せず生まれ変わったのかもというよく言えば前向き、悪く言えば単細胞な考えが、モモコを楽にこの世界に馴染ませた。

寝室をぐるっと見渡して乱雑におかれたコートやスーツを見て顔をしかめる。

(ちゃんと掛けないとシワになるぞお。ナめんなよ。シワ。)

その側を通ろうとして、ふとコートに模様が入っているのが見えた。

前足でちよいちよいつと真っ直ぐにしたり、ひっくり返したりを繰り返してようやくそれがなんなのかわかった。それは横切る二つの雷に五つの桜が舞う図案だった。それが左の前身頃、胸あたりから肩に上り、背の中程まであった。コートの地が黒いので白青の雷と桃色の濃淡の桜はかなり目立つ。

(すごいな〜なんだろなんかの応援団？あの人がんばらないかあ。  
コスプレ？しそうにもない。)

考えながらドアをくぐると居間に出た。  
慎重にあたりを見渡す。人の気配がまるでしない。大男は留守のようだ。

(ふい) 出くわしたらどうしようかと思った。とりあえず心の準備があるよね・知らない人だと)

ガツクの場合別の心の準備が必要になるのだがモモコはあえてスルーした。

ガツクのシンプルな家具を見て(あまりこだわりなさそう)と余計なお世話的感想をもらしながら歩いてゆくと二つの器があった。

(もしかして・・・ご飯? か?)

モモコの疑問ももつともな なんかへんな物体が乗っている。

(なんだあれ?キラキラしてる。)

恐る恐る近寄ってみると そこには・・・

(こ、これは・・・魚?)

まるつと魚が入っていた。しかもただの魚ではない。虹色に輝くドミニオン名物、その名も「レインボーフィッシュ」まんまだが。体長2mを超す正に魚の王者。その身は生ではプリプリ、焼けばふつくら、煮れば蕩けるような巷では大絶賛!の食材だが、モモコからしてみれば、

(んなもん食えるかーっ!!)

罪のない魚に思わず両後ろ足でツッコミ、とび蹴りをかますシロモノでしかない。

ちよつと涙目に潤んで見えなくもない魚を無視し、もう一つの器に入っていたミルクを残らずたいらげ（今度は慎重に温度を確認）、モモコは探検を再開した。

結果、ある程度生活感はあるが全体的にシンプルで無駄な物はない感じである。

フリルやレースで飾られたテンレイの部屋とは対極でモモコには面白かった。

居間に戻り、モモコが時計を見ると時刻は2時半を過ぎていた。

（そんなに時間経ってない・・・暇だあ・・・本か雑誌ないかな・・・）

テーブルに乗ってみるとたくさんの書類があった。

（ん？ふんふん さっぱりわからないけど・・・）

鉄橋、増築、補強、不法侵入、陸橋、材質、ダイス・ラズ大将、サムズ出向、任務・・・

（これ・・・なんか・・・気のせいかな・・・間違っても奥じゃない・・・もしかして。）

そして決定的な文字を見る。

軍部・承認・ガツク・コクサ大将・残る霧藤隊を代理統括。その顔写真。

そこには写真からでも威圧感ありまくりなあの大男がいた。

時間は少しさかのぼって12時ちょうど。

カインはこの日上官が機嫌がいいのを珍しいなと思いつながら午前中を過ごした。そして、

「ガツクさん、昼食なににします?」

いつものように聞いた。すると一瞬の沈黙の後いきなりガツクが立ち上がったので思わずビビって身構えると、上官はドアに向かい出て行く寸前でこつちを振り返り、

「猫の好物はなんだ。」

と聞いてきた。

なんの脈絡もない質問にあっけにとられながらもカインは律義に返した。

「そうですね・・・一般的に猫の好物は魚だと思います。」

「わかった。」

それだけ言うとガツクは去った。

ガツクの駆けて行く足音を聞きながら、カインは嫌なすんごく嫌な予感がしてきた・・・。

(しまった。アレのメシを失念していた・・・。俺とした事が。)



ガツクは走りながら総所を抜け、一目散にドミニオンで一番の魚市場に行き、  
ちよつど水揚げされたばかりのレインボーフィッシュを見つけた。  
そう、まさに見つかつてしまった。

( どうせ食べるのなら一番うまいやつがいいだろう。この大きさを足りない事もあるまい。 )

すぐさまお持ち帰りとなる。

「大将！後で届けますぜ？」

「いや、今すぐ食べるんだ。気にするな。」

「あいよ！毎度ありい！」

ガツクは市場を出ながら時計を確認した。12時24分。昼食時間も半分近い。ガツクは走った。

アレは腹が減ってあの奇妙なだが面白い声で泣いている事だろう。

( 急ぐか。 )

ガツクはさらに足を速めた。

その日、軍部に新たな伝説が誕生した。

今日、部内勤務だった彼らは自分の運命を呪った。  
彼らは見てしまったのだ。

黒いコートを翻し、輝く虹色の魚を（2m）持って走る、彼らの大将を。

その速さ、尋常ではない。

運悪く魚やガツクに接触した者は弾き飛ばされて壁などに激突し、医務室に送られた。

理不尽である。しかし彼らは訴えない。なぜなら「これしきの事で医務室とは・・・鍛錬が足りていないようだな。」とか言っただけだ。という名のトレーニングを軍部全体でやる事になるからだ。

この喜劇？悲劇？いや大惨事を体験しなかった者は被害者から一連のことを聞き一様に「うっそーあのガツク大将があー？国主じゃなくて？」と疑ったが、後日それを上回る事件に遭遇するハメになる。

2・4 廊下を走ってはいけません(後書き)

はしゃぎすぎだよねえ。

2・5 悪だくみにしか見えません

モモコは驚愕の事実を前にして、落ち着け落ち着けと呪文のように唱えていた。そしてさらに気づきたくないものに気づいてしまった。寝室にダッシュで戻り、コートの側まで寄ってもう一度凶案を見る。

(雷に桜・・・雷・・・桜・・・雷桜・・・雷桜隊だあ！！！テンレイさんの天敵雷桜隊のしかも大将の家にお泊り！！ぎよえー！！どうしよどうしよ！！！)

意味もなくコートの周りをグルグル走ってみる。

(そう言えば階級が高い人はコートやジャケット着用ってなんかで読んだような・・・)

ドミニオンでは軍部は少将以上は黒いコート着用(下はスーツもしくは準ドレスコード)以下は黒の制服に階級章。その他の部は白のジャケットで部長、副部長のみ、以下は白の制服に階級章となる。そしてこれが最大の特徴なのだが、前述の通り胸から背中までをそれぞれの部署を表す凶案が描かれている。ガツクなら雷桜隊を表す雷に桜といった具合だ。

ちなみに奥はダリア、国主は全ての生命の源、太陽の凶案になる。ホクガンが源になっているかなんて考えたくもないが。走ってもなにも解決しないので居間にすぐ戻った。

(なんとかしてテンレイさんとこ戻れないかなあ。無理か。自分がどこにいるかもわかんないんじゃないかな。)

テーブルに乗り、ガツクの写真を改めて見てみた。相変わらず威圧感というか圧力というか「圧」しか感じられない顔である。ガツクの無表情な顔写真を見ながらテンレイのひとりごと（愚痴）を思い出す。      テンレイいわく、雷桜隊は「粗暴」で「冷血」で「奥を小馬鹿にし」、「筋肉バカ」で「デリカシーの欠片もない」（それはホクガンだと思う）な連中だそうだ。      モモコが知っている雷桜隊はガツクしかいないがちょっと乱暴ではあったものの粗暴というよりは加減がわかっていないようにみえる。はっきり言ってモモコにとって加減の知らぬガツクの行為は迷惑以外何ものでもないのだが、心意気？は認めるべきであろう。モモコは今も器に乗ったままの巨大魚をチラッと見た。

（悪い人ではないと思うんだよね。わざわざ大変だっただろう（うん、周囲がね）こんな大きな魚。たぶん私が猫だろうから持つてきてくれたんじゃないかな。あいにくツツコミ入れるしかなかったけど。もしかして必死に訴えたら飼い主捜してくれるかもしれないし。行き過ぎる感がない気もするけど。）

不安と期待が半々のモモコはとりあえずガツクを大人しく待つ事にした。

（それはそうと昨日からなんか体がゴワゴワするんだよね。気のせいかなあ。）

気のせいなのではない。正真正銘、洗濯用洗剤のせいだ。モモコよ。

ガツクの眉間のシワはこれ以上ない程深かった。  
ここはガツクの執務室。

ガツクが今日の分の仕事をやり終えようとした時、  
カインが、

「ガツクさん、すいませんこれもお願いし……ま……す……。」

書類の束を差し出した途端、どちらかといえば無表情なガツクの表情が険悪の方向に傾いた。しばらく（若干震えている）カインの手にある書類を睨みつけていたが、

「わかった。」

と諦め、受け取る。

ここ最近ガツクの仕事の量は増えていた。霧藤のダイスが小隊を連れ、サムズ地方の国境沿いに偵察に行っているので、そのダイスの部内の仕事をガツクが肩代わりしているからだ。深夜過ぎに帰宅、も珍しくない。

ガツクもわかつてはいるのだが今は事情が違う。  
家にはアレが居るからだ。

昼に戻った時は寝ていたので起こさないようにそつと昼食？を用意できたが、今はすでに10時近い。

ガツクは今度は夕食の心配をしていた。  
ついでにアレが食べる様を見て楽しもうとも思っていた。  
イラついていても仕方ない。ガツクは書類を手繰った。

一方カインの方は今日のガツクの行動に???がいつぱいついていた。残業なんていつもの事なのにどうしたんだろうか。しかもレイ

ンボーフィッシュをかついで部内を駆け回ったって本当だろうか。にわかには信じられない。もしかして出て行く直前に聞かれて答えたあの事と関係あるのだろうか。カインは本人に聞いてみたかったが、自分の想像を超えた答えが返ってきそうにやめた。カインは賢明だと言えるだろう。ガツクの思考は余人のそれを超えている。普通、2mの大海魚を30センチにも満たない猫に与えようと思う奴がいるだろうか。いやいや。いや。いたんだけど。そして、「魚」と答えたばかりにレインボーフィッシュをガツクが買うことになった。ただなんて知らない方がいいだろう。この日の夜も遅くまでガツクの執務室の灯りはついていた。

ガツクが自宅に帰ると猫が物陰から覗いている。なんとなく恨めし気にみえるのは気のせいだろうか。

「遅くなって悪かったな。腹が減っただろう。」

ガツクが居間に入ると魚が手つかずで残っていた。猫は魚が好物だと聞いたが。情報源が（カイン）間違えたか？一瞬抹殺の方向で行きかけたが、確か一般的にと言っていた事を思い出しコレ（虹魚）はアレ（モモコ）の口に合わなかったようだ。と思いなおした。それになんとか猫も申し訳なさそうにしている。その頃、自宅でくつろいでいたカインは背筋がゾクウ！とした。命拾いしたなカインよ。

「もう夜も遅い。今はこれで我慢しろ。」

そう言いながら、レインボーフィッシュをどかして今度は目にも鮮やかなターコイズブルーのナマズ（に見える）を器にどん！と置いた。どことなく自慢げである。おそらくこれも高級魚なのだろう。ナマズを前に固まっているモモコを置き去りにして、ガツクはまだ大丈夫だったレインボーフィッシュをあっさりさばいて好物である煮魚にし、残りは冷蔵庫にしまった。持ってきた仕事の書類を手に持ちながら、煮魚をツマミに一杯やろうとしたら横から視線を感じる。感じた方を見ると、モモコがヨダレをたらしながらガツクを見ていた。いや、正確にいうとガツクの持っている煮魚を見ていた。ガツクはナマズを見た。またもや手つかずで残っている。どうやら生魚は好かないようだ。ガツクは煮魚を見、モモコを見た。

「食うか？」

と言うと「えっ！いいの！」というふうにも目が輝く。ガツクが皿ごとモモコの前に置くと、頭を突っ込むようにしてもものすごい勢いで食べ始めた。結局ガツクはなにやら「ふぎふぎ」とか言いつつ食べるモモコをサカナに一杯やった。全部たいらげ、あくびをして眠ったモモコを観察していたガツクは思索していた。

（自分は忙しい。昼にいちいち戻る時間も夜、定時に帰る事もできない。その間アレの面倒をどうするか……。部下に任せることもできる。皆、優秀で信頼できる仲間だ。だがなんとなくアレとの間に人を介入させたくない自分がある。ならばどうする……。）  
彼の中でモモコを飼う事はすでに決まっているようだ。

その時、考えを巡らせていたガツクの目にテーブルに脱ぎ捨てたコートが入った。



(そういえばコートを置いた時アレが鼻に皺をよせていたな・・・  
フツ。ちゃんと掛けると言わんばかりに。・・・コート・・・そうか  
コートか・・・。あれならば。)

ガツクは凄味のある顔でニヤリと笑うと(ガツクのにごく普通に微笑)  
皿や書類を片付け、モモコを毛布で包んで寝室に行き、枕元に  
置いて自身も就寝した。

2・5 悪だくみにしか見えません(後書き)

がんばっ！モモコ！無駄な足掻きだらうけど・・・

2 - 6 見えてますか？

翌朝、モモコが顔をくすぐる感覚に目覚めると目の前に仁王立ちしたガツクがいた。

思わず飛び上がったと起きると、

「起きたか。朝飯を食べる。」

と言って寝室を出て行った。

モモコはしばらくきょときょとしていたがガツクが戻ってくるかもしれないと思い慌てて後を追った。

居間に出るとガツクはソファに座って待っていた。その側には器が二つある。

モモコは器を胡乱な目で見た。軽くトラウマになっている。

(昨夜のナマズ？は夢に出てきたんだぞ！今度はなんだ！なんなんだ！)

足音も荒くしかしゃや腰が引けながらも、覗いてみるとお馴染みのミルクと焼き魚が乗っていた。

(おおー！！ちゃんとしたご飯だ！)

モモコはガツクを見上げた。

「食べる。」

モモコの目が1000ワットに輝いた。

(わーい！いっただきまーす！)

すぐさま朝食を開始する。が、しばらくすると頭のとっぺんがちくちくする。何だ？モモコは上を見、すぐさま俯いた。ガツクが凝視していた。モモコはしばらく固まっていたが(ガツクとの生活では”固まる”はもはやオプシヨン)、もそもそと再開する。

いつものように嫌になるほど食べこぼしが多い。猫の口は咬みつき、まる呑みが基本なので租借には向いていない。だが中身は人間のモモコは租借しないとどうしても飲み込めない。しかしそうすると端からこぼしてしまう。ご飯は大好きだが嫌いでもあった。作ってくれた人に悪いし、見た目も嫌だ。それに食べるのを待っててくれるテンレイにも。昨夜はあまりにもお腹がすいていたので気にする余裕もなかったが今は違う。

(もしかしてこぼしたのが気に障ったのかな。どうしよう。でもおいしいから全部食べるけどね！)

開き直り、こぼしはしたがキレイ？に平らげた。

最後にミルクを飲み干し、口の周りを舐めて食事は終わった。

「終わったか。」

モモコは緊張したが、ガツクは食べこぼしをさっさと拾い、器を片付けるとモモコをひょいっと持ち上げた。目線と同じ高さまで持ってくる青ざめるモモコにガツクは衝撃的な言葉を告げる。

「俺は忙しい。正直お前にまで手が回らん。なので今日から一緒に軍部まで行ってもらおうぞ。」

(ええー！？うそおー！テンレイさんとこに連れてってもらおうと

思ってたのに！ていうかなんか私を飼う事は決定事項っぽい！させ  
てたまるかぁ！！）

モモコは抗議しようとしたがガツクの視線に負けた。ガツクはモモ  
コをコートポケットに入れると（！！！！）自宅を出た。

猫は普通、ポケット等に入れるとすぐに暴れて脱出するものだが（  
ガツクがやったら大人しくなるかもしれない）モモコなので多少息  
苦しいが我慢していた。

（けど全然揺れない・・・。外どうなってるんだろ？ちょっとだけ見  
たい。）

モモコは好奇心に負けて外を覗いてみた。前回同様の事を仕出かそ  
うとしているのにまったく気づいていないあたり、学習能力がない  
ようである。

ダイナン・ギャッツ少将は今年昇進したばかりの若い将校である。  
彼は廊下の前からやって来た上官に気づき朝の挨拶をしようと礼を

とった。

「ガツク大将！おはよう……ご……ざ……い……ます……」

猫がいた。

大将のポケットに。

ね・こ。

しかもピンク。

「ギャツツか。今日は霧藤との合同訓練だ。抜かるなよ。」

大将 普通に会話。

部下 モモコ ガン見。

「は……い……」

ダイナンは遠ざかる上官の背にやっこの思いで返事をした。

（俺……疲れてんだな。それとも昨日飲み過ぎたのか。いや目が悪くなったのかもしれん。）

ダイナンはようような言い訳で現実を否定した。

その時、またもピンクいのがチラツと見えたが、今度は見なかった事にして訓練の準備に向かった。

（ふぁー。目があった時はどうしようかと思ったけど、なんにも言われなかったなあ。もしかして軍部はペット同伴とか容認の方向？だとしたらちよつと気が楽。）

モモコは能天気になっているが、そんな次元の問題ではない。

行く先々で隊員たちに目の錯覚だ・・・とか、あー俺って靈感あつたんだな見える猫の霊が。とか現実逃避させながら、一人と一匹は執務室に到着した。

もちろんカインはバツチリ見た。すぐ目を逸らしたが。

「カイン、今回の合同訓練の内容だが・・・どうした。」

「はっ！はいい！く、訓練ですか！？今日のですか！？」

「当たり前だ。今日の予定だろう。」

「そ、そうですね。・・・。」

今、俺が見ているモノは本物だろうか。猫に見える・・・ふわっとしたピンクの猫。女性が抱いていたらまったく違和感がないだろう・・・しかしガツクさんのポケットから出ている様は違和感ありまくりどころかシユールというかシユールに謝りたくなるというか今すぐなにかで覆い隠したいというか・・・この様子で自宅から出てこられたんだろうか？・・・みんなには見えただろうか・・・。

簡単に確認しあい訓練後のスケジュール等を検討すると時間になった。ドアをくぐろうとしたガツクをカインは慌てて呼びとめる。

「ガツクさん！その・・・その格好で行くんですか！？」

「いつものと同じだろうが。」

「えっ・・・そ、そうですね。」

「・・・今日のお前はどうかしてるぞ。」

カインは言いたい事が山ほどあつたが耐えた。

あれは・・・違うんだ。何が違うのかわからんけど違う。うん違う。・・・行かないと。行きたくないけど。

そして補佐官の頭を崩壊寸前にした一人と一匹は訓練場に降臨した。

ズラリと並んだこの国最強の部隊「雷桜隊」彼らはどんな戦いでも剛毅果断しうぎかたんに戦い、今だ負け知らずの戦闘のプロフェッショナルである。

対する「霧藤隊」は戦況に応じて臨機応変に対応。ある時は突破口を開いて戦い、ある時は守りに入れる変幻自在の遊撃部隊である。

彼らは互いを認め合い確固とした絆を持ち、己らの強さに驕ることなく精進してきた。

今日も厳しいながらも充実した訓練になるはずだった。

雷桜隊のある男は隣に立っている同僚を目だけでちらりと見た。すると同僚もこつちを見ている。その顔色は青い。自分も似たような顔色だろう。彼らはまた前を見た。

そこには、軍部最強の男 ガツク・コクサ大将が威風堂々と立っていた。

ポツケからピンクの猫を覗かせて。

彼らはずい 逸らしたり、泳がせたり、彷徨わせたり、俯きがちななる自分の視線を全精力をもって前に固定していた。壇上ではガツクが訓練の内容について説明、脱落したものはクロスと冗談とも本気ともとれる事を言っている。しかし全員聞いていない。というか目の前の光景が信じられず茫然としているといった方が正確だ。



最初一人と一匹が訓練場に姿を現した時、衝撃が、次に混乱の波が来て最後に恐怖が居残った。

静寂のうちにガツクの話が終わり、訓練開始となった。

訓練が進むにつれ、ガツクの眉間の皺が深くなっていく。

まだ1時間もしないうちに脱落者が続出している。普段の彼らからは想像もできない注意散漫が目立つ。

モモコに我が軍部の凜々しいところを見せたかったガツクとしてはおおいに不満がのこる結果となった。

「貴様ら・・・なぜそんなに弛んだのだ？俺の鍛え方が足りなかったか・・・。そうか。」

過酷な訓練の後、追加で腕立て伏せ500回、訓練場200周をやり遂げ、息も絶え絶えの彼らを奈落の底に叩き落としてからガツクは去った。

相変わらず猫はポツケから覗いていた。

一人と一匹が消えてから彼らは思った。

これは試練だ。新しい形の。俺達の何かを試す、たぶん精神的な何か。しかし耐えてみせる。生き残ってみせる俺だけは！最強のあの人に挑んでやる！

最後に彼らは確固たる絆でつちかったテレパシーかなんかで「他言は無用」と固く誓いあった。

他言できるわけない。

あれに気をとられて（とられすぎだ）まったく訓練にならなかった

なんて。

あのガツク大將が あ・の・鬼のガツク・コクサが……もう  
これ以上言うまい。

今日ここに、軍部全体を巻き込んだ壮絶な なんかの試練が幕を切  
って始まった。

## 2・7 変(へん)ですな

モモコがガツクに拾われて1週間が過ぎた。

その間、衝撃と混乱と恐怖を周りにまき散らしていたのだが、当の一人と一匹は気づいていなかった。

いや、モモコはなんとなくおかしいなあと感じている。

普通この世界では珍しい”猫”がいたら「猫なんて珍しい」と関心を示すものだ。現に、テンレイのところでは外に出るとしよつちゆう話しかけられたり、撫でられたり、抱っこされたりした。それら  
が一切ない。

一切ないばかりか皆モモコと目すら合わさないので。視線は感じるのにそつちを見るとサツと逸らされる始末。

さすがののんきなモモコも、あれ？と気づき始めた。

最初におかしいなと思ったのは、いつもガツクと一緒に仕事をしているカインが、モモコをあきらかに見て見ぬ振りをしているからだ。絶対完璧バツチり見えているはずなのだ。

なぜならガツクがデスクワーク中モモコはガツクの膝の上に座っているから。

2m78?の大男(注記 黒一色、氷のような眼し、座ってるだけなのに相手側が勝手に生命の危機を感知)の膝の上に30?弱の猫(注記 ふわつとしたピンク色の毛、くりくりの瞳、いつも半開きの口)まったくの非対称を無理矢理マッチさせた結果のような光景いや、モモコも一応は抗議したのだ。頑張った。膝に座らされた途端じたばたして床に飛びおり、執務室を逃げまくろうとしたが、あつさり捕まり、無言の圧力に屈した。

その間死んだように静かだったカインに、「その猫どうしたんです

か？」とかも聞かれなかった。  
ガツクも自らプライベートな話を話す性質たちではないため執務室は奇妙な緊張感に包まれている。

（見えてないはずないよね。ガツクさんは普通に見えてるし……ハッ！）

モモコは思い当たった。

（猫が嫌いなんだっ！ あーそうだよ、好きっていう人ばかりじゃないよねえ。）

違う方向に曲がったようだ。このようにして執務室の空気は停滞した。

（そうか……そういう事だったんだ……。そうだよねえ。私でも見ない振りしちゃうよ。そりゃ。）

モモコは今度はちゃんと周りの状況を把握した。

きっかけは昼、昼食を食べにガツクと一緒に食堂に来た事から始まる。

ちなみに軍部は食事、洗濯、掃除など身の回りのことは全て軍部でしている。奥にしてもらう事は制服の製作とか専門的なもののみで、自分たちで出来る事は自分たちです！これも訓練の一環だ！が趣

旨なのであまり奥やその他の部と接触を持たなかった。というわけでモモコの事も結構月日が過ぎるまで互いに知らなかった。軍部にとつても奥やテンレイにとつても残念な事だと言えるだろう。

横道にそれだが、ガツクとモモコが食堂に入ると皆がいつせいに会話をやめ、緊張感が波のように拡がった。ガツクはそれをなんとも思わないのか普通に食券を買い（この日は炊き込みご飯定食）、モモコのためであろうシチューの食券を求め、普通に受け取り、普通にテーブルに座って食べ始めた。モモコはというと床で自宅から持ってきた例の器に（ガツクは器をスーツの胸元から出し、モモコの度肝を抜いた。そこにいらした軍部の皆さんのも）シチューを三分の一ほどよそってもらいフーフーして食べた。食べこぼしはマットを敷いて（これも出した）対処した。食べている最中も何度か視線というかこつちを気にしている気配が伝わってくるのだが、そつちを窺うとささつと消える。これを何度か繰り返して度目でモモコはキレた。

「にゃーうおーぶぎー！（なんなのだ！言いたい事があるのならはつきり言え！）」

静かな食堂中にモモコのかわいい鳴き声が響き渡った。

ガツクは急に鳴いたモモコにピクツとした以外は特に反応を示さなかったが、軍部の皆さんは飛び上がった。そしてさらにシンと静まることができる。モモコは自分が仕出かした事にビビり、

「ふみー……。うな。（あの、ソフトをお願いします）」

縮こまった。

ガツクはその間も黙々と自身の食事とシチューの残り三分の二をたいらげ、最後に茶をのんで立ち上がり、器とマットを回収して（それは魔法のようにしまわれた）モモコを抱き上げてから、食器を返

すためにカウンターに寄った。その時ふと壁にかかった鏡が目に入る。なにげなく覗いてみたモモコは仰天した。

「みやおー！（な、なにこれ！変っ！なんかすごく変！）」

そこには地獄の帝王のようなガツクがぼさつとした間抜けなピンクの自分を抱っこしている姿が映っているのだが、その究極のミスマツチ具合にびっくりだ。

ただモモコは「びっくりした！」で済んだが、普段のガツクを知っている彼らからしてみれば変どころか天変地異ぐらいのインパクトだった。あの敵に容赦など一切ない、この人ほんとに俺らと同じ人類か？と味方でさえ疑わさせてくれる強さと、本当は俺らの事潰したくて仕方ないんじゃないかと勘違いさせてくれるシゴキ。国主と3人の大将（シラキ以外）から一番恐れられ、軍部で目を合わせて会話したくない人14年連続一位のあの男！………にピンクの猫。

なにかの試練だと思わなければやってられない……。これが軍部の総意だ。

真っ直ぐに現実逃避。これでいこう。良いスローガンじゃないか。あとこれには暗黙の了解があり、お互い声に出して（ガツクと猫を）確認してはならない。一度認めてしまえば今度は現実崩壊するからお前からこの国を守る強い軍隊じゃなかったんかと言いたいところだが彼らにも怖いものはある。たとえそれが味方であるはずの尊敬する上官だとしても。

これでやっと周りの違和感に気づいたモモコは素朴な疑問を感じる。

（ガツクさんはなんとも思わないのかなあ。ていうか今さらだけど

私みたいなピンク色の猫を連れて回って恥ずかしくないのかな。大人のそれも立派な仕事をしている人なのに。迷惑かけてるんじゃない？私のせいで降格しても知らないぞ！でもガツクさんを降格できる人なんているのかな？ホクガンには無理そう。うーん。ガツクさんってナゾ。)

モモコはわかっていない。ガツクは恥などとは思ってもいない。迷惑だとも。それどころか霧藤のダイスに早く戻って来て部内の仕事をしろとせつついている事を。この男はモモコが長時間執務室にいては気が散って自身が仕事にならない事に気づき、さっき食堂で急に鳴いたのもモモコが退屈しているのに違いないと勘違いしていたのだ。

2・7 変(へん)ですね(後書き)

180度違う一人と一匹の思考。



人間、どんなに違和感のあるモノでも見慣れると何気ない振りが上手くなるようだ。

軍部の皆さんは見ない振りのスキルが格段にレベルアップした。日々は一人と一匹が予想外の動きをしない限り、まずまずな平和がたもたれていた。

「今日は軍部会議がある。大人しくしてる。」

モモコが朝食を食べているとガツクが話しかけてきた。

ガツクのもとで生活するようになって早や1ヶ月がたっていた。

ガツクとモモコの生活パターンもおのずと決まってくる。

朝、朝食を食べながらガツクが今日の予定を話す。食べ終わると抱っこされながら（やはりポツケは限界があつた。しかしこれも・・・）たいていは執務室か訓練場、たまに軍部施設の視察などに向かう。昼食は食堂かデリバリーを頼む。7時にモモコだけ夕食を食べ、だいたい夜の10時まで勤務。自宅に帰りガツクが入浴夜食をすませたら就寝。（ガツクは入浴ついでにモモコを洗おうとしたがこれだけは！成人男性と入浴なんてできるか！！これだけは乙女？として死守した）ちなみに別の日にモモコを洗おうとして例の洗濯用洗剤を用意したところモモコの猛抗議にあう。

軍部会議？つてなに？というふうにモモコが首を傾げたのでそれを見てガツクはわずかに微笑むと

「俺達大将5人と国主・・・国で一番地位がある奴のことだ。が集まりいろいろな事柄・・・例えば今なら国境警備の強化、分隊の配置などを話し合う場だ。・・・本来ならお前を連れて行く所ではないがな。」

じゃあ 置いてってよガツクさんのわがままかよとっつこむところだがモモコはガツクのまれに見る微笑みに、

（いつ見てもすごい邪悪そうな顔だなあ。微笑みっていうかニヤリ？ 思いつきり笑顔だとどんなになるんだろ。見てみた・・・ハッ！ 自分 今死地に足を踏み入れようとしてなかったか？ あつぶねー！）

結構失礼な事を考え、話を聞いていなかった。

ここでちゃんと話を聞いていれば後でホクガンに会える事を知る事ができていたのだが・・・

それにしてもガツクはモモコに人と会話するように話しかけるが、これはモモコが話の内容に沿った反応を示すからである。是か非かを問う時も首を振ったり、頷くそぶりをするのでガツクは、

（猫という種族は人の言葉がわかる。）

というファンタジーな勘違いをしてしまう。

間違いなくモモコのせいであろう。

モモコもこれはまずいかなと思わなくもないのだが（執務室でモモコに「今日の夕食はハンバーグだそうだ。嬉しいか？ そうか。」と話しかけたガツクを見たカインの顔があまりにも！あまりにも！だったので）自分の意思を伝えやすいのでこのままでもいいよねっ！ごめんねガツクさん！周りの人！で通した。

今日も一人と一匹は元気に出勤した。

途中資料をとり、執務室に寄り、あとは会議室に直行。

そこにはすでに3人の大將が座っていたが、

シラキ　まばたきする。

グレン　テーブルに片手肘をつき手を顎に当てたままフリーズ。

ジエン　椅子から転げ落ちる。

三者三様の反応。

モモコはえらい人でもビックリするんだなあとかボケた感想を抱いた。自分たちの破壊力を今だ理解していないようである。

ガツクは一番派手な反応を示したジエンをチラッと見、（あくまでチラッと。しかしジエンは一瞬で座り直した）自身の席に着席。もちろん膝の上には口を半開きにしたモモコがいる。

重苦しい沈黙が会議場を満たし始める。

シラキは

（これで最近部内がおかしな空気になっていた事がわかったよ・・・。ガツク・・・3人の中でお前だけはマトモだと思っていたけどねえ。少々行き過ぎる所もあるが筋の通ったいい軍人だったのに・・・。ホクガンとダイスのお守りをさせすぎたかねえ）  
と　とうとうイっちゃったか　てなことを考え。

グレンはやっとフリーズが解け

（ガツク・・・君に何があったんだい？なにか悩みがあったのなら相談してくればよかったのに。君がそこまで追い詰められてた

なんて……。僕は自分の力のなさが悔しいよ……。)  
と勝手に同情し。

ジエンはガツクと猫を直視しないように視線を斜め上にしながら  
(カインの顔色が悪かったのはこのせいだったんだ！悪かったカイン！しつこく理由を聞いたりして！これは言えないよな……。僕でも言えない！……。わああ！なんか猫がこっち見てる気がするう！やめてくれ！僕は静かに生きたいんだ！こっち見ないで！)  
最後は哀願になった。

「ホクガンはどうした？」

「……。今、向かってるそうだよ。もう来るんじゃないかな？」

「フツ！今回は捕まったか。まったくホクガンにも困ったものだ。」

自発的に来る気はないのかあのバカは」

モモコはガツクとグレンの会話をなんとはなしに聞いていたが、ホクガンの名前がでた瞬間全身を緊張させた。

(ホクガン！？ホクガンってあのデリカシーの欠片もなくていつつも仕事をさぼってばっかであんた本当に国主なの？ただの遊び人の間違いじゃないの！？のホクガン？)

かなり事実が入っている(ちょっと待てえ！)名に驚く。

モモコがもっとよく聞こうとして身を乗りだした時、外からガヤガヤした騒ぎとともにロープでぐるぐる巻きにされ、デュスカとレキオスに引きずられた第3代ドミニオン自治領国国主・ホクガン・ラウンドが到着した。

2 - 8 緊張の瞬間です(後書き)

第3代」というのは自治領国となつての3代目です。まあ話のスジには全く関係ないんですけど。またホクガンがやらかすんでしょうか？

「お待たせしました！ボンクラ国主ホクガンでございます！」  
「確かにお届けしました！いいように使ってやって下さい！あ、死  
にかけ程度でよろしくお願いします！まだ使いますので！」

まゝた なにかやらかして2人に苦勞させたな。そこにいた4人と  
一匹は瞬時に理解した。

2人はしっかりとホクガンを椅子に縛り付けてから最後までいい笑  
顔で去って行った。

怒りのあまりガツクとモモコも目に入らなかったようだ。

「全員、揃ったな。では会議を始める。」

猿ぐつわをかまされ、全身ロープぐるぐる巻きホクガンを見ながら、  
ガツクは何事もなかったかのように会議開始を宣言した。

そのホクガンはさつきから自分の状態を訴えもせず、モモコを目を  
かつ開いて凝視している。テンレイの事情を知っているので、まあ  
見るだろうな。

（コモモ！お前よりによってなんちゅー奴に拾われてんだ！よく生  
きてたなあ！表彰もんだぜ。）

モモコが想定外も甚だしいところにあたり驚き、黙った  
ままのホクガンを尻目に会議は進む。

モモコも必死だ。

モモコはなんとかホクガンにコンタクトをとろうとして、テーブル  
に両前足を乗せて身を乗り出し、

「み（ホク・・・）」

鳴こうとしてガツクに口をつままれた。

モモコはあきらめた・・・。

（無理だな！うん！・・・どーしよー。）

急に顔を出したモモコと口をつまんだガツクに全員が注目したがモモコはホクガンに集中していて気付かない。

じつとホクガンを見つめ、今度はアイコンタクトでどうにかならないかとバカな試みを始めた。

こうなつたら、お・ま・えは猫！と額にバリカンで刷り込まねばなるまい。

そして頭上のガツクの機嫌が急降下してるのにも気づかない。事情を知らないガツクからしてみれば、

（俺でもあんなに真摯に見つめられた事はない・・・。ホクガンが気にいったのか？）

飼い猫のめつたにみない興味の示しぶりに今までに味わったことのない不快ななにかが胸の下からこみ上げて来ていた。

急速に圧力が増した会議場はホクガンとモモコが見つめ合い、ガツクが険しい顔でモモコを見つめ、シラキが呆れ、グレンとジエンが青い顔で俯くというカオスになった。

と、ホクガンが突然がたがたと椅子ごと体をゆらして存在をアピールした。

エクソシストばりの激しさで体を揺らすホクガンに

「なんだホクガン。発言は拳手してからだ。」

低い声で冷静にガツクが無茶ブリすると、

（ガツクさん、ホクガン猿ぐつわつけたままだよ！無理だから！）

なんとかしようと思えるあまりつつこみどころを間違えるモモコ。カオス化が増してきたその時、シラキがハアとため息を吐いてホクガンの猿ぐつわを取ってやった。その瞬間ホクガンは叫んだ。

「ガツク！その　ね・・・！！」

が、しかし。

”ね”と言った瞬間シラキ、グレン、ジエンの3人が同時に飛び掛かり、床に押し付けた。

「お前は！少しは空気を読もうとしたらどうだい。ここは見て見ぬ振りをしてやるのが優しさってもんだろ。」

「ガツクの心のオアシスを破壊するつもりかい？そつと見守りたまえホクガン。」

「なにやっつてんですか！軍部全体の未来がかかっているんですよ！すでにカオスがそこまで来てるんです！鈍いのもいい加減にして下さいよ！」

場の空気を読まないで（読めないのではなく読まない）大惨事を起こした前例が多々あるホクガンに「させるかあ！」とばかりに畳み掛ける3人の大将達。ジエンなど軽く混乱しているのか軍部全体の問題に発展させる始末。まあ　もう来ているし始まってもいるのだが。

最後に「何も言うな見るな触るな空気読め」と口を揃えて言い渡す



とホクガンを元通りにして自分たちも席に戻った。ちなみにこれらの会話？は一人と一匹には聞こえないようヒソヒソ声でやりとりされた。

モモコは突然の事に驚きつつも、

（ホクガンっているんな人に恨み買ってるな！。発言しようとして押さえられるってどんだけ？）

と相変わらずズレた事を思い、ガツクは

（俺もホクガンのように・・・いや無理だろあれは。・・・しかしやってやれないことは・・・）

未知の領域につま先を突っ込もうとしてためらいつつ、まだモモコを見ていた。

その日の会議はこんな感じで（ぐだぐだで）なんとか終了した。

引き倒され、会議が終わっても珍しくも一言も喋らなかつたホクガンは何をしていたかというところもモモコではなくずっとガツクの様子を観察していた。

あきらかに空気が違う。大将3人もそれを感じ取ったからこそ、余計な事を言わないように自分を押さえたのだらう。今はなにやら黒いモノが漏れてるが。それはそうと、

（あの動物はおろか植物にすら関心ゼロどころかマイナスのガツク

が・・・コモモも馴れきってるしなあ。まあ あいつは並みの猫ではないが。」

あのガツクの腕に抱かれながらもまったく怯えず、自然に寄りそう姿はホクガンには微笑ましく見えた。

（これは面白くなってきた・・・。テンレイにはもう少し黙っとくか ククク。お、そうだ！ダイスにも教えてやろう！協力してもらいたい事も出来たしな！アレやりたかったんだよな！）

これから来るであろう嵐の予感にわくわくする国主。彼のイベント好き魂が燃え上がり周囲が大混乱する日は近い。

ホクガンは最後にモモコに軽く首を振り手を振ると、迎えにきた2人の補佐官と共に自身の執務室へと帰っていった。

モモコはホクガンの意味ありげな表情と仕草にテンレイに言う気がない事を珍しく察し、がっかりすると同時に少しだけホツとしてる自分に気づき動揺する。

ガツクはホクガンを顔を顰めて見送ると帰ろうとして、

「ガツク、疲れたときは甘いもんが一番だ。たまにはゆっくり休むのも仕事のうちだよ。」

「は？はあ。」

「これ美味しいから」とあめ玉を渡され、なんの事だろうと首を傾げていると背後から、

「ガツク・・・辛い時は誰かに話しを聞いてもらっただけでも心は軽

くなるものだ。私でよければいつでも力になるよ。うん、一人は駄目だ。」

「ガツクさん！あの、ぼ、僕！今度からちゃんとガツクさんの目を見て話をしますから！軍部の皆にも働きかけますから！い、一緒に頑張らましようね！」

ガツクの精神の心配をする男2人にガツチリ握手された。ますます????のガツクを置き去りに3人は去った。

「……なんだ？」

「みゆ？（さあ？）」

（ガツクさんって意外と愛されてるよなあ。えへへ……ちよつと安心。）

首を傾ぎ続けるガツクと理由はわからないが心が少し暖かくなったモモコ。

ゆっくりとなにかが、でも確実に廻り始める……。

2 - 9      ズレてます（後書き）

バレましたがバレませんでしたね！

「お前に名前を付けようと思う。」

ホクガンと再会した日から1週間がたち、ガツクとモモコはお互いモヤモヤとしたものを抱えながらも日常を過ごしていた。そして。

風呂から上がったガツクが髪を拭きながら唐突にモモコに宣言した。は？という顔をした後モモコはすぐさまつつこんだ。

（おっそ！遅すぎるわ！もう付けないだろうと思ったわ！……あれ？今飼う気になったとか？今までの1ヶ月ちょいは一体……この人はほんとに……理由わけわからん。）

首にタオルを掛け、ソファに座って顎に手を当て「うむ」と唸るガツク。

そんなガツクを呆れ顔で見ながら、モモコは最近 気づいた事を思う。

（髪を下ろすと普段の魔王顔も少しは和らぐんだけどな……なんで上げちゃうんだろ？見かけにあんまこだわりなさそうだけど。）

モモコはまだ熟考しているガツクを放っておき、背を丸めた。

ガツクは自分に背を向け居眠りしているようなモモコにそっと手を伸ばす。

柔らかで暖かい。

モモコを見つめる時、触る時、そして 思う時。どうしてこんな気

持ちになるのだろうか。くつろいでいるというのも違うところにいるだけで充分で いないと……。

ガツクが感じてるその気持ち。それは安らぎである。くつろいでいても軍人特有の厳しさが消えないガツクだが、モモコという時だけは幾分その空気が柔らかめになる。本人達は気がつかないのだが旧知の者、身近にいる者、目ざとい者らは早い段階でそれを察していた。表情が豊かになり、声も穏やかで、手つきも優しい。(あくまでモモコ限定。その他に向くとギャップがありすぎ、逆に厳しさが増したように感じられる)

当初はモモコに気を取られ滞りがちだった仕事も、結構大人しくしてるモモコ(この時、そこにあつた書類を退屈のぎに読んでいるところをガツクに目撃され、また新たな認識を植え付ける)に馴れたガツクは的確にさばき始める。前から仕事はバリバリこなしていたが、今は余裕というかどっしり落ち着いてる感じがするのだ。カインも今後どうなる事かと思っていたが、あきらかにモモコがいい影響を及ぼしているのを目のあたりにして胸を撫で下ろした。ガツクはしばらく丸まったモモコを見ていたが、ふと何事か思いつき、紙とペンを持ってきて何か書き始めた。

「これはどうだ？」

ガツクがモモコに声をかけ、紙をピラツと見せた。目をパチパチさせて書かれた文字を読むモモコ。

次第に目が半目になり眉間には皺が寄り始める。

「この中から選ぼうと思うのだが。」

その言葉を聞くやいやなモモコは滅多に出さない爪で紙を引き裂いてやった。きょとんとしているガツクにフンツとしてまた背中を見せて不貞寝する。

「気に入らないか？」

破られた紙を見ながらまた考える。その紙には

”マシユマロ”

”風船”

”わたあめ”

”毛玉”

などなどおよそ丸くてフワフワを表すモノが書かれている。さすがあのホクガンの親友というか・・・前も述べたので略。ガツクは考えた。周りにいる奴から果ては昔倒した敵の名前まで。

「そうか なるほどこれは物の名だな。猫の名前ではない。そこか。」

「みゃうおーふみっ！ふあああ！！」どこだ！着地場所があさつてだぞ！わざとか！」

モモコが間髪いれずつつこむ。さすがあのホクガ・・・3回目。モモコに睨まれても可愛いだけなのだが、ガツクはできればモモコにも喜んで欲しいと思っている。モモコもできれば呼んで欲しい名前があるのだが口からでてくるのが猫語？なのでは到底無理だろう。

（もうなんでもいいよ・・・。マルでもいいもんっ！へっ！）

すっかり捻くれ荒んだ目になったモモコに、

「では・・・モモコはどうだ？お前は桃の実に似ているし、まだ子供だろう。桃の子供で桃子。」

奇跡がミラクルが（一緒）スタンディングオベーションが落ちてきた。  
茫然としているモモコに

「これも駄目か？名前を考えるのも難しいものだな。」

却下されたと思い、次を考えるガツク。モモコは慌てて「さっきの  
がいい！！」と訴える。

「やーにやーと纏わりつくモモコにちよつと驚き、微笑みながら抱  
き上げる。

「モモコでいいのか？もう考えるのは面倒だからな、変更はきかん  
ぞ。」

ぶんぶんと首を縦に振って承諾する。

「ではこれで決まりだ。今日からお前を”モモコ”と呼ぶ事にする。  
改めてよろしくな。」

「にや！うな！（うんっ！よろしくね！）

じゃあ寝るかとおき上げたまま寝室に行きいつものように枕元にモ  
モコをそつと降ろす。

「どうした？名は気に入ったのだろ。もう寝ろ。」

じつとこちらを見つめるモモコの頭を何度か撫でてからガツクは寝  
た。

暗闇のなか、静かに眠るガツクの横顔を見ながらモモコは泣きたく  
なる。



それは切なくて悲しいような迷子の自分を見つけてもらいホツとしたかのような気持ち。

猫の目からは涙は出ない。でもモモコは確かに泣いている。

（ありがとう ガツクさん……見つけてくれて。）

ガツクにとってそれはモモコのイメージの羅列にすぎないだろう。

（桃の実も丸い……モモコの印象丸いしかないのか？ガツクよ）  
しかしモモコにとってそれはかつて確かに存在した自分を形づける大事なモノ。

この事をきっかけに急速にモモコはガツクに心を寄せ始める。

その気持ちに気づくのはまだまだ、まだまだかかるのだが……

次の日 嬉しくて眠れず、朝から欠伸ばかりしているモモコを抱いて元気に出勤したガツクは久しぶりに見掛ける奴に足を止めた。

「ジョウ？シヨウだったか。ダイスに付いて行かなかったのか。」

「……！！。ばう！？（ガツク大将……いい加減ワシの名前おぼえてくれんか……。うん！？おどれは！？）」

「どうしたんだ？俺に吠えた事などなかったんだが……。モモコか？」

モモコは欠伸をしようとして口を大きく開けた時吠えられびっくりしてずり落ちかけた。

コートにしがみ付き、下を見てみると……

「久しぶりじゃのう。よう生きとったなア。」

ガツクと出会うきっかけになったいつかの紳士なドールマンがおかしそうにモモコを見上げていた。

2 - 1 0

感謝感激です(後書き)

「ぎにゃああああ！！！！」

突然さげび声をあげ、ガツクの頭に乗ったモモコにどうした！となったガツクはその原因だろうドーベルマンのシヨウを睨みつけた。強者には服従の世界である動物のシヨウは固まった。

「モモコにいきなり吠えるとは……。ダイスの躰がなっていないようだな？」

大人げな……いや誰にでも平等に厳しいガツクはたとえ犬でも容赦しない。

ダイスが帰還した時まとめて説教部屋行きへ勝手に決定。

ガツクの怖い顔に馴れ、たいていのものにはあんまり動じなくなつた（ガツクの方がインパクト大）モモコでもあの夜のシヨウは別物である。初めて命の危険にさらされ、初めて死に物狂いで走つた。

（注 モモコ視点）それは最早トラウマ。

あの夜の事が思い出され震えるモモコはガツクが頭から下ろそうとしても頑として離れない。仕方なくその状態で執務室に向かった。

（なにやら誤解されちよるみたいじゃのう。ガツク大将とこの飼猫じゃったとは意外じゃが、長い付き合いになりそうじゃけえ、早いうちに解いとかなと。）

ドーベルマンの名はシヨウ。ガツクのもう一人の親友 ダイス・ラ

ズの飼い犬である。

今回の任務は長期化しそうだったのでダイスに置いて行かれ、暇を  
持て余したシヨウは総所をぶらぶらしているうちに自分の主とケン  
カばかりしているテンレイの庭が気に入り、たまに訪れては風情を  
楽しんでいた。あの夜も気が向いて出かけたおりにモモコと出くわ  
したというわけだ。

モモコを池で見失った後も時折捜していたシヨウは（もう5年越し  
の付き合いになるのに今だ自分の名前を覚ええない）ガツクの腕にい  
たモモコに再会し驚いた。

律義な性分でもあるシヨウは誤解を解こうとガツクとモモコの後を  
そっと追った。

軍部の皆さんにギョツとされながらもモモコを頭に寄せたまま到着  
したガツクはガツクの頭上を見つめ茫然自失のカインに、

「ダイスに1週間以内に帰還しないとお前の残りのバイクは全部売  
りさばくと伝える。」

と何度目かになる事を命じた。

我にかえったカインはさっさと席に着いたガツクに確かめる。

「全部、ですか？あのダイス大将が女性よりも大事にしている・・・

」

「そつだ。」

これは脅しではない。ガツクはやると思ったら必ずやる。以前にガツクの言葉を信じないで散っていった奴らの末路を見た者らはガツクにその手の宣告を受けないように細心の注意を払うようになった。なので、今までは「早く帰ってこい。」ですんでいたのが「帰らないとバイクの命はない。」に変更されれば瀕死であろうとダイスは帰ってくるだろう。やるとなったら徹底的にやる主義のガツクの「命はない」は部品をバラバラにし、パーツごとに市場に出すという意味だ。二度とバイク達は復元不可能であろう。ちなみによく宣告されるのは断トツでホクガン、次いでダイスだ。

（これでダイスさんは帰って来るな。）

カインは確信した。

そしてガツクのほうを窺うといつの間にか寝ていたモモコをよつやく引剥がしている所だった。

モモコは追いかけている。

たくさんドールベルマンに。

ひっきりなしに吠えられ、追いかけているうちにいつの間にか人間に戻っていた。

汗が目に入り、足はもつれる、肺は爆発しそうに軋んでいる。

ドールベルマン達は徐々にモモコを追い詰め、今にも食らいついてきそうさ。

（ガツクさんは何処行ったのよ！ガツクさんのバカ！うつつうつつ）

！助けて！ガツクさん！

一匹のドールベルマンがモモコに飛び掛かる。  
大きく開けた口からはズラリと並んだ牙が見えた。

（もうだめ！）

「モモコっ！」

モモコは目が覚めた。

まばたきして辺りを見回す。たくさんの書類や電話、ペンなどが乱雑に置いてある巨大なデスク。横を向く形でデスクを構えるカイン。ちよつとくたびれた大きなソファ。いつもの執務室だ。

（夢・・・夢か・・・。はあああ 怖かった。）

ふう と一息ついたモモコはカインが心配そうに自分を見ている事に気がついた。

そしてそつと自分の背を撫でる大きくて暖かい手にも。

「どうした？悪い夢でも見たか。」

見上げると眉根をよせたガツクが背を屈めて覗きこんでいた。

ドキンと胸がざわめく。

「み、みゃあ。ぶぐ。（な、なんでもないよ。大丈夫。）」

夢の中での恐怖感とは別のドキドキ。

ガツクはまだ納得していないように片眉を上げたが、モモコがふいと顔をそらしたので何度か撫でてから仕事を再開した。

( どうしたんだろ・・・？ガツクさんの顔には慣れたはずなのになあ。なんか焦るぞ？ううん。 )

ぎくしゃくする自分の心。初めての感覚のそれにはまだ名はない。

珍しくも定時に仕事が終わったガツクは執務室を出て、数歩先にいるシヨウに気がついた。ピタリと足を止めたガツクを不思議そうに見て前を向いたモモコは固まった。

モモコが身を強張らせたのを感じたガツクはシヨウを睨みつける。人間よりも強い者に敏感なシヨウは後ずさりしたがる己を叱咤し、勇気をだしてモモコに話しかけた。

「のう 猫よ。なにか誤解しとりやせんか。わしはお前さんを獲物だと思っちょらん。迷子かと思っつて声をかけただけじゃ。」

それだけ言うと後はじつと誠意を込めてモモコを見つめる。

シヨウはモモコと出会った時のことを思い出し、そんなつもりはなかったがモモコを脅かしてしまったかもしれない事に思い当たった。自分よりも何倍も大きい犬が近づいてきたらそれは怖いだろう。増して自分は軍用犬だ。

モモコはきよとんとシヨウを見た。

「え 迷子？獲物じゃない？」



返事をしてくれたモモコに安堵してなるべく優しく話す。

「ああ。追いかけたんのも闇雲に走ってケガでもしたらコトじゃと  
のう、心配しただけじゃア。」

（な、なんですとー！ほんとかあー！？嘘ついてパクツとする気  
じゃないだろな。）

「わしは猫は食わん。」

（げげげ！心を読まれた！）

「口にでちよるけえ」

.....

耳に痛い沈黙が辺りを支配した。

ガツクは二匹がなにやら意思疎通を図っているのを興味深そうに見  
守った。

「自己紹介が遅れた。わしはお前の飼い主であるガツク大将の親友、  
ダイス・ラズの飼い犬のシヨウじゃ。よろしくしてくれ。お前さん  
はモモコでいいんじゃない？」

モモコは改めてシヨウの顔をよく見た。

怖い顔ではあるが理知的で優しい目をしている。

モモコが頷くと言いたい事は終わったのかシヨウが帰ろうとする。

慌ててモモコはその背に声をかけた。

「あーあのーよ、よろしくお願いします！」

驚いたようにシヨウが振り返り、人間だったならほがらかな笑い顔  
だろう声で返してくれた。

「ああ、またなア。モモコ」

走って帰るその背は夕闇溶け込みすぐに消える。

「帰るか。」

ガツクがぼつんと言葉を落とした。

モモコが見上げるとガツクもこちらを見下ろしている。

「うな。（帰ろう。）」

猫に表情筋はわずかしかないがガツクにはモモコが笑ったように見える。

夕日が見せた錯覚かもしれない。

一人と一匹は家路についた。

「総所では面白い事が起つちよるみたいじゃ。」

ガツクからの連絡とホクガンからの私信を並べ、霧藤隊・大将ダイス・ラズは笑った。

「ガツク大将からは5度目の呼び出しになります。珍しいですね。」

ダイスの補佐官リコ・クアンは4枚の帰還命令書を差し出す。

「ワシの大事なバイク達をさばくそうじゃ、相変わらず容赦ねえ。」

リコは鼻をならして行儀悪くデスクに足を乗せる上官を冷めた目で見つめ、

「当然ですよ。本来なら2週間の予定を4週間以上も延長していません。」

「じゃが、成果は掴んだ。これならガツクも文句ないじゃろ。」

「そうですね。後は書類に起こして提出できるようにしないと。」

ダイスは部下の言葉を聞くと大儀そうに椅子に体重をかけギィギィ揺らした。

「帰ってからもええじゃろ。疲れとるんじゃア。」

「あなたのはただの夜遊びです。そこまでやっておかないとガツク大将は……。」

「あーあー わかったわかった。」

「では資料を持って参ります。逃げないで下さいよ？」

「わかっちよる。わかっちよる。」

早く行けとばかりにしっしっしとリコに手を振る。

顔を顰めて部下が去り、一人になった部屋でダイスは呟く。

「帰ってものんびり仕事させてくれそうもないからのオ。」

手にはホクガンからの私信がある。

”・・・・・・お前が帰ってきたら手伝ってほしい。久々におもしろくなりそうだな？”

2 - 1 1 誤解でした（後書き）

次回はいよいよ！

なるか！？

2 - 12 1じめんなさい

サアアア・・・

モモコは寢室の窓から外を眺めた。

昨日から雨が降り続けている。

雨の日に死んだからか、はたまた猫の性分なのか雨の日にはなににもかもが億劫になる。

昼間でも薄暗い中、モモコはベッドでゴロゴロしながらガツクの事を考える。

(ガツクさんに八つ当たりしちゃったな。)

ダイスから帰還する旨の連絡をもらい、引き継ぎの準備を終えたガツクは約1カ月ぶりになる休みを取った。元々誘われない限り、休日は家で過ごすことが多いガツクだが、モモコとの初めての休日になにやら考えがあったらしく(これまでの事例からおそらくくでもない事であろう)モモコも楽しみにしていた。

朝方、カインから火急の連絡があるまでは。

カインに対応するガツクの深く響く声は一生忘れられそうにない。カインも忘れないだろう。

「わかった 今(八つ裂きに)行く。」

”今”と”行く”の間に不穏な言葉が聞こえたのは気のせいだろうか。気のせいにしておこう。

せっかくの休みが潰れ、しかも自分を置いて行くと告げたガツクに

モモコは初めて駄々をこねた。

「にゃーうお！（ひどい！）」

「仕方ないだろう。だが・・・」

「うーおお！ぶみっ！（それに今日は休みだって言ったじゃない！嘘つき！）」

モモコは足早に寢室に走ると毛布に潜り込みストを決め込んだ。ガツクは戸口に立ち、

「モモコ・・・。」

と呼んだが、

「ぶづづうう！！（さっさと行けばいいでしょ！！）」

モモコが唸ったのでため息をつき、雨の中迎えにきたカインと共に仕事へと向かった。

（へっ！ガツクさんなんか！働き過ぎるとね早く老けるんだから！あっという間に爺ちゃんだからね！）

一匹になり静かになった部屋で、モモコは泣くのを我慢するようにぎゅっと目をつぶると無理矢理寝た。

昼になってベッドにいるのも飽きるととぼとぼと居間に行き、ガツクがまだ帰ってきていない事にかっかりしたが、器に何も入っていない事に気づきご飯には帰ってくる！と期待してわざわざ玄関で待つ事にした。

薄暗くひんやりした空気、雨の音しかない空間はいやがおうにも寂しさが募る。

(ガツクさん 早く帰ってこないかなあ。帰ってきたらすぐ謝ろう！お仕事だもんね。私ってやつは・・・自分で思ってたより全然子供だ・・・。ああ、恥ずかしい。)

昨日からの雨でいらだっていたとはいえ、あんな事するなんて・・・  
ただ、休みが潰れたこともイヤだったが、置いて行かれるのはもっとシヨックだった。

今までいつも片割れに置いてくれたのに・・・。

(私・・・飽きられちゃったのかな。ずうっとくっついてたから？それとも・・・)

あれかなこれかなと考えている時、ドアノブが回り、ドアが開いた。

「にゃー！ーうみいー・・・。(ガツクさん！おかえ・・・。)

入って来たのはガツクではなくカインだった。  
傘を畳みながらモモコに気づき、声をかける。

「ごめんな、ガツクさんじゃなくて。でもおいしいご飯と遊び相手を連れて来たよ。」

「ほら入れ」と外から入って来たのは・・・

「よお モモコ。お前、主を困らせちゃあならんぞ。」

この物語中、一番男らしいドールマンのシヨウだった。



カインは「ほんとにコイツでいいんだろっか」などと言いながらシヨウの体を拭いてやり、二匹のご飯を用意すると、

「ガツクさん、今日はすぐには帰れないと思う。大人しくしててくださいよ。」

と言って慌ただしく出て行った。

モモコは俯き、何かの固まりが喉からせり上がってくるのをぐっと我慢した。

我慢するあまり震えるモモコにシヨウは穏やかに話しかける。

「モモコ、腹へっちょらんか。」

首を振るモモコに、

「じゃあ、わしは遠慮なく頂くとするか。」

シヨウが食べ終わった後もモモコはさっきと同じ場所で頭を垂れたままだ。

シヨウはそんなモモコに優しい視線を送るとすぐそばまできて顔を覗き込むように寝ころんだ。

「どうしたモモコ。なにしょぼくれとるんじゃ。」

「……今朝、ガツクさんと。」

モモコはポツポツと今朝あった事を話した。

わがママを言って困らせてしまった事。帰ってきたらすぐ謝るって思ってた事。

「どうしてこんな気持ちになるんだろ？ちょっと前までは置いててもいいのになんて思っていたのになア。」

不思議そうに首を傾げるモモコにシヨウは低く笑うと、

「その感情はお前さんにゃアまだ早ええ。気にせんでもそのうちわかる。……のう、モモコ。」

聞いてもらって少し元気の出たモモコは明るく応える。

「なあに、シヨウさん。」

「どうして今回ガツク大将がお前を置いて行ったかわかるか。」

モモコは目をパチパチさせるとまた俯いて首を振った。

「実は今朝、密入国者が騒動を起こしてのう。」

「えっ！」

「本来なら警察の仕事じゃが、やつら大量の武器も一緒に密輸してたんじゃ。それを使ってドンパチ始めおってのう。」

「ええーっ！」

話しているうちにシヨウの顔も険しくなる。

「しかも街のド真ん中なア。そこで早く収めるために雷桜隊の出番となった理由<sup>わけ</sup>じゃ。そんな所にお前を連れて行けるわけあるまい。気も散るしのう。」

「私……。」

さつきとは別の意味で深く頭を垂れたモモコにシヨウは、

「そういう事じゃ。なあに落ち込む事なぞない、お前はまだ子供じゃ。いつも通りに大将を迎えりゃええ。」

慰めるつもりだろうシヨウの言葉はグサアツ！とモモコに突き刺さり、危うく魂が出かかるところだった。

(うつうつ・・・。シヨウさん・・・私ほんとは20歳なんだよ。元の世界でもこの世界でも立派に成人してるはずなのさ・・・)

ますます落ち込むモモコを今度はシヨウが不思議そうに見た。

シトシトと降る雨の中、早朝から集められた雷桜隊第一分隊と霧藤隊第二分隊、そして波桔梗隊第一分隊は、2人の大将を前に緊張していた。

やがて各部隊の配置などが告げられ、各々は迅速に動き始める。

雷桜の1人は今回一緒に行動するようになった霧藤の1人に話しかけた。

「お前、ウチの大将がものつすぐく不機嫌なワケ知ってるか。」

霧藤のは顔を向けて、

「いいや。もしかして（猫が）いない事と関係あるのか？」

「ドンピシャ。今日なあ、大将1ヶ月ぶりの休みだったんだ。」

「あー……。すまん、ウチのが。」

「や、そりゃいい毎度の事だから。でな、（猫が）来てから初めての休みだつてんで大将、なんか計画してたらしい。」

「そ、そうか。相当（猫が）気に入ったんだな。あ、じゃあ……。」「

「そ。今日のやつら死んだな。」

「よくて半殺しだなあ。」

「なるべく早く治めようぜ。じゃないとこっちに跳んでくるぞ。あれが。」

霧藤のは雨のせいだけでは無い寒気がした。周りの者もした。

「よしっ！き、気合い入れてこうぜ！明日の朝日を拝むために！」

オオウツ！！と野太い声を上げて彼らは足を速めた。

ガツクは恨みを込めた一撃を首謀者の一人に叩き込むと相手は膝を折って崩れた。

「捕縛しろ。」

「はっ！」

部下に後をまかせ、「ガツクさん！」と走って来たカインに向き直

る。

意外に体力のあるカインが息も切らさず駆けよると、

「ご飯、用意してきました。あと、シヨウも置いてきました。」

ガツクに頼まれた事の事後報告をした。

「そうか……。アレは……。いや、いい。悪かったな、任務とは関係ない事を頼んで。」

「いえ、本来ならガツクさん休みなのに……。こっちのほうで申し訳ないですよ。」

黙って首を振るガツクに、

「玄関で待ってましたよ。ガツクさんじゃなかったんですがっかりしてました。」

モモコの様子を微笑ましく思い出しながら語った。

ガツクは意外そうに目を軽く開くと、わずかに口の端を上げた。

「状況はどうなっている。」

「はい。今 残党をブラムス通りに追い詰めています。いまのところ死者、重症者共にいません。」

頷き、すぐブラムス通りに向かうガツクの頬を振りつく雨が伝う。

その姿は見る者に孤高な狼を彷彿とさせる。

たった一人で己が信念を貫く者。

(バカな。ガツクさんはやっと見つけたんだ。心を寄せる者を。)

そんな印象を頭から振り払おうとするが、ふと思う。

（もし猫を失ったらガツクさんはどうなるんだろう？・・・いやそんなことにはならない、絶対に。）

しかし、カインがどんなに否定してもそれは澱のように心に残った。

それは予感だったのかもしれない。

ガツクが帰るとモモコが玄関で丸くなって寝ていた。

ガツクの胸に嬉しさと同時に愛しさがこみ上げる。

起こさないようにそっと抱き上げると、数歩先にシヨウが座っていた。

「お守、御苦労だったな。」

囁き声で言うとシヨウは耳を動かし、目を少しせばめた。まるで「何ほどの事でもない」と言っているようだ。ガツクはシヨウのために扉を開けてやり、出て行くと音をたてないようにゆっくり閉めた。ガツクはモモコを寝室に運ぶとベットに置いた。すぐ毛布で包んでやる。

しばらくモモコの寝顔を眺め、やっと一息付ける自分を感じた。

疲れてはいないが（体力と精力は無尽蔵・・・恐ろしいですよね？）  
焦燥感は常にあった。

(待っていてくれる者がいるという事が、こんなに贅沢なものだったとはな……)

ガツクは冷えた体を温めるため、風呂に入りモモコの隣に身を横たえた。

その振動に目が覚めたのかモモコが身動きし、ガツクがいる事に気づいて目を大きく開けた。と、

「ふみゃーお。(おかえり ガツクさん。)」

小さく鳴いた。

ガツクは自身の頭に手を置いてモモコに向き直り、

「ただいま モモコ。」

ガツクも囁き返す。

いつの間にか雨は止んでいた。

翌日の夕方、ダイス率いる霧藤隊第一分隊が到着した。

2・12 しめんなさい(後書き)

次！次こそは！たぶん！



テンレイが奥の仕事を終えて帰ってきた時、すでに日付は変わろうとしている頃であった。

ふと前を見ると部屋の前に何かが座っている。

もしま、と思い足早に近寄るとそれはテンレイを苛立たせるもう一人の天敵、ダイス・ラズの飼い犬のシヨウであった。

主人の方はどうでもいいが、シヨウのことは好きなテンレイは少し気落ちしたもののシヨウに優しく声をかける。

「こんばんわ、シヨウ。こんな遅くに散歩？あなたのもろくでもない飼い主は今日帰ったんじゃない？それともとうとう見切りでもつけたのかしら。」

テンレイはそう言って少し笑うと、シヨウの耳元をかいてやった。

「ひどい言いぐさじゃのう。シヨウがワシを見限るなんてあるわけアねえ。」

ダイスは言い返すと円柱の影からテンレイの前に進み出た。

テンレイは約6週間ぶりに見る大男をワザと観察するようにゆっくり下から上まで見た。

銀髪に黒が混ざる髪、濃い青い目。浅黒い肌は南の地方独特のものである。

「どうした？久しぶりに会ってワシに惚れ直したか。」

ダイスは挑発的な笑みを浮かべるとテンレイの近くまで寄り、腰を折って顔を覗き込んだ。

テンレイはすぐさま距離をとり、小馬鹿にしたように半目に笑った。

「相変わらず的外れな自信ね、ダイス。ここは立ち入り禁止のはずだけど？」

ダイスは低く笑うと腰を伸ばして腕を組んだ。

「シヨウの散歩に付き合ってたらのう、ついここまで来ただけじゃ。ここまできたらついでじゃろ？可愛いテンレイにも帰還の挨拶をしようとなア。」

テンレイ白けたように鼻を鳴らすと、

「それはご丁寧に。無事に帰って来て本当に残念だね。シヨウは私が引き取ってあげたのに。」

そう言つてシヨウに近寄りそつと頭を撫でそのまま背を撫ぜた。

と、シヨウの黒い毛には目立つピンク色の毛を見つけテンレイは固まった。

まさか。目を大きく開き、ピンクの毛を摘まみ取るとダイスに向き直った。

「これは。」

ダイスは「ん？」という顔をしてそれを見ると、

「ああ。そういえばガツクが何か飼っているらしいのう。あいつが

生き物を飼うとはなア、まったく世の中何が起こるかわからねえ。そいつは昨日シヨウがガツクんとこに遊びに行つて付いたもんじゃろ。」

テンレイはダイスからシヨウに視線を移し、またダイスに戻った。

「そう。ガツクのね。」

テンレイは静かに呟くとダイスとシヨウの前を通り、私室に消えた。

残されたダイスに先ほどまでの笑みはない。しばらく佇んでいたが低く口笛を吹くとシヨウと共にテンレイの庭から歩み去る。

「これでほんとにええんか？ホクガンよ。」

「2人をぶつからせる？」

ダイスは帰還して早々、ホクガンの執務室へと訪れていた。

ホクガンは自身のデスクに座りダイスにニヤリと笑った。

デユスカとレキオスは既に退勤し、部屋には2人きりしかいない。

ホクガンはこれまでの事をダイスに簡潔に語り、自分が起こそうとしている事は詳しく語った。

「そうだ。」

「相変わらず廻りくどい事をしちよる。そのままを奴らにぶちかませばええじゃろが。」

ホクガンは「お前バツカだなあ」という風に大げさにため息をつき、  
(ダイスの額に青筋が浮かんだ)

「あ、の、とんでもなく石頭で鈍いガツクと。」

「頑固でワシらには融通のきかんテンレイか……。」

なるほど。ダイスは目を軽く瞑ると頷いた。

ホクガンは立ち上がり冷蔵庫から出したビールを無造作にダイスに  
放った。<sup>ほお</sup>

ダイスは軽く手首を翻して受け取ると口をつける。

「ああ。あの2人が大人しく話し合いにつくわけねえ。コモモの取  
り合いになるに決まってる。しかもだ。」

「2人とも厄介な事にそれぞれのチームのリーダーじゃしなア。今  
まで以上に確執は深まるかもしれんの。」

ため息をついてダイスはビールをあおった。

「しかしソレにそんな価値があるんか？ちょっと毛色の変わってる  
猫なだけなんじゃろ？」

「明日、会ってみればわかるさ。お前の考えも改まるだろうよ。」

ダイスは立ち上がり、デスクに寄るとモモコのピンクの毛が入った  
ビニールの小袋を取り、しげしげと眺めた。

「しかし、けつたいな色じゃなア。本当にこんな色しちよるんか。」

「信じられねえだろ。だがその色が示すようにあいつは並みの猫じ  
やない。」

ダイスはドアに向かい開ける寸前で振り返る。

「ワシがやることはわかった。じゃが本当に上手くいくのか？」  
「正々堂々と全員の前で対決する必要がある。勝っても負けてもしこりなし、のな。」  
「お前の趣味じゃろうが。ボケ。」

呆れたように半目になったダイスに、

「いいじゃないかよう！最近ぜんっぜんでかい祭りがねえんだ、退屈なんだもん。」

「なにがもんじゃ。気持ち悪いのう。37のおっさんが言うセリフじゃねえ。」

「うるせえな！」

「ホクガン。」

「………なんだ。」

ダイスは俯くと少し息を吐き、顔を上げてホクガンを見つめた。

「テンレイをあまり傷つけるな。」

「………俺は信じている。あいつもガツクもな。」

何度か頷きながらダイスはテンレイに仕掛けを施すため出て行った。

「あいつもなあ………。だあーっ！めんどくせっ！」

ホクガンは頭をワシヤワシヤ掻きむしると執務室を後にした。

次の日、ダイスの任務報告と今後の対策を練るため軍部会議が開かれた。

ガツクはいつものように（問題あるよね。かなりあるよね。）モモコを膝に乗せあの問題児2人を待っていた。

「また遅刻か。」

ガツクは深く眉間にしわを寄せ、ため息をついた。

「あいつらは会議をなんだと思っているんだろつな。」

（えっ・・・ガツクさんがそれ言う？私の存在って一体・・・。）

モモコは一瞬、真剣に考えたが無駄なのでやめた。

いつかのように外がガヤガヤと騒がしくなり、扉が大きく開かれ2人の大男がそれぞれの補佐官を引き連れ登場した。ホクガンともう一人はモモコの見た事のない男だ。と、大男はモモコを真っ直ぐ見て、ガツクに、

「ようガツク。お前面白い猫を飼っとるらしいのう。ソレか。」

ガツクの返答は速かった。

「ソレではない。モモコだ。」

「俺が言おうと思ってたんだ！先に言うなよ！えっ・・・モモコ？」

「誰が言おうと同じじゃ。モモコねえ。お前にしちやア可愛ええ名前つけたもんじゃな。」

3人のいい年したおっさんがギャース力騒ぐのを呆れて見ていたモ

モコは強い視線を感じた。

その方向を見るとデュスカとレキオス、知らない女の人（リコ）茫然と自分を見ているではないか。

あまりにまじまじと見られ少し居心地が悪くなったモモコはちょっと鳴いた。

「みーお（こんにちわ）」

モモコの鳴き声が入ったガツクはくだらない争いをすぐにやめ、モモコに集中した。

「どうした。」

モモコは「なんでもない」と再度鳴こうとした時、突然会議場の扉が開いた。

「私のコモモはここに居たのね。軍部とは・・・いくら捜しても見つからないはずだわ。」

テンレイ・ラウンドはモモコを優しく見つめ、ガツクには永久凍土の視線をくれてやった。

ここにテンレイVSガツクのモモコを巡る開戦の火ぶたが切つて落とされた。



2 - 1 3

バレました(後書き)

ご登場です。

「私のコモモ？」

低い声で言うとガツクはテンレイを椅子に座ったまま見上げた。

そのさまは地獄の審判長もかくやというものだったが、幼い頃からガツクを見慣れたテンレイは、全く怖くない。(テンレイが産まれる前からホクガン、ガツク、ダイスは親友だった。なので男2人は必然的にテンレイの幼馴染だともいえる。「ただでかくて馬鹿力なだけじゃない」テンレイはガツクを怖がる友人に事も無げに言い放った事があり、友人をア然とさせた)

「ええ そうよ。今あなたが図々しくも膝に乗せているのは、わた・し・の飼猫なの。」

テンレイは見下すようにガツクに言うと、

「さあコモモ、こつちへいらっしやい。可哀相に、こんな粗暴な男に拾われていたなんて。この埋め合わせはなにがいいかしらね？」

満面の笑顔でコモモに両手を差し出した。

ガツクはテンレイを睨みつけると、(ちょうどテンレイの真後ろにいた補佐官3人とガツクの正面に座っていたジエンはもろにその顔を見てしまい、石化した)わざとテンレイに見せつけるようにコモコの胸から喉まで(通報もののようにだが猫なので問題ない・・・)だるう。コモコには災難だが)をゆ〜っくり撫ぜ、

「お前の異常な動物好きはどうでもいいが、俺のコモコにまで手を

出すな。モモコも嫌がっている。」

凄味のある顔でせせら笑った。

テンレイの美しい額に青筋が浮かび、口元が引き攣った。

「コモモが嫌がっているのはあなたの方じゃなくて？私の可愛くて繊細なコモモにぜんっぜん似つかわしくないどころか、周りに甚大な被害を与えてきたんでしょ。」

まあ、それは否定できないな。ホクガンは、すっかり石と化した補佐官3人と大将1人を見た。シラキは興味深そうにガツクとテンレイの前哨戦を観戦している。グレンは額を押さえてため息をついている。ダイスはというと苦い顔で「早く止める」とこっちを見ていた。ホクガンは肩をすくめて、そろそろかなとタイミングを見計らった。

その間にも舌戦は徐々にヒートアップしてきた。

「わからない男ね！先に私が飼ってたのよ！目を離れたすきに逃げられて運悪くあなたに拾われただけだっていつてるでしょ！返してよ！」

「モモコは瀕死の状態で俺の所に来た。それを介抱してやった。いわばこいつの命を預かったのも同然。モモコの一生は俺が責任を持つ。お前は去れ。」

「あら、それは御苦労だったわね。どうもありがとう。じゃあ後はコモモを返して。」

「断る。」

放っておくと永遠に続きそうだな。ホクガンはちよっと飽き、2人の龍虎の間で えっ、あ、う？え？ となっってかわいそうなくらい

狼狽しているモモコを面白く……いや気の毒にと見つめ、パンパン！と手を叩いてようやく2人の間に入った。

「もうやめろ、お前ら。このままじゃずっと平行線だぞ？コモ・いや モモ……あー！めんどくせえ！猫でいいや猫。猫だって消耗しちまうぞ？」

ホクガンの言葉にガツクとテンレイはハツとしたようにモモコを見た。すっかり縮こまり、耳を怯えたように伏せ気味にして上目遣いに2人を見るモモコがいた。

「う……あ、あなたが悪いのよ、さっさとコモモを返してくれないから。」

「お前が諦めれば事は収まる。」

ガツクはモモコをコートの中に隠した。

まあまあ。ホクガンは2人を宥めるように双方に手を振り、

「いい加減にしろ、キリがねえ。お前らの猫に対する所有権の主張はわかった。だが猫を真つ二つにするわけにもいかん。そこでだ。」

ホクガンはニヤリと笑いもったいぶると2人を誘う

。「お前らがどれだけソイツを愛してるかひとつ試してみようじゃねえか。勝負して勝者が真の飼い主って事でどうだ。」

テンレイとガツクは顔を見合わせ、ホクガンに視線を戻した。

「望むところよ。」

「異論はない。」

(あゝあ。これで何度も引つかかって来た奴を見た事があるじゃろうに。それも見破れんとあっさり捕まりおつて。相当入れ込んだるなア。)

ダイスは長い脚を組みかえながら3人を呆れて見、ガツクのコートから顔だけだして心配そうに2人を交互に見やるモモコを見た。モモコはホクガンをいぶかしそうにも見ている。

(なるほど、ホクガンの言うとおりかもしれんのう、賢そうな奴じや。・・・さあて、どう転がるかこれからが見ものじゃア。)

それまで黙って成り行きを見守っていたシラキがホクガンに聞いた。

「(いやな予感しかしないが) 一体何をするんだい?」

よくぞ聞いてくれましたっ!とばかりにホクガンは胡散臭い笑顔でシラキを振り返り、

「クイズ。」

へっ?と一同がなると、ホクガンは心底楽しそうに笑って、自身がいつかやりたかったイベントを提案した。

「飼い主ってんならコイツの事をなんでも知っているはずだな?コイツに関するクイズを出して、正解数が多い方が勝ちっていうシンプルなルールだ。」

これなら男女の差もない。

「なお、公平を喫する為に、「奥」と「軍部」と「他の部」もギヤラリーとして呼んでおいたから。」

つまり総所全体。そしてなんと行って集めたか知らんがすでに舞台も整えていたようだ。

「謀ったなホクガン。」

ガツクは立ち上がりホクガンに詰め寄った。素で怖い。

「またお前のくだらん遊びに巻き込んだな？」

(またつて・・・何回もあるんだ。)

モモコは気の毒に思えばいいのか、呆れるか迷う。

「他に血を見ないで解決する方法があるのか？これでもずいぶん知恵を絞ったんだぜ？」

深刻そうな顔をしてみせるが目が輝き、笑っているのだから割は自身の楽しみであるうという事はホクガンをよく知る彼らはわかった。

「自信がないなら降りてもいいのよ？ガツク。」

ガツクはホクガンの首元を締め付けたままテンレイに振り返った。テンレイが腰に手を当て、振り返って小首を傾げ、

「私の方は問題なくってよ？どんなに大勢の人の前でもコモモへの

愛を証明してみせるわ。」

その方が手間も省けるし、お兄様の計画も潰せるってものよ。と続けて言うテンレイにカッチーン！とくるガツク。

「ふざけるな 誰が降りると言った。」

ガツクはホクガンに向き直ると、

「いいだろう。お前の遊びに付き合ってやる。だが俺が勝った暁にはたっぷり礼をするぞ ホクガン。」

「あら、それには私も同意するわ。よくも今まで黙ってたわね。しばらく背後には注意することね。お兄様？」

テンレイと共に宣告した。ホクガンは今度は本気で青ざめた。

「話はまとまったか？じゃあ会場に案内しようかの。お二人さん。」

ダルそうにダイスが腕を組んでテンレイとガツクの前に立つ。会場と聞いて、2人は再度ホクガンを睨みつけた。てへつと舌を出すホクガン。(37歳、職業：自治領国国主)

「ホクガン、気持ち悪いからやめろゆうたじゃろ。それからガツク。」

ダイスは向き直ったガツクに手を差し出して、

「猫はワシが預かる。お前らのどっちが持つっても猫にはキツイじゃろうからな。第三者のワシがええ。そうじゃる猫よ。」

最後はモモコに聞くと、モモコはガツクとテンレイをすまなさそうに見るともぞもぞ体を動かしてダイスに移った。

「モモコ……すぐコイツを打ち負かし、お前を迎えに行くからな。ダイスでも我慢しろ。」

ガツクが囁くように言つとテンレイも負けじとガツクを押しつけて、

「コモモ。悪夢は終わらせるから。ダイスなんて嫌でしょうけど……ね？」

優しく頭を撫でる。

「お前らな……。」

ダイスはため息をつくと先に立って会議場を出る。すぐにホクガンが続き、ダイスに追いつくと、モモコに話しかける。

「猫、お前にも手伝ってもらうぞ。」

モモコは胡乱な目つきでホクガンをじつと見た。これ以上何をするつもりなのか。2人に争ってほしくないモモコはホクガンに身構える。

ホクガンはそんなモモコを見ておかしそうに笑つと、

「大した事じゃねえよ。お前が人の言葉を理解し、文字も読める事はすでに知っている。ここに居るダイスもな。」

モモコがダイスを見上げると、ダイスは片眉を上げながら、



「にわかには信じられん話じゃが、こつもタイミングよく反応されるもの。」

苦笑して肯定した。

「お前には俺が出した問題をハイかイエエかで表してもらつ。ほかにもやつてもらつ事はあるが、始まつたらわかるように説明してやつから。」

モモコは嫌だというように顔を背けたが、

「お前だつてこれ以上2人が自分を取り合つて騒ぐのは嫌だろ？こつするのが一番いいんだよ。じゃなかつたらお前がどつちかを選ぶか？できるのか？」

「ホクガン。やめろ、もうええじゃろ。」

ダイスが遮る。ホクガンは頭をかいて、

「悪い。お前が一番つらいんだよな。すまん。」

ダイスの胸に顔を押し付けるようにして目をぎゅっと瞑るモモコを見た。

会場につくまで2人と1匹は黙つたままだつた。

「題して！ どっちが真の飼い主だ！流血沙汰はご勘弁！クイズで対決しやがれスペシャル〜！！」

ホクガンが金色のマイクで高らかに宣言すると、場内は割れんばかりの歓声に包まれた。

晴れ渡った青い空、秋が訪れ過ぎやすくなったドミニオンの中枢では仕事もせんと何やつとるんだ的光景が繰り広げられていた。

何がスペシャルだこのヤロウ！

モモコはステージ中央に設置され、キレイに飾られた小さなソファにちょこんと座り、ホクガンを睨みつけた。

ホクガンは集まった観客にこれまでの経緯いきさつを面白おかしく語っている。

モモコはため息をついて、ステージを見渡した。

半円形のドーム型の会場は国主が演説をしたり、他国とのレセプションに使ったりする多目的なものらしくステージは1メートルほどせり上がりその上に立つと全体がよく見える。屋台を出し、あちこちでピクニックシートなどを敷いてくつろぎ、談笑する馬鹿野郎どもの姿が。

モモコはすっかりお祭りムードで盛り上がっている人々から、ホクガンの隣で腕を組み目を瞑って立つガツクと腰に手を当て、ツンとするテンレイを眺めた。

冷たく聞こえるかもしれないがこんなにテンレイが自分を好いてくれているとは思っていなかった。

素直に嬉しく感謝する気持ちはあるが、ガツクと心が通じ合ってき

たモモコはガツクとも離れがたい。

ホクガンに問われるまでもなく、片方を選ぶなんてできない。

どっちも選べないならせめて（ものすごくイヤな予感がする）出される問題に真摯に答えて、勝った方と帰ろうと既に覚悟を決めていた。

モモコは再度ため息をついて3人からステージ右横に腕を組んで立つ、ダイス・ラズを見た。

ダイスもガツクやホクガンに負けない大男だが、2人と違って大人の余裕が感じられる。ガツクは威圧感というか厳しさというか決して恐怖政治ではないのにそれで従えているかのような……感じ。

ホクガンはまったくの子供にしか見えない。が、皆にイジられていてもいつの間にか自分のもつとも得意とする状況を作り出す喰えない男って感じた。

あと、モテそうだな。モモコは「ダイスさ〜ん！」と他の部の女性職員だろう方達に呼ばれ、笑顔で手を振るダイスを見て思った。キヤー！と黄色い声があちこちで上がる。

（例えるならワイルド系イケメンか。ガツクさんもダイスさんと同じぐらいイケメンだと思うんだけどワイルドをマツハで通り越して恐怖の源まで行っちゃった感じだしなあ。あと認めるのはしゃくだけどホクガンもかっこいいんではあるんだよね。ゴージャスとか。まああのオチャラけた性格が台無しにしてるんだけどね。）

そこまで思った時、ダイスがモモコの方を向き、ニヤッと笑って側まで来た。

モモコが？となると、

「猫よ、お前 明るい所で見ると本当にピンクじゃなア。フワフワしちよるしわたあめみたいじゃ。ところでさっきワシを観察しとったじゃろ。なんじゃ、ガツクよりワシの方がええ男なのに気づいたんか？なんならワシが飼ってもええんじゃぞ？」

ガツクよりはマシな扱いができると思うがの。と笑い屈んでモモコの首筋を優しくくすぐる。モモコは冗談じゃない、これ以上ややこしくなつてたまるかと思うが、ダイスの手つきに猫の部分が反応する。なので気持ちよく目を細めたところ、

「ダイス……何をしている。」

鬼が立っていた。

ダイスの真後ろに立って射抜くように見下ろすガツクはもはや鬼にしか見えん。

ヒーツ！モモコは久しぶりにガツクにビビった。

ダイスはビクウ！となったが、くさつても（ちよつと待たんかい！）さすが大将の一人。すつと立ち上がり、ガツクと視線を同じにする  
と、

「ちよつと世間話をしとっただけじゃア。いちいち目くじら立てんでもええじゃろ？男の焼きもちは見苦しいぞお？」

軽く流すような感じであしらった。モモコがおおーッ！と感心すると、ガツクは全っ然薄らがない殺意に満ちた目で、

「ほう？」ガツクよりワシの方がええ男なのに気づいたんか？なん

ならワシが飼ってもええんじゃぞ？”と話しているお前の声が聞こえたんだがな。ついでに俺より扱いがマシともな。・・・そうか、敵は一人ではなかったか。こんな所に伏兵が潜んでいたとは・・・俺も迂闊になつたもんだな？”

淡々と話し、最後には死刑宣告を出すかのような声音に大人の余裕があつたはずのダイスもマジで慌てた。

「待て！さっきのは猫をからかっただけじゃろ！お前から本気で取ろうなんて思つちよらん！だ、大体ワシにはもうシヨウがおるんじや！犬と仲が悪い猫を飼うわけないじゃろが！」

「シヨウとモモコは仲が良いぞ。」

「えっ！？」

本当か　とダイスが振り向けばモモコはシヨウさんの飼い主さんだったのかあとのんきに思いながら頷いた。

「なるほどな、シヨウを使って奪い去る計画だったか。そんなに早い段階から・・・さすが霧藤、だな？」

「ち、違う・・・。」

すっかり青ざめ、小さな声でしか反論しないダイスを置き去りにガツクはモモコの前へとしゃがみこみ、

「モモコ、ダイスは顔はいいが、あちこちの女に見境なく秋波を送る、ホクガンと双壁をなす最低な男だ。気を許すんじゃない。」

親友のはずのダイスをこき下ろす。

ひ、ひでえ　と呟くダイスの声が聞こえるような気がする。

(ガツクさん、私猫なんだよ？何言ってるの？もしかして緊張してるのかな。大丈夫かな。)

「みゃお！（すっかりして！ガツクさん！）

「そうか、わかったか。ならいい。」

相変わらず噛み合わない一人と一匹の会話？は、

「おーい！もう始めるぞ！なにやってんだ？」

もう一人の最低男ホクガンの呼び掛ける声で終わった。

「ただの世間話だ。」

ガツクは何事もなかったかのように戻り、ガツクの抹殺リストの上位に上がったダイスは覚束ない足取りで先ほどの位置まで戻った。

「お別れでも言ってたのかしら？」

フフンと微笑むテンレイに、

「ぬかせ。」

と返してガツクはいつの間にか用意されてあったテーブル付きの椅子に座った。

向かい合う形で座った2人の間にホクガンが立ち、

「さあて野郎ども！準備はいいかあ！ルールは簡単！出題されるのは全部で9問！5ポイントゲットで猫をお持ち帰りだ！それでは早速最初の問題はこれだっ！」

派手な仕草でスクリーンを指差した。

「ジェスチャーキヤット!!!」

センスの欠片もない……命名者はホクガンであろう。  
とりあえず嫌な事にはよく気がつくモモコは青ざめた。

(わ、私にさせる気だ！ジェスチャーを！)

モモコが茫然とホクガンを見ると奴はウインク返してきた。モモコは我に返り電光石火の早さで避けた。

ホクガンはそれにカカカと笑うと、

「俺が猫に仕込んだ芸を見て、それがなんなのか当ててみる！答えは机の上にあるボードに書きやがれ！」

ガツクとテンレイがいつ仕込んだみたいなの顔付きになったのでホクガンは小声で

「猫が言葉や文字を理解するなんてあんまり知られたくないだろ。うるさくなるだけじゃねえか。」

了解。2人は納得した。

ホクガンはモモコに勢いよく振り返ると、2人には見えない様に紙切れを見せた。そこには意外と達筆な手で、

「烏賊」

と書いてある。

要するに海にいるイカの真似をしるということらしいが、なぜイカなのだろう。素朴にモモコは思ったがホクガンの深淵など浅すぎて理解不能だと持ち直し、嫌だと首を振ろうとして”問題には真摯に答える”と決めた事を思い出した。こんな奴の・・・と1分ほど葛藤し、モモコは遂に頷く。

ホクガンはにんまり笑うと横にどき、

「第一問！」

と声を張り上げた。

モモコはガツクとテンレイはもとより総所中の職員達に注目されながらイカのモノマネをした。

前足をなるべく三角にし、あとは降ろしてひらひらと触手に見えるように動かす。

.....。

モモコは全身から見えない汗がどつと出るのを感じた。

羞恥心というか自尊心が口から天に昇っていきそうだと、激しく動く何かが目の端に映り横を向くと、ホクガンが床を転げ回りながら爆笑しているではないか。

オ・ノ・レ！あんたがやれっていったんでしょーが！なに1番お前がウケてんだよ！覚えてろよ！

モモコはホクガンを呪い殺す事に決めた。



その時大歓声が沸き起こり、モモコを心底ビツクリさせ、飛び上がらせた。

皆、くちぐちにカワイイー！！とかすごいなさすが国主とかどうめく声も聞こえる。

この国大丈夫か？モモコは真剣にドミニオンの未来を案じた。

そんなモモコの心中とは裏腹にガツクとテンレイはモモコの愛らしい？動きに茫然としたのち、ハツと我に返り、用意されたボードに答えを書き、合図を送った。

それに気がついたホクガンは涙を拭き、笑いにまだ若干震える声で読み上げた。

「ガツクは”タコ”！テンレイは”イカ”！両者出揃った！さて答えはこれだ！」

ホクガンはスクリーンを指差した。

ジャン！という効果音とともに答えが映し出される。

「答えは“烏賊”だあ！テンレイまずは1ポイントゲット！」

再び歓声が起きる。テンレイは得意げにガツクを見やるがガツクは泰然とそれを受け止めた。

が、心の中では

（モモコ可愛らしかったな・・・頼めばもう一度やってくれるだろうか。）

などと勝負とは関係ない事を考えていた。

2 - 1 5 始まりました(後書き)

なんかイロイロでてますねえ。

秋波・・・異性の関心を引くつとして色目を使う事

その後モモコは「ジエスチャーキヤット!!!」をさらに、

「おばけ」

「海水浴」

「野球」

3回こなしした。その度にふき出すホクガンに呪いを込めた念をモモコは送り続け、4問目が終わった時点でガツク：2ポイント テンレイ：2ポイントの同点であった。

4回の無茶な労働をこなし、明日は絶対筋肉痛!と(猫に筋肉痛があるかどうかは知らんが)へばるモモコに次ぎの試練が課される。ホクガンは笑いすぎて力の入らない四肢を動かす

「さあ!盛り上がって来たかあ!この現金野郎ども!第5問はこれだあ!!!」

バン!スクリーンにキラキラと文字が点滅する。そこには、

「ジャ〜ストでウエストサイズ!!!ビンゴはお前だっ!!!」

(.....)

モモコは今なら無の境地にイける気がする。マジできんじゃないか?悟りも開けるかもしれん!

しかし、あと1歩で現実逃避に成功できそうなモモコの耳に、無情

にも憎きホクガンの問題の趣旨を説明する声が聞こえ、モモコを引き戻した。

「猫のウエストが何センチあるか当ててみる！一番近い数字を叩き出した奴が1ポイントゲットだぜ！」

なんでウエスト？体長とかだろ普通！絶っつ対いやがらせだ！私が太っているのを気にしてるの知ってるなあ〜！！

もちろんホクガンは知っている。が、嫌がらせではなくただ体長だとありきたりすぎてつまらないからというのが理由だ。それだけ。身もだえするモモコにテンレイは、

「コモモ、いい子だから動かないで頂戴。私の勝利のために。」

優しく言い聞かせモモコを落ち着かせた。が、

「そつだぞお前。動いちゃわかりずらくなるじゃねえか。」

モモコの斜め後ろに立つホクガンが台無しにする。

(あんたのせいなんだよ！！ちつくしよー！！)

モモコは猫の特性をいかしぐりんと首を廻してホクガンを睨みつけた。

キモチワルツと呟くホクガンに殺意のゲージは今にも振り切れそう

だ。  
こんな和やかな？場面だがガツクが静かだ。モモコがガツクに視線をやるとすでに書き終えたのかペンも持たず腕を組んで目を閉じている。

（もう書きちゃったのかな？こういうのはテンレイさんの方が得意  
そうな感じだけど。）

テンレイが悩みながらも書き終えたのをホクガンは確認し、ガツク  
にも声を掛ける。

「おい、もういいか。」

「ああ。」

「ほんとかよ。全然目測してなかっただろ？」

「いいからやれ。」

へいへい。ホクガンはマイクを握り直し、

「二人ともビンゴは目の前か！同時にどーん！！」

はっちゃけすぎだろ。モモコは呆れたが、誰もつつこまないあたり、  
イベント時はコウなのかもしれない。事実そうだったりする。

ガツクとテンレイはボードを前に出した。

ガツク           ：37センチ

テンレイ       ：33センチ

微妙……。猫の適正なウエストサイズなど知らないのでモモコは  
うーんとなる。

「よーし！じゃあ猫にジャッジしてもらおうかあ！実際測ってみよう  
ぜ！」

なにい！！モモコは焦るが、「ジャ〜ストでウエストサイズ」なの  
だから当然だろう。

そしてフフフ・・・と不気味な顔と声で笑い、メジャーを手にホクガンが近づいてくる。

モモコは威嚇した。

今まで威嚇などした事なかったが、乙女の危機？に猫の部分を根こそぎ総動員して対抗する。

「ばか解答者にさせるわけにはいかないだろ！仕方ないだろ〜がぁ、俺がやらにゃ。」

仕方ないと言う割にはむっっちゃ笑顔なんだが。

「ふーうおおおー！！ぎゃーおー！！（来るならこおおい！！猫になって初をお前にくれてやるう！！）」

バリ！バリバリ！バリバリ！

ホクガンはモモコに散々引っ掻かれながらも、正確にウエストを測り終え、デュスカにメモを渡した。（デュスカは半目になって呆れた）

「いででで・・・あんの野郎・・・。さて！気を取り直して正解は・・・！！」

大勢が見守る中、モモコのウエストサイズがスクリーンにでかでかと映し出された。

（私は猫。私は猫。私は猫だぁかぁらぁ平気だもんねー！！・・・うっつうっつうっつうっつ・・・）

必死に自分に暗示をかけるも見事に失敗。

「37センチ!!」

オオオーツ!!!

見事ビンゴしたガツクに大歓声が沸き起こった。

「すげえぞガツク!!!心眼に目覚めたか!!!」

ホクガンがマジ!?という顔をしてガツクを見ればガツクはフツと渋く笑い、

「この前、モモコが寝てる時いろいろ測った。」

得意げに言い放った。

一瞬、時が止まったかのように皆が動きを止め、いち早く正気に戻ったホクガンが声を張り上げる。

「おおっと!!!思わぬ変態発言が出たあ!.....」

「ところで前半終了です!!!」

カインが決死の覚悟でホクガンを突き飛ばしてマイクを奪い、強制的に前半終了を告げた。

リコとリンドウがハツと我に返り、元の予定にはなかった前半のため、急に即席の幕を作り引いた。

「なにすんだよ。俺の命と同じくらい大事なmyマイクを奪いやがって。」

突き飛ばされた体制のまま文句を言うホクガン。突き飛ばした事はいいのか。

「うるさいですよ。これ以上ガツクさんの印象を落としめれば軍部全体でクーデターです。」

カインはホクガンに顔を間近に寄せてガツク譲りの声音で不穩を囁く。

そんな2人とは別にこちらでは

「いろいろってどこじゃア、ガツク。」

笑いながらダイスが言えば、言わすかあと

「みゃーお！みゃーお！（わー！わー！聞くなアア！！！！）」  
モモコが邪魔をし、

「コモモ・・・無断で女の子のサイズなんか測る変態にひと時とはいえ飼われていたなんて・・・なんて不憫！」

テンレイがモモコを抱き締める。

「変態とは無礼な奴だな。あれはモモコの成長記録で・・・」  
「準備整えましたア！！！」



カオス化寸前でデュスカが叫び事態収拾を行った。

モモコがステージを見回すと白い布を張った5メートルほどの衝立があり、その後ろには巨大なライトが設置されていた。ダイスはテンレイからモモコを受け取り、（ガツクから殺意が氷柱のようにダイスの後頭部に刺さる）ガツクを見ない様にしてステージの奥へと移動する。衝立の前に黒い布が引かれ、ガツクとテンレイ、ホクガンを残してステージ半分を分断した。

「何の真似だ。」

ガツクがホクガンを見やると、ホクガンは服をはたきながら起き上り、

「6問目の仕掛けに決まってるじゃねえか。んな事より始めるから2人とも席に着け。」

カインからマイクを受け取り、幕をどかせと合図を送った。

「待たせたな暇人ども！後半開始だあ！第6問目はこ・れ！」

2人が着席し、即席の幕が引かれるとホクガンは両手の人指し指を立ててスクリーンを指した。

「本物はど〜れだシリーズ シルエットでポン」

なぜこうも脱力系なネーミングを思いつくのだろうか。そのイベントにかける熱意を10分の1でもいいから政務に向けて欲しいもの

だ……

強制的に裏方として集められた5人の補佐官たちは（デュスカ、レキオス、リンドウ、カイン、リコ）心底思った。

「モモコ、えらいことになっちよるみたいじゃなア。」

「シヨウさん！」

舞台裏ではモモコとダイスの側にシヨウがゆったり近づきながら、声をかける。

「お前に謝らんなあ。わしが驚かしたせいなんじゃろう？本当はテンレイさんとここで飼われちよったんじゃない？」

「うん……。でもガツクさんに拾われた事も全然良かったんだよ？ガツクさんに会えて良かった。だから気にしないで。それよりダイスさんに飼われてるんだね。そう言えば口調も一緒だ。」

今気づいたと、えへへと笑うモモコにその主と親友が何か企んでいるとは言えない。決して悪い事にはならないとは思うが……。シヨウはそれでも嫌な感じがするのを頭を軽く振って振り切り、

「次のクイズにわしも参加するんじゃない。もう並ばんといけんぞ。」

ダイスはシヨウとモモコが仲良く並んで所定の位置につくの信じられないように見ていたが、やがて頭を振って幕の向こうに行き、ホクガンに合図を送った。ホクガンは軽く頷き、

「準備もできたみたいだぜ シルエットオープン！」

黒い幕がひかれ衝立にライトが当てられると何かの動物のシルエットが5体浮かび上がった。

「愛しのじゃんこはどれだア！番号で答えてみる！」

シルエットは1体を残して（シヨウ）みんな似ている。それらがソワソワ動き、どれもがモモコに見える。ガツクとテンレイは真剣にシルエット達を見、やがてボードに番号を書いた。

「ガツクは2番！テンレイは5番！答えはここだ！」

衝立が横にずれ、5体の姿が露わになった。

モモコは5番目にいた。

テンレイ、小さくガッツポーズ。

「テンレイ盛り返したア！！1ポイントゲット！」

歓声のうち次々と7問、8問と続けざまに行われる。

7問目は

「本物はどれだシリーズ2！地毛はどれだ！」

モモコの最大の特徴であるピンクの毛を使い、人工のやら、天然ものやらを混ぜて並べ、モモコの毛を選ばせた。

「またまたテンレイ大正解！1ポイントゲットだ！」

モモコは思わず切ない目でガツクを見る。

ガツクは心配するなと言うふうぎょたくに小さく首を振った。

8問目はモモコの肉球ぎょたくの魚拓ならぬ肉球拓で争う、

「本物はどれだシリーズ3！飽きたぞオなんて言葉はナツシング！これでシリーズ最後のふるふる肉球拓で勝利を呼び込め！」  
長い。

これにはガツクが正解し、モモコをほっとさせた。

そのガツクとモモコをホクガン、ダイスが密かに観察していることにも気付かず……。

「さあさあさあ！！なんとここでガツクが追いついて来たぞオ！！これでガツク4ポイント！テンレイ4ポイントの同点だア！！いよいよ次が泣いても笑ってもラストクエスチョン！最後のお題はこれだアア！！！」

サアアアア・・・

ガツクは執務室の窓から雨が降るのを眺めた。

(モモコは雨が嫌いだったな・・・。塞ぎこんでなければいいが・・・)

ガツクが仕事の手を止めてぼんやりするのをカインは心配そうに見やった。

「ガツクさん、この新たな訓練施設の概要ですが。」

カインが書類を差し出すと、

「後で目を通す。そこに置いてくれ。」

窓からデスクの書類に意識を戻したガツクはカインの方を見ずにペンを指し示した。

カインはため息をこらえてもう三つにもなる書類の塔に新たな書類を重ねた。

カインはガツクに代わるように窓を見る。どんよりした雲と細かな雨はあの日を思い起こさせた。

薄暗い玄関でガツクを待っていた小さなモモコの姿を。

あのクイズ対決から3週間が経っていた。

「さあさあさあ！！なんとここでガツクが追いついて来たぞオ！！これでガツク4ポイント！テンレイ4ポイントの同点だア！！いよいよ次が泣いても笑ってもラストクエスチョン！最後のお題はこれだアア！！！！」

ホクガンが片手でスクリーンを指すと、ひと際派手な色彩で文字が点滅した。

「毎日の愛の積み重ね？知ってて当然！大好物はアレよね？」

「猫の一番好きな食いモン当ててみる！猫が選んだ方が真の飼い主だ！」

ホクガンの声にもモモコは青ざめた。

テンレイは知っている。前にモモコにせがまれ与えた事があるからだ。

ガツクは知らない。モモコはチョコレートが好きな事を。

実はモモコ、自分が決めたダイエットの掟をできるものは頑なに守っていたのだ。できるだけ運動し、甘いモノはご飯のみ！を。ガツクは甘いモノは好まない、まして猫がチョコレートを食べるなど想像だにしない。ガツクの周囲に甘いモノがないのを幸いに我慢できていたのだ。お陰でウェストまわりは減りはしなかったが、増えて

もいなかった。

モモコの頭が真っ白になっている間にも事態は着々と進行する。既に2人はそれぞれの補佐官に自分がこれ！といったモノを告げ、すぐさま器に入ったモノが用意された。

後はモモコが選ぶのみ。

「おい、大丈夫か？しつかりしろ。」

モモコが彫像のように微動だにしないしているとホクガンが小声で囁く。

モモコがホクガンを見上げるとこの男にしては優しげな声で

「つらいだろうが頑張れ、必ず上手く行くから。あいつらを信じる。」

謎の言葉を残し、そっとモモコをソファから降ろした。

モモコは遙か遠くにあるかのような器に目を向けた。震える息を吐き、中々進まない足を無理矢理踏み出す。

一步一步モモコが器に近づくのをダイスはたまらない気持で眺めた。もうこの結末はダイスにはわかっていてる。

だがわかってはいてもそれで平静になれるかと言われれば決してそうではない。

むしろその逆だ。

ダイスは以前、仕事中のガツクに

「お前は毎日毎日、仕事仕事でよう飽きんのう。他に楽しみないん

か。」

と聞いた事がある。その時奴に、

「今しているだろうが。」

と真顔で返され、ア然とした思い出があった。

（やっとアイツが見つけた抛り所なんじゃ。それを……。テンレイにもなア……。荒療治すぎやせんか、ホクガンよ。）

ダイスはモモコからホクガンへと視線を移した。

ホクガンはじつとモモコを見ている。その目は真実を見極めようとするかの様に鋭い。

モモコは長かったのか短かったのかわからないくらいの感覚で器にたどり着くと、中身を覗いた。

テンレイの器には案の定チヨコレートが一粒入っている。

ガツクの方は今となつては懐かしささえ感じる、レインボーフィッシュの煮魚がのっていた。

ガツクさんの所で初めて食べたのがこれだったっけ。

その前の生魚状態にはツツコミもいれた。

懐かしいなあ。

モモコは切なくて切なくて涙が出ないのが不思議なくらいだ。

モモコはガツクを見上げた。



これもね、すごくおいしかったんだよ、ガツクさん。でもね、でも・でも・・・やっぱり嘘はだめだよ。2人とも真剣に頑張ってくれたんだ。私も・・・・。

ガツクが目を少し見開く。

モモコはぎゅっと目を瞑るとチョコレートをぱくつと食べた。

それは甘いはずだ。なのにモモコには今まで食べたどんなチョコより苦い味がした。

し・んとした会場が次の瞬間、怒涛のような歓声に包みこまれる。テンレイは飛び上がって喜んだ。すぐにモモコに駆け寄り、そつと抱き上げると頬ずりした。

「ありがとう、コモモ。やっと帰って来てくれたわね。」  
テンレイが嬉しそうにほほ笑む。モモコは、

「にゃーお。（心配かけてごめんね、テンレイさん）」  
小さく鳴いて返した。

カインは信じられない思いでテンレイとモモコを見た。

（なぜ・・・あんなにガツクさんに懐いていたのに。やはり最初の飼い主だからか？しかし・・ハッ！ガツクさん！）

カインが急いでガツクを見るとガツクは席に着いたまま、手を組んでテンレイとモモコを見ていた。

それは普段のガツクとさほど変わらない様に見える。だが3年間補佐官として間近で接してきたカインや親友であるダイス、ホクガンにはそうとう無理をして平静を装っているのがわかった。

モモコにもわかったのだろう。たまらないようにテンレイの腕からガツクの席に飛び乗ると、ガツクの腕に前足を置いて、

「みゅーう。(ガツクさん)」

と鳴いた。

ガツクは力の入っていた手に一層力を加えると、

「行け。」

と一言囁くように言った。

「みゅー……。(ガツクさん……)」

「行け!!」

モモコは初めて聞いた ガツクの怒鳴り声にビクついたが、ガツクの顔を見上げて、

「(そんな顔して怒られてもちっとも怖くなんかないよ。ガツクさん。)

ガツクの腕によじ登る。

何を。

ガツクと周りの者が目を見開いてモモコの行動を注視するなか、

モモコはガツクの頬にそっとキスをした。

ガツクの目が限界まで見開かれる。

（ありがとう ガツクさん。たぶんもう会えないと思うけど、たくさん感謝に代えて。）

テンレイは今まで以上にモモコに気をつけるようになるだろう。

そして軍部とは仲が悪いうえ、奥から軍部は遠い。

まして勝負に負けたガツクがモモコに会いに来るとは到底考えられない。

短い間ではあったがモモコは正確にガツクのことをわかっていた。

だが しかし、

（あゝあ。やってくれたな 猫よ。いや今はコモモか。トドメ刺しちゃって、まあ。これでお前は逃げられなくなったぜえ？）

ホクガンは片眉を上げてため息を付いた。

（完璧じゃな。ワシらでもそこまでは予想してなかった。今から頭が痛いわい。）

ダイスは腕を組んで天を仰いだ。

モモコが知らなくて、ホクガンとダイスが知っている事。

それはもう少し先の事件

爆発する。

世にも珍しい固まったままのガツクを置いて、ホクガンはテンレイを称え、祭りは幕を閉じた。

あれからガツクは自宅に帰っていない。

執務室の隣、応接室兼説教部屋にわずかな私物を持ち込み、寝泊まりしているのだ。

そしてモモコの事を忘れるように仕事漬けの毎日を送っていた。

三日 四日の徹夜は当たり前、手当たり次第に仕事を引き受け、限界まで働くと死んだようにソファに寝る。これの繰り返しであった。カインはたまらずガツクに意見した。

「ガツクさん、これではいつか倒れますよ？それでなくても任務中ミスをするかもしれない。頼みますから少しだけ休んで下さい。三日、いえ1日でもいいですから。」

「馬鹿を言うな。この件は急ぎなんだぞ、俺以外に誰がやるというのだ。」

ガツクさんが急がせてるんです！とはカインは言わない。代わりに

「モモコちゃんの事ですが……。」

思い切って切り出した。途端ガツクのペンを走らせる音がやみ、急速に執務室の温度が下がる。

「アレはもうテンレイのモノだ。モモコではない。」

底冷えする声音でガツクが遮る。

「しかし・・・！」

「もうアレと俺は関係ない。もう2度とアレの名を俺の前で出すな。」

「ガツクさん！」

「カイン、これは命令だ。」

「・・・。。。。わかりました。」

カインの言いたい事はわかる。

俺の今の状態はひどいなんて物じゃないからな。

だがこうして自分を仕事に縛りつけていないと無理矢理奪いに行きかねん。

ガツクはあの時モモコがそつと触れた頬を指で押さえた。

なぜ こんなにお前が恋しいんだろうな。ただの猫だ そうだろおう？

モモコ・・・ お前が居た部屋にいまだに入れんのだ。

今の俺をお前が見たらなんて言うだろうな。鼻に皺でも寄せて呆れるか？

モモコ・・・

孤独を知らなかった男にそれを教えてくれた小さな生き物。そのピンクの塊はここにはいない。



### 3 - 2 心配されています

「そろそろ誰かが動き出すだろ。」

ホクガンはめつたに見せない真剣な面持ちでダイスを見た。

モモコがテンレイのもとに戻ってからホクガンの執務室で2人はこの日初めて、2人と一匹について話し合った。

「そうじゃといいがの。いくらガツクの体力と精神力が限界知らずでも今回はちとヤバイ。」

ダイスは組んでいた足を下ろすと肘かけに片肘を置き、指で顎をなぞった。

ホクガンはため息をついて椅子に深く寄りかかった。

「俺が始めた事だけだよ、コモモの方も見てらんねえ。あのまーるいモコモコが・・・ハア。」

「テンレイはどうしちよる。」

「あいつもつらそうだぜ？薄々感じるモノがあるんだろ。頑固な性分が邪魔して認めたくないようだがな。」

「周りから埋めるか。ワシやお前がゆうつも逆効果にしかならんからもう。」

「まあな。シヨウはどうしてる、コモモと仲いいんだろ？」

「コモモにしょっちゅう会いに行っちゃよる。シヨウは賢い奴じゃ、コモモを慰めてるのかもしれないの。」

「それもあんま効果なさそうだけどな。でもあいつの言葉がわからん俺らよりはマシか。」

ダイスは深く息をついた。

「そんなにひどいんか。」

「なんとか明るく振舞っているぜ？特にテンレイの前ではな。だがなあ・・・聡い奴は気がつくだろ。」

「ホクガン。」

「我慢しろダイス。ここでネタばらししても何にもならねえ。最初に言っただろ。あいつらを信じる。」

「わかっちゃうわ。じゃがそう言うお前も・・・。」

ダイスはうつすらクマのできたホクガンの顔色を見やる。

「ふん。お前も人の事言えるのかよ？リコに心配かけてんじゃねえのか？聞かれたぞ？」

「奇遇だのお。ワシもデユスカとレキオスから国主が変なんですとこの前聞かれたんじゃが。」

2人はじと目で互いを見つめあった。

暗い部屋でおっさん2人が見つめ合うという気持ち悪い場面になったのに気がつくとうめき声を上げてすぐ逸らしたが。

「ダメージ半端ねえ。」

「こっちのセリフじゃ！ボケェ!!！」

とにかく！2人は気を取り直し、今は周りが動いてもらう事に期待をかける事にする。

「2、3日中に動きがなければワシらが動かんといけんじゃろうな。」



「  
「そうなるな。」

だが2人は確信している。  
必ず誰かが動く。

テンレイはもとより、ガツクは傍からは見えないがあれで結構部下達から慕われているのだ。

総所内の制服を製作する部署で働くジーン・オーレンはこのところ胸を痛めていた。

彼女の憧れであるテンレイ・ラウンドの元に先頃可愛がっていた猫が帰って来たのだが、どうも様子がおかしい。ジーンはモモコの服も製作している関係でよくデザイナーと共にテンレイのもとに赴くのだが、その際服をモモコの体に着せたりしてサイズを直す事もある。が、その寸法が小さくなって来ている。

少しづつではあるが、確実にモモコがやせてきているのだ。

最初ジーンはあの恐ろしいガツク大将に飼われていた事によるショックが今頃になって・・・と思ったのだが、1週間、2週間と経つにつれ、どうもそうではないようだと思ひ直した。同僚たちにも気づいている者がいるらしく、ジーンは時折心配そうにモモコとテンレイを見ているのを何人が目撃している。3週間が過ぎる頃にはもしかしてガツク大将が恋しいのではないのかと思ひ始めていた。

「あの一！」

掛けられた強い声にもの思いから覚めたジーンはハツとした。

今日、ジーンは受付の当番でカウンターに座り まさか・・・いやでも・・・と唸っていたので、何回か呼ばれているのに気付かなかつたらしい。

ジーンが顔を上げると、軍部の幹部クラスを示す、黒いコートを着た若い将校がこちらを見下ろしていた。

若いといってもジーンより歳は上<sup>うえ</sup>そうだ。黒い髪に濃い緑の目が印象的である。

直前までガツクとモモコの事を考えていたジーンは息を飲んだ。知らず声もか細くなる。

「な、なんででしょう?」

男は強く声をかけすぎたかと思いい今度はなるべく穏やかに聞こえるようにゆっくり話す。怯えさせてはいけない。なんとか繋ぎを持ちたいのだ。

「あ・・・実は折り言って話したい事があるんです。その・・・そちらにいる猫のことで。」

固まるジーンにせっぱつまった様子で話す男の名はダイナン・ギャツク。

ガツクとモモコの究極のミスマッチを目撃し、試練?を乗り越えたうちの一人であった。

ホクガンとダイスが話し合った翌日のことである。

ジーンが眉を顰める。

ダイナンは焦った。

「いやあの！決して文句とかそういうものではないんだ！そちらの猫の様子を聞きたいだけであって！」

「声が大きいです！静かに！」

ジーンは慌ててダイナンを遮った。幸い今は昼休みで製作部は人がいないがいつ誰がくるかはわからない。

「す、すまない。」

トーンを落とす、大きな体を縮めるダイナンを見て、胸を上る雷と桜を見た。

（雷桜隊・・・でもこの人なら私の話を聞いてくれるかも。）

テンレイを裏切るようで後ろめたいが、このままでは絶対良くない結末になりそうなのだ。

「わかりました。」

ジーンの承諾の声を信じられない思いでダイナンは聞き、勢い込もうとしたが、

「でももうお昼休みも終わって皆が帰ってきます。皆が皆、聞く耳を持つ者ばかりではないので・・・勤務が終わってからでもいいのでしたら・・・。」

「そ、それでいい！あなたに合わせてます！何時頃終わる予定ですか？」

「ちょっと残業がありました、9時頃にならないと終わりそうにありません。」

「了解しました。そうだな・・・オーシャンズ通りの「ダウンジ」

という店があるんですが知ってますか？」

ジーンは少し考え首を振った。

「あまり出歩かないので・・・。」

「じゃあ、総所の門前で待ってます。なるべく人目につきたくない・・・ですよね？」

「ええ・・・あなたも？」

ダイナンは苦笑して頷いた。

「俺がモモコ・・・いやコモモちゃんの事を嗅ぎまわってるなんてあの人に知れたら殺されるでしょうね。」

ジーンはそれを聞いて今度は心配そうに眉を顰めた。

ダイナンは微笑んで暇いとを告げる。

「では、9時頃門前で。」

ジーンはダイナンが扉をスルリと抜け出て行くのをほっとして見送った。

軍部にも自分と同じように心を痛める者がいる事を知ったジーンはこれから何をすればいいのか考え始めた・・・。

ふと時計を見たジーンは約束の時間まで10分を切っているのを見て慌てた。

デートお？とからかう同僚達に苦笑いしてそうだったらどんなにい

いかと思いながら門に向かう。  
門前の通りは暗く、ジーンがキョロキョロ見渡すと暗がりの中から  
体半分現れたダイナンが呼びかけた。

「自己紹介がまだでしたね。」

ジーンはびくつとしたが昼間の声に力を抜いた。

「俺はダイナン・ギャッツといいます。あなたは？」

「ジーン・オーレンといいます。ギャッツさん。」

ダイナンは首を振って、

「ダイナンで結構です。俺もジーンと呼んでいいですか？あと敬語  
もやめませんか。腹を割って話したい。」

「わかったわ ダイナン。」

「では、店に案内するよ。小さくて静かなバーだが意外とデザート  
が旨いんだ。」

2人は会話が途切れがちながらも店に着き、それぞれの飲み物を注  
文してから本題に入った。

「早速だが、コモモちゃんの様子はどう？」

真剣な面持ちのダイナンに見つめられ、ジーンは今のコモコの状態  
を思い出し、うなだれる。

「はつきり言って良くないわ。一見、前と変わらない様に見える。  
でも……。」

「見えるけど？」

ダイナンが先を促す。

「……私はコモモちゃんの服を作っているんだけど……」

「えっ……猫に服？猫に服なんか着せるのか？」

驚いたように遮ったダイナンにジーンはきょとんとした。

「ええ。知らないの？この頃ではペットに服を着せるのは普通よ？  
コモモちゃんもすごく可愛いの。」

につこり笑うジーンに未知の世界を垣間見てダイナンはマジ？と思  
ったが話の修正をした。

「そ、そうか。それで？」

「コモモちゃんの服を作っているんだけど、だんだん寸法が小さく  
なってきたの。」

「つまり、痩せてきているという解釈でいいか？」

「ええ。」

ダイナンの顔が険しくなった。

「テンレイさんが悪いわけではないのよ。」

慌ててジーンはかばうが、ダイナンは笑って、

「わかってるよ。テンレイさんはコモモちゃんにとっても良くしてく  
れるだろうなという事は。前のバトルでしっかり見届けさせてもら  
った。」

ジーンはホッとしてカクテルを一口飲んだ。

「そちらの方もね。正直、ガツク大将があんなクイズに出るわけないと思っていたからびっくりしたけど。言っただけは悪いけど全然コモモちゃんと似合わないから。大変だったんじゃない？その、周りが」

ダイナンは初めて目撃した時を思い出し深く頷いた。

「まあな。皆、必死で見ない振りしてたよ。最後らへんでは慣れたけどな。」

慣れるモノなの？ジーンは口元が引き攣った。

「で、そのガツク大将はどう？」

ダイナンは再び顔を険しくさせ、ため息をついた。

「はつきり言っただけ最悪な状態だ。ほとんど不眠不休でデスクワークや任務をこなしてる。ガツクさんの体力は化け物級だけど、なんていうか……不安定で見ていられないんだ。」

ジーンもつられるようにため息をこぼした。

「テンレイさんも。コモモちゃんを見ては隠れてため息をこぼしているわ。コモモちゃんは賢い子よ。テンレイさんの前や人が居る所では普通だけど、誰も見ていない所で頂垂れているのを見た事があるの。心配かけたくないのね。」

2人は深刻そうに互いを見つめ合った。

「どうにかならないか？コモモちゃんはガツクさんが恋しいんじゃないのかな？テンレイさんは俺達を嫌ってる。国主と大将2人もな。訴えても頑なになりそうだな。」

「あなた達が悪いんでしょ。いつも奥を馬鹿にするから。」

「う・・・でも俺達だけが悪いわけでもないだろ。そっちだって・・・あーやめよう。今はそれどころじゃない。」

「そうね ごめんなさい。これからの事だけ。」

こほんと咳払いをしてジーンは続けた。

「こっちこそ悪かった すまない。俺は軍部の皆に働きかけようと思ってるんだ。俺と同じように感じてる奴らもいるから。こっちがとれるアクションなんて限られてるんだが。」

「思ったんだけど、コモモちゃんを貸し出すって案はどうなの？飼いまが2人いるような感じよ。」

ふと思いついてジーンは提案してみた。が、ダイナンはあり得ないという風に首を振って、

「まず 無いな。ガツクさんは0か1かなんだ。丸ごと全部じゃなかったら、ひと欠片もいらぬタイプだよ。特にコモモちゃんの事に関しては共用なんて絶対ない。」

「それはすさまじいわね。わかったわ、私も奥の皆にそれとなく聞いてみる。とにかく情報から集めてみるわ。それと・・・テンレイさんにも持ちかけてみる。」

ダイナンは思いきるように言うジーンに少し慌てる。

「大丈夫か？時期尚早じゃないかな？」



おそらくテンレイを追い詰めてしまう事になるだろう。だが、わかってくれると思うのだ。

「テンレイさんはそんなに頑固でもないわよ？」  
「コモモちゃんの事を  
思えば考えてくれるはず。」

上司の軍部に対する厳しい姿勢を思い出し苦笑する。

2人はバーを出て、ジーンの家の前で握手をして共に大事な人達のためにやれる事はやってみようとちよつと大げさだなと言いながら誓いあつて別れた。

ホクガンとダイスが信じた通りに事は進んでいるはずだった。

ここまででは。

だが 少し遅かったようだ。

ダイナンとジーンが同盟を結んだ2日後、ジーン達にモモコの異変が伝えられた。

3 - 2 心配されています(後書き)

策を弄した2人ですが平気ではないんですよ。

付き合いが長いと廻りくどいやり方でもせんと進まんとホクガンは決断した次第なのです。

### 3 - 3 駄目でした

時間を少し逆戻ししてみよう。

モモコがテンレイの元に戻って来た翌日、変化は早くも訪れていた。

モモコはシェフが戻って来た記念にと腕によりをかけたご飯がうまく飲み込めない事に気がついた。

租借ができないという事ではなく、時間をかけて租借しても喉を通っていかないのだ。

この時は慣れた日常がまた変わったたからかなと思っただが、考えてみると、ガツクの所では1日目にして、虹魚の煮魚を腹一杯食べている。

(体は正直って事なのかな。でも……今さらどうしようもないじゃん。)

今さら……モモコは最後に見たガツクの顔を思い出す。

どこか痛そうな苦しそうな顔。その顔をさせたのは自分なのだ。

覚悟は決めたつもりだったが、心は誤魔化しきれなかったようだ。ガツクが恋しい。

あの魔王にしか見えない顔やでかすぎだろ何食ったらそんなに育つんだ なガタイ(高身長な者が多いドミニオンでもガツクは異常にでかい)、無意識だろくに漏れ出る威圧感、排除「始末する な極端な思考が。(マジで!?)

（それに・・・テンレイさんにも悪いよ。こんなに良くしてくれているのに本当はガツクさんの方がいいんですなんて言えないよ。まあ 伝わらないだろうけど。猫だし。でも態度に出ちゃうかもしくないなあなるべく前みたいにしないと。落ち込んでる所なんか見せちゃ駄目だ。がんばれがんばれ 自分。いつか忘れ・・・忘れられるかもしれないじゃん・・・。）

泣きたくてたまらないが、泣いても事態は好転なぞしない。ならば今耐えるしかないこの思いが薄れるまで・・・。

モモコは決意した。

それからは租借などしなくても無理矢理喉にご飯を押し込み、人気がある所では常に明るくひょうきんに振舞い、特にテンレイの前では甘えたり、着せ替えにも積極的に参加した。

しかし、

ふいに押し寄せる恐ろしいまでの寂寥感。たくさんの人に取り囲まれているのにたった一人であるかのような感覚。それらが徐々にモモコの体をむしばみ始める。

モモコは夜、寝ているテンレイを起こさない様に庭に面している窓に飛び乗り、ボーっと幻想的な庭を眺める事が多くなった。

この時だけだ 息がつけるのは。

そんなある夜、いつものように庭を見ていると、モモコの視界になにか黒いモノがぴょんぴょん跳ねているのが映った。それに目を凝らして初めてシヨウウが庭に来ていることに気がついた。

モモコは久しぶりに見たシヨウに嬉しくなったがすぐにガツクとの  
思い出が蘇り、悲しくなった。

シヨウは何か喋っている。モモコは耳をすませた。

「げ・・・ないの・・・モコ。だい・・・よう・・・か。」

途切れ途切れではあるがどうも大丈夫かと聞いているようだ。

テンレイがいるので下手に声が出せないモモコは頷いた。

（ほんとには大丈夫じゃないけど。）

シヨウは疑わしそくに皺を寄せていたが、（怖いよシヨウさん！素  
でモモコは思った）ため息をついて、

「なあ・・・コ。実・ガツクた・・・ようのこ・・・んじやが。」

シヨウがガツクの名を出した途端、モモコは窓から飛び降り、自分  
の寢床に戻ってできるだけ小さく体を丸めた。

聞きたくなかった。今のガツクがどうしているかなんて。とうに自  
分なんか忘れてしまえば自分が来る前となんら変わらない日常を過  
しているんじゃないか。自分はただの猫だ。ただの・・・。

あくる夜、シヨウが明け方まで待っても窓にモモコの姿はなかった。

「モモコ・・・自分の気持ちに気付いたんじゃない・・・余計に苦し  
めてしまったかもしれない。」

シヨウは毎日のようにテンレイの庭に通ったが、モモコは時折姿を  
見せるも、シヨウが現れるとすぐに寢床に逃げ帰ってしまい、シヨ

ウはモモコと話すぐころではなくなった。

モモコは自分の小さな体から溢れだすかのような苦しさを押さえ、普通通りに振舞う事に精一杯だったため、テンレイの気遣わしい眼差しもたまにやって来てモモコをからかっていくホクガンのクマにも気付かなかった。

戻って来て4週間も終わる頃、

それは来た。

この頃、すっかりダルくなった体を傍からは見えない様に起こし、モモコは朝食を用意して待っているテンレイの元に駆け寄り、元氣よく朝の挨拶をした。

「みやおう！（おはよう！テンレイさん！）」

「おはようモモ。昨日はよく眠れて？」

ぎく……実は眠れてない……モモコはバレタ！？と思うも、優しく額を撫でる指先にほっとして気持ち良く目を細めた。  
しばらくそうしていると、

「ねえ　　」モモコ……ううん。さあ、い飯よ。」

テンレイが話しかけて途中でやめる。

(どうしたんだろ？テンレイさん・・・ハッ！愚痴！？またホクガンがなんかやらかしたのかな。なんならまた引っ掻いてやるうかな。ホクガンなら躊躇せずできそうだしね！いややっぱ無理。・・・でも雷桜隊の事だったらどうしよう。・・・ガツクさんの事だったら・・・ヤダ。)

テンレイはモモコの事で悩んでいるのだが、自分の下手なカラ元気はバれてないと思っっているモモコ。

しかも自分の内に籠もるあまり、自分が戻ってから軍部が妙に大人しくなり、奥や他の部から不気味がられている事に気がついてなかった。

モモコはテンレイに雷桜隊に振れられない内にご飯で誤魔化そうといつもの様に猫のご飯にしては豪華な朝ご飯に近づいた。

だが、ご飯を見た途端、

(・・・あれ？なんか足がグラグラするぞ？それに・・・気持ち悪い。)

胸が詰まった様にギュツと絞られる感覚。

(がんばれ！テンレイさんが見てるぞオ！今！命を振り絞れえ！)

たかが朝食に命を掛けるモモコ。バカバカしいが本人は必死だ。

それに振り絞ったら死んでしまうのだがそんなツツコミを入れる余裕もモモコにはない。

モモコは決死の覚悟でいきなりご飯の半分を口に入れた。

「モモモ！？」

テンレイが慌てた声を上げるが、ご飯を完食するのに命を燃やすモモコには届かない。  
目を白黒させながらなんとか飲み込み、次に取りかかろうとした瞬間……

「ぎにゃうー」

モモコは自身の体が波打ったように感じ、次に激痛がきた。事故以来感じた事のない痛みだ。

動転して人を呼ぶテンレイを見、

(ああ……ごめんね……テンレイさん。けっきょく……だめだったな……)

そう思った直後、モモコは気を失った。

テンレイは手を祈るようにして口元に持っていき、立ちっぱなしで獣医がモモコを診察するのを眺めた。

獣医はまず、モモコの口を開け、吐瀉物を取り除いた。いろいろ検査した後、弱っていた体に点滴をつけてから、以前モモコが検診した際のカルテと比べ、重苦しくテンレイに告げた。



「ストレスですね。長期にわたる心労・・・といつては大げさですが。それに体が耐えきれなくなったのでしょう。・・・しかし無理に食べたのが喉に詰まったままだったら危なかった。テンレイさんの応急処置のお陰ですよ。」

獣医はテンレイを優しく見つめた。テンレイは力なく首を振ると、

「コモモがこんなになるまで我慢させたのは私のせいですわ・・・もっと早くに決断すればよかった。」

「・・・気付いていたんです。ガツクの元に帰りたがっていることは。」

テンレイは横たわるコモモを痛ましそうに見、細くなった体をそつと撫でる。

あの勝負をした時からわかってた。いや、ガツクの腕に抱かれているのを見たときからだろうか？

でも認めたくなかった・・・悔しかったのだ。コモモが奥より、軍部を選んだような気がして。

オモチャを取り上げられた子供のようね・・・まったく・・・自分に呆れるわ。

テンレイはやれやれというふう風に首を振って

「そんなにあの戦う事しか能のない男がいいの？到底あなたに相応しくないと思うけど。言っておくけどコモモ、これは私だけの意見じゃなくてよ？誰に聞いてもそう言っわ。ねえ？」

テンレイはわざといつもの厳しい口調で、獣医や看護師に同意を求めた。

獣医達は苦笑して頷く。

確かにガツクとモモコのミスマッチ具合は慣れるのに時間がかかりそうだと。

「あなたの気持は充分わかったわ コモモ。頑固な私をどうか許して。それに・・・こんな事もう終わりにしないとね。」

振っ切れたように笑うテンレイの目は、もう陰りなどないいつもの強い光があった。

「お兄様、少し時間はあつて？お話したい事があるの。」

ホクガンの執務室にアポイントも取らず突然入って来たテンレイの顔を見て、ホクガンは目を瞑って安堵した。

「ようやく決断したか。」

ホツとした様に椅子に深く座り、テンレイを見上げて言う。それを穏やかな笑みでテンレイは受け止めた。  
昼過ぎのことである。

ホクガンはデユスカとレキオスに、

「ガツクとダイスを呼んでくれ。あとこいつと話したい事があるから悪いが席を外してくれ。」

と言い、自身はテンレイをソファにエスコートした。

「しかしいきなりだな……コモモに何かあつたのか？」

鋭く問うホクガンに今度はテンレイが目を瞑って悔恨の面差しで頷いた。

「今朝……朝食を食べている最中に……倒れたの。」

「……容体は？」

「大丈夫よ。今は点滴を受けて眠っているわ。」

テンレイはあの瞬間を思い出し、やや青ざめた顔でホクガンを真っ直ぐ見詰めた。

「恐ろしかったわ。コモモが死んでしまうかと……。それも私が……。私が頑なになり過ぎたせいで。」

ホクガンは隣に座り、テンレイが幼い頃してやった様に、肩をぎゅっと抱いた。

「そうだな、ちょっと いやかなり頑固だったな。でもコモモは生きてる。すぐ元気になってあの小生意気な顔でちょこまかし始めるさ。」

ホクガンにツン！とするモモコの可愛い仕草を思い出し、テンレイにも笑みが戻る。

「ええ。獣医さんも安静にして十分な栄養をとれば問題はないとおっしゃってたわ。」

ホクガンは頷いて、テンレイの肩を慰めるように軽く叩くと、真向かいに座った。

「テンレイ。2人が来たら話したい事がある。」

真面目な面持ちでテンレイに切り出した。テンレイはイタズラっぽく笑つと

「もうバレてしましてよ。お兄様とダイスが企んでいた事なんて。」  
「えっ！嘘っ!?!」

ホクガンは驚き、でかい体を前のめりにしてテンレイに近づけた。

「クイズ対決でダイスとよく目配せしてましたでしょう？それにダイスが帰還してすぐ此処に来た事は聞いてます。いつもはガツクと3人で飲みに行ったりしてるのにそれがなかった・・・ダイスは私の私室前まで来て帰還の挨拶までしている。そんな事、あの人を奥に出入り禁止にしてからなかった事なのに。すぐ何かあると思ったわ。」

ホクガンは苦い顔をしてテンレイを見やった。

「なんだ、バレてたのね。んでそれを今まで黙っていたのかよ。」

テンレイは苦笑して

「私自身、それどころじゃなかったわ。それにお兄様達の狙いもわかってはいなかった。今はわかっているわよ、もちろん。」

ホクガンは目をぐるりと回して、天を仰いだ。

「お見逸れしたよテンレイ。さすがだ。後はガツク達が来てから説明すっか。」

両手を頭の後ろに組んでソファの背にもたれた。

「ガツクはどうしていて？この事を知ってるの？」

テンレイは心配そうにホクガンに聞いた。

「俺もあれから会ってないんだよ。たぶん知らないんじゃないか？アイツ、軍部会議にも出ねえで書類仕事と任務ばかりして、周り

に心配かけてるそうだと。カインなんか今にもぶっ倒れそうだと。」

テンレイがため息をついた時 執務室の扉が開き、

「ガツク大将とダイス大将がいらっしやいました。」

顔を強張らせたレキオスが2人の到着を告げた。

先に入って来たダイスはテンレイを見ると片眉を上げ、次いでニヤリと笑った。

テンレイは気まり悪げに目をそらす。

が、続けて入って来たガツクを見て、ホクガンとテンレイは密かに息を飲んだ。

4週間前とは人相が変わっている。まるで幽鬼のようだ。

頬は削げ落ち、髭は伸び放題。十分な睡眠が取れていない証拠に目の下の黒々としたクマ。だがその眼光は鋭さを増し、ギラギラと辺りを睥睨した。

ホクガンは

（すんげー 人間ってここまでおっそろしくなれるもんなんだなー

こんなのに夜中会ったら俺は世界新記録の逃げ足が出せる気がする。

）

なんだそれな感想を抱き、

テンレイは

(この顔でコモモに会わせたら間違いなく(コモモが)天国に召されそうだな。どうやって回避しようかしら。面でもつけさせようかしら。それとも敷居越しにする？　コモモ……本当にこいつでいいの？)

冷静にコモモに会わせただ際の事を考えた。

とうとう人間やめちゃった？的な事を思われている本人はテンレイに気がつくと思いをこぼしたがすぐホクガンの方に視線を移し、

「何だホクガン。ふざけた用事だったら帰るぞ。」

ホクガンを睨みつける。

(俺、こいつと腐れ縁でよかったあゝ　見慣れてないと心臓麻痺起こしてるかもしれん。いやマジで。)

ホクガンは自分の幸運？に感謝してから、いきなりガツクに言葉の刃を振り下ろした。

「ふざけた事かはおまえが判断しろ。猫が倒れた。今　病院だ。」

ガツクの身の内に戦慄が走った。

ダイヤが深いため息をつく。

茫然として微動だにしないガツクを横目で見てダイヤが聞く。

「それで　大丈夫なんか。」

「ああ。命に別条はない。ゆっくり休んで栄養のあるモン食っとればいいとよ。」

「そうか……テンレイ、お前は大丈夫か？」

ダイスが心配そうにテンレイの顔を覗き込む。テンレイは俯きがちになった顔を上げ、ダイスに微笑んだ。

「ええ。」

「！」

ダイスはテンレイにもう一声 声をかけようとして目の端に動くものに瞬時に反応した。

ソレを羽交い絞めにして、言い聞かせるようにゆっくり喋る。

「何処に行く気じゃア。ガツク。」

少しでも気を抜くと振り飛ばされそうだ。ついでに睨みつけてくる顔も怖い。

「離せ ダイス。お前でも容赦せんぞ。」

「おっそろしいのう。で？何処に行く気じゃ。」

言葉は普段通りだが、2人の手足にはそうとう力が入っている。

ホクガンはあくあという顔をして、扉前に移動し、そこにもたれて腕を組んでガツクを宥める<sup>なだ</sup>。

「落ち着けガツク。猫は大丈夫だって言っただろ。」

ガツクはホクガンを睨みつけ、

「大丈夫かどうかは俺が判断する。そこをどけ。」



ダイスを振りほどこうといっそう力を入れ始めた。

「今のお前の状態じゃあ猫には会わせられんな。」

「許可など求めてない。」

「ガツク、話があるの。」

それまで黙って見ていたテンレイが口を開いた。

ガツクは一瞬体を強張らせ、テンレイを見ないで言った。

「俺にはない。ダイス、ホクガン、これが最後だ。そこをどけ。」

ホクガンが身構え、一気に場が緊迫した。

「コモモをあなたに譲りたいの。」

な・・・に？

途端ガツクがピタツと止まった。

ダイスは、立ち上がりガツクの前に移動したテンレイを見て、ガツクの代わりの様に問いかけた。

「どういう意味じゃ　テンレイ。」

テンレイは真っ直ぐガツクを見上げて

「言った通りよダイス。コモモをあなたに託したい・・・承知してくれるわね？ガツク。」

ガツクは信じられない様にテンレイを見た。ダイスは力の抜けたガツクを用心深く押さえていたが、ホクガンが頷いてソファに戻るのを見、腕を外してガツクも座らせた。

続けてテンレイがホクガンの隣に座る。

「まず、謝りたいの。コモモが無理に無理を重ねたのは私のせいよ。ごめんなさい ガツク。あんなに大口叩いて置いて情けないわ。」

「なにがあつたんじゃ テンレイ。」

ダイスが膝に両肘を置きこの男独特のゆったりした口調で尋ねた。

テンレイは目を閉じてここ最近頭を占めていた事をぽつぽつと語り始めた。

「奥に配属希望してからずっと思っていたのよ。軍部に対等に認められたいってね。」

総所では軍部と奥・その他の部の人の数の割合が半々ほどで、人数が多いせいか軍中心の風習が少なくともあり、奥・その他の部を軽んずる空気があつた。

「変えたかった。奥の仕事だって軍と同じくらい大事なものなのよって。」

男3人は顔を見合わせた。知っていたからだ。事あるごとに張り合ってくるテンレイは当時、話題になったほどである。それはテンレイが管理者となつてからも続き、奥と軍部の確執は深まっていた。

「でもそこに固執するあまり、頑なになり過ぎてしまったようね。お兄様にも奥の皆にも迷惑を掛けてしまって。ついでに軍部。」

「ついでか。ガツクとダイスはため息をこらえた。」

「ガツク。」

テンレイに呼ばれガツクは視線を向けた。

「コモモはあなたを慕ってるわ、それを無視し続けたのが今回の原因よ。あなたから非難される覚悟はできてる。でも奥の職員は関係ないわ、彼らには矛先を向けないで。お願いよ。」

テンレイはそう言うと真摯にガツクを見つめた。ガツクは今度ははつきりため息をつき、ソファにもたれた。

「お前は昔からそうだな。」

テンレイがきよとんとなる。

「頑固で人の話は聞かんクセに間違いに気付くと並みの男より潔い。お前が奥に行かなければ軍部に誘ったものを。」

今度はえっ！となったテンレイにホクガンとダイスも笑いながら頷く。

「ガツクはのう、テンレイ。お前が奥にいつてしきりに口惜しがつてなア。その後も雷桜に引っ張り込もうとしとったんじゃ。」

「そうそう。ま、確かに欲しくはなるよな。頭はキレルし、根性はある。それに度胸もな。さすが俺の妹。」

「惜しむらくはこいつと兄妹という点だけだな。」

「ほんとにのう。まあ何事も完璧などないっちゆうことじゃな。」

畳み掛けるように親友達は親友を崖から落とした。

「羨ましいんだろ？遠慮すんな もつと俺を称えていいんだぜ？」

しかし親友はしぶとい。またたく間に這い上る。が、

「誰が称えるか。罵るの間違いではないのか。」

「おーおー羨ましいのう、美人で有能な妹がおって。兄貴とは大違いじゃア。」

親友達も負けてはいない。崖の上に立ち指を踏みつけた。

とこうなつてはこいつ等のじゃれあいはいは長いし面倒くさいのでテンレイは話してる途中のホクガンを遮り（これも愛情の裏返しってやつかな・・・あれ？目から水が・・・）

「それで、コモモの事はどうなの？」

ガツクに問いかける。

「無論。引き取るに決まってる。」

「そう・・・。」

これでよかったのだ。もう無理して明るく振舞うコモモを見たくない。寂しいがコモモの事を思えば。

河原で殴り合ってお互いを認め合い、がっちり握手したような感じになった所でガツクは

「ではモモコに会ってくる。」

と言い出し、それはちょっと………と3人に止められていた。



ガツクさんでしょ。」

猫らしくぬ震え声で。

「おいおい、だめだが ガツク。いきなりその顔は殺傷能力に匹敵するって。」

ホクガンが 呆れたように言うのが聞こえる。

モモコが声のした方を見ると、ホクガン、ダイス、テンレイが 呆れ、ニヤニヤ笑い、心配そうにとそれぞれの表情でこっちを見ていたアレ？なんか見た事ない光景になってるぞ。モモコはその違和感に目をパチクリした。

ここはホクガンの執務室。

モモコが倒れてから1日が経っていた。

「ではモモコに会ってくる。」

颯爽と立ち上がり、ドアに向かおうとしてガツクはコートを引っ張られ、眉を顰めた。

「何をする。」

引つ張つたのはダイス。ソファの背もたれ越しにむんずと掴んでいた。

「何をするじゃあねえよガツク。お前、自分がどんな人相してるかわかつちよるんか。」

呆れたように言うダイスにガツクはコートを振り払うようにしてダイスの手を外す。

「どうでもいい。そんなことより早くモモ・・・」

「あなたの今の顔は弱ってるコモ・・・いえモモコには酷だと思うわ。」

「そうだなリーサルウェポンだな。殲滅って感じ？」

「ここにくるまで何人倒れたと思っちよるんじゃ！5人や6人じゃねえんじゃぞ！」

「あくやっぱりな！ハハハ。見慣れてても怖すぎだよなア。警戒レベル5段階中5。」

「か弱くて繊細なモモコが召されちゃうでしょ！あなたの気持ちなんかどうでもいいわよ！」

「せめて夜・・・いや倍増するか？もうなんかかぶせるか・・・何やっても薄らぎそうにねえなあ。」

これだけ言われてもいつもの事なので（・・・）（気にしないガツクに3人はついて行く事にし、（せめて盾にでも・・・しかし総所の中心人物達が連れだつて歩く珍しさに逆に人が押し寄せる事になり被害を増大させる）行く先々で犠牲者を増やしながら4人は動物病院に到着した。ちなみに4人は午後の予定を全てキャンセルした。補佐官達はその対応と調整に大わらわだったが、奥や軍部



はおろか、その他の部から苦情や不満はなかった。この4週間近くのごう着状態が動き出したことに誰もが理解し、安堵していたからだ。

獣医は静かすぎる待合室がふと気になった。

今日は休診日の翌日である。いつもなら患者達や飼い主たちでもつと賑やかなはずだ。

おかしいなと思って立ち上がりかけたその時、「ヒィー!」「キヤアア!」という看護師の短い悲鳴が聞こえ、ガタッと何か物の倒れる音が聞こえた。

獣医の脳裏に一昨日見たホラー映画が横切る。

(バカな・・・あれはフィクション・・・)

そこまで考えた時、

「待てガツク!!!」

どこかで聞いた事のある声が聞こえると同時に扉が開いた。

「モモコはここか?」

失神せず持ちこたえた獣医は勲章を授与すべきであろう。

モモコ……

細くなった体に点滴がつけられ死んだように眠るモモコを見たガツクから全ての音が消え去る。

銀色のゲージは冷たく己とモモコを遮断している。

しかしガツクはゲージごとモモコを抱きしめた。

そして自分への罰の様に食い入るようにモモコの姿を見詰める。

妙な意地を……張り過ぎた結果がこれか。

お前にこんな無理をさせたのはテンレイだけではない。

何もしようとしなかった俺にも非はある。

いろいろ話したい事がある。したい事も。

だから……早く元気になつてくれモモコ。

目を開けて俺を見る。

モモコのゲージにへばりつき、なにを言っても動こうとしないガツクに根負けした3人は落ち着くまで待つ事にした。でかい男3人が小さな診察室を占拠しともウザい空間となったが、リーサルウェポンの登場で動物や人がいなくなったので まあ、うん、問題はなかった！ということにしておこう。

診療時間が過ぎ、帰宅時間になっても帰ろうとしない獣医にホクガンは 帰っていいぞ。コレ（ガツク）キツいだろと言うも、「患者を放っておいては帰れません。」という見上げた獣医魂？に「無理すんなよ」と労わった。しかし獣医の顔色はお前が患者というほど青い。

点滴も外れ、入念な診察の後、獣医からの許可が下り退院したのは結局次の日の朝だった。

許可が下りた後、自宅に帰ろうとするガツクを皆で止め、ホクガンの執務室に無理矢理連行しテンレイの厳しく容赦ない小言に負けたガツクは髭を剃り、身支度を整えさせられた。その後仮眠を取れとうるさい親友達をガン無視し、ゲージから出しソファに置いたモモコを身動き一つせず見つめるガツクを

「今、額にバカって書いてもばれないと思わないか。」

「ワシの仕事を全部引き受けるって書いてもええかもしれん。」

「ついでに俺の名前も書いとけ。」

見飽きた男2人の会話がなされた。

テンレイはその後どうしてもさばかなければならない仕事があったので帰ったが、モモコが目覚める前には戻ってきた。

この頃日が落ちるのが早くなった夕方、ホクガンはモモコが目覚め、落ち着きを取り戻したガツクにようやく自身の企てを説明する事が出来た。

「お前らの石頭と頑固さは他人がどうこう言うよりも本人に自覚させた方が一番手っ取り早いからな。かなりの荒療治だとは思ったが、執行した。」

「痛い授業だったわ。お兄様。」

「悪かったと思ってるよ。だが必要な事だった……。」

ホクガンは向かいに座るテンレイとガツクに軽く頭を下げた。

ダイスはソファの背もたれに座って片手ですまんと謝った。

お互いが長い付き合いなのでこれ以上は必要ない。2人が理由があ

ってした事なのはわかっている、だが

「モモコを巻き込んだのは許せんがな。」

ガツクはそう言ってモモコの喉を軽くくすぐった。

「そうね。もし手遅れなんて事になっていたらどうするつもりだったの。」

テンレイも思わず声が尖る。

「わかってる。でもその前に絶対お前達は何とかすると信じてた。自分達の事よりモモコの事を優先するだろうってな。お前達が変われば周りも変わる。」

ホクガンがバツの悪い顔から真剣な顔に代わる。

「俺には夢がある。それはな、」

3人と一匹はその顔を見詰めた。

「ドミニオンの独立だ。」

しんとした執務室にホクガンの響きのいい真剣な声が響く。

「属国から自治領国にしたが、先人たちのゴールはそこで終わりじ

やなかったはずだ。俺の代でできたら最高だができなくても構わない。タイミングっていつのがあるからな。だがせめて次代にはやってほしいだろ。そいつらのためにも土台を残したい。」

ホクガンは立ち上がり、書物の間を器用に通ってデスクに廻り手をついた。

「ドミニオンはもつといい国になる。」

自信に溢れた顔。それは自惚れでもなんでもなく国土を愛し、仲間を信頼してきた男の当然の結論だ。

モモコは感動して（チョロイ）ホクガンを0・1%ほど見なおした。（そつでもなかった）

「そのためには今までの様に分裂してはダメだ。そろそろ何とかしようと思ってたんだよ。モモコの事はちょうどと言っては悪いがチャンスだった。」

そこでホクガンはモモコに先ほどよりもっと深く頭を下げた。ダイスも軍隊式の礼を取る。

「すみませんでした。」

「すまんかった。」

モモコはでかい体を縮めて謝る2人に戸惑う。

モモコとしてはつらい日々ではあったが、2人に争って欲しくないばかりにあいまいな態度をとった自分も駄目だったと思うのだ。自分の心に素直になっていれば、たとえホクガンに誘導されたようなものだったとしても大事な人に無用に悩ませる日々を長引かせる事にはならなかっただろう。

モモコはガツクを見上げた。

するとガツクは何を勘違いしたのか（いつもの事だが）凄味がさらに増した顔で笑うと（モモコは目を微妙に逸らした）

「お前の好きなようにしろ。許せないようなら俺が報復してやる。」

モモコがええええええ！と言うような世にも恐ろしい事を呟いた。さらに、

「そうねえ ガツクと私がモモコの代わりにこの人達を罰してもいいわね。」

「それもいい。お前となら最高の結果が出せそうだ。」

（結果ってナニ！？負の連想しか浮かばないんですけどぉ！！）

参謀テンレイが殊更優しい声で参戦し、魔王ガツクが応えそこは地獄の審判！？的な空気になった。

モモコは2人をチラリと見た。顔色がなんかおかしく見えるのは目の錯覚だろうか。

ついでに細かく揺れてる様にも見える。

この国、いやもしかするとこの世界で最凶のコラボが実現しそうになったが、被害者が加害者を庇うという事態になり回避された。

3 - 6 なしですないんです

ホクガンとダイスが危機を無事に回避し、和やかな空気になったところでモモコはさつき感じた違和感が戻って来た。

（あれ？そっぴやなんかおかしいな。えっとえっと……なん  
で私ガツクさんの膝に乗ってんの？ていうかテンレイさん隣にいる  
！？もしかして争ってない！？名前……“モモコ”って！！どう  
いう事？私が寝ている間に何があっただアア！！！！）

軽くパニックになったモモコはわたわたと慌てふためく。

「どうしたのモモコ。そんなに動いてはまた倒れてしまうわ。大丈夫？」

テンレイはガツク達が聞いたこともない優しい声でモモコの頭を撫  
でようとして……

「なにするのよ。」

テンレイの手が届かない反対側にモモコを移したガツクを睨んだ。

「他人がコイツを触っているのを見ると腹が立つ。」

モモコへの独占欲が表に出始めたガツクのお前は子供かつ！的発言  
が放たれた。

こうなるとただでさえガツク達に我慢がきかないテンレイとすぐさま  
言葉の応酬となる。



「心の狭い男ねえ。これから先が思いやられるわ。せいぜいモモコに愛想つかされたい様に気をつける事ね。」

「モモコに関してそれはない。」

「あなたじゃないわよ！この戦闘バカ！……モモコ……コイツが嫌になつたらいつでも私の所に帰ってきてもいいのよ？遠慮なんて必要ないんだから。」

「未来永劫ない事だがな。」

「わからないわよ？案外すぐ私の腕に戻ってくるかも。」

「そう言えばお前には礼を言わねばな。モモコを俺に戻してくれた事に。」

「あなたの為じゃないわよ！礼なんてしないで頂戴！！腹立たしい男ね！！」

「嫁とその母親、そして母親に毛嫌いされてる媚みたく見えないか。」

「ワシらがした事 無駄になってないじゃろな。いつもと一緒にじゃ。」

ダイスは背もたれに座って腕を組み、ホウガンは椅子に座って両手を頭の後ろに組んで2人と一匹を暖かく見守った。

ガツクが誰かと対峙する時、相手側は威圧されてる印象を受ける。

大半はソレに怯えて小さくなるのだが、テンレイの様に気概のある者は挑発されているかのような気持ちになりムキになりやすい。なのでガツクがテンレイを雷桜に引っ張ろうとスカウトした時、これが裏目に出て（ガツクは軍部がどんなにやりがいのある仕事を語っただけだが、なぜ雷桜隊だけでも5千人いる全員を引き連れて語る必要があるのだろうか？行き過ぎと言うか周囲は迷惑どころではない）余計に「今に見てなさいよ軍部！！」とテンレイを奮起させる事となった。

ちなみにこの威圧感、本人は全くの無意識である。

「みゃあーお！ぶみみ！（テンレイさん落ち着いて！ガツクさんもストップ！）」

モモコができるだけ大きい声で鳴き、モモコ大事の2人は黙った。

「お、嫁が止めた。」

「モモコのいつちよる事がわかるわけでもないのに、よお止まったな。」

「そこはアレだよ、愛なんだろ。あ・い。」

「殴ってもええか？ホクガン。」

「ふーお！ぶみみ！（そつちもうるさいよ！だいたい嫁ってなんだよ！）」

こつちを向きぎゃーぎゃー鳴くモモコを見てモモコに愛などないホクガンは（likeはあるがloveはない。というかあった日にはホクガンの命はない）

「そついやお前に言ってなかったな。お前、ガツクの飼い猫に戻ったから。」

また経過をすつ飛ばしていきなり結果を告げた。

へ？と首を傾げるモモコに目を細めてからテンレイが説明した。

「モモコ・・・あなたが倒れるまで頑なだった私を許してね・・・。本当はもつと前からガツクの元に戻りたがっている事を察していたの。」

ええー！とびつくり顔のモモコに優しく微笑んで

「私はガツクにあなたを託すわ。本当に好きな人と暮らさない。我慢は美容によくなくてよ？」

最後は冗談で締めくくった。その目は少し潤んでいる。

男3人は黙ってテンレイの言葉を聞いた。

暖かちよっぴり切ない。それでいて清々しい雰囲気。

嬉しいのと感謝の気持ち一杯のモモコはふとテンレイの言葉に  
？ となる所に気付いた。

(”託すわ”・・・違うな・・・”本当に好きな人・・・”・・・本当に・・・好きな人!?)

モモコはなぜか焦った。

しんみりした感傷も吹き飛び、ドキドキと突如なりだした心臓がうるさい。

(ち、違うでしょ。テンレイさんが言ってるのは飼主としてって  
という意味だし。いい異性っていうのはない!っていうかなし!な  
しっいたらなし!!)

誰に言い訳しているのか必死になしなしなし・・・と  
呟くモモコであった。

「ところでガツク。」

モモコの脳内が なし で埋め尽くされている頃、テンレイはさっきまでの慈愛に満ちた顔とは打って変わった顔でガツクに話しかけた。

「なんだ。」

また小言か……  
ありや何かの文句じゃな……  
ここで居眠りなんかしたらこつちにくるんだらうなあ。黙って終わるのを待つか。犠牲はガツクだけでいいだろ……

男3人はなるべく短い小言である事を祈った。

「私の所に戻ってきた時、モモコの毛並みがボサボサで艶もなかったけど何で洗っていたの？」

厳しい鬼監督の突き刺さるような視線の中、男3人はモモコの毛並みを見た。滑らかで指通りよく、ふわっふわっで柔らかげだ。毛の一本一本がキラめいている。テンレイの努力の賜物だろう。ガツクはため息をついて

「石鹸だ。」

これからくる小言の嵐に備えた。

「せ・っ・け・ん？ あの固形の？」

「ああ。」

長いな……  
長くなりそうじゃな……  
長いんだらうなあ……

男3人は自分たちの祈りは届かなかつた事を察した。

その後、モモコの美容のためにシャンプーはこれで！トリートメント！食べ物はこれ！あとは・・・  
とまさに過保護ママ全開テンレイの怒涛の小言が1時間続いた。

「あなたの女性に対するマナーの悪さは知っていたけどこれほどはね。いいこと週に1度はあなたかモモコにちゃんと接しているか確認しに行きますからね。もし基準に達してなかったら・・・。」  
徹夜の疲れだけではない疲労にぐったりした男3人は密かに目と目で通じあった。

以下目での会話

” とうにかしろガツク。お前の嫁・・・じゃなくて飼猫だろうか。”  
” このボンクラが。俺の方が被害は甚大だ。”  
” その被害はこっち（霧藤）にも飛び火じゃあ！なんとかせえガツク！”  
” お前がとうにかしろ。女は得意だろうが。”  
” 無理！テンレイだけは無理じゃ！”  
” うゝん。なんとか機嫌を取らなければ。なんだなんだ何かあっただろ！思い出せ俺！あっそうだ！”

ホクガンは閃いた。

「そんな暇あるのか？ただでさえ忙しいお前が。そんなに頻繁に来るよりも軍部に月1泊で手を打ったらどうだ。」

「えっ？」

「なに！ホクガ・・・」

ダイスはガツクを黙らせようとガツクの膝でまだなしなしと呟いていたモモコを攫った。(そして0・1秒後 後悔した。)

「そうすれば、ゆっくりチェックできるし くだらな・・・いや楽しく着せ替えしたりして遊べるぞお。」

人間離れた速さで動き、モモコを取り返してからダイスを叩きのめしたガツクだったが遅かった。

事態はすでにホクガンの悪魔の声にテンレイがあっさり承諾した頃であった。

ソファに降ろされたモモコに今度会いに行くからと告げるテンレイの上機嫌な声が聞こえる執務室のもう一方では

「ホクガン、貴様・・・殺されたいのか。どうしてくれる。」

殺意を全身に纏い、親友の首元を締めているガツクがいた。

「しょうがないだろ。週1だぞ？月1の方がいいじゃねえか。」  
「泊るんだろ？俺はアイツを誰とも分かち合う気はない。たとえ1分1秒でもだ。」

今にもホクガンの首をへし折りそうだ。しかし話術に置いて総所、いやドミニオンでコイツに勝る奴はそういない。

「だけれがそんな事言ったよ？年頃の女をお前の家に泊らすわけねえだろうが。軍部の賓客用の宿泊施設があるだろ？テンレイはそこに泊めてやって時間になつたらモモコを迎えに行けばいい。それにたまにはモモコだってテンレイに会いたいと思うぞ？ここはなあガツク、男の甲斐性をみせてやるべきだろ。な？1日半程うるさいのを我慢すりゃいいじゃねえか。な？」

うぐぐ・・・悩むガツクを見てホクガンはここぞとばかりに畳み掛けた。

ちなみにすぐ側には腹を押さえて蹲るすわダイスがいる。

「ここでお前が強硬に反対してみる、テンレイのことだ もぐつとうるさくなるぞ？いいのか？」

「チッ！わかった。もういい。」

ガツクはホクガンを放し、テンレイに優しく撫でられているモモコをさっと取り上げると（テンレイから「なんて乱暴なの！あなたって男は！」などと抗議の声が上がった）もう用はないとばかりにドアに向かった。

「ガツク。」

テンレイが呼び止め、ガツクが不機嫌さ全開で振り返る。

「モモコを・・・大事にしてね。決して悲しい思いをさせないで・・・私の様に。」

テンレイが寂しげに微笑む。

「みやあ。みゆう。（テンレイさん……ごめんなさい。ありがとう。）」

ガツクは小さく鳴いたモモコを見下ろしてから

「言われるまでもない。お前の決断、後悔させはせん。」

またテンレイ達を見てわずかに笑う。

「……ねえ ガツク。」

「まだ何かあるのか。」

うんざりしたガツクはそう言いながらさっさとドアを開け、すでに体半分外に出たところでまたテンレイを振り返った。

「あなたがモモコを抱き上げてるその姿……何度見ても全然似合わないわ。」

澄まして言うテンレイにガツクはしかめっ面で答えると今度こそ本当に出て行った。背後から聞こえてきた笑い声はいつものように無視した。

懐にモモコを抱えながら足早に進むガツクは人々に「ヒィ！」とか



「ウワァア！」とか言わせながら自宅まで帰って来た。  
玄関を開けるとほこり臭いような籠った匂いがした。思わずモモコ  
が顔を顰めると、

「匂うか？閉め切っていたからな。」

ガツクは窓を開け、新鮮な夕闇の空気を吸い込んだ。服を軽く引つ  
張る感覚に下を見るとモモコがもの問いたげな顔で己を見上げてい  
る。

(締め切っていた？どうして？)

「お前と離れてからここへは帰っていない。」

(え？)

モモコが大きく目を開く。ガツクはそのブラウンとグリーンが綺麗  
に混ざり合ったモモコの目を満ち足りた思いで見つめ返す。

「お前との・・・思い出というには短い日々だったが、あるここに入  
る事ができなくてな。応接室にずっと寝泊まりしていた・・・。情  
けないだろ？」

(ガツクさん・・・)

「モモコ・・・俺はな、今までどんな過酷な任務もこなしてきた。  
辛いこともやり切れない事も多々あった。だがお前と離れていたこ  
の4週間ほど自分を抑えるのに苦労した事はない。・・・モモコ。」

ガツクはモモコを目が合う位置まで抱き上げた。モモコの心臓はま  
た高鳴りだす。

「あんなみじめな思いをするのはもうたくさんだ。これから何があったとしても俺の側にいる。」

抑えても抑えても溢れてくるこの想いは何なのだろう？熱くて、切なくてそれでいて時々イライラしてしまう。  
モモコはやつとのことと返事を返す。

「う・うみ。ふにゃあーお。（うん・うん・うん。うん。・  
・約束だよ。ガツクさん。）」

その声は小さく少し震えていたがガツクにちゃんと伝わった。  
ガツクは力を入れ過ぎない様にモモコをそっと胸元、心臓のあたりに抱き締める。

モモコの耳にガツクの心臓の音が聞こえる。  
それは自分と同じスピードで打っているようにモモコは感じた。

そんな一人と一匹をいつの間にか上った三日月が優しく照らしていた。

#### 4 - 1 もしもーし

あれから3日が経ち、モモコが戻ってやっと休みらしい休みを取ったガツク。

それは低下したモモコの体力回復も兼ねていたので（ガツクは一晚寝ただけで元に戻った）外出はしなかったが離れていた時間をゆっくり埋める事にもなり充実したものになった。

同時に無理を重ねてガツクに付き合っていたカインの休みも取れ、充分休養に専念できた。

その間、奥と軍部の関係も大きく変わろうとしていた。

テンレイは奥の職員全員に今までの事を説明、謝罪した。

「今、責任をとって辞任する事は簡単です。でも今回の過ちを教訓にもっと奥を高みに持っていきたい。その時までどうかもう一度私に管理者を任せてくれないかしら。今度は軍部と連携し、総所……いえドミニオンのために尽くしたいの。」

テンレイの続投は満場一致で認められ、軍部の代表としてガツクの代わりに出席したダイスと握手を交わし軍部と奥の新たなスタートを皆に約束した。

その夜、ダイナンとジーンは「ダウンジ」で祝杯を挙げ、互いの上司、上官、そしていろいろあったが結果的に総所をより良い形で前進させた猫 モモコ に乾杯した。

充実した休みが開けたその日の朝、テンレイが大量の荷物と奥の職員と共にやって来てガツクにモモコの毛並みの手入れから食事等の

注意事項、もし病気やケガなどをした場合に行くべき獣医の連絡先などモモコに関するありとあらゆる事をレクチャーしに来た。

「仕事があるんだがな。」

とガツクが逃げを打つが（これがテンレイ以外の奴だとガツクのひと睨みで事は済むのだが、テンレイだともう従ってただ嵐が通り過ぎるのを待つしかない）テンレイは容赦なくそれを塞ぐ。

「あら おかしいわね。さっきカイン君に聞いたら先の先の分の仕事まで片付けてこの先何週間かは暇も同然って聞いたんだけど？」

その暇は全てモモコにあてようとしていたガツクはそれが（たとえ1日でも）潰れた事にイラつき、隅っこで壁と同化しようとしているカインを睨みつけた。

「ふみー・・・ふにや。（ガツクさん・・・ガンバレ。）」

モモコも声援を送ることしかできない。

とは言ってもモモコとしてはガツクに学んで欲しいのはやまやまだ。なにしろ動植物に対してマイナスの方向に位置しているガツク。それを改めようとはせず（ぶつちやけ無駄だと思っている）モモコの事を独自の見解と判断で扱い、加減を知らぬ行為でモモコと周りはしばしば迷惑を被<sup>あび</sup>っていた。

哀れなガツクはその後厳しい鬼監督<sup>テンレイ</sup>の元、その優秀な頭脳にそれらを叩き込まれた。

カインとモモコは終始引き攣<sup>くわ</sup>った顔で、大男が美女に

「違う！！何度言ったらわかるのよ！！それはこの後！次はこれ！

モモコへの愛が足りなくってよ！ガツク！！」

と怒鳴りまくられるのを見ていた。

そして1週間後。

「こんにちわガツク。モモコはいて？」

「いない。帰れ。」

膝に乗り、机の下からはモモコがこんにちわしてるのだがガツクは言い切った。

「まあモモコ。今日も可愛いわね。」

不機嫌さ全開のガツクを鼻で笑い、モモコには笑顔全開でテンレイは挨拶した。

「にゃーん？（今日はどうしたの、テンレイさん？）」

この前会ったばかりなのに・・・もしかして教え忘れた事でもあったのかな。珍しいなあ。

モモコがのんきに思っているとガツクが誰か（主にテンレイを阻止できなかった奴ら全員）を呪い殺すかのような声音で

「月1ではなかったか？約束が違つぞ。」

これが定期化してはたまらんと云う本音を全面に出して抗議する。  
(ガツクに建前はあんまりない)

「うるさい男ねえ。安心しなさい、今日は特別なの。私の元にいた時オーダーしていたモモコの服が昨日届いたの。勿体ないから持つてきただけよ。次からはしないわ。ほら可愛いでしょ？」

深まる秋に合わせたシックなドレスをジャーン！と出しながら嬉しそうに笑った。

ガツクとモモコは顔を見合わせた。  
カインも？と首を傾げる。

「猫に……服を着せる意味は何だ。」

ガツクの不可解な顔付きにテンレイはきよとなる。

「意味って？」

「猫は……既に毛で覆われているだろう。保温目的なら役目は充分だと思うが。」

(ガツクさん……あんまり深く考えない方がいいよ……)

モモコは忠告した。心の中で。(意味なし)

テンレイはあなたってバカねえといった顔付きでガツクを見てフツと笑うと(ガツクのイラつき度はもうすぐMAX。カインは退屈し  
のぎでしていた仕事を全力でやり始めた)

「可愛いじゃない。」

「は？」

「だから、可愛いからよ。これを着たモモコがちょこんとお澄ましている所を見てるだけで価値があるのよ。わからない？」

「わからないな。そんなビラビラと窮屈そうなモノを着せて動物虐待ではないのか。」

「なんですって！」

軍部の最強の男としてドミニオンどころかこの世界でもっとも他の軍から恐れられている大男とドミニオン1の才女として各国でも名高い美女が”猫に服を着せる意味・価値”について本気で討論。いや赤裸々に言つと互いの価値観についてのケチのつけ合い。ただの口喧嘩ともいう。

モモコとしては着せ替えは慣れれば特に嫌なモノでもなく、自分がドレスなどを着てテンレイが喜んでくれればそれで良し！的な付き合い程度であつて特に思うモノはない。

なので行儀悪く大きな欠伸をしたりして2人の決着がつくのを待った。

「あゝらそう。これを見てもそんな口が聞けるかしらね。モモコ、ちよつとこちらへいらっしやい。」

この無粋な男に見せてやるわ！ファッションの凄さを！」

いつの間にファッションの意義にまできていたのか・・・モモコは半ば呆れながらもこれ以上の展開を防ぐため素直にテンレイの側まで歩み寄った。

「ふん。モモコを飾り立てても無駄だぞ。モモコはそのままでも充分愛らしい。」

恥ずかしくないのかお前？的発言でテンレイに応酬するガツク。  
テンレイはツンとしながら隣の応接室に入ると、モモコにガツクへ  
ファッションの凄さとやらを見せる勝負服を（使い方が違う）出し  
て見せた。

「じゃじゃ・・・！（じ、これは・・・！）」

テンレイが執務室に戻り、モモコであろうシルクのスカーフに包ま  
れたもこつとした塊をガツクのデスクに置いた時も、ガツクはこん  
な無駄な時間を過ごすくらいなら訓練でもしていたらよかったな・  
・と思っていた。まあテンレイならどこへ行こうと結局捕まり、同  
じ展開になるんだが。

「お・ま・た・せ！さあ！これであなたもファッションの神にひれ  
伏すといいわ。」

どうしたテンレイ！みたいなセリフを吐きながらスカーフをサツと  
取ると空中に放り投げる。



そこには小さな前足を袖に通し、襟をピンクのリボンでとめ、胸から背中までを雷と桜を散らした黒いコートを着たモモコがいた。

ガツクの時間が停止した。

横から覗いたカインが思わず声を上げる。

「おおー！可愛いですね。雷桜隊のコートじゃないですか。すごいな。」

「ふふふ・・・可愛いでしょー。モモコがガツクの元に戻ってから大急ぎで作ってもらったのよ。私からのお祝いの品よ。これからモモコには奥と軍部のかけ橋になってもらおうと・・・って聞いているあなた・・・ちよつと！ガツク!？」

モモコも微動だにしないガツクに？と首を傾げる。その愛らしい（らしい）姿がガツクを追い詰めているとも知らずに。

その後動かなくなったガツクを2人と一匹は1時間かけて元に戻した。

翌日、飼い主とお揃いの黒いコートを着たよく見ると顔が強張ったピンクの猫に軍部の皆さんは久しぶりにド肝を抜かれた。

4 - 1      もしもし（後書き）

なんか拍手話ほくなりました。まあ、こんなのもたまにはいいか。いつもこんなんですけど。

4 - 2 閃いています

朝晩の冷え込みも無視できなくなった晩秋の頃。

「恒例のイベントがやってきたな。」

ホクガンがこの男らしくなくうつとおしそくに今回の招集理由について発言した。

膨大な書物の溢れる部屋のそこに置かれた巨大なソファにくつろいで座る3人のでかいウザい大男達と1人の美女、そして

「みゃう。うーみ？（どうしたんだろホクガン。大好きなイベント・・・だよね？）」

相変わらず口が半開きの猫。

ここはホクガンの執務室。時刻は夜。

モモコが疑問系鳴き声でホクガンを見ると

「お前は初か。ごちゃごちゃうるさくなるだろうが大人しくしてるよ。」

もつとモモコが？となる事を言う。

「そんな言い方でわかるわけないじゃろうが。あのなァ モモコ。」

この時期、ドミニオンの友好国を招待してのう 舞踏会や催しものやらをして接待するんじゃない。」

ほえー とモモコが感心し、またまた あれ?となる。

なら余計にホクガンが張り切るんじゃない?なのに椅子に縛り付けられ、書類にべったんべったん認証を押ししてる時みたいに低いテンションだ。

モモコが首を傾げてホクガンをもう1度見やる。  
と、ガツクが低い声で笑い、補足した。

「こいつはな モモコ。自分が仕切るあの はた迷惑な催しは全力で楽しむが他人に合わせながら進行するのは我慢がならん性質なのだ。」

ええー こ、子供がいる・・・ここに。と呆れるモモコ。

「これも政務の一環よ、毎年同じ事言わせないで頂戴。それにこれの首尾がよければ独立に1歩近くなるでしょ?」

テンレイがため息をつきながらホクガンに諭すように言い聞かせる。  
あゝあ。とやる気なさそうにホクガンはソファの背もたれに両腕をダラリと投げ出した。

「やりたくねくな。俺の繊細な顔に(愛想笑いによる)ヒビが入ったらどうしてくれる。」

「心配せんでも入らんわ。どうしても入れたいならガツクに殴ってもらえ。」

「いつでもいいぞ。今でもな。」

「ヒビどころか死ぬわ!」

ひとしきり駄々をこねたホクガンはガツクに蹴飛ばされて観念し

「じゃあ、今年は何やるかな。なんかいい案ねえか？」

やっと本題に入った。

「そうねえ　舞踏会と晩餐会は決まってるから・・・」

うーんと人差し指を顎に当て考え込むテンレイ。

「犬のレースとかどうじゃ？前にサムズで見たんじゃ。なかなか面白かったぞ。」

「おっ！いいなそれ！」

「夫人達には庭園でお茶会・・・シヨツピングもいいわね。」

「3日間だからな・・・どう飽きさせないでいるか・・・」

モモコはホクガン達があればこれやと案を出すなか、さっきから一言も口を利かないガツクを見上げた。

モモコの視線を感じたガツクはすぐ反応する。

「どうした。帰るか？」

いや、帰りたいのはガツクさんでしょ。退屈そうにしちゃって。

モモコが呆れたように半目になると

「こつというのは苦手なんだ。どうでもいいしな。」

肩をすくめてモモコを膝から腹に移し、無駄に長い脚を組む。

そしてモモコの顔を自分を見るように固定しじつとモモコの目を見詰める。

モモコは困って目を彷徨わせる。

時折ゆっくりと体を撫でるガツクの手。

最近のガツクは自分に対するスキンシップが前より親密になったような気がするのだが、気のせいだろうか。モモコの顔をじっと見るのはもちろん寝る時など枕元が定位置だったのに最近は腕で囲い込まれていたり・・・その他前足をさすったり、腹をさすったりと（モモコ的に）セクハラまがいな事まで。

モモコの顔が徐々に熱くなってきたところで

「おい そのバカツプル。なんかないか。」

周りの空気は俺の空気！のホクガンが呆れたように声を掛けてきた。ガツクが舌打ちし、モモコがホツとして横を向くと隣に座っていたダイスと目があった。

「バカツプルか。言いえて妙だのう。」

ニヤニヤ笑いながらからかう。

モモコが照れの反動でむうとなると

「怒るな怒るな。お前の機嫌が悪うなるとガツクが黙っておらんけえ。すぐにドンパチじゃア。」

かかかと今度は笑った。

ドンパチ・・・その言葉を聞いた瞬間モモコは閃いた。

モモコはガツクの腹から飛び降りるとテーブルに飛び乗った。そしてウロウロと書類の上を歩きまわる。

「どうしたの モモコ。」

テンレイが心配そうに言うとガツクが胸元からあるものを出しテーブルにひいた。

「なにこれ、ABC表？」

「どうするんじゃ、こんなもん。」

「黙って見てろ。」

モモコはいつもながらどこに仕舞っていたんだろつと半分呆れ半分不思議な気持ちでABC表の上を歩きまわった。

「何してるの？」

テンレイが不思議そうに首を傾げる。それにガツクは

「モモコが文字を読める事は知ってるな？モモコはどうしても伝えたい事があると文字を指し示して伝える。」

ほおーという声上がるなかモモコは言いたい事を2回つつ前足で叩いて伝えた。

テンレイが声に出して読み上げる。

「ぐ・ん・ぶ・た・い・こ・う・ぶ・ど・う・た・い・か・い？」

4人は顔を見合わせた。

「軍部対抗・・・武道大会か！」

「にゃあ！（ちゅーもく！）」

モモコはまた文字を指し示す。

「し・あ・い・・・か・ん・せ・ん・・・ぐ・ん・りよ・・・  
み・せ・つ・け・ろ」

「なるほどな。」

ガツクがニヤリと笑って腕を組んだ。

「面白そうなのう。どうせなら腕に覚えのある奴は全員参加なんて  
どうじゃ？」

「いいねえ。それなら俺も参加できるな。」

「他国からも募ってみたら？貴重なデータが取れるかも。」

「ますます面白くなってきたのう。楽しみじゃア。」

「よし！」

ホクガンがモモコを抱き上げて

「採用だ！今年の目玉になりそうだぜ！でかしたモモコ！」

あるうことか天井近くまで放り投げた。



「ふぎやあああ……！」

モモコがびっくりして上げた悲鳴は途中で止まった。ガツクがすぐ飛び上がり空中で受け止めたからだ。

バサバサバサ……書物が雪崩落ちる。

ふう。とモモコが息をつき下を見るとホクガンがソファにうつ伏せになりピクリとも動かなくなっているのが見えた。

「バカねえ。モモコにあんな事してただで済むわけないのに。」

「浮かれとったんじやる。まあ、退屈な接待が思いがけず楽しめそうな気持ちはわからんでもないがのう……」

物言わぬ死体の様になったホクガンを余所に3人と1匹は接待の大筋の日程を詰めていく。

1日目\*\*\*夕方方に到着……晩餐会

2日目\*\*\*昼……武道会

夜……優勝者を称えて祝勝会

3日目\*\*\*男性陣……犬のレース等

女性陣……お茶会、ショッピング等

夜……舞踏会

「こんなもんじやる。あとはもう少し細かい所を設定し直さんとな。」

「そうね、モモコのアイデアですもの。必ず成功させましょう。」

あっそうだわ ガツク。」

早くもドアに向かっていたガツクは振り返る。

「あなたね・・・まあいいわ。モモコのドレスの件だけ。」

「ドレス？」

「舞踏会用のとか・・・もしかしてモモコはお留守番？」

「そんなわけではないだろう。」

「よね。だったら作りましょ。貴方のスーツに合わせるように作るわ。」

「お前がやりたいたけではないのか。」

「なによ！いいでしょ！とうるさいテンレイを無視し、ガツクはモモコに問いかける。」

「どうしたいモモコ。お前が決める。」

（うん。接待なんだからドレスの方が喜ばれるかな？）

モモコはなにもドレスを着た自分が可愛いとは思っていないが、（むしろ間抜けだと思う）テンレイや奥の女性職員方の反応を見ると他国の夫人方にもウケそうだ。

モモコはテンレイを見詰めてにやんと鳴き、頷いた。

テンレイが嬉しそうに手を叩いて喜ぶ。

モモコもそんなテンレイをみて嬉しい。と、テンレイの後ろにいるダイスも目を細めて嬉しげにしているのにモモコはきよとんとなった。

（どうしてダイスさんも嬉しそうなんだろ？ダイスさんも私のドレス姿が・・・ってんなわけない。あれえ？もしかして　これは・・・）

モモコがそこまで考えた時、ダイスがモモコに観察されてる事に気

づき、さつと無表情になった。

モモコが戸惑ってガツクを見上げるとガツクは何も言っつなというように首を振り

「用は済んだか。ではな。」

これ以上何か言われないうちに部屋を出た。

「にゃーん。（ガツクさん、ダイスさんってもしかして・・・）」

自宅に帰りつくとモモコが静かに鳴いた。

ガツクはモモコをソファに降ろし、コートを脱ぎながら答える。

「そうだ。ダイスはもう何十年もテンレイを想い続けている。」

4 - 2 閃いてます（後書き）

ガツクとモモコはいつの間意思の疎通がうまくなってきたんでし  
ようねえ・・・まあファンタジーって事でひとつお願いします。

あれは俺達が15の頃だ。

テンレイが誘拐された。

幼いながら人目を引く容姿をしていたのが仇になったのだという。

犯人は若い男だった。年齢26歳 職業・・・なに？詳細はいいだ  
と？・・・いいかモモコ、犯罪者のデータは緻密な方が今後の・・・  
わかったわかった。確かに話に関係ないな。

その当時テンレイは5歳。

ホクガンやなぜかダイスにまで可愛がられていた。と思う。

その頃のテンレイについての記憶があやふやだ。どうでもよかつた  
んだろう。

もう少し何か印象がないか？・・・そうだな・・・やたらと突つか  
かって来る小生意気な子供と言ったところか。今とあまり変わら  
な。

誘拐された時たまたま用があつてホクガンの実家にいた。

ホクガンは有事の際と催しものには昔から鼻が利く。すぐさま潜伏  
場所を特定。初動の遅い大人共を出し抜き俺達3人は救出に向か  
つた。

「本当にここなんか。」

ダイスは普段のダラけた姿など微塵も感じさせない緊迫した顔でホクガンを睨みつけた。

「俺が間違えるわけねえだろ。ここしかない。」

ホクガンは犯人に対する怒りを抑えながら静かに答えた。

ガツクは普段と変わらぬ態度でテンレイと犯人が居るであろう建物を見上げた。

夕闇に浮かび上がるのはなんの変哲もない普通の高層マンションだ。日常とかけ離れた事件が起きているとは考えられない程。

「では行くか。」

ガツクはそう言うとマンションの正面入り口に向かおうとしてダイスとホクガンに両腕をがちりホルドされた。

「何をする。」

「何をするじゃねえよ!!」

「いきなり!しかも正面からとはお前こそ何考えとるんじゃ!テンレイの命がかかるとるんじゃぞ!!」

ガツクはしょうがないとばかりにため息をつき、

「では早く作戦なり考える。事は急を要する。」

偉そうにホクガンに命じた。

「フ、フフフ・・・」

ホクガンはかつてない程イラついたが確かに今は急いだ方がいい。なんとかガツクの後頭部を殴りつけたい衝動を抑え（殴りつける事に成功したとしても倍にして返されるのがオチだが）来る途中で考えた救出作戦を2人に話す。

「場所は48階4号室だ。間取り図はこれ。おそらくテンレイはここか、この部屋にいるだろう。ガツクとダイスは外側からここまで壁を登って来い。できるか？」

8階ではない。48階である。

「ああ。」

「了解した。」

了解できるものなのだろうか。本当に15歳か、こいつら。

「よし、ダイスはこの部屋、ガツクはここ。俺は犯人を引きつけておく。合図を送るから一気に突入しろ。」

3人はマンシヨンの裏側に移動し、ホクガンが見張り役になって、ガツクとダイスは人目を気にしながら壁を登り始めた。幸いにも軍校の制服は黒い。すぐ2人は闇に溶け込む。

「ガツク。」

ダイスはすぐ隣で壁を登るガツクに声を掛けた。

「なんだ。」

ダイスはためらってから懸念を口にした。

「お前の所にテンレイがいたらもう、テンレイに集中するんじゃないぞ。絶対犯人をどうしようしようとするんじゃないやねえ。」

「言われなくてもわかっている。そのために来たんだろっが。」

「・・・お前、この前のテロリストに人質を取られた時の模擬演習の時どうした？」

「・・・。。。」

「犯人もろとも人質全員殺しよったじゃろオ？（あくまで演習です。本当に殺りそうだが演習）言いたくはねえがの。一応な。」

「・・・。。わかった。」

壁を半分ほど登った所でまたダイスが話しかけてきた。  
ガツクはイラついてきた。

「なあ ガツク。」

「・・・。。なんだ。」

「テンレイ泣いとるかのう。怯えとるじゃろうなあ。」

「・・・。。さあな。」

「さあなつて冷たい奴じゃな。テンレイはワシらの妹同然じゃろが。心配じゃねえんか。」

「あんなうるさい妹なぞ俺にはいない。・・・それにアレなら案外ケロツとしてるのではないか？」

「テンレイ大丈夫じゃるか。待ちちよれよ テンレイ。今ワシが行くけえ。」

「・・・俺の発言は無視か ダイス。」

「えっ？」



「……………もういい。」

目標地点に来た所でガツクは遙か階下のホクガンに合図を送り、それに頷いてホクガンは自身がなすべき事をしにエレベーターで48階に向かう。

テンレイは大丈夫だろうか。

普段は気の強いおしやまな妹が顔を恐怖に引き攣らせ、泣いて怯える姿が振り払っても振り払っても脳裏に浮かぶ。

ホクガンは知らず力が入る体を意識してリラックスするようにした。

自然にだ。自然に。疑わせてはならない。

なんとか犯人に取り入り、隙をつかなければ。

チン、と軽い音を立ててエレベーターが止まり、ホクガンを希望の階まで降ろした。

薄暗い照明に浮かび上がる白い廊下には他の住民の気配はない。

ホクガンは静かな足取りで4号室まで来ると大きく深呼吸してインターホンを押した。

ここにテンレイがいる。

必ず助ける。

助けたらまた冗談でも言っただけで笑わせてやるからな。

テンレイの笑顔だけを思い浮かべ、ホクガンが2度目の深呼吸をし

た時、急にドアが内側から大きく開いた。意表を突かれたホクガンだったがすぐに手でドアを抑え犯人だろう人影に拳を振り上げる。が、その手はガツチリと受け止められ、

「俺だ。ホクガン。」

犯人よりよっぽど恐ろしげなガツクがやや疲れた顔をしてホクガンを見ていた。

ア然としたホクガンだがすぐに我に返り、部屋に入りながらガツクに状況の説明を求めた。

「どついう事だよ。テンレイは？」

「奥でダイスと共にいる。犯人は捕縛し転がして置いた。」

ガツクが扉を開けると茫然として突っ立ったままのダイスとツンとしてソファに座っているテンレイがいた。

テンレイはホクガンに気づくと

「お兄様！」

と満面の笑顔で駆けより抱きつく。それを受け止めながらホクガンはガツクを見、固まったままのダイスを見た。

「いったい……何がどうなってんだ？」

48階4号室に着いたガツクとダイスはまず無言でベランダに降り、中の様子を窺った。部屋は真っ暗で何も見えない。が、人の気配もないようだ。

2人は顔を見合わせた。

ホクガンの予測が違ったか、それとも不測の事態か。

ガツクは今にもガラスを突き破って出て行きそうなダイスを強い目線で抑えつけ、耳を澄ましながらホクガンの合図を待つ。

「ガツク。」

ダイスがやっと拾える声で話しかけてきた。

ガツクのイラつきが再燃する。

「後にしろ。」

「こっちにテンレイはおらん。お前はどっじゃ。」

「・・・俺の所にもいない。ホクガンを待て。」

「もう待てん。テンレイが・・・！」

「落ち着けこのバカタレが。」

「これが落ち着いてられるか！テンレイに何かあったらワシは・・・！」

「バカモノ！静かにしないか！」

つい大きな声を出した2人ははっとした。

ついで別の部屋だろう大きな音がして何かが倒れる音がする。

瞬間ダイスが動き、窓を破ろうとしてガツクが足払いを掛け、倒れたところを上から抑えつけた。  
もがくダイスを抑えていると部屋に明かりがさし小さな人影がこちらに向かってくる。と思ったらベランダの掃き出し窓がカラカラと引かれた。

「あら、ダイスとガツクじゃない。久しぶりね。」

そこには普段と変わらないおしゃまな美少女が小生意気に微笑んでいた。

ガツク達はキッチンで気絶していた犯人だろう若い男を手近にあった紐で入念に縛り上げた時、インターホンが鳴り、ガツクが応対に出て行った。

「テンレイ……お前がのしたんか？」

「のしたんかって何？」

「……倒したんか？」

「ええ、そうよ。そこに大きなフライパンがあるでしょ？ご飯作ってあげるって嘘をついて殴ってやったのよ。その時貴方達の声が聞こえたの。もう少し早く来れなかったの？あんな重たいモノを持つはめになったのよ？」

「……それはすまんかったのう……。そうか自分で……。」

ダイスは自分のプライドやら男としてのなにかが地の底まで沈んでいくのを感じた。

その後、警察に通報したり、事情徴収をされたり、警察署で説教をくらったりして、家に帰れば親達がこの危険なバカ息子共に説教をし、やっと解放され軍校の宿舎に帰ってきたら今度は教官たちが待ち構えていた……。

「あの緊張感はなんだったんだろうな。俺達迎えに来ただけ？」

懲罰として飯抜きのうち中等部宿舎の清掃をしながらホクガンは疲れたようにモツプにもたれた。

「まさに無駄骨だったな。」

「……………」

「俺に似て優秀な奴だとは思っていたけどあそこまでとはな。将来とんでもない女傑になりそうだ。ははは。」

「軍部にスカウトするか。あれだけの胆力なら申し分なさそうだ。」  
「……………」

「本当に軍部一色だな、お前のド頭は。」

「軍人を目指す者が軍部の事を考えて何が悪い。」

「そういうことじゃなくてよ。……って昨日からやけに静かだな  
ダイス。」

「……………」

「コレどうした。」

ホクガンが親指でダイスを指し示す。

「テンレイが自力で解決したのがショックなのではないか？ずいぶん心配していた。」

ガツクも床を拭く手を止めて呆れたように挫折感で充満している友を見る。

「ああ・・・まあ、好きな女があそこまですごいと男として・・・」

「！」

「何？」

ガツクが遮り、ダイスが目を？いてホクガンを見た。  
ホクガンは2人の反応にニヤツとして

「ただのカンだったが引つかかったなダイス。・・・お前のテンレイに対する態度はわすかだが違うものを感じてな、もしやと思ってたんだよ。」

ダイスが呻きながらしゃがみこむ。

「本当か。・・・お前に幼女趣味があったとは・・・」

「あるわけないじゃろ！人を変態みたいに言うんじゃないねえ！」

「だが、テンレイは確か・・・いくつだったか？」

「5歳。」

「5歳だぞ？幼女ではないか。」

「テンレイだけじゃ！他の子供にはなんも感じんわい！」

人気ひとけがないとはいえ思いつきり幼女が好きだと叫ぶバカに2人は慌てて口を塞いだ。

「てめえ、このバカ。マジ通報されんぞ。」

「このバカタレが。そんな性癖があるとばれたら軍部に入れんぞ。」

普通に心配するホクガンとどこまでも軍部の事しか頭にないガツク。どこかがズレている。

ダイスが落ち着いたところで手を外す。

「……ワシだってな、あんなちっこいの、好きだなんて思いたくはないんじや。……じゃがのう……しょうがないじやろ。好きなんじや。自分じゃどうしようもない。」

ため息をつきながらズルズルと壁にもたれるダイス。そんなダイスにホクガンは肩を廻して

「まあ、兄としては複雑だけだよ、お前なら認めてやってもいいぜ。……ただし、手エ出すのは成人になってからだ。もちろんテンレイの承諾つきでな。」

「当たり前じゃ ボケエ！！ワシのこの感情はもつと純真なものなんじや！！」

「……しかし、よくわからん感情だな。あんなこうるさい子供を好くなどと……」

「うるっさいのう！！ほつとけ！！」

テンレイの印象など”やたらと突っかかってくるうるさい子供”ぐ

らしいかないガツクだが、将来もつとも周囲に理解されない感情を持つことになるのは夢にも思っていなかった。

まあ、主に被害を受けるのは周りの常識のある方々なんだが……

と言う事でダイスはテンレイを……あいつは今いくつだったか・

……俺達より10は下だったか？では27、8か。実に22年ほど想い続けている。ダイスはあの事件の後、急に精進し始めてな、授業にも真面目に出るようになり、訓練も集中してやるようになった。ホクガンにいわせると「テンレイに釣り合う男になるため」なんだそうだ。

……モモコ、もう寝ないか？

……その後の進展か？……会話をしているのを見た事があるから、意思疎通はできているのではないか？（台風の様な口喧嘩をただの会話と言い切るガツク）

……正直どうでもいいんだがな。（ぶっちゃけすぎ）

さあ、明日も早い。風呂に入って寝るぞ　モモコ。



4 - 3

恋バナ・・・？です（後書き）

私のなかでダイスは大人の余裕溢れるモテる男だったんですがね・・・  
・急激にへたれなうえ、幼女趣味の変態に変わりそうです。

#### 4 - 4 意地だつてあるんです

友好国を招待して行われる、レセプションの細かい日程が決まるとにわかには総所中が慌ただしい雰囲気変わった。

なかでも大変なのはテンレイ率いる奥の職員である。

毎年の事ではあるが、連日深夜まで職員達は目の回る忙しさだ。賓客の部屋割から晩餐会等のメニュー、催し物の準備などなど数え上げればキリがない。

ただ今年は軍部が手伝ってくれるため随分スムーズに事は運んでいった。

去年のレセプション中 軍部は警備などの担当で奥の仕事にはノータッチだったのだが、協定（と言っては大げさだが）を結んだ今、毎日奥の職員と一緒に会場中をまわり、力仕事はもちろん細かい事まで嫌な顔一つせず黙々と片付けてくれた。

最初はどちらも警戒しあい、その空気もぎこちないものだったが、何度も打ち合わせや作業をするうちに段々と打ち解け、まだ和気あいいいとまではいかないが割かし良い感じである。

ホクガンはというと総所の雰囲気良くなるにつれ、最初はまったくやる気のなかったレセプションにテンションが上がって来た。（やる気がないのも困るが、上がり過ぎるのも危険とまったく面倒くさい男である）自分が楽しめそうな催し物以外にもあれこれアイデアをだし、それがまた理になつていたり前の案よりぐんと良くなつたりしていて珍しく皆に感謝されていた。

テンレイは毎晩2、3時間ほどしか睡眠が取れていないがなんのその、奥の誰よりも元気に働き、また自分のドレスはもちろんモモコ

の夜会用のドレスやその場その場に合う服やアクセサリーなどを職員達と作ったりして生き生きと動き回っていた。

自分の長年の片思いがバレたと察したダイスはモモコがどう出るかと気が気でなかったが、平素と変わらぬモモコの態度にホツと胸をなでおろし、自身の提案した犬のレースの準備をしたり、ガツクと共に武道会への出場者を総所と他国から募ったり会場を設置したりしてその準備に明け暮れていた。

レセプションの日が間近に迫った頃、モモコはいつものようにガツクに抱かれ、ダイスと共に奥の中庭、噴水前にいた。

実は奥からも武道会の出場者を誰か出せないかとテンレイに交渉しに。

忙しいテンレイに合わせて動くのは必然なので2人と一匹は此処まで来ていたのだ。

「私が出てもいいわよ。」

テンレイが首を傾げて言い、ダイスとモモコ、そして補佐官のリンドウをギョツとさせた。

「わかった。」

あっさりガツク承諾。

(えっ！いいの!?)

「ちょっと待て!」

「ちょっと待って下さい!」

ダイスとリンドウが慌ててストップを掛ける。

「テ、テンレイは女じゃろうが！万一怪我でもしたらどうするつもりじゃ！いかん！」

「そ、そうですね！テンレイさんはそんな野蛮な大会は似合いません！」

テンレイとガツクは訝しそくに慌てる男2人を見る。

「テンレイの実力は軍部の実技・体力テストにトップで受かるくらいだぞ。雷桜にも引けを取らん。」

「そうよ、それに女性だって出場できるんでしょ？他国から誰か出るって噂を聞いたわ。彼女はよくてどうして私が駄目なのよ。それにリンドウ君？この武道会は軍部はもちろん、総所の士気を高め、他国に我が国の軍力を見せつけ尚且つ他国の力も試す事のできる貴重なチャンスなのよ？出場者はなるべく多い方がいいの。もちろん優秀な者がね。」

（ほえー テンレイさんってそんなに強かったんだあ。すごいな。ガツクさんがスカウトするはずだね。）

二の句が継げない2人と素直に感心するモモコ。

ホクガン譲りの饒舌で2人を圧倒したテンレイは別の打ち合わせに去った。

それでも何とか止めようと今度はガツクに訴える2人に

「ではリンドウ、お前も出てはどうだ。なかなか強いとカインから聞いている。」

ガツクが面倒くさそうに言った。そして、

「リンドウとお前でテンレイより強そうな奴を倒せばいいのではな  
いか？リンドウとホクガンとで手を結べばいい。この大会はテンレ  
イが言った通り見せつけたり、試したりが目的だ。ドミニオンの誰  
かが勝者となればいいんだからな。」

今度はダイスに向かって言う。

ダイスはリンドウを見た。その目はリンドウに懇願している。

（お願い！お願い！お願い！）

リンドウは顔がいいといつてもごつい大男からお願い光線を受けて  
ドン引きしたが、テンレイを間接的にだを守るにはこれしかないだ  
ろう。上司は言い出したら聞かない。

「わかりました。僕も出場します。ダイスさん、共に頑張りましょ  
う。」

ため息をつきながら承諾する。

ダイスとて男にしかもテンレイにほのかに好意を抱いてるリンドウ  
になど頼みたくはないが、テンレイのためならば背には腹は代えら  
れない。

味方は多い方がいいと今度はガツクにお願い光線を送ろうとしたが、

「俺は組まんぞ。」

先手を打たれる。

「なんでじゃ！テンレイがどうなってもいいんか！ガツク！」

リンドウも抗議しようとしたがガツクが何だというふうにごちらを

見ると目をそらした。

「その覚悟もあって出るんだろうが。なぜ俺が協力せねばならん。」  
「テンレイはお前の妹も同然じゃろうが！冷たいぞ！」

「何度も言うが、あんな扱いづらいうるさい妹なんぞ俺にはいない。」

（何回も言ってるのかな？健気だなあ、ダイスさん。）

モモコは必死にガツクに協力依頼をするダイスを微笑ましく見た。

（ガツクさんは私が出るって言ったらなんて言うかな？ダイスさんみたいに心配してくれるかなあ。）

モモコはちょっとイタズラ心が湧き、ガツクに言ってみる事にした。

「にゃー！（ガツクさん！聞いて！）」

ガツクはうるさく喚くダイスを無視し、モモコが何か伝えたがっている事に気づくと懐からABC表を出し、地面に敷いた。モモコはちよこまかその上を歩いた。

「で・た・い。」

それを見た瞬間、ガツクの頭に警戒信号が最大音量で鳴りだす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・この中庭からか？」

ううん。モモコは首を振る。

（待てまだ何も言っていない。そう決まっていはいないのだ。落ち着け俺。ダイスの様に騒ぐのはみっともな・・・・・・・・）

ガツクがかろうじて自分にブレーキを掛けた時、

「なんだお前も出たいのか。面白そうだな　いいぞ。」

どこから生えたのかホクガンがいつの間にか居てモモコに許可を出してしまった。

(え、いいの?)

「待て!!」

ガツクが叫ぶ。

「どうした。」

いきなり大声を出したガツクにホクガンは訝しそうに見た。

「このボンクラが！モモコが戦えるわけないだろうが！見る！この細い手足！細い首！小さな体を！これでどうやってお前たちのような奴らと対峙できるのだ！それを面白そうだと！モモコに傷一つでもつけた奴らは全員殺してやる！！」

ダイス以上の慌てぶり（いやこれはもはや恐慌と言っているかもしれない）にモモコやダイスはもちろん周りで作業していた人達も安然とする。

なかには怯えてる者もいた。

ブレーキなどブツ切りお前から殺す！といった風のガツクに

「ガツク・・・落ち着けよ 冗談だろうが。出すわけねえだろ？こんなのだ。」

呆れたようにホクガンが言う。

ムッ！



モモコはそう言われるだろうと思ってはいたがホクガンの言い方にムカツとした。

反対にガツクはホツとして

「だろうな。モモコには最初から無理だとわかっているのに俺とした事が・・・」

ムカムカツ！

モモコはますます頭にきた。ABC表の上をまた歩く。

「で・き・る。」

ダイスが読み上げる。

男3人は顔を見合わせた。

ホクガンがフツと小馬鹿にしたようにモモコを見て笑い、

「出来るわけねえだろ？お前は猫なんだぜ？どうやって人間と、しかも鍛えた奴らと戦うつつうんだよ。」

ダイスも聞き分けのない子供に言い聞かせるように言う。

「モモコ、悪い事は言わん。やめといた方がええぞ。ワシらのように手加減なんぞせん ひどい奴らもおるからのう。」

「無理だ。諦める。」

絶対許さん！という感じでガツクが断言する。

カッチーン！

モモコは完璧に頭に来た。今度は足音も（まあ猫なのでしないが）荒く表の上をどすどす歩く。

「ば・か・に・す・る・な・で・る・・・馬鹿にするな、出る、か。」

ホクガンが今度は読んだ。

「モモコ何度言ったらわかる。お前には無理だ、俺が許さん。」

頭ごなしに反対するガツクにモモコも意地になる。と同時に少し悲しくなってきた。

ベーンだ。モモコは舌を出してガツクに抗議する。

そしてダッシュで逃げた。

！！

突然の逃亡に誰もが固まったがガツクはすぐさま追いかける。が、小さい猫は生垣やら隙間に隠れてしまえばおいそれとは見つからない。  
瞬く間に見失う。

「モモコ!!!」

ガツクの焦る声が辺りに響き渡るがモモコの姿はない。  
ガツクはしばらく捜していたが、埒が明かないとばかりにカインに連絡を取った。

「カイン、手の空いている雷桜隊全員を引き連れ、奥の中庭まで来い。モモコが逃げた。全員で捜せ。」

それだけ言うと一方的に切り、自身は足音を消し気配を消しながらモモコ捜索を開始した。

遠ざかるガツクの焦燥に満ちた背中を見送りながら、

「見た? あんなに焦ったあいつ見たの初めてかもしんねえ。それにしても怖いな」 捕まった後のモモコの運命はいかに。」

「ワシもああいう風に見られちよるんかのう。気をつけんといかんなア。」

「いや、あれは特別だろ。お前は普通だと思っぜ。」

「お前の普通は当てにならん。さて、ワシらも捜しに行くか。ガツクより早く見つけられるといいがの。」

「だなあ。監禁されちゃったりして。……自分で言っただけなんだが洒落にならん事が怖い。」

「おい、口に出して言うんじゃねえ。本当になったらどうするんじ

「やア。」

2人はそこまで喋ると後は無言で足早に去った。

しばらくして3人が去った中庭の隅から、ピンクの猫が辺りを窺いながらそつと這い出てきた。

誰もいない事を確認するとため息をつきモモコはしゃがみ込む。

モモコだとわかってている。自分が武道会などに出れるわけがないことなど。それにホクガンはどうだか怪しいがモモコのためを思っ  
て言ってくれることも。

怒りが収まると今度は悲しみがモモコの小さな胸を満たす。

（そうだよね・・・私 猫だもん・・・人間じゃない。なにム  
キになってるんだろ？そんな事わかりきってるのに・・・。）

ちよっとしたイタズラ心で言ってみただけなのにどうしてこんな事  
になるのか。

どうしてこんな悲しい気持になるのか。

答えが出る日はもうすぐ。

モモコは前足で頭を抱え世界の全てを遮断するかのよう丸まった。

どれくらいそうしていただろうか。

モモコは自分に寄りそう暖かい何かに気がつく。

勢いよく立ちあがると自分よりはるかに大きい軍用犬・シヨウが暖かい眼差しで見下ろしていた。

「またしよぼくれおつて。今度はどうしたんじゃア。」

モモコはシヨウが突然現れたかのように感じたがふと空を見れば日が結構落ちている。

慌てて周りを見渡すとモモコとシヨウから3mほど離れた所にダイスとホクガンに腕を抑えられているガツクが見えた。

その眼差しはモモコに真つ直ぐ向けられモモコはちよつと怯み、そそくさとシヨウの後ろに隠れ、ピタツと体を密着させた。シヨウがピクツと身動きする。モモコはそんな事にはお構いなく深呼吸をしてからちよろつとガツク達を窺った。

・・・なんか前よりガツクが前進しているように見えるが気のせいだろうか。

・・・そしてガツクを必死に抑えるダイスとホクガンが少しずつ引きずられているように見えるのも気のせいだろうか。

・・・そしてガツクの眼差しが前よりきつく、その大きな体から揺らめくように漏れる黒い何かが見えるような気がするの・・・  
気のせい・・・にしたい。

モモコは戻ってきた気まずさと意固地からますますシヨウにひつき、シヨウが固まっているのにも気がつかない。

「モモコ……。」

地を這うどころか地獄の底をさらってるがごとの声音だ。

モモコはビクツとしたがカラ意地を張って、ツーンとしてみせる。

（あああたしにだって意地の一つやふふたつはあるんだから。ねねねだからって舐めんなよ！）

体どころか思考までも震えがちだが引つ込みがつかなくなったモモコはもう無視できない程近いガツクを睨んだ。（可愛いだけ）

ガツクはしばらくそんなモモコを見ていたがフウとため息を漏らして力を抜いた。

同時にダイスとホクガンもやれやれというようにガツクを離す。

「わかった。」

ガツクは諦めたように目を瞑る。

へ？

モモコが首を傾げた。

「武道会に出てもいい。」

「にやつ!?!?（ええ!）」

「おいっ!」

「ガツク！」

「うう！？（大将！？）」

2人と2匹が声を上げる。

ガツクはそれらを見無視してモモコには滅多にしない厳しい顔で見つめると言う。

「だが、条件がある。」

4 - 4 意地だつてあるんです(後書き)

まあ、皆さんお気づきでしようが……



4 - 5      なんかスイッチ押ししたようです

条件……

モモコは緊張しながらガツクをじっと見つめた。

緊迫しているかもしれない場面な最中、ホクガン、ダイス、シヨウはすごーく嫌な予感がした。

モモコが絡んだガツクは暴走する。

先ほどもモモコが見つかるまで散々総所中を捜しまわったのだ。

結局モモコを見つけたのはダイスの閃きで（遅い）出勤したシヨウであった。

ガツクがじりじりとした緊張感のなか漸くせうせう口を開く。

「条件とは……俺と連名で出る事だ。」

……え？ えっと……そんな事できるの？ タッグって  
いう事に……なるのかな？

モモコが……となっっている頃、

やっぱりねー！！

ホクガン、ダイス、シヨウは悪い予感が直球ド真ん中で抉り込むかのように飛んできたのがわかった。

……ただでさえ強いガツクはモモコを守るためさらに的確に相

手を狩る、いや倒しにいく事だろう。モモコはガツクの弱点になるかもしれないが万が一にも相手がモモコにかすり傷ひとつでもつけたら・・・相手がどんな目に合うかは想像に易くない<sup>やす</sup>。

ダイスがお前の得意の話術でどうにかしると目で訴えてくるが、ホクガンだとて出来る事と出来ない事がある。むりり〜 というふう  
に首を振った。(ちなみに2人とそうは見えないがシヨウの顔色は青い)もしここでガツクとモモコにそんなのルール違反!インチキ  
だろ!と言ったところで ならば出場しないと言い出しかねない。  
お前より俺らの方が強いんだもんねと他国を牽制する為には軍部  
最強の男が出ないと困るのだ。

さてよ。ホクガンはこのタッグのメリットに気がついた。

武道会中、モモコに細心の注意を払うであろうガツクはどんな相手  
だろうと(たとえそれが自国の国主であろうと)ドミニオンの勝利  
を確実にしかも圧倒的に勝ち取るだろう。それは見方を変えれば最  
高のデモンストレーションになるのではないか。

(モモコを懐に入れたガツクが負けるなんて考えられねえからな。  
それにあいつ武道会どころか接待自体どうでもいいと思ってるから  
なあ・・・モモコをいいように動かせばガツクもちつとはマシにな  
るかもしれないな。)

実はガツク、ダイス達に「ドミニオンの誰かが勝者となればいい」と  
言っているように武道会にまつたくやる気がない。有事や訓練で  
は圧倒的な力を惜しまないガツクではあるが、催しモノ的な事には  
いつもの「どうでもいい」で適当に流し、場合によっては参加しな  
い事もあるくらいだ。武道会に参加しているのもモモコの提案だけ  
らによる大きい。

「おい。」

ガツクはうーんと考え込むホクガンに声を掛ける。

「聞いていたな。俺とモモコは連名で出る。特例という事で認めておけ。」

ホクガンはガツクが暴走する危険を踏まえてもドミニオンに利はあると判断し、

「わかったよ。俺と当たった時は手加減よろしく。」

ゴーサインを出した。

「テンレイにもじゃぞー！」

ダイスも慌てて叫ぶ。

「試合中、極力モモコに近づくな。どんな動作でも排除する。」

さらりと恐ろしい事を言いながら、モモコの前にしゃがみ込む。

「モモコ、聞いた通りだ。俺としてはお前が諦めてくれればいいんだが。」

顔を顰めながらガツクはモモコに手を伸ばした。

モモコは反射的にガツクの手を見た。大きな手だ。その手はいつも自分に触れ、撫でてくれる。

ガツクが自分の目を見つめながらゆっくり・・・優しく・・・

・・・  
ボンッ!!

唐突にモモコは顔が爆発したように熱くなるのを感じた。

(な、ななに考えてんのよ!か、かかか からだ なんてしょつちゆう撫でられてるし!触られてないところなんて・・・どこも・・・な・・・い・・・ぎゃあああああ!!!)(

モモコはひっついていてシヨウの背中といい腹といいめちやくちやに叩きながら身もだえる。

「モモコ?なにしてるんじゃ?・・・と言うかもちつと離れてくれんか・・・。じゃないとわしの命が危うい。」

シヨウはガツクの殺意のオーラを間近に受けながらも、モモコが落ち着くまではと逃げ出したい気持ちを抑えてじっとしていたがそれももう限界に近い。ガツクが どけ というふうには首を振るともう素直にどいた。

ガツクとの間にあつたシヨウという名の衝立がなくなるとモモコはますます焦る。

( わぁぁぁ! どうしよう! なんかわかんないけどどうしよう! )

「モモコ?」

ガツクが訝しそうにモモコに声を掛ける。その低い声も今のモモコには過敏に作用する。

モモコはくるっとガツクに背を向けいきなり駆けだそうとして、

「何処へ行く。」

気がつくともガツクの腕の中にいた。

あわわわわ・・・表情には出ないが焦りまくってじたばたするモモコに焦れたガツクはいつもより少し力を入れ抱きしめる。モモコの小さな頭はガツクの広い胸に押し付けられた。

ひいひい!!

「どうしたというのだ モモコ。願いは聞きいれた。まだ不満があるのか?だがこれ以上の譲歩はできんぞ。」

ガツクは不機嫌そうに言うとホクガン達を無視してさっさと帰った。

残された2人と1匹の男たちは、

「俺達って何役?」

「完璧脇役じゃろうな。」

「何なの、アレ。」

「モモコ、様子がおかしかったのう。」

「どうしたんだろうなあ。シヨウなら知ってるかもな。」

ホクガンはシヨウをチラリと見た。  
シヨウは視線を向けられたのを無視してわざと大あくびをしてみせる。

（モモコの想いはモモコだけのもんじゃ。たとえ一時のものだとしてもなア。）

人と動物の思考は異なる。

シヨウはモモコの気持ちがい主に対する好意以上のものである事は察していたが、一過性のものだと思っている。やがて番<sup>つが</sup>いを捜すシーズンになれば、あっさりガツクへの想いは消え、番いとその子供達にモモコは愛情を注ぐだろう。それが動物の本能というものだ。シヨウはモモコの子供達と遊べる日を楽しみに待つ事になっている。

それはモモコが普通の猫だったなら 叶っただろう。

次の日、モモコは雷桜隊専用屋内訓練場にいた。  
目の前にはTシャツにラフなスウェットを履いたガツクが仁王立ちしている。

「今日からお前を鍛える。とはいっても戦えるようにという意味ではない。」

モモコはガツク言葉をほけつと口を半開きにしながら聞いていた

が、次の言葉に気を引き締めた。

「俺はお前に傷ひとつでも負わせるつもりはないが、お前が俺の動きについてこれなければそれも危うくなる恐れがある。」

ガツクはモモコが神妙に頷くのを見て少しだけ口角を上げた。しかし、それをさっと消すと厳しい顔でモモコを抱き上げ自身の肩に乗せた。

モモコは急にガツクの顔が近くなったので慌てたが、すぐ注意される。

「動くんじゃない。モモコ、肩から絶対落ちるな。落ちたとしても俺の体からなるべく離れるなよ。背や足、腕、どこでもいいから止まれ。思い切り爪を立てても構わん、決して下に落ちるな。」

(ええー！思い切りって・・・できるかな？下に落ちたらどうなるんだろ？踏まれたりするから?)

ガツクは大男だけあって肩も広い。モモコが乗っても安定感はあるのである程度の動きにはついていけそうだ。

間近にあるモモコの顔が疑問系に傾くとガツクの頬をモモコの毛がくすぐった。

ガツクの身の内に痺れるような何かの感覚が流れる。ガツクにとってモモコの重さはないも同然だが、こうして いや触れたり抱き上げている時いつも不思議なほど充足感という重さを感じる。モモコが存在し自分に触れている。それだけで。

「落ちるな、というのは戦っている最中、落ちた時の対処が他より（ずれたり等）若干遅れるからだ。もちろん落ちたお前に攻撃がいく可能性もある。させんがな。」

ガツクから落ち、1匹になったモモコに攻撃を加える……そんな神をも恐れぬ暴拳をする奴らがいるだろうか？少なくともここドミニオンには皆無だろう。なぜなら攻撃するそぶりをたとえ誤ってしてしまったとしてもその瞬間、キレたガツクによって前人未到の地へ到達（あの世？）、死より恐ろしい目に合いそうだ。

「準備はいいか？軽く動くぞ。」

ガツクがモモコに声を掛け、真横に飛んだ。

その瞬間。

「ぶぎょー！」

モモコは謎の鳴き声と共に5メートルほど飛んで行った。

.....



「モ、モモコ!!」

焦るガツクの声が屋内に響く。

ズザザザア・・・モモコはうまく着地し床に爪を立てて止まった。同時にガツクが追いつく。

「大丈夫か モモコ。」

心配そうに眉をひそめたガツクがモモコを抱き上げる。

そのモモコの顔は ぽかーん としていた。

(あ、ありえないでしょ！なんだあれ！あれで軽くう？ものすごく速かったぞ！！周りがぶれまくって見えなかったもん！！)

モモコはガツクが軍部で(だけではないが)恐れられてる一端がわかったような気がした。

口が全開で茫然としているモモコにガツクは、

「やはり、やめた方がいいのではないか？意地だけでどうなるものではないぞ、無理などさせたくない。なんなら俺も出場をやめ、ホクガン達と一緒に応援してもいい。どうでもいいが。」

好機とばかりに言い聞かせる。

無理など〜という言葉にモモコはハツとした。

むうつという意地なのか怒りなのかわけのわからない気持ちがこみ上げる。

(無理なんかじゃない！さっきは想像以上のスピードでびっくりし

たけど、今度はひつついてみせるもんね！)

フンツ！と鼻息も荒く、ガツクを睨みつける。

そんな可愛いやる気を見せられてはガツクも頬が思わず緩みそうになるがぐつと我慢し

「では、もう一度。さっきと同じように動く。」

訓練？を再開した。

モモコにもどうしてこんなに武道会に出たいのかわからない。

戦ったことなど もちろんないし、攻撃されるのも するの痛いの也大嫌いだ。

なのにどうして？わからない。わからないけど自分を突き動かすこの衝動は正しい気がするのだ。

コレデアッテル。

自分の心に従ってみよう。モモコは決めた。

この日一度もモモコはガツクの肩に止とどまれなかった。

ガツクはモモコにレセプションの準備の合間を縫って訓練を施した。落ちないは原則ではあるが、ガツクがどんな動きをしてもある程度ついてこれるように。

モモコは訓練を必死にこなしながらこんな順序の口だろつなと思う。試合中もつと早くなるに違いない。自分について行けるのだろうか？自分のせいでガツクがケガをってしまったらどうしよう。

モモコはもう何回目かになるかわからない落下中　はた　と思いつた。

落ちるモモコをキャッチしたガツクはモモコが物問いたげに己を見つめているのみで

「どうした？今日はもうやめにするか？」

疲れたかと思いきわった。

ううん。モモコは首を振ってべしべしとガツクの胸を叩く。（モモコにあった謎の照れは訓練をしているうちにどこかへいつてしまった。）

察したガツクは荷物の中からABC表を取り出すと床に敷きその上にモモコを降ろした。

「が・つ・く・さ・ん・け・が・わ・た・し・の・せ・い・ど・う・し・よ・う。」

ガツクさん　ケガ　私のせい　どうしよう

ガツクは心配そうに申し訳なさそうにうつうつとした瞳で己を見上げるモモコに

キタ。

ザシユツ・・・！

いきなり崩れ落ちるガツクにビビるモモコ。

両手両足をつき、ちょっと震えているようにも見える。

(ど、どうしたの ガツクさん！しっかりして！お腹すいたの！？  
貧血！？)

相変わらずズレまくる思考をするモモコ。

にゃーにゃー！と自分の周りをうるうるするモモコにやっとの思い  
で体を起こしたガツクは、

「大丈夫だ モモコ。俺は絶対に負けん。この俺の全ての力を使っ  
て戦う事を約束する。心配は無用だ。」

モモコに圧倒的どころか死屍累々になるだろう武道会を宣言した。

「にゃう・・・うみ？(えっ それは・・・どうなんだろう?)」

(なんだか知らないけど取り返しのつかない事になってしまったよ  
うな気がするぞ……。普通に心配しただけなのに……。なんで?)

今だガツクに対する己の破壊力を理解してないモモコ。

のちに武道会で「お前なんかしただろ？」とホクガンに詰め寄られる。

数日後、ドミニオンは華々しくレセプションの当日を迎えた。

4 - 5      なんかスイッチ押したようです（後書き）

キレたガツク・・・作者も怖いんですが。

「ほれ、我が国の友好国が入ってきおったぞ。接待の始まりじゃア。」

煌びやかに飾りつけられた総所正面入口に到着した友好国5カ国代表団をシヨウが行儀悪く顎で指し示した。

モモコは異国の人を見るのは初めてだ。興味津津で窓にへばりつき  
ほおー と感心する。

モモコは同じ留守番組のシヨウが「友好国がよく見える」という総所正面入り口とは反対の建物に来ていた。

モモコは代表団が続々と総所門に入って来るのを眺めながら出迎える側のホクガン達を見た。

ホクガンを真ん中にテンレイがその横に立ち、その後ろを守るようにガツク、ダイス、大将達が並んでいる。そしてずらりと立礼した軍部の将校、隊員達。

式典用のコートを着、辺りを隙なさそうに窺うさまは平素にはない緊張感が漂っている。

モモコはガツクを目を凝らして見た。何十メートルも離れているので定かではないが、不機嫌そうな顔をしているようだ。

（あれじゃあ接待じゃなくて、ケンカ売ってるみたいだよ。いや、ガツクさんなら脅しか？もう・・・大丈夫かなあ。）

モモコは呆れながらも心配そうにガツクを見、先の一悶着を思い出した。

（1時間前）

「断る。」

即答したガツクに呆れたような視線がそこから注がれるがガツクはそれを平然と無視した。

「あのなあ、お・ま・え・は大將だよ？しかもこの国最強の部隊雷桜隊の。その大將がにゃんこを抱っこして各国を出迎える気か？」

「何も問題あるまい。」

「ありまくりじゃ ボケ！仕事なんじゃぞ！身内ならともかく他国に（その姿）晒されるか！」

ダイスがいつもと逆の立ち位置でガツクを叱った。

事の起こりはホクガンが

「まさかとは思いがモモコを連れて出迎える気じゃないだろうな。置いて行けよ？」

と言い、そのまさかの返答をした男から始まる。

それでもモモコと離れたくない！とわがままというかどうかどうしてくれるようこの男性的な発言を繰り返す大男に鶴の一声が出た。

「みゃーっお！ふぎぎぎ！（こら ガツクさん！お仕事でしょ！わがまま言わない！）」



ガツクよりよっぽど大人な事を言い、ガツクの膝から飛び降りた。

「・・・・・・・・。」

見る間にガツクの不快指数が上昇する。

それはダイスが連れてきたシヨウにモモコが挨拶をしにととと走り寄るのを見ると瞬く間に跳ねあがった。

「シヨウさん！今日はよろしくね！」

「・・・・・・・・ああ。」

（わし、今日という日を無事に終えられるんかのう。数時間でえらく寿命が縮みそうじゃ。）

シヨウは犬相手に本気の圧力を掛けてくるガツクを見ない様にしてモモコに挨拶を返した。

「お前ね・・・・・・・・まあいいや。言っておくがガツク、出迎え時だけじゃなくて晩餐会もモモコは留守番だぞ。」

ホクガンが釘をさす。まさかのまさかがあるかもしれないので指しておかない事には危ない。

ガツクはシヨウを睨む眼力を緩めないままホクガンに言い返した。

「わかっている。公式の場ではな。」

今日を乗り切れれば後はずっと一緒にいられる。（武道会が始まればモモコは晒され、舞踏会が開かれる頃なら慣れる・・・・とはいかないまでも認識はされるだろう）

ガツクはイライラしながらも我慢することにした。

時間になり、モモコとの別れを惜しむ。

「モモコ・・・シヨウに必要以上に馴れるんじゃない。いいな。」  
(ガツクさん・・・最近マジおかしいよ？大丈夫かな。)

モモコとてガツクと離れたくはないが、仕事である。しかも数時間。今生の別れの様に抱きしめるガツクに呆れた。

「バカやつちよらんで行くぞガツク。時間じゃア。」

ダイスも呆れて声を掛ける。

ガツクは最後、シヨウに無言の圧力を掛けると(・・・・・・・・・・)。  
コートを翻して出て行った。

「モモコ、あ奴らの顔をよく覚えちよれ。決して気を許すんじゃないぞ。」

シヨウの声にもの思いから覚めたモモコは顔を上げた。  
窓から見えるのはひと際豪華な一団だ。仰々しい恰好で慇懃にホクガンに挨拶している。

「何処の人達なの？」

「ドミニオンを属国としていたゼレン国じゃ。友好国とは名ばかり。今だにドミニオンを狙っており。」

モモコは注意してじっとゼレン国代表団を見た。  
シヨウは声を低くして、忌々しそうにゼレンを睨んだ。

「中央にいる派手なバカ鳥みたいな男が皇太子。隣にいるのは大勢いる兄弟の内の一人じゃろう。それとあの人相の悪い奴らがゼレンの軍隊。今回数が多いのは武道会があるからじゃろうなア。モモコ、気をつけろよ。あいつ等は酷い事を平気でやる連中じゃけえ、ガツク大将なら大丈夫だろうが、何が起こるかわからんからのう。」

ゼレンの屈強そうな軍人の一人が、力を誇示するように何かをガツク達に叫んでいる。

（怖っ！あんなのと当たるかもしれないの！？）

モモコは今さらながらに後悔してきたが、ガツク達が事も無げに対応しているのを見ると、ちょっと心が落ち着いた。

ゼレン国がふんぞり返って総所に入っていくのを見てみると、最後の一団がやってきた。

「モモコ、ベリアル帝国がきおったぞ。あれは本当の友好国じゃ。」

シヨウの声は弾んでいる。珍しい事だ。モモコはシヨウの厳しい顔が緩むのを見て、

「シヨウさんがそんな顔するの珍しいね。好きな相手でもいるの。」

ちょっとからかってみた。

するといきなりシヨウが立ち上がり動揺した大声でしかもどもりながら言い返した。

「い、いるわけないじゃろ！あんなのっ……わしの好みとは正反対じゃ！プリシラなんぞ！」

「そっかぁ プリシラさんっていうんだね。ふんふん。」

（しまったぁぁ！）

慌てるシヨウを放っておきモモコは、プリシラであろう犬を捜した。

「シヨウさん、あの犬？」

シヨウは真っ白な犬をモモコが指すと、諦めたように頷いた。

「ああ。そして側に立ち、国主と握手を交わしているのがワイズム王、コロナ妃じゃ。彼らはこの友好国で一番大きい国でう。わざわざ王が来るくらいじゃからドミニオンと親しい程がわかるとうもんじゃない？」

あの人達はいいい人！モモコは己の頭にすっかり叩き込んだ。  
と、変な人を発見。モモコのアレに関わったら面倒くさそう！レーダーが感知した。

「ねえ、あの大きい人誰？なんかガツクさんに近い人。」

シヨウはガツクに間近に顔を寄せ腕を大きく広げながら何事かを主張している、ガツク以上に大きい人物を見てため息をつきながら説明した。

「あれか……帝国の第一軍隊隊長のルーザー・ベントじゃ。見た通りの暑苦しい奴での、ガツク大将を勝手にライバル宣言、これ

まで公式でも非公式の試合でも何度も負けとるのに懲りもせず勝負を挑んでくる迷惑な奴じゃ。大方、武道会の話でもしとるんじゃない。

「ふうん。強い？」

「強いぞ。帝国の軍隊長を務めるくらいじゃからな。」

そこまで話した時、ガツクの周囲がザワツとなり、ベントの後ろにいた女性がベントの背を叩いて何事かを言うのが見えた。と、ホクガンが何か言い、女性が何か言っている。ホクガンは領き王に何か言いながら総所のホールへ促した。ガツク達大将や帝国の代表団も後に続く。

「なんか 言いあってたね。どうしたんだろ？」

「さあなア。」

(ベントの奴、ガツク大将の逆鱗 (モモコ) に触れおったな。気の毒に今度も負けじゃな。)

シヨウの判断はドンピシャ。

ベントは、王の挨拶が済むと一目散にガツクに近寄りうんざり顔のガツクに構わずまくしたてた。

「久しぶりだな！ガツク！貴様と最後に相まみえたあのグランモアの春から7ヶ月後！再び貴様と戦える日を楽しみにしていたぞ！！」

やまびこが返ってきてそうな大音量でまくし立てるベントにガツクは「そつか。」

と言葉少なに返した。長く返事をすればそれだけ長く返って来るのでもうコイツへの返事は短くすべしという事になっている。

「ところでガツク！出場者名簿にお前だけが連名だぞ！どうしたというのだ！何かよんどころない事情でもあるのか！！水臭いぞ！お前の唯一の好敵手であるこのベリアル帝国第一軍隊隊長ルーザー・ベント！！どんな事でも相談に乗ろうではないか！！さあ！！」

右手を大きく広げ左手を胸に当ててガツクを見下ろした。

「誰が唯一だ……」

ガツクは低い声で早く消えろとばかりに言う腕を組み、ベントを見上げて話した。

「事情というほどではないが、俺の飼い猫と共に闘う事になっただけだ。まあハンデみたいなものだ。」

ハンデ？最強の反則アイテム、もしくは伝説の武器に値するの間違いないじゃないのか？武道会に参加するドミニオン側の選手達は思った。

「まことか、ホクガン。ガツクは猫と共闘か。」

面白そうに目を細めながらワイズムがホクガンに問う。ホクガンも苦笑しながら頷いた。

「ええ まあ。」

伝説の武器（モモコ）投入だろ！のドミニオン側。だがベントの考えは違ったようだ。

「な、なんだとっ！貴様ア！神聖なる俺達の戦いに飼い猫なんぞを出して遊びのつもりか！！」

ガツクの頬がピクツと引き攣った。

「なんぞ？」

やばい……ホクガンをはじめドミニオン側に（バカバカしいが）緊張が走る。

「そつだ！猫など婦女子が愛玩するものではないか！目を覚ませガツク！真の軍人にそんなもの必要ない！ただちに猫を捨て去りドミニオンの大将としての誇りを持てえ！」

「……言いたい事はそれで終わりか？ベント。」

ベントが熱弁を振るえば振るうほどガツクの殺のオーラが増している。

もう やめてえー！！ドミニオン側からエア・シャウトが（見えな  
い叫び）響き渡る。

「ベント軍隊長、彼が雷桜隊大将のガツク・コクサ殿ですか？」

後ろに控えていた軍人女性がベントに話しかけた。

「そうだ。今は腑抜けになってしまったようだかな。」

ベントの空気が読めない言動にガツクの眼光は物理的に人を殺せるレベルに進化しそうなほど凶暴になった。

軍人女性は1歩歩み出し礼をとった。

「初めまして ガツク・コクサ殿。私はベリアル帝国軍第一軍隊副隊長を務めているエルヴィ・フレクです。今回の武道会、楽しみにしております。ぜひお手合わせ願いたいです。」

ガツクはうるさく「接待、接待」と耳元で囁くダイスの腹に後ろ肘を入れて黙らせ、エルヴィを見た。

エルヴィは青ざめちょっと後ろに下がりがけたがしつかり目を合わせ（拍手）ガツクと対峙した。

「・・・お前もベントと同じ考えか？」

今にもここで殺戮が始まりそうな声音がエルヴィに対する第一声。

「おおー！！これは珍しい！帝国軍にしかも第一軍隊の副隊長とはすごいですな！まだお若くてその地位とは！さぞお強いんでしょうね！」

ホクガンがいきなりワイズムに大声で語りかけた。

ワイズムはニヤニヤしながらもホクガンに合わせる。

「すごいだろう？フレクは元はコロナ付きの近衛兵だったのだが、その腕の高さにベントが熱心にスカウトしてな、瞬く間に副隊長に



まで上り詰めた。強いぞ。」

ワイズムはエルヴィにホクガンにも挨拶をするように目で促した。エルヴィは小さく頷きホクガンに向かって礼をとった。

「エルヴィ・フレクです。名簿には国主殿もご参加の様子ですが、ケガなどに充分注意した方がよろしいかと。」

「こら フレク！出過ぎているぞ！」  
「申し訳ありません。」

ベントに素直に謝るエルヴィ。しかしホクガンはニヤツと笑うと

「もちろん、重々承知している。私も貴方と対戦するのが楽しみだ。ぜひ当たりたいものだ、ガツクの前にね。」

挑発する。つまり、ガツクと当たればお前は負けて俺とは対戦など出来もしないだろうと知っているのだ。

エルヴィの額に青筋が浮かんだがホクガンはワイズムとコロナに近況を聞きながらをホールへと促した。

続いてホールへ入ろうとするベントとエルヴィにガツクは

「目を覚ますのはお前たちの方だ。」

と言い、突き殺して壁に縫いとめるかのような一瞥をくると足早にホクガンの後ろに着いた。

ベントはフンとしただけが、エルヴィは今度は息を飲み少し手が震えた。

やれやれという風にダイス達がガツクの後を追う。

その後の晩餐会で、ゼレン国にもモモコの事をバカにされたが、それを前にしても異様に静かなガツクにホクガン達は嵐の前のなんとやらだな・・・とため息をつき、軍部の皆さんは戦々恐々とした。

ただの嵐だったならいいがモモコが絡んだガツクの場合前代未聞の大災害になりかねない。

晩餐会は粛々と終了した。

自宅に帰ってきたガツクを見たモモコは何かあったな！とピンときた。

ソファに座るガツクの膝に自ら飛び乗り胸に前足をついて心配そうに問いかける。

「にゃーう？（どうしたガツクさん、ゼレン国にいじめられたの？）」

ガツクはモモコと引き離され（数時間）イライラしすぎて誰かれ構わず発散していた圧力をようやく解除すると

「モモコ……明日はあの身の程知らず共に目にものを言わせてやるからな。」

凄惨な薄笑いでモモコに言った。

……。

モモコはその夜、明日、死人が出ない事を夜空のお星様に祈った。

4 - 6 到着です(後書き)

ベント疲れた・・・  
次からバトルの始まりです

4 - 7 いいんですか？

今回初の武道会においてドミニオンからも友好国からも結構参加者が多かったためAからPまでをブロック分けし、予選を行う事となった。

そこから勝ち残った16人が本選へと出場する。

モモコはガツク達と共に予選が行われる屋内訓練場に行った。

広い訓練場には16のリングが用意され、たくさん腕に自信のある者たちで溢れかえっている。

「モモコ。」

モモコはテンレイに呼ばれそちらを振り返った。

テンレイは白のスポーツウェア姿でモモコを心配そうに見つめている。

「試合中は絶対ガツクから離れちゃ駄目よ？ガツクなんかズタズタにされてもいいから貴方だけは生き残るの。いいわね。」

テンレイさん……モモコは何とかえしていいかわからず曖昧に首を傾げた。

「ガツクとモモコなら大丈夫だろ。問題なのはガツクと当たった時の俺たちだ。」

ホクガンがグローブを装着しながらガツク以外を見やる。

「うまくブロック分けされるとええんじゃないの。」

ダイスもバンテージを巻きながら心配そうにテンレイをちらっと見た。

「それではブロック分けを行います！選手の皆さんはこちらへ集まって下さい！」

雪董の一人が集合をかけた。

今回、出場するガツク達や警備に忙しい波桔梗隊に変わって雨牡丹隊と雪董隊が運営、警備の合間に手の空いた雷桜や霧藤が手伝うことになった。

「それではルールを説明します。試合時間は3分、ギブアップするかリングから落ちた場合は負けとなります。武器またはそれに値するものの使用、急所への攻撃は失格となります。それでは抽選を行いますので渡された番号を持って各ブロックにてお集まり下さい。」

モモコはガツクが持っている番号を肩に乗ったまま見た。

74番。

「ガツク！おまえ何処だ！」

「何処じゃ！」

「うるさいぞ。Fブロックだ。」

「あぶねー！俺はEブロックだ。お前は？」

「ワシも外れた。Cじゃ。テンレイはどうした。」

「あいつHだったぞ。うまくバラけたな。」

ホツとするダイスの頭上を各ブロック第一試合開始のアナウンスが流れる。

「じゃあな、お互いの健闘を祈ろうぜ。あとモモコ、ケガするなよ？ガツクが暴れたら困るからな。」

わかってる。モモコはすっかり頷いた。脳裏に昨夜のガツクの薄笑いがよぎった。(自分のためだけではなく相手の命もある意味守らなければならぬ)

「モモコ、相手をしっかり見ちよれよ。怖いだろうが目は絶対瞑っちゃいかん。」

ダイスのアドバイスにモモコはフンツ！と気合を入れて応えた。そんな可愛いモモコに思わず頬が緩みダイスはモモコの頭をうっかり撫でようとして

「ダイス、これ以上は敵とみなすぞ。」

早くも臨戦態勢に入ったガツクの一言に空中で手を止めた。

あ、危ねえ・・・ダイスのこめかみに冷や汗が伝った。

ばーか。ホクガンが呆れてダイスを見やる。

この武道会中、常にモモコの周りを警戒するガツクは例え試合中であってもモモコに接触する(しようとしても)奴は容赦しない事になっている。

危うく試合前に死体となるところだったダイスはゆっくり手を元の位置に戻し、

「が、頑張れよモモコ。」

モモコに激励の言葉を小さく掛けてCブロックの方へと姿を消した。

「74番と35番はリングに上がってください！」

雨牡丹のレフェリーがガツクの番号を呼びあげた。

「おっ、モモコの初陣だな。」

ホクガンがニヤつきながらモモコを見やるが茶化すホクガンに言い返す気持ちにもならないくらいの緊張感がモモコの体をガチガチにした。

「おいおい 大丈夫かよ。固まったまんまだと落ちるぞ。」

あまりの緊張具合に思わずホクガンが心配そうに呟くがそれすらモモコの耳には入らない。

ガツクはリングに上がりながらそつとモモコの顔を自身の頬によせ低い声で優しく囁いた。

「深呼吸しろ モモコ、すぐ終わる。」

レフェリーが開始を告げるとすぐに相手が突っ込んできた。

それをガツクは予備動作ひとつなく相手の胸倉を掴むと自身の上体をちよつと捻り、相手の勢いを殺さぬまま場外へと投げ捨てた。

ズウウン・・・相手が落ちた重い音が響き、ハツとしたレフェリーが慌ててガツクの勝利を告げる。

「じよ、場外！74番の勝ち！」



す、すげえ・・・さすがだな・・・とあちこちからザワザワとあがる声を他人事のように聞き流しながらガツクはさっさとリングを降りた。

「さすが。」

ホクガンが笑いながらガツクとモモコを迎えた。

「当たり前だ。」

ガツクは呼ばれたホクガンがリングに上がるのを見ながら、モモコを肩から下ろし気遣う。

「すぐ終わっただろう？次もすぐ終わる。お前は俺から離れない事だけを考えていればいい。」

それまで何が何やらわからぬうちに終わった試合に茫然としていたモモコはガツクの声に我に返った。

(す、すごい・・・ほんとにすごいよ！殴ったり、蹴ったりするものばかり思ってたけどこんな勝ち方もあるんだあ。これなら私でもいけるかも・・・でも絶対落ちないようになきゃ。あとなるべくずれたりもしないようにしないと。)

決意も新たにモモコはガツクを見上げた。

ガツクは自分を強く見つめるモモコにフツと笑みをもらしてからモモコの顎をクイツと持ち上げる。

「そんなに気負わなくてもいい。お前が身構える前に全て終わらせ

るからな。」

モモコは目をパチクリした。

それは・・・その方がありがたいがなんか違う気がする・・・何が違うのかわからないけど・・・

もどかしくなったモモコは困った顔になったがガツクには伝わらない。

ガツクはその後モモコに何もさせず勝ち続け、

「ギブアップ！74番の勝ち！本選出場決定です！」

16ブロック中1番に本選が決定した。

よくやったとばかりに撫でてくれるガツクにモモコは割り切れない感情を持つ。

ガツクがモモコの乗っている肩をほとんど動かさず闘ってくれたお蔭でモモコは楽だったが、どこか納得できないのだ。モモコはわがままだと自分でも思うがそれはしこりの様にゴロゴロと残った。

ガツクの後を追うように各ブロックで次々と本選出場者が決定し、以下の者に決まった。

Aブロック：アリオ・メイヤー（他国）

Bブロック：エミリオ・トーレ（ベリアル）

Cブロック：ダイス・ラズ（ドミニオン）

Dブロック：ウィード・ラドック（他国）

Eブロック：ホクガン・ラウンド（ドミニオン）

Fブロック：ガツク・コクサ&モモコ（ドミニオン）

Gブロック：モルディ・コーク（ゼレン）  
Hブロック：テンレイ・ラウンド（ドミニオン）  
Iブロック：エルヴィ・フレク（ベリアル）  
Jブロック：キース・マーカー（他国）  
Kブロック：ルーザー・ベント（ベリアル）  
Lブロック：ノーフェ・ポートルム（ゼレン）  
Mブロック：グリード・ハーヴィング（ゼレン）  
Nブロック：ダイナン・ギャッツ（ドミニオン）  
Oブロック：ロー・レルモ（ベリアル）  
Pブロック：リコ・クアン（ドミニオン）

（ドミニオンが一番多いなあ。やっぱり強いんだな、うんうん。）

ちよつと鼻が高いモモコだがガツクの考えは違ったようだ。

「雷桜からはお前だけか、ギャッツ。」

「は、はい・・・申し訳ありません。」

ゴオオオオオ・・・とガツクの後ろから効果音が聞こえてきそうだが空耳なんだけどそれを許さない感じ。

ダイナンは頑張つて選出したのになぜ猛吹雪の中、尋問されてるような空気に晒されなくてはならないのだろう・・・と素朴に思ったが、思うだけに留めておいた。

「よお残つたな、リコ。霧藤のメンツも立ったのう。」

「ありがとうございます。本選も頑張ります。」

リコは常は無表情な顔を今は少し緩ませてダイスからの労いの言葉

を受けた。

「何か温度差ないか。」

「そうねえ・・・性格かしら。」

ホクガンとテンレイは試合の後とは思えない程のほほんとして2組の軍部を見た。

予選が済み、しばしの休憩の後、本選が行われる事となった。

モモコはガツクの猛チャージを受けながら青くなっているダイナンを気の毒に思いながらこれから本番を迎える舞台を見た。

真っ白の舞台は並みはずれた大男たちが暴れまくっても大丈夫なように広めに作ってある。その正方形の舞台の四隅には高い支柱が建てられているがボクシングのリングにあるようなロープなどはない。その舞台正面20メートルほど離れた所には波枯梗隊が警護する中貴賓席が設けられ、そこから少し離れた所に逆円錐型に作られた一般観客の席には今を遅しとたくさんのだミニオン国民で埋まっている。

あそこでさっきよりもとすごい戦いが始まるんだ。

モモコはゴクツと喉が鳴った。

ガツクが予選の時よりも自分に気をつけてくれるのはわかっているが、

(これでいいのかな。私・・・何がしたいんだろう?)

ガツクの肩に止まっているだけにすぎない自分は何なのだろうという疑問が明確に育ち始めていた。

「ガツク！予選は通ったようだな！！」

突然のベントの大音量がモモコの思いを破る。

モモコとガツクが振り返るとベントがエルヴィと背の高い2人の男と共にこちらへやって来るところだった。

ベントはガツクの正面に来るとモモコを睨みつけながら、吐き捨てるように声を荒げた。

「これがお前を腑抜けにした猫か？なんだこの色は！どこまでもこの戦いを愚弄しおつて！そんなモノにかまけているからゼレンごときにもバカにされるのだ！さっさと捨てる！以前の誇り高きガツク・コクサに戻るのだ！」

モモコはいきなり怒鳴られ、睨まれて頭が真っ白になる。

(え・・・？なに・・・なにを・・・なに・・・)

ベントがまだ何か言っているが・・・聞こえない。音を消したテレビのように口だけが動いている。

モモコがショックのあまりぼうつとしてしているとサツと目の前が暗くなり、しばらくしてガツクの服の中に入れられた事に気がついた。

ガツクの素肌に初めて触れるがそれを気にしている余裕もない。外ではなにやらまだ応酬が続いている。

モモコはガツクが震えている事に気がついた・・・いや違う・・・自分が震えているのだ。

ガツクはモモコが震えているのに気がつくや冷たい怒りに身の芯まで痺れるのを感じた。

「黙れ……ベント。」

その声はベントよりずっと小さく低い声だったが、ベントを黙らせ周囲の者が息を飲み、ガツクから流れ冷たく地を這う冷気にも似た殺気に身動きできなくなるのに充分であった。

「ガツク。」

ホクガンが硬い声でガツクを抑える。

ダイスはすばやくガツクの背後に移動した。いつでも押さえられるように。

「必要ない　ダイス、ホクガン。」

ガツクは平坦な声で2人に告げるとベントを見上げ、

「ベント……たかが猫なのだろう？いちいち熱くなるな。お前が正しいか俺が正しいかはすぐわかる……あの舞台でな……」

静かに、優しささえ感じさせて言葉を置いた。

だがエルヴィはその声に全身が震えるのを隠せない。

ガツクはベント達の間をさっと通り過ぎると屋内訓練場の男子更衣室に入り、ベンチに座るとそっと服の下からモモコを取り出した。モモコを見たガツクの顔が歪む。

「モモコ……。」

ガツクはモモコの名を呼びながら慰めるように背を撫ぜた。  
ビクツとモモコが体を縮める。

「モモコ、気にするな。アレは俺が排除してやる。2度とあんな口  
など利かせんからな。」

モモコはゆっくり顔を上げてガツクを見た。

(ガツクさん……私は……)

揺れる瞳、垂れさがったヒゲ、伏せられた耳、時折震える体。

ガツクは大声を上げ暴れ出したくなるのを歯を噛み締めて堪え、代  
わりにモモコを胸に抱きしめた。

「大丈夫だ モモコ。大丈夫……。」

ガツクの軋むような苦しげな声と胸の鼓動を聞きながらモモコは宙  
ぶらりんの気持ちを持って余す。

ガツクさん

わたしは

わたしは

ここにいていいのかな？  
どうして……いるんだろ？  
ガツクさん……くるしいの？  
わたしの……せい？

”さつさと捨てる！”

ベントの言葉が耳に蘇り、いつまでもモモコを揺さぶり続けた。

一つの影の様に寄りそう一人と一匹。

その空間に本選出場選手は集まるよう 促すアナウンスが響いてい  
た……。



4 - 7 いいんですか？ (後書き)

おおっ …… シリアス！ …… だよね？

「旦那・・・火に油を注いでどうするんです。いくらなんでも言いすぎですぜ。」

ガツクが去った後、ベリアル帝国軍ロー・レルモはしかめっ面でベントをたしなめた。

「ガツクがゼレンの連中にバカにされて腹が立つのはわかりますがね、猫に八つ当たりはいけませんよ。」

ローはガツク達とは同年代。戦場や合同演習で何度か言葉を交わすうちこの気のいい男はガツクやダイスとすっかり意気投合し、機会があれば酒を酌み交わすほどになっていた。

「フン！八つ当たりなどしていないぞ。全部本当の事だ。ホクガン、ダイス、貴様らが付いていながらなぜ防げんかったのだ。」

ベントはローに腕を組み、向き合っていた体をホクガン達に向けた。公式の場以外でベントはホクガンに敬語は使わない。

ホクガンも礼儀など必要としないので両軍ともざつくばらんに話す。

「あのなあ・・・お前の単細胞具合には本当に呆れるぜ。たまには筋トレよか空気を読む事を訓練したらどうだ。」

ホクガンが疲れたようにベントを見上げた。

「あのガツクとモモコを見てわからんのか、ベント。ガツクがどんなに大事にしちよるか。」

ダイスも呆れたように見やった時、

「おやおや！これはこれは仲良しさん達がお揃いで！」

嫌味な甲高い声が聞こえ、全員がそつちを振り返った。

「本選前におしゃべりに講じるとは余裕ですなあ。是非我々も見習いたいものです。」

嫌味をつらつらと並べながら近づいてきたのはゼレン国軍。モルデイ・コーク、ノーフェ・ポートルム、グリード・ハーヴィングだった。

皆が一様にイラツとした顔になる。

「それとも試合中、手加減してくれとの相談か？天下のドミニオン軍部もベリアル軍も落ちたものよ。」

「いやいや、棄権の相談かもしれんぞ！メンツにすっかり弱腰なったコクサもない所を見るともしやすでに逃げ帰ったか？逃げ足だけは早くなつたようだな！」

と、声を上げて笑うゼレン国にテンレイはツカツカと近づくと、

「あらあら、ゼレンはたったの3人だけ？おかしいわねえ今大会中1番参加人数が多かったのに、我がドミニオンの半数とは。ゼレンの軍力もタカがしれてるわねえ。」

テンレイはバカに仕切った顔で言い終わるとフフンと嘲笑った。  
なにを！と気色ばむゼレン国にベントが唸り、エルヴィやダイナン  
達が強張った顔で睨みつけた。  
テンレイはなおも焚き付ける。

「お気に障ったかしら？ごめんなさい、あまりにも予選で無様な負  
け方をしていたから。今度は世辞を用意しておきますわ。考えるの  
が難しくて今から頭痛がするけど。」

にこやかに目をしばたいて微笑むテンレイに怒りのあまり口もき  
けず震えるゼレン。

そこへホクガンがため息をついて両者の間に入り込んだ。

「どっちももうやめろ。お互いの主張は試合で付けるんだな。」

国主の登場にさすがのゼレンも苦々しくではあるが一応引込み、

「国主殿、可愛さの欠片もない嫁き遅れの妹御がいて大変ですな。  
今後このような口を許しておくとは後々後悔することになりますぞ  
？」

ノーフェが口元を引き攣らせてホクガンに厭味つたらしく言った。

ホクガンは軽い笑い声を上げ、ノーフェを見下ろすと、

「ご心配痛み入るよ。妹は万が一の引き受け場所があるから大丈夫  
だ。それよりすっかりガツクの恐ろしさを忘れてしまったようだな。  
一つ忠告をしてやろう。ガツクの猫に手を出さない事だ、死にたく  
なかつたらな。」

ホクガンは最後、真剣な顔でノーフェ達に言った。が、ノーフェ達は顔を見合わせると次の瞬間大声で笑い出した。しばらくヒイヒイ笑いあった後でグリードがホクガン達を見下ろしてニヤニヤと笑いながら嘲る。

「国主殿のありがたい忠告ですが、目障りなモノには我慢が出来る性分です。ついうっかりと殺してしまうかもしれません。が、その時は試合中の事故と言う事でご容赦願いたい。うははは。」

ホクガンとダイス、テンレイに青筋が浮かんだが、ここでむきになれば相手の思いつばなので、あえてホクガンはかったるそうに頷いた。

「そうかい。まっ 一応、忠告はしたぜ。」

それにまたゼレン国が笑いあう中、

「本選出場選手は舞台中央へとお集まり下さい！これから対戦相手を決める抽選を行います！繰り返します……」

それを聞いたゼレン国はまだニヤニヤしながら慇懃にホクガンに挨拶すると舞台へと歩み去った。

ダイナンとリコがその背を睨みつけ、ホクガン達に強く言う。

「国主、ガツクさんが出るまでもないですよ。俺があいつらを叩きのめします、必ず。」

「私もです。このまま黙っては引き下がれません。」

ホクガンはうんうんと頷きながらも2人に冷静になれと諭す。

「ゼレンを甘くみるなよ。お前らはまだまだ未熟モンだ。頭を冷やしてガツクより自分の事を考える。」

ダイスもイラついた顔を上官を思っただ怒る2人に目元を緩めたが注意を促した。

「ホクガンの言う通りじゃぞ。それにお前らがあ奴らを負かすのをガツクが許すわけねえじゃろ？逆に発散できなくてお前らが狩られるぞ？」

ダイナンとリコはうっと詰まる。・・・確かに・・・確かにヤバいかも。獲物を横取りなんかしたら今度はこっちが「なかなかやるな。今度手合わせ（デッドアライブ方式）でもするか。」とか言われつちやたりして、獲物になる事が確約されそう。

2人はあまりにリアルな想像ができてしまい、逆にゼレンと絶対当たりませんように、神に祈った。

これでよし、ホクガンとダイスは目と目で通じあい今度はテンレイに向き直る。

「私は丸めこまれないわよ。ゼレンと当たったら必ず報いを受けさせてやるわ。」

テンレイは先手を打ち、殺る気を見せた。

そしてふんぞり返るベントに向かって

「でももつと許せないのは貴方よ。」

腰に両手を当てパチクリしているベントを睨みつけた。

「よくも可愛くて繊細なモモコを怒鳴りつけてくれたわね。あんな

小さな子に大声を上げて恥ずかしくないの？レディにはちゃんと接して欲しいモノだね。そんなのだからお見合い話もまとまらず59敗もするのよ。」

今度も振られて60敗の金字塔ね。と言い放つテンレイの情報通にベリアル側はそれは禁句！と慌てる。

「そ、そんな事試合に関係ないではないか！卑怯だぞ！」

真っ赤になって大声を出すベントにテンレイは半目になってバカにしたようにフン！と鼻で笑うと舞台に向かった。続いてホクガン達も歩きだす。とホクガンは振りかえってベント達にも忠告した。

「そうそう、お前らもなるべくモモコに近づくなよ。そぶりさえ誤ってもするな。」

「猫に攻撃したらどうなるというのだ？なぜガツクはそこまで固執する。」

ベントは心底わからないという風に首を傾げる。

「お前は闘ってみんことにはわからんじやろうよ。ワシらに言えるのはこれだけじゃ。後は自分の目で確かめるんじやな。」

ダイスも肩越しに言うと言を追いかける。

「旦那、ホクガンやダイスの言う通り、猫は関係ありませんぜ。猫への攻撃はなしにしましょうや。」

ベント達も舞台へ行きながらローが提案した。

「ガツクが本気で怒ったら洒落になりませんぜ。この前コテンパンにやられたのを忘れちまったんですかい。」

黙って考え込むベントに嫌々な予感がするロー。

ベントは普段はうるさいぐらいが普通なのでこうやって黙って考え込む時はたいてい行くでもない事が起きるのだ。

ローが何とかしようとしていると

「ローさん、そんなにコクサ大将は強いんですか。」

エルヴィが話しかけてきた。コンパスが違うので早足だ。

ローは歩調を緩めてエルヴィに合わせる。

この若き副隊長は自身の地位の方が上にも関わらず目上の者には必ず敬語を使う。だが、

「ああ、強え。強すぎて生きてきた伝説になるくらいにな。」

「そうですか……そんなに……。」

強い者と戦う事が趣味という非常に困った、いやある意味軍人という職業にとっていいような趣味を持っていた。

ローはエルヴィにも何かなんかきた。

「おい、ホクガン達と言うのを聞いてなかったのかい。ガツクはヤバい。さっきのでわかったろう、しかもあんなの奴にとってはほんの小手先だ。」

エルヴィは先程のキ……ンと空間が凍るようなガツクの殺気を思いだした。

今迄に晒された事のない恐ろしさだった。

あれがガツク・コクサ。



軍人である以上知らぬものがないとまで言われる男。

「ガツクともし当たったら猫だけは攻撃するんじゃないやねえよ？おめえもだぞ、エミリオ。」

ローは後ろを振り返って部下にも念のため釘を刺した。

「……はい。」

無口なエミリオは言葉少なに返す。

そして関心なさそうにあくびをして目をこすった。

本当にわかっているんだろ？ローが確かめたくなるほどの無関心さだ。

そうこうしているうちに舞台中央は本選出場者が集まった。

「国主。」

ジエンがホクガンに走り寄る。

「ガツクさんがまだです。」

「もう少し待て……ん？」

ザワ……。会場がざわめいた。ガツクが姿を現したのだ。肩にはモモコが乗っている……。乗っているだけだが。モモコ……。そのしよぼくれ具合にホクガンはため息の一つもつきたくなつたが、あえて普段通りにガツクに声を掛けた。

「いけんのか？」

「ああ。」

ガツクはジエンに短く「始める」と言うとホクガンの隣に並んだ。ジエンは頷くと本選の開始とルール説明に入る。

「長らくお待たせしました！これよりドミニオンと友好国の方々に  
よる武道会を始めます！」

ワアアアアアア・・・！！！！

波の様な歓声が会場全体を包み込む。

「それでは武道会のルール説明に入ります！時間は無制限！ギブアップするか場外に出してしまうと負けになります！それから武器やそれに準じる道具の使用、急所への攻撃は即刻 失格となります！」

モモコはある意味最強のアイテムになり、インチキ！（主にドミニオン側）と糾弾されても仕方ないが、ベントに代表されるようにふざけているかハンデ（動きが鈍るかも）にとられていたので他の友好国から苦情はなかった。

「それでは対戦相手を決める抽選を行います！」

ジエンがそう言うと、雨牡丹の一人が番号が書かれた紙が入った箱をAブロックのアリオ・メイヤーに差し出し次々と選手が引いていく。

「16番だ。」

ガツクはジエンに自身の番号が書かれた紙を見せた。  
ボードにガツクの名が書かれる。

1 回戦最後 8 試合目だ。

モモコ……ガツクはそつとモモコの顔を自分の頬に寄せ、先程のモモコとの会話（？）を思い出す。

「モモコ……本選が始まる。どうする……やめるか？今のお前では俺の肩にさえ乗れないだろう。」

モモコはアナウンスにハツとした。

（そつだ……本選が始まるんだつた。……どうしよう。）

怖い……闘う事だけではなく、また非難されるのが。今まで誰にもされた事のない中傷や怒号にモモコはすっかり委縮してしまい、皆の前に出るのが嫌で仕方ない。

もしかして他の人も思ってるのかも。

ガツクさんの側にいるのが許せない人がもつといるかも。

そんでもってガツクさんが私のせいでまた苦しくなるかも。

「モモコ……俺はどちらでもかまわん。お前が嫌なら棄権しよう。」

ガツクは今すぐにでもベントを血祭りにあげ、ゼレンの連中を黙ら

せたくて仕方がなかったがモモコが試合に出れる状態ではなかったらすぐにでも辞退しようと思っていた。

（惜しいが（ベント達の首）俺よりモモコの方が大事だ。もう嫌な思いなどさせたくない。）

両者とも相手のことを思いやっているのだが、一方通行なのは否めない。言葉が通じないので仕方がないかもしれないが。ガツクはモモコを真綿でくるみ込み、雨にも風にもあたらせたくない。嫌の事などモモコの一生から全て防ぎ、排除したい。

モモコはモモコで、この武道会の事だけではなく、ガツクにずっと守られたままではよくない、と考え始めた所に他人からガツクに相応しくない事を突き付けられ、ショックを受け委縮する。そしてそんな自分を見て苦しむガツクにまた自分も苦しむ。

モモコはガツクの言葉とアナウンスを聞きながら迷う。が、

（棄権・・・したいかも。でも・・・でも皆の前には出たくないけど、それは駄目な気がする。この感情が何なのかわからないけどこのままじゃ駄目な気がするんだよ・・・やりたい・・・うん、私決めたじゃないか。どこまでできるかわかんないけど 私 であいい。）

モモコは自分の心に何とか決着をつけるとガツクを見上げてまだ弱い声で決意を告げた。

「じゃあ、うーな。（私出たい、頑張りたい。）」

ガツクはモモコの予想外に強い目を見ていささか驚いた。

「・・・本当か？無理に出るものではない。時には引くことも大

事だぞ？お前に傷ついてほしくないんだ。体も心もな。」

モモコはわがままで子供っぽい所もあるが人に遠慮し無理してしま  
う所もある。

ガツクはそういうモモコの所が言わせているのかと思ったが、モモ  
コが首を振るのを見て渋々了解した。

「わかった。本選に出よう・・・だが俺が無理だと判断したらすぐ  
に降りるぞ。お前のこと以外どうでもいいんだからな。」

モモコは頷いてガツクを促した。

ガツクはモモコを肩に乗せると更衣室を出、舞台に向かった。

「これで全ての対戦が決まりました！」

ガツクはジエンの声に回想から覚め、ボードを見た。

## 1 回戦

第一試合ロー・レルモVSキース・マーカー

第二試合ダイナン・ギャッツVSルーザー・ベント

第三試合ホクガン・ラウンドVSモルディ・コーク

第四試合エルヴィ・フレクVSアリオ・メイヤー

第五試合ダイス・ラズVSウィード・ラドック

第六試合ノーフェ・ポートルラムVSテンレイ・ラウンド

第七試合エミリオ・トーレVSリコ・クアン

第八試合グリード・ハーヴィングVSガツク・コクサ&モモコ

「それでは第一試合を始めますのでレルモ選手とマーカー選手以外は舞台から降りて選手控室にてお待ちください。」

大歓声の中ガツクは舞台を降りながらテンレイが手招きしているのに気付いた。

「何だ。」

テンレイはモモコを慰めたいとガツクに訴える。

ガツクもテンレイにはイライラさせられるが一応テンレイの事は認めてはいるので渋々モモコを渡す。

「モモコ大丈夫？かわいそうにこんなに怯えて。・・・そうそうガツク。」

ここでホクガンとダイスがテンレイが何をしようとしているかに気がつくが既に遅し。

「貴方の対戦相手のグリードって大男だけど。」  
「ゼレンか。」

「そう。あの人、モモコを殺すって言ってたわ。真っ先に狙うつもりよ。わかっていると思っけどさせないでね・・・殺っちゃって。」

言  
っ  
ち  
ゃ  
っ  
た  
あ  
ー  
！  
！  
！  
！  
！

4 - 8 頑張ります(後書き)

テンレイはわざとです。参謀ですから。ええ。モモコを誹するものなどこの世に必要ない！！と思いつきり思っています。



「……………ほう？」

あああゝゝ 遅かったか…………

ガツクの広い背中からどす黒い何かが無れ出るのを「錯覚だ」とは思いながらも見たホクガンとダイス。  
続いてガツクが言う声が届き、さらに震撼した。

「……………そうか……………ベントといいゼレンの連中といい……………俺もすっかり舐められたものだな。ならばそんな気が二度と起こる気になれない程刻んでやるか……………フフフ。」

ホクガンはしれっとしてゐるテンレイとその腕に抱かれてゐるモモコを見た。

テンレイは普段どおりだがモモコは口をあぐり開けてガツクを凝視してゐる。  
きつとももの凄いい形相なのだろう、人間だったなら青ざめた顔色だったに違いない。

こころなしかピンクの毛色も薄まった気がする。  
そつち側にいなくてよかつた……………ホクガンとダイスは思った。

「テンレイ……………この武道会が接待の一環なのを忘れたのか？死者を出してどうすんだよ。」

ホクガンは俺って最近ストッパー役多くねえか？と思ひながらテンレイを叱る。

「わかっていてよ？ガツクが鈍いゼレンにわかるようなへマ、するわけないじゃない。」

「ねえ？とばかりにテンレイはガツクを見やる。  
ガツクはホクガン達に向き直ると」

「心配するな・・・ドミニオンの軍力を見せつけてやるうではないか、ホクガン。お前の希望だっただろう？」

「ガツクは完璧獲物を狩る目をしながら・・・なおもフッフと薄く笑う。」

「今度はホクガンとダイスが青ざめ、モモコがそっち側にいなくてよかった」となった。

「黒いオーラを放っているガツクからちよっと離れて避難しているダイナンは人生究極の選択を迫られていた。」

「なあ、リコ。」

「・・・わかってる、ダイナン。」

「お前ならどっちを取る？ベント軍隊長とガツクさん。」

「・・・どっちも嫌だ。」

「俺もだよ！ はあああ・・・なんてくじ運がないんだ俺は・・・。」

「安心しろ、ダイナン。お前ではベント軍隊長は倒せない・・・。」  
「ソレ慰めてるつもりか？」

ベントに勝てる見込みはないがもし勝ってしまったとしてもガツクとのデッドアライブが待っている……。

エルヴィはローの試合を見ながらもガツクの方をちらちらと窺っていた。

伝説になるほどの強さ……一体どれくらい強いんだろうか。ベント軍隊長より強いなんてほとんど人間とは思えない……（正解）見てみたい。いや、できれば手合わせしたい。

ローの何かきた　は正しかったようだ。

エルヴィは対戦表を見た。

武道会本選はトーナメント方式だ。ガツクと当たるには決勝までコマを進めなければならぬ。ベントを始めローやゼレン国のモルディなどの強敵もいる。と、ホクガンの名を見つけた。

エルヴィはガツクと何やら話しているホクガンに視線を移す。

（国主という国のトップにいながらもなかなかの強さだ。私とは二回戦目か……面白そうだ。）

「副隊長……」

エルヴィは寝ぼけたような声で話しかけてきたエミリオを見上げる。

「なんだ？」

エミリオはいつも 今、寝てただろうとしょっちゅう指摘される眠  
そうな目で注意する。

「……ローさんが言ってたでしょ？僕もそう思う……。あ  
のガックつて人はヤバいよ。」

エルヴィはムツとして

「わかっている。猫に攻撃しなかったらいいんだろ？それよりト  
レの方が先に当たるんじゃないか。お前こそ気をつけた方がいい。  
寝ぼけて猫を襲うなよ。」

わずかに険を含んで言い返した。

「……あの国主も……」

「国主も？もちろん油断はしないがそこそこ勝てると思うぞ？今か  
ら楽しみだ。」

エミリオはゆる〜く頭を振りながらその動作にイライラしているエ  
ルヴィを見下ろした。

「……あの人、甘く見ない方がいいよ……。かなりやる。」

エルヴィはもう一度ホクガンを見た。

今は疲れたように腕を組んで天を仰いでいる。

「そうか？……まあ闘ってみればわかる事だ。」

はぁ……エミリオからため息が漏れた。

「グリード、コクサの猫を殺すのか？」

モルディはガツクの肩に乗っているピンク色の猫の方をしゃくって指した。

グリードはグローブを手に合わせながら頷く。

「おお。あの気持ち悪い色を見ただけで腹が立ってくるわ。コクサの肩から叩き落とし、踏みつぶしてくれる。」

「ぐしゃぐしゃに潰された猫を見たコクサの顔が見ものですねえ。いい気味です。」

ノーフェがヒヒヒと相槌を打つ。

「ノーフェはあのくそ生意気なドミニオンの女とだな。」

「ええ。うまく当たりました。男に逆らって生意気な口を聞いた事、骨の髄までわからせてやりますとも。」

「あの体は惜しいが、ドミニオンの国主を動揺させるぐらい痛めつけてやれ。偉そうに我々の元は属国が。」

モルディは忌々しそうにホクガン達を睨みながら吐き捨てた。

「国主を見事打ち負かせば皇太子から褒賞が貰えるかもしれんなあ。」

グリードが退屈そうに試合を観戦している貴賓席の皇太子をちらっと見上げた。

モルディはその時の妄想をし、笑いがこみあげてきた。

「それはお前達も言える事だぞ。コクサもあの女もドミニオンだからな。」

3人はせいぜい派手に相手を倒し、王や皇太子の目に止まる事を想像して下卑た笑いで話を締めくくった。

それぞれの思惑が交差する中、1回戦、第一試合は予想通りローの勝ちとなった。

「第二試合を始めます！ギャッツ選手とベント選手は舞台上上がって下さい！」

ガツクは悲壮ながらも舞台上上がるダイナンを呼びとめ、横取りするかと脅すかと思いきや、

「ギャッツ、ベントは初動が速いぞ。気を抜くな。」

意外や意外アドバイスをくれた。

ダイナンが驚きまばたきもせずこっちを見るのを訝しそうにガツクは見返す。

「どうした？お前は雷桜の代表みたいなものだぞ、仲間の前で恥ず

かしい戦いだけはするな。」

ダイナンはガツク直々の激励に嬉しく舞い上がるあまり（怖いけど尊敬してはいる）

「はい！必ず勝ってガツクさんと手合わせしますよ！」

人生最大の失敗をおかす。

あっ……（モモコ）

ああ……（ダイス）

あゝあ……（ホクガン）

バカ……（リコ）

珍しい子ねえ……（テンレイ）

”ガツクの敵に勝ったらガツクと手合わせ”ダイスの刷り込みは成功した。が、予想外に誤爆した。

ハツとして自分の口を抑えたが……遅い。

ガツクは頷きながら、

「そうか、そんなに俺と手合わせしたかったのか……よし、お前が勝っても負けても手合わせしてやる。楽しみに待ってる。」

あ、いや、ちが・・・と青ざめるダイナンに無情にもレフェリーの声がかかる。

「呼んでいるぞ、早く行け。」

行けが逝けと勝手に変換して聞こえる・・・

ダイナンはヨロヨロと死地（ガツクとデッドアライブ）に通じる舞台中央へと向かった。

「くそ！！」

ダイナンは落ちた場外からダンツ！！と舞台の床を叩いた。

結果はベントが体勢を崩したダイナンをすくい上げるように場外に投げ飛ばして勝った。

息が上がる肩を上下させ舞台上がろうとするとベントから手が差し出された。

「なかなかやるな、雷桜の小童。よい戦いぶりだったぞ。」

ダイナンは赤毛の大男をちょっと驚いて見上げ、

「ありがとうございます、ベント軍隊長。光栄です。」



ベストを尽くした爽快感に笑いながら手を借りた。

「負けちまったな。」

ホクガンは舞台上でガツチリ握手を交わしているベントとダイナンを見ながらガツクに話しかけた。

「ギャツツとベントでは力も経験の差も歴然だ。だがいい経験になっただろう。ギャツツの今後が楽しみだ。」

モモコはベントとダイナンの本気の試合に圧倒された。

(凄い・・・ダイナンさんって強かったんだなあ。少将なんだから当たり前か)

今まで他の隊員たちとガツクに扱かれ、青い顔で怒られたりしているのをよく見ていたのであまり強いという印象がなかったダイナンにモモコは感心した。

「第三試合を開始します！ラウンド選手とコーク選手は舞台にどうぞ！」

レフェリーの呼ぶ声にホクガンはもたれていた壁からよつと体を起して

「んじゃ、行ってくるわ。やっちまっけどいいだろ？」

念のためガツクを窺う。

「ああ。どうせ全員の首はとれんからな。」

空恐ろしい言葉が返ってきた。

戦場じゃねえんだぞ・・・ホクガンは心の中でつつこみながら舞台上に上がった。

レフェリーからボディチェックを受けながら、モルディがちらっと賓客席を見るのをみてホクガンはピンときた。

(ははあ・・・俺を倒して皇太子にゴマをする気が・・・ふん。)

ニヤ

ホクガンの顔に人の悪そうな笑みが浮かぶ。

「第三試合・・・始め！」

モルディはまずホクガンの顔面にパンチを繰り出してきた。それを上体を少し後ろに倒して避けると蹴りが出た。ホクガンは上体を反らした体制のままバク転してそれも避けると、そのままモルディの顎を思い切り蹴った。

モルディが大きくよろける。ホクガンは悠々と体を起こし、モルディに向かって突っ込む。モルディは咄嗟に顔をかばったがホクガンの拳がクリーンヒットする方が速かった。モルディがたまらずダウンする。

ホクガンは相手が立ち上がるまで腕を組んで待ってやり、モルディ

が続行の意思を示すとまた突っ込む。

「……モルディはホクガンと打ち合いながら段々言いしれぬ恐怖が湧いてきた。」

顔の正面、常にホクガンの顔があるのだ。

どんなに大きくパンチを繰り出しても蹴りを繰り出してもそれは空振りし、ホクガンはブレたように戻って来る。

自分の攻撃より遙かにホクガンのスピードの方が上なのだ。

モルディはゴーストと戦っている気分になってきた。

「ホクガンの奴、遊んどるのオ。」

ダイスはニヤつきながら速いパンチを的確に入れるホクガンと、今や怯えた顔を隠そうともしないモルディを呆れて見ながらガツクに話しかけた。

「あのボンクラが。国主の自覚がまるで足らん。」

ガツクは苦い顔でホクガンの説教部屋行きを決定した。

ガツクさんに言われたくないと思うな。モモコは大将という地位を忘れ数々のワケのわからん行動をする大男を見上げて思った。

「ワァッ!!」という歓声が聞こえモモコがそっちを振り返った時、ホクガンがモルディを場外に蹴りだしている所だった。

「場外!!勝者ラウンド!!」

ホクガンは両手でピースサインをしてドミニオン国民の歓声に応え

ると、賓客席に深々と礼をしてから舞台を降りた。

ホクガンが長い黄金色の髪を揺らしながら控室に帰ろうとした時、後ろからモルディを抱えたグリードとノーフェに声を掛けられた。

「国主殿、一回戦突破おめでとございます。このまぐれが続くといいですな。」

ホクガンはノーフェ達を振り返った。

「まぐれ？おいおいこの戦いはまぐれが通用するようなレベルじゃないぜ？素直に負けを認めたらどうだ？」

肩をすくめて両手を広げる。

ノーフェ達に青筋がうかび、

「フン、属国だった国の国主が。お前の妹がどうなるか楽しみに待ってる。」

ノーフェは吐き捨てるように乱暴に言うとモルディを担いだグリードと共に控室の方へと姿を消した。

ホクガンの顔が無表情になる。

属国……ホクガンの一番嫌いな言葉だ。

ノーフェを今すぐ追いかけて、殺してしまおうとした時、

俺たちは自由な海の民だ。

力づくで抑えつけられれば力づくで跳ね返すのが信条だ。

そうだろ？

力には力で。知恵には知恵で。蔑む奴らには誇りを持って立ち向かうさ。

かって少年だったホクガン達に笑いながら語った男を思い出した。

そうだな、シス。

俺たちはドミノオンの歴史を背負う者。

太陽を掲げる者たちだ。

俺もまだまだだな。

ホクガンは自身の頭を軽く小突くと仲間達の所へと歩き出した。

第四試合はエルヴィが勝ち、第五試合はダイスが余裕で勝利を収めた。

第六試合が間もなく始まるという頃、控室からダイスの怒号が響く。

「テンレイ！相手はゼレンと云えど予選を勝ち抜いた奴なんじゃぞ！ええな、駄目な時は素直にギブアップするんじゃ！！」

ホクガンからノーフェが言った言葉を伝えられ、嫌な予感がしたダイスはテンレイに話があると言い、皆から少し離れた所で注意した所、頑固そうに顎を上げたテンレイに拒否され思わず頭に来て言い合いとなった。

「嫌よ。絶対戦い抜くわ。バカにされたままなんて私が我慢できるわけないでしょ。」

テンレイはキツとダイスを睨みつけた。

ダイスはテンレイの意固地さに苛立ち、心配する気持ちがない交ぜになるあまり声を荒げてテンレイに雷を落とす。

「このどアホウがつ！！！！勝っ手にせい！！！！」

ダアーンッ！！

ダイスは後ろを向くと思いきり壁を拳で叩き怒り心頭の様子で歩き去った。

「何よ。いつもいつも妹扱いして……」

テンレイが唇を噛みしめてぽつっと言葉を落とした。

4 - 9 嫌な感じですよ（後書き）

選手たちの控室は舞台から離れた広いテントみたいな所にあります。あと書いてなかったと思うんですがエルヴィは25歳の女性です。書いてなかったらすんません。

#### 4 - 10 第八試合です

モモコは舞台上のノーフエと今の所互角に戦っているテンレイを、心配そうに見つめた。

試合が開始してしばらくしてガツクが「迷いがある」と評したテンレイの動きが気になって仕方がない。

(テンレイさん苦しそう・・・気のせいかな？・・・でも。)

モモコは隣で腕を組み舞台の上を眉根を寄せて観戦しているダイスを見た。

(ダイスさんも心配そうだ。そうだよな、好きな人が闘ってるんだもん。)

モモコは乗っているガツクの肩からダイスの肩をちよんと突ついた。ダイスが「ん？」と言う風にこちらを見、モモコがもの問いたげにしている事に気がつくのと焦りと怒りが無い交ぜになった顔で笑おうとして失敗した。

「お前にもわかるんかモモコ。早うギブアップすりゃあええんじやが。」

ダイスはまたテンレイに視線を戻した。

その時、テンレイが何かの拍子に転倒した。その機を逃さずテンレイの腹に掌打を叩き込むノーフエ。

テンレイの体は大きく曲がった。

ダイスが息を飲み、



「テンレイ！！」

掠れた声で叫んだ。

ノーフェは身動きできずにいるテンレイに馬乗りになり、酷薄そうに笑うと執拗に顔を殴り始めた。

それを懸命に防ぐテンレイ。あまりに非道な戦いに会場がざわつき、悲鳴も混ざる。

ガツクは舞台に向かって一歩踏み出したダイスの腕を掴んだ。

「今出ればテンレイは失格になるぞ。お前もな。」

「だから何んじゃ？惚れた女が殴られるんを黙って許すワシじゃあねえ。」

ダイスはギラつく青い眼光をガツクに置き、続いてホクガンに移した。

「なぜ止めんのじゃ、ホクガン。」

ホクガンは淡々と返す。

「ギブか失神するか場外以外止める事はできねえ。そういうルールだ。」

だがホクガンの拳はぎゅっと握りしめたまま。力が入るあまり少し震えている。

「ルールじゃと！そんなものクソツ食らえ！！」

「落ち着けダイス。」

ダイスはガツクの首元をガツと掴むと間近に顔を寄せ怒気を含んで

「あれがモモコだったらどうするガツクよ。それでもお前は大人し  
ゆう見ちよられるんか？」

吐き捨てるように言い、放した。

ガツクとダイスがにらみ合っているその時、

「ぎゃーお!!!(テンレイさん!!!)」

男たちが押し問答をしている間、ずっとテンレイを見ていたモモコ  
が悲痛な叫びを上げた。

ダイス達が見たものはノーフェに背中を蹴られ、転がるテンレイだ  
った……。

大きな衝撃に息が止まったテンレイはそれでも立ちあがろうと四つ  
ん這いになった時、ノーフェが大きく足を振り上げるのがスローモ  
ーションのように見えた。

その向こうにいるガツクに抑えられてるダイスも。  
何かを叫んでる。

ダイス……

テンレイは朦朧とする頭と力の入らない手足の最後の力を振り絞っ  
て跳んだ。

ドサッ

ダアンッ

し……んとした会場にテンレイが場外に落ちた音とノーフェエがテンレイのいた場所に足を叩きつける音がやけに大きく聞こえた。

「チッ！」

ノーフェエが舌打ちする。

そして強張った顔で固まるレフェリーを促す。

「落ちましたよ？ ばやばやしないでほしいものですねぇ。」

雪董のレフェリーは目の前にいるゼレンの軍人を蔑む心象を隠し、勝敗を告げた。

「場外！ ポートラム選手の勝ちです！」

会場は拍手よりもざわめきの方が多い。ダイスはガツクの腕を振り払うと飛ぶようにしてテンレイの元に走り苦痛に喘ぐその体を、そっと起こした。

「大丈夫かテンレイ。痛みの酷い所はねえか？」

ざっと見た限りでは折れた所はない。酷い打撲で済んでるようだ。顔もそれほど殴られてはいない。が、腫れてくるのは時間の問題だろう。

「だい……じょうぶ……よ。今の所……はね。」

ハアハアと苦しそうに息を継ぎながらテンレイが応える。

「これはこれは！麗しい同胞愛ですなア。それにしてもこれしきの事で大騒ぎ。ドミニオンの軍部は随分ぬるいようです。」

舞台上からノーフェが芝居がかった仕草で大げさに手を広げる。

ダイスはテンレイからノーフェに視線を移し、テンレイは軍部関係者ではないと反論しようとして

「ダイス・・・やめて・・・ちょう・・・だい。負けは・・・負けよ。」

テンレイから止められる。ダイスは汗に寝れ、激しい戦いで汚れたテンレイの顔から張り付いた髪をそととってからテンレイを横抱きにして立ち上がった。

「これしきとは言ったもんじゃなア。自分が這いつくばった時も果たしてそう言っちょられるかのう。見ものじゃな。」

ダイスはそれだけ言うと救護室が設けられた部屋へと足早に去る。ノーフェは肩をすくめると、ホクガンの方へニヤリと笑って見せた。ホクガンはノーフェの笑いの意味がわかったがこみ上げる怒りを隠し表情筋一つ動かさずノーフェを真っ直ぐ見詰めた。

「何があった。」

ガツクから声がかかる。

「何もねえよ。コークに勝ったのをまぐれ扱いしやがったから言い

返してやっただけさ。」

「他にも何か言われたらろう。」

ホクガンは隣にいるほとんど同じ目線のガツクを見据える。

「……ああ。元属国のたかが国王が、だとよ。頭にきて殺しちまうところだった。」

ガツクが怜悯な目をグリードと上機嫌で話しているノーフェに向ける。

「よく我慢できたな。」

「シスの事を思い出したんだ。俺たちによく喋ってただら？あれをな。」

モモコは2人の会話の不穏な部分にギョツとしつつも”シス”という聞き覚えのない名前に興味をもった。

（ホクガンって結構危ない奴だな。それにしてもシスって人の名前だよな。シス……シス……聞いた事ないよなあ……誰だろう？）

ホクガンの口調では殺しに行くのを思い止めるくらいなんだから大切な人なんだろう。

モモコはそれは後で聞く事にして今はテンレイが気になる。

「にゃーお、にゃぶ。（テンレイさんの所に行こうよ、酷いケガしてたらどうしよう。）」

ガツクはモモコの意図を察し、救護室に向かおうとしてホクガンに

呼び止められた。

「もう少し2人にしてやろうぜ。まあ、俺達が行かなくても他の奴らがいくだらうが。」

ダイスはホクガンにモモコはどうやら自分の気持ちを知っているようだと言っていた。

共犯めいた顔で悪戯っぽくモモコとガツクに笑いかけた。

「ダイスの代わりにリコの試合を見ようぜ。後であいつに聞かれるだろうからな。」

「そういうことだモモコ。どうしても行きたいか？」

なるほどね。

モモコは首を振って舞台上でベリアル軍のエミリオ・トーレと対峙しているリコを見た。

リコは女性ながら背が高い。その長い手足を駆使して間合いを詰め、一気にエミリオの懐に入り顎を突き上げた。かに見えたが、エミリオは普段のボケた態度とは段違いのスピードでそれをかわすとリコの後ろに回り込み、

「じめんね。」

一言いい首に手刀を叩き込んで終わらせた。意識を失ったりリコがゆっくり崩れ落ちる。エミリオは床に落ちる前にその体を支えた。

慌てて雨牡丹のレフェリーが駆け寄り、リコに意識がないのを確かめると両手を上げエミリオの勝利を知らしめた。

「リコ選手 意識喪失のため、この勝負はトーレ選手の勝ちとします！」

モモコを始め観客達はぼかんとして舞台上を見ていた。

たぶんこの本選で一番早く試合が終わったのではないだろうか。そう思わせるくらいの素早さだった。

「早いな。」

ふーんと言う風にホクガンが感想を述べる。

「クアンには見えていなかっただろう。ベリアルにも有望な奴がいるようだな。」

フンとガツクが腕を組んでレフェリーにリコを渡すエミリオを見た。

「次、お前等とだな。どう戦う？結構楽しくなってきたんじゃないか。」

グリードは当然ガツクに倒される。

そう前提したような性格の悪い言い方でニヤニヤしながらホクガンはガツクとモモコ両方を交互に見やる。

「にゃん！にゃうお！（頑張る！とにかく頑張る！）」

モモコは気合を入れるように高く鳴く。

「立ち塞ぐ敵は全て蹴散らすのみ。モモコを貶めるような奴の部下なら身をもって知らしめてやるうではないか。なあモモコ。」

フッフ・・・黒い笑みでモモコに相槌を求めるガツクだが、

(えっ・・・な、なんか違うくない？トーレさんは関係ないっていうか・・・試合の話だよな?)

(だから、戦場じゃねえって・・・)

え、あの、えつと・・・と視線を泳がせまくるモモコ。

正々堂々と頑張るっ！の健全なモモコと明らかに獲物を狩る捕食者のような殺る気を見せるガツク。

姿形だけではなくズレまくる一人と一匹は健在のようだ。

とりあえず、ただの憂さ晴らしにやられるエミリオに合掌。

モモコがガツクの黒い笑顔をどうしようと思っていると第八試合の選手を促すレフェリーの声が舞台上を流れた。

「第八試合を始めます！ハーヴィング選手とコクサ選手、モモコ選手は舞台上にお上がり下さい！」

「では行くか。」

ガツクは普段と変わらない口調で軽く言うともモモコを肩に乗せ舞台上へと上がった。

舞台では既にグリードがいて、薄笑いをしながらガツクとモモコを待っていた。

(ぎょえ〜！でかつ！むちゃでかつ！ガツクさんよりでかい！)

ガツクよりも大きいグリードはモモコから見るとまるで巨人だ。モモコが口をあんどくりしていると、



「よお、ガツク 久しぶりだな。いつから軍人やめてペット屋でも始めたんだ？吐き気がするほど似合ってるぜ。」

グリードはせせら笑いを浮かべて早速嘲った。

ムカツ！モモコはガツクの悪口に腹が立ちグリードを睨みつけた。

「…………お前誰だ？…………会った事があるのか？」

首を捻りながらガツクがグリードを見上げる。

やーい！モモコはベーツと舌を出した。

「…………くっ！」

グリードは怒りと羞恥で紅潮した顔を憎々しげに歪めるとモモコを睨みつけた。

(ひいつ！な何！)

「この試合が終わってもその虫唾が走る色をした猫が生きているといいな、ガツクよ。」

えっ…………雨牡丹のレフェリーは自分の耳を疑った。

今…………今…………何か聞いてはいけないものを聞いた気がする…………

・コイツ…………死ん…………

「何をしている…………早く始めないか…………」

ヒイイイ！！きたあああ！！

「た、ただいま第八試合を始めます！は、はじめっ！」

グリードの言葉に死人を見るように本人を見ていたレフェリーは、ガツクの殺人衝動を抑えた声に震えあがり急いで試合開始を告げた。そして巻き添えを食らわないうちに急いで退避した。

グリードは真っ直ぐモモコに向かって平手を出した。叩き落して床に叩きつけようという魂胆だろう。が、その拳はモモコに届く前にガツクに受け止められ、ついでガシッと手首まで滑らせると

「モモコ、しっかり掴まれ。」

モモコに言い、直後、砕けんばかりに掴んだグリードの手首を上に取り投げた。

グリードの巨体が高く宙に浮く。同時にガツクもモモコを抑えたまま飛び上がった。モモコはしっかりと爪を立て耐える。ガツクはグリードよりも高く舞い上がるとあつけにとられているグリードの顔を掴み勢いをつけて舞台の床に叩きつけた。

ドガアツッ!!!

舞台の床の石が砕け散り飛び散る破片。ガツクは床にめり込んだグリードの顔を離すと、

「おい、気絶しているぞ。まだ待つか？」

規定より離れた所（避難）にいたレフェリーに声を掛けた。

.....。

会場全体が静寂に包まれる。

その中、たつたとレフェリーが舞台に戻る音が響く。レフェリーは恐る恐るグリードに近づき、死んでいない事を確かめると

「ハーヴィング選手意識喪失のため、コクサ選手、モモコ選手の勝利とします！」

ガツクとモモコの勝利を告げた。

次の瞬間、津波のような大歓声が鳴り響く。

万雷の拍手とガツクの圧倒的な力を称えるドミニオン国民の歓声の中、ガツクはそれに応えるでもない普段と変わらぬ態度で控室に戻ってきた。当然というかホクガンの様に貴賓席に礼をとりもしない。控室ではホクガンと救護室から帰って来ていたダイスが迎えた。

「圧巻じゃったな。それにしても相変わらず愛想のない奴じゃのう。」

「まっただけ。お前さ、国民に手ぐらい振ってやれよ。あと友好国無視すんな。」

ガツクはモモコを肩から降ろし傷がないか入念にチェックしながら2人に応えた。

「称えるなり罵るなり勝手にすればいい。俺にとってどうでもいいことだ。モモコ、傷はないようだな。よく頑張った、偉いぞ。」

目を細めてモモコを撫でるガツク。

えへへ

褒められたモモコもちよつと得意げだ。なぜなら訓練中、今のスピ

ードで飛ぶガツクの肩に止まれた事がなかったからだ。ガツクに助けられて、という前提ではあるがモモコとしてはガツクの邪魔にならなかったのは嬉しい。

（あつでもガツクさんの肩に傷つけちゃったかも！爪、立てちゃったしな）

モモコが心配げにガツクの肩を見ているうちにも3人は会話を続けられる。

「それにしてもやけに力入ってたのう。ハーヴィング程度の奴に・・・どうしたんじゃ？」

「だよなあ・・・最初から飛ばしてたな。」

ここでホクガンはガツクの肩をじいっと見つめるモモコに疑念がわいた。

「おい、モモコ。」

なに？

モモコがホクガンの方をくりんと向いて、小首を傾げた。

その可愛い仕草にガツクの胸が高鳴る。

可愛い・・・なぜ皆テンレイ以外はモモコの愛らしさを称えないのだろうか。俺が日常でよくやっている事より（グリードにした事を任務や訓練ではいつもしている）モモコのこの仕草を称えればいいものを。まったく。

モモコ一匹ならそれも叶うだろうがガツクとセットでは無理。可愛いというより衝撃が先に来るようでは出来ない相談である。自分が

モモコの最大の妨げになっている事に気づきもしないガツクを余所に

「お前　なんかしただろ。」

ホクガンが件の事をモモコに訪ねていた。

何かって何？

モモコはもつと首を傾げた

「ガツクに何か言うか、しただろって言うてるんだよ。心当たりないか？ガツクがあんな雑魚にいきなり大技仕掛けるなんてあり得ないからな。」

（それは・・・たぶん悪口言われたせいなんじゃないかな？始める時も怖かったし・・・）

ううんとなるモモコに代わってガツクが答える。

「フツ・・・それはな、ホクガン。モモコが武道会中の俺のケガをいたく心配してな・・・」

あゝ・・・何か展開が読めた気がする・・・

ホクガンとダイスは顔を見合わせた。

「・・・で？」

バカ　聞くな！

ホクガンが目でダイスを止めたがどうせ促さなくても強制的に聞かされるので同じ事だ。

「モモコにいらぬ心配を掛けないためにも、俺は俺の全力を持って

戦い抜く事をモモコに誓ったのだ。」

どや顔でホクガンとダイスを見やるガツク。  
親友達は呆れるべきか戦慄すべきか迷う。  
さらに

「ハーヴィングがもう少し骨のある奴だったらもっとモモコに（誓いの証を）見てもらえたんだがな。残念だ。」

あそこで気絶しててよかったね的発言が続いた。

（あゝ・・・あれか、あつたなそういえば。）

モモコはあの時の事を思い出し、そしてガツクの肩に自分が傷をつけたかもと心配したのを思いだした。

「みゃーん、にやう？（ガツクさん、肩大丈夫？）」

モモコはガツクの肩の方に届かないが前足を伸ばした。

ガツクは察し、モモコを膝に乗せたままいきなり上着を脱いだ。

ガツクの鍛え抜かれた逞しい上半身がモモコの目の前に晒される。

一瞬の空白の後のち

モモコが毛を逆立ててびよおおん！と後ろに飛びぬいた。

その距離2m。

「……モモコ？」

ガツクが不思議そうに毛を逆立てたままのモモコを見る。  
ホクガンとダイスもコイツどうした的にモモコを見る。  
モモコは前足、後ろ足をじたばたと意味なく動かしながら

（バカーッ！！いいいきなり裸になんないでよ！ガツクさんの  
変態！あたしはねえ！猫だけど！猫だけど中身は成人した女なんだ  
からな！バカ！なんかバカア！）

やっぱり思考もじたばたなモモコ。

顔どころか体中熱い。

それもこれも無神経な、でも……

モモコは目を隠した前足の隙間からまだポカンとしているガツクを  
窺った。

まだ上半身裸のままだ。

（ガツクさんて……すごい体してるな……）

思わず見惚れてしまい、それに気づいて今度は床を転げまわるモモ  
コをますます不可解そうに見つめる大男三人。

ちなみにガツクの肩にはモモコが心配した通りくつきり爪のあとが  
残っていたのだがそれが話題になるのもう少し先になりそうだ。

ガツクが服を着なければ。

4 - 10 第八試合です（後書き）

鍛えられた成人男性の体は女子の敵だと思っんですよ。あるゆる意味で。



ガツクはゆっくり、じりじりとそれとはわからないようにモモコにじり寄った。

だがモモコは用心深くガツクとの距離を開ける。

「飽きたな。」

「ワシ、テンレイの様子を見に行ってもええか。」

「だめだ。こいつ等の相手を俺一人でしろってえのか？まじめに仕事した方がマシだぜ。」

あなたは！国主！仕事しろおお！と叫ぶデュスカの悲痛な声が聞こえてきそうなセリフでダイスの訴えを却下したホクガンは、いくら呼んでも戻らないモモコに業を煮やし、捕まえようとするガツク（上半身裸）と顔をそむけながらも逃げまくるモモコ達に声を掛けた。

「おい。ローとベントの試合が始まってるぞ！見ないでいいの？」

ガツクはモモコから視線を外さず機械的に答える。

「ベントの勝ちだろう。ローは先の試合で右足を痛めたはずだ。蹴りの利き足がああではな。」

ダイスは後ろを振り返り試合を見てみた。

ローは善戦していたが確かに分が悪いようだ。

「モモコ・・・なぜ逃げる？俺が何かしたか？俺はお前に肩を見せ

ようとしたただけだぞ？見る。」

ガツクは苛立ち始めた声でモモコに見えるように肩を動かした。モモコはガツクの体を極力見ない様に肩だけを見た。くつきりと残ってはいるが出血はなく大したことはないようだ。

「ガツク、服でも着たらどうだ？裸で猫を追いかけるお前は、変態を通り越して笑えてくるぞ。」

まさに周囲が考えている事をそのままにホクガンは言い、ガツクに上着を投げた。

ガツクはホクガンの方を見ずに上着を受け取るとモモコから目を離さず素早く着た。

また逃げられてはたまらない。前回のピンクの猫が逃げて雷桜隊どころか霧藤隊も駆り出されて総所中捜しまくったよ逃走以来ガツクは用心深くなった。

一方のモモコはやっとガツクが服を着てくれたのでホッと息をついた。

その時ワツと会場から歓声が聞こえ、それに気を取らたモモコはガツクにすくい上げられるように捕まった。

(わあああ！ちょっと待って！心の準備い〜！)

モモコは往生際悪くまだバタバタするがもう逃がすガツクではない。

「モモコ、まだ逃げようというのならそれ対応の対応をとるぞ。」

(どうしてあいつが言つと俺が思いつく限りの最悪な対応しか浮かばないんだろうな。)

ホクガンはそれを聞き硬直したモモコと苛立つガツクを見ながら思った。

ホクガンとほぼ同じ事を考えていたダイスが二回戦第一試合が終わった事に気がつきホクガンに声を掛けた。

「おい、お前の出番じゃぞ。相手は女じゃ、手加減せえよ。」

ホクガンはかったるそうにダイスに向き直り

「わーってるよ。心配すんな、すぐ終わらせるさ。」

舞台上に歩き出そうとして誰かに呼び止められた。

「国主殿、その言葉、聞き捨てなりません。」

怒りに顔を強張らせたエルヴィだった。

あちゃー・・・ダイスは額に手を当ててしまったとなる。

が、ホクガンはなんだいたのかみたいな顔で

「いや、あんたが弱いって言ってるんじゃないよ？ただ俺よりは弱  
いって言うてるだけだ。あと女だしな。跡がつくほど殴られないだ  
ろ？俺はフェミニストなんぞな。」

その言葉を聞いたエルヴィは怒りが倍増した。

今すぐこの傲岸不遜な国主に罵倒を浴びせたいが男など口で言うても無駄、実際を見せてやらなければ納得しない生き物だと言うのは体験済みなのでこう返すのみとした。

「その言葉が間違いである事、舞台上で証明して差し上げます。」

そしてすたすとホクガンを追い越し舞台に向かう。  
ホクガンは肩をすくめるとエルヴィに続いた。

「それでは二回戦第二試合を始めます！はじめ！」

雪董のレフェリーが声を張り上げ、眦を釣り上げたエルヴィとニヤつくホクガンの試合開始を告げた。

エルヴィは突っ込んで体を沈ませホクガンに足払いをかけたが、ホクガンはこれを軽くジャンプして避け、たと思ったらエルヴィに足首を捕まえられた。そのまま下に引つ張られたホクガンは目を見張った。もう目の前にエルヴィがいたからだ。エルヴィは体を捻って思い切りホクガンの胸を蹴り上げる。

「ぐあっ！」

ホクガンは声を漏らすと上体を折って着地する。

間をおかずエルヴィはホクガンのこめかみに蹴りを叩き込む。

「どうです？国主殿。前言は撤回してくれますか？」

腰に手を当ててホクガンを見下ろすとエルヴィは勝ち気そうに声を掛けた。

と、ホクガンの体が揺れている。

？ エルヴィが訝しそうにしているとゆっくりとホクガンが立ち上がった。

その顔は面白いおもちゃを見つけた子供のように（不純な感じで）輝いている。

エルヴィはその得体のしれない笑顔に後ずさりした。

「なかなかやるじゃねえか。そういやベリアルの副隊長だったなあ。」

悪かった悪かった。」

ホクガンは首を捻り、コキツコキツと鳴らすと

「それじゃあ、それなりに」

喋りながらグンとエルヴィの間合いまで入る。

「楽しもうじゃねえか。」

あ、と思った時はもう遅い。エルヴィは胸に衝撃を感じ吹っ飛んだ。

「ぐうっ！」

ズザザア・・・！

何とか膝をつかない様に堪える。

「おい、休んでる暇あねえぞ。」

ホクガンは今度は右足をエルヴィの脇腹に入れた。それを何とかガードする。

エルヴィはホクガンを見上げた。相変わらず余裕ありげにニヤついている。だがさっきまでの仕方なく相手をしている感じではない。

「いきますよ、国主殿。」

エルヴィは怒りを忘れ、全てを尽くして戦う躍るような時間に没頭して行った。

「どつちが勝つ？」

ダイスはホクガンの長い黄金色の髪とエルヴィの短い銀髪が激しく交差するのを見ながらガツクに話しかけた。

「ホクガンだ。あの程度の動きではまだ（実力の）5割も出してはいまい。俺から見れば遊んでいるだけだ。」

相変わらず面倒な戦い方をする奴だ。

ガツクが顔を顰める。

ホクガンはガツクやダイスには負けるが軍人ではないのが惜しいほど強い。

が、強すぎて試合などをすると早くに終わってしまい面白くないので相手の力量に合わせて闘うようになった。相手を舐め切った戦い方だが、強いものが弱いものに稽古をつけてるようなものゝ口惜しければ俺より強くなってみゝろゝで黙らせた。（諸君の考えうる限りのムカツク言い方で再現よろ）

「みーお。ふみみ。（ホクガンなんてどうでもいいよ。テンレイさんどうなったのかな。）」

ようやく落ち着いたモモコは（意識はするがじたばたするほどではなくなった）テンレイの事を思い出した。

「……わかるか？」

「なにがじゃ。」

「今、モモコが鳴いたのが聞こえなかったのか？」

「聞こえたが……アホか！わかるわけねえじゃろ！」

うーむ。俺もまだまだだ。もつと精進せねばと呟きながらガツクはボトムの後ろポケットからABC表を取り出すと、それを地面に敷きモモコをそつと降ろした。

(……いつもどこにどうやってしまっているのかなあ……)  
(わかる時もあるんかい！)というか わかるようになるうとしとる！お前という奴は……)

モモコは文字の上を歩いた。

「て・ん・れ・い・さ・ん。テンレイの事か。大丈夫じゃ、折れとる個所もないし腱が切れとる事もない。ただ打撲は酷いし顔も殴られちよるから腫れとるがな。」

モモコはちよつと早足で表を歩いた。

「あ・い・た・い。」

モモコ……

ダイスは心配そうに自分と救護室の方を交互に見るモモコに胸の内  
が暖かくなった。

「ガツク。」

「何だ。」

「モモコを抱っこしてもええか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ。」

「どんだけ逡巡!？」

なが〜い葛藤の末不承不承に頷くガツク。

ちなみに今ホクガンはエルヴィの蹴りを空中で受け止め、その足を掴んで床に叩きつけようとしていた。

が、モモコが他の男の腕に抱かれるのを目の当たりにしなければならぬ(なんか18禁な文章だが猫が大男に抱っこされてるだけ)ガツクの頭の中にはホクガンの存在など微塵もない。

ダイスはガツクに呆れながらも滅多に抱っこできないモモコの柔らかな体をそつと持ち上げた。(ダイスもホクガンの事は眼中にありません)

「モモコ、忘れちゃったがテンレイから伝言じゃ。自分の事は気にせず試合に集中しなさい、ケガなんてしないでじゃと。それに今、奥の職員が医者と相談しながらテンレイの顔面修復しとるけえ。ばたばたしとるし、お前が行くとなればガツクも行くんじゃない、こいつがいいたらどうなるかわかるじゃろ?」

モモコの頭を撫でながらゆっくり話す。



( テンレイさん……苦しいはずなのに……私の事なんか心配しちゃって……あとダイスさんて3人 ( ガツク、ホクガン、テンレイ ) に比べるとそうでもないと思っていたけど結構口悪いな。顔面修復って…… )

モモコはダイスが話すのを口を半開きにして納得しながら聞き、

「ふみ！にゃーお！（わかった！テンレイさんに良い報告できるよ  
うに頑張る！）」

じっとダイスの目を見つめ可愛らしく鳴いて返事をした。

「おお、モモコは聞き分けのいい、ええ子じゃのう。テンレイもこれくらい素直じゃったらええんじゃが。」

ダイスも目を細め、微笑みながらモモコを見つめ返す。  
恋愛度はないがほのぼのとしたすごくいい雰囲気だ。

が、なんか忘れてないか。アレの存在を。

ダイスとモモコのほのぼのをぶち壊して暗黒のあなたに放り投げ、  
ダイスをズタズタに切り刻んでしまいたい鬼がここに一人。

その冷気にダイスとモモコが微笑み合いながら固まったままの超間  
近に立ち

「ダイス……お前の接触具合は行き過ぎだと思わないか？

「……俺は思っただがな。」

マイナス45度感を醸し出しながらの声音は生きたまま新鮮に冷凍保存してくれそうだ。

その頃、ホクガンは調子に乗って油断していた所にエルヴィに鳩尾をしたたかに蹴られ悶絶していた。

ダイスはパキパキに凍りながらもモモコをガツクに渡した。（ある意味盾）

「お前、とんでもなく心の狭い男じゃな。これでモモコに恋人でも出来たらどう……す……るん……」

恋人の辺りでガツクの、その気になれば人を殺せるらしいと軍部の七不思議のひとつに数えられている眼光がダイスに容赦なく突き刺さり、ダイスは危うくそれが本当だった事を証明した事で軍部の歴史に名を残す所であった。

モモコは先程の冷気などそよ風を感じるほどの圧力に晒されているダイスに同情しながらも

（恋人ねえ……ないな、うん。中身人間だし。人間だった頃も……あんまり興味なかったって寂しい！私って寂しい……！）

過去に思いを馳せその色気のない人生にちょっと凹んだ。

過去に意識が向いているモモコを余所に闇のフィールドと化したこちらでは魔王様が

「もし……もしそんな存在がこの世にいるのなら是非とも会い

たいものだな……」

要注意発言を発信。

ガツクに見つかった時点で”恋人がいます”から”いました”と光の速さで過去形にされるのは必然だ。

いや、最初からいなかった事にされるだろう。

ダイスは仮死状態から復活するとモモコに同情した。未来のモモコの恋人にもした。そして予測できない程の惨劇に奔走するだろう自分と周りの方々にもした。

まあモモコの恋人云々はともかく、これから奔走する大事件が待っているのは確かだが。

それはもう少し先。

「場外！ラウンド選手の勝利です！」

レフェリーの声とそれを打ち消さんばかりの大歓声に、あ、そういうえばホクガンの試合じゃったのうと漸く親友の事を思い出したダイスが舞台に視線がやると、ホクガンがエルヴィに手を貸して舞台に引っ張り上げている所だった。

「大丈夫か？痛みの酷い所があったら素直に行っておいた方がいいぞ？」

あつけらかなとしていうホクガンにエルヴィはムカツとなる。

このニヤけた男が全てにおいて自分よりも上だなんて認めたくはない。

だが息が切れ、ヨレヨレの自分と比べて余裕綽々に立っているホク

ガンの違いは歴然である。  
口惜しいがエルヴィは礼を取ってホクガンに敬意を示す。

「対戦できて誠に光栄でした。国主殿。お見逸れしました。」

ホクガンはエルヴィの乱れた髪をさらにグチャグチャにしながら

「お前との試合面白かったぜ。ベリアル軍の未来は安泰だな。」

太陽の様な、と、形容される笑顔でエルヴィの健闘を（ホクガン流に）称えた。

その眩しい（のか？）笑顔にエルヴィはドキンと胸が鳴った。ついで顔がカアーツと熱くなる。

「ん？おい 顔が赤いぞ。大丈夫か？」

ホクガンが熱さを確かめるようにエルヴィの頬に手を当てた。

！！！！！！

エルヴィが試合後と思えない早さで後退する。

「だ、大丈夫、ですから！ぜん、ぜん！あ、ありがとうございまして！」

そのままダッシュで舞台から遠ざかる。

ホクガンは手を当てた恰好のまま取り残された。

「何だアレ。」

「国主、次の試合の準備があるのでとっとと舞台から下りて下さい。」

雪董のレフェリーは淡々と返した。

急に赤面し、しどろもどろになったエルヴィに首を傾げながらもホクガンは国民に応え、貴賓席に礼を取ってからガツク達の所に戻ってきた。

「おい、お前ら仮にも国主の試合、シカトしてたなって……どうしちゃったのコレ。」

黒い存在となり果てた親友とその腕に抱かれなんか落ち込んでる風な猫。(精神的に)疲れてしゃがんだままのもう一人の親友。ダイスは立ち上がり、ホクガンを労った。

「なんでもねえ。ご機嫌じゃったな。」

「おう。なかなか面白い奴だった。久々に普通に楽しめたな。」

黒い感情から浮上したガツクはホクガンに

「戻ったか。勝ったんだろうな?」

それすら!?的な言葉で迎えた。

「……まあな。ハア。」

「にゃー。(ホクガンお疲れー)」

モモコも、あ、いたの。って感じで声を出す。

「……もう俺泣きたい。」

斜がかかったホクガンは呟く。

「次はワシじゃな。」

ダイスは整備が行われている舞台を見つめ、脳裏にそこで執拗に攻撃されていたテンレイが浮かんだ。

「おい。」

ホクガンが険しい顔になったダイスに声を掛けた。

「なんじゃい。やり過ぎるなというやかましい事は言わんじやろうな。あいつはテンレイどころかワシらの国まで貶めたんじゃぞ。」

既にギラギラと戦いを欲する青い目を見返しながらホクガンは

「言わねえよ。俺達を怒らせるとどうなるか忘れちまったみたいだからな・・・もう一度わからせてやれ・・・シスに敬意を拝して。」

シスに敬意を拝して。

それはホクガン達が敵を前にして言うある符号だ。

「シスに敬意を拝して。」

続けてガツクが言う。

ダイスは普段は甘いと評される笑顔を戦士のそれに代えてワラウ。

「シスに敬意を拝して。」

4 - 1 1 未来の恋人はいません(後書き)

彼の心の狭さはアリンコの額ほどでしょう。



ゼレンの皇太子は自分の耳を疑った。

今、自国の軍人が喚き散らした言葉が信じられない。

こんな公の場で・・・なんて事を・・・

茫然としていると周りの他国の代表団、皆が自分を見ている事に気づく。

「あ、い、いや、これは。」

何とか言葉を紡ごうとするが何も思いつかない。

他のゼレン人も皆青ざめ、何とか逃げ道を捜すようにきよるきよると辺りを見渡すが、怒りに満ちたドミニオン国民のうねるような熱気に気づくと一様に身を竦め俯いた。

どうするどうする・・・

自分達の元は属国が、という傲慢な思いと急激に力をつけ今ではゼレンどころか、格上のベリアル帝国と肩を並べるまでにのし上がったドミニオンを恐れる気持ち。

蔑む気持ちと焦りや恐怖がない交ぜになった皇太子の背後から静かな声が聞こえた。

「ゼレンの皇太子殿。貴国の軍人は大変な事をしでかしてくれましたな・・・。」

皇太子が振り返ると、そこには不気味なほど無表情なホクガンが腕を後ろに組んで自分を見下ろしていた・・・。

舞台上で初めてダイスと対峙したノーフェはその静かな青い目にゾクツとした。

自分は・・・何かとんでもない間違いを犯してしまったのではないだろうか。

その思いが形になる前にダイスの拳が顔面にまともに入った。

だがそのパンチはノーフェがよろける程度のものだ。

なんだ この程度のものか。大将と名乗った所で所詮は小国。やはりぬるいもんだ。

ノーフェは先程感じた危機感を気のせいだと思いダイスに向かう。

それがダイスの策だとも知らず。

ダイスは強弱をつけた攻撃の合間に、ノーフェをトランス状態に持っていく攻撃を与え続けた。

そして

「ほれ、どうした？お前の攻撃はちつともワシに当たつたらんぞ。

どうした？もうお疲れか？女には効いても男には効かんようじゃの

う。」

などとノーフェを煽り続けた。

それがどれくらい続いただろう。ノーフェに時間の感覚はとうに無い。

朦朧とした頭と今にも膝をついてしまいそうなガクガクと震える体意識を失ってしまいたいがそれを許さないダイスの煽る声と的確に入れられる拳や蹴り。

「口惜しかろうなあ・・・元は宗主国よ。お前は元は属国に無様

にやられるんじや。どうじや？今の気分は？ワシは最高の気分じやが。ん？もう電池切れかい。」

そう言つて仕上げとばかりに掌打を叩き込んだ。

床に沈むノーフェ。

朦朧とした頭にいつも感じている劣等感とも焦りともつかない感情が浮かぶ。

こんな・・・なぜこんなに強い・・・属国のくせに・・・我らの方がお前達より上だったはずなのに・・・

勝ち誇つたように自分を見下ろすダイスに云い様のない憎悪が込み上げ、顔が憎しみに醜く歪んだ。

「何を！選ばれた民である我がゼレンに隷属していた愚民が！お情けで自治領国にしてやったのに調子に乗りやがって！元属国は元属国らしく厭らしく這い蹲つておればいいものをっ！」

口から血や唾を飛ばしながら憎々しげに大声でダイスを罵った。

もうどこが痛いかわからない軋む体から滴る汗。ハアハアと息切れする口からは血と涎が垂れている。

と、やけに周りがシンとしている事に気がつく。

ノーフェは俯いていた顔を上げてハツとした。

レフェリーも警備をしているドミニオン軍部も、そして試合観戦しているドミニオン国民も皆ノーフェを見ていた。

自分は今何を・・・何を口走つた？

ノーフェは茫然としたままもう一度ダイスを見上げ、その恐ろしいまでに澄んだ濃い青い目に逃げ場はない事を知った。

「皇太子は確か・・・ゼレン国軍の総帥でしたな。」

ホクガンはゆっくりと青ざめた皇太子の前に廻ると

「我が国民の面前でのポートルム大佐の暴言、総帥として、ゼレン国代表としてどう責任をとるおつもりで？それともゼレン国軍、いやゼレン国は我がドミニオンをいつもあの様に評しているのですか？」

下手な言い訳など許さない絶対的統治者のそれで皇太子を追い詰める。

「い、いや、決してそのような・・・。」

暑くもないのに汗が滲み出てくる。

「では、この事をどう収めましょうかね。ポートルム大佐はあの通り」

ホクガンは舞台を振り返ってダイスに最後の拳を打たれ柱に激突し、気絶したノーフェを指した。

「意識がない状態です。国民の怒りは貴方方ゼレンの代表団に向けられるかと。いくら国主の私でもあの暴言は取り払い様もありますせん。どうしましょうかねえ。」

「カイン、雷桜隊全員でゼレン国軍を一箇所に集め、包囲しておけ。一人も逃がすなよ。」

ガツクはカインに連絡を取ると今度は控えていたダイナンと共に救護室へと赴き、喚くモルデイとまだ気絶したままのグリード、運ばれてきたノーフェを軍部内の施設に移すよう指揮した。

そして控室に戻り帰ってきたダイス、3人の大将と共にドミニオン国民が暴動を起こさない様会場に睨みを利かせた。

「旦那、ゼレン国軍はホクガン達を怒らしちまったみたいですね。」

ローはこの突発的に見える騒動を静観している赤毛の軍隊長に話しかけた。

「うむ。おそらく先刻喚いていた事と似た事だろう。」

ローはてきぱきと指示を飛ばしている3人の大将と指示をしながらも、貴賓席の方を見ているガツクとダイスに視線を移した。

「ばかな奴らですねえ。もう忘れちゃったんですかね、6年前の事を。」

6年前、ホクガンが国主を就任すると同時に開かれた国際会議の最中に、年若い新参者の国主とまだそれ程名の売れていなかったガツ

クとダイスに向かつて、ドミニオンを侮蔑した数力国の者達がいた。その時は言われるままに黙っていたホクガン達だったがその数日後、侮蔑した者達の国々が一齐にホクガン達、ドミニオンに謝罪と賠償をとった。それも国王や首相達が直々に。

裏で何があつたかは知らないが、今まさに目の前で行われている事を見れば想像がつくというものだ。

ワイズム国王は当時のホクガン達を、

「あの3人はドミニオンきつての逸材となるだろう。我がベリオルもおちおちしてはおられんぞ。先が楽しみだ。」

そう言つて褒め称えた。

「どう収めさせるつもりなんですかね、とはいってもあの洒落者の皇太子がとる方法なんて一つしかないんですかね。」

「そつだ。そしてそれだけでは終わらない。」

ベントの言つ通りである。

シスに敬意を拝して。

それはガツク達3人共通の敵に死よりも強烈な罰を与える符号であ

る。

一瞬で終わる死などつまらない。

二度と同じ事ができないように脳裏に刻み込むまで知らしめる。

そしてそれは事が大きく後戻り出来ない程尚いい。

それは最終的に国対国の問題にまで持ち込む事だ。

60年前の様に力で押し切る時代は終わった。

未曾有の人命を失い、破壊された国土を残して終結した世界大戦は人々の傷跡となり急速に平和と倫理を尊ぶ世界へと傾かせた。

属国から自治領国となったドミニオンは復興を目指しながらも世界に働きかけ、ついに国際会議を開き二度と戦争などによって隷属国が作られない様提案。可決され、今に至る。

誰にも己らを従わせる事は出来ない

世界を相手にとっても折れない心を受け継いだホクガン達に、元がつくとはいえ属国と貶めたノーフェ達。

そしてその負の因習ともいえる事を許していたゼレン。

今彼らはそのツケを払わされようとしていた。

「この場を取りあえずじゃが、収める方法はある。」

いつまでたっても「いや、あの・・・」しか言えないゼレンの皇太子に呆れたように提案したのはベリアル帝国国王ワイズム。

「そ、それは何ですか!」

「ほっ?」

藁をも継る気持ちで乞う皇太子と意味ありげに片眉を跳ね上げワイズムを見やるホクガン。

わかっとなるくせに。

ワイズムはため息をつきながらも皇太子に向かってこう言った。

「今すぐこの会場で謝罪するのだ、ゼレンの皇太子。ここにいるドミニオン国民に向かって誠意ある態度を示さねばならん。そしてただちに本国へ帰り父王に事の説明をして改めて正式に謝罪するのだ。」

それはプライドの高いゼレン国にとって到底受け入れがたい方法だった。

「そんな！ドミニオンにそんな・・・」

「ドミニオンに？・・・なんででしょう？」

静かにだが首に刀でも当てられてる様な鋭い声でホクガンが遮る。皇太子はハツとしてホクガンを見上げる。

「皇太子は何もご存じないようだ。よろしいですか？今ゼレン国が謝罪をしないと国交断絶、今後は敵国と見なし我がドミニオン軍部が常時貴方方ゼレン国を見張る事でしょう。それにですね・・・今このレセプションのために各国から取材が来ているのを忘れましたか？貴方方ゼレンの対応が世界中に見られているんですよ？それでもよろしいか？それともこれは予め仕組まれた事あらかじめでしたかな？そうなるら皇太子殿も知っていたのでは？」

「し、知らない！私は何も！」

「しかし・・・頑なに謝罪を拒めばそう疑わざるを得ません。」

ドミニオンが強いのは軍部だけではない。



海の民を名乗るだけあって造船技術は世界トップクラス。

卓越した航海術と生まれながらにして駆け引きのうまいセンスは世界中との貿易を盛んにし、いろいろな所、例えば上は王宮から下はアンダーグラウンドまで様々な伝手を築き上げてきた。

ゼレンもそのうちの一国であるがここでドミニオンと決別してしまえば。

世界中のほとんどの国からそっぽを向かれる事は必死。ゼレンはたちまち衰退するだろう。

皇太子はドミニオン軍部と聞いて会場に集結した5人の大将達を見た。

その中、ひと際異彩を放つ2人の大将が真っ直ぐ自分を見ている。ダイスの氷の様な冴え冴えとした青い目とガツクの深淵とした黒い目。

ドミニオンに膝を折れ。さもなくば……  
遠く離れた場所にいた皇太子だが確かにそれを感じた。

「わかった……わかりました。」

皇太子は弱弱しくホクガンにいうとガツクリと首を落とした。

ホクガンはマイクを用意するように指示すると皇太子と代表団を促して立たせた。

「この度は……我がゼレンの一軍人がドミニオン国民の皆様……」

一斉にカメラのフラッシュがたかれる。今日にでもこのニュースは世界中に広まるだろう。

ノーフェが「属国だった国のたかが国主が」と吐き捨てた言葉からわずか数時間後。

ホクガンとガツク、ダイスの空恐ろしいまでの行動力と知恵、結束

力はまた話題に上るだろう。

震えながら小さく声を出す皇太子を見下ろしながらホクガンはこれで俺達にうるさく付きまとうゼレンも当分は大人しくなるだろうと考えていた。

（前から様々な嫌がらせを受けていたがこれを機に全部片付けよう。暇だし。）

暇じゃないですよ！その真逆です！貴方は国主ですよ！と泣きながら抗議するレキオスの声が聞こえてきそうな事を思いながらホクガンは自国民を抑えに演説した。

事態を何とか收拾するとゼレンの代表団はそのまま軍部の施設内に連れて行かれ、ドミニオン国民から身を守るためという名目のもと、波桔梗隊ではなく雷桜隊と霧藤隊に周りを包囲されたまま一夜を過ぎ、翌日自国へと帰っていった。

当然というか道々新聞やテレビ、ロコミで事の次第を知ったドミニオン国民に睨まれ罵倒されながら。

「ウザいのが片付いたら純粹に試合を楽しむか。」

一時間ほど掛って武道会を再開し、戻ってきたホクガンの第一声。

「次はガツクじゃのう。モモコ……大丈夫か？」

ダイヤはガツクの腕の中で縮みこんでいるモモコに声を掛けた。

「どーした？」

「いや、モモコが。」

ホクガンも丸くなるモモコを見て眉を寄せた。

「腹でも痛いのか。」

ガツクがモモコを撫でる。と、ふるとモモコが震えた。

「……………」

ガツクは目の高さまでモモコを持ち上げた。モモコは嫌々をするように身を振る。

「モモコ…………俺が怖いか？」

えっ！今さら！？

ホクガンとダイヤが驚きの声を上げる。

「いや…………俺達が怖いか？」

！

ホクガン達はモモコを見る。モモコはしょぼんと頭を落とした。

「……………」

「……………」

ホクガンとダイスはモモコが全部聞いたり見ていた事を知っている。自分達は他人から見たら恐ろしいのかもしれない。たった一言で国とまで闘う自分達。狂ってる。そう思われても……仕方ないのかもしれない。

(だが仲間にそう思われるのは嫌なもんだな。つうか俺ってコイツの事結構気に入ってたんだ。マジ意外)

(シヨツクなもんじゃな。モモコに嫌われとうないが、怖い思いさせたし(のう))

「モモコ……お前に怯えられても俺は構わん。」

えっ！

2人と一匹がガツクに注目した。

「お前が俺を厭おうと俺はお前を放さん。そういう時期はもう過ぎた。こんな俺もいる事に慣れた方がいいぞ……逃げたければ逃げてもいい……徒労に終わるだろうがな。」

(きたな)

ホクガンは目でダイスに語りかけた。

(きたの)

ダイスも目で返した。

(モモコを見てみい。固まっとなる)

ホクガンはモモコに視線を移した。

ピンクの猫からがやがて白い猫に衣替えしそうだ。

(うーん。困ったな。これじゃあチームワークどころか日常関係もやべえ。)

2人が唸っていても時間は過ぎていく。

「二回戦第四試合を始めますので、トーレ選手とガツク選手、モモコ選手は舞台にお上がり下さい！」

雨牡丹のレフェリーの呼ぶ声がする。

「モモコ。」

モモコはガツクを見上げた。

いつものガツクだ。

だけど……

「行くぞ。」

短く言うとガツクはモモコを肩に乗せ舞台へと歩き出した。

4 - 1 2 シスって誰？です（後書き）

ガツク達が”属国”に過剰反応するのはそれだけ当時の傷跡が深かったってこともあるんですが、個人的な事もあるんです。そのうち説明が入る予定です。

4 - 13 そうだったんです

・・・違つよ。

ガツクさん達が怖いんじゃない。

いや、うん・・・そりゃちょっと怖かったけど、終わった今はそうでもない。

わからなくて・・・ガツクさんが何を考えてどうしてああいう行動をとるんだろつって。

私・・・ガツクさんの事なんにも知らなかったんだなって。

どうしたらいい？

ううん、どうしたいんだろ。

私は・・・

「・・・質問・・・があるんですけど・・・いいですか？」

モモコはゆる〜く話しかけるエミリオの声にも思いから覚めた。

「何だ。」

ガツクが応じる。

エミリオはゆらゆらと体を揺らしながらガツクを見上げ、

「・・・どうして・・・猫・・・さん を連れて・・・試合に出ようと思ったんですか？」

モモコに視線を移す。(猫、のあたりでガツクの眼がギラツとなったので慌ててさんをつけるエミリオ)  
モモコは目を見開いた。今まで誰もそんな事を聞いてくる人がいなかったからだ。

ガツクはしばらく黙っていたがベントに言った事を繰り返す。

「ハンデみたいなものだ。」

エミリオは目を瞑って眠・・・いや考えてからゆるく首を振った。

「・・・違いますよ・・・ね？・・・国主さんが・・・僕達にしつこいほど忠告してくれました・・・命が惜しかったら・・・猫さんだけは・・・攻撃するなど。」

「・・・何が言いたい。」

「・・・その忠告・・・は・・・裏を返せばあなたがどれほど猫さんを・・・大事にしてるかを表しているのではないかと・・・なぜ、それほど大事にしているのに・・・こんな危険な試合に・・・しかもゼレン国軍にバカにされてまで・・・猫さんと出ようと思ったんですか。」

モモコはエミリオの最語の言葉にハツとしてガツクを見た。

ガツクはモモコを撫でながら、余計な事を、と言わんばかりにエミリオを睨みつけ、

「気にするな。弱者のたわごとだ。」

ゼレンなど歯牙にも掛けていない事を伝える。

「その子・・・今、反応しました？」



ガツクはジロツとエミリオを見、モモコはあっ！として見た。エミリオはいつもより心持大きく開けた目でモモコを凝視し、

「すごい・・・君、人の言葉が・・・」  
「始める。」

ガツクはエミリオを遮るように言いレフェリーを促した。レフェリーは頷き、開始を告げる。

「ただ今より二回戦第四試合を始めます！始めて下さい！」

エミリオは開始と同時に伸ばされた掌打をバックステップして避けると尚も話す。

「・・・その・・・毛色も珍しい・・・けど、中身はもっと・・・すごいんですね。」

ガツクはモモコに耐えうるスピードで間合いを詰めると右拳を繰り出した。

エミリオはその重い拳を何とかガードすると反撃しようとして衝撃をくらった。

「ぐっつうー！」

拳を追い掛けるようにしてガツクのハイキックが頭部に叩きこまれたからだ。

このコンボ技に堪らず膝をつく。  
ガツクは少し離れてエミリオが立つのを待った。

「・・・コクサ大將は猫さんが大事・・・出したいわけじゃない・・・」

・・・でも現に猫さんと出てる・・・猫さんは人の言葉がわかる・・・  
君か・・・君が出たがったんだね。」

エミリオはモモコを真っ直ぐ見上げて微笑んだ。

ドンピシャー！

(なんでわかんのか!?この人ボケた感じで常時ネムそうな顔して鋭い！)

エミリオはガツクの頭を狙い伸びあがって蹴りを繰り出した。ガツクはしゃがんで避ける。と、モモコがそれについていけず肩から落ちた。

(わあああ！しまったあ！落ちる！)

モモコは床に落ちる所をガツクの大きな手にすくわれ、直後ガツクは捻った体の勢いを殺さずエミリオに回し蹴りを叩き込んで着地した。

「モモコ、集中力が切れてるぞ。しっかり掴まれ。」

「ふみ！（ごめんなさい！）」

モモコはガツクの肩に乗ると前を見た。

エミリオが吹っ飛ばされ、危うく場外になる所を支柱を掴んでこらえ、瞬時にこちらへと向かってくる。

繰り出された顎への掌打を難なく避けたガツクは、エミリオの手を掴むと背負い投げのように振り上げて床に叩きつけた。背中から落ちたエミリオの顔が激痛に歪む。

速い・・・

それにしても……

エミリオは床に仰向けのままモモコを見上げた。

(なんて強い目だろう。……………うん、気に入ったな。)

エミリオは勢いをつけて立ち上がると、

「参りました。」

唐突に負けを宣言した。

会場がざわつく。

「ギブアップ！コクサ選手、モモコ選手の勝ちです！」

レフェリーはガツクとモモコの勝利を大声で告げる。

「……………なぜだ。」

ガツクが訝しそうにエミリオを見る。

モモコもパチパチと瞬きした。

そんな一人と一匹にゆるく微笑んでからエミリオは理由を述べた。

「……………これ以上しても……………あなたには勝てない……………それに……………」

エミリオはモモコにニコツと笑うと、

「猫さんが気に入ったから……………もし、猫さんに僕の攻撃が当たったらと思うと……………試合に集中できなくなりました……………」

「お前ごときの攻撃が当たるか……………ふむ。」

ガツクは腕を組んでエミリオを見下ろした。

「……………どうか……………しましたか？」

エミリオは既にトロンとした目で眠たげにガツクを見上げる。

「ベントの部下にもモモコの可愛らしさがわかる輩がいたか……………だがコレはやらんぞ。」

しっかりと釘をさしてからガツクは舞台を降りる。

「意外な展開だったな。強かったんだろ？」

控室に戻ったガツクとモモコをホクガンはこう言って迎えた。  
ガツクはモモコのチェックをしながら応える。

「マシな方だろう。お前と対戦した女よりも使えるだろうな。そんなことよりトーレにモモコが人語を解するのがばれた。」

「マジかい……………まあそんなに支障はねえじゃろ。ペラペラ喋るような感じではねえが。」

ガツクはモモコに頑張ったと撫でながら、

「ふん、邪魔になるようなら黙らすのみ。次のベントのようにな。」

次ワシとなんじゃが……  
自分を指差しアピールするダイスの肩をホクガンは同情をこめて叩いた。

「ま、いいじゃねえかダイス。どうせこつしようとしてたんだしよ。」

「何の話だ。」

また迷惑な策略か。

ガツクの目が呆れたように半目になった。

「何だよ、その目は。……ガツク、俺達次の試合は棄権するから。」

「何？」

「ふにゃ？（ええー？）」

一人と一匹は同時に声を出した。

ホクガンはガツクの向かいに座ると長い脚を組んで説明した。

「俺達4人が試合したって時間がかかるだけだ。そうなたら俺達はともかく、モモコの体力はヤバいんじゃないのか？ ベントは本気でくるぞ。モモコの体力をダイスとの試合で使い果たすわけにやあいかねえだろ？ それに武道会の目的はほぼ達した。総所の士気ならもう充分上がったし、ゼレンの事もあったから結束力も強まったし、他国のデータも取れたし。」

ダイスも続ける。

「それにこれ以上モモコに嫌われたくないしのう。」

そんな・・・違うんだよ、ダイスさん。  
モモコは首をフルフルと振った。

「モモコ。」

モモコはホクガンを見た。

「俺達がああいう手段をとるのには理由がある。それを話してもわからんかもしねえが、話さん事にはお前に嫌われたままだからな。仲間にそんな風に思われんのはごめんだ。だから知ってくれ。ただし、武道会が終わってからだ。」

「そうだ、これから長い間一緒にいるのだからな。モモコも知っておいた方がいいだろう。」

あ・・・そつか・・・わからないんなら聞けばいいんだ。  
私・・・知りたいんだ、ガツクさんの事。ホクガン達の事。  
教えてもらえばいいじゃん。  
こんな簡単な事がわからなかったなんて・・・私っておバカ。

モモコはにゃーと鳴いてガツクの前に降り立つ。ちよっとステップして言いたい事がある事を伝えた。  
そして、

「き・ら・い・じゃ・な・い」

「モモコ……」

さらにモモコはステップした。

「こ・わ・く・も・な・い・よ」

「ガツク……」

ホクガンがモモコを見ながらガツクに話しかけた。

「駄目だ。」

ガツク即答。

「何でだよ！まだ何にも言<sup>なん</sup>ってねえだろが！」

「どうせモモコを抱かせてほしいとかその類だろう。駄目だ。」

「当たってるけど、ダイスはよくてなんで俺は駄目なんだ！鼻屑だぞ！グレルぞ俺は！」

「勝手にグレル。ダイスが抱いた時、到底我慢ならん事が分かった。ダイスも次はない。」

「……お前さあ、心どんだけ狭いんだよ。……じゃあ撫でてもいいか？」

「……」

「なげえんだよ！モモコに感動した俺の気持ちがどっかいつちまっただじゃねえか！つつこませんな！」

「ダイス……触るな。」

ホクガンを無視してガツクは、いつの間にかモモコの両前足を取ってブラブラしていたダイスの側頭部を殺意を込めて蹴った。

触るのも駄目か。

壁に激突して呻くダイスを見てホクガンは悟った。

残像を残して飛んでいったダイスに心の中で合掌してからモモコは、

「にゃん！（ガツクさん！）」

ガツクに注目させると表の上をこの頃はすっかり慣れ、速く移動できるようになった足さばきでちょこまか動いた。

「がつ・く・さんの・こと・もっ・としり・たい・おしえ・て」

。 . . . . .

「 . . . . .なるほど、ああやってガツクが全力を出す事になったワケね。」

「 . . . . .モモコは無意識なんじゃろうなあ。罪作りな . . . . .と  
言っているのかわからんが . . . . .猫じゃのう。」

「つつかもう面倒くさい。」

ホクガンとダイスはモモコのうるうるな瞳にやられ、前かがみになって額を覆い、なにやらブツブツと（恐らくドン引きな内容）呟くガツクと不思議そうに小首を傾げて大男を見上げるモモコを見て正しく理解した。



「まあ、なにはともあれ。」

ホクガンはダイスと共に飛んでいった椅子を元に戻して座りながら、モモコを見下ろしてまとめる。

「全部は武道会が終わってからな。必ずベントに勝て、モモコ。アイツのあの暑苦しい口を塞ぐのは闘って勝つしかねえ。お前の事を認めさせてやれ。力づくでな。」

モモコは本日何度目かになる衝撃を受けた。

「にゃ・・・にゃああああ！！！！（ああああ！！！！そ、それだよホクガン！！あんたってたまにはいい事言うじゃん！！！！）」

大男3人は急に大声を出したモモコにビクツとなった。

（そうだよ！私、認めてもらいたいんだ！ベントさんだけじゃない、他の人達にも！そして・・・ガツクさんにも。ガツクさんと・・・対等になりたいんだ。守られるだけじゃない。隣に立ちたいんだ。これだったのか・・・うん、じっくりくる。間違いない、この気持ち。）

大男たちはなにやらウンウンと一匹で納得している猫を首を傾げて見ていたが、会場のアナウンスを聞いて表情を引き締めた。

「ラウンド選手とラズ選手の棄権により、準決勝戦は行いません！ よって、ベント選手とコクサ選手、モモコ選手による決勝戦を行います！両者とも準備がよろしければ舞台上までお越しく下さい！」

「モモコ……ベントを黙らすぞ。」

「にゃあ！（はい！）」

モモコは両手を広げたガツクの腕に飛び込む。

モモコを軽く抱きしめてからガツクはモモコを肩に乗せ、

「……ベントの首、楽しみに待ってる。」

「違うじゃろ！ベントの暑苦しい首なんかいるかい！死人を出すんじゃないねえ！」

ダイスに怒鳴られる。

「チッ！」

「コイツ舌打ちしやがったぞ……ほどほどにな、ガツク。頼むぜ？」

「……わかってる。」

ほんとかよ。

不機嫌そうに舞台に向かうガツクとモモコを、不安げな表情で見送ってからホクガンはダイスに呟く。

「ベントは五体満足で終わると思うか？」

「無理じゃろ。」

「即答すんなよ。嘘でもいいから だいじょーぶっ！って言え。」

ダイスは気持ち悪いのうという風に顔を顰めてホクガンを見た。

「言っかつ！その口塞ぐぞ！」

舞台上ではベントとガツクが睨みあっていた。

「ガツクよ！本気でその猫と共に闘うつもりか！」

「うるさい。怒鳴らなくとも聞こえている。」

「他の奴らではお前には勝てないであろうが、この俺は違っぞ！たとえ猫というひ弱なおまけがいようと容赦せん！」

「黙れ。お前も俺には勝った事がないだろうが。」

「何をー！」

「おい、キリがない 早く始める。」

ガツクはうんざりした様にレフェリーを促した。

「はっ！それでは決勝戦を行います！始めて下さい！」

4・13 そうだったんです(後書き)

モモコの自立がやゝと形になりました。

4 - 14 レベルは999ですか？

モモコは焦っていた。

ベントとガツクの試合は、決勝戦という名にふさわしく熾烈を尽くしたものになったが、いつもならガツクが断然有利になっている展開が今回はややガツクが押されぎみだ。

それもそのはず、ガツクのスピードがモモコのせいで半分以下に押しえられているのだ。

ベントさんを見返してやる！私を認めさせてやるぞ！と意気込んだのはいいが当然のように現実には甘くなかった。

（確実に私がハンデになってる！これだけ左右にズレまくれば当たり前かあ〜！わあああ！）

肩に止まる事はおろか、落ちない様にするのがやつとだ。

しかもベントはモモコが大きくズレるように攻撃を加え、ガツクが修正するそのわずかな隙を狙って、的確にガツクに拳や蹴りをヒットさせていた。

（ベントさん意外に速い！顔も怖い！わあああ！）

ベントが大きく蹴りを出し、ガツクはこれを避けようとして大きく跳んだ。

と、それに置いていかれるような形でモモコはズリリ〜とまるで崖からずり落ちる人のようにガツクの背中側から落ちようとして

（ふおおお！落ちてたまるかあ！足で足りなかったら・・・これ

だあ！)

ガブツとガツクの上着を口で噛み、足に力を入れて耐える。  
ガツクは着地すると同時に肩に戻ったモモコを撫で

「モモコ・・・よく耐えたな。偉いぞ。この調子だ。」

ベントに殴られ少し腫れた顔を緩ませた。

「ふん！その猫よく訓練しておるようだな！先程の速さについて」  
れるとはなかなか！」

ベントは腕を組んでモモコをギロリと見下ろす。

モモコも負けじと睨み返す。

その様は一端の戦士いっばしのように・・・まあえらく可愛いが見えなく  
もない。が、内心は

(ひよえええ！怖い！超顔怖い！ガツクさんと違う領域で怖い！)  
いっぱいいっぱい。

ベントは可愛くも強い目で己を見るモモコをしばらく見ていたが、  
口の端をくつと上げると唐突に大声で笑い出した。

ビクウ！となるモモコ。あまりの声のでかさにと耳を塞ぐガツ  
ク。

ベントは一頻り気が済むまで笑うとモモコを見つめて

「この俺を睨み返すとは生意気な！気に入ったぞ猫よ！」

ニヤリとさらに恐ろしい顔で笑った。

直後、モモコに向かって手を突き出した。

ガツクはすぐさまベントの手を払い、ベントの顔に掌打を当てるがそんなものに怯むベントではない。体勢を立て直すと裏拳でモモコを狙う。阻まれると今度は蹴りを。次は・・・

執拗にモモコを狙い始めたベントにモモコを守るため防戦一方のガツクの額の青筋は一本、また一本と増え始める。そしてモモコはベントの息をも附かせぬ攻撃に落ちない様に口と脚を使って耐えるのに精いっぱいそんなガツクの様子に気付かないでいた。

目の前のベントに集中していた事もあったが、激しい攻防に遂にモモコの体力が限界に達しようとしていたのだ。

(や、ばい。感覚がなくなってきた。)

足を踏ん張って堪えるがもう口でぶら下がっているような状態。しかもその口も危うい。

だがその目だけは闘争本能を燃やして強くベントを見つめる。

ベントはそんなモモコを見、ニヤリと笑うといきなり右回し蹴りをガツクに、ゆるい右掌打をモモコに分けて同時に繰り出した。

「ぐッ！」

「ぶにゃあー！」

一人と一匹は左右に別れるよう引き離される。

しまった！

「モモコー！！」

弾き飛ばされたガツクが叫ぶ。

モモコは投げ出されたショックでぼうつとした頭を振って前を見、

ベントが悪鬼の形相でこちらに走ってくるのを信じられない様に見た。

( 殺されるうー！！ )

あばばばばー！

モモコはヨレヨレの足を使って必死にガツクの所へ走ろうとして・  
・コケタ。

痛ったーい。

ググツと上半身を起こした時モモコは、ベントが下手したてに平手を出したのが見えた。

( やられるー！ )

衝撃に耐えるようにギュツと目を瞑った。

( ……あ、れ？ )

いつまでたっても衝撃が来ない。

不思議に思っただけ目を開けたモモコの目に飛び込んできたものは。

「モモコ、無事か？」

ベントから庇うように自分に屈みこみ、額から血を流したガツクだ



った。  
ポタツ・・・ポタツ・・・と血はガツクの頬を滑り、モモコの足元に落ちる。

(ガ・・・ツクさん?)

モモコは体中の血が一気に下がるのを感じ、自分の心臓だけがドクンドクンと波打つのを感じた。

(うそ・・・血が。ガツクさ・・・ん・・・私を庇って?・・・あっ!)

モモコが無事なのを見て緩むガツクの肩越しに手刀を構えたベントが見えた。

何かを考える前にモモコの体はガツクを飛び越え、ガツクとベントの間に着地すると毛を逆立て唸り声を上げてベントを威嚇した。

「ふぎやお!ふぎぎーっ!(いい加減にしてよね!これ以上ガツクさんは殴らせないんだからな!)

ガツクは大の男でも逃げ出すベントの強面の前に憤然と立ち向かう小さいモモコを、あっけにとられて見ていたがじわじわと喜びが体中を駆け巡るのを感じた。

(モモコが・・・俺のために、俺を守るためにあのベントに立ち向かうとは・・・モモコにこんなに想われて俺は・・・モモコ・・・もう一生お前を(長いし内容もアレなので省略)・・・そんな俺とモモコを引き離そうとするかベント・・・おのれ(自主規制)してくれる・・・)

ガツクは流れる血を拭おうともせず立ち上がると、戦場や任務以外

で滅多に出さない本気の力をベントに出した。  
小さな猫が自分を威嚇するのに虚を衝かれたベントだったが迫る影にハツとした。

直後ガツクの本気の拳が腹に打ち込まれ堪らず膝をつく。

「・・・少し待て、ベント。」

ガツクは静かすぎる声でベントに命じると、支柱の一つに歩み寄り、拳を振り上げて叩き込んだ。

ズダァン！

ビシビシイと支柱にヒビが入り続けてバキツと折れ、さらにズウウウンンと音を立てて地面に転がった。

ア然として静まりかえる会場の皆さんと同じように、モモコも口をあんぐりさせていきなり支柱を叩き割ったガツクを見ていたが、

「モモコ・・・俺のわがままを聞いてくれないか？」

と無表情の中にも青筋を立てたガツクにコクコクと首を縦に振った。ガツクは激怒するあまり震える手でモモコを抱き上げると、ガツクの肩ほどで折れた支柱の上にそつと降ろした。

「お前と共に戦おうと決めたが、もう我慢ならん。お前のやる気の水を差すようで心苦しいが、俺一人でやらせてくれないか？この償いは必ずする。」

この事をホクガンが知ったら（というか支柱を叩き割った時点でホクガンは察し、ベントが死なない様神に祈っていた）全力でモモコを押し付けていただろう。

モモコはある意味ガツクのリミッターでもあったのだ。

モモコがいるからグリードやエミリオ、ベントもガツクと対等に戦えた。(グリードは瞬殺されたけど)

コレ(モモコ)がガツクから外されれば。

しかもベントはモモコを執拗に狙い、拳句の果てには叩き落とすという暴挙まで仕出かしている。とは、激怒しているガツクから見たベントの行為で、実はベントはモモコに攻撃を当てるつもりはまるでなく(弱きものに振るう拳など!このベリアル帝こ・(ウザいので省略) 持つとらん!!!)モモコがいるため動きがまるで鈍いガツクに最初から狙いを定めていた。まあ、モモコがあんまりにも可愛らしく勇敢なため調子に乗ってしまったところもあったが。

ガツクと引き離れた掌打もなるべく力を入れないようにしたし、モモコに向かったのもガツクが戻るまでにモモコを場外に出そうとしただけ。必死になるあまり悪鬼のようになってしまったが。

要するにガツクと本気でぶつかりたいベントは、ホクガンからモモコの事を聞いてからなんとかモモコだけを場外に出そうとしていた。それとは別に外見からでは全く予想もつかない勇敢なモモコを気に入っただけなのだ。

モモコから承諾をもらった(するしかない)ガツクはゆっくりとベントに向き直った。

その顔は彫像のように静かだがよく見ると青筋が一本や二本どころではなく、目はベントを地獄の底に突き落とさんばかりに鋭く、薄い唇は歯を食いしばるあまりヒクヒクと引き攣っている。

「フッ! 漸く俺と本気でやり合う決心がついたか! やはりこうでなくてはない!」

だがベントはそんなガツクを見ても怖がるばかりか嬉々としてガツクと対峙した。

「ベント・・・覚悟はいいか？」

ガツクの平坦な声が逆に怖ろしい。

「何の覚悟だ？」

ベントはガツクから先ほどとは比べようもない覇気にゾクゾクしながら応える。

「無論・・・死ぬ覚悟だ。」

瞬間、ガツクの姿が消えた。

あれ！？とモモコが思った時、既にベントの後ろにいてそのぶつと  
い首に蹴りが入れられていた。

「ぐああっ！」

ベントが前につんのめるように傾くとガツクは跳んで前に着地し、  
ベントの脇腹に蹴りをぶち込んだ。が、ベントは予測していたように  
ガードし、その足を掴んだまま大きく二回転させると支柱に向か  
ってガツクを投げた。ガツクは難なく支柱に足を着くと逆に勢いを  
つけてベントに突っ込んでいった。その衝撃に支柱にひびが入り瞬  
く間にビシビシと広がる。

ベントの拳をかわし顔を掴むとグリードにしたように舞台の石畳に  
叩きつけた。

そして間合いをとって仁王立ちでベントが起き上がるのを待つ。

ズウウン・・・

支柱が倒れ重い音が聞こえる中、ベントが頭を振りながら起き上っ  
た。パラパラと石の破片が振り落される。

「ウォーミングアップはこれくらいでいいか？」

ベントが首をコキコキ鳴らしながらガツクに平然と尋ねる。

マジ！？

モモコはガツクの怒涛の攻撃にも全く怯まないベントと

「ああ。」

あれだけの動きをしても息一つ乱さないガツクにア然とした。

すぐさま目で追いかけるのが難しいほどのハイレベルの戦いが再開される。

(私の存在がふざけて見えるはずだよね・・・何じゃコレ？level 999か？こんなにすごいなら最初から言っよね！・・・私の悩みとは次元が違うっていうか・・・あんなに苦しんだのがバカらしくなってきたぞ。この人達に認められたいってもしかたなくとも無謀そのものなのか！？)

2人の凄まじい戦いぶりに自立の決意も鈍るモモコ。

というより自分よりずっと高みにいる2人にビビりを通り越して呆れ気味だ。

結局その後すぐ勝負はつき、ガツクがベントの胸倉をググツと掴み、ベントの胸を力を込めて足で蹴り付けて終わった。

ベントの巨体が場外まで吹っ飛びバウンドして止まる。

観客達と共にポカンとしていたレフェリーが我に返り慌ててガツクの勝利を叫んだ。

「じよ、場外です！！ガツク選手！モモコ選手の勝利です！！」

ドワアアアアアア・・・！！！！！！

耳を劈くような歓声が会場中に響き渡る。

ガツクは観客達の自分を称える声をいつものように無視するとモモコに歩み寄った。

「待たせたな、モモコ。」

そう言い、片手をモモコに差し出す。

モモコはちよつと躊躇する。

（私なんかガツクさんの側にいていいのかなあ。）

認められたいと思いつつも思えば思うほどガツクの凄さがわかってくる。

国民の熱狂を一身に受けるガツクにモモコは気おくれを感じ及び腰になる。

モモコが戸惑っていると何を勘違いしたのかガツクは

「・・・拗ねているのか？」

モモコが機嫌を損ねているのかとちよつと困った顔になった。

（この事は後で考えよう。いろんな事が起こり過ぎだよ。これ以上はもうムリ。）

モモコはゴチャゴチャした思いをいったん棚上げすることにした。

モモコが首を振り、ガツクの長くて太い腕を伝って肩に落ち着くと、ガツクはホッと息をついて舞台を降りたところ、ベントがロー達に支えられながら身を起こすのを見て

「チツ！・・・生きていたか。相変わらず呆れるほどの丈夫さだ。」

ちよつとお！とホクガンが言いそうな事を呟いた。

モモコもベントのタフさにびっくりしていると、ベントがガツクとモモコに気づき、さっきまで死闘を繰り広げていたとは思えない程の快活さで話しかけてきた。

「いい試合だったなガツク！！そして猫よ！！」

え、私？

モモコが首を傾げるとベントはわっはっはと笑いながらズンズンと近づき、モモコの目の前まで来るとワシャワシャとベントらしく乱暴にモモコを撫でて直後ガツクに思い切り殴られながらも

「お前のその勇敢な魂！このベントしかと見届けたぞ！なるほどガツクが執着するはずだ！」

吹っ飛んだ体をロー達に支えられながらモモコを称えた。

（ベントさん・・・）

武道会に出ようと決めた気持ちの正体が、ベントのおかげで間接的とはいえわかり、モモコは自分なりに感謝の気持ちを伝えたくなつた。

モモコはガツクが止める間もなく肩から降りてベントの足元に走ると

「にゃーん。にゃあ。（ありがとぅベントさん。お陰で胸のモヤモヤがすっきりしました。」

可愛く鳴いて、ベントによじ登り、ガツクに殴られた頬を謝罪の気持ちも込めてぺろりと舐めた。

！！！！！！

ベント達はモモコの可愛い仕草に胸を撃ち抜かれると同時にガツクの凄まじい殺気の嵐に晒された。

「……………ベント……………俺ともう一度 殺し合……………いや試合しないか？」

どんな手を使ってでもお前を葬る。

言外にそう言われているような気になったベントは初めてガツクとの手合わせ（という名の一方的な殺戮）を断った。



モモコは困惑していた。

目の前には膝をつき、腕を組んだガツクが眉間に皺を寄せてモモコを見ている。

モモコがベントの頬をペロリした後、周囲の方々を跳ね飛ばしながらベントからモモコを引っぺがした（その際ベントに裏拳をお見舞いするのを忘れなかった）ガツクはその場で話しをしようとしたのだが、

「国民が見ている前でなにやらかす気だ！」

「せめて閉会式が終わってからにせんかい！」

と鬼気迫るガツクの様子にただならぬモノを感じたホクガン達に止められ、しぶしぶベントや他の選手達と共に舞台上に上り、総責任者であるジエンから称賛と共に賞品が手渡された。

ガツクはそれを仏頂面で受け取り、「やれ、やれ」とうるさいホクガンとダイスにせっつかれ、歓声を上げるドミニオン国民にしかめっ面で手を軽く振った。

「その顔なんとかならねえのか。」

「黙れ。」

ホクガンが呆れて声を掛けるが早くモモコと2人きりになり、

”なぜベントなんぞの頬を舐め・・・舐めたりなどするのだっ！！俺にもした事なぞないのに！！なぜだ！モモコ！”

と追及したくてたまらないガツクは、ホクガンの止める声を今度こそ無視して舞台を降り、ガツクを称賛しようとする群がる人々をその鋭い眼光で固まらせ、空いている部屋に入り、誰にも邪魔されないよう鍵を掛けた。

ガツクはモモコを床に下ろすと、不機嫌そうに膝をつきモモコを見下ろした。

「ベントなんぞの頬を舐めるとは何を考えている。」

モモコはなぜガツクが怒るのかいまいちわからない。

（舐めたっていつてもちよいと舌で触った程度だし。猫らしく傷をさ、ほら、なんでも舐めちゃうでしょ？猫っぽいかなって思ってたんだけど・・・他にどう（感謝の気持ちを）表現していいかわからなかったし・・・失敗したのかな。）

自分があまり猫らしくない事は承知しているし、たまには猫らしい感じをアピールしようと、自分なりに考えただけなのだが、それがガツクの独占欲とか嫉妬心を煽っているとは夢にも思っていないモモコ。

ガツクにした事がないのは、ケガなどしないから。したとしてもすぐに治る。

肩に止まる訓練中、思わず爪を立ててしまった時があったのだが、翌日にはうっすらと跡が残っているだけであった。

（ガツクさんて丈夫だな）

で終わった。(哀れガツク)

猫として駄目だったのかなあと、他にやりようがあったらどうかと模索しているモモコとは180度違う対極にいる大男は続ける。

「モモコ、今後、俺以外のどんな人間や動物にも接触するんじゃない。いいな。」

へっ!?

モモコはあつけにとられてガツクを見上げた。

「抱かれるのも、触るのも、必要以上に話すのも駄目だ。わかったな。」

嫉妬に駆られた男ほど恐ろしい者はいないかもしれない・・・これが他の女性だったらガツクのマジな(ただでさえ恐ろしい)顔に慄く所だが、モモコは違った。

(な、なにそれ!ちょっと横暴じゃない!? 飼い主だからって無茶言い過ぎ! 干渉しすぎだよ!)

ガツクは飼い主として言っているのではないのだが、(というかペットに対する態度や感情ではないだろコレ) 自分を猫として扱っていると疑わないモモコには、ガツクの過干渉は不可解かつ横暴に見えた。まあ、モモコが人間だったとしてもガツクは同じような対応をするだろうなと思われる。

それにしてもこれは行き過ぎだ。

モモコは激しく首を振ってガツクに否と返答した。

ピク・・・

ガツクの頬が引き攣る。

「・・・嫌、じゃない。守ってもらっぞ・・・拒否は許さん。」

ムカツ！

（冗談じゃないよ！そんなのガツクさん以外とは何にも出来ないじやん！ムカツク！）

モモコにだって当たり前だが自我はある。

たまにはテンレイと遊んだり、シヨウと話したり、本当はもっと色々な人と交流を持ちたいのだ。

モモコはベーツと舌を出してガツクを睨みつけた。

ガツクの眉間の皺が深くなり、モモコを見下ろす眼光が鋭さを増す。

「モモコ・・・俺の言う事が聞けんのか？」

ガツクは黒い革手袋を嵌めた手をモモコに伸ばし、抱きかかえようとした、がモモコは素早く後ろに下がりこれを避けた。

ガツクの右手が宙を切る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ガツクはゆっくり立ち上がった。

モモコはガツクを睨みつけながら慎重に間合いを取る。

「モモコ・・・俺は拒否しなくていいんだぞ？」

じりじりとモモコに近寄りながらガツクは低い声で話しかけるが、  
「ふうふう・・・！（なにさ！こうなったらガツクさんを拒否してやるー）」

モモコはますますガツクから距離をとり唸る。

さほど広くない部屋で大男と小さな猫の追いかけっこが始まった。

「モモコ！ベントにした事を他の奴らにもするつもりか！許さんぞ！」

「ふぎゃー！ふぎぎ！（あれはガツクさんが殴ったからでしょ！感謝と謝罪の気持ちなの！）」

「なぜだ！お前は俺だけを見ていればいい！！他の奴らなど見るんじゃない！！！」

「ふぎい！？ぶにゃや！（なに言ってるの！？めっちゃくちゃだよ！）」

「逃げるんじゃない！」

ギャーギャーと本当にくだらない、だが必死な、そしてとにかく噛み合わない一人と一匹。

と、そこへドンドンとドアを激しくたたき音が加わり、一人と一匹は動きを止めた。

「おい ガツク！何してんだ？ここ開ける！」

ホクガンの声だ。

チツ！

時間切れか。

ガツクは渋々ドアの鍵を解除した。  
ホクガンが大きく扉を開ける。

今だぁ！

その間を逃さずモモコはドアに向かって走り……

「まゝた総所中を捜させる気か。」

ホクガンに捕まった。

ホクガンはじたばたするモモコをガツクに渡そうとして

「おい。」

胸にひつつき、爪を立ててぶら下がるモモコにつっこんだ。

(この際ホクガンでもいいや！ガツクさんのところには戻らないぞ！)

「どうしたんだよコレ。いでで、おい爪立てんな！」

「うるさい。戻れモモコ。」

モモコはホクガンの胸に顔を押し付けるよう感じで嫌々と首を振った。

ガツクの頬がヒクヒクと痙攣し始める。

「モモコ……俺よりホクガンがいいと言うのか？」

ガツクはホクガンの方へゆっくり視線を移した。

その目を見たホクガンはギョツとして慌ててモモコを引き離そうとする。

「おい！悪いけど離れてくれ！ここで死にたくねえ！」

モモコは必死に抵抗するがガツクとホクガン、2人がかりでベリッと遂に剥がされた。

無事？にガツクの腕に戻ったモモコは、ガツクが目が合う位置まで持ってきてもフンツ！とそっぽを向く。

イライラが増幅するガツク。

「あのよお・・・」

「何だ。」

「ハア・・・何があつたかは知らねえが、この後祝勝会がある。モモコと絶対出るよ。」

ガツクは顔を背けているモモコから目を離さずホクガンに言い返した。

「わかつている。モモコ、この話はまだ終わっていない。祝勝会の後もう一度話し合おう。」

「ふうふう！ふぎいい！（あれは話し合いじゃないでしょ！ガツクさんが一方的に命令してんじゃない！）」

モモコは唸り声で返した。

目の前で睨みあっている一人と一匹を見てホクガンは

（たぶん、モモコがベントを舐めた件だろうな。またガツクがモモコに無茶でも言ったんだろう。ほんとにコレ（モモコ）が絡むと暴走しやすいな）

正確に状況を判断した。

「おい、ガツクとモモコいたか。」

そこへダイスがやってきた。

「ああ。」

ダイスは自分が来た事に気づいたモモコの、訴えるような目を見てガツクに訪ねる。

「何したんじゃア ガツク。モモコが何か訴えちよるぞ。」

自分ではなくダイスを見やるモモコにガツクの嫉妬心は増すばかり。

「……祝勝会の場所はどこだ。」

ダイスを無視してガツクは冷えた声で聞いた。

ダイスは片眉を上げてホクガンを見やった。

ホクガンは肩をすくめてガツクに応える。

「そのまま会場にテントを張って、気取らない感じにする事にしたよ。ゼレンの事があつたから自粛した感じだ。」

「わかった。」

ガツクは唸るように言うといつもよりきつくモモコを抱いて部屋を後にし、その溢れる圧力を辺りに惜しみなく発散しながら去った。

「何があつたんじゃ？」

「さあなあ……ま、想像はつくけどよ。」



ホクガンはさつきまで一人と一匹がいた部屋に入りながら答える。  
続けてダイスも入りながら、一人と一匹が暴れた部屋の荒れ具合に  
少し目を見張った。

「・・・荒れとるのう。あいつらか？」

ホクガンは窓に寄ってガツクが進むたびに人垣が左右に割れるのを  
見ながら、

「だろうな。ベントの件だろ。」

「あれか・・・モモコもなあ ガツクへの影響力を、とは言っても  
あいつは猫じゃ。わからんのも無理はないんじゃないが。」

違う。鈍いだけ。

「うーん。まあな、普通は思わねえだろ。人語を解してもガツクの  
あの感情は。」

中身はまるつきり人間なのだが、自分はただの猫だとは認識はして  
るので、激しすぎる感情をぶつけるガツクに当人のモモコの???  
は増えるばかり。

「それにしても・・・とうとうきたな。」

「ああ。いつかくるじゃろうと思うておったが・・・予想通りとい  
うかなんともじゃ。」

ガツクの、動植物に対する無関心具合にみえるように興味のない事  
には一切見向きもしないが、いったん心を寄せるとそれには凄まじ  
いまでの執着をみせる。

それは軍校卒のルーキーがたったの8年で軍部の最上位である大将

に就任したことからもみられる。

普通は20年から30年は掛るのにもかかわらずにだ。

そのひたむきさを今、一身に受けるモモコ。

受難というか迷惑どころではない周囲。

猪突猛進のガツクに、今さら何を言っても聞く耳を待たないだろう  
と言ふ事は、今までの事例からいって明らか。

「ドミニオンの平和のために、モモコには諦めてもらうか。」

「ズバツとひでえ事をゆうのう。もう少しオブラートに包まんかい。」

「包んでどうする。ガツクに見初められた時点でモモコに選択肢はないも同然たるが。」

「見初められたか……モモコが人間だったら……」

「……そうだな……猫の寿命は14年ぐらいか？」

「今は18年ぐらいはイケる猫もおるぞ。まあ、個体差が激しいが  
の。」

モモコを失った後のガツクに今から暗澹とする2人。

「やめようぜ。無駄だ。」

「そうじゃな。」

2人はくる未来を思つて悩むなど無駄な事はやめた。

悩むくらいなら対処法を考えた方がいい。

武道会が終わっても雑事はたくさんある。レセプションはまだ続いているのだ。ホクガンはダイスを促すとそれぞれの役目を果たすため部屋を出て行った。

モモコが人間だったら・・・それはホクガンとダイスだけではないガツクをよく知る人々が一度ならず思った事。だが、心を寄せるモノがいるだけでもよかったよな！と生温く見守る事に徹し、誰一人としてガツクやモモコにこの話題を振る者はいなかった。

篝火がたかれ、華やかに飾りつけられた巨大なテントの中、人々はあちらこちらに置かれたテーブルのおいしい料理に舌づつみを打ちながら歓談する。

「ローさん、ベントさんの具合はどうですか？」

エルヴィが心配そうにローに聞く。

「大丈夫だ。ガツクに蹴られた胸骨にひびが入ったくれえで、あとは打ち身があちこち。旦那の丈夫さは折り紙つきだ。処置が済み次第こっちに顔を出すだろうよ。」

ひびが入ったことぐらいで国王も出席している祝勝会を欠席するベントではない。

「よかった・・・それにしてもあのベントさんに勝ったコクサ大将はすごいですね。まさに圧巻な試合でした。」

エルヴィはホツとしたように笑うとガツクを称えた。

「ああ、うん、そうだな・・・」

ローはベントが仕出かした一連の行為と、ガツクの猫に対する固執ぶりを間近に見て思う事が多々あったが、無理矢理押しこんで無難に答えた。

そして、談笑する人々とは明らかに空気が違う一角に心配そうに視線をやった。

モモコとガツクは険悪な雰囲気を周囲にまき散らしながら、ホクガンやダイスと共にゼレンを除く各国代表団から祝辞を受けていた。本来なら優勝者を囲んでワイワイと盛り上がる所だがガツクの発する威圧感に（ただのイラつき）引き攣った顔で言葉少なに述べるのみ。

「よい試合だった ガツクよ。主が飼い猫と出ると聞いた時は冗談であろうと思っておったが、さすがはガツク・コクサの飼い猫よの誠な勇敢な戦いぶりであった。」

ベリアル帝国ワイズムはガツクの威圧感などどこ吹く風。ひょうひょうとガツクとモモコを褒めた。

モモコはフンツとしていた態度を忘れ、深い知性を感じさせる不思議な緑の目のワイズムを見つめた。

（この人は・・・確かベリアル帝国の王さまだったよね・・・挨拶しても失礼にならないかな？）

モモコはちらっとガツクを見た。

（必要以上に話しかけるなってさ・・・なにさ偉そうに！・・・いや偉いんだけど。でもコレは違うと思う！ここで言う通りにしたら何かヤバイ気がする！な、なんか負けた気がするから絶対私か

ら折れないんだからね！)

ガツクはワイズムと握手を交わしている。さしものガツクでもワイズムとはにこやかに・・・とは言い難いが他国よりはマシに話をしていた。

(かつこいい・・・)

モモコは帝国の王とも堂々と渡り合うガツクを惚れ惚れと見ていたが、ガツクが国王と話しながらこつちをチラリと見ると慌てて顔を逸らした。

イラ・・・

ガツクの額に青筋が浮かぶ。  
それを面白そうに見やるワイズム。

モモコは気まずさを隠すようにキョロキョロと意味なく周りを見渡した。

最初はガツクの腕に抱かれていたモモコだったがきつく抱くガツクに我慢ならなくなり、精いっぱい足を突っ張って抗議した。が、当然のようにガツクが放すはずがない。

うぐぐ・・・

モモコが足を突っ張るのをやめないのでイライラが再燃するガツク。その一人と一匹にまあまあとホクガンとダイスが宥めに入り、ガツクの腕が届く範囲で、という制約のもとモモコは飲食が載っているテーブルに(行儀悪くないかなあ)と思いながらも大人しく座って人々(主に軍部。一般や他の部はガツクが恐ろしくて近寄る事も出来ない)がガツクと歓談(にしては皆の顔が強張っている)するのを見ていた。

ワイズム王とこれからの軍のあり方を話すガツクにホクガンやダイス、治療を終えたベントとローが加わり、モモコにはつまらん話で盛り上がり始めた男達に飽きたモモコは、ふと甘い香りを嗅いだ。

（何だろっ？いい匂い・・・）

モモコが匂いの出所を探ると・・・ガツクのまん前にある飲み物から漂っているようだ。

モモコはじと目でガツクの前にある飲み物を見た。

モモコはムカツク ガツクから許された範囲のギリギリ遠くに座っていたので（これもガツクの苛立ちを増大させた）ちょっと躊躇したが、疲れた体に甘い匂いは勝てないようです。

（ちょっと舐めてもいいよね・・・）

モモコはソロリソロリと飲み物に近寄っていった。

ガツク達は話に熱中していたのでモモコに気づかない。

気付いたら全員で止めていたのだが。

それが口当たりはいいがかなり度数が高い酒だと言う事を。

4 - 1 5      ワケのわからない押し付けはやめてください（後書き）

モモコがガツクにトドメを刺したあの日から往く年月……  
遂にガツクが爆発しました！

……あれ……前からこんなだったっけ？

4 - 16 いわゆる3倍返しです

(おいしいーい！なにこれ！超美味いんですけど！)

モモコはその甘みと苦みが絶妙に合わさった飲み物に感激すらした。それは茶色ともう少し濃い茶色に別れた飲み物でキャラメルのような甘いコーヒーのような不思議な匂いがする。

チョコレートではないが、共通する匂いと味にモモコは一口飲んで気に入り、あまり高くはない器に入っていた事も手伝って、またたく間に全部飲み干してしまった。疲れた体に心地よく広がる甘味……とアルコール。

(あれ？……なんかフワフワしてきたぞ？……なんか気持ちいい……)

最初にモモコの異変に気がついたのは目ざとい男、ホクガンであった。

定められた領域ギリギリまで遠くにいたピンクの猫が、いつの間にか軍部ナンバーワン、そして間違いなく心の狭さでもナンバーワンの大男の前にいる。

が、体を前後左右に揺らし、何かを求めるようにゆるく視線を彷徨わせるその姿にホクガンは何かきた。

「おい、ガツク。」

ホクガンはローと話をしていたガツクの肩を叩き、

「何かおかしくないか、コイツ。」



とモモコに注目させた。

ガツクはハツとしてモモコを見やる。

！

確かにおかしい。

ガツクはモモコの前にある空の器を見た。

この器には口当たりはいいがかなり度数が高い酒が入っていたはず・  
・・・そうモモコの好きなチヨコレートの様な・  
ガツクとホクガンは顔を見合わせた。

まさか・  
・  
・

モモコはもう一杯飲みたいなと思いながらテーブルを見渡し、数歩  
先にある緑とピンクの飲み物を見つけた。

（あゝ！あれもおいしそう！飲んでみよっと！）

モモコはなんだか雲を歩いているような気持ちよさで、フラフラと  
その飲み物目指して歩き出した。

「モ、モモコ！」

覚束ない足取りで、これまた度数が高い酒を目指して歩き出したモ  
モコを慌てて止めようとしたガツクの手を、ゆる〜くモモコはかわ  
した。

えっ！

ガツクとホクガンが目を見開く。  
今度はホクガンがモモコに向かって手を伸ばすが、モモコはこれも  
絶妙なタイミングでかわした。

嘘だろ！

ガツクとホクガンが次々とモモコに向かって手を伸ばすが、モモコ  
は酒拳に目覚めたかのようにすいすいとそれをかわしまくった。

「何やつとるんじゃ、2人で。」

ダイスが モモコで遊ぶなよ という感じでガツクとホクガンを呆  
れて見た。

「ダイス！ウイキどける！」

ホクガンは元を断てとばかりにダイスに急いで命じた。

？

ダイスは怪訝そうにホクガンを見やったが、言う通りにピンクと緑  
のカクテル”ウイキ”を手に取った。

「にゃ！にゃ〜お〜（あっ！何すんの〜私が先に見つけたのに〜）」

モモコはダイスにニヤーニヤーと抗議した。

ダイスはモモコが自分の持っているウイキを飲みたそうにしている  
事に気がつき、

「モモコ、これは酒じゃ。猫が飲むもんじゃねえ。」

めっ！という風にモモコに言い聞かす。

（酒？だいじょーぶ！私、成人してるもん！イケるイケる！）

上機嫌で尚も催促するモモコに常にはないものを感じたダイスは、ガツクとホクガンに訪ねた。

「モモコ、どうしたんじゃ？おかしくねえか？」

ガツクはモモコが飲みほした空の器を持ち上げて言った。

「カルーガを飲んだらしい・・・全部。」

ダイスはギョツとしてモモコに視線を戻した。

よく見ればユラユラしているし、目はトロンとして眠たげだ。

「ここからモモコのセリフを猫語ナシでお送りします。めんどくさ・・・いや見づらくない様に」

「ねーそれちょーだい！どんな味がするんだろ？お酒ってちょっと苦手だったけど、ソレはイケそうな気がする！」

モモコは成人しているので当然酒の類は飲んだ事がある。が、ある理由により周りと自ら禁酒の誓いを立てていた。

それは・・・

何を言ってるかは皆目わからないが（ガツク達にはニャーニャーと

しか聞こえてません）ウィキを欲しがっているのはわかる。

「モモコ・・・カルーガだけでも相当なアルコールじゃぞ？これ以上は駄目じゃ。」

ダイスが断固として飲み物を渡そうとしない事がわかると・・・モモコの目が据わった。

「なにさ〜ちよつと味見するぐらいいいじゃん〜ダメダメ言うけど〜ダイスさんみたいなヘタレに言われたくないんだよね。だいたいね〜テンレイさんに告白すんのにどんだけかかっているかっちゅーの！22年って長すぎでしょ！あ〜んなに素敵で綺麗なテンレイさんそのうちすんごくいい人見つけてあっつっつという間にいなくなっちゃうぞ〜？それでもいいのかな〜だからそれちよーだい。」

何がだからなのか？酔っ払いのいう事は古今東西意味不明である。

モモコの禁酒の誓いの理由。

それは、普段のモモコとは180度違うマシンガントーク。

しかもそれは相手の心臓に突き刺さりまくる言葉の羅列だ。

モモコはこれを成人式の飲み会で爆発させ、多くの友達を撃墜し、魔の成人式と後々まで語られる惨事を起こした事がある。

なので・・・

ガツクにもモモコが何を言っているかは全くわからないが

「どうしたダイス。」

地面にしゃがんで暗くなったダイスに声を掛けた。

「なんかのう・・・いきなり急所を刺されてグリグリされた揚句、塩でも塗りこまれた気持ちになっただんじゃ・・・モモコの鳴き声を

聞いたつたららう。」

「確実に言ってたんじゃないかねえか？何かを。おいウイキ貸せ。」

ダイスはドヨンとした雰囲気そのままにカクテルをホクガンに渡した。

ホクガンはそれを受け取るとモモコの目の前に持ってきて

「ほぐれモモコ、これが欲しいかあ？」

ウイキの入ったグラスをブラブラしてみせた。

「あつ！くれるの？ホクガンってほんとたまにいい奴だよね！」

ホクガンはモモコの顔がパーツと明るくなったのを確認した後、

「ばか、あげるわけねーだろ。」

と言ってモモコの目の前でウイキを飲みほした。

ガン！

モモコの目が信じられないという風にホクガンが飲みほしたグラスに注がれる。

「お前な・・・」

ガツクはケケケと笑う大人げないホクガンを呆れて見た。

「ウイキがあつたらずつと欲しがるじゃねえか。だから俺が飲んでやったんだよ。おい、ここにある酒全部片付ける。つたく、コイツ

のせいでとんだ苦労だぜ。ククク。」

ホクガンは近くを通りがかったウェイターに、テーブルの酒類を全て片付けさせた。

シヨツクを隠せず首を垂れるモモコに意地悪くホクガンがケタケタ笑っていると、モモコが勢いよく頭を上げカツと目を見開き、猛然とホクガンに抗議し始めた。

「なにさ！ホクガンのばっかやろう！いつもいつもおちゃらけた事ばっかやって〜！あんたのそういう所がマジム力つく〜！王様の前じゃ猫かぶってるみたいだけ〜バレバレだし！このサボり魔！デリカシーゼロ！男のくせに髪長すぎ！顎のチョイ髭もム力つく！国主のくせにガラ悪すぎ〜！」

「どうしたホクガン。」

ガツクは額に何本もの青筋を浮かべたホクガンを訝しそうに見た。

「いや、何かモモコの鳴き声を聞いてたら異様に腹が立ってきてよ・  
・」

「そうか？俺には至極真つ当な事を言っているように聞こえたが。」  
「ひびっ！」

「何をしておる。」

ベントがしゃがんだままのダイス、ガツクに喰ってかかるホクガンを見て言った。

「あーっ！ベントさんだあ！ちよっとお〜聞いてよベントさん。ガツクさんがさあ〜」

ベントは急にムニヤ〜！と鳴いたモモコに注目し、不自然にフラフラしているのを見て、

「ガツク、こ奴体調が悪いのではないか？」

と、もしや試合の影響が、と心配をしたがガツクの次の言葉を聞いて眉間に皺を寄せた。

「いや、度数の高い酒を飲んだだけだ。」

「大変ではないか！お前の監督不行き届きだぞ！」

「うるさい。」

ガツクは簡潔にこれまでの事をベントに語った。

「ガツクの猫よオ！そんなに小さな身でアルコール類を摂取すると急性アルコール中毒になり、最悪死に至る事もあるのだぞ！これ以上はやめておくことだ！」

ベントは真っ直ぐ超直球でモモコに説教をした。が、酔っ払いにかかれば直球はナックルボールになる。

「あたしの名前はモモコだって言ってるじゃん！いい加減覚えてよね！そんなことより！聞いてよベントさん〜！ガツクさんったら酷いんだよ！自分以外とは誰とも接触するなだつて〜意味わかんないでしょ〜？つうか〜ベントさん声でかい。すごいでかい。むちゃでかい。ほんとううるさい。あと暑苦しい。」

お前が意味わからん的な言葉をつらつら並べるモモコにベントは通じていないが、ちよつとグサツときた。

混乱中のベントに尚も追い打ちをかけようと、口を開いたモモコに見兼ねたローがストップをかけるが

「・・・誰？」

で撃沈される。

ダイスの横に並んだローを見て、なぜだか申し訳ない気分になったガツクは自分がやるしかないとラスボスと化したモモコに遂に挑んだ。

「モモコ、もう酒はない。今日は疲れただろう？家に帰るぞ。」

ガツクにしては優しく、まさに猫なで声を（超気持ちわるーいという声がホクガンから発せられる）出しながらモモコにゆっくり近づく。

モモコは完璧酔っ払った目でガツクを見た。

（なんだかしょうもないなお前って感じだなあ〜なんかさあ〜なんかさあ〜なんか）

「ムカつく！」

ガツクは急に強く鳴いたモモコにビクツとした。

「あのね〜ほんとさ〜ガツクさんってわかんない。お仕事なのにわがままは言うわ、殺気は飛ばしまくるわ、支柱は折るわ、拳句の果てには誰とも話すなだ〜！（そこまで言っただけ）ワケわかんないから！なんで？・・・あっ！」

モモコはピーンときた。悪い予感しかしない。



「そーか、そーか、あれかあ〜。」

モモコはガツクが豹変した前の出来事を唐突に思いだした。

「ベントさんのほっぺを舐めちゃったこと〜？何だガツクさんもして欲しかったのか〜早く言えばよかったのに。」

そう鳴くと、モモコはフラフラと相変わらずの千鳥足でガツクに近づき、その体をよじ登り始めた。

酔っているので力加減にも容赦なく、ガツクはモモコが立てる爪の痛みに少し顔を顰めた。

モモコはガツクの肩までよじ登ると自身が試合中に立てた爪痕をペろりと舐めた。

！！！！

グシヤツ。

ガツクは衝撃のあまり持っていたグラスを握りつぶした。

モモコはガツクがベントから殴られ、流血していた事を思い出した。

「そう言えば、ガツクさんケガしてたよね〜あれおでこだっけ。」

モモコは伸びをしてガツクの額……ではなく耳たぶをペロツと舐めた。

「……っう。」

ガツクがビインツと背筋を伸ばした。

その場にいた全員がガツクとモモコの（しょーもない）戦いに注目する。

モモコはガツクの耳たぶを額と思ってぺろぺろした後、（この間ガツクの「く……あ」とか「……っうあ」とか15禁っばい？っうめ

き声？が続いた)

「あれ？コレ耳じゃん！間違えた！アハハ。」

ガツクにとつて今までにない衝撃を、デコと耳間違えるか？普通ですますモモコ。

モモコはもう少し伸びあがってガツクのバンドエイドをベリツと剥がし、ベントに付けられた傷をしげしげと見た。拳でこすった時に切れたものだがもう治りかけている。

「傷はだいじょーぶみたいだけど！取りあえず舐めとこっか。」

(もうやめてあげてえー！それ使いモンにならなくなるから！ほんとごめんなさい！)

と心の中で絶叫する二国の重鎮たち。

それらなど最初から相手にしていないモモコはかまわず今度こそガツクの額を目指した・・・が、

「届かない！！」

小さなモモコと大男のガツクの体格差ではモモコの口は擦り傷まであと少しという所で届かなかった。

「むづ！・・・まあいつか、届く所までいいや。」

相変わらず判別不可能な鳴き声でむにゃむにゃ言つと、ガツクの頬というかこめかみ辺りを容赦なくモモコは舐めあげた。

「ふい！これっくらいでいいだろ！まったくもお！ガツクさんの

わがままには困ったもんだよ、よし、ペットとしての今日のお仕事はおっしまい！」

モモコは相次ぐ怒涛の攻撃に石像のように固まったガツクの肩からぴよんとテーブルに飛び降りた。

そして あゝ疲れた！という風に大きく欠伸をすると丸くなって寝た。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・おい、ガツク。」

ホクガンは恐る恐るガツクに話しかけた。

「・・・大丈夫か？生きとるか。」

ダイスも寄って来てポンとガツクの肩を叩いた。  
その瞬間。

ズガン！

ガツクはすごい勢いで突っ伏しテーブルに頭突きした。  
テーブルが四つつに割れる。

そしてそのまま四つん這いになり荒い息をついて

「こんな・・・こんな事をされては・・・何だこの感じは・・・（以後聞きとれない単語らしきものが続く）」

「何か言ってるぞ。」

「コイツらどんどん危ない方向にいつとりやせんか？」

よくは聞き取れないが（というか聞きたくない）憚れるような内容だろう事をブツブツとつぶやくガツクと、自身が起こした騒動に気づかず眠りこけるモモコ。

猫と大男から目を逸らすドミニオン側の皆さん。

取りあえずホクガンとダイスはこれ以上の醜態を防ぐためガツクとモモコを強制退場させた。

「ガツクをあそこまで打ちのめすとは・・・やるな！猫よ！」

ベントは長年のライバル、ガツク・コクサをいとも簡単に膝をつかせたモモコに素直に感心したが、周りの者たちは

（なんか 違う・・・）

見てはいけないものを見てしまった気持ちになりながら祝勝会は終了した。

4 - 1 6 いわるる3倍返しです(後書き)

女子の酔っ払い姿はかわゆく、ちょっとアダルティな感じがする  
んですよ。

たとえどんなに周りが迷惑を被るつと。

4 - 17      ガッツあるのみです

「コクサ大将！お願いします！」

賑やかな会場にエルヴィのきりつとした声が響き渡る。

ガツクはうるさそうに眉間に皺を寄せてエルヴィを見下ろした。

「断る。余所を当た」

「いいえ！コクサ大将に是非手合わせをしてもらいたいです！お願いします！」

レセプション3日目。

モモコとガツクは犬のレースが行われている会場を訪れていた。

今日は男性陣と夫人方に別れ、見事に復活を果たしたテンレイが夫人方を引き連れお茶会やショッピングを、ホクガンやダイスがレース会場で接待していた。

そこにはベントやロー達と共に国王に従うエルヴィも来ていたのだがガツクの試合を見、ますます手合わせしたくなったエルヴィは、ガツクとモモコを見つけるとベントに断って早速手合わせをガツクに申し込んだ。

が、あっさり断られる。

だが、諦めきれないエルヴィはモモコにいろいろな物を見せて、楽しんでもらおうとあちこち移動するガツクの後を追いまわしては対戦を申し込んでいた。

モモコとの楽しいひと時を邪魔（しているつもりではないが）するエルヴィにイライラしてきたガツクはエルヴィの利かん気な顔を今度は少し力を入れて睨みつけた。

「断ると言ったのが聞こえなかったか？お前など相手にしている暇はない。」

ガツクの突き刺さるような眼光に、縫いとめられたかのように固まるエルヴィを残し、ガツクはモモコを抱きなおすととコートを翻して去った。

エルヴィは硬直が解けると、歩き去るガツクの広い背中を黙って見送るしかない自分の不甲斐なさに唇を噛んだ。

だが、そのガツクの腕からピンクの猫がびよこつと顔を出してこつちを見ているのに気がつくつと、強張った顔も緩む。そしてそれは昨夜のモモコを思い出すとはつきりとした笑顔になった。

あんなに小さく愛らしい姿でありながら屈強な大男達を（なぜだか理由はわからないが）次々と撃沈していったモモコ。

そしてガツクを守るためであるう、ベントに立ち向かったあの姿。さすがガツク・コクサの猫と評されるに相応しい勇敢な姿だった。

（強く言われたくらいで諦めては駄目だ。私もモモコ殿のように食らいついてやるぞ！絶対手合わせしてもらおう！）

エルヴィは新たに闘志を燃え立たせた。

その後も、ホクガンの要請にレース会場の貴賓席に移ったガツクをベリアル側の席から手合わせを請うアピールをするエルヴィ。

カンペを出してガツクに見えるように振って見せたり、ワイズムやホクガン達との会話に無理矢理手合わせについて話を持っていったりと様様な涙ぐましい？努力を続けたが、全て無視される。

（て、手強い……。）

予想以上に自分を相手にしない（チラとも関心を示されずに終わっ

た)ガツクに焦りを感じ始めるエルヴィ。

(な、なんとかしなければ!・・・時間がない・・・)

そう、明日にはベリアルに帰国してしまうのだ。もし手合わせしてもらえるならば今日中には是の返事をもらわなければならない。隣国とはいえそう行き来できるはずもなく、まして自分は帝国軍の副隊長だ。任務やデスクワーク、雑事もたくさんある。「コクサ大將と手合わせしたいのでちょっとドミニオンにいつてきます」なんて通るわけがない。

(うーん・・・どうすればいいのだ・・・)

思いつく限りの事をやったが、暑苦しくいつでも音量最大のベントに再々、再々再々・・・試合を申し込まれ続けているガツクにとつて、エルヴィの手合わせ要望攻撃など蚊が止まったほどのものでもなかった。

万策尽きたエルヴィが夕暮れに染まり始めた総所の中庭をそぞろ歩いていると、

「・・・あら?ベリアル帝国軍の副隊長殿ではなくて?道にでも迷われました?総所は入り組んでおりますでしょ、私たちもたまに迷うんですの。」



鈴の音の様な涼しげな声に話しかけられた。  
エルヴィが顔を上げると総所の奥管理者であるテンレイ・ラウンドが女神のように微笑んでこちらを見ていた。

艶やかな白金の髪、煌めくエメラルドグリーンの瞳、白磁の様な肌、背が高くスラッとしているのに出るべきところは出、締まったところはキュッと締まっている女性らしい佇まいのテンレイにエルヴィは見惚れた。

(なんてきれいな人だろう・・・国主殿の妹君は。)

自分とはまったく違うテンレイに圧倒され、声も出ないエルヴィにテンレイは怪訝そうに小首を傾げもう一度話しかけた。

「副隊長殿？ベリアル側の部屋ならここを真つ直ぐ・・・」

「い、いえ！部屋ならわかってます！」

国主殿の妹君に迷子だなんて思われたくない！

エルヴィは慌ててテンレイの言葉を遮った。

テンレイはパチパチとまばたきをしたがすぐに柔らかく微笑んだ。

「それではなにか困り事でも？私たちの誰かが無作法でも致しました？ただしその場合、兄は含まないで下さいね、あの人は無作法で当たり前ですから。」

デリカシーがゼロでごめんなさいねと頬に手を当てながらため息をつくテンレイに苦笑してからしばし躊躇い、エルヴィはガツクの事を話した。

「いえ、あの・・・国主殿の事ではないんですが・・・実は・・・

コクサ大将に手合わせを申し込んでいるのですが全然相手にされなくて……」

「まあ……」

「明日には帰国するので……その前になんとか、ひと試合だけでも。と、思っているんですが……」

暗い顔で俯くエルヴィにテンレイは

（あのガツクを追いかけける子がいるなんて世界は広いわねえ。”手合わせ”と言うところが引つかかるけど。まあ、愛はないけど夢はあるってことにしておこうかしら。）

「そうでしたの。……あの男はその……興味がない事には動かないというか……無関心と言うか偏った性癖と言うかとにかく扱わずらい男ですの。あら、ごめんなさい。」

テンレイは自分の言った事にますます暗くなるエルヴィに謝った。  
エルヴィは急いで首を振って

「いいえ！妹君が謝る必要なんてありません！コクサ大将に認められない私が悪いんです。副隊長と言う名誉ある任を任せてもらってはいませんが、何ぶん未熟者で……。」

もちろん実力が伴って任されているのだが、エルヴィより強い者は帝国にもたくさんいる。ローやエミリオに劣るの知っている。ワイズムやベントの真意はわからないが任された以上、受けた以上は全力で頑張りたい。その上でガツクと戦う事はもつと自分を高めてくれるに違いない。きつと貴重な体験になるだろう。だが、肝心のガツクから相手にされないのでは……。

悩み深そうなエルヴィの顔を見てテンレイは何とかしてあげたくな  
った。

（まったく融通の利かない男ねえ。手合わせぐらい減るもんじゃな  
し、してあげればいいものを……。うん……。ちよつと変わって  
るけどガッツはあるわね……。あの男の性格を考えて……。そ  
うだわ！）

テンレイは名案を思いついた。

「ねえ副隊長殿、私にいい案があるんですけどお聞きにならない？  
「えっ！」

エルヴィは勢いよく顔を上げテンレイを縋るように仰ぎ見た。

「お、お願いします！もうどうしたらいいのか困り果てていました  
！」

テンレイはあらあらと言うようにウフフと笑うと、名案とやらをエ  
ルヴィの頭上に投下した。

「舞踏会に出てガツクと踊りながら説得すればよろしいわ。」

「ええー！！！」

「ありがたい反応ですこと。ガツクが逃げられない状況を作ってから  
実行した方がいいわ。女性から申し込んでいるのに断るなんて無作  
法、いくらあの男でもしれないと思うわ。それにね」

一転して顎に手を当てこちらも悩み深そうになったテンレイは、エ  
ルヴィに目下の懸案事項を打ち明けようとして……

「実はこっちもあなたにガツクと踊ってほしいワケがあるんですの。ガツクの飼い猫は知っていました?」

「はい。モモコ殿ですね。」

「まあ!モモコ殿ですって!可愛い〜!」

話がズレた。

急に違うテンションになったテンレイにギョツとするエルヴィ。

「あ、あの・・・」

「儂げなで可愛いモモコもいいけど凜々しい感じのモモコも可愛いわ〜!副隊長殿はわかってるわね!・・・それに比べてあの暑苦しいゴリラは!・・・!」

今度は怒り爆発的テンレイ。

「私がない間 (顔面修復中) にモモコに攻撃するなんて!!殴るならガツクだけにすればいいのに!というかもっと頑張りなさいよね!ガツクがケガで動けなければ私がモモコと舞踏会に出れたのに!」

そこにはさっきまでいた慈愛に満ちた女神はいない。

かわりに一万本ノツクの後42・195キロを走破。さらに寒中水泳で50キロほど泳がせて戻ってきた者たちに「遅い!」と怒鳴る鬼監督がいた。

あまりの変わり様に茫然として言葉を失うエルヴィ。テンレイは一頻りベントを罵ったりガツクを羨んだりモモコのドレス姿がどんなに可愛いかが力説した後

「と言うわけで協力し合わない?」

ワケがわからないまま大人しく聞いていたエルヴィを置き去りに一人で完結してしまった。

エルヴィは恐る恐るテンレイに聞き返す。

「あの・・・まだ何も聞いていませんが・・・」

「あらそうだったかしら？」

頬に手を当ておかしいわねと首をひねるテンレイ。

「実は今日ご夫人方とお茶会があつただけど。」

「知っています。コロナ様もご出席されてましたから。」

「ええ。その時モモコの話が出たのよ・・・皆さんあんなに小さくて可愛らしいのにゴリラ達に混じって勇敢に闘うモモコがすっかりお気に召したようなの。是非会いたいという要望だったんだけど・・・あなたも知っていると思うけどあの心の狭いデカブツが絶対許すはずがないわ。」

テンレイは忌々しそうに眉間に皺を寄せた。

ゴリラ達・・・ま、まあそこは置いといて・・・

エルヴィはモモコがベントの頬を舐めた後のガツクの怒りようを思い出した。

「そうですね・・・コクサ大将からモモコ殿をお借りするのは難しいかもしれません。」

「でしょう！！そこで！あなたの出番よ！あなたがガツクにダンスを申し込んで！」

エルヴィは急に大声を出し、自分の両手をひしっと掴んで顔を寄せ

るテンレイに引き攣った顔をした。

「あなたと踊っている間にモモコを夫人方に紹介できるのよ！あなたもじつくりガツクと話せるし・・・あいつは手強いけどガツクがある子は嫌いじゃないと思うわ。あなたがこうまでして真剣に訴えればOKしてくれるかもよ？少なくとも試してみる価値はあると思うのよね。」

テンレイは最後優しく言ってエルヴィを見つめた。

「・・・そうですね・・・もう時間もありません。テンレイ殿、よろしく願います！」

追い詰められたエルヴィはとうとうテンレイの策に乗っかかる事にした。

がっちりと握手を交わした二人は早速身支度を整えるため今か今かと待っている着付け部屋のスタッフの元へと早足で向かった。

テンレイによってエルヴィが新たにファイトを燃やしているとは知らないガツクは

「モモコ、これはベギル産のチョコレートでな、世界でもっとも有名なチョコレートの一つだ。」

パティシエが腕によりを掛けた宝石のようなチョコレートをモモコの前に差し出した。

おおー！

モモコはガツクの手にちょこんと乗った魅惑の食べ物に目が釘付けになった。

「にゃ、にゃうお！？（こ、これ食べていいの！？）」  
「ああ。」

モモコはキラキラした瞳でチョコから感謝の眼差しでガツクを見上げた。

そしてチョコの事など吹っ飛びそうなガツクの眼差しに固まった。

まるでモモコを焼き殺さんばかりのレーザーの様な熱い視線。チョコなど爆発した跡形もなくなりそうだ。

（ま、まただ・・・このガツクさんのワケわからん視線・・・私、昨日何かしたのか？）

モモコは二日酔いにもならず、すっきりと目覚めたのだが・・・

（なんかガツクさんの視線が・・・ヘン・・・）

朝、起きた頃からガツクの妙に熱い視線を注がれ困惑していた。

（昨日、なんかしたのかなあ・・・あの甘い飲み物を飲んだところまでは覚えてるんだけど・・・）

そして、まるっと肝心の記憶の部分が抜けていた。

うっん と唸るモモコとは対称的にガツクの機嫌は最高潮。

ガツクはモモコがなんかカクカクしながらもチョコを食べ、その顔がうっとりとなる様を見ては楽しんでいた。

(それにしても・・・むさいな。)

モモコは極上のチョコをじっくりと味わいながら周りを見渡した。軍部、しかも攻撃部隊の大将という立場にあるからか・・・ガツクの周りは厳つい大男率が高い。

今も標準よりだいぶデカイウザい男ども(それはベント達加わるとグンツと跳ねあがった)に囲まれている。

(なんかなあ・・・)

当初よりはだいぶ慣れてきたとはいえむさい事に変わらない。

(それに比べてあつちはいいなあ・・・)

モモコは今にも「押忍!!」とでもいいそんな雰囲気のこととは対極にあるような一角を横目で見た。

そこには代表団の夫人方とテンレイが中心になって女性らしい華やかさとたおやかさに満ちたんだかキラキラした楽しい光景が繰り広げられていた。

その光景を羨ましげに見てからモモコが再度自分の周りを見渡し、げんなりした顔でため息をついた時、舞踏会会場入り口付近が少しざわついた。

なんだろう？

興味を引かれたモモコが目にしたものは。



4 - 17 ガッツあるのみです（後書き）

ガツクに猛アタックする女子・・・（なのか!?!）そしていつも  
のように斜め45度な日常。

それでもいい!と行って下さる方々に感謝の祈りをささげる今日こ  
の頃です。

テンレイはリンドウにエスコートされてこちらに歩み寄るエルヴィを満足そうに見つめた。

「支度はとてもうまくいったようね。」

テンレイは恥ずかしそうに俯くエルヴィに笑顔で言つと、

「顔をお上げなさいエルヴィ・・・戦闘開始よ。」

囁き、エルヴィは決意を示す様に顔を上げた。

テンレイはまず、ホクガンとワイズムに近づき挨拶をした。

ベリアル側にはもちろん伝えてあったが改めて王や周囲に礼を尽くさねばならない。

「ワイズム王、いきなりフレク殿をお借りして申し訳ありませんでした。せつかくの舞踏会ですもの、フレク殿を飾らせてもらいました。」

茶目つ気たつぷり、といった感じでテンレイは笑顔でエルヴィを2人の前に押しやった。

エルヴィは慣れないドレスを捌きながらこちこちになってホクガンとワイズムに深く礼を取った。

「王、護衛という立場ながら勝手にしてしまい申し訳ありません。」  
「なんのなんの！エルヴィの珍しいドレス姿が拝めただけでもドミニオンに来た甲斐があったというものだ、気にするでないぞ。・・・  
のう、ホクガン 主の対戦相手のこの艶姿はどうじゃ？」

（おいおいおい！化けやがったなあ！間違ひなくテンレイが絡んでるんだろうな・・・それにしてもここまでやるかね？そんなにガツクと手合わせしてえのか）

ホクガンはいつものように正確に状況を判断し、エルヴィの根性というか執念に半ば呆れながら感心した。

「いやあ、王の仰る通りまことにお美しい。帝国軍の副隊長など勿体ない限りです。どうです、フレク殿私と一曲”お手合わせ”でも？」

ホクガンはわざと”手合わせ”という単語を使い周りにエルヴィの狙いを示した。

エルヴィがギクリとし、テンレイが眉を顰め、ワイズムがやはりなという顔でうなずいた。

エルヴィは王に挨拶をしたら真っ直ぐガツクの元に行こう！と思っていたのでまさかのホクガンの申し出に慌てた。

（どどどどどうしよう！まさか国主殿から誘われるなんて！し、しかし・・・断るわけにはいかないだろうな・・・国主殿に恥をかかせてしまう・・・ここは大人しく・・・テンレイ殿にはもう少し待ってもらおう）

エルヴィは少し俯けていた顔を勢いよく上げると（もう少し淑やかに・・・テンレイは思ったが口に出すわけにはいかない）

「はい！よろしく願います！」

元気よく返事をし、危うく敬礼しそうになってハッと我に返った。可憐な姿に似合わないキビキビとした声に何とも言えない空気が漂う。

カアアア・・・

目の前のホクガンの肩が笑いを堪えるかのように細かく揺れ、口元がピクピクと引き攣っているのを見てとると、エルヴィの顔に熱が集まりゆでダコの様になった。

「・・・こちらこそ。さあ、お嬢様お手をどうぞ。」

モモコが聞いたなら気持ち悪さのあまり総毛立ちそうなセリフを吐くと、ホクガンはエルヴィの手を取り、ホールへと導いた。

「クッククック・・・お前ほんとに面白い奴だなあ。そんなにゴテゴテと着飾りやがってちゃんと踊れるのか？」

ぐいつとエルヴィの腰に手を廻しながらホクガンは片頬を上げ、笑い声を洩らすと早速からかった。

エルヴィはムツとするとホクガンを睨みつける。

「国主殿・・・気付いてらっしゃるんでしょう？邪魔しないで下さいー！」

ホクガンは余裕そうに頷くと

「ああ。ガツクのことたる？まあまあ、慌てんなって・・・手合わせにしか気が向いていないようだが、あいつと踊るんだろ？お前とアイツどれだけの身長差があると思ってるんだ？俺が練習台になつてやるよ。あいつとほぼ同じだからな。」

自分の腹辺りに顔があるエルヴィに言う。

エルヴィは遙か頭上にあるホクガンのニヤニヤ顔をしばらく胡散臭そうに見上げていたが、やがてため息をついて力を抜いた。

「ご教授よろしくお願いします・・・」

「そうそう、素直が一番だぜ。それにしてもここまでしてガツクと手合わせしてえのか？ベントとの試合を見ていたんだろ？」

「・・・わかってますよ、敵わないことぐらい。でも私は・・・」

モモコはあまりにも身長差があるため、エルヴィがほぼ仰け反る様にしてホクガンと踊るのを気の毒そうに見つめた。

（首、痛そうだなあ。・・・ていうかこの世界の人って身長高すぎないか？ベントさんなんて私から見たら巨人だよ。・・・ガツクさん何センチあるんだろ・・・うゝん聞くのなんか怖いなあ。）

でも気になる・・・

ここにきてモモコはようやくというか今さら感さえ漂う事を、（そ

るそろ帰るか）などと、来てから一時間も経たないうちに帰ろうとしている（国主の任が押され、正式な招待状を出している）ドミニオンの中心人物の一人でもある接待側間違いなし、の大男に聞いてみる事にした。

ガツクは早くも入口の方へと足を向けた自身の胸をモモコがべしべしと叩いてので立ち止まって察し、（それを見たエルヴィ、テンレイは慌てたがモモコが結果引き止めるのを見るとホツとした。）周りを見渡したが適当に開いている場所が皆無なのを見ると近くの部屋へと入り、

「どうした？」

優しく言うつと袖口から出したABC表を床に敷いた。下ろされたモモコはちよつとドキドキしながら動く。

「ガツ・クさん・しん・ちよう・い・くつ・？」

質問が終わると小首を傾げてガツクを見上げた。

「俺の身長か？どうでもいい事を聞くんだな。」

ガツクは顎に手を当て片眉を上げてモモコを見下ろした。うっ・・・確かに。

「み、みーお！ふにゃー！（い、いいじゃん！気になったんだからさー！）」

ガツクはちよつと気まり悪げにするモモコに微笑んでから、答えた。

「俺の身長は2m78cmだ。ついでにダイスは77、ホクガンは76だ。ほぼ変わらん。」

・・・でかつつ!!!

モモコは目をひん？いて驚愕した。でかいでかいと思っていたがこれほどは・・・

(あ、あたしが人間だった頃の身長が158だったから・・・げげげ 1m20cmも違う！)

モモコはリラックスして腕を組み、部屋の壁にもたれてこちらを見やるガツクを改めて観察した。

どこまでも長い脚に引き締まった腰、厚い胸広い肩。その堂々とした体躯は今夜、黒のタキシードに包まれている。黒く豊かな髪は後ろに撫でつけられているが、額にはいく筋の髪がハラリと掛っている。

整っている方なのにそうは見えない怖ろしげな顔の、なかでも印象的なのは目だ。時には殺意に満ち、無関心になり、冷徹で何もかも見透かすような黒い目。が、それは今 熱く輝きモモコをまるで愛撫するように見ている。

あ・・・

モモコは息を飲み、引き込まれる様にガツクの目に魅入った。

「モモコ・・・」

ガツクは切なそうに低い声でモモコの名前を呼ぶと、屈んで片膝をつく。そしてそっとモモコの頬に手を伸ばした。

モモコの心臓があり得ない速さで打ち始める……

「おいガツク。」

ドアがノックもなしに開き、ホクガンが顔を出した。

「あ……悪い。」

ホクガンは心肺停止起こしそうなほど睨みつけてくるガツクと、どきまぎしているモモコを見比べて取りあえず謝った。

「何か用か。」

ガツクは無茶苦茶不機嫌な声でホクガンに言うとモモコを抱き上げて部屋を出た。

そこには夫人方を相手に一通り踊り魅了して帰ってきた（口説いとるんじゃねえぞ！仕事じゃ！）ダイスもいた。

「用かって、お前ね。……もしかしてもう帰ろうとしてねえだろうな？」

「そのつもりだが。」

「アホオ！来てまだ30分も経ってねえだろうが！てめえも仕事せんかい！」

「お前達で事足りるだろう。俺とモモコは帰る。」



接待などするより早くモモコと二人きりになりたい。  
顔にも態度にも表わすガツクに、

(こりや埒が明かねえな。もう俺達では無理だ。時間もねえし、アレいっとくか)

早々と悟ったホクガンは最終兵器に命じた。

「おいモモコ。」

モモコも呆れてガツクを見ていたがホクガンの声に頷き、

「みやお！ふみみ！（ガツクさん！お仕事です！）」

ガツクに接待続行を促した。

ガツクはしばらく嫌そうに顔を顰めていたが不承不承頷いた。

2人と一匹がホツと胸を撫で下ろした時、サラサラと衣擦れの音がして一人のレディがガツクの前で立ち止まった。

「こんばんわ、コクサ大将。一曲願いますか？」

「……………」

またお前か。

ガツクは緊張気味に微笑むエルヴィを無表情で見下ろした。  
沈黙が辺りを覆う。

エルヴィの顔が強張り、背中を冷たい汗がツツツと滑る。

(エルヴィさん……綺麗だな)

向かい合って立つ流麗な2人を交互に見てモモコはなぜだか胸の奥

がチクツと痛んだ気がした。

「ことわ」

「まさか断るなんて言わないでしょうね？」

エルヴィの背後から様子を窺っていた、豪華なエメラルドのドレスを纏ったテンレイがそれだけは許さん！といった感じで口をはさんだ。

「今夜は正式な舞踏会。しかも女性の方から申し込んでいるのよガツク。それを断ろうなんて、いくら無作法が当たり前のあなたでも・  
・しないわよねえ・・・？」

こ、怖い・・・

モモコとエルヴィは緑の瞳を怒りでメラメラと煌めかせ、艶やかに紅を刷いた唇が弧を描いて笑っているはずなのに全然笑顔に見えないテンレイに慄いた。

だがガツクはまったく意に介さず逆に あ？ という風にテンレイを見やった。

ますます瞳を鋭く尖らせるテンレイ。

2人の周りが氷河期が訪れたかのように凍りつく。

この なんだかなあな空間を初めて体験し、色をなくして立ち尽くすエルヴィ。

ホクガンとダイスはこの恐ろしい戦いを周囲に気取られない様取り繕うのに必死だ。

な、なんとかしなければ！

これを食い止めるのは自分しかない！と、モモコは雄々しく決意

するとガツクの肩にすると登り、ガツクの頬にすりすり額を擦りつけた。

途端にガツクの雰囲気是和らぐ。

「どづしたモモコ。」

その場にいる全員がますます凍りつくような甘い声でガツクが聞いた。

モモコも えっ？ となりながらもエルヴィをじっと見つめ、またガツクを見つめる。それを二度ほど繰り返し、ガツクに言いたい事を伝えた。

「・・・そいつと踊ってこいというのか？面倒なんだがな・・・」

「ガ・ツ・ク。」

「みゃーお！（ガツクさん！）」

テンレイが普段の声からは想像もつかない様な声で名を呼び、モモコが注意した。

テンレイは無視すればいいだけだがモモコに呆れられるのは避けたい。

ガツクは大きくため息をつくとぞんざいにエルヴィに手を差し出した。

「一曲だけだぞ。」

エルヴィはすぐさま頷き緊張気味に手をガツクの大きな手に重ねた。

「おい。」

ガツクはエルヴィの手を軽く握りながら、モモコに手を伸ばすテンレイに警告を込めて声を掛けた。

「何よ。モモコを連れて踊る気？どこまで無作法なのあなたって男は。モモコは私が喜んで預かるからちゃんとエルヴィをエスコートなさいよ。」

モモコはテンレイの常識たる声を聞き、もっともだと納得するとガツクの肩からテンレイの腕に飛び込んだ。  
ガツクはそれを見て思い当たった。

「なるほどな。コイツを俺に押し付け、その間にモモコを代表団の夫人達に紹介するのが狙いか。・・・こんな回りくどい事などせんでも要請があれば赴く。」

「モモコにはあなたが付いてくるでしょ！あなたみたいな無骨者がセツトではご婦人達が心から楽しめないじゃない！そんなのもてなしてるとは言わないわよ！いい加減察しなさい！」

テンレイは開き直ってガツクにすぐさま応酬した。  
ガツクはそれにまったく頓着せず「一曲だぞ」とテンレイに念を押して漸くホールへと歩き出した。

テンレイはハアと息をつくとき、気を取り直したようにモモコにっこりと笑いかけた。

「さあ、皆さんお待ちかねよ。」

そしてひと際華やかな一団へと足を進めた。

「お前、しつこい性格だと言われた事がないか。」

ガツクはいささか乱暴にリードを取りながらエルヴィに話しかけた。

「ありません。ガッツはあると言われた事はありますが。」

エルヴィは国主殿と馴らしておいてよかったとホクガンに感謝しながらガツクになんとかついていき、返事をした。

「物は言いようだな……なぜそんなに俺と手合わせがしたい？お前よりも強く、まだ対戦していない者ならいるだろう。」

ガツクはスローテンポな曲なのにそれを感じさせない動きでエルヴィをターンさせた。

「あなたが一番強い。それだけではいけませんか。」

エルヴィは挑戦的に笑うとガツクの腕に戻る。

「……あなたと闘えば今の自分よりもっともっと高みに近づけるような気がするんです。もっと帝国のために力をつけたい……王やベントさん、軍の皆の期待に応えたいのです！」

エルヴィはそう言うのと決意を込めてひたとガツクを見つめた。

ガツクはエルヴィのそれを真っ直ぐ受け止めながら機械的に体を動かしていたが、やがて目元をフツと緩めて微笑んだ。

「・・・確かにガッツはあるようだな。わかった、お前の望みどおり手合わせしてやる。」

エルヴィが信じられないと言う様に目を見開く。  
そして勢い込んでガッツに確かめた。

「ほ、本当ですか！もう撤回はなしですよ！いえ、させません！」

ガッツは面白そうに笑って頷き、

「ああ。雷桜隊大将ガツク・コクサ、エルヴィ・フレク副隊長との手合わせ　しかと了承した。」

正式な返答をして約束した。

エルヴィの顔に会心の笑顔が浮かぶ。

ガッツは呆れたようにそれを見、首を振って言った。

「まったくベントといいお前といい、ベリアルには変わった奴が多い。普通俺と手合わせしたがる奴なぞいないぞ。」

あまりにも強すぎ、ガッツとの手合わせは相手にとって死闘を覚悟しなければならぬ程なので滅多に声など掛けられない。それは軍部に入った頃から続いている。ガッツが手合わせするのはせいぜいダイスカホクガン、何か血迷った者（ダイナンのような）くらい。

が、そんな事を言われてもニコニコと笑い続けるエルヴィにガッツもつられる様に笑った。

(・・・嫌がってたわりには楽しそうじゃん・・・)

モモコはご婦人方にちやほやされながらもガツクとエルヴィが気になり、2人を見つめ続けた。

エルヴィはガツクに振り回される様に踊り？ながらも何かを必死に訴えている。恐らく対戦を申し込んでいるのだろう。それはわかるわかるのだが・・・

(なんだろう・・・この気持ち・・・)

そのモヤモヤとした感じはガツクがエルヴィに微笑むと一気に嫌なモノへと変わった。

(う・・・なんかやだ)

エルヴィが笑い、ガツクが応える様に笑う。

2人がゆつたりと踊りながら微笑みあっているのを見てモモコは胸が詰まった様に苦しくなった。

(もし私が・・・人間だったら・・・あそこにいるのは私だったのかな。ガツクさんと手を繋いで・・・猫じゃね・・・手も繋げないし、ダンスもできない。ドレスだって・・・)

モモコはエルヴィの薄紫色のドレスを見、周りのご婦人方の美しく煌びやかなドレスを見渡した。

似たような物をモモコも着ている。だが平素は何とも思わないこの恰好が、今だけは人間の真似をしているようで惨めだった。

たくさんの人の声、目まぐるしく変わる光景、多種多様な香水や人

の匂いが混ざりあう中、ガツクとエルヴィの姿が時折垣間見える。

これ以上笑いあう二人を見たくない！

モモコはリンドウに呼ばれたテンレイが席を外すと、ぴよんとテーブルから飛び降りバルコニーへと走った。  
驚き、呼び止める声も耳に入らなかった。

ちょうどバルコニー側から入ってきた人の足元をすり抜け、モモコは冷たく新鮮な空気を胸いっぱい吸った。  
それはすぐため息に変わる。

(どうして・・・こんなに苦しいんだろ?・・・エルヴィさんにガツクさん触ってほしくない。ううん、誰にも・・・私どうしちゃったのかな・・・苦しい・・・どうしてこんなに苦しいの?)

モモコが感じた事もない感情を持て余していると、不意に人間ではない声があった。

「こんばんわ。今夜は人間達が随分うるさいね」

モモコが聞いた事もない声に警戒して身構えると・・・



「やあ・・・初めまして。」

手摺の影から闇に溶け込みそうな黒い色をした猫が姿を現し、青い色の目で自分を見上げた。

4 - 1 8      もし . . . . . です (後書き)

モモコの初焼きモチ! やったなガツク! . . . だけどそれを上廻って  
て大気圏に突入しそうなガツクの嫉妬の対象が . . . .

黒猫は「よいしょ」という声と共に、モモコとは反対側の手摺に飛び乗った。

そして喧騒に満ちた室内をチラリと見て、闇夜に輝く青い目をモモコに移すと、

「フフツ、そんなに警戒しないで・・・驚かせてしまった？ごめんね。」

緊張で全身を強張らせるモモコを猫特有の笑い方で宥めた。

「危害を加える気はないんだ。同族に会えるなんて滅多にないから・・・嬉しくてつい声を掛けてしまった。」

黒猫はそう言うと一緒に足を踏み出した。  
が、モモコが後ずさるのを見ると踏み出した足を元の位置まで戻す。そして優しい眼差しで話しかける。

「君、名前は何ていうの？その格好・・・人間に飼われてるんだろっ？」

モモコは頷いてから用心深く答えた。

「・・・モモコ。・・・あなたは？」

「僕にいわゆる名前はないんだ。皆には”黒猫”って呼ばれる。」「・・・皆って・・・飼い主さんがたくさんいるの？」

モモコは黒猫の言い方に引つかかるものを感じ、小首を傾げた。黒猫は、アハハと笑いながらモモコの言葉を否定した。

「僕に飼い主はいないよ。まあ、人間風にいうと野良猫だね。」  
「・・・野良猫・・・大変じゃないの？ご飯とか、寝る場所とか。」  
「そうでもないよ。猫は珍しいからね、結構いるいるな人から可愛がられてる。・・・まあ、中には僕を捕まえて、どこかのバカ野郎に売り付けようとする奴らもいるけどね。」

黒猫は最後、鼻に皺を寄せて嫌そうに言った。

うえー！

黒猫はモモコがギョツとするのを見て意地悪そうに目を半目にし、

「猫だっていう事も珍しいのに、君みたいならさらに珍しい毛色だと大変だ。・・・一歩でも外に出てごらん、周りの景色を見るゆとりもなく、あつという間に攫われ、どこの誰とも知らない奴に・・・」

低い声で脅かした。

モモコはガックから離され、知らない誰かに愛られる自分を想像して寒気がした。

細かに体を震わせるモモコを見て、

（しまった！やり過ぎだ、子供相手に何をしてるんだ 僕は）

焦った。

前にも説明したが、モモコはこの世界の水準よりだいぶ小さい。初めて自分の同種に遭遇したが黒猫の方が3倍は大きい。雌雄の個体

差はあるだろうがそれでも小さい。(それはまさに異世界から来た証拠でもあるのだが)なので成獣なのにもかかわらず、相変わらず周囲からはまだ子供だと思われていた。

ちなみにガツクはモモコの事を子供だとも、成獣だとも思っていない。まあ 知識としてはあるが基本何とも思っていない。

話がそれだが、黒猫もご多聞に漏れずモモコの事を子供と思い、脅かし過ぎてしまったかと慌ててフオローする。

「ま、まあ なるべく一匹で外には出ない事だよ。あと、知らない人や動物にも気をつける事。もしも捕まってしまったら遠慮はしない、思いつきり引っ掻いたり咬みついて。そして大声で鳴いて周りに知らせるんだ。一瞬でも奴らに隙があつたらダッシュで逃げる。そしてなるべく高い所まで移動する事。いい？」

真剣に諭す黒猫にモモコは

(・・・ああ・・・きつとたくさん追いかけられたり捕まったりしたんだろうな。)

よく見ればしつとりとした艶やかな毛に隠れ、そここに大小の傷が見て取れた。

いろいろな対処法を知っているという事はそれだけの事があり、そこから学んだという事だろう。

黒猫にどんな過去があり、なぜ野良猫なのかは知らないがモモコは少し切なくなった。

「黒猫さんも知らない動物じゃん。」

モモコはわざと明るい声で黒猫にツッコミを入れた。

黒猫は虚をつかれた様に目をパチクリしていたが、やがて朗らかに笑いだす。

「確かにそうだね。感心感心、モモコは意外としっかりした子だね、安心したよ。じゃあと言うのもなんだけど知らない動物から友達に昇格してもらってもいいかな？さっきも言ったけど同族に会える事は滅多にないんだ。友達になってくれると嬉しいな。」

穏やかな眼差しは他意はない事を伝えている。

モモコは二つ返事で承諾した。

会ったばかりのモモコに捕まった時の対処法を覚えてくれるし、気さくでお兄さんの感じも好ましい。(ガツクはもとより周りは遙かに世慣れた者達・・・シヨウはお兄さんというよりもお父さん) 同世代に近い感じの柔らかな物腰の黒猫はモモコには新鮮に映った。

ほのぼのとした感じの二匹と、扉を挟んで室内側にいたテンレイは、  
(なんて可愛らしいの〜！ガツクなんかとじゃ比べ物にならないくらい絵になるわ〜！可愛い！！可愛すぎる！！)

黒猫とモモコの、猫どうしにしか醸し出せない完璧な可愛らしさに悶えていた。

自分が席を外した間に、モモコが突然その場から走り去った事を聞かされたテンレイは、向かった方向を聞き捜しに来たところ、あり

得ないだろ何だこれ！この可愛い何だこれ！的場面に遭遇した。

（あの黒い子に蝶ネクタイなんかして白いタキシードとか着せて黒いドレス姿のモモコの横に置いたら！ヤバい！ヤバすぎるほど可愛いわー！）

幸せすぎる想像をして頬に手を当てキヤーとさらに悶えていると

「テンレイ・・・モモコはどこだ。」

その幸せを木端微塵に打ち砕く、低い声が頭上から打ち下ろされた。

「ヒョッ」

その声に虚をつかれたテンレイは心臓が止まりそうなほど驚き、思わずヘンな声が出てしまった。

「ガ、ガツク・・・」

テンレイが振り向くと腕を組んで不機嫌そうにこちらを見下ろす魔王・・・いやガツクがいた。

「モモコはどうした？夫人方の所にはいないぞ。」  
「モモコ？あつ、モモコなら……」

言い掛けてテンレイはハツとした。

ヤバイ……ヤバすぎるわ！！ガツクにあの子たちを見られたら！！！！

同じ言葉だが悶えていた時とは180度違う意味合いで使いながらテンレイは青ざめた。

自分一人では無理！と瞬時に判断したテンレイは急いでホクガンとダイスに合図を送る。

合図に気付いたホクガンとダイスは青ざめるテンレイとその前に立つ、顔は見えないがイライラしている風のガツクを見てギョツとした。ガツクなど怖くもなんともないテンレイが青ざめるなど余程のことだ。それにガツク専用安定剤のモモコも見当たらない。

二人はできうる限りの速さでその場に向かった。

一方のガツクはホクガン達にだろっ合図をするテンレイを不審そうに見やる。

「なぜホクガン達を呼ぶ？……まさか　モモコが逃げだしたのか？何をしたんだ　テンレイ。」

「失礼ね！私がモモコに不快な思いをさせるわけないでしょ！あなたじゃあるまいし。」

「ではモモコは何処だ。」

「モ、モモコはその……お、お手洗い！！そっお手洗いに行つてるのー！」



妙齡のうら若き女性が、公衆の面前でトイレ！と声を張り上げる様はどうしたんだろうね的モノがあったが黒猫の命が懸かっているのだ、形振り構ってはいられない。

「・・・手洗いだと？・・・テンレイ・・・何を隠している。モモコは何処だ。」

ガツクは軍人のカンというか長年の付き合いとかでテンレイが何かを隠している事に気付いた。そしてそれは大事なモモコに関する事だという事も。

ガツクが本気を出してテンレイを問い詰めようとした時、かすかに猫の鳴き声が聞こえた。

「・・・モモコ？」

声はバルコニーの方から聞こえた。

ガツクは扉の向こうに広がる暗闇に目を凝らした。

慌てるテンレイなど既に眼中にないガツクが見たものは。

手摺にちょこんと座るモモコと、鼻と鼻がくっつきそうなほどモモコに近寄り、見た事もない黒い猫の姿だった。

「ちょっと！何すんのよー！」

モモコは急に近づき、鼻と鼻をくっ付けようとした黒猫の鼻先をピ  
ンクの前足でストップした。

「何って挨拶だよ。知らないの？」

黒猫はモモコの前足を口元にくっ付けたままおかしそうにモモコを  
見下ろした。

モモコは元の世界の猫達を思い浮かべてみた。確かにそういう光景  
を見た事がある。

だが・・・

「悪いけどそういう事はなしって事でいい？」

「どうして？ただの挨拶だよ？」

「ほんとにごめん・・・だけど・・・されたくないの」

モモコは前足を降ろしてすまなそうに間近の青い目を見つめた。

黒猫はしばらくそんなモモコを見ていたがフツと笑った。

「わかったよ。君が嫌ならしないさ。でも・・・」

そこまで黒猫が言った時、一陣の黒い風が吹いた。

ピュッ

テンレイの耳にガツクの息を飲む音が聞こえた。

後ろを振り返ってみるとモモコと黒猫がまるでキスをするように寄りそって座る姿が……  
テンレイは、可愛い！と思うと同時に爆発するような怒りのオーラに現実には引き戻された。

ガツクはテンレイを押し分けるとバルコニーの扉を砕けそうに開き、モモコには当たらないよう 黒猫目掛けて手刀を振り下ろした。

ドガガッ！！

ガツクの手刀はバルコニーの手摺を粉々に砕きそれは床にまで到達した。

ガラガラガラ……

瓦礫と化したバルコニーの一部が崩れ落ちる。

ガツクは屈んだ態勢のまま、ゆっくりと顔を横に向けた。

そこには間一髪でガツクの殺気を感じし、手刀が当たる前に後ろに飛びのいた黒猫がいた。

「にゃうお！（ガツクさん！）」

黒猫は今でかつて感じた事のない殺意と怒りの波を受けながらモモコが発した言葉にハツとなった。

「ガツクさん？この……コイツを知っているの？も、もしかして飼いまじじゃないよね？」

「その……まさか……な……んだけど。」

「モモコ……知らない奴と話すんじゃない。」

ガツクは何やら話をしているらしい二匹の間を遮断するように立ち  
はだかった。

そして黒猫の方を向くと

「お前だな・・・お前が俺のモモコを攫う奴か・・・出る杭は  
打とうではないか。芽は早いうちに摘み取るものだ。」

間違いなく始末する方向で黒猫に迫る。

一拍遅れてきたホクガンは一瞬で状況を理解し、黒猫に向かって

「早く逃げる！死にてえのか！」

言葉が通じるかはともかく、取りあえず叫んだ。

ホクガンの焦る声にくるものがあつたのか黒猫はビクンツと体を揺  
らし最後に一声鳴くと、ガツクが走り寄るよりも一瞬早く夜の闇へ  
と身を翻した。

「ホクガン。」

ガツクは沸き上がる怒りのままに邪魔をした者の名を呼ぶ。  
その殺意に沈む黒い目は黒猫が消えた空間を貫く様に睨んでいる。

「レセプション中なんだぞ ガツク。自重しろ。」

ホクガンもガツクに負けないくらい硬い声で返す。

「客の方は大丈夫じゃ。気付いた奴はおらん。」

ダイスが冷静な声でホクガンに報告する。

そして茫然と固まるモモコへと気遣う様に声をかけた。

「大丈夫か、モモコ。ケガしとらんか。」

モモコは我に返ると心配そうに自分を見るダイスに、大丈夫という様に「いやあ」と鳴いて安心させた。

そして、苦虫を噛み潰したような顔のホクガンをすまなそうに見て、ガツクの元へと歩み寄る。

「みゅーう？（ガツクさん、なんか誤解してない？）」

モモコの声にさすがのガツクも怒りをなんとか収める。  
そして。

「モモコ・・・奴は誰だ？いつからいた？」

ガツクはモモコに言われてもいないのに床にABC表を広げて質問という名の尋問を開始した。

（ここでやるなよな。ここがどこだと思ってるんだ テメエ）

（モモコ・・・すまんが無難な答えで頼む）

ホクガンとダイスは一人と一匹をそれぞれの思いを込めて（疲れた様に）見つめた。

ガツクは片膝をつき食い入るようにモモコの一挙一足を見ている。

え、えつと・・・

モモコは鋭すぎるガツクの視線に戸惑いながらも表の上をちょこまか動いた。

お前は妻の浮気を問い詰める夫か。

「な・まえは・くる・ねこ」

「さっ・き・あっ・たばか・り」

ふーむ。

ガツクは息をつくくと深呼吸して肝心な事を聞いた。

「奴と何をしていた？まさか・・・まさか・・・」

ガツクの声が異様に低くなる。

ヤベえ・・・

ホクガンとダイスのこめかみを冷たい汗が滑る。

（あ、あれ見えたのか。だからこんなに怒ってるんだな。やっぱり誤解してる。）

モモコはそれまで、ガツクのキレように戸惑っていたのだが、思っていた通りの事だったので納得した。

そして元気よく表の上でステップする。

「だい・じょう・ぶ・あい・さ・つ・だよ」

「……鼻先がついてる様に見えたが。」

「されそ・う・に・なっ・たけど・がー・ど・し・た」

えへへ……

モモコは得意そうに前足をヒラヒラしてみせた。

それを見たホクガンとダイスは不覚にも涙が出そうになったが、続けてモモコが露わした言葉に感傷は霧散する事になる。

「こっ・げ・きな・ん・てさ・れ・て・ないか・ら・！・けが・も・して・な・いよ・！」

……

ちげーよ

違っのう

違っんだがな

ふう……

モモコのあまりに脳天気での外れな言葉にガツクの体からも力が抜ける。

「まっ、そういう事だガツク。……お前よう、もう少しソレ抑えられねえのか。今にモモコにウザがられるぞ。」

いや、もうウザがられてるか？  
ホクガンは昨日の騒動を思い出した。

「フン、抑えられるモノならとつくにしている・・・言っただろう、もうそついう時期は過ぎたと。」

表を畳み懐に入れてから、ガツクはモモコを優しく抱き上げてその小さな顔に自身の頬を擦り寄せた。

「奴が今度現れたら・・・。」

その先をガツクは口にしなかったが剣呑に狭められた目から言いたい事は充分過ぎるほど伝わった。

やれやれ。

ホクガンは首を振りながらため息を漏らすと、

「おらおら！会場に戻るぞ。いい加減仕事しろガツク！モモコはレンレイと共にご婦人方のご機嫌を取ってこい。ガツク、お前はダイスと一緒に他国の軍に妙な動きが最近ないか探ってこい！・・・国のためにな。」

ホクガンは最後、ガツクにとってモモコと同じくらい大事なドミノオンの事を出して、モモコと（呆れるほど渋々）離す事に成功した。

こうしてレセプション最後の夜は更けていった。



黒猫が最後に発した言葉は

「また会おう。今度は飼い主なしで。」

モモコが子供だろうが成獣だろうが関係ない所にガツクのマジ度が窺えて空恐ろしいですねえ。

あと、猫どうしが鼻先をくっ付け合うのは挨拶だという論と、他にはあるようですが、作者は断然、挨拶派ですので、あの世界の猫は鼻先で挨拶！と断固させてもらいます。

充分食べたり飲んだり踊ったりして楽しんだ最後の夜が明け、昼ごろ各国代表団はそれぞれの帰路に就いた。

「ガツクよ！！またお前と戦える日を楽しみにしておるぞ！！そして猫よ！！これからもその勇敢な魂をオ！！忘れるでないぞ！！いついかなる時でもオ！！こ」

「早く帰れ。」

ガツクはうんざりした顔を隠そうともせずベントの熱い別れの言葉を遮った。

その大きな手はモモコの耳を塞いでいる。

ちなみにベントの次の言葉は「向上心を失うなア！！」である。

「好敵手の言葉を遮るとはガツク！無礼だぞ！！」

「誰が好敵手だ。お前の声はうるさいと何度言ったらわかる。黙って帰れ。」

「何をオ！！！」

ガツクさん完璧煽ってるの知らないよね。

ますます声を張り上げ、抗議するベントに嫌がらせのように「帰れ」「消えろ」を連呼するガツク。

そう、ガツクに嫌がらせの意識はない。本当にナチュラルにそう思っただけだ。

モモコは二人の周りがげんなりするのを肌で感じながら、斜め前を見た。

「ワイズム王陛下、コロナ妃様、また是非いらして下さい。このテ

ンレイ首を長くしてお待ちしておりますわ。」

ギヤースカと品の欠片もないあちらとでは対称的な壮麗さと上品な振る舞いで、テンレイとホクガンは最後に出立するベリアル帝国国王夫妻に礼を取った。

笑顔で挨拶を交わす妃とテンレイを見ながらワイズムは、

「……ドミニオンは明るくなった……主が精進しておる証しだな、ホクガン。」

ホクガンはフツと笑い少し俯いて首を振った。

「私だけの力ではありません。仲間達と二代目と……そしてシスのお陰です。」

ワイズムはまばゆい日の光が家々の屋根を反射して煌めく様<sup>さま</sup>を目を細めて見、やがて小さく頷いた。

「そうか……もうあれから21年も経つか……」

無事に友好国を送り出し、片づけやら何やらがようやく終わった夜。

「待たせたな、モモコ。」

ホクガンは巨大なソファに座るガツクの膝に、ちょこんと乗ったモ



「ああ。俺達の事情を話しておこうと思ってな。それにはシスの事から話さんと・・・さてと・・・何から話すかな。」

ホクガンがゆったりとソファに沈み込みながら息をつく。

「・・・シスはバカな男だった。」

ガツクがモモコを撫ぜながら唐突に口火を切った。

えっ!?

モモコは急に声を発したガツクにも驚いたがその内容にも驚いた。

「身も蓋もない言い方だが、その一言に尽きるな。」

「本当にのう。あれだけ頭に血が上りやすいのによろ大将なんか務められたもんじゃ。」

「シスの話題になると真つ先にそこから入るわね、いつも。」

他の3人も同様な感じでうんうんと頷く。

「まず行動してから考えるという、軍人としてまた隊士を預かる立場としてあるまじき行為をする男だな。それに振り回される当時の隊士達に深く同情したものだ。」

ガツクが苦い顔で言うと、

「どうしてあれだけ目茶苦茶な戦い方なのに最後は何となくうまくいったんだろうな。」

「運だけはよかったからのう。ああでなきゃ何回死んどったかわからん。」

ホクガン達も心底同意するようにまたうんうんと頷いた。

(・・・あ、あれ?)

「呆れるほど下品な男だったわね。」

「そうそう。下ネタばっか喋ってたな。」

「お偉いさんの前でも平気で屁をこいたのを自慢げに話しとるのを聞いた時にゃ、こんな奴の下で働かんといかんのかと思って目の前が真っ暗になったもんじゃ。」

「大酒呑みでもあったな。いくら酒があっても足らんようだった。」

(あの・・・だいぶイメージと違うんですけど・・・もっとこう・・・何かさあ)

”シス”という名に神秘的な印象さえも感じていたモモコは、神秘的どころかダメ親父全開のシス像に呆れた。

「・・・だが、いい奴だった。」

ガツクが沁みいる様に声をつく。

「・・・むちゃくちや部下達や将校達に慕われてたな。女にはモテなかったがガキどもやじーさんばーさんにはモテまくってた。」

「・・・シスの周りはいつも笑いが絶えなかったわね。」

「そうじゃな・・・嫁はおらんかったが大変な家族思いでもあった。」

「

.....

静かで穏やかな優しい沈黙が落ちる。

モモコは皆のしみじみとした顔を見ていたが、さっきから気になっていた事がある。

みなシスの事を過去形で話すのだ。

(もしかするとシスさんはもう.....)

やがてホクガンは顔を上げ、モモコを真っ直ぐ見た。

「シスはもういねえ。今から21年前追放されたんだ。」

！！

モモコに衝撃が奔る。

ホクガンは両膝に肘を置き指を組んで、過去を見ているかのように自身の手をじっと見た。

「二代目国主の時代、ドミニオンは復興の最中でな、それに加えて元の宗主国、ゼレンやゼレンと同じ考えを持った他の国からやっかいな提案を国際会議で提案、可決させたドミニオンに恨みを持つてしよっちゅう嫌がらせやテロ行為を受けていた。それを鎮圧するために軍部は夜も昼もない状態だったようだ。」

ふうと息をつくホクガン。

ダイスが作ったオン・ザ・ロックを舐めるように口をつけると先を続けた。

「俺達が16の頃だ。ゼレンのたび重なる非道なやり方に遂にシス



がキレた。アイツはよりもよって国際会議の真つ最中にゼレン側の大使をぶん殴って重傷を負わせちまったんだ。・・・何があったかははつきりとはわからねえ。シスは俺達に何も言わなかったからな。ゼレンと他国の裏工作やテロは巧みに隠され、それを知らない和平と倫理を尊ぶ世界中からシスは、ドミニオンは非難された。シスは責任を問われて追放となり、シスの実の姉でもあった二代目国主はゼレンに深く謝罪したってワケだ。」

・・・それはどんなに悔しい事だっただろう。

国土を荒らされ、弟を失って尚、その原因たる国に頭を下げねばならなかった二代目国主。

彼女の心を思うとモモコはやり切れない思いでいっぱいになった。

「追放と言う処断を下したのは二代目だった。」

そんな・・・

ガツクはモモコの顔を自分の方に向けその愛らしい（注：ガツク視点）瞳が切なげに細められるのを見て、穏やかに微笑むと日本酒（ツポイもの。ツッコまないように）の入った猪口をグイッと傾けた。

「たとえ世界中から非難されても、命を賭して国のために戦ったシスを処断なぞしたくない。しかし、二代目や中枢の者共がシスを庇えば庇うほど軋轢あつれきを生んで新たな火種ができ、このままではようやく復興の兆しが見えてきたドミニオンを再び戦いの日々へと逆戻しする事もわかっていた。」

「・・・シスはな、最初死ぬ気だったんだ。ドミニオンの不利益となるくらいなら自ら自分の喉をカツ捌さばいてみせるってな。だが、それだけは二代目が許さなかった。シスの周りも必死に止めた。俺ら

もな。二代目は言ったよ。言っただっていうよりシスをビンタして怒鳴ってたな。死ぬ気があるんだったら死んだ気になって生きて見る、死ぬ事よりも生きる事の方がもつとずつと困難だとな。シスは間抜け面してア然と二代目を見ていた。後で聞かせてくれたよ、知らぬ間に逃げ道を捜していた事に気がついたってそれを二代目に見抜かれて恥ずかしかつたってな……。」

ダイスはテンレイのために作ったカクテルをテーブルに置くとホクガンの隣に座った。

「決心したシスの動きは早かった。あの日から二日後、身辺整理をすませたシスはドミニオンから去っていった。ワシらに見送りもさせんでのお……もうシスは心底愛しとったドミニオンの土は踏めん。」

大事な友も、仲良うしとったガキ共とも、たった一人の家族でもある姉も何もかも失くした。こんな理不尽な事があってええんかとガキだったワシらは憤ったもんじゃ。」

「……ベルニカ様、あつ、二代目国主はベルニカ・フェザラソって仰るの。ベルニカ様の苦難はまだ続くわ。シスを失いゼレンに謝罪した後もドミニオン国内ではこの事を巡って賛否両論が沸き起こり、軍部も荒れ、ベルニカ様をリコールする動きもあったの。ベルニカ様は誠意と知恵を持ってそれに対応してらした。政務をこなし、尚且つゼレンや他国との小競り合いを退けながらね……本当に素晴らしい方だった。」シスに見てもらいたいんです、皆が幸せそうに笑うドミニオンを。」これが口癖だったわ……。」

テンレイは目を閉じて、穏やかな中にも強い笑顔を浮かべるベルニカを胸が締め付けられるような切なさと共に思いだす。

「……シスが去った後、シスがゼレンの大使を殴った理由がわ

かった。あの日シスは、シスの部隊の新隊士がゼレンの大使に殴られていた場面に遭遇した。新隊士は黙って殴られていたそう。ここで騒ぎを起こしたらドミニオンに迷惑がかかるってわかってたんだろうな。シスも最初は物陰に隠れてぐつと我慢していたそうだが、聞こえちまつたんだ。「属国の奴隷民が」と罵りながら部下を殴る大使の声がな・・・後はさつき話した通りだ。・・・こんな事もう二度とあっちゃならねえ。俺達の国を、国民を蔑む奴らを俺達は絶対に許さねえ・・・わからねえならわからせてやるさ、骨の髄までな。」

ホクガンが口の端を上げ静かに笑って見せる。

ひよええー！！

モモコはホクガンの凶悪そのものの笑顔にゾクとした。と、次はダイスがビールを片手に話し始める。

「ワシらはそれぞれ軍部と総所の執政部で力をつけた。まず手始めにドミニオンにくだらんちよつかいを出すゼレンと他国をきれ〜いに掃除してやった。ベリアルと手を組み大規模な軍事演習をして兵法を学び実践してきたんじゃ。各々が国主と大将に就任した年の事じゃ、シスと同じような事がワシらにも起こった。発言しようとしたホクガンに向かって「属国だった国は大変だな」「歴史ある国々に認めてもらおうと必死だ」「前の国主は何を考えている、未熟者の国主と軍人に毛が生えた程度の若造をここに（国際会議）寄こすとは」「やはり属国だった国の考える事だ」その他モロモロ。そりゃあ酷いやジじゃった。良識ある他の国々やベリアルが間に入らんかったらシスと同じ事を、・・・いや、殺していたかもしれんのだ。」

ぎよぎよぎよ！！

モモコはダイスの酷薄そうな無表情に目を開いて固まる。

「俺達が軍部と執政部に入り、楽になった二代目はかねてから準備していた事を始めた。海を渡る商人達に貿易をしながら上は王宮、下はアンダーグラウドの者たちとコネクションを持つように指示した。結果その者たちと信頼を築いた商人達からありとあらゆる情報が集まり始める。それを有効に使わせてもらった。とても、有効的に、な・・・二日後、奴らは俺達に頭を下げる事になる。それからだ、ターゲットが決まり、実行に移す際の符号を”シスに敬意を拝して”とすることにした。

すぐに消す事も出来るが、やるなら徹底的にだ。口にした者も、その悪習を許す国もまとめて潰す。」

ガツクは冷酷そうに黒い目を光らせた。

・・・。。。

その目をまともに見たモモコは声も出ない。

「あなた達にしては鮮やかな手並みだったわねえ。あの時、何があったのかしら？」

うふふ・・・

とテンレイが無邪気そうに首を傾げて男達を見やる。

さあねえ・・・

さあのう・・・

さあな・・・

男達は当時を思い出したのか一様に楽しそうに嗤った（ちょっとお見せできない程 非道な笑顔です）。

闇の会合のようになってしまった場ではあったがモモコはその後のシスの様子が気になった。げしげしとガツクの膝を叩く。ガツクは懐からABC表を取り出しテーブルに乗せた。

「しす・さ・ん・どう・し・たの」

・・・・・・・・・・・・・・・・

重い様な気遣わしい沈黙が流れる。

「・・・・・・・・わからねえ。ここを出た後ベリアルに向かったのはわかったんだけどな。その後の消息がパツタリ。生きてるんだか死んでるんか。・・・国籍を失くしたシスにゼレンや他国は刺客を放つたことはわかってるけどな。」

ええっ！

「安心せいモモコ。全部返り討ちにあったそうじゃ。シスは顔も性格も悪かったが、腕と運だけはよかったからのう。しぶとく生きて、今頃どこかでワシらを高みの見物でもしとるじゃろ。」

でた。ダイスさんの毒舌が。

（たまに出るから効果があるのかなあ）

他の3人もなんとも言えない顔でダイスを見ている。

「・・・というのが俺達の事情だモモコ。・・・まだ俺達が怖いか？」

ゴホンと咳払いをして気を取り直しながらガツクがモモコに聞いた。モモコは即座に首を横に振った。

ガツク達をしている事は褒められた事ではないかもしれない。でも正攻法では解決できない事もある。

力があれば。知恵があれば。結びつく心があれば。

大事な国が

大事な人達が

傷つかずに済む

それは決して理解できない事ではない。

（あたしはアリだと思う・・・アレがいい事とは思わないし第一怖い・・・けどね）

モモコはにやあと鳴いてガツク達に是と返事をした。

それを聞いたガツク達は大なり小なりホッと息をついた。

「やれやれ・・・おい、まだ何か質問あるか？俺様が特別に応えてやってもいいぜ。」

ホクガンが偉そうにふんぞり返ってモモコを見下ろす。

（ふん！お前なんか教えてもらおう事なんかあるもんか！）

モモコはホクガンに向かってベーツと舌を出そうとしてふともう一つの気がかりを思い出した。

ちよこまかと表の上を移動する。

「べる・に・か・さん・どう・した・の」

「二代目か・・・二代目はな・・・」

ドミニオン自治領国第二代国主 ベルニカ・フェザーランはホクガ  
ンに国主の座を渡した翌年。

静かにその生涯を閉じた。

戦争で両親を亡くし、属國中、ゼレン国に対する抵抗運動で愛した  
男と上の弟を奪われ、下の弟を失くし、苦難に合い続けながら、そ  
れでもなお国土を愛し、国民を愛し、ドミニオンに寄りそい続けた。  
シスに再会する事はずいぞ無かった。

ここを出ていく事はお前にとって死ぬに等しい事でしょう。

どんなにかお前の心は傷つき疲弊するでしょうか・・・

それでも生きなさいシス。

お前が夢見たドミニオン。

それが実現するのを見届けなさい。

生きてさえいれば必ず道は開かれます。

生きなさい、シス。

生き抜いて。

姉の訃報を遠い異国の地で耳にしたシスは国を出てから初めて泣い

た。  
辺りを憚はばらず大声を上げて泣き噎むせんだ。



ちよつと切ない話になってしまいました。

”シスに敬意を・・・”はただの符号だけではなく、ガツク達の祈りにも似た思いがあります。そしてそこにはもちろんベルニカへの思いも。

あと、ここどうなってんの！？的箇所がポコポコありますが気にしない気にしない。

番外編

ツンデレさんと一緒(前書き)

お気に入り登録1000件突破記念の番外編です。  
時候はレセプション3日目の昼、ダイス考案の犬のレース会場にて。

レセプション3日目の昼。

モモコは食い下がるもガツクの眼光に敗北したエルヴィを気の毒そうに見送った。そこへ

「ただいまから軍用犬種による第一レースが始まります……繰り返します……」

場内アナウンスが響き渡る。

モモコはハツとした。

（あつ！これシヨウさんが出るヤツだ！応援しないと！）

ソワソワと辺りを見渡すモモコに、シヨウがレースに出る事を思い出したガツクは

「シヨウを応援したいのか？……まあいいだろう。ホクガンからも呼ばれたしな。（シカトする気だった人）」

俺様発言をして、レースが最もよく見える貴賓席へと向かった。

貴賓席ではホクガンを中心に友好国の代表団が歓談しながらレースを楽しんでいた。

レースの指揮系統を任されているダイスは本部の方に詰めており、ここにはいない。

ホクガンはゼレンが抜け、ガツクの暴走（ホクガンが恐れていた通り……まあガツクの圧倒的な力やドミニオンの迅速的な行動、結束力を他国に充分示されたのでチャラとする）に引き気味の他国の皆さんを和ませ、リラックスさせ、尚且つ楽しませようと珍しく、

本当に珍しく仕事をしていた。

「ガツクではないか。おお、モモコも一緒か。」

ガツクとモモコを目ざとく見つけ、声を掛けたワイズムにモモコと二人きりでレースを観戦しようとしていたガツクは眉間に皺を寄せたが、無視するわけにもいかず仕方なく代表団に近づいた。が、申し訳程度の礼をすると後はモモコにレースを見せようと皆に背を向けた。

.....。

・・・あれ？

モモコは一瞬？となったがハッと我に返り急いでガツクに注意した。

「にゃ！みゃうお！ふぎぎ！（こ、こらガツクさん！何その態度！皆さんに失礼でしょ！）」

自分に向き直り、胸に前足を置いてにゃーにゃーと鼻に皺を寄せて鳴くモモコに口元が緩んだガツク。

だがモモコ言わんとすることがわかると顔を顰め、逡巡してから再度代表団に向き直った。（代表団の皆さんはガツクのただでさえ恐ろしい顔が険悪になったのを見て別にこっちを気にしなくていいです・・・むしろ向かないで下さいと思った）

が、ガツクの不機嫌そうな悪人面を何とも思わないワイズムは

「ガツク、プリシラを覚えておるか？わしらの飼いだ。」

気軽に話しかけると、傍らに座っている輝く白毛のしなやかな肢体

の犬を指し示した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・いいえ。」

ガツクはベリアルルの謁見室でワイズムとコロナに拝謁した事や、はたまた帝国軍施設でベントを完膚なきまでに叩き潰した事まで思い出したが、プリシラの事は全く覚えていなかった。

その時プリシラがいなかったのではない。今のように王の足元に優雅に座っていたり、王とガツクが庭をそぞろ歩きながら議論していた時も王の側につかず離れず一緒に歩いていたのだが・・・・動物や植物にまったく関心のないガツクの眼中に入っていなかった。

「やれやれ・・・・まあよい。猫と犬の間柄ではあるが、モモコモプリシラも賢い奴らじゃて争う事もあるまい。が、気をつけるように。」

今初めて目にしました的に返答したガツクに苦笑しながら王は周囲に注意を促すと、ホクガンが（急いで）提供した話題に混じった。

ガツクはジロリとプリシラを見下ろした。そして、

（モモコに何かしたら・・・・たとえ王の飼い犬であろうと八つ裂きにしてやるからな）

と剣呑な目からプリシラに向けて物騒なメッセージを放った。

接待いー！

という叫び声が遠く離れたテンレイや本部席にいるダイスから聞こえるような気がする。そして

(俺、何でコイツ呼んじまったんだろっ・・・)

魔王を召喚してしまい、すぐ側でソレを目のあたりまにしなければならぬホクガン。

ガツクさん・・・

モモコもプリシラの態度がショウと同じように委縮したのを見て、ガツクに呆れたような視線を向ける。

そしてガツクの腕から抜け出すと、プリシラの前にトンと着地した。ガツクは「！」となったがワイズムに呼ばれ、迷ったが、結局険悪な顔で話に混ざった。

日頃の罰が当たったかのようなホクガンの苦難は続く。

「プリシラさん、初めましてモモコです。」

プリシラはモモコにビクツとして、モモコより遥かに大きい優美な体を縮めながら怖々と、か細いながらも挨拶を返した。

「・・・初めましてモモコさん。プリシラと申します。」

モモコはプリシラの反応にガツクさんが怯えさせたか！どうしよう！と慌てて話しかけた。

「あああの！プリシラさん大丈夫ですから！ガツクさんが言った事なんて気にしな・・・気になるかもしれないけど気にしないで下さい！じゃなくて！私が絶対そんな事させませんから！誓いますから！」

プリシラはモモコのテンパったもの言いに目をパチクリしていたが、やがて上品そうにくすりと笑うと、

「・・・どうか気にしないで、モモコさん。わたくし、人見知りする性質たちで・・・いつもこんな感じですよ」

優しげに目を細めながらモモコを宥めた。

モモコはホツとしつつ話題作りに共通の知り合いの名前を出した。

「プリシラさんはショウウさんを知っていますよね？私いつもお世話になってて・・・アレ？」

モモコはショウウの名前を出した途端、首をすくめたプリシラに？となった。

「・・・あの・・・なんかまずいこと言いました？ショウウさんとお友達・・・じゃない・・・んですか？」

プリシラは俯いた顔を力なく振るとか細い声で

「知ってはいますわ・・・あの方を。でも友人かと言われれば残念ながら・・・わたくし、あの方に嫌われてますから。」

はい！？

モモコは、自分がズバーリプリシラがショウウの好いた相手だと見抜いた時のショウウの慌てぶりを思い出し、目の前の悲嘆にくれる貴婦人のようなプリシラを見た。

「えっと、そんな事ないと思いますよ？えーと、少なくとも嫌われではないと思います。」

それどころかめっちゃくちゃ好かれてますよ？あんなシヨウウさん見た事ないですから！

プリシラはその大きな瞳を潤ませながらモモコにとつとつと語る。

「モモコさんにそう言ってもらえるのは大変嬉しく思いますわ。ですけど・・・あの方とはここドミニオンやベリアルで何度かお会いした事がありますが・・・いつもわたくしを怒鳴りつけるか無視するか、手厳しいお小言を言われるんです・・・嫌われてるんですわ・・・わたくしのような愛玩化されたボルゾイなぞあの方のような軍用犬から見たら卑しくて腹立たしいでしょう。」

（うーん・・・確かに真面目だし厳しいところもあるかもしれないけど、愛玩動物とかにこだわる犬じゃないと思うけどなあ）

プリシラの語るシヨウウはモモコの知っているシヨウウとはいまいち印象が異なる。納得いかないモモコは具体的にどんな態度なのか聞いてみた。

「そうですね・・・去年、ドミニオンを訪れた時の事です。歓迎する・・・様な感じではありませんが言葉だけくれたあの方に挨拶を返した時のことです・・・」

プリシラはイライラしたように顔を顰めて立つシヨウウの前で、震える足をなんとか真っ直ぐにしようとして懸命に力を入れた。シヨウウの朗々とした低い声が言葉を放る。

「遠路はるばる御苦労だったのう。ようこそドミニオンへ。歓迎するぞプリシラよ。」



プリシラはつい俯きになりがちな顔を上げてシヨウの黒い目を勇気を出して見つめ挨拶を返した。

「……ありがとうございます。風光明媚なドミニオンをまた訪れる事が出来て幸いですわ。シヨウ様もお変わりなく……嬉しいです。」

プリシラは最後なんとか怯えずに笑顔になれた。  
ところが。

「ふ、ふん！お前の様な軟弱モノに言われても嬉しくもなんともないわ！わ、わしはな！お前の美しい毛並みや優しげの声を聞けて嬉しいなどとは思っちょらんからな！か、勘違いするんじゃない！」

プリシラはドミニオンを訪れる日にちが決まった時から考えていた挨拶を、全否定されて泣きたくなっただがぐつとこらえて震える声で謝った。

「……申し訳ありません……そうですわね、わたくしのような犬などが……出過ぎた事をしてしまいました。お許し下さいませ。」

そう言って二度とシヨウの事を見なかった。

それツンデレーー！！！！！！

モモコは心の中で絶叫した。

（ちょおおつとおお！！意外や意外！！シヨウさんがツンデレだったなんて！）

「ほ、他には？」

プリシラは思い出すのもつらそうに、一緒に連れ立って行動する時も

「し、仕事なんじゃからな！お前といれて嬉しいなどとは思っちゃらんからな！」

と言われた事や、出された食事が苦手な食材であったため、でも残したら失礼だし・・・と困っていたのを、黙って隣で食事をしていたシヨウがいきなり身を乗り出してそれをパクツと片付けた。それを驚きと感謝の眼差しで見つめるプリシラに

「こ、この魚が食べたかっただけじゃ！お前が困っていたからじゃねえぞ！か、感謝されても嬉しくないんじゃない！」

プリシラがなんにも言っていないのに一気に言うと後はフン！とそっぽをむかれた事を話した。

わかりやすっつ！！！！！

モモコはまた心の中でツッコミをいれた。

(おいおい！おいおいおい！ベタ過ぎだろ！こてこてのツンデレじやんか！ていうかプリシラさんも鈍すぎ！・・・うん、プリシラさんみたいなタイプにはツンデレは逆効果なんだけどなあ・・・でもシヨウさんもわざとじゃないんだろうし・・・厄介だな)

鈍いのはお前だ。

そしてガツクはツンデレどころかさらに上位のヤンデレだ。奴こそ真の厄介。

自分のことは棚に上げ、そして将来、ザ 厄介に対峙する事になるの知らないモモコは心の中でツッコミまくる。  
ごほん。

「プリシラさんはさあ・・・シヨウさんの事どう思ってるの？嫌いな？」

モモコは得意のズバリで聞いてみた。

プリシラは考えるように小首を傾げたが、やがてゆるく首を振った。

「嫌い・・・ではないと思います・・・たぶん苦手なんだと思いますわ。あの方の様なタイプは周りにはいないので・・・どう言えばどう行動すればいいのかいつも困ってしまうんです。」

苦笑するように上品に首を傾げるプリシラにモモコは

(かわい〜い〜！シヨウさんが好きになっちゃうのも無理はないね！)

その後気まずくなってきたのでシヨウの話題から逸れ、ベリアルの事などあれやこれやと話しているうちにプリシラの上品な物腰、その優しく穏やかな人柄（犬柄？）にモモコはプリシラが大好きになった。それと同時に大好きな二匹がこのまま・・・というのもすごく残念な気もしてきた。

明日にはプリシラは帰ってしまうのだ、遠いベリアルへ。

（どうにかなんないかなあ〜）

そんなモモコの耳に、軍用犬による最終レースが行われるアナウンスが聞こえてきた。

と、決勝に残ったシヨウの名も流れてきた。

（あっ！そうだ！）

「ねえ、プリシラさん。」

「なにかしらモモコ。」

プリシラはおっとりと返事をした。（プリシラはどうしても敬称をつけないで欲しいというモモコのお願いに快く承諾した）

「次さあ、シヨウさんが出るレースなんだよ。」

「・・・ええ・・・そうね。」

それはプリシラにも聞こえていたが・・・

「一緒に応援しようよ！シヨウさん絶対喜ぶって！」

プリシラは突然のモモコの提案に驚くと同時に、自分が応援などをして嫌そうに顔を顰めるシヨウが想像でき顔を曇らせた。

「せっかくのお誘いだけれど・・・シヨウ様は喜ばないと思うわ。それどころか迷惑がられると思うの。」

「そんなことぜったいたくない！・・・ああ！！スタートしたあ！ほら早く！」

プリシラはモモコの勢いに引つ張られるように貴賓席の前へと走った。

（その時ガツクは急に最前列に走ったモモコを見て追いかけようとしたのだがそこへエルヴィの邪魔（しつこいけどしているつもりはない）が入り足止めされた。この時ガツクの脳内でエルヴィはしつこくて面倒な奴と認定され、今後無視する事に決定）  
もう犬たちの集団は第一コーナーを廻り、もうこっちへと差しかかるうとしている。

「あー！シヨウさんいたあ！シヨウさんがんばれー！」

シヨウは遠目からもはつきりとわかるピンク色のモモコと隣にいる真っ白な犬を信じられない様に見た。

（モモコめ・・・余計なちょっかいを出しおってからに・・・）

ぐふふ・・・と含み笑いをするモモコが目には浮かぶようだ。

シヨウは一瞬顔を顰めたがすぐにニヤリと笑ってさらに加速した。

「シヨウさん1位とっちゃえー！ほらプリシラさんも声出す！」

「う・・・が、頑張って下さい」

「そんなんじゃ聞こえないよ！もっと大きな声で！」

「頑張つて・・・！」

「まだまだ！あっ！シヨウさんきたあ！早く！」

「………頑張って！」

「もうちょい！ああー！通り過ぎるよー！」

瞬間。

プリシラはシヨウと目があつたような気がした。

「頑張って！シヨウ様！」

プリシラは憤みも忘れて自身が出せるありつたけの声でシヨウに声援を送った。

それを後ろ背に聞いたシヨウは顔を引き締め、最後の追い込みをかけた。

「……やったー！！シヨウさん1位だよ！やったねプリシラさん！」

モモコのはしゃぐ声をぼんやりと聞きながらプリシラは

(シヨウ様と目が合った様な気がしたけれど……気のせいでしょうね。あの方がわたくしなんか見るはずないでしょうし……)

これまたぼんやりと頷いた。

全レースが終了し、夜を待つて舞踏会が始まった。

プリシラは舞踏会会場の庭で優雅な肢体を地面に横たえていた。国王夫妻のお伴をして会場を訪れていたのだが、あまりの人の多さに酔ってしまったのか次第に景色がグルグル廻り出した。ちよつとぐったりしているプリシラを見、気を廻したコロナ妃に「しばらく外でゆっくりしてらっしゃい」と優しい手で頭を軽く撫でられ、申し訳ない気持になりながらもありがたく甘える事にした。プリシラが趣向を凝らした美しい庭で夜風に当たっていると

「プリシラ。」

己の名を呼ぶ低い声が聞こえた。

プリシラが声のした方を見るとシヨウが立っていた。

「シヨウ様。」

シヨウはプリシラがびっくりした様に慌てて姿勢を正すのを見て、己はこれほどまでにプリシラを緊張させていたのかと苦笑した。

（モモコの言った通りじゃのう。プリシラにはすまん事をした。）

”シヨウさん！好きな相手の前だから照れちゃうのはわかるけどプリシラさんはデリケートなんだからね！プリシラさん、シヨウさんから嫌われてるって思っているよ！男ならそんな思いさせちゃダメじゃん！今日中に誤解を解いてきてよ！明日には帰っちゃうんだからね！絶対だよ！”

自分よりずっと小さなピンクの猫が難しい顔をして説教する姿は微笑ましいモノがあったが、モモコの言う事は日頃自分が反省していた事だったので、薄々わかつてはいたのだがやはり衝撃的であった。シヨウは緊張気味に自分を見るプリシラを見てため息をついた。それもまたプリシラを追いこんでいる事に気づくと

「あ、のなあプリシラ。」

なるべく緊張させないように自分は緊張しながら話しかける。  
一方のプリシラは硬直した。

( やっぱり・・・やっぱり迷惑だったんだわ・・・どうしよう・・・  
シヨウ様に謝らなければ。 )

二匹は同時に声を発した。

「お前の事を・・・嫌っとなるんではない。」

「申し訳ありません！」

ん？ え？

二匹はきょとんと互いの顔を見ていたが、シヨウはいち早く立ち直り咳払いすると、もう一度プリシラに向けた。

「ワシはの・・・お前さんの事を嫌っとなるんではない・・・むしろそのう・・・す、好き・・・なんじゃ。」

ドガガッ！！！・・・ガラガラガラ・・・



その時、シヨウの声にかぶさるように（不吉な）何かの破壊音が聞こえた。

「……シヨウ様、今の音聞こえまして？」

何かあったのかしらと、破壊音がした方を優美な首を伸ばして見やるプリシラ。

そしてどうやらなんでもないようだとなると、再びシヨウに向き直った。

もちろんシヨウには聞こえだし、気にはなったが今はそれどころではない。

「あの……シヨウ様？……先程の言葉が本当なら、わたくしの声援は迷惑ではなかったのですか？」

プリシラが上目づかいにシヨウを見る。

ドキンドキンドキン……

シヨウの胸がうるさいほど高鳴る。

「……迷惑ではない……気恥ずかしいがの……それでそのう……さっき言った言葉じゃが。」

プリシラは恥ずかしそうに、だが嬉しそうに顔を綻ばして頷いた。

「……嬉しいです……。」

な、何イ！？ほ、本当かプリシラ！

信じられないと言った面持ちでプリシラを凝視したシヨウは……

「嫌われてない事がわかって本当に嬉しいです……これからはお友達として仲良くなれますね。」

極度の緊張の反動からか地面にしゃがむほど脱力した。

生涯一度の勇気をだしての告白だったが、あいにくその時、何かを破壊するもの凄い音（間違いなくアレ）が辺りに響き渡り、肝心の「好き」の部分はプリシラには全然聞こえなかった。

「……あの……実はですねシヨウ様。……シヨウ様の最後の方の言葉、聞こえなかったのですけど……もう一度お聞かせ願います？」

シヨウはなんとか地面にめり込みそうになる体を起こした。

「いや……もうええんじゃ、たいした事では……たいした事は……ハア……ないからのう。」

その背中にはひどい哀愁がただよっていたとかいないとか。

翌朝、事の次第を聞きに来たモモコに力なくシヨウは報告した。問題の部分は省いた。

モモコの責任……ではないし、今さら言っても……なので、が、

「そっかあ。そうだよな、まずは友達からだよね。誤解が解けてよかったね、シヨウさん。」

満面の笑みで素直に喜ぶモモコにシヨウは

(・・・フフ。そうじゃのう、それだけでも良しとするか)

少しだけ気を取り直した。

「ほれ、ガツク大将が呼んどるぞ。早う行け。」

「うん。待たねシヨウさん！」

「ああ。」

モモコはガツクに駆けより、シヨウと話し込んでいたのが気に食わないのか不機嫌そうに顔を顰める大男をちよつと考え込んで見上げた。

(ガツクさんがツンデレだったらどんなんだろ?・・・)

あまりにリアルに想像してしまい、それに恐怖した。

(この顔と雰囲気でツンデレだったら怖すぎだよ!ガツクさんがツンデレじゃなくてよかった・・・って、まああたしにするんじゃないんだろうけど)

では、誰にするんだろう?そう考えた時点でガツクが誰かにツンデ

しする場面が浮かび、昨夜の嫌な感じが再び沸いてきたモモコはやめやめ！と自分にストップをかけ、

「どうした？・・・シヨウに何か言われたのか？」

不穏な空気を纏いだしたガツクにもストップをかけた。

心配するなモモコ。

奴はツンデレじゃない。

それよりも も～～と厄介なヤンデレだ。

## 番外編

### ツンデレさんと一緒（後書き）

初の番外編いかがでしたでしょうか？

いやあ〜こんな稚拙な小説をお気に入り登録して下さい皆様へ、

また、見に来て下さった方へのほんの感謝の気持ちです。

次回から急展開を迎える『偏屈さんと一緒』にご期待下さい！

・・・次回はもうちょい早く出せるようにします・・・

溢れんばかりの感謝をこの場にて！

## 5 - 1 一躍時の猫？です

レセプションも無事に終わり、ガツクとモモコはいつもと変わらぬ朝を迎えた。

「ガツクさん、仕事の前にお見せしたい物が。」

カインはガツクとモモコに朝の挨拶をすると、デスクについたガツクに数冊の雑誌と新聞紙数紙を置いた。

怪訝な面持でガツクは付箋が貼られた箇所を開いた。

そしてその記事を見た途端眉根に皺が寄った。

興味がわいたモモコもガツクの脇から覗きこむ。

そこには

【前代未聞！？ピンクの守護天使現る！！】

【軍部の秘密兵器か？世にも珍しいピンクの猫！】

【軍部のニューキャクター？新星隊士モモコちゃん！】

モモコがガツクと戦った試合の写真と共にふざけてるのか褒めてるのかな記事が載っていた。

ちなみに、ばつちりモモコは写っているがガツクは体半分切れていたり、その強面が目立たないようにレイアウトとされている。何とかガツクの恐ろしさを和らげようとする編集者達の苦勞の跡が窺えて、笑える・・・いや惚ばれる。

モモコはギョツとした。

（な、なにこれ！？いつの間に・・・あ、そっか、そう言えばド

ミニオンの記者や他の国の記者もいたっけ)

その時に撮られたものであろう。

スカッと忘れていたがこの世界では自分はどうかやら希少中の希少、ピンクの猫なのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ガツクは変わらず眉間に皺をよせながら記事を見ていたが、

「ガツクさん、レセプション中だったので報告を控えていたのですが、武道会があったその日からモモコちゃん取材したいという依頼が何件かありまして・・・・今日までに17社が返答待ちの状態です。」

続けて言うカインの方へ視線を移すとつまらなさそうに言った。

「くだらん。モモコは見せモノではない。全部断れ。」

「わかりました。」

カインは雑誌や新聞紙を片付けようとデスクの方へ手を伸ばしたが、  
・  
・

(うーん。このあたしの顔変だなア・・・マジこんな顔してたのか。ていうかガツクさんとの体格差ハンパないよー。猫っていうよりヘンな生き物みたい。)

その雑誌や新聞紙に乗り、ウロウロしながら自分の姿を検討するモモコの姿にその手も止まる。

「なんだ、モモコはこんなものに興味があるのか？」

ガツクも若干呆れたようにモモコに声を掛ける。

モモコはむっとして顔を上げた。

(なにさー 興味あるに決まってるじゃん。ちよつとふざけてる感があるけど・・・雑誌や新聞に自分が(猫とはいえ)載るなんて初めてだもん。)

ガツクはモモコの可愛く睨む顔を目を細めて見ていたが

「そんなに気に入ったのなら切りぬいて保存しておくが・・・。」  
(ええっ!?!いい、いいよ!そんなにナルじゃないし!)

照れたように慌てるモモコにガツクがからかう様に指で顎を掬った。そんな、仕事なんだよんな事は家に帰ってやれる一人と一匹に引き気味のカインはデスクのモノを片付けながら、ガツクさんが上機嫌の今だ!とばかりに、

「実はですねガツクさんもう一つ耳に入れたい事がありましたモ、モモコちゃんを譲ってほしいと言う命知らずな申し入れが何件かありました。」

タイミングを見計らってノンプレスで(ちよつと途中ナンかな言葉があったが)、この申し入れがあった日からカインの胃を痛めていた事柄を言い終えた。

言い切った・・・

やった・・・俺はやったぞ!頑張った俺!

よーし!今日を無事生き残れたらあの秘蔵のワインを一気飲みし



てやる！

まるでエベレスト登頂に成功したかのように自分を褒め称えるカイン。

しかし生還を誓っている場合ではない。すぐさま怒気をふんだんに含んだ威圧に備えて身構えた。

「……ほう？……で？その者たちの詳細なリストは作ってあるんだらうな？」

やっぱりキター。

口頭や書面で普通に断る。ではなく、申し入れの人物を抹消してなかった事にするのがガツク流断る。（注：モモコ限定）

カインは「後顧の憂いは取っておかんとな」などと物騒な事を呟く上官に心臓麻痺を起さない様すっかりと気合いを入れると、

「もちろん、リストは作って……あ、あの、ありますが……その……いきなりの強硬手段はいかなものかと。」

ガツクの補佐官として「たぶん言うだらうな」とリストを準備した上で、軍部の一隊士としてドミニオンの一国民として、そして常識があるばかりに受難を受け続けている人達代表として一応止めてみた。

「モモコを俺から奪おうとする奴らだぞ？モモコを欲しいと思った

時点で俺に狙われる事がわかっているはずだ。」

それアンタだけだから！他の人は普通思わないから！的言葉を返したガツクに、もう駄目だと早々と代表の座を降りたカインはモモコに、「この歩くヤンデレ大災害を止めて！」とお願い光線を送った。モモコはカインが報告した事に驚いたが、続くガツクの超攻撃的な発言を真っ向から浴びているカインと目が合うと内心の動揺を抑えてガツクを止めにかかった。

「みゃーお！みゃうお！（そこまでやる必要ないでしょ！普通に断つて！」

「うーん。困ったわねえ・・・」

「そうですね・・・こればかりは・・・」

ここはテンレイの執務室。

テンレイのデスクにはカインがガツクのデスクにのせたモノと同じモノがあった。

指先でそれらのページを捲る。いつ撮られたかわからないドレス姿のモモコの写真もあった。そして、

「テンレイさん、結果はわかっているても一応コクサ大将に打診してみてはいかがでしょう。奇跡が起こるかもしれませんし。」

「そうねえ・・・」

テンレイのデスクには娯楽誌の他にも数枚の書類が置かれていた。それらはモモコをチャリティーパーティーへの招待したい旨の打診や

養護施設からモモコに慰問して欲しいとかの要望書であった。

この類の慈善活動にテンレイに異はない。モモコだってないだろう。しかし問題は。

「ガツクが承諾・・・はするでしょうけど・・・フウ」

とうとう部下にまで「ヤンデレ」扱いされている、あの無駄にデカイ大男がモモコ一匹を外に出すわけがない。何が何でもモモコに同行、そして誰にもモモコを触らせず、モモコが愛想をふりまいたらそれだけである悪人面を不機嫌そうに顰めるに違いない。

そうなつたらもうおしまいだ。

すぐさまチャリティーパーティーは脅迫会場にかわり慰問は引き付け者を続出、最悪施設は閉鎖するかもしれない。ついでに軍部にも総所にも不名誉極まりない噂が流れるだろう。

軍部や総所はまだガツクとモモコ耐性があるが一般国民にはあまりない、というかそもそもガツクへの耐性そのものがない。

ガツクは総所からあまり出歩かないし、一般国民と親しくした事も記憶に残らないぐらいない。

ガツクはドミニオンを愛してはいるが、ドミニオンに気を使おうと思つた事はない。

他国から絶対的軍力で守り抜く事は出来るし、命を掛ける事も出来るが、国民に応えたり、外交で愛想をふりまいたり出来ない。しようと思つた事すらない。

なので先の武道会でも国民の称賛を一切無視したり、接待そのものもどうでもいい態度で流す。

ガツクが情熱を傾けるのは国と軍部と・・・モモコのみ。

それがわかっているだけにテンレイの悩みも深いのだ。

「たとえばガツクを引き離すことに成功したとしても、一回が限度でしょうし、こういうモノは一度引き受けると今度は是非うちにもと

「いつものなのよね・・・」

二度目はない事を言っても、向こうのは引き受けたのにどうしてこちらの駄目なのかと抗議されるのは想像に難くない。ならばガツクももれなく付いてきますよ、と言っていていいですよと返されても困るのだ。ガツクの恐ろしさを間近で体験した事がない業界の方達にとって絶対「いい」状態にならないからだ。

「癪だけとお兄様達に相談してみようかしら。ガツクの扱いにはお兄様とダイスの方が遥かに慣れてるし、いい知恵でも浮かぶかもしれないわ。」

モモコに諭され（猫に説教される37歳独身大将というのもなんか・・・今更か）ガツク流断るを諦めたガツクはやや仏頂面でホクガンの執務室にいた。

時刻は互いの仕事が付いた午後10時。

「今度はなんだ。」

ガツクは一人掛け様のソファに座りモモコを膝に降ろしてから斜めに座るホクガンを見た。

「何だよ、用がなけりゃ呼んだら駄目なのか。」

「じゃあ帰るかモモコ。」

「わー！嘘嘘！あるあるある！あるぞ！ガツク！」

（またバカやって・・・）

モモコは本気で帰ろうとするガツクを、腕を掴んで必死に止めるホクガンを呆れて見た。

「早速というか嫌な事は早めに済ましちまおうと言う事なのかゼレンからの謝罪申し込みが今日届いた。んで詳しい日程なんかを詰めてようってんでな。」

ガツクを元の椅子に座らせる事が出来たホクガンは、息をつきながら今回の招集理由を述べた。

「ゼレンにしては早いのだ。」

ダイスは怪訝そうにホクガンを見る。

「ゼレンにもまともなのが中枢にいるらしくてな、これ以上の失態をして俺達を敵に廻さないよう国王を説得したらしいぜ。迅速に行動して誠意とやらを示そうって事らしい。どこまで本気かはしれてるけどな。」

フンとホクガンは仰々しいゼレンからの手紙とゼレンの情勢を探らせていた商人達からの報告書をテーブルに投げた。

「まるで21年前の再現の様ね。」

「役者が違いすぎるがな。だが・・・同じ状況だな。」

テンレイがため息をつき、ホクガンが苦笑した。

「話はわかった。会見の場はどこだ。」

「中立国がいいんじゃないかねえかと思ってる・・・俺達は復讐者じゃねえ。シスと二代目の事があっても国の代表として誇りを持たねえとな・・・で、グランモアなんかどうだ。」

「賭博の国じゃねえか！」

ダイスが驚いて前のめりになる。

「そこがいいんじゃないかよ」 ケケケ。いかにもあいつ等をバカにしてんだろ？」

キリツとした顔から人の悪そうな顔に変わり、意地悪そうに笑うホクガン。何が国の代表だ。

（思いつ切り私情入ってんじゃない！最初からやる気だろアンタ！）

モモコは「どお〜やって追い詰めてやるのかなあ〜」などと既に計画を練り始めている、上機嫌が逆に怖ろしいホクガンから心持離れる様にガツクの膝を移動した。

「モモコ、グランモアという国は」

「あ、モモコは留守番な。」

グランモア国について説明を始めたガツクの言葉を、勇気があるというか我が道を行くホクガンは遮った。

留守番な・・・留守番な・・・留守番な・・・

ガツクの脳にこれらの言葉が到達するまでたつぷり1分。げげげ。

いつもの気配を察したモモコは急いでテーブルに飛び移った。そして予想通りというか、ガツクはおもむろにホクガンの襟首を掴んでソファから持ち上げると。

「よく聞こえなかったんだがなホクガン。・・・モモコは留守番

だと言ったか？まさかな。」

ホクガンはぎゅうぎゅうとマジで首を絞めてくる親友の腕を、ギブギブと叩きながらも国主として頑張る。

「連れて行けるわけねえだろ！どんなヤバい事があるかわからねえんだぞ！……言っとくがモモコは耐えられねえぞ。国同士が本気のぶつかり合いをする場だ。何時間も部屋に詰めて話し合いをするんだ。気配に敏感な動物でしかも子供のモモコにそんな苦行を強いるつもりなのか？お前は。」

ホクガンが、本気でモモコの事を心配して言っているのがわからないガツクではない。

徐々に腕の力も緩んだ。

脳裏にはあの忌まわしい21年前と6年前が蘇る。

罵声や怒号が飛び交う場内。突き刺さる敵意。己らを蔑む驕った目。ガツクは自身が立ちあがった時テーブルに飛び移って今はこちらを心配そうに見上げるモモコを見下ろした。

ホクガンは続ける。

「会見に出ないでもだ、部屋に残ったモモコに何かがあるかわからねえ。ゼレンは俺らへの嫌がらせのためにモモコを殺しちまうかもしれないねえんだぞ？お前だってそんな緊迫した場所で会見に集中できるか？モモコの事になったら抑えが利かねえお前が。それよかは最初からドミニオンに残っていた方がいい。」

ガツクはホクガンを離すとモモコを抱き上げた。

「みーゆ……ふみ？（がつくさん……大丈夫？）」

ガツクはしばらくモモコを見つめていたが、ため息をつく

「モモコ・・・俺が数日いなくても平気か？」

.....。

(頼むーモモコーへ・い・きって言ってくれ！)

(行くつつうたらどう対処しようかのう・・・いやモモコは聞き分けのええ子じゃそんな事は・・・ないとも言い切れんが・・・)(  
ダイスの脳裏にモモコが発端となったあーんな事やこーんな事が浮かんだ)

(もうひと押しよ！お願いモモコ！)

三人の願いは.....

「レイレス見てみるよコレ。お前、動物好きだろ。」

明るすぎる金髪の青年が、ボサボサの黒髪のいかにも今起きた  
的青年に呼びかけた。

青年は大きく伸びをすると、長身を折り曲げて床に散らばっている  
服の中から適当に一枚選ぶとダルそうにそれを着た。



「……動物は好きだけど。」

そう言いながら金髪の青年に近づく。

「あんだ、どんだけ寝てると思ってんの？20時間は経ってるわよ。」

金髪の青年の前に座っていた、腰まである真っ直ぐな茶色の髪をした女性が呆れたようにレイレスと呼ばれた青年を見た。

「昨日完徹した。予定もない。」

レイレスは茶髪の女性、ティカに腫れぼったい目を向けた。

そして「限度つてモンがあるでしょ！」と言うティカを無視して金髪の青年、シャッターの手元を覗き込んだ。

「【新種か！？ピンクの猫に業界騒然！！】だってさ。ちょっと白が勝ってるけどこれはピンクだよね。」

「……ああそうだな……ん？これコクサ大将じゃないか？」

「そうよ。このモモコつて猫、コクサ大将の飼い猫なの。軍校じゃ、すごい話題よ。」

「ティカ、夜中にアイスを食べると太るぞ。」

台所と思わしき所から、銀髪の青年が後ろ向きなのにもかかわらず、今まさにアイスを掬ったスプーンを口元に持っていてこうとしていたティカに釘を刺した。

ギクツとティカの手が止まる。ティカは、

「ぶーにぶに。」

「ぶーよぶよ。」

ニヤニヤ笑うシャッターとレイレスを睨みつけると開き直ってこう言った。

「いいもーん。明日余分に走るから。問題ない問題ない。」

レイレスはそう言ってアイスをぱくつき始めたティカを呆れて見た後、

「クーザも知ってたか？」

手を拭きながら部屋に入ってきたクーザに話しかけた。

「いいや。今聞いたところだ。」

そう言っつてシャッターの手元を覗き込む。

「・・・前代未聞、か。確かにこの猫とコクサ大将じゃ前代未聞だな。」

ククツと苦笑らしきものを口元に登らせて、クーザはモモコの凜々しくも可愛らしい顔をじつと見た。

「噂じゃ、片時も離さない程可愛がっているらしいわよ。あのコクサ大将が。意外よね。」

「へえー！そんなに？想像つかないな！」

シャッターが思わず声を上げる。

「体に悪そうな想像だよな。・・・なんか悪寒がする。」

何度か見かけた事があるガツクの怖ろしい姿に、ピンクの猫が抱っこされている図を思い浮かべクーザを除く一同は、ははは……と力なく笑った。

ガツクの話から自然に武道会の話へと移った一同を余所に、クーザはまだモモコの写真を見ていた。時折、その口元から言葉が漏れる。

「コクサ大将か……軍部最強の男……相手にとって不足はない……」

そして雑誌を開いたまま、書類が乱雑に積まれた書棚をこそごと何かを捜し始めた。

「何してんの？」

シャッターが肩越しにクーザを見やる。

クーザは作業を続けながら応えた。

「ちよつとな……お前ら暇だつて言つてただろ？お、あつた。」

「……言つただけ。」

訝しそうにレイレスもクーザに注目した。

クーザは総所のスケジュール表をテーブルにのせながら3人を順番に見渡した。

「総所のスケジュール表じゃない。こんなのどうやって手に入れたの？門外不出でしょ？」

「企業秘密だ。……さてと、並みのスリルじゃ味わえない事に挑戦してみないか？面白いゲームを思いついたんだ。」

そう言つてモモコとガツクが並んで写っている写真をコツコツと指で叩いた。

「この猫を誘拐してみようぜ。ククツ、我らが偉大な大先輩はどう出るかな？」

確かに並みのスリルは味わえないであろう……  
だが決して「面白いゲーム」にはならない。  
あのガツクが相手では……

ここに、やがて新しい総所を背負つて立つ事になる、若きドミニオン自治領国第4代国主クーザ・ショットと仲間達の「ありとあらゆる力と知恵と命を掛けたモモコを誘拐しようと思つた時点でタダでは済まないゲーム」が始まる。

「知らないつて怖いよな。」

これは後にこの事件が收拾し、クーザが呟いた一言。

5 - 1 一躍時の猫？です（後書き）

早めにアップ！とかほざいてごめんなさい。

どうか土下座でお許し下さい。

新章突入で新キャラ登場です。

彼らがどんなひどい目に合うかは皆さんの想像通りかと・・・

## 5 - 2 やめておいた方がいいですよ

「モモコ・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ガツクは身の内にいつも滾<sup>たぎ</sup>っている想いを込めてモモコの目を見つめた。

別れの朝。

周囲には見送る方々、出立する方々が何かが起こったらどうしよう！と、固唾をのんでガツクとモモコを（ホクガンとダイス、テンレイを除いて）遠巻きに見守った。

しかし。

「・・・ではな。任せたぞ、テンレイ。」

ガツクは意外にもあっさりそう言うのとテンレイにモモコを預け、すぐに踵を返すと風に黒いコートをはためかせながら自身の戦闘用バイク「レイマド」に（全長2メートルを超す化け物マシン。オプシヨン（アッチ系）多機能につき紹介は後ほど）跨った。

「にゃおーん！ふみ！（お仕事頑張っつてねー！お土産もよろしくね！）」

ガツクの血がにじみ出るような我慢に我慢を重ねた別れの挨拶とは対照的に、出張で会えなくて淋しいけどたった3日間だしね とあくまで普通に見送るモモコ。

モモコの鳴き声を聞いたガツクはゴーグルを着けようとした手を一瞬止めたが、グツと奥歯を噛み締めて堪え、ゴーグルを装着すると

革手袋に包まれた両手をグリップに置いた。

(やせ我慢してんなあ・・・おいおい、手、なんか震えてね？とど早く出ねえとヤベえなこりゃ)

ホクガンは注意深くガツクを観察し、ガツクが思い直さないうちにと慌てて出立の合図をした。

「じゃあな！留守の間にゼレンが何を仕掛けてくるかわからねえ！気合入れろよ！」

ホクガンの奨励交じりの挨拶を皮切りにガツクは先頭を切ってレイマドを発進させた。

続いて雷桜隊、車に乗ったホクガン、霧藤隊が続き、殿しんがりを戦闘用バイク「ウィンドニク」に乗ったダイスが務めた。

どう見ても今から戦争しに行く武装集団にしか見えない一行を、いつてらっしゃゝいとのおんきに見送ったモモコは

(初仕事だよ！緊張するなあ！でも頑張るぞ！)

今日から始まるみっちり詰まったスケジュールを思っただけ気合を入れた。

「モモコ、忙しい3日間になると思っただけで最後にするから頑張って頂戴ね。」

「ふみみ！みやお！（わかってるともさ！任しといてよ！）」  
「うふふ。お利口さんね〜モモコは。」

元気に応えるモモコを、これからしばらく独占できるテンレイは満面の笑みで見下ろして、最初の慰問先である施設へと向かった。

昨夜。

モモコがあっさり承諾した留守番の件がすむと、ドーンと落ち込むガツクを尻目にテンレイが「モモコに依頼が来てるの」と件のチャリティーや慰問の事を話した。

（マジー！？あたしにそんな事務まるのかなあ？ちよっとした役割じゃないか？でも遣り甲斐ありそう・・・お愛想だけだったらあたしにもできそうだし）

びっくりしたモモコだったが初仕事の予感にわくわくした。が、

「駄目だ。」

ガツクの冷えた声にそのワクワク感もストップする。

「何だよ。モモコはやる気よ？」

テンレイがやっぱ反対したなこのヤロウといった顔でガツクに抗議した。

ガツクがモモコを見下ろすと確かに「なんで？」と怪訝そうに自分を見ている。

「外に出て事故や事件に巻き込まれたらどうする？俺以外がお前を守り切れるとは到底言えんな。」



いや、そりゃあアンタ以上に強くは・・・だけど。  
3人と一匹が半目でガツクを見やる（比べるのが人より人外に近いガツクでは・・・）。

「モモコもやりたがってるし、暇だろうから」とか「あれだけ注目を浴びては仕方ない」だの言われても頑として首を縦に振らないガツクだったが、モモコがABC表で「やりたいやりたい」と訴え、  
「これで

最後にするから」というテンレイにととうと渋々、仕方なさそーに渋々頷くガツクが見られた。

その後、グランモア国に親書を送り、快く承諾の返事をもらったホクガンは、電話の向こうで青筋を立てているだろうゼレン国王に慇懃に会見場所などを伝えた。

そしてモモコがいない分身軽になった3人は、いまだに細かくちよつかいを出してくるゼレンに太つとい釘を何本か刺そうとあんな事やこんな事を画策し始めた。

ちよつと内容が憚れる事を話しあっているホクガンの執務室とは対照的に、テンレイの執務室では依頼があつた団体や施設などを慎重にリストアップ、パーティーに着ていくドレスの（もちろんモモコの）コーディネートや スケジュールを調整したりと健全に順調に事を運んだ。

（準備に忙しくてあんまりガツクさんとゆっくりできなかつたな。  
・・・淋しいけど3日間の辛抱だし・・・よーし！頑張つて仕事して 胸を張つてガツクさんを迎えるぞ！）

慌ただしかつたここ数日を思い起こし、別れの時の切なそうに自分

を見るガツクの顔を思い出したモモコは、何だかわからない胸の疼きを感じた。そしてその疼きが何なのかわからないまま、ガツクが恋しくなったモモコだったが、この初仕事で成果を上げてガツクに褒めてもらおうと健気にも淋しい気持に蓋をした。

「ほらモモコ、着いたわよ。くれぐれも無理はしないようにね？気分が悪くなったりしたら遠慮しないで言うのよ。」

「ぶみ！（だいじょーぶ！）」

モモコはテンレイに声を掛けられ慰問先に着いた事を知ると、意識をガツクから仕事の事へと切り替えた。

「我らがターゲットのお出ました。」

クーザはモモコとテンレイがにこやかに手を振りながら施設内に入るのを、双眼鏡で見ながら呟いた。

「生で見ると本当に小っちゃいよね〜！まだほんの子猫だよ〜！  
・それにしてもすごい人出だね。」

シャッターがニコニコしながら、一目モモコを見ようと群がる人々を見渡しながら言った。

「今、一番話題の主だからな。」

レイレスは関心なさそうに眠たげに相槌を打つ。

「警備の数は想定内ってトコね。・・・ねえ、本当にやるの？」

ティカが警備の数を確認してから少し不安そうにクーザを見た。

あんなに小さな猫に乱暴めいた事をしていいのだろうか。ちよつとした事でも死んでしまいそうだ。

クーザはティカを見下ろして

「大丈夫。（全然大丈夫じゃない）たかが猫だろ？（この時点でアウト）人間を誘拐するわけじゃなし、（人間の方がよっぽどマシ）リスクだって相当低い。（低いどころかリスクしか見当たらない羽目に）猫とは云え丁重に持て成すし、それにすぐに返してやるんだから。ゲームだよゲーム。（死のゲーム）この国最強の男がどう出るか見たくないか？（クーザの予想を遥かに上回り恐怖のどん底に叩き落とすガツクが見られます）」

ニヤリと笑った。

ティカはクーザの自信に溢れる顔を見ていたが、かすかな不安を拭いきれない。（ここで引き返していれば・・・）だが、ガツクに挑戦してみたい気持ちがないわけでもなかった。

「・・・そうよね。面白くなりそうだもの。（絶対にならない）」

「そうそう。もしかしたらさあコクサ大将と仲のいい国主やラス大將も出てくるかもよ？（出る出る。全然出る。ホクガン達どこるか軍部全体出る。特に雷桜隊は今後が懸かっているので必死）」

シャッターがそんな事になったらどうしよう！？とワクワクしながら興奮気味にはしゃぐと

「そんな事あるわけないだろ？（あるんだなこれが）猫がいなくなつたぐらいで。（ソレがいけないだけで鬼と化します）」

「まあな。でも出てきたらもつと面白くなりそうだ（混乱の極致である意味面白いだろう）。」

レイレスが呆れながら言い、クーザが笑いながらシャッターに賛成すると4人はそこを去った。

クーザ達は完全にガツクの事を読み違えているが無理もない事であろう。

誰があんなにモモコに執心していると思うだろうか。

国の中心人物の一人で、軍部最強であり、威圧感バリバリの37才の伝説の男が。

555

全てを賭けてもいいほど深い想いを寄せているなど。

モモコに危機（というかドミニオンの危機になりそうな）が訪れるのを夢にも思わないガツク達のその頃。

「予想はしてたけどよ。」

椅子に座り肘かけに手を置いて指を組んだガツクはその手に額を置いていた。

その体制はドミニオンを出た時から続いていた。

ここは国主専用船内。

ガツク達はバイクを格納庫に収めた後、ラウンジへと向かった。

「3日間これかい。」

モモコに別れを告げた途端、普段より数倍凶悪な顔になったガツクに声を掛ける勇気のある者はいない。

道中も皆、無言で隊列を進め、船内に入った後はガツク達のいるラウンジに近づく者は皆無。

ただっ広いラウンジは3人以外は無人であった。

「ま、この状態の方がゼレンには圧力をかけやすいからいいんじゃないか。おいガツク、ゼレンは構わねえがグランモアの女王にや、もうちつと何とかしろよ。場所貸してもらったんだからな。」

ホクガンは前に座っているガツクに注意を促した。

ガツクは少し顔を上げると暗い目でホクガンを見返し、

「女王などどうでもいい。向こうが俺を見なければいいだろう。」

と、己の態度を変えるつもりがない事を示唆した。

「いやいや今のお前は見なければいいだろうってレベルじゃないから見ちゃうから。見えちゃうから。」

ガツクの苛立ちと怒をふんだんに含み、普段の数倍威力を増した威圧感で周囲の者に絶対無視させない程ダダもれ。

ガツクはホクガンの言葉にフンと返してまた同じ体制に戻った。ホクガンはテンレイの依頼事がないでもモモコは置いていくつもりで、このガツクの態度もわかっていいるものではあったが、こうまで酷いとモモコを置いてきた事を後悔しそうになった。ため息をつくホクガンとダイス。不機嫌さが膨張してきて手がつけられなくなりそうなガツク。任務とは云え、泣きそうな心境の隊士達を乗せた船は順調に航路を進んだ。

そんなこんなでモモコとテンレイにとっては忙しいながらも充実した、ダイスとホクガンにとってはゼレンをじわじわと嬲りながらも必死にガツクを制御し、胃の痛い思いをしながらの日々が過ぎた。日目。

モモコは最後の慰問先である施設から帰途につく車の中にいた。

「御苦労さまだったわね、モモコ。疲れたでしょう？帰ったらマッサージしてあげましょうね。」

「ふみふみー。ぶにゃあお。うにゃ。（テンレイさんこそお疲れ様ですー。テンレイさんのマッサージ楽しみだなあ。超気持ちいいんだよね！）」

そんな和やかな会話を交わしていると道の途中で車が止まった。

「どうしたの？」

テンレイが怪訝そうに前を見やる。

「警官が。何かあったのでしょうか。」

警備を兼ねた運転手は前方を塞ぐ感じで止めてある停止用のガードの横から制服を着た男が2人、こちらに来るのを見て言った。

警官の一人は運転手に窓を下げる様に合図すると申し訳なさそうに言った。

「すみません。実は強盗事件が先程起こりまして車で市内を逃走中です。それで今通行中の全車両を調べているのですが・・・捜査にご協力願います。」

テンレイがコツコツと叩く音にそこを見るともう一人の警官が窓を下げる様にジェスチャーしていた。  
テンレイは頷くと

「改めてもらいましょう。」

あっさり了承した。

モモコはマスクをした警官達がライトを持ったまま車中を照らすのを見ながら

（風邪でも流行ってんのかな？こんな緊急事態とかあったらおいそれと休めないんだろうなあ。お疲れさんですほんと）

心の中で彼らを労わった。

それが自身を攫おうとしているクーザとレイレスだとは知らず。

5 - 2 やめておいた方がいいですよ(後書き)

人ってね、百聞は一見にしかず、なんですよね。  
”どんな””一見”になるんでしょうかね。



5 - 3 これでもまだまだ冷静な方です

「・・・ンド!・・・ス・・・ウンド!・・・ミス・ラウンド!」

テンレイは自分の名をしつこく呼ぶ声に重い瞼をゆっくりと開けた。

ここは・・・ハツ。

ぼんやりとした脳と目の焦点が合うとテンレイはいきなり覚醒した。

「・・・モモコ・・・モモコは!?!」

慌てて車内を見渡すが・・・モモコの姿はない。

「・・・辺りを捜しましたが・・・警官達・・・偽者でしょうが・・・  
・奴らに連れ去られた模様です。」

運転手は目が覚めた後、車中にモモコがない事に気が付き、テンレイが無事なのを確認するとモモコを捜しに車を出したが・・・

「・・・襲われてから1時間は経ってるわ・・・当然でしょうね。」

テンレイはニセ警官達が窓から腕を伸ばし、おそらく麻酔銃だろう、チクツと痛みがした途端意識がなくなったのを思い出した。

油断した事が口惜しくて唇を噛み締める。  
しかし、こうしている時間も惜しい。テンレイはすぐ意識を切り替えると運転手に指示を出した。

「モモコはもうこの辺りにはいないでしょう。捜すにしても一端総

所へ帰るしかないわ。出来る限り急いで頂戴。」  
「わかりました。」

猛スピードで総所に向かう途中運転手は

「なんてこと・・・ガツクに伝えなければ・・・あのバカ者どもを八つ裂きにしてやるわ・・・」

身も凍るテンレイの呟きを聞いた・・・。

『国主、ミス・ラウンドから緊急の連絡です。お繋ぎしますか?』

後もう少しでドミニオンに着くという中、急なテンレイからの通信にガツク達は顔を見合わせた。

「・・・おう、繋げ。」

「・・・。。。」

「なんかあつたんじゃろうなあ。」

ガツクが無言で通信用ディスプレイの起動スイッチを入れ、ディスプレイが眉根に皺をよせながら画面を見つめる。

総所の留守を任せる事が出来るくらい優秀なテンレイが、余程の事が無い限り緊急通信を入れてくるはずがない。しかももう着く事はわかってはいるはず。

テンレイに繋がる間、部屋は嫌な緊張感が漂い始めた。

「お兄様。」

待つのが短いのか長かったのか、画面に顔を強張らせたテンレイが現れた。

「テンレイ……どうしたんだ？」

ホクガンはテンレイの顔を見た途端、硬い声で問う。

テンレイはホクガンの前にガツクが、横にダイスが座っているのを見、ズバリ要件から入った。

!!!

「よく聞いて頂戴……今から1時間前、モモコが誘拐されたわ。」

衝撃がガツクの胸を抉る。ホクガンとダイスは息を飲んでからガツクを注視した。

” じゃおーん！ふみ！”

モモコ……

ガツクの脳裏にまるで、いつてらっしゃーいとも言っているような可愛らしい鳴き声と、笑うように目を細めるモモコの顔が浮かん

だ。

オノレ

瞬間、ホクガン達はガツクから爆発するような熱波を感じた。が、それは起きた時と同じように瞬く間に収束する。

ガツクが鉄の意志で凄まじい怒りを抑え込んだのだ。怒りは判断を狂わせる。モモコ最優先で取り戻すには常に冷静でいなくてはならない。

しかし、殺意までは抑えきれないのかソレはちろちろと漏れ出る。

（おーおー・・・怖えーなあ、暴れるかと思っただぜ）

（やっと帰ってこれたのにの〜モモコも災難じゃがガツクも不憫な奴じゃ）

ホクガンとダイスは一瞬身構えたが、ガツクが持ち直すと座り直した。

ガツクは意識して体から力を抜き、黒い目を瞑ってからゆっくり開けた。

「・・・続ける。」

早くもどす黒い気配を纏いながらも完璧に抑制した声でテンレイを促した。

ホクガンは操舵室に連絡を入れ、テンレイとのやりとりを船内全域に流すよう指示した。

テンレイは襲われた際の経緯を簡単に説明、犯人達の特徴と印象などを語った。

『後どれくらいで入港出来そう?』

「もう陸地は見えてる。おい操舵室、入港はいつだ?」

ホクガンはテンレイに答えながら操舵室に通信を入れる。

『全速力で入港の準備をしています・・・後30分で着岸かと。』

「よし、いい返事だ。俺らも準備すつか。テンレイ、出来るだけ急いで総所に向かう。」

『待つて・・・帰ってくる必要はないわ。』

テンレイは腰を浮かしたホクガン達を片手を上げて制する。

「なぜだ。」

ガツクがテンレイを睨みつける。射殺されそうだ。

『怖い顔ねえ。別に意地を張っている理由わけではないのよ。これを見て。』

そして一枚の写真を取り出してガツク達に見せる。そこには可愛らしいピンクのネックレスが写っていた。濃いピンクと薄いピンクのチェーンが交差する先には小粒のピンクダイヤモンドが煌めいている。

『これは一見本物に見えるけど模造品よ。モモコには本物を贈りた

「かつたんだけど加工が難しくて。これ発信機なの。」

ガツクは写真をよく見てテンレイに視線を移すと、思い当たった事を口に出した。

「なるほどな。モモコが逃げた際に使用か。」

「ええ。……本来ならね。」

テンレイが頷きながらガツクに応える。

モモコは大人しい猫だが、思いがけない事できなり逃げ出したりする前科があるので（モモコなりに理由はあるのだが）会場や施設で何らかの拍子にモモコが逃げ、見失った時の保険としてモモコには知られないように（賢いモモコは見つけられたくないと思っただら外してしまうだろう）あくまでアクセサリとして着けさせた。

「不幸中の幸い、とでも言うのかしら。この発信機の端末をリンドウ君に持たせて港に待機させて置いたから、受け取って潜伏先に直行して頂戴。お兄様やダイスの分も持たせてあるわ。」

テンレイは冷ややかとも取れる表情でホクガン達に言い、

「残留組の雷桜隊と霧藤隊を待機させてあるけど。シヨウ達軍用犬もね。目標地点へ向かわせる？」

犯人達の潜伏先をこの国最強の二部隊で包囲するか尋ねた。相変わらず仕事のできる女じやのう。さすがじゃ。ダイスは愛しい女の顔を惚れ惚れと見つめた。

「場所は。」

ガツクは立ち上がりると、そんなダイスとは正反対にテンレイに背を向けながら尋ねるともう用はないとばかりにドアに向かって歩き出した。

『北の廃船置き場よ。』

「任意の者だけでいい、来たい奴らだけ向かわせる。」

ガツクはドアをくぐりながら短く言つと格納庫へと姿を消した。指示を出すためテンレイも通信を切る。

「俺らの留守を狙うつつう案はいいが対象がなあ。」

ホクガンは腕を組みながら、やれやれという風に首を振った。

「モモコの希少さに惹かれたか。見た目だけだったら高く売れそうだからな。」

「ワシらにケンカ売るたあ、ええ度胸じゃのう。」

ダイスも格納庫に向かうため、ガツクが開けっぱなしのドアまで歩みながら言つ。

「ま、な。俺らつつつかその線だとガツクに絞られてる感じだがな。」

「……この国に、いや他国にもじゃがそんな骨のある奴がおるんかい。」

ダイスは出入り口で立ち止まり何やら思案しているホクガンを振り返った。

最近も圧倒的な力の差で己の強さを知らしめたばかりである。

「いるんだろ？モモコの重要性を理解していないのがな。・・・金になると思ったか、テロの一種か、はたまた・・・」

ホクガンはドアを潜り抜け、ダイスと共に格納庫に向かいながら思わせぶりに言葉を切った。

「・・・ガツクの恐ろしさを知った上で挑んどるっちゅうのか？ますます正気を疑うの。」

ダイスは顎に手を這わせながら首を振る。

「現場にいつてみねえと何ともな。急ごうぜ。」

一方、一足先に格納庫に向かったガツクは、既にレイマドがエンジンがかかった状態でスタンバイしているのを見て、レイマドの側に立つカインに軽く頷いた。

「ガツクさん、レイマドに「ブレード」を装着しておきましたか・・・使用する事が無い事を祈っていますよ。」

カインが難しい顔でガツクに言うが・・・

「・・・情けなど必要か？ついでに死体袋も用意しておけ。」

無表情で淡々とガツクに返されたため息をこぼす事となる。



「俺は後から隊士達と共に合流します。もう残留組は現場に？」

「任意の者だけな。・・・聞け！これは軍務ではない！俺個人の問題だ！お前達がついて来る事はないんだぞ！」

ガツクはゴーグルを装着すると、カインとその後ろでガヤガヤと出る準備をしている雷桜や霧藤の隊士達に向けて隅々までいきわたる大声で言う。

静まりかえる格納庫。

「そ〜だぜえ？にゃんこを迎えに行くだけつつう事だからな、要はな。」

「それだけで済めばいいんじゃないのう。」

と、そのどデカイ扉からガツクと同じように手袋を嵌め、ゴーグルを着けたホクガンとダイスが言いながら現れた。

そして、エンジンが掛けてあるウィンドニクの前にダイスが、後ろにホクガンが乗り込む。

「やっぱり行くんですか。」

ここに来るだろうと確信し、本当に現れた上司にデュスカが呆れたように言い、

「あなたは国主なんですけどね、自由過ぎませんか。」

レキオスが冷たい声でホクガンの行く気満々のニヤけ顔を見ながら言う。

「誰が暴走したガツクを止めるんだよ？ダイス一人に出来ると思うのか？」

「無理。」

ダイスが即答する。

「ガツクさん、俺達全員任務だなんて思ってないです。」

雷桜と霧藤の代表のように（生贄）ダイナンが前に出て、

「なんか自然に集まって・・・モモコちゃんが心配なんです。決して邪魔はしないので同行させて下さい。」

青ざめながらガツクに引き攣った笑顔なのか泣きそうなのか判別しづらい顔で言う。

これから起こる大惨事を考えれば「決死の覚悟で止めます」が正しいのだが、見間違いのない本物の殺意を全身に纏うガツクにそこまですう勇氣はない。

それにガツクが暴れる（決定事項）のを一般国民に知られないようにするのも大事だし、何よりモモコとガツクのセットがなければなんか落ち着かない。（強烈すぎる刷り込み？は完璧かと思われる）

『15分後に着岸です。』

船内放送が格納庫に流れる。

カインが指示していたのか、タラップまでの通路には他の隊士たちのバイクは綺麗にどかされ、いつガツクが出てもいい様になる。

ガツクはスタンドを倒すと

「勝手にしろ。」

とだけ言い、グリップを回した。

ドオルウン！

腹に重く轟くレイマドのエンジン音が辺りに響きまくる。

「カイン、タラップを降ろせ。」

ドルル・・・まるで威嚇するかのように唸る、全体が黒色のレイマドに跨るガツクは突っ立っているカインに命じる。  
・・・まだ船は岸へとついていない。本来ならきちんと着岸してから降ろすべきだ。

カインはギョツとしたが諦めたように操舵室に連絡を入れるとタラップのロックを外し、降ろすスイッチを押した。

ゴウン・・・ゴウン・・・ゴウン・・・

黄色い回転灯が廻り、ゆっくりとタラップが開き始めた。

ドランドルンドルウン！！！！

「おいおい・・・まさか。」  
「そのまさかなんじやる。」

どんどんアクセルを回すガツクに嫌な予感がするホクガンとダイス。  
・・・そしてガツクに關しての嫌な予感が高確率で当たる。  
周囲の者が高まる緊張感に息を飲む中ガツクはレイマドを発進させた。

ギャリリリイ！！！！

ガツクはほとんど垂直のタラップを一気に駆け上がると、細い隙間をレイマドを真横に倒して外へと飛び出した。  
？然とした空気が流れる中、

「続くぞ。」

「おう。あんま離されんなよ。」

暢気なホクガンの言葉にダイスが苦笑して応える。

「無茶ばかり言いおつて。テメエこそ落ちるなよ。」

ダイスは思い切りアクセルを回すと先程より開けたタラップをガツクと同じように上り、タラップの口から勢いよく飛んだ。

リンドウはもう数十メートル前まで来ている国主専用船が岸に近づ

くのを、若干震えながら待っていた。

手にはテンレイから渡された発信機の端末を持っている。

テンレイが中々帰ってこない事にやきもきしながら待っていた所へ、襲撃されたという報を受けて仰天したが、続くモモコが誘拐された事には血の気が引きすぎて立ちくらみをした。

そして運が悪いと言うかテンレイから「直接ガツクに渡すように」と端末を届けるという任が降りた。

普段、外見も内面も怖ろしいガツクに怯えるあまり避けるようにして生活してきたのに、ここにきて今までののが比較にならない程激怒しているであろうガツクに対面しなければならぬとは。

リンドウが犯人達に向けて呪詛交じりの恨み事呟いた時である。

突然ゴウンゴウンという音を立ててトラップが開き始めた。

(あ、あれ?・・・お、おかしいな。まだ岸にはついていないのに・・・不具合かな?)

どんなにトラップが長くてもまだまだ距離がある。

リンドウが訝しげに船を見つめていると・・・開ききっていないトラップから一台の巨大なバイクが突然飛び出してきた。バイクは真横になった態勢のまま宙を高らかに舞うと真っ直ぐリンドウ目掛けて落ちてくる。

「ヒイイ!」

潰される!

リンドウが恐怖に固まったすぐ横にズドン!!とガツクの黒い戦闘バイクが着地した。

ブワアア・・・



ホクガンが煩わしげにリンドウを振り返る。

「テンレイさんからです。これをどうぞ。」

リンドウは後ろにあった何かからさつとカバーを取り去る。と現れたのは群青色の巨大な戦闘用バイク「ジ・トリック」であった。

「ヒョオ！まさかジ・トリックまであるたあなあ。さすがテンレイ、気が利くぜ。しかしよくあんな短時間で運べたな。」

「苦労しましたが間に合ってよかったです。呼びとめた僕が言うのもなんですがお早く。」

ホクガンは特別にカスタムチューンした愛車に大喜びで乗り込むと、リンドウに親指を立てて先にガツクを追いかけたダイスに続いた。

ああ・・・ようやく・・・ようやく終わっ・・・

大任（リンドウにとっては）を果たしたリンドウが今度こそホツとした時、

ブオオンブオン！ブオオン！

いつの間にか着岸していた船から次々と雷桜や霧藤のマシンが吐き出され、轟音を響かせながらリンドウのすぐ横を通ってガツク達を追いかけ始めた。

その中にはリンドウに向けて片手で謝る仕草をするカインもいた。すぐに見えなくなったが。

「……だから軍部は嫌いなんだ。」

隊士達がいなくなった後、バサバサになった髪と排気ガスで煤まみれになったリンドウはスタッフ達に同情の眼差しを注がれながらポツリと呟いた。

「おい、いたか！」

「ダメ！そつちは！」

「こつちも駄目だ！もう少し範囲を広げて捜そう！」

「モモコちゃん。おいしいご飯だよ。出ておいで。」

夕闇がヒタヒタと夜を先導する頃、だだっ広い廃船置き場では4人の若人が何かを必死になって捜していた。

一人の青年がかつては栄華を極めていただろう何十メートルもある廃船にスルスルと器用によじ登ると、

「マジかよ！こん中からどうやってあのネコを見つけりゃいいんだ！！チクシヨウ！！」

辺り一帯を見渡して絶望の叫びを上げた。

そこには青年から見える何キロ先まで小ささまざまな船の死体達が、朽ちたその体を夕闇に真っ赤に染め上げ所狭しと並んでいた。

「どうにかして早く見つけないと……くそ！……甘く見ていた。」

「



叫び声を上げた青年とは別の、銀の髪をした青年が焦りを含んだ声で呟いた。

彼らはクーザ、レイレス、シャッター、ティカ。そして・・・

しかしそこには、彼らに連れ去られたはずのピンクの猫の姿が・・・  
・・・なかった。

5 - 3      これでもまだまだ冷静な方です（後書き）

ホクガンとダイスはそうは見えませんが相当頭にきてます。  
モモコは最早彼らの大事な仲間なので。

そして唸りを上げながらクーザ達に迫る恐怖の大王。

## 5 - 4 メロメロパンチです

モモコは何処に消えたのか。

それを知るためには、クーザ達にガツクという名の惨劇が確実に迫っている1時間半ほど前まで、話を遡さかのぼらなければならない。

「思ったより緩かったな。」

レイレスは車を降り、大きめのボストンバッグを慎重に持ちながら、隣を歩くクーザに話しかけた。

「ああ。護衛も一人しかいなかったし。恐らくラウンド管理官自身が相当な武道の使い手だからだろう。下手なSPより強いからな。」

2人は人気のない路地裏を傍目には悠々と、だが実は早足でシャッターとティカが待つ部屋へと急いでいる。

(・・・今度は歩いて移動してる?・・・チャンスだ!)

すうつうつ・・・

モモコは思い切り息を吸い込んで

「じゃああー!じゃあああー!!! (助けてー!こいつら誘拐犯ですよー!!!)」

自身が出せる最大音量で助けを呼んでみた。

2人は急にモモコが鳴いたのでギョツとしたが、モモコにとっては残念な事に誰にも気づかれなかった。

もとより人気があまりないという事もあるが、夕暮れ時、行きかう人々それぞれ忙しい時間帯である。若い男2人を気にかける者はなかった。

しかしモモコは果敢に鳴き続ける。

「なああつおー！にゃあああ！（出せー出せー！こっから出せよな！）

」

”そして大声で鳴いて周りに知らせるんだ”

真剣になってモモコに対処法を施すあの夜の黒猫の姿が浮かぶ。

（黒猫さん、まさか本当に捕まるなんて思わなかったよ。何とかして隙を見つけないきゃな。）

「・・・急いだ方がよさそうだ。」

「だな。なんで急に鳴き始めたんだ？腹でも空いたか。」

「ネコの生態はよく知らないが・・・そうかもしれないな。大丈夫だぞ。部屋には食べ物がたくさんあるからな。」

クーザは優しくバックの中のモモコに話しかけると、レイレスと共に小走りで路地裏を進んだ。

（ちっがーう！出せて言ってるの！っーかあたしを帰せ！ニセ警官！）

モモコは激しくツッコミながら襲われた時の事を思い起こした。

モモコが警官達に心の中で労わっていると、突然、車内を照らしていた警官がテンレイの首筋に何かを刺したのが見えた。あっ！と思ったときには遅く、テンレイが座席に崩れ落ちる。モモコは慌てて護衛兼運転手の方を見るが、そちらも既にもう一人の警官によって意識を失った後だった。

「逃がすなよ。」

「わかつてる。」

えっ！？えっ！？

モモコは突然の事にパニック状態になり、2人を交互に見つめる事ができない。

ぐえっ！

呆然としているとやにわに首が苦しくなった。

運転席側の警官がモモコの首筋を掴んで持ち上げたのだ。慎重にモモコを引き寄せ、首を掴んでいる手を緩めると両前足を掴みもう片手をモモコの体に廻すと逃げないようにしっかりと固めた。

(く、苦しい！は、離せ！離せー！！テンレイさん！)

目の前の車には座席に横たわるテンレイが見える。

大丈夫だろうか。し、死んではいけないよね！テンレイさん！

ここまできて漸くモモコは暴れ出した。懸命に手足を動かすが大きな警官の手はビクともしない。

「クーザ。」

「ああ。」

モモコは抵抗空しく空のボストンバッグに詰められてしまう。

それからも暴れまくったが、丈夫なバッグらしく、小さなモモコは全く歯が立たなかった。

ハアハア・・・

ちよつと息切れしてきた。

(・・・ダメだ、全然ビクともしない。・・・どうしようどうしよう・・・これ何なの？あたし誘拐されたんだよね！？・・・この人達何者なんだ！？・・・うつつ・・・どうしよう！ガツクさん！もうガツクさんのトコに戻れないの！？・・・そんなのヤダ！絶対嫌！！！)

モモコはガツクの力強い顔を思い浮かべ、胸が締め付けられるように苦しくなった。と同時に黒猫が言った言葉を思い出す。

”・・・あつという間に攫われ、どこの誰とも知らない奴に・・・”

パニックに恐怖が加わりモモコから力を奪う。

しかし無理矢理抑えつけた。

(泣きそうになってる場合じゃない！今はどうすれば逃げられるか考えないと。ええと、ええと・・・この人達いつたい誰だ？警官・・・じゃなさそう。)

時折声が聞こえる。

モモコはじつとして辺りに神経を集中した。  
低く響く音、これはエンジン音だ。

（車で移動！？ヤバいじゃん！）

あばばば！

ガツク達からどんどん引き離される、待ったなしの展開に再びパニックになりかけたが、

（ふうふう・・・落ち着け落ち着け。パニックでも何にもならないぞ。大丈夫大丈夫、絶対逃げだすチャンスは来る。大丈夫。）

モモコはまるで自分に暗示を掛ける様に、繰り返し大丈夫と唱え続けた。

タンタンタン・・・

軽快な何かを踏む音が聞こえ、モモコは回想から目覚めた。合わせてモモコが入ったバッグも上下に揺れる。

（階段？・・・一回・・・二回・・・三回・・・四回止まった。四階か。）

コン、コン、コンコン、コン。

合図のようなノックの音がした後、しばらくするとガチャという音がして

「おかえり〜」

と、いささか脳天気な男の声がした。

対する男2人は無言で部屋に入ると、モモコが入ったバッグをそつと何かの上に置く。

「首尾の方は？」

女の声だ。

（女の人もある？・・・こ、これはチャンスきた？）

モモコは自分の容姿が人に、特に女性の皆さんにウケがいい事を知っている。

この三日間、パーティで施設でモモコは自分が小首を傾げるだけで皆さんが「可愛いー！！」と黄色い声を上げるのに調子に乗って、様々なお愛想のスキルを磨きに磨いた。

そしてどんな渋面の爺さんでもメロメロにしまっただけのお愛想の魂を手に入れてしまったのだ。（意味不明）

フツ・・・愛想のマイスターと呼べ！（ますます意味不明）

モモコはバックの隅に体を寄せた。

さっきまでは口が開いたらすぐさま飛び出し、逃走しようと思っ



いたのだが予想より人数が多いようだ。まだ他にもいるかもしれない。そして向こうも自分が逃げないように何らかの逃走予防策を取っているに違いない。それに闇雲に逃げ道を捜してもいずれ捕まり、さらに逃走を警戒されてしまっただろう。

（よおーし！あたしのお愛想のスキルでお前達にメロメロパンチだからな！（懐かしいな おい）足腰立たなくしてやつから！あたしと会った事を後悔するがいい！（何者だお前は）

何だかわからない、そして誤使用の言葉でモモコは自分を奮い立たせた。

そう思っているうちにバックのファスナーを開く音がジツとして、空間が横に切り裂かれる様にして口が開いた。

（あたしは女優よ！・・・ガンバレ モモコ・・・）

モモコはなるべく怯える様にオドオドした潤んだ瞳（演技です）で覗き込んだ男女4人の顔を見上げた。ちよつとした間があつたが次の瞬間

「可愛いつ！」

「噂に違たがわない可愛さだな。」

「しっ！あんまり大声出さないの！怯えてるじゃない。」

「疲れたか？ハラ減ったか？エサ食うか？」

これは・・・イける！イけるな！

モモコは次に手を差し出したレイレスの手をクンクン嗅ぐ仕草をして「にゃあ」と鳴いてみた。もちろん小首傾げーの上目づかいーのはオプシヨン装備で。

「うっ！」

レイレスはバツクの中に入れた手をそのままに、もう片方の手で顔を覆った。

「どうした？」

クーザが怪訝そうに聞く。

「・・・ヤベえぞコイツ。・・・可愛すぎだ。」（レイレスの【ガツクの殺すゾ　メーター】はクーザの次に高くなった）

クーザはネコ相手に顔を赤らめるレイレスに呆れ顔をした。

「早く出してあげた方がいいんじゃないか？喉だって乾いているだろう。」

「そ、そうだな。」

レイレスは深呼吸すると、両手をバツクの中にそっと入れモモコを抱き上げようとした。

（ふふふ・・・）

モモコの目がキラーンと光る。

モモコはレイレスの手にすりすり身と身を寄せ自分から彼の手に収まった。

「くっ！コイツ。」（ガツク2号か？いやテンレイを入れると3号か）

レイレスはドキドキしながら漸くモモコを出すと、そっとテーブルの上に置いた。  
外に出されたモモコは辺りを見渡してここが普通の部屋だという事を知る。

初めての場所にきて戸惑っているかのような演技を続けながら目はしっかりと部屋の間取りを頭に入れ、入り口や窓の位置を確認した。

「すぐご飯にするからな。」

クーザがキッチンと思われる場所に引つ込み、途端レイレスを押しつけたシャッターとティカがモモコの前を陣取った。

「可愛いね〜見てよこのちっちゃい手！」

「ほんと！コクサ大将が可愛がるわけよね！」

（ん？ガツクさん？）

モモコはティカからガツクの名が出た事に思わず反応しそうになったが、堪えてモモコの前足を優しく握ったり、首筋をこちょこちょこしたりしてくる2人に気持ちよさそうに目を細めたり、甘えたりを繰り返して愛想を振りまいた。2人がニコニコと楽しそうにしていると・・・

「おいどけ。」

2人は紐がついた棒を手に持ったレイレスにどかさされた。

ぶーぶー文句を言う2人を全面無視でレイレスは、ソレをモモコの目の前でぶらんとしてみせた。

（これは・・・猫用のオモチャ・・・ハア・・・これで遊んでみせ

なきやならないんだろうな)

ため息をつきたいモモコだったが我慢我慢と言い聞かせ、キラキラとした瞳でその紐付き棒を見上げた。

そしてレイレスが横に振るたびに子猫がよくやる様にピョンピョン飛びはねめつちや興奮しているぜ！もつとやっつけてくれだぜ！という風に見える様に頑張った。

楽しそうなレイレスと、さっきよりももっと可愛い仕草で懸命に紐を追いかけるモモコ。

それを見たシャッターやティカは妙な対抗意識をレイレスに出し、負けじと猫用オモチャを持ってきてモモコと遊ぼうとレイレスを突き飛ばす。

「ちよつ！お前ら！」

突き飛ばされたレイレスだが、すぐに体を起こすとシャッターの頭をスリッパでスパーン！と小気味いい音をさせて叩いた。<sup>はた</sup>

「いったーい！何すんだよ！」

「うるせえ！お前が俺を突き飛ばしたんじゃねえか！」

「僕だけじゃないよ！それにレイが悪いんだろ！モモコちゃんを独り占めしてさ！」

「モモコちゃん！ほら！このネズミのオモチャ最高よ！野蛮な男達はほつといてあたしと遊ぼうね！」

「ティカ！」

「ティカ！テメエ！」

う、うるさい……

モモコは3人が、オモチャを取り合う子供のように自分を巡ってケ

ン力を始めるのを呆れ顔で見ていた。

（この人達結構若そうだなあ・・・クーザ・・・だっけ、あの銀髪の人。あの人が一番落ち着いていてリーダーっぽい。それでもすごく若い。あたしと同じぐらいか・・・皆 学生？もしかして高校生ぐらいじゃないか！？）

呆れながらも注意深く観察していたモモコは犯人達（ギヤイギヤイ騒ぐ様からは到底見えないが）が以外と若い事に気が付いた。

（この人達何の目的であたしを攫ったんだろう？単に珍しいからかな？一応希少種らしいからな・・・でもんな粘着質な感じはしない・・・わからん！お前達が何を考えているかわからん！）

モモコは考えるのをやめ、キヨロキヨロと周りを見渡し逃げ道はないか探った。

窓は開いているがモモコからは高い位置にあり、3人に気付かれずに近づくのは難しい。

（向こうはキッチンだったな）

モモコがキッチンのほうを見ると、キッチンに続くドアとは別のドアが少し開いていた。

（おっ！）

モモコはまだ言い合いをしている3人をチラッと見、気づかれないようにソロリ・・・と歩き出した。

（気付くなよ〜気づくなよ〜）

まるで呪いのように口の中で呟きながらモモコがもう少しでドアに到達しようとした瞬間、

「ちよつと待て。」

レイレスに捕まった。

（ちつくしょー！！あともうちよつとだったのにい！）

舌打ちでもしたいモモコだったが、ここはスキルの見せ所。思い切り甘えモードでレイレスを見上げる。

イメージ的には周りにピンクのハートが飛びかってる感じ。

”あなたの事が好きで好きでたまらないの。甘えてもいい？”

というありもしない幻聴まで聞こえてきそうだ。

モモコのこの甘えスキルを使えばガツクを0・2秒で倒せるのだが、モモコにガツクに対して使うという意識はない。

このスキルはあくまで他人用だ。（というか、普段のモモコの何気ない仕草でもヤラれているガツクにこれ以上は・・・）

レイレスは自分の大きな手に収まった桃色の小さな猫が濡れた様にキラキラした瞳で己を見上げた途端。

「コイツカウ。」

壊れた。（ガツク3号が生まれた瞬間である）

（なにいい！！やりすぎたか！しかも狙ってた女の人と違うのが釣れたし！）

突然の飼う宣言に驚き慌てるモモコ。じたばたと暴れるが前足はガツチリレイレスに捕らわれている。

顔を赤らめたままモモコの小さな顔に、何をしようとするのか顔をどンドン近付けるレイレス。

その言葉と異様な雰囲気ドン引きしたシャッターとティカがズザアツと親友から遠ざかる。（レイレ

スの「ガツクの殺すゾメーター」はその針をぶっちぎりクーザを遥かに抜いてトップに立った）

「いい加減にしろ・・・」

その時クーザの冷凍庫さながらの声がいきなりレイレスの耳元で炸裂し、驚いたレイレスは思わずワアツ！とモモコを放り出してしま

う。

ポオーーン。

モモコは慌てる4人の頭上を大きく弧を描いて宙に浮き・・・

ストン。

まるで吸い込まれるように開いていた窓から落ちた。

！！！！！！

狭い窓に大柄な4人が一斉に集まり、当然というか空間がないので互いにぶつかり弾き飛ばされる。

「痛<sup>いた</sup>た・・・」

「いつてえ・・・」

呻く仲間に構わず態勢を直したクーザは窓から下を覗いてみた。祈る様にピンク色の塊を捜している・・・

いた！

モモコは下の部屋の住人が張った日よけテントに上手く落ち、モゾと動いている最中であつた。

「ネコは無事だ！下のテントにいる！シャッターは部屋に残ってネコを見てくれ！レイ！ティカ！行くぞ！」

モモコは落ちた衝撃でクラクラしていたが、頭を振ってしつかりしろ！と己を奮い立たせ、せっかくのチャンスが無駄にしないようにテントの端に立つ。

そこからちよつど伸びている隣の部屋の手摺に飛び移りそこからまた足場を捜し・・・と焦りながらも無事地面に飛び降りた。

ホツと息をつく間もなくバタバタする足音が聞こえてきてモモコは彼らが追いかけてきたのがわかると、大急ぎで取りあえず前の道をひたすら駆けた。

「あつち！廃船置き場の方だよ！真っ直ぐ！」

背後からあの金髪の青年の声がして、モモコは走りながら後ろを振



り返ってみた。

すると、思った通りクーザ、レイレス、ティカが追いかけてきている。

モモコは真っ直ぐ走らずジグザグに走り、新旧の船がたくさんある場所に着くとその小さな体の特性を充分生かす、モモコが大得意のかくれんぼを始めた。

モモコがいったん隠れてしまえばあのガツクとて容易には見つけれない。

まして今日初めて会ったクーザ達に見つけられるはずはなく、モモコは様子を見ながらクーザ達からどんどん遠ざかった。

やがて彼らの声がかすかに聞こえるまでになった場所まで来ると、これからどうするか考える。

( どうやって帰ろうかなあ・・・今日ガツクさん帰ってくるはずだけど・・・もう着いたかな・・・出迎えたかったな。 )

モモコだけに向ける微笑みでガツクが自分に手を差し出す光景が浮かぶ。

( ……うっうっう・・・どうしてこんな事になっちゃったんだろ？・・・ガツクさーん )

泣きたい気持ちでガツクの名を心で呼ぶモモコ。

モモコがようやくよく落ち着く頃、太陽はその姿をほんのわずか覗かせている頃だった。

( ……こうしていても仕方ない。この場所から出なきゃ。 )

モモコがよいしょと腰を上げた時である。

「こいつぁ……！へっへっへっ！ついてるぜえ！」

ぎゃっ！

モモコは突如襲ってきた苦しさに声にならない声を上げた。

喘ぎながら自分の首を鷲掴みしている何者かを見ようとす。

そこには汚い不潔そうなナリをした大柄な男がギラギラと欲にまみれた目で自分を見ていた。

モモコは反射的に足を突っ張りもがくが、すぐに首をぎゅっと絞められ息苦しさと骨が折れそうな痛みに大人しくなる。

それをニヤニヤと見ていた男の背後から

「ホータイどうした？何か見つけたか？……すげえ！いいモン見つけたなあ！こりゃあ金になりそうだぜ！」

男の相棒だろうか、男より随分小柄な男がはしゃいだ声を上げる。

「コイツ、あの大将のネコだ。どうしてこんな場所にいるのか知らんが拾ったもん勝ちだよなあ。」

「その通り。何でも世界に一匹しかいないらしいぜ。コレクター達に売り飛ばせば目ん玉飛び出る値で買ってくれるはずだ。」

あ……ぐうう……くるしい……やめ……

大金が入る予感にホータイの手に力が入る。

モモコは息が苦しくなり、ホータイの手に弱々しく爪を立てどうに

かして緩めようとした。

「おいおいホータイ、あんまり絞めると死んじまうぜ。金のなる木がダメになっちまう。」

「おお、危ねえ危ねえ。」

その時、遠くから人の声が聞こえてきた。

男達が耳を澄ませているとどうやらこの猫を捜しているらしい。

2人は顔を見合わせてニヤリとほくそ笑むとコソコソとその場から立ち去り始めた。

「おい、ちょっと待て。」

小柄な男がホータイを呼び止める。

「なんだよヤクシー。早くズラかろうぜ。」

ホータイがイライラした様にヤクシーを振りかえる。

ヤクシーはモモコの首からキラリと光る物に気づき、

「ネコのくせにいいモン持つてるじゃねえか。本物かな？」

高価そうな宝石だと知ると慎重にモモコから外した。

(ああ・・・テンレイさんから貰った物なのに・・・か・・・え・・・)

モモコは先程よりは緩んだがいまだに首を絞めるホータイに意識が朦朧として、霞む目でヤクシーが首飾りを値踏みするのを見ていた。

「けっ！」

ヤクシーはいきなり首飾りを地面に投げつけ足で踏みつぶした。

「ど、どうしたんだヤクシー。もったいねえじゃねえか。」

突然の行為にホータイが驚き声を上げる。

ヤクシーは忌々しそうに首飾りを睨むと、ホータイを促してここから立ち去り始めた。

「あれはよお。発信機だ。」

「えっ！」

「これだけ高価な猫だ、逃げた時や連れ去られた時のためにだろうぜ。宝石は模造品だがそれなりのモンだった。もったいねえが足がつくよりやししょうがねえ。」

「知らねえでもってたら危ない所だったなあ。」

「おつよ。さっ早く船に戻るぞ。」

そ・・・んな・・・アレ・・・

モモコはテンレイがすごく似合うわよと言って着けてくれた首飾りを見た。

首飾りは今、宝石部分が無残にも潰されて機械らしきものがむき出しになり、土にまみれて転がっている。

ガ・・・ツ・・・ク・・・さ・・・ん

モモコはその光景を最後にガツクの名を呼びながら意識を失った。

廃船置き場の端の方、波打ち際に一匹の黒猫が日照を楽しんでいるとココソソした2人組の男が現れた。

黒猫が警戒して2人を観察していると、2人は隠していたのだろうか黒い船を入江の奥の方から引っ張り出してきた。

（ははあ、あいつら船の部品を盗みに来たやつらだな。）

ドミニオンには総所が管理運営しているいくつかの廃船置き場があるが、中でもここ北の廃船置き場は一番広く、また捨てられる船も種類が多い。中にはまだまだ使える部品を抱えている船や珍しい装飾をしている船も多い。だが捨てられているという理由で勝手に持って言っている事にはならず、キチンと総所に「この船のどんな部品が欲しい」と願い出て査定してもらってから買うというシステムになっていた。

だが悪い奴らもいるもので、忍び込んで盗み、裏のルートで部品やらを捌く輩も多かった。

黒猫は興味を失くしてその場から立ち去ろうとした時、信じられない事を聞く。

「しかし今日はツイテナあ。まさかあの猫が手に入るとはなあ。」

「ああ。大将のネコだからまず盗むのは無理だろうと言われていたからな。」

「これで俺達も有名人になっちまうな。」

「ヒヒヒ、箔がつくつてもんよ。」

(なっ・・・大将の猫だつて！モモコの事じゃないか！)

黒猫は踵を返すと目を凝らしてモモコを捜した。すると看板の上に立つ大男の手にしつかり捕まえられたピンクの猫がいた。動かない所を見ると意識がないようだ。黒猫はいいよのない怒りを覚える。

(あんな小さな子供になんて事を・・・だから人間は嫌いだ！)

怒りに燃える黒猫は男達の船にそつと近づき、隙を見て船に乗り込んだ。

幸いにも部品を運ぶ船は大きめに作られており、隠れられる箇所もたくさんある。猫一匹が入り込んだとしてもすぐには気づかれそうにはない。

(モモコ・・・僕がきつと助け出すからね・・・それにしてもモモコのあの怖ろしい飼い主は何をしてるんだ？モモコの事を大事にしていると思ったのに・・・もしかしてモモコは捨てられたのか？そんな風には見えなかつたけど・・・まあいい、もしモモコが捨てられたのなら僕がずつと側にいよう。)

黒猫は、今はモモコを助けるのが一番だ。後の事はモモコに話を聞いてからと自分の疑問はいったん棚上げする事にした。

クーザ達の単なるゲームは様々な色を帯び、ますます混迷の様子を見せ始めてきた。

モモコと男達、黒猫を乗せた船が波を蹴立ててその場を離れた時

北の廃船置き場にガツクが到着した。

5 - 4 メロメロパンチです（後書き）

モモコ大ピンチです。

クーザ達も大大大ピンチです。

お次は皆さんお待ちかね、ガツクのターン。



5 - 5 暴走の始まりです

！

北の廃船置き場にもうすぐ着く頃、端末からモモコの位置を示す点滅が消えた。

ガツクはレイマドの速度を落とさず背後のダイスとホクガンを振りかえる。

ガツクと目が合った2人は首を振って応えた。

（あいつ等からも消えたか・・・発信機の故障ではないとしたら犯人達に気付かれた可能性が高い。・・・急がねば）

ガツクは更にレイマドを駆った。

600

「・・・日が暮れたな。」

ポツツとレイレスが零す。

廃船置き場は太陽が完全に沈み、気温も急激に下がり始めた。

「・・・ますます見つけ辛くなるわね。」

「さむっ！・・・モモコちゃん寒がってないかな。」

3人はクーザを見る。

クーザは広大な船の墓場をゆっくりと見渡した。

日が沈み夜が支配を始め、モモコを捜すのは不可能に思えてくる。だがクーザは

「・・・フツ・・・面白いじゃないか。簡単に行き過ぎてつまらなくなっていた所だ・・・モモコは必ず見つける。僕は誘拐犯だ。誘拐犯の側には攫ってきたものがないければ。そして元の所に必ず返す・・・スマートにね。」

たとえどれだけの時間が懸かってもモモコを捜す事を決意していた。レイレスはニヤツとして

「だよな。」

ティカは真面目な表情で

「誘拐犯の義務よね。」

シャッターはニコニコ満面の笑顔で

「そうだよ。このままだとかっこ悪い・・・」

同意しようとしたその時であった。

それまで遠くの方でかすかに聞こえていたバイク音が急に近くなつたかと思うと・・・  
ウオオオオオン！！

エンジン音を唸らせながら一台の巨大なマシンが彼らの頭上高く現れた。

そのどこかで見た事のある黒い巨体<sup>マシン</sup>。

そして。

マシンを軽々と操る黒衣の男。

クーザ達は呼吸をするのを忘れた。

闇を具現化したような黒づくめの男は、飛び越えている最中チラリとクーザ達に視線を送ったが、マシンの向きをそのままに着地した船を疾走してまた次の船へと飛び移って消えた。

「……………ね……え……今の……コクサ大将じゃ……」

男が消えた後、真っ青な顔をしたティカが目を見開いたまま皆を見渡した。

「……………ああ。」

こちらも夜目だというのに青いのがわかるほどの顔色のレイレス。

「……………どうして……」

シャッターは早くも震えながら、どうしてこんなに早く見つかったのか口には出さずだが皆には伝わった。

「・・・あの首飾りだ。」

「えっ？」

「モモコはピンクダイヤモンドの首飾りをしていた。ただの装飾品だと思っていたが・・・あれがたぶん発信機だ。」

「ピンポーン。正解です。大変よく出来ました。」

クーザがいい当てた時、仲間の声とは別の声がクーザに応えた。ハツとして声のした方向を見ると。

そこには巨大な群青色のバイクに跨った男が、人を小馬鹿にしたように微笑んで彼らを見ていた。

マシンは起動しているのを示すように振動していたが・・・全くエンジン音がしない。

クーザ達が凍りついていると今度は明らかなエンジン音がしてクーザ達を挟むように銀色のマシンに跨った銀髪の男が反対側から現れた。

「逃げようなんて思わない事じゃ。まあだ若え<sup>わけ</sup>のに・・・死にたくはないじゃろ？」

ホクガンとダイスの黄金色の眼と青い眼が貫くように自分を見た瞬間、クーザはゲームに負けた事を悟った。

ガツクは端末の地図を拡大し、数値を確かめながら最後の反応があった場所まで歩いて向かった。  
やがて目標地点まで来ると愛しき者の名を大声で叫んだ。

「モモコ！俺だ！もう大丈夫だぞ！」

「・・・モモコ！迎えに来たぞ！モモコ！」

「・・・怪我でもしているのか！？俺を呼んでみる！・・・モモコ  
！！！！」

ガツクの最後は雷鳴の様な大声はビリビリと響き渡ったが、空しく上滑ると夜に消えていった。

ガツクはふとレイマドのライトに何かキラリと光ったのを見た。  
屈んで拾ってみるとソレは無残にも潰された、かつては首飾りだったものだった。

ガツクは震え始めた両手をグッと握りしめると、どんな気配も聞き逃さない様神経を集中して辺りを窺う。  
だがその耳に生きている者の気配は微塵も感じられなかった。

ここにモモコはいない。

ガツクは首飾りを懐に仕舞うとカインに連絡を入れた。

「カイン、シヨウ達は到着したか？」

『・・・はい。全部で20頭。待機させています。』

カインはガツクの抑制の効いた平坦な声に逆に息を飲んだ。

（モモコちゃんは見つからなかったのか・・・）

もしモモコが見つかったら、ガツクの声にはわずかながらも感情が含まれるだろう。

先行したガツクの声の様子から最悪の事態に発展した事をカインは察した。

「今から言う地点まで全頭連れてこい。急いでだ。」  
『・・・了解しました。』

ガツクは現在地を伝えると眼を閉じてモモコの気配を捜す事を再開した。

（頼む・・・）

ガツクは祈る様に拳を額に当てた。

もう丸三日もモモコの存在を感じていない。

飢えた様な焦燥感。 渴えて震える体。

早く早く早く！体と心はモモコを求めて叫んでいる。

（ヤバいな。 タガが外れてしまいそうだ。）

（ガツクにとつては）地獄のグランモア滞在が終わり、今夜、漸くモモコに会えると多少どころではない喜びを抱えていたのだが、後頭部をいきなり殴られた様な事態に、ガツクの鉄の意思でやっと抑えている凶暴な感情が今にも身の内を食い破って暴れ出しそうだ。

ガツクが歯を食いしばって耐えていると軍用犬部隊が到着した。

「シヨウ。」

シヨウはリードを外してもらおうとガツクに怖々近寄る。平素とは何かが違うガツクの異様な雰囲気は敏感な動物には少し酷だ。

シヨウは気を抜くと震え出しそうになる足を叱咤して、ガツクの差し出したモモコの首飾りの匂いを嗅いだ。

「覚えたか？では行け。」

ガツクが短く言うとシヨウは弾ける様に暗闇へと飛び出した。

ガツクはレイマドに跨りながら、軍用犬を引き連れた隊士達に命令を下す。

「不審な者がいないか捜せ。いたら拘束しておけ。」

隊士達はガツクに礼をすると闇に消える。

ガツクはシヨウを追いかけた。

迷いもなく進むシヨウに一縷の望みを胸に抱いたガツクであったが、それは無残にも潰れた。

「……途絶えたか？」

シヨウは申し訳なそうに俯くと小さく吠えた。

ガツクはシヨウから視線を外すと暗い海面を見つめた。

「……船に乗ったか……まあいい。あいつらに聞くか。」

さほど落胆している様には見えないが、シヨウはガツクから発散される暴力的なまでの何かに四肢が震えた。

ガツクはレイマドに再び跨ると、とうとうクーザ達の元へと赴いた。

遠くから聞きなれた爆音が聞こえてきた。

「・・・ガツクが来たぞ。」

それまで黙ってクーザ達を見張っていたダイスが、よく通る声で死神にも勝る男の到着を告げる。

その言葉がクーザ達に浸透する時それは現れた。

黒い巨体がまるで重力を感じさせない動きで宙を飛び、クーザ達からやや離れた所に轟音を響かせ着地する。

「・・・おい、ダイス。」

「わかっちよる。・・・ブレイドじゃろ。」

クーザ達が何のことかわからない2人の会話を聞いていたが、ガツクの方から「ガシュツ」という音がして再びガツクに注目すると。

ガツクはレイマドの開いた前面サイドから銀色に光る長い1メートル半程の金属を取り出した。

それをガツクが軽く振る。

バシュツ

と、折りたたまれていた刃が飛び出し、その武器というには余りにも異様な幅広の剣は優にガツクの背を超えるほどにもなった。

それを持ったままこちらに向かってくるガツクの恐ろしさは、とても一般には見せられるシロモノではない。



(そーとーキテンな、こりゃ)  
(・・・モモコは見つからなかったか・・・嫌な予感ほど当たるもんじゃなあ)

ホクガンとダイスはそれぞれの愛車から降りるとクーザ達を背にガツクと対峙した。

「・・・そいつらに聞きたい事がある。」

何かを凝縮したような声でガツクがホクガンとダイスに短く言う。

「モモコは？」

ホクガンが問うとガツクは懐から漬れた首飾りを出して見せた。それをよく見て一同が息を飲む。

「反応が消えた場所に落ちていた・・・シヨウに追跡させたが海岸で途絶えた。船にでも変えたんだろつな。」

「二手に分かれていたっちゆう事か？・・・お前ら正直に言わんとガツクに殺されるぞ。」

ダイスが呆れたように、だが硬い声でクーザ達を見据える。

「ダイスが言ってる事は脅しでも何でもねえぜ。さっさとモモコの居場所を吐け。」

ホクガンも平素にはない真剣な声でクーザ達を促した。

クーザは事態の深刻さをガツクの怒りと苛立ち、殺意に溢れた圧力

を前にホクガン達の忠告を正しく理解した。  
レイレス達は近づくガツクに最早思考が追いついていかない。  
ただ眼を逸らす事を絶対に許さないガツクになす術もなく震えるだけだ。

クーザが冷や汗を掻きながら何とか言葉を紡ごうとした時。

それはいきなりだった。

ガツクを中心に渦巻くような圧力が突然弾けるように辺りに広がる。  
ガツクはクーザ達とは反対方向に振り向きざま、いきなりブレイドを一闪させた。

ザンツ

直後、背後の船の船首部分がバカッと割れる。

ズズウウン……

砂煙を上げ巨大な船首が落ちる。

……正直に答えねば次にこうなるのはお前達。

ガツクはわかりやすいと言えはわかりやすい、行き過ぎと言えはラインから遙かに行き過ぎの脅しでクーザ達に知らしめる。

「……し、知らないんです。」

クーザは張り付く舌をやつとの思いで動かし、モモコに逃げられ、自分達も捜していた事をつつかえつつかえ話した。

「……本当か？」

「……本当です……」

ガツクに睨まれ、飢えた虎と対峙した方がマシな視線にクーザは硬直したが、ここで返答しないと自分ばかりか仲間の命までも危ういとその目に精いっぱい（今までした事のないほど）誠意を込めてガツクを見つめた。

……

永遠とも感じられる沈黙が辺りを支配した。

ホクガンは珍しく一言も口を挟まない。

ここでガツクを言いくるめるような事をしたらガツクは背後のクーザ達を間違ひなく殺害する。

ガツクからのミシミシと音がするような殺意は、長い付き合いではなくとも確信を持ってもたらすほど明確だ。

ダイスの額からはツツツと汗が伝いおりる。

ギシリギシリと鋭い鉄条網で縛り上げられるかのような沈黙の果てに、漸くガツクから声が発せられた。

「……いいだろう……今は、お前の言葉を信じてやろう。」

ホツと息をつくクーザ達。とホクガンとダイス。

だが、続けるガツクの言葉に再び戦慄する。

「お前達の処遇は後<sup>のち</sup>に決める。たとえお前達とは別者が連れ去ったとしてもそれで許されると思うなよ……楽しみに待つがいい。」

クーザ達は踏みこんではいけない不可侵の領域に自ら突っ込んでしまった己らを後悔した。

クーザ達がタイムマシンがあつたらなあど必死に現実逃避しているのを余所に、ガツクは次なる手を打つべくある人物に連絡を取り始めた。

「アテでもあんのか？」

ホクガンがガツクに問う。

ガツクは相手が出るのを待ちながら返す。

「蛇の道は蛇と言うではないか……ここ（廃船置き場）に不法に侵入する輩は相場が決まっている。」

「ああ。なるほどアイツか……」

「久しぶりだのう。あいつ、近頃無精ぶりおって全くワシの所に顔を出さん。」

？

クーザ達そつちのけで会話が続き困惑した頃相手が出たようだ。

「俺だ。」

「……俺が誰かなんてどうでもいい……早くキングに代われ。」

あああああ〜！！

目当ての人物以外が出た様で、一気に零地点突破な声音になるガツ

クにホクガン達は心の中で手足振り乱してその向こうの人物に”ヤメロ！魔王様に逆らうな！”と念を送る。

「・・・キング・・・俺からの連絡を他人に取らせるとは・・・随分出世したようだな？」

2秒と掛からず出た人物に口の端を上げて微笑するガツク。だがそれを見たシャッターが戦線を離脱した（気絶）。

「・・・黙れ・・・なんならお前を軍部に復帰させても構わないのだぞ？直々に俺の隊に組み込んでやるうではないか。いや、何ならいっその事俺の補佐官にでもなるか。ちょうどカインが人手を欲しがっていた所だ・・・そうか？」

ガツクは散々脅した後大人しくなった男に漸く用件を伝えた。

「モモコを知っているな？・・・ああ。今日・・・な、連れ去られた。今、北の廃船置き場からだ。こう言えばわかるだろう。」

ガツクは時候の挨拶をしているかのように気軽ともいえる口調で男に告げる。

「察したか？・・・モモコを捜せ。連れ去った者もな・・・なあに、場所を教えるだけでいい・・・場所をな。」

連れ去った者がどうなるかは推して知るべし。

「・・・1時間待ってやる・・・何？無理だと？・・・いいだろう。今からきっかり3時間待ってやる。急げよ。」

ガツクはそれだけ言うともまだ何か喚いている相手に関わらず切った。

「ひでえな。」

ホクガンが言葉とは裏腹にニヤニヤ笑いながらガツクに言った。

「フン。総所に帰るぞ。もうここに用はない。」

ガツクは今度はカインに連絡をとった。

「カイン。モモコは誘拐犯とはまた違う何者かに連れ去られた。もう辺りにはいないだろう。犯人達を拘束しているから迎えをよこせ。帰還する。」

短い応答があつた後ガツクはそれを切る。

ガツクはブレイドを抱え直すと・・・無言で先程船首を落とした船に近寄り鬱憤を晴らすように破壊し始めた。

「オウオウ、荒れてるねえ。」

「コイツらを殺さんだけでも上出来じゃ・・・しかしガツクでも年をとると丸くなるもんじゃなあ。もうちつと若い頃ならとつくにバラしとる。」

「まあなあ・・・あ、早っ！もう次のにかかってやがる！・・・やれやれ、当分終わりそうにねえなあ。」

「あと10隻というところかのう。」

ガツクの暴れっぷりとホクガンとダイスのこれが日常、という会話に恐怖を感じる暇もないほど驚天動地なクーザ達。

目の前には同じ人類には到底見えない大男が、異質な凶器を眼で追うのがやっとのスピードで振りまわしている。

そのたびに何十メートルもの巨大な船があり得ない切り口で次々と破壊されていく。

ホクガンとダイスがガツクが落ち着くのを待っているとバイクの音がした。

振り向くとカインが雷桜隊の幾人かを連れてマシンから降りているところだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カイン含め雷桜隊隊士達は自分達の大將の破壊行動をやっぱりという面持ちで見た。

（相変わらず怖ろしい力だ。）

（絶っつ対顔だけは見ちゃ駄目だぞ自分！顔だけは！顔だけはああ！）

（無理だろ。なんでアレが切れるんだ？おかしいだろ。・・・いっつも思っただけどよ、この人ほんとに俺らと同じ人類なのか？）

（ヒイイ！ウオオ！ワアアアア！！）

（慣れねえ・・・雷桜隊に入って何年にもなるが・・・いや慣れさせてくださいねえ。）

（これさえなければいい人・・・は違うか。普段からコウか。）

彼らは様々な事を心の中でそつと呟きながら、直力不動で上官のキレ具合を黙って見ていた。

散々暴れた後、ガツクは最後に巨大な漁船を真っ二つに切ると片側

を蹴り上げて同時に宙を飛び、思い切り回し蹴りを叩きこんでから  
ようやく止まった。

着地し、踵を返してこちらに向かってくるガツクの顔はバイクのラ  
イトに照らされ、この世の住人とは思えない怖さ。

やがてガツクの背後から、かつて船であった成れの果てが轟音と共  
に落下する。

ここでティカ脱落。

同じように硬直していたクーザとレイレスだが、我に返り慌ててテ  
イカを支えた。

「こいつらですか？」

カインは内心はビビりまくっているがそれを表には出さず強張った  
顔でガツクを迎えた。

「そつだ。軍部・尋問室（別名：どんな屈強な男も翌日には別人  
のようになっている入ったイロイロ帰れない部屋）に送れ。」

.....。



空間が凍りつく。

レイレスは訳がわからないままに、だが周囲の反応に敏感にして察し、青を通り越して傍目にもわかるほど白くなった。

クーザも時間の問題である。

だが気を失わないだけよく耐えていると思う。

「……そいつは拙いだろ。」

ホクガンが若干呆れ声でガツクに言うと、

「なぜだ？俺の命より大事なモモコを奪った奴らだぞ？本来なら身二つにしているところだ。」

「……コレ冗談じゃないからね。マジもマジ、どマジで言ってるからこの人。」

この場にいる全員はクーザとレイレスにテレパシーで伝えた。

それは2人の足が生まれたての小鹿のように震えているのを見る所、正しく伝わったようだ。

「ガツク、よう見てみい。……こ奴らまだ中等生じゃ。」

「バリバリの未成年だよ。尋問室に送れるわけないだろ。」

ホクガンとダイスの見解は正しい。

クーザ達4人は体こそ大柄だが、まだ13歳になったばかりの軍校中等部1年生であった。

その子供には到底見えない姿を時には利用しながら、クーザの天才的な頭脳とレイレス達3人の無鉄砲とも言える行動力で数々のイタズラ（と言うにはいささか大きすぎる騒動）を度々起こしていた。並みの刺激では物足りなくなるほど成功してきた彼らだったが、今回初の挫折を味わう。

味わうにはあまりにも大きすぎる相手だったが（これが初の挫折で・・・強烈すぎだろ。人として立ち直れなくなるだろ）。

ガツクはもう一度憎き誘拐犯を見てみた。

紙のように顔色は白いが、なるほど未成年であるのは間違いないようだ。

ガツクは口惜しさに（いくらガツクでも未成年を殺すのはちょっと・・・という分別は一応あった）歯噛みしながら

「・・・わかった。惜しいが命だけは獲らないでおいてやろう・・・命だけはな・・・」

それでも脅しをかけるのを忘れなかった・・・。

ガツクはそれだけ言うと、ブレイドを軽く振ってまた元の鈍く光る金属に戻した。と、レイマドに収めてから跨った。

「キングからなにがしかの連絡が入るはずだ。俺は総所に戻る。」

「俺達も行くよ。ここにはもう用はねえからな。おいカイン。」  
「は。」

「こいつらにはまだ聞きたい事がある。総所に連れてこい。ただし、他の部署には知られないようにしろ。極秘に運んできてくれ。」

「・・・何かお考えでも？」

ホクガンは自分の言う事に訝しげに見ているクーザを顎に手をやりながらニヤニヤ見ていたが、

「……まあな。」

カインに短く言うに止め、既に総所に向けて走り出したガツクの後を追った。

「立てるか？」

カインはガツクが去った後、緊張が解けて地面にへたり込んでしまったクーザとレイレスに気遣うように声をかけた。

クーザは短く何度も頷きながら、恐る恐るカインに聞いた。

「……俺達……助かったんですか、それとも手遅れなんですか？」

「え……そ、それはその……えと……えと……」

何と言っていいかわからないカイン。

そしてカイン及び雷桜隊隊士はクーザ達の行く末を案じ、めっちや  
同情の視線でクーザとレイレスを見た。

5 - 5 暴走の始まりです（後書き）

【ガツクの暴走・前編】

サブタイトルはこんな感じですかね。

5 - 6 大切なモノ

ホクガンとダイスはその扉を見た。いや、見ている。いや、見続けている。かれこれ30分。

「・・・お前が先に入れよ。」

「嫌じゃ。テメエが先に入れ。」

「俺も嫌だ。なんか障気が漏れ出ているんだもん。」

「眼の錯覚じゃ。」

「なら入れよ。」

「・・・テメエが無事だったら入る。」

「ふざけんな！」

「テメエこそ ふざけ！」

「何をしている。」

ホクガンとダイスは魔界の門・・・いや、軍部会議場の扉から出てきたガツクの低い声に、互いの襟首を掴み合ったままピタリと止まった。

「・・・何にも。」

「・・・何も。」

「早く入れ。」

踵を返してガツクが部屋へと入る。

そこにはガツクと似たり寄ったりな真つ黒い雰囲気のテンレイ、呆れ顔のシラキ、難しい顔のグレン、引き攣った顔のジエン、カイン、雷桜隊の隊士幾人かと・・・部屋の隅っこの方にクーザ、レイレス、

目を覚ましたティカ、シャッターが正座させられた状態でいた。ホクガンとダイスはそれらを開かれた扉から見て、ため息をついてから互いを離し、おもーい空気の中に入った。

「……キングからの連絡は？」

「まだだ。」

ホクガンはガツクの隣に腰かけると進展を聞いた。

「まだ1時間経つとらん。いくらキングでも無理じゃろ。」

ダイスは「アホか」と言う風にホクガンを見て言うとテンレイの隣に座った。

「キングかい、また懐かしい名前だねえ。元気にしてるのかい？」

シラキがわずかに微笑んでガツクに訪ねた。

ガツクは眉間に皺を寄せたまま、だが丁寧に答えた。

「近頃会っていませんが、相変わらずな様で……最近では西地区のゴロツキ共と悶着を起こし壊滅に追い込んだとか。最早地下街で奴に逆らう者はいないでしょう。」

シラキはかつての部下が大変元気に暴れまくっているのを聞き和やかな顔を一变、また元の呆れ顔で

「……アイツは昔から手を出すのが早い男だったからねえ。そうかい、ま、元気でやってるのならいいさ。……規則だらけの軍部と違ってアイツも地下なら思う存分生きられるだろう。」

ため息をついた。  
ちよっと切なそうになった総所のおつ母さんにホクガンが慌てて慰める。

「なに言っただよシラキさん。あいつはただの戦闘バカ。シラキさんが気に掛ける必要なんてこれっぽっちもねえよ。」

「そうですね。シラキ様が思うほどの男ではありません。キングがいつまでも子供なんです。」

「・・・キングの奴、シラキさんのところに挨拶にも寄らんのですか？ いったちよワシが行ってシバいておきますわ。」

「・・・やはり軍部に復帰させるか・・・」

「あ、あの、皆さん・・・落ち着いてですね・・・」

果敢にも総所の化け物たちに口を挟もうと試みるカインとジエンだったが普通に無視される。

「君達・・・その話は済んだ事だろう？ シラキさんもそういう意味で言ってるんじゃないんだ。キングの事は彼の意思を尊重したまえ。」

代わってグレンが穏やかに、だが通る声でホクガン達を諫めた。

「グレンの言う通りだよ。お前達の気持ちは嬉しいが、アイツにはアイツの人生がある。好きにさせてやりな。」

シラキは微笑みながら言い、立ち上がると暇を告げた。

「さて、キングが出張っているなら私がすることはなさそうだ。ここいらで帰るとするよ。お疲れさん。」



続いてグレンも立ち上がった。

「私も失礼するよ。何かあったら知らせてくれ。」

なんとなくこの場にいたジエンだったが、武具などの不具合がない事を知ると、カインに申し訳なさそうな視線を送り、だが急いで退出した。

後に残された者達に重い沈黙が落ちる。

「そついや、お前達よお、何でモモコを攫おうと思ったわけ。」

しかし、場の空気などあつてない男ホクガンはもつとも危ない話題を投げた。

途端、ガツクとテンレイから黒い気配が漏れ始め、じわじわと部屋を満たす。

4人以外のこの部屋にいる全員が硬直する。

「そつじゃのう……一応理由を聞いておくか。」

普段は止める側のダイスもテンレイにされた事、今モモコに起こっている事に腹が煮えくり返ってくるので遠慮なくホクガンに乗っかる。

「……挑戦です。」

震える声で、だがクーザはガツク達をしっかりと見てきつぱりと言った。

「……最初は……いつものゲームのつもりだったんです。教官達が恐れながらも尊敬するあなたに、偉大な大先輩、伝説の男に挑戦してみたかったんですよ。大事にしているという飼い猫を奪われたあなたがどう出るか……勿論、飼い猫は返すつもりでした。こんな事になつてしまったのでは信じてもらえないでしょうが……大事にしてあなたの元に返すつもりだったんです。だけど……あつさり負け……いえ確保されたんですから俺達覚悟はしています。どんな罰でも受けます。」

ホクガンは正体不明な笑みを浮かべ、眼を閉じてクーザの言葉を聞いていたが、

「俺達？普通は”仲間は関係ありません僕が悪いんですー”とかでも言つて仲間を庇うもんじゃないのか？」

やがて意地悪そうに笑つと4人を見渡した。

クーザ達はそれに臆するどころか挑戦的にホクガンを睨みつけた。

「……俺達は全員が納得してクーザと行動を共にしているんだよ。負けたら罰だろうが何だろうが皆で受ける。んな生温い考えじゃねえよ。」

レイレスが語気荒く言つとティカとシャッターも強く頷いた。

が、そんな子供特有のイキがったもの言いも

「……俺を相手取つて楽しかったか？」

この男の一言でその威勢のよさもしおしおとなり、たちまち委縮してしまふ。

「ガツクに挑戦したいのなら暗殺だろうがなんだろうが勝手にやれば。でもモモコに危害を加えた事だけは例え神が許そうとわたくしが許さなくてよ。」

テンレイも、お前ら全員死刑。と言った風にクーザ達を睨みつける。

ひえー

クーザ達はこの2人の冷気に生き物の本能かピタツと身を寄せ合いながらカタカタと震え始める。

ガツクはそんなクーザ達をフンとして見やると、席を立ってベランダに出た。

冷たい空気がガツクの頬を撫でる。

モモコ……

今、何処にいるのだ？

お前を一時でも離すなど俺は何を考えていたのだろうか  
どんな過酷な所であろうとお前を連れていくべきだった

俺が側にいれば何があってもお前を守れた

俺にはその力があるはずなのに

時には強すぎる力をもった俺が、今はなす術もなく他人に頼らなければならぬとはな

なんてお笑い草だ

お前が危機に晒されているというのに  
俺は待つことだけしか出来ん

モモコ……

たとえ世界中をひっくり返そうと草の根分けてでもお前を捜しだす  
からな

お前を俺から奪った者、全員に後悔させてやる

握った連絡機に知らず力を入れる。  
ミシミシと連絡機が悲鳴を上げた。

(……キングが連絡しづらくなるな。)

壊れる寸前で力を抜くとふと自分の影が濃い事に気付く。  
ガツクはいつ上ったのか煌々と輝く満月を見上げた。

「お前達がな、ガツクに挑戦したい気持ちはわかるぜ。だが、大事なモンを奪われたガツクの気持ちは考えた事あんのか？」

ホクガンは冷たい外気に立つガツクの後ろ姿を頬杖をつきながら見てクーザ達に話しかけた。

4人が怪訝そうに顔を上げてホクガンを見、次いでハツとした様に

ガツクを見た。

ガツクはじつと月を見上げている。

その広い背中はさつきまでの痺れるような殺気は微塵もなく、代わりに切なさの混じった焦燥が見てとれた。

「ガツクはよ、モモコに出会うまでそりゃあ無味乾燥な毎日を送る男でなあ、国と軍部のことしか頭がないガチガチの石頭じゃった。仕事を楽しみと本気で言うてくるほどのな。じゃけ、モモコを手に入れてからというもの、笑ったり怒ったりあのガツクが譲歩したり（モモコが絡む事柄のみ）焦ったりとまあ、おおよそ深い付き合いのワシらでさえ驚くほど変わったんじゃ・・・モモコはのう、ただの飼い猫じゃねえ。ガツクにとつて唯一のモノなんじゃ。あいつが初めて心を寄せたモノなんじゃよ。」

ダイスは諭すわけでもなく淡々と語ったがそれはクーザ達の読み違えた思いを正すのには充分なほどだった。頂垂れるクーザ達にホクガンは続ける。

「ガツク程じゃねえけど（ありや行き過ぎだ）俺たちだつてモモコを可愛がっているんだぜ？お前達をな、ぶん殴りたい気持ちは俺らにだってある。ガツクは言わずもがな。だがぶん殴る代わりに俺達に同行させてやるよ。モモコを奪われて暴れるガツクをしつかりと見届けるんだな。」

怖えぞおと脅すホクガンにクーザ達は反応を返すこともできない。怖いのはさつき廃船置き場での暴れぶりを見ているので充分過ぎるほどわかっている。

だがガツクの気持ちは傷つけモモコを怯えさせ、周囲にクーザ達の想像をはるかに超える（モモコとガツク以外のことだったらここまではないんだが）迷惑をかけた事に、麻痺していた罪悪感が今更

のようにクーザ達に起き始めた。  
既にたかがネコだろ？と思う気持ちはない。

唯一のモノ……

優れているとはいえまだ精神が未熟な彼らにガツクの感情は理解しがたいものがあつたが（いや、大人でも無理なんだけど）モモコを切実に欲している事だけはわかつた。

ガツクの手にあるモモコへと繋がるモノがピクリとも鳴らないまま3時間が過ぎた。

「ちよつと殺してくる。」

ガツクが苛立つままにキングを消しに行こうとした時、殺気を感じたのか、キングから漸く待ちわびた報告がもたらされた。

「そうか。今すぐ向かう。……いや俺の部隊を使う。犯人共に気付かれる事なく秘密裏に運びたい。いいな？」

まだ何か言っている風なキングの言葉を聞かずに、ガツクはまた途中で切つた。

「……たまにはあいつの話も最後まで聞いてやれば。」

ホクガンがキングを憐れむように言つがモモコのことしか頭のないガツクは

「キングの事か？ 奴などどうでもいい。奴が俺にどれだけ借りがあると思っっているんだ？ 唐突に軍部をやめた奴に気を使つつもりはない。」

冷たい目で返される。

「まゝだ根に持ってんのかよ。…………ガツク、俺達も行くよ。」

「何？」

「ワシも行く。」

お前達……

いいってことよ。

遠慮なんぞ水臭いぞ。ワシらとお前の仲じゃろつが。

ガツクが軽く目を見張り、ホクガンがわずかに微笑んで頷く。ダイスがガツクの肩を叩こうと手を寄せた。

麗しき友情の光が生温かーくガツク達を包む。

が。

「お前達……………そんなこと言ってもモモコはやらんぞ。」

「誰がいるか!！」  
「いるかボケエ!！」

ホクガンとダイスが同時にツッコむ。

「そうか、ならいい。勝手にしろ。」

「・・・うつつつ、酷い!さっき感じた俺のピュアな友情を返しやがれ!」

「・・・お前なあ・・・そのモモコに対する百分の一でもええからワシらに気を使わんかい!」

ホクガンが顔を両手で覆って泣き真似をする傍ら、ダイスがガツクの肩ではなく襟を掴んで喰ってかかる。

「今更お前達に気を使ってどうする?」

「テメエこら!」

「いいかガツク・・・俺らの友情という名の大木だってなあ、愛情と思いやりがなければ枯れちまうんだぜ?いいのか?」

「枯れる。今すぐ。」

「ひどっ!この人真顔で言ったよ!ひどっ!」

「馬鹿には付き合っておれん。」

ガツクはホクガンに止めを刺すと身を翻し足早に会議場を後にした。

「どう思う?あのモモコとは180度違う俺らに対しての愛のなさ。」

「ガツクの愛など極端過ぎて全力で尚且つ断固拒否じゃが、もうちょっと付き合いがあってもええと思う。」

「だよな。でもあれが普段のガツクなんだがな。」



ホクガンは悪ふざけを止め、隊士達にクーザ達を同行させるように言うとダイスと共にガツクの後を追った。  
テンレイはというとガツク達に

「あなた達はどうなってもいいけど、モモコだけは傷ひとつ付けずに取り返して来て頂戴。そしてちゃんと始末してきて。」

ええー

という様な事を言い、最後にクーザ達をギロリとひと睨みするとモモコが帰ってきた時寛げるよう準備をするため、奥のスタッフと共にとうに部屋を出ていった。

「氷山のような熱いお言葉だったな。」

「口惜しいのじゃ。テンレイだって行きたいに決まっちゃる。」

責任感の強いテンレイは今回の事が自分の油断した心が招いた事だと思っっている節があった。

「悪いのはこいつ等だろ。そんなこと言ったらモモコを置いていくように言った俺も悪い。」

「テンレイもそれはわかっちゃる。じゃがそれでも許せんじゃる。」

「・・・難儀な奴だな。」

テンレイの心を上向きにするためにもモモコの救出は絶対だ。

ダイスは改めて気を引き締めた。

ガツク達が少数の隊士達を連れてキングとの待ち合わせ場所に着いた時、時刻は既に夜中を指そうとしていた。

「久しぶりだな、キング。」

ホクガンはジ・トリックから降りると堂々とした体躯の男に歩み寄った。

「国主がこんな所に来ていいのか？」

キングはホクガンとは色合いが違う金色の目を狭めると片方の口角をクツと上げてホクガン達を迎えた。

「お前のう、たまにはシラキさんとこに顔ださんかい。」

「出せるか。俺は軍部を辞めたうえ地下で生きる人間なんだぜえ？シラキさんの迷惑だろ。」

「お前がそんな殊勝な事を考えるタマかよ。気まずいんだろ？いくつだテメエ。気持ちわるいんだよ。」

「国主とは思えねえ口の悪さだな、おい。」

キングは灰色の短い頭髪を撫で上げながらホクガンに呆れたように言った。

「場所は。」

片や一国の代表、片やドミニオンの裏の顔が仲良く歓談する様は異様であったが、このモモコに通じる道だけをひたすら爆走する男だけは目に入らない様で、キングが苦勞して突き止めたモモコの居場所を勞いの言葉一つ掛けずに居丈高に聞いた。

「……お前も相変わらずだな、ガツク。」

だがそんなガツクに慣れているのか、キングもただ苦笑してガツクを見やった。

「モモコは何処だと聞いている。」

しかし、戦場以外では感じた事のない凄まじいまでのガツクの圧力にキングは眉を顰めた。

（……噂以上だな。あのガツクが……この目で見ないとピンとこなかったが、これは。）

キングは何か言おうと口を開いたが

「……こつちだ。」

結局言葉を飲み込むと先に立って案内を始めた。

しばらく行くと地下街でも一番危険な区域まで来た。

一般人は決して入り込めない、そして命の保証も出来ない場所である。

そこを何もかも規格外の男達とまだまだ線の細い子供の隊列が進む平素であれば、闖入者は寄ってたかって身ぐるみ剥がされ運が悪ければ死んでしまうものだが……

明らかに軍人とわかる身のこなし、そしてキングの背後を歩く男の凶暴な姿に裏通りの住人も顔を背けて縮こまった。

キングはゴミゴミとした道を進んだ後寂れた倉庫の前で止まった。  
辺りも似たり寄ったりの倉庫群が並び、赤錆だらけの機械や船の部  
品、薄汚れたロープなどが散乱している。

「この家だ。お前の飼い猫を盗んだのはヤクシーとホータイという、  
廃船の部品を掠め取って裏で流しているケチな野郎共だ。・・・わ  
ざわざお前が出る相手でもないと思うが。」

「モモコを俺から奪うとする者は全て処分の対象になる。どんなゴ  
ミでもな。」

”ヤバいモード？”

キングはガツクの背後のホクガンとダイスに目で語りかけた。

”超ウルトラド級ヤバいモード。”

それを受けたホクガン達も親指を立て、頷きながら返した。

キングが少し目を見開いてホクガン達に何かを言おうとした時、そ  
の脇をスタスタとガツクが抜けた。

え？

ガツクは持っていたブレイドを軽く振る。

バシユッ

ブレイドの鈍く光る刀身にホクガン達が息を飲む。

「邪魔だな。」

ガツクは倉庫の錆びた扉を見上げて呟くと、ブレイドを大上段に振  
りかぶった。

そしてそのまま斜めに剣を奔らせる。

ズドオツ！

続いてガツクはざっくりと倉庫の扉に入った。亀裂をちよつと助走をつけて蹴りつけた。

ドゴオオオオン！！

轟音を立てて扉が破壊される。

「……あいつ、俺に秘密裏に運びたいとか言ってたよ……」

それらを黙って見ていたキングから当然の様な言葉が出る。

「……そりゃ……アレだよアレ、なんつーの、アレ。」

「……そうそう、アレじゃ。アレ以外ない、アレ。」

「……アレって何だ？……いや、いい。」

ガツクと付き合いの長いキングは賢明にも黙った。

そして急ぎ足でホクガン達と共にガツクの後を追った。

「そこまで言うならモモ」。賭けをしないかい？

「賭け？」

薄暗い部屋。天窓からは満月の柔らかい光が降りている。  
モモコは唐突な黒猫の言葉に訝しげに青い目を見返した。

「そう……僕が勝ったら僕の番つがいになってほしいんだ。」

5 - 6 大切なモノ（後書き）

じりじりとモモコに近づくとガツク。  
あっさりとおポーズまで来た黒猫。  
この違いは一体！？

5・7

い〜い〜しちゃったんだ〜たぶん気付いてないでしょ〜お(前)

サブタイトルコレしか思いつかなかった・・・



モモコは気が付くと、今は見慣れた自身の前足を見ていた。

ん？あれ？

モモコは顔を上げた。

目の前には緑豊かな草原が続いている。

サアツ・・・

草の匂いのする風がモモコのヒゲを撫でて吹き抜け、空中に消えていった。

ここ・・・どこだ？あたし・・・何してたんだっけ

その時、困惑するモモコの視界の端に何かが動いたのが映った。  
急いでその方向を向くと・・・

ガツクさん！

焦ったふうにあちこちに視線をやるガツクがいた。何かを捜しているようだ。

ああっ！そうだあたし・・・誘拐されたんだ！ガツクさん捜しに来てくれたんだ！

モモコは思うだけでなく口に出してガツクの名を呼んでみた。

ガツクさん！あたしここだよ！ガツクさん！

だがガツクが気付く気配はない。

モモコが焦れったくなつて一歩踏み出したその時。

ガシャン！

モモコの目の前に細長い鉄の棒が落ちてきた。

危うく串刺しになる所だったモモコが茫然としてみると、次から次へと鉄の棒が落ちてきて、瞬く間にガツクとモモコを隔てた。

これ・・・これ夢だ

ズラツと並んだ鉄の柵を見てモモコは思う。

これは夢 夢だから 目を覚ませばいいんだから

懸命に思つが目の前に自分を捜して憔悴するガツクに胸が熱く苦しくなる。

ガツクさん・・・ガツクさん！ガツクさん！

モモコは夢だと思つていても声を上げずにはいられなかった。

モモコが目を開けると、視界に入ってきたのは薄汚れた壁だった。夢から覚めきれず、ぼおつとしたモモコの耳に不意に男達の野太い笑い声が届いた。

ビクン！

モモコは酷い痛みを与えた大男を思い出し、思わず飛び退ったが、引き攣れるような痛みにつめき声を上げて座り込んだ。

大男に締めあげられた喉を中心にズキズキとした痛みが広がる。

じつとして痛みをやり過ぎながら周りを見渡すとモモコは檻、大きな鳥用の檻に入れられているようだ。

モモコは檻からさらに周りの部屋を見渡した。

そこは薄暗く、唯一の明かりといえば天窓から降り注ぐ四角い光と床からの細い光だけだ。

その明かりを頼りに尚も部屋を探ると、ここはどうやら二階に位置するらしく、床から漏れている光は階下の人工的な明かりで、粗野極まりない男達の喚き声や笑い声はそこから聞こえてきた。じつと聞いているとモモコはどうやら隠されているらしい。

余所の鼻が利く同僚を欺くためだろうか。

怯えたモモコがじつと息を殺すようにしてからどれ位の時間が過ぎただろうか。

階下のおぞましい音とは違う音がした。

カリカリとひっ搔く様な音だ。

モモコが警戒しながら音の元を探ると唯一の窓、天窓からだ。そこを注視していると黒い影が見える。

モモコは無駄だとは知りつつ鳥籠の隅に体を縮みこませた。

天窓はゆっくり、ゆっくりと徐々に開いていき遂にそこから侵入者がするりと入ってきた。

その者は軽やかにトンと着地すると真っ直ぐに鳥籠まで走り寄り、怯えているモモコに気遣うように声をかけた。

「モモコ。僕だよ。大丈夫かい？」

モモコは黒猫と協力して何とか鳥籠の入口を開けようとしていた。大きな音は立てられない。階下の男達は酔っているとはいえ獲物が逃げだそうとする気配には敏感だろう。

モモコと黒猫は慎重にも慎重を重ね、じりじりしながらも遂にモモコは鳥籠から脱出した。

「ケガはないかい？歩ける？」

気遣う黒猫にモモコはゆっくりとあちこち体を伸ばしてみた。多少の痛みはあるものの移動には差し支えない様である。

「うん、大丈夫。」

黒猫は安堵した様に小さく息を吐くと、

「さて、どうやってあの天窓まで行くかな。」

猫にとっては遙か上の方へと首を傾げた。

モモコはそんな黒猫に視線を向け、確信するように明るく言った。  
けた。

「大丈夫だよ。たぶんガックさんが来てくれるはず。」

だが黒猫は、人間ならばバカにしたように片眉を吊り上げた様な感じで言い返す。

「君の飼い主が？・・・来るわけないよ。」

「・・・そんなことないもん。」

「来ないね。・・・言っちゃあ悪いけど君は確かに毛色は珍しいかもしれないがただの猫だ。ドミニオンでも最高権力のあの男がそこまで君にこだわるとは思えない。」

「面子もあるだろうしね」と続ける。

「・・・ガツクさんはそんな人じゃない。」

モモコはじつと耐える様に黒猫に反論する。

「・・・ねえ、どうして信じられるの。人間なんて所詮は自分の事しか考えてない。好き勝手に僕らを扱う奴らだ。」

黒猫は固まるモモコに更に続けた。

「温室育ちの君にはわからないだろうが、今でも、望まれて飼われたのに飼い主の都合で捨てられたり、非道いものでは飼い主自ら処分してくれとその類のセンターに持ち込む輩がいるんだよ。」

黒猫はやり切れないという様に首を振るとモモコに眼差しを映した。

「・・・すまない。君の所為ではないのに詰るようになってしまったね。・・・だがこれが僕らの現実だ。僕ら猫属は珍しいせいもあってそんな話は聞かないが、他の皆は・・・酷い話を毎日のよう聞

くよ。」

黒猫の悲しみに満ちた目をなす術もなく見つめるモモコ。元人間側としては耳が痛いを通り越して打ちのめされる。だが。

「……黒猫さんの言う事は……わかるよ。」

黒猫は青い目を少しだけ緩めると賛同したモモコに先ほどとは違った優しい声で返した。

「だろう？」

「でも！」

モモコはガツクやテンレイ、ホクガン達や周りのみんなを思い起こしながら力強く断言する。

「そんな人達ばかりじゃない！ちゃんとペットを家族の一員として大事にしてくれる人達だっているよ！少なくともあたしの周りにはそんな酷い事する人はいない。本当だよ！ガツクさんは言ってくれたんだもん。」

「……何を？」

モモコはあの夜を思い出し胸が締め付けられるように苦しくなった。

「……何があっても側にいろって。離れるなって……言ってくれた……だからあたし……。」

そして自分が言った事も思いだす。

切なくて。

セツナクテ。

- - あなたの側にいたいー

「……まるで恋だ……君のそれは。」

え……

黒猫の静かに言う声が一瞬遠く聞こえる。

恋……？

あたしのこの……これが？

ガツクの事を想ったびに沸き起こる、ザワザワして落ち着かなくって、こんな自分じゃないって思いながらも照れくさくて妙に居心地がいい……

これが恋なの？

モモコはふと、ソレを認識した。

ああ……

一日に何回もガツクの事を想うのは  
ガツクに相応しくないのではないかと思悩むのは  
少しでもガツクが離れるのを不安に思うのは  
エルヴィがガツクに触れるのを、2人が笑い合うのが我慢できない  
のは  
ガツクがふとした拍子に自分を見つめる眼差しに、どうにかなって  
しまうのではないかと狼狽えるのは

「……ガツクさんが好きなんだ。」

モモコはポツツと零した。

黒猫は目を細めてモモコの告白を聞く。

「どうしよう……あたしガツクさんの事が好きになっちゃたんだ。」

階下では相変わらず騒々しい音や野粗な怒鳴り声や笑い声が響いている。

しかし、先程までそれらに怯えて凍りついていたモモコは、今はまったく気にならないでいた。

これまでずっと感じていた、名前が付けられないにもかかわらずいつも自分の胸にいた想いの正体にやっと気付いたのだ。

「……そう。あの男の事が好きなんだね。でも君はすぐにその間違いに気づくぞ。」

冷たくはない。逆に優しく聞こえるような黒猫の声にモモコはなぜ



か背筋が寒くなった。

「ど、どう言う・・・何を言ってるの？」

黒猫は小さな子供に言い聞かせるように諭すように続ける。

「わかってるだろう？君とあの男の決定的な違いを。」

ゴクリ。

モモコの喉が鳴る。

「そ、それは・・・。」

「そう。君は猫だ。そしてあの男は人間だ。僕達動物は人とは少し異なる考えを持つ。君のね、その気持ち勘違いとは言わないよ。でもいつか薄れる。番いを求める頃になるとね。」

「つ、番い？」

「君とパートナーとなって子供をつくる相方さ。人間風に言うと奥さんと旦那さん。君はまだ子供だからそんな気にはならないかもしれないけどもう少し成長したら自分から探し始めるはずさ。」

まるで生徒に教えを施す教師の様な黒猫の言い方にモモコは反論する。

「探さないから！だってあたしは！」

「モモコ・・・そんな不毛な想い、早く見切りをつけた方がいいよ。」

モモコの反論を黒猫が遮る。

「ふ、不毛って。」

「僕達の生は短い・・・僕はそうは思わないけど、人間と比べたら瞬く間に終わる。君に残された時間、その貴重な時間を少しでもあの男にくれてやるなんて勿体なさすぎる。」

「・・・・・・・・寿命・・・・・・・・そっか。」

猫の平均寿命は約14年。

人間の平均寿命は約80年。

もつと短くなるかもしれない。病気になったり事故にあったり。現に自分だって事故で死んでしまったではないか。猫に生まれ変わった？からといって寿命を全うできるとは限らない。全うしたとしても・・・・・・・・短すぎる。

（今、猫としての肉体が何歳ぐらいかは知らないけど、たぶん成人には達してる。この世界の動物達と比べると小さいかもしれないけど向こうのじゃこれくらいだったはず。後、12年・・・・・・・・ううん10年かも。だけど・・・・・・・・）

ガツクが自分を見る何かを含んだ深く激しい目を思い出す。

意識し始めた途端モモコの口元が緩んだ。

黒猫は厳しい事を言われているにもかかわらず、にまにましているモモコに不思議そうに首を傾げた。

「モモコ？僕の言う事が理解できてるかい？」

ム・・・

モモコは緩んだ口元を引き締め抗議した。

「わかってるよ！子供扱いしないで欲しいな、あたし大人だし！」

「そっかそっか。」

「ちょっと！バカにしてない!？」

「そんな事ないよ。モモコはいい子いい子。」

「やっぱバカにしてんじゃん!」

そんな事より。

黒猫はムキになるモモコを軽くあしらいながら話は終わったとばかりに天窓へと続く足場を捜し始めた。

「ねえ、ガツクさん来てくれると思うよ。」

黒猫はモモコが再度言いだした事に耳を片方だけ向けた。

「あの男が来る来ないは置いておくとして、取りあえずはこっちの」

黒猫は前足でトントンと床を軽く叩いた。

「野蛮な男達からはできるだけ離れた方がいい。酔っ払ってるし、どんな無茶をされるかわかったもんじゃない。今から移動することだってあり得る。」

「でもガツクさんが来たら。」

黒猫はいつまでもぐずぐずするモモコにイラついたようにしなやかな尻尾を大きく左右に振った。

「そこまで言うならモモコ。賭けをしないかい？」

「賭け？」

薄暗い部屋。天窓から満月の柔らかい光が降りている。

モモコは唐突な黒猫の言葉に訝しげに青い目を見返した。

「そう・・・僕が勝ったら僕の番いになってほしいんだ。」

えっ・・・・・・・・えええー!!

モモコのブラウンとグリーンが目が大きく見開かれる。

「そ、それって・・・えっ、あ、あの。」

突然の黒猫の申し出に慌てまくるモモコ。ワタワタするモモコに面白そうに視線をやった黒猫はすい、とモモコのすぐ近くまで寄った。

「なあに？僕では不満かな？少なくともあの男よりは君を幸せにする自信があるけど。」

「か、賭けって一体どんなの!？」

モモコは後退りながら迫る黒猫をかわすように急いで話を戻した。

「フッフ。簡単だ、あの男がここに来たら君の勝ち。来なかったら僕の勝ち。そうだな・・・期限は夜明けまで。それで降だと逃げるのが難しくなる。どう？受けて立つかい？それとも勝つ自信はないかな？」

にんまりといった表現がぴったりな黒猫の表情にモモコはムカツときた。

「あるにきまつてるでしょ！ガツクさんは絶対来る！」

「賭けは成立だね。」

うぐぐ・・・・・・・・

余裕綽綽の黒猫とムキになって睨みつけるモモコ。

「さて、勝敗はともかくここからは一刻も早く脱出した方がいい。理由はさっき話した通りだ。反論は認めないよ。・・・心配ないよ、そんなに遠くまでいくわけじゃない。賭けの対象はこの屋根にでも上って見物しようじゃないか。それならいいだろ？」

うん。

でも確かに黒猫の言う通りだ。ここにいつまでもいたら何をされるかわからない。

「わかった。」

モモコと黒猫は音を立てないように何とか足場を捜し、時間を掛けて天窓までよじ登った。

びゅうびゅうと吹きすさぶ冷たい風にモモコはブルッと身震いした。ガツクは来るだろうか。

眼下の通りはこの倉庫らしき物以外は静かなものだ。

モモコは震える自分にピタッと身を寄せ、冷たい風から自分を守ってくれる黒猫を見上げた。

黒猫は辺りを警戒するように四方へと視線を巡らせている。

( 違い過ぎるかあ )

黒猫の言葉は決定打となってモモコに打ち下ろされたはずだった。モモコは確かに猫だ。

フワツとした毛に覆われた肢体。四足歩行。尻尾。よく動く大きな耳。感情の幅通りにピクピクするヒゲ。どこからどう見ても。

だがただの猫でもない。

猫と人。

だが、異種族すぎるといふ意見にモモコは逆に自分の思いに自信を持った。

「あのね、訳は言えないけどこの気持ちは絶対に薄れたりなんかしないよ。」

「え？」

いきなり宣言したモモコに黒猫が何の事かとモモコを見れば。モモコがなんとなく吹っ切れた様な顔をして自分を見上げている。

「……さっきの話の続きかい？」

モモコはにっこり笑って頷いた。

「あのね、あたしがガツクさんと違っっていうのもわかり過ぎるほどわかってる……人の中にいると嫌ってほど思い知らされるしね。それにガツクさんと同じ時間生きられない事も……でも」

「……でも？」

モモコは黒猫から視線を外し、再び暗い通りを見つめた。

「・・・でも、最後の日になってもガツクさんに側にいて欲しい。たぶんガツクさんに悲しい思いさせちゃうかもしれないけど・・・。すぐく我が儘だとも思うけど・・・でも、それでもガツクさんの側のいたいんだ。」

静かに、だけどしつかりと本当の気持ちをモモコは黒猫に伝えた。ガツクが自分に向けるあの眼差しの意味はわからないが（鈍いにも程が・・・）「いつまでも側にいる」と言う言葉に甘えてしまおう。

「・・・我が儘か・・・いいんじゃない？猫らしくてさ。」

「黒猫さん？」

「気まぐれと我が儘は僕ら猫属の特徴だよ。君のその想いは賛成しかねるけどね。」

「うん。ありがとう。本当はさ、黒猫さんだってそんなに人間の事嫌いなわけじゃないんでしょ？動物の事が大好きで真剣になってあたし達の事考えてくれる人達がいる事知ってるよね。」

「・・・そうかもね。」

とぼけたように返す黒猫に「素直じゃないんだから」とモモコが呆れた。

でも、と黒猫は

「賭けに負けたら僕の番いになるのを忘れちゃ駄目だよ？わかってるよね？」

釘を刺すのを忘れなかった。

屋根に上って結構な時間が過ぎ、夜明けを待っている二匹の耳に騒々しく騒ぐ男達の声が聞こえてきた。

「まずいな。どうやら君が逃げたのがバレタらしい。モモコ、隣の倉庫まで移動しよう。物陰に隠れてやり過ごそう。」

「うん。了解。」

黒猫がしなやかに、モモコが幾分よたよたしながら隣の倉庫に着いた時、尋常じゃない、明らかな破壊音がした。

「……今の聞いた？」

モモコが恐る恐る黒猫に問うと、黒猫は頷いた。

「ここにじっとしてて。様子を見てくる。」

黒猫は硬い、緊張した声で言うと器用に物陰に隠れながら先程までいた倉庫を窺った。

が、案外早く戻ってくる。

「ど、どうだった？ヤバい感じ？」

「そうだね。ヤバいって言えば相当ヤバいね。」

ちよっと引き攣り気味に黒猫が返す。

その間にも背後の倉庫からは悲鳴やモノが破壊される音、それと何だか分からない判別しづらい音が続けざまに聞こえてくる。

「ええー！ど、どうする？移動した方がいい？それともここでじっ



としてた方がいいかな。」

下手に動くと目立つもんね。モモコは慌て気味に呟いて腰を上げると、ふと黒猫が静かな事に気が付いた。

？

「どうしたの？黒猫さん」

呼びかけると黒猫は真剣な顔でモモコを見下ろす。

「もう一度聞くけど。本っ当にあの男が好きなんだね？何があっても奴の側で生きるんだ？」

「えっ？あ、う、うん。なんか大変そうだけど・・・ガツクさんちよっと変わってるから（アレをちよっとと言えるモモコは案外大物かもしれん）。で、でも うん。好き。」

てへ、と恥ずかしそうに笑うモモコは第一級の可愛さ。

本当に勿体ない・・・

黒猫はため息をつく

「そこまであの男を慕っているのならうんとやってみたら。」

「えっ？ええ？」

「振りまわしちゃえよ。君の事で頭が一杯になるまでさ。とことんまでやっちゃえよ。」

「いや、あの、ただ側にいてくれたらいいなあって思ってるだけで、あの。」

黒猫は意気地がないツ！とばかりに前足をダン！と打ちつけた。

「何、弱気な事言ってるんだ。この僕を振ってあんな鬼みたいな奴を選ぶんだろ？そこまでやってくれないと面白くないじゃないか。」

は、はい？

モモコの目が点になると黒猫は笑ってモモコに近づいた。

「モモコ・・・幸せになるんだよ。君が幸せそうに笑っていると僕もいい気分になれる。いいね？」

「黒猫さん？」

黒猫は目を細めるとそつとモモコに顔を寄せた・・・

と、いきなりモモコ達がいた倉庫の屋根が吹き飛んだ。

モモコが目まん丸にしてびっくりしていると

「モモコ。」

再度名前を呼ばれたので黒猫の方を向くと・・・

鼻先に冷たい湿ったモノが触れ、そして離れていった。

「別れの挨拶だ。モモコ。」

そう言われて初めてモモコは黒猫に猫の挨拶をされた事に気が付いた。

「え、お別れって、どういう・・・」

ビュウオオオ！！

モモコが黒猫に問いたただそうとした時、風を切り裂くような音がした。

ザクツツ！！

物騒な音と共にモモコの目の前にいきなり鈍く光る何かが見れた。

（な、な、なに、これ・・・）

さっきまで黒猫がいた辺りに、モモコの3倍はありそうな幅広の金属が倉庫の壁に深々と刺さっていた。

iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！

モモコはそのブツ刺さったでかい包丁のような金属に慄いていたが、ハツとして辺りを見渡す。

「く、黒猫さん！！大丈夫！？」

「やれやれ・・・勿論大丈夫だとも。それにしても君の想い人は凶暴極まりないな。」

黒猫はモモコに挨拶をした後、背後からの強烈な殺気にいち早く反応してそこから飛び退っていた。

モモコは自分から少し遠くにいる黒猫のしゃんとした姿にホッと息をついた。

そして、すぐ傍らに立つ大きな影を見上げる。

平素は相手によつては死んだ方がマシ、な冷酷な黒い眼だが、今はモモコだけに向けるあの眼差しでモモコを見下ろしていた。

途端にモモコの心臓が跳ね上がる。

「にゃーお、ふぎゃ？ふふみー？（ガガツクさん、駄目でしょ？  
く黒猫さんはあたしを助けてくれたんだよ？）」

うるさく踊る心臓にアタフタしつつも、照れ隠しにモモコが詰まりながらガツクに呼びかける。

「モモコ……」

ガツクは掠れた声でモモコの名を呼び、震える手でそつと抱き上げると、万感の想いを込めて抱き締めた。

「にゃーん……、うううみー！（ガツクさん……、うわー なん

か恥ずかしいよお！」

モモコはドクドクと鳴るガツクの暖かい胸に包まれ、意識し始めた事も手伝って照れて照れてガツクをまともに見られない。

「モモコ……。」

モモコの柔らかな肢体を感じたガツクの身の内に甘く痺れる感覚が流れた。

瞬く間にあの充足感が体中に拡がる。

「まったく……見せつけてくれるね。」

一人と一匹の世界に割り込んだ声に、モモコはハツとして慌て、ガツクはギロリと黒猫を睨んだ。

「性懲りもなく現れたか……今度こそお前を殺す。」

ガツクはモモコを片手に移すと先程投げたブレードを壁から引き抜いた。

えっえっ!?

モモコは慌ててガツクを止める。

「みみみゃーおー! (だだだめだよーやめて!-)」

ガツクは腕の中のモモコが自身の胸に手をついて抗議するのと、憎き黒猫を眉根を寄せて交互に見ていたが、諦めた様にため息をつく

「わかった。……………消える。」

凍える様な声で黒猫を追い払う。

黒猫はフンと言う顔をして一人と一匹に背を向けた。

「黒猫さん！」

黒猫はモモコの声に顔だけこちらを振り返った。

「あの！ありがとう！助けに来てくれて……。あたしに何ができるかわかんないけど、黒猫さんが言った事、何とかならないか頑張ってみるから！」

黒猫は目を和らげた。

「……………こちらこそ、ありがとうモモコ。君の気持だけで充分嬉しいよ。でも君にそんな時間あるかな？その嫉妬深い男が相手ではね。」

からかうように黒猫は言うのと今度はそ深い闇夜に消えた。

（嫉妬深いつてガツクさんの事だよね？うん……。男の人としてっていう意味じゃないよなあ……。そうだったら嬉しいけど……。でへへ。でもあたし猫だから……。あ、なんか空しくなってきたぞ。）

ガツクはモモコがへにやとなったり、ズーンと落ち込んだりするのを片眉を上げて見ていたが、

「おーい、ガツク。モモコはいたか？」

ホクガンの声に振り返った。

モモコもホクガンの声に若干驚いて顔を上げた。

「ふにや・・・？みやお！（あれれ、ホクガン・・・？ダイスさんも！）」

ホクガンはガツクに抱かれたモモコにホッと胸を撫でおろした。

「漸くか・・・長かったなあ・・・全く手間掛けさせやがって。」

「モモコ・・・何かエライ久しぶりの様な気がするのう。ケガあねえか？」

モモコは呆けて開いた口を慌てて閉めるとダイスの言葉に頷いて答えた。

その後ろにはカイン達の姿も見える。

（あ・・・みんな心配してくれたんだ・・・やだ・・・嬉しい泣きそう。）

ジーンとモモコの胸に嬉しさが込み上げる。

感動に少し震えるモモコの体をガツクは少し強めに抱きしめる。

モモコは潤んだ目をガツクに向け、次いでホクガン達に向けた。

そして。

「ふにゃん!!ふみみ!!(おかえりなさい!!みんな!!)」

犯罪者達の、夜よりさらに濃い闇の街に、まるで似つかしくない声  
が高らかに響いた。



5・7

い〜い〜しちゃったんだ〜たぶん気付いてないでしょ〜お(後書

つ・い・に!

やっとここまで来たよ・・・

長かった・・・つってもまたここからが長いんですが。

おまけ くカイン君のあの時何があったのかレポートく (前書き)

5 - 7 のガツク側ではこんな事が。あとちょっとその後。

おまけ　　カイン君のあの時何があったのかレポート

こんにちは　皆さん。

いかがお過ごしでしょうか。

俺の名前は、カイン・ケンブリック。

栄えあるドミニオン軍部・雷桜隊ガツク・コクサ大将の補佐官を務めさせてもらってます。

軍校卒3年目のペーパーのくせに勿体ない事に大佐の地位を得ております。

傍目にはエリートコースに見えますが、あんまり良い事ない様な・・・

あ、ちなみに、ア・ノ、ガツクさんの補佐官という面倒事処理班を一手に担っているせいか、妬み嫉みの類はされた事ありません。むしろ自分の隊どころか余所の隊からも（頑張れよでも絶対代わらないからの）暖かい眼差しを感じます。

前置きはさておき、  
今俺が見ている光景・・・

とても一般国民に見せられるモノではありません。

ガツクさんは赤錆びた倉庫の扉の前に立つと

「邪魔だな。」

と呟き、ノックにしてはどうかと思われるブレードを用いての強引且つ、この場に常識は無用！とでも言いたげな手法で扉を破壊……いえ開けると青ざめている俺達を置いて、一人でさっさと中に入っ  
て行きました。

慌てて俺達も追いかけます。

モモコちゃんが絡んだ事態では、もうあらゆる意味で一人にはして置けませんから。あの人は。

ただっ広い倉庫の中は何が何やら、物が溢れ、一度も掃除した事ないだろ的に汚れていました。

その真ん中に、結構な額になるだろうモモコちゃんを手に入れた前祝いでしょうか、大量の酒瓶が散らばる中5人の悪どい顔をした男達が？然とした顔でこちらを、主にガツクさんを見ていました。

ガツクさんは男達には構わずぐるりと倉庫内を見回すと、何かの、恐らくモモコちゃん専用に見えるアンテナに感じるものがあつたのでしょうか。

男達の中でも一番ガタイのいい大男に向かって走り寄ると、ブレイドの峰でいきなり掬い上げる様にして男を天井にブツ飛ばしました。男の体が天井に激突するすごい音がして重量に従って落ち、バウンドしながら床に転がりました。

……

……大丈夫です。

俺は大男の腹がかすかに上下に動くのを見ました。

何だかピクピクと痙攣してますが生きてはいる様です。

ちよっと瀕死の様ですがまだ放って置いてもいいでしょう。

ソレをガツクさんはゴミでも見る様に見下ろすと、

「……モモコはどうした？」

今すぐ首でも跳ねてもらった方がマシ。みたいな声音で残りの悪人達に尋ねました。

「あ、ああ、あの……」

ガツクさんは声を発した男を見据えると

「……わかつているとは思いが、移動した、逃げられた、他の者に奪い去られた等という話は聞きたくない……モモコは此処にいるんだらう？」

ピュッとブレイドを振りました。

その高身長から繰り出される圧倒的な怒り。

その脇にぶら下がるブレイドにまでチリチリとした熱を伴っている様です。

男はガタガタと震えながら二階を指差しました。

最早、恐怖のあまり口さえ聞けない様です。

わかる。

お前の気持ちはよくわかるぞ。そんな身も心もごっついゴロツキですって感じでもガツクさんに睨まれたら小鳥のハートになっちゃうんだよな。

同僚達と俺は見ず知らずの犯罪者にそこだけ共感しました。

ガツクさんは足早に男に近づくと（男の顔色が面白いように白くなっています）ブレイドを真横に一閃。男はふっ飛び、壁に叩きつけられて気絶しました。

あーあ。

国主の眩きが耳に入ります。  
うーん。

見間違いでなければ男が当たった壁が少し凹んでいる模様です。叩きつけられた跡でしょうか。

ガツクさんはそのまま二階に上がって行きました。

感動の再会です。邪魔しない方がいいでしょう。

・・・いえ、決してあのガツクさんが愛しそうにモモコちゃんを抱きしめている姿が、異様になんかこうせり上がってんのかぐるぐるしてんのか説明がつかない何かを呼び起こすからとか、心が虚ろになるからとかいう理由ではないです。はい。

「捕縛しとけ。」

ダイスさんの声にハツと我に返った俺達は、一箇所に固まって震える男達と部屋の片隅に転がっている物体AとBを

「ここで見た事は墓場にも持っていかず今すぐ忘れる様に。わかっただな？」

と脅しながら縛り上げました。

コツコツとガツクさんが歩き廻っている音が聞こえます。

その音になぜかタラーリと汗が滴り落ちます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ドガッ！バガッシャーン！！

不吉極まりない音が聞こえ、固まる俺達を余所に国主達は顔を見合  
わせると急いで二階へと通じる階段を駆け上がって行きました。

「……カイン……」

同僚が遠慮がちに俺の名を呼びます。

「……やっぱり行かないと駄目だよな……そうだよな……俺、  
あの人の補佐官だもん。」

フ、フフ、フフフ……

半ば悟りの境地に片足突っ込んだ俺はヨロヨロしながら二階へと上  
がりました。

はい。

屋根がなかったです。

この場所に不釣り合いな綺麗な夜空がパノラマで見えました。

あと、国主達が焦った様な表情である一点を見つけていました。  
よせばいいのに俺は見えてしまいました。

ガツクさんがその化け物級の力で俺が見た感じ思いつ切りブレイド  
を投げようとしているのを。

あゝ

ナニカイタンデシヨウネ。

ガツクさんが許せないナニカが。

直後、ブレイドの後を追う様にガツクさんの姿が消えます。

「国主……」

俺はすんごく小さな声で国主に話しかけました。

国主はガツクさんから目を離さないまま呟くように返しました。

「黒猫だ。」

「は？」

俺の疑問に国主は目だけ俺に向けると

「知らねえのか？レセプシオン中モモコに近づいた黒い猫がいたんだよ。しかも雄だ。俺が見た所な。」

衝撃的な事実を告げました。

ななななな！なんですかそれはあ！！！！

「ちよつとアンタ！何で俺に教えてくれなかったんですか！大変じゃないですか！」

憤る俺に、この、しょっちゅうデユスカ達にボンクラ呼ばわりされているボンクラ国主はえ？という顔をして

「え？聞かなかったから？」

などと惚とほけやがりました。



殺意が湧く俺。

しかし、ここで国主暗殺を想定している場合ではありません。  
俺は現実に還り、ガツクさんが向かったと思われる方向に目を向けました。

ガツクさん……………

そこには。

ガツクさんの大きな体と、そこに埋もれてしまいそうな小さなモモコちゃんが見えました。

満月に照らされる一人と一匹。

そこには誰にも入り込めない何かがありました。

ガツクさんが瞬く間に満たされるのがわかります。

よかった……………

心底俺が思った時ガツクさんは壁に刺さったブレイドを引き抜きました。

……………戦闘続行の様です。

が、ナイスフオローでモモコちゃんが止めました。

すげー

あの状態のガツクさんを止めるなんて、本当いつこの目で見ても信じられません。さすがです。

モモコちゃんは何かムニヤムニヤ言っていました。俺達に気付くとビックリした様に目をまん丸にしました。そして、高い声で俺達に……………こう言つと何をバカなと思われるでしょうが……………

「おかえり！」

と言ってるように聞こえたんです。

気のせい……何でしょうが……でも胸が暖かくなった事は確かです。

ただいま モモコちゃん。

何だか感動的に話が終わりそうですが、もちろんここで終わるはずがありませんでした。

「モモコ……アレがお前に不必要に接近していたようだが何かさ  
れなかったか？」

……あなたはなぜそんな事聞いちゃうんですか？なぜにナ  
ゼ？

いや、ああだからこそガツクさんなんだ……いい加減学習しろ、  
俺。

モモコちゃん！もちろん何もされなかつ……  
ちよつとオ！今君の肩がビクウと震えたように見えたんだけどオオ  
オオオ！！！！

頼むよう！！もう俺家に帰りたいんだ！！早くこの丸3日間の事忘  
れたいんだ！！

俺の正直すぎる魂の叫びも空しく、俺から見ても挙動不審なモモコ

ちゃんは一気に態度が硬化したガツクさんによって下に降ろされ、袖口から出した（この3日間持ち歩いていたんだろうか・・・何が恐るべしガツクさん）折りたたまれたお馴染みのアレを足元にひかれました。

.....。

無言の圧力がモモコちゃんに降りかかります。

それとは別に哀願に満ち満ちた念破もモモコちゃんに送られていきます。

（モモコ「嘘でもいいから「あるわけないじゃん」「ッて言え」

（嘘も方便で言うじゃろ。ええから。ワシが許すから）

（何をしているんだ？でもナンかスゲー焦る） キング

（モモコちゃん！敢えて嘘を言うのも優しさなんだよ！優しさって必要だよな？俺達に）

しかし、鬼気迫る俺達の必死なテレパシーは通じず、モモコちゃん  
は.....

「はな・に・はなを・ちよん・された」

正直に答えました・・・ちよん？

ちよんって具体的にどう・・・ハッ！

「.....ちよんとは何だ？」

聞くと思っただけださー！！

「はな・に・はな・を・くっつけ・・・」

ブレイドを抱えて走り出そうとしたガツクさんをいつの間にも移動したのか、国主とダイスさん、キングさんがガシッと羽交い絞めしました。

ホッ。

ひとまず安心です。抑えるのがもうちょっと遅かったら地下街が壊滅する所でした。

「ガツク落ち着け、な？相手は猫よ猫。ちよつとした挨拶だよ。な？」

「そうじゃガツク。よくするじゃろ、頬ほつぺたにチューするあれじやよ。あ」

「ダイスうう！！テメエ余計な事言いやがって！！」

ダイスさんのバカな一言で飛びかかれた勢いで弱まっていたガツクさんに再び力が入ったのがわかりました。

「ガツク待て！夜中にしかも黒い猫が探せるわけない！」

「俺なら出来る。」

「ホントに出来そうぞで怖ええよ！！とにかく落ち着けえ！！」

「俺は落ち着いている。」

「嘘つけええええええ！！！」

満月に照らされた倉庫街に大男3人の綺麗にハモツたツツコミが響き渡ります。



おまけ くカイン君のあの時何があったのかレポートく（後書き）

カイン君の心の中はいつもこんな感じですよ。  
日常ですよ。

……か、可哀相になってきた。

漸くの事でモモコを取り戻したガツクであつたが……

イライライライライライライライライライ

幸せなはずの彼の眉間には、ここ数日深い皺が刻まれ続けていた。日が経つのに連れ皺は深まり、本数は増える。

ガツクの不機嫌の理由、それはやっぱり（というかそれ以外にない）モモコにあつた。

「……………」

カインは自分のデスクからこっそりガツクとモモコを見てみた。

ガツクは普段より3割増しの凶悪な顔で書類を手繰っている。

そしてその膝には当然の様にモモコが……いなかった。

モモコはガツクの膝には座らず、そのデスクでしかもガツクに背を向ける形で座っている。

時折送られるガツクの視線を感じるのかその度に硬直して。

（帰ってきた時から何か様子がおかしいんだよな……一体モモコちゃんに何があつたんだ？）

カインはガツクに気付かれる前に視線を戻すところ数日の事を思い起こした。

しかし、特別変わった事はなかったはずである。  
ガツクの（傍から見ると）異常な程な執着もいつもの事だし（何事も慣れた）、モモコが救出されてからの自分等の態度も・・・なのにモモコはあの日から、ガツクに必要な以上に近づくのを嫌がるようになったのだ。

お陰でカインやその周囲の者は、段々と機嫌の度合いが悪く傾くガツクに胃の痛い日々を、強制的に送らされていた。

賢明な諸君は気付いて、いや正にニヤニヤ笑いでモモコを見ているのではないだろうか。

そう、モモコの不可解な態度は好きな相手に対する過剰な反応、つまり意識しすぎて、照れまくっているだけなのである。

しかもガツクはモモコに対して過剰なほどスキンシップを求める男である。

前は（なんかなあ）と思うだけだった行為はモモコにとって強烈なモノになった。

（ぎゃああああ！顔！近い近い！！やめてー！）

（うわあああ！そんなぎゅって！ヤバいっしょ！鼓動が！ガツクさんの鼓動が！）

（膝は・・・あのちよっと・・・肉球にナンか・・・）

（無理！無理無理無理無理無理！体洗ってもらうなんて無理だからあああああ！！）

モモコ専用のシャンプーを手に泡だてたガツクを置き去りに、風呂場からモモコは飛び出し、部屋中を水浸しの体で逃げ回った事もあった。

（その後ガツクにあっさり捕まり体の隅々まで洗われるが、じたばたと暴れまくり、ガツクのイラつき度を増幅させる）



「はぁ？モモコとガツクがケンカ中？」

ホクガンはデスクに着けていた額を持ち上げて怪訝そうにレキオスを見た。

レキオスは新たな書類の束をホクガンのデスクに置きながら頷いた。

「ええ。モモコさんが帰って来てから何かあったそうで、ずっと膠着状態だとか。」

「うっそお！あん時にゃあ何もなかったぜ？何かの間違いじゃねえのか？」

「この前の懇談会の中で、カイン君が呟いていましたから間違いありません。」

「懇談会？」

「どうしようもない上司をもった補佐官達の情報交換の場です。」

「……あっそう。」

氷柱の様な目で返されたホクガンは明後日の方を向いた。

「マジかよ……ったく面倒ばかり掛ける奴らだなあ。」

口ではそう言っているが、表情はまた新たな暇つぶしが見つかったとでも言いたげなものである。

「なんじゃと？」

ダイスは死んだような目で部下達の訓練の様子を見ていたが、リコがふと呟いた一言に目に光が戻った。

「ですから、モモコさんが家出して強制的にコクサ大将に連れ戻されたという噂が。」

「……噂じゃろ。」

「ですが、コクサ大将の家から飛び出したモモコさんを見た者がいて、はっきりと証言しています。」

「……。」

きたんか。

遂にきたんか。

ダイスはこないで欲しいと願っていた事が起きてしまった事に、沈む思いで目を瞑った。

「モモコが私の元に戻りたがっている？」

テンレイは信じられないといった風にリンドウを見返した。

午後の休息タイム。

リンドウが何か言いたそうにテンレイを見ては口ごもる様子にテンレイが優しく促すと、全く想定外の言葉が出た。

「いえ、ペットが直接言った、というわけではないんですが……何でも事あることにコクサ大将を突っぱねているとか。猫というモ

ノは気まぐれで有名ですから、がさつで野蛮な軍部に嫌気がさしたのかも知れません。」

確かに世間一般ではそうだけど・・・

テンレイはモモコはそれには当てはまらない事を知っていた。

モモコは我儘で子供っぽいところもあるがこうと決めたら一途に貫く所がある。

今更、しかも気まぐれで主人を代えるなどあり得ない事だった。

とすれば答えは一つ・・・

ガ・ツ・ク

テンレイはガツクがお馴染みの、デリカシーのデにたどり着く以前の問題、レディに対するマナーの酷さでモモコを怒らせたな！という実にテンレイらしい結果に落ち着いた。

「・・・何か用か。」

ガツクは深夜の突然の呼び出しに不機嫌さ丸出しでホクガンを見据えた。

その腕にはいつものようにモモコが抱えられている。

！！！！

(マジかよ)

(本当じゃったのか)

(ガ〜ツ〜ク〜)

が、度重なるガツクの暴走（モモコが全ての原因）ですっかりモモコの反応に敏感になった3人は容易くモモコの変化を見てとった。

「いや・・・ほれ、ゼレンとの会談の結果と今後の対応を話し合おうと思つてよ。皆忙しいからな、延び延びになつてたたる?」

「・・・こんな時間にか?」

「すまんのうガツク、モモコ。ワシの仕事の都合じゃ。」

「何かの任務か。」

「ああ。」

「ならば仕方あるまい。」

同じ軍部に属しているとはいえその任務内容は隊 毎に当然のごとく異なる。

ガツクの知らない任務があつてもおかしくはない（だがこの場合ただの方便）。

ガツクは納得した様に頷くといつものようにモモコを膝に乗せるスタイルでソファに座った。

.....

「なあガツク。」

「なんだ。」

「単刀直入に聞くけどよ。」

「なんだ。」

「お前達・・・ナンかあつたわけ。」

「.....知らん。」

ガツクはイラ立ちのあまり充分タメを取ってから答えた。

その険悪さを含んだ視線は、自身の膝に座らせようとした途端、ピ

ヨンと跳ねてテーブルに着き、そしてなお一層腹立たしい事に自分に背を向けて座るモモコに向けられている。

（おいおいおいおい！マジでマジ！？マジでウザくなったのかよモモコ！面白くなってきたけどこれからの被害が尋常じゃねえからやめてくれ！！）

ダイスとテンレイもだいたい似たような思考だ。

が、モモコの心の中は

（ガツクさんの膝に乗るっていう事はアレが確実に来るから！耐えきれぬわけないよお！）

ガツクがモモコをこのように膝などに乗せる場合、必ずと言っていいほど体中を撫でられる。

それは最早ガツクの、モモコにいつでも触れていたいという無意識の癖になりつつあった。

しかし、好きな相手に弄られるのは例え恋人同士と云えど羞恥心を伴う行為である。

まして恋愛初心者のモモコには到底受け入れられない事であった。

自然、親密すぎるボディタッチを嫌がり、ガツクが思い通り撫でる手を拒否するようになったのだ。

だが、拒否されるばかりのガツクではない。

すぐさま拒否する理由をモモコに、あのお馴染みの方法で問いただ

した。  
が返ってきた答えは

「なんでもない」

何でもないはないだろう！！以前は許してくれただけではないか！なぜ現在いまは駄目なんだ！！

ガツクはしつこく問いただしたが、モモコの答えは一貫して「なんでもない」だった。

「知らんって・・・おいモモコ、ガツクが何かしたのか？」

ホクガンは今度はモモコに聞いてみた。

だがモモコはコレにも首を軽く振るに済ませた。

その小さな背中にガツクの欲求不満と苛立ち、そして溢れんばかりの愛おしさの混じった複雑な視線が注がれる。

「ガツク・・・あまりモモコに無体を強いるもんじゃねえ。ほれ、よく言うじゃろ、追いかければ追いかけるほど相手は逃げるってな。お前はモモコに対してテメエの感情をゴリ押ししすぎじゃ。少しはセーブせんかい。」

ダイスが諭すが

「今更それを俺に言うか。これまでに何度も言ったが、モモコに対する態度は例え誰が何と言おうと変えるつもりはない。モモコが俺を厭うと言うならその感情を塗り替える。」

「そんなんだから逃げられるんだぞ。」

「だからなんだ？その都度連れ戻すまでよ。モモコは俺と約束した、これから何があっても俺と共にいるとな……約束は守ってもらおう。」

ヤベえよ、こつちも相当キテるぜ。て言うかケンカっていうよりもバイオレンス・イツツ・ザ・ラブじゃん。

こりゃ、モモコでなくとも家出したくなるわい。しかし……

男3人は部屋の隅に立ち、ソファに座るテンレイとモモコを見た。ガツクとモモコの緊張感が爆発する前に「いいからいいから」とホクガンがガツクを促しダイスと共に事情を聞くため引き摺ってきたのである。

無駄だろ〜な〜と思いつつも説得を試みた2人は案の定失敗した。

(どーすっかなー面倒くさいけど当たり前障りねえ話題でモモコの硬さを取ってみるか)

唯一ガツクを宥められるモモコの機嫌を取るため、ホクガンはグラモンモアでの事をゼレンとの事後報告を交えつつ軽い感じで話し始めた。

「……しかし、俺は改めて女王の胆力に驚いたぜ。あの状態のガツクに誘いを掛けられるんだからな。」

ピク

モモコの耳が動いた。

(誘い?)

テンレイは呆れるように

「あの方まだ諦めないの。何カ月か前のグランモアでのイベント時にガツクに断られたんではなくて。」

言うとホクガンが差し出した書類を受け取った。

会談の内容と結果、ホクガンのメモ代わりに考察も書いてある。

「女王の趣味はストイックで強い男じゃからのう。ガツクなど正にタイプ。ガツク以上の男は中々おらんで。」

そこまでダイスは言うてから、モモコの反応を確かめる様に目だけで窺った。

するとこっちを見ている。

(おっ!)

ダイスとホクガン、テンレイは何もモモコの気持ちに気付いたわけではない。

ダイスはガツクのいいところを聞かせれば少しは見直すかなと考え、ホクガンとテンレイはまさか猫がという先入観があるので決して意地悪をしてこの話題を出しているのではない。



「あん時何で断つたんだよ、お前にあんなに積極的にな女なんて珍しいのに。」

美人だしな。

軽い感じでホクガンが付け足す。

(あの時・・・積極的・・・しかも美人・・・)

「公務で赴いてる。仕事中にその手の事は考えん。」

ガツクは当時の事を思い出したのか煩わしそうに眉を顰めた。

嘘つけえ！じゃあモモコの事はどうなんだよ！思いつ切り私情入れまくってんじゃねえか！アレがその手じゃねえならどれがどの手何だ！！

軽く混乱が入ってるホクガンの思考。

本当は口に出してガツクにツッコみたいのだが、今は微妙な感じなのでググツと抑えた。

「これ何よ。まさかこれを広報紙に載せるんじゃないでしょうね。」

俺ってデキた男だよな・・・マジ友情に厚く生きる男。俺偉い。

ホクガンは自画自賛しながらテンレイが差し出した写真を見るとそれまでのしたり顔を一変、うんざりした顔をした。

「載せるわけねえだろ。こりゃ女王がふざけたからボツになった奴だ。もう一枚あるはずだぜ。」

あの方にも困ったものね

テンレイもため息をついてその写真をテーブルに置いた。

ちょうどモモコの目の前に。

グランモア国の、どうやらガツクの事が好きそうな女王の事を聞いてから、心中穏やかでないモモコは当然興味を引かれてそれを見た。

嘘!!

その写真はゼレンのお偉方と一緒にホクガンやダイスが映っているのだが、問題は。

(何よコレ・・・!!)

中央よりやや端の方、ガツクとその隣には話題の女王であろう背の高い女性が並んでいるのだが、ただ並んでいるのではない。

なんと女王がガツクに抱きつくような感じでガツクの腰に手を回しているではないか。

しかもガツクもそれを支える様な感じで手を添えている。

ふーーーーーーーーーん

ゴゴゴゴオオオ・・・

いつでもモモコの反応に敏感なガツクは、モモコから感じた事もない威圧感に気が付いた。



いつにないモモコの行動に困惑したテンレイは、もしやどこが悪いのではとモモコを窺った。

「……こいつマジどうした？腹でも痛えのか？」

「事件の後遺症か？」

「それはない。獣医に診てもらったが異常はなかった。」

頭を捻る大男3人を放って置き、テンレイはモモコが直前まで見ていたモノを見た。

！

「まあ、モモコったら可愛いわねえ。」

愉快そうに笑うテンレイにモモコはギクと身を強張らせた。そんなモモコを見てまたテンレイは可笑しそうに笑う。

「おい、何一人で納得してんだよ。俺らにも説明しろ。」

可愛くてたまらないという顔をしてモモコを見やるテンレイに、焦れたホクガンから声が掛かる。

「にゃー！にゃうお！（テンレイさんやめてー！言っちゃヤダ！）」

「まあ……あなたの言葉はわからないけど今は何となくわかるよ。うな気がするわ。……ねえモモコ、ガツクは信じられないくらい鈍いから間違える余地がないくらいはつきり言った方がいいわよ。

だからごめんなさいね、今後のためにも私が代弁するわ。あなた達、モモコが私の元に飛び込んでくる前に見ていたモノをよおく見てみなさい。何か思う事はなくて？」

悶えるモモコを優しく手で宥めながら、テンレイは綺麗に整えられた指先で問題の写真を指差した。  
大男3人は注意深くソレを見た。

.....

「あーそういうわけか。」

たつぷり1分たつてからホクガンが納得した様に頷いた。  
遅いわね！

テンレイは呆れたが、まだ頭に？マークが付いてるダイスとガツクよりはマシかとため息をつく。

「そお〜いうことがあ〜ククク。いつちよ前にヤキモチなんぞ焼きやがって。可愛いところもあるじゃねえか。」

ホクガンがニヤニヤしながら暴露すると、モモコはこいつにだけは知られたくなかった！とばかりにキツとホクガンを睨んだ。  
それにまたカカカと笑うホクガン。  
ダイスはガツクの肩にガシツと腕を回すと

「よかつたのうガツク。お前の様に行き過ぎた想いで報われるもんなんじゃなあ。何か勇氣出てくるわい。」

「そ。一時はどうなる事かと思つたが、じゃあ一連の事は単なる意識の裏返しってわけか・・・なるほどなるほど。ま、猫と人間つづのうがネツクになんけど当人同士がいいなら問題ねえだろ。むしろ（俺達周囲の者にとつてもドミニオンにとつても）最良の結果だろ。よかつたよかつた。」

ぎよ！

モモコはホクガンが、ヤキモチを通り越して核心に迫ったのを心臓が止まりそうな思いで見た。

チラ・・・

モモコは恐る恐るガツクを窺った。

ガツクはダイスに腕を回された状態のまま、顎に手を当て、何か考え事をしている。

なぜかモモコはその姿に危機感を持った。

モモコの生き物としての危機回避によるアラートだろうか・・・

・可哀相にそれは正しかった。

〈以下ガツクの脳内会議〉

女王との写真に嫉妬される 俺が他の女と一緒にいるのが気に入らない 俺もモモコが例え他の者（男でも女でも動物でも）を見やるのも気に入らない 俺と同じ思い（すげー飛躍しすぎ。あと言うとくけどガツクの想いは極端過ぎて他と比べようもない）

今までの腹立たしくも不可解な行為は意識の裏返し 俺を意識している 俺もモモコが首を傾げただけ・・・ 俺と同じ思い（途中経過をすっ飛ばしてる感ありあり。もう一度言っとくけどガツクの想いは一般のソレとは違う）

結果 もう遠慮しなくていい。（…………アレで遠慮してたんですね・・・さすがガツク）

ガツクはゆっくりとテンレイの膝に座るモモコを見た。  
するとモモコもこっちを見ているではないか。

そのやや上目づかいの恥らった目線をくらったガツクは……

ガツクはいきなり立ち上がるとテンレイの膝から有無を言わずモモコをかつ攫った。

突然の事に固まってるモモコに

「アレは女王がふざけて抱きついてきたのを剥がそうとした時に撮られたのだ。お前が気にする事ではない。俺がお前以外の者を気にすると思うのか？……心外だな。」

ガツクはそう言うといつもの様にモモコ頬を擦り寄せようと顔を近づけた。

！

モモコは近づいてきたガツクの口に咄嗟に前足を置いてストップをかけた。

「……………」

ガツクは何を思ったのか自身の口をふみっとしているピンクの小さなモモコの前足を。

パク

啜えた。

.....  
.....?  
.....!!!

モモコはガツクの舌が味わつように指と指の間を往ったり来たりするのを感じ、全身の毛を逆立てた。

!!!!!!

「モモふぁはどおふぁもやわふぁかいな（モモコは何処も柔らかいな）。」

ぎよええええええええええ!!!

前足を口に含んだまま何事かを言うガツクにモモコは思わずその口の中に爪を立ててしまった。

「可愛い奴だ。」

きゅっと目を瞑って恥ずかしがるモモコを見て満足気に笑うガツクに

「おーいガツク、口から血出てんぞ。」



ホクガンの呆れかえった声が掛けられた。

その夜、漸くの事で寝る事が出来たガツクとモモコ。  
今までの経過から離れて寝るのだろうと思われがちだが

（あつたかーい！）

寒さが厳しくなった昨今。

体温が高いガツクは猫の特性が傍又人間だった頃の冷え症の名残か  
夜はモモコの湯たんぽと化していた。

昼とは雲泥の差で夜はくっ付いてくるので、モモコに嫌われてはい  
ない様なのに昼のアレは一体とガツクを無用に悩ませていたのだが。  
謎が解けた今、ガツクは遠慮なくモモコを腕に囲っていた。

（ふぁーあつたかいよーあー天国だー）

困われて密着されているのにそれを気にする事もなくうつとりとさ  
れるがままのモモコ。

だが。

事態は今夜急変する。

(うーんあったかい・・・あったかい・・・?・・・あれ、ちょっと暖か過ぎかな?・・・アレ?ナンか熱くない?)

ズクン　ズクン　ズクン

(・・・何、どんどん熱く・・・熱っ！熱い熱い!・・・何!?何なの・・・ナンかあたしの中熱いよオ!!!なにこれ!)

モモコは心臓が熱く、ドクンドクンと苦しいぐらい打つのを感じた。手足が無理矢理伸ばされる感覚。関節が燃える様に熱い。

「どっしたモモコ!」

ガツクは急にもんどり打ってシーツや毛布の中をのた打ち回るモモコに驚き、すぐに出そうとするがモモコは小さく、シーツ類は桁違いに大きいのでやや手間取る。

そのうちガツクは不思議な事に気が付いた。

モモコと思われる塊が明らかにいつものモモコのサイズではない事を。

あまりの出来事にガツクの手が止まっている間にもその塊はバタバタ動きながら段々大きくなってくる。

やがて動きが小さくなり、塊の成長?も止まった。

ガツクは何がどうなっているのか大量の?を頭にいくつも作りながらも、ゆっくりとシーツを剥がしていった・・・

まさか。

これはな……ん……だ？

何か苦しいのかハアハアと息を荒げながら顔を顰めてる小さな顔。その顔を縁取る不思議な色合いの柔らかかそうな髪。まだビクビクと小さく動く白く小さな手足。その体はしっとりと汗に濡れている。

ガツクが人生初の、いったいどうなってんのどうしたらいいのコレ的思考停止に陥っていると、それは恐る恐るといった感じで上半身をゆっくりとややぎこちなく起こした。

ソレは……女の子だった。

ハダカの。



6 - 2 受け入れ早すぎませんか

嵐のような衝撃が過ぎると、モモコはまだ疼く手足を動かさし、やっとの思いで上半身を起こした。

ハアハア……

まだ荒く続く息をなんとか整え、何が起こったのかわからないまま少しづつ目を開けた。

ん？

最初に目に入ったのは、真っ白なシーツの中に浮かぶ二つの手だ。

ん？ ん？

人の手だ。

形からして女の人だろう。

モモコはなぜこんなモノがと疑問に思いながら身じろぎしてみた。すると視界の手も動くではないか。

???

(何だろコレ……)

モモコは試しに右を動かしてみた。すると視界の右手も動く。

(……ん？ これ……あれ?)

モモコは左も動かしてみた。  
右と同様に動く。

しばらくひらひらと動かしてみてモモコは漸く衝撃的な事に気が付いた。

「うそ！戻ってる！人間に戻ってるよー！すごい！信じられない！  
なんで！うそお！」

半年以上聞いていなかった声も出る。

モモコは突然の事に驚きながらも、夢じゃない事を確かめるように  
ペタペタと体のあちこちを触りまくった。

（嘘うそ！なんで！ホントに戻ったの！？そ、そうだ！鏡！鏡に映  
してみよう！！）

モモコはそこまでノンストップで考えるとそれまで座っていたベッ  
ドから飛び出し、鏡のあるバスルームに駆け込もうとして……  
傍と動きを止めた。

あれ………？

ナンか……ナンか忘れてないか？

アタシ……さっきまでナニしてたっけ……

そう、うん、ガツクさんと……ガツクさんと……寝ようとし  
て……ガツクさん！！？

.....。

ギギイギイ.....

モモコはゼンマイ仕掛けの人形の様なきこちなさで首をガツクの方に向けた。

ガツクはいた。

手にはシートを持ったまま、片足をベッドに乗せている。

そしてその表情は.....

(ガツクさんでもそんな顔するんだ)

モモコがこの状況を一瞬忘れるほどそれはそれは驚愕に満ちたガツクがいた。

.....ハッ！

モモコはベッドから降りた自分の状態を見下ろした。

全裸だ。

うん。

.....。

人は本当に驚いた時、咄嗟に大声などでないものだと言われている。なのでこの場合のモモコも・・・

「ヒツ・・・キイ・・・」

などの声というよりは音に近いモノを上げて体を反転、目にもとまらぬ速さでシーツをガツクから奪い頭から被った。

が、慌て過ぎたのか、足を滑らせてスツ転び、ゴンツという鈍い音と共に床にしたたか額を打ち付けた。

幸いなのか不幸なのか・・・ズキズキと痛む額がこれは現実なのだと教えてくれる。

「うう・・・うう・・・。」

ガツクはソレが発する呻き声で我に返った。

ソレは今、床に蹲りまたシーツにくるまっている。

「・・・お前は・・・。」

ガツクの掠れた、ともすれば聞き逃しそうな声だったが、静かな部屋にそれはよく通った。

シーツの塊がビクツと微かに揺れる。

（落ち着け・・・落ち着け。何がどうなってるかわからんがとにかく落ち着くんだ）

ガツクは深呼吸して気を落ち着けると

「・・・お前・・・お前は・・・何なんだ？・・・もしかしてモモコ・・・なのか？」



先程よりはしつかりとした声で問いかけた。

・・・・・・・・ゴクッ

ガツクの喉が鳴る。

答えを待つまでが無限に感じた。

塊は微動だにしなかったが、やがてモソモソと動くとシーツの中から頭だけ出した。

不思議な色合いの髪に包まれたその心細げな小さな顔は躊躇しながらも頷いた・・・・そしてゆっくりと目線がガツクの顔へと上がる。そしてとうとうブラウンとグリーンが綺麗に混ざった瞳と目があった瞬間、ガツクは時が逆戻りした様な感覚に陥った。

ガツクは猫のモモコと出会った時と同じ衝撃を感じたのだ。

「テンレイ・・・何も言わず女物の服を持って俺の家に来い。モモコが・・・とにかく言う通りにしろ。急げよ。」

ガツクは喚くテンレイに構わず切ると、今度は寝入りばなのホクガとダイスにも連絡を入れた。

そしてまだ混乱している頭を振るとその混乱の源がいる寝室に戻った。

戸口に手を掛けガツクが覗くと問題の人物・・・人間のモモコがシートにくるまったまま背を向けてベッドに座っていた。

「・・・・・・・・もうすぐテンレイが来る・・・・・・・・女物の服を持ってくるように言っておいた。」

モモコは振り向いてチラッとガツクを見ると首を竦めて

「あの・・・あの・・・すいません。」

小さな声で謝った。

「気にするな。ホクガンとダイスも呼んだ。これは・・・さすがに俺一人の手に余る。」

う。

モモコはガツクの低い声にモモコはますます委縮する。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

2人とも何と言っていいかわからず沈黙が落ちる。

「そつえば額はぶつけていなかったか？」

近づく気配がしたと思うとモモコの前に膝をついてガツクがモモコを覗き込んだ。

いきなりの至近距離に思わずモモコが仰け反る。

大きな体躯は膝を付いていてもなおモモコより大きい。その触れられそうなガツクの活気にモモコは我知らず震えた。

「見せてみる。」

ガツクはそんなモモコの様子にも頓着せず、額を覆う髪をそっと持ち上げた。

ドキンドキンドキン……

(緊急事態なのに……これからどうなるかわかんないのにドキドキしてる場合か！静まれ心臓お！)

理性はもっとしっかりしろ！とモモコに渴を入れるが、モモコの鼓動は関係なしにどんどんスピードを上げて打ちつけた。ガツクはモモコが強かぶつけた額を見て眉根に皺を寄せた。明日には紫色に腫れているだろう。

「冷やさねばならんな……。」

ガツクはそう呟くと冷やす物を持ってこようとして……ふとモモコの柔らかかな髪の毛の感触に気が付いた。たちまち、あのお馴染みの満たされる感覚がゆっくりと沁み渡る。

……ああ。

やはりな。

ガツクは前髪を離すとそのまま手をモモコの頬へと滑らせた。痺れるような充足感が強くなる。

「……同じなんだな……不思議だ、見た目や感触は全く違うのに……お前は確かにモモコなんだな。」

ガツクが微笑む。モモコの好きなあの微笑みだ。

うあ……それは……その顔はズルイでしょ。

モモコの顔が真っ赤になり、ガツクは触れているモモコの頬に熱が生まれたのを直接感じ取った。

ガツクが愛しむようにそつと指を動かすと熱はもつと熱くなった。

初めて触れた人間のモモコの頬は、ガツクの心に甘やかな感触を残した。

「どーなつてやがるんだ……。」

ホクガンはガツクの寝室に通されると、先に来ていたダイスとテンレイと同様、呆然としながらガツクの説明を受け、ベットの端にちよこんと座る（見た感じ）小さな女の子を見つめた。

「こいつがあのももこだつて？嘘だろ？冗談も大概にしるよガツク、俺を担ごうなんて一億年早えぞ。俺は騙されねえ。」

「俺が冗談を言う奴に見えるか？ホクガン。」

「全然見えねえ。」

テンレイは衝撃から覚めると、委縮している女の子とガツクから持ってくるように言われたモノとを結びつけた。

「も、もしかしてそのシーツの下は・・・」

「そうだ。ハダ」

「全員出なさい！！！！」

ガツク達はテンレイの怒号と共に寝室を追い出された。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ホクガンとダイスは顔を青くしながらガツクを凝視した（ガツクにロリ疑惑発生中）。

「なんだその目は。」

ガツクが不快そうにホクガンとダイスを見やる。

「・・・なあ。」

「なんだ。」

「・・・手が後ろに回るような真似なんかしてねえだろうな。」

「殺されたいか？」

「遠慮しとく。」

つめていた息をホオーツとつくホクガンとダイス。

ガツクは冷たい眼でホクガンとダイスを見やるとフンとリビングに向かった。

まだ頭が混乱中の2人も続く。

「さてと・・・」

テンレイはため息をつくともモモコに優しく声をかけた。

「大丈夫？私の言ってる事がわかるかしら。」

「はい。テンレイさん。」

モモコがやや緊張気味に返す。

テンレイは自分を見上げる、この見知らぬ女の子の瞳が猫のモモコと同じ色合いなのに気が付いた。

「・・・本当に・・・モモコなの？一体なぜこんな事が・・・」

モモコは、こんな事態は当然初めてであろう、困惑しきりのテンレイにとても申し訳なくなり、小首を傾げて

「私にもさっぱり・・・急に体が熱くなって、我慢できなくなつて・・・気が付いたら人間に戻ってたんです。」

「に、人間に戻っていた！？どういう事・・・ああ、今は質問よりもあなたのその惨めな状況からどうにかしなくてはね・・・でも。」

テンレイは用意した服ともモモコの小さな体とを見比べた。

「あなたには少し・・・いえ、かなりサイズが・・・でも何とかするしかないわね。さあ立って。まずは下着からね・・・一人で着れ

そう？着終わったら声をかけてちょうだい、一緒に服を合わせてみましょうか。」

テンレイは下着を着け終わったモモコから声を掛けられ振り返った。

ええっ！

恥ずかしそうに下着姿で立つモモコの体を見て、テンレイはモモコの印象を大幅に軌道修正した。

ソレは小さいながらも立派に成人した女性の体だったからである。

うーん・・・そこに座れと？

リビングに入った途端、モモコはガツクの隣しか空いてる席がないのを見て躊躇したが、いつまでも突っ立っている訳にはいかないの  
で小走りにソファに寄ると、ガツクよりやや離れてちょこんと座った。

ガツクの体軀に合わせたソファからは当然の様にモモコの足が浮く。

しーーーーーーしーーーーん。

部屋が静まりかえる中、4人の視線が自分に一斉に注がれるのを、モモコははっきりと感じた。

（な、何か言わないといけないのかな・・・そ、そりゃそうだよな、皆、あたしのために集まってんだし・・・えーとえーとい、一体何から話せばいいんだ！！）

モモコが居た堪れなさのあまり軽くパニくつていると

「モモコ・・・あなたはさっきまで猫だった。これは間違いないのね？ガツク。」

モモコからすれば天の助けの様なテンレイから、念を押すように口火が切られた。

「そうだ。全ては俺の目の前で起こった。ここにいるのは猫のモモコが人間に変化したものだ」と俺が断言する。」

ガツクは腕を組んだまま、数十分前までの驚愕の表情が嘘みみたいないつもの顔で頷いた。  
するとそれまで黙っていたホクガンが

「・・・そういやよ、コイツ落ちてきたんだ。」

今思いだした、という風にモモコを見つめた。

「落ちてきた？なんじゃそりゃ。」

「奥の中庭に噴水の広場があんだろ？そこに落ちたのを拾ったのが俺なんだよ。」

「初めて聞くぞ。」

「俺も忘れてたんだよ。その後すぐテンレイに渡ったしな。興味もなかったし。」



(そういえば最初に会ったのがホクガンだったな・・・そういえばものすごく腹が立つ事言われたっけ)

モモコはその時の事を思い出し、ホクガンに不快に扱われた事を思い出して軽く怒りが湧いた。

「・・・モモコ・・・俺達に会う前は何処にいたんだ？俺の言う事がわかるな？」

ガツクが顎に手を当てながらとうとう核心に迫る事をモモコに質問した。

キター！

モモコは深呼吸を何度もしながら気を落ち着けると自分の事情を話し始めた。

「うーん・・・何から話せばいいのかな・・・まず、第一に私はこの世界の者ではありません・・・地球という星の日本という国に住んでいました・・・」

モモコはある雨の日に死んだ事、気が付いたら空を落下していた事、噴水に落ち、ホクガンとテンレイに拾われた事、そして・・・

「猫になっていたんです。私にも何が何だか・・・生まれ変わったのかななんて思ったけど・・・でもそれにしては前世の記憶というか人間だった頃のこととか前の世界の事覚えてるし・・・」  
「なぜワシらに言わなかったんじゃ。」

ダイスが優しく聞く。

モモコはダイスの暖かい青い眼を見つめて

「・・・話しても信じてくれるとは思わなかったし・・・猫に生まれ変わったんだと思えばいいかなって。」

首を傾げながら答えた。

その仕草が猫のモモコがよくやる仕草に酷似していて、4人はいつそうこれはモモコなんだと思う。

「・・・おかしい奴だなんて思ってたんだよ。人語も解すし、仕草も妙に人間くせえ。動物にしては感情表現も豊かだしな。なるほどそういうワケか・・・」

ホクガンが納得した様に頷く。

「ピンクの毛色はその髪の色からきているのかしら。不思議な色合いね、地毛？」

テンレイがモモコの髪のひとつ房を手に取りながら興味深そうに観察する。

「辛うなかつたか？死んじまつた後に猫になつていたなんて、えろうシヨックじゃっただろ？」

ダイスが労わるようにモモコを優しく見つめた。

モモコはポカンとして皆を見返した。

（え・・・信じてくれるの？んなアツサリ？う、受け入れ早く

ないか？)

逆にモモコが信じられない。

この世界は何も魔法があるとか想像上の動物がいるとかそんなファンタジーがあるわけでない。

そこはモモコがいた前の世界と同じである、いたって現実感に溢れている。

普通なら猫から人間に変化したなんて信じがたい事なのだ。

モモコは頭がおかしいと思われたり、最悪「猫のモモコをどうした」と疑われたりすることも覚悟していた。のだが、予想に反しての皆の受け入れの早さに戸惑う。

ホクガン達ももちろんこの前代未聞の出来事に当初は混乱していたが、モモコと接触しているうちに、何とか色合いもそうだが、ふとする仕草や雰囲気も、姿が全く違うのにもかかわらず猫のモモコを強く印象付ける。

それらがこの不可思議な出来事をすんなりとホクガン達に受け入れさせていた。

モモコは隣に座るガツクを見上げた。

するとガツクもこちらを見ていたらしくバッチリ眼があった。

うお。

猫だった頃もしょっちゅう目はあっていたが(なかば強制的)人間に戻ったら戻ったらでまた違う。なんとというか迫力が違う。

同じ人間になったからなのか、何なのかはわからないが(人間になっても鈍ちんなのは変わらず)。

「お前はモモコだ。例え姿形が変わろうともモモコである事にな

りはない。俺にはわかる。」

心配するなという風にモモコの頭を軽く撫でてやる。

うおおお・・・

モモコがそんなガツクに悶えているとそれを見ていたホクガンが

「おい、モモコ。」

来い来いという風に手招きしながらモモコを呼んだ。

「何？」

怪訝そうなモモコに構わずホクガンは、それまで自身が座っていたガツクの真ん前の席を立って、そこにモモコを座らせた。

「モモコ、ガツクを見る。」

再度のホクガンの命令にモモコから疑問の声が上がった。

「何で？」

「いいから。やれ。」

偉そうに顎をしゃくったホクガンに、ムツとしながらも何か意味があるのかとモモコは正面のガツクを見上げた。

ガツクは相変わらず堂々とした態度で腕を組んで座っている。ラフなシャツとスウェットといういたってリラックスした恰好だが、「今まさに戦闘中！敵を500人殺したとこだよ！」と言つても疑われそうにないぐらいな威風を放っている。その姿は見る者によつては3日間夢にうなされそうな姿だったが・・・モモコの恋する乙女のフィルターが全開にかかった状態で見ると、まったく違う180度回転して同人物の事とは思えない感じになる。

例えば

眼があつた瞬間、「死ね」と言われそうな冷酷な眼差し 頼り甲斐がありつつも甘さを含んでいる様に見え（フィルター超全開）、  
「玉碎して来い」とひでえ事言いそうな酷薄そうに引き締まった薄い唇 何もかも約束してくれそうなそれでいて何処か色気を感じさせる（フィルターギリ全開）。

てへっ。

モモコの顔がほんのりと赤くなり、恥ずかしさのあまり思わずガツクから目を逸らしてしまった。  
それをモモコ以外の全員が注視する。

（・・・すげえよモモコ。ガツクを前にその反応。そんなのお前だけ）

（ガツクの前に座る女も珍しいが（理由は諸君もおわかりであろう）  
・・・照れる女なんぞ初めて見た）  
（モモコ・・・人間になつても歩く兵器がいいの？引き返すなら今のうち・・・いえ無理ね）

ガツクは当然、

「どうした？顔が赤いぞ。」

とからかうように言い、腕を解いて前のめりに屈みこみ、膝に肘を乗せてモモコの赤くなつた顔を覗き込んだ。

その顔は至極満足そうに微笑んでいる。

それにまた照れるモモコとの対比は、神の襟首をひつつかんで「どうしてこうなつた！」と問いただしいくらい非対称的だ。

「よくわかつたよ、モモコ。もう戻つてもいいぞ。おらどけ。」

ぞんざいにしっしつと手を振るホクガンに、モモコはいつもの様にムカツときた。で、つつい つい つい いつもの様に・・・

「な、なにさー！来いっつたり戻れつて言つたり！何考えてんのホクガン！・・・さん。」

モモコはいつも心の中で思つたり、時には猫語で抗議していたようにホクガンを呼び捨てにしてしまった。

モモコはゲツと口を抑え、慌てて「さん」を付けたが。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・お前・・・俺の事呼び捨てで呼んでたな？」

ホクガンがこのヤロウといたげな顔でモモコを見下ろした。

「エ。そ、そんな事・・・ないもん。」

「いや、明らかに後からさん付けしただろ。じゃあよ、こいつは？」

ホクガンがダイスを指差してモモコに名前を呼ぶように促す。

「ダイスさん。」

次にテンレイ。

「テンレイさん。」

ガツク。

「ガツクさん。」

最後に自分を指す。

「ホクガン。・・・さん。」

「おいこら。」

何度やってもホクガンだけ不自然になってしまつてモモコにダイスが苦笑して、

「もうええじやるホクガン。」

「そうよ、呼び捨てぐらいいいじゃない。心が狭いわよお兄様。公の場では国主と呼べばいいわ。」

「はい、テンレイさん。」 素直なモモコ

「お前は呼び捨てぐらいがちょうどいいのではないか。モモコがそうしたいのなら仕方あるまい。」

テンレイとガツクが承認した。

「何が仕方ねえんだよ！オメーらはいいだろつよ！さん付けだもんな！おいモモコ！何で俺だけ呼び捨てなんだよ！お前よりいくつ上だと思っただよ！？」（モモコは20歳だが、見た目からは10代にしか見えてない）俺もさん付けで呼べ！」

「ええー だってホクガン年上に見えないんだもん。国主にも見えない。」

「速攻か！即か！しかもすげえナチュラル！あと付け足すな！」

「さっ、うるせえのは放っておいて今後のモモコの生活をどうしようかの。」

「そうねえ……」

「問題は山積だな。」

「あ……よろしくお願いします。」

「お前ら冷た過ぎんぞ！！もつと俺を構え！！こら無視すんな！」

ギャーギャーとうるさい一時が過ぎ漸く本題に入った頃、時刻は真夜中をとうに過ぎていた……



6 - 2 受け入れ早すぎませんか（後書き）

ホクガンの扱いなんてこんなもんだろ。

## 6・3 ほんとうです

4日間。

それは、それまで存在すらなかった人一人を誕生させ、生活の基盤を整え、この世に現われさせたのに要した時間だ。

これはその血・・・はなかったが冷や汗と心の涙とツツコミの嵐が混じったドラマの記録である。

ガツク達はうるさいホクガンが渋々と席につくと、モモコの今後を話しあった。

「モモコ、本当の名前はなんちゅうんじゃ？元の世界があるんじゃない？」

モモコはコクリと頷いた。

「クロックス。モモコ・クロックスです。」

「ほーこっちの名前と同じじゃねえか。その髪色から来てるのか？」

ホクガンがへえと言う風にモモコの頭を見る。

モモコの髪色はいわゆるストロベリーブロード。金髪と言うよりは茶色に近いが光の加減で桃色が混ざる珍しい髪色であった。モモコの父はイギリス人でその父の母、つまりモモコにとって父方の祖母がこのような髪色であった。隔世遺伝と言うものである。

モモコが産まれた際、ふわふわのピンク色の髪に包まれた我が子を見て日本人の母が、桃のお花みたいと「モモコ」と名付けたのだ。

ピンクの髪だからピンクの毛色って単純すぎねえ？まっ単純なお前にピツタシだな。等とまたもやホクガンがモモコをカチーンとさせていると……

「ふっ。」

ガツクがテンレイを見て鼻で笑った。

それにテンレイが静かに青筋を立てる。

カーンツ……

何かのリングの鐘が打ち鳴らされた。

「最早、運命と言っても過言ではないな。俺とモモコは出会うべくして出会った……そうは思わんか？テンレイ。」

どや顔でガツクが言い放つと

「そうかしら。あなたの「モモコ」って名付けなんてどうせ丸くてピンクで子猫だからっていう理由でしょ。そんなの誰だって思いつくわよ。現に私が名付けた名前だって「コモモ」だったし。ソレぐらいで運命だなんて男って単純ねえ。」

テンレイがバカにしたようにフフンと笑った。

2人はくだらないどうでもいい事でいつもの口論……いや討論……  
・（もっいいいや）口喧嘩を始めた。

（す、すごい……ドンピシャだよ テンレイさん。さすがだな……

・あとガツクさん大袈裟だな〜運命だなんて(鈍)

言い返されたガツクの目に怒気が浮かぶ。が、奴も負けない。

「よく喋るなテンレイ。負け犬ほどよく吠えると言っが・・・」  
「なんですって!」

「たかだか名前一つでよくここまでムキになれるな。」  
「腹減ったのう。酒と軽くつまむものでも作るか。モモコ何か喰いたいもんあるか?ただしアルコールは駄目じゃぞ。」

ダイスが手早く作ったツマミとモモコを除く全員に酒類を配る頃、  
漸くガツクとテンレイの口喧嘩は止んだ。

「くだらない事で時間を食ったわねえ。(自覚あり!?)その名前はそのまま使いましょうか。モモコにとって大事なものでしょうし、呼ばれた時咄嗟に返事が出来なかつたらおかしいから。」

テンレイがレポート用紙にさらさらとモモコの名前を書いていく。  
モモコは久しぶりに見た自分の名前を感慨深く、だかくすぐったく  
思いながら覗き込んだ。

「なあにモモコ。どうかした?」  
「えっ・・・あ、いや久しぶりに文字になった自分の名前見たから・・・えへ。」

頬をぼりぼりと掻きながらモモコが照れたように笑うと・・・

「モモコ……」

ガツクが名前を呼んだかと思うとモモコの何倍も大きい手がクイツとモモコの顎をすくった。モモコの視界からテンレイやテーブルが消え失せ、代わりにガツクの涼やかと言うよりは凍つく様な眼差しとぶつる。

「な、なに、ガツクさん。」

「お前さえよければドミニオンの書道家にお前の名を書かせ、額に入れて執務室に飾りたいのだが。」

「やめて下さい、んな恥ずかしい事。」

「よし、名字は決まった。戸籍はどうとでもなるから後にするとして。」

一国の主の発言とは思えない事を言ってからホクガンは

「誰に真実を話しとくかな。まさか大々的に発表するワケにはいかないからな。」

ガツクの人生を、引いては軍部の今後を握っていた猫のモモコが消えたのだ、大騒ぎになる事は必至。

それらが巻き起こす、どんな不測の事態が起こってもいい様に、ある程度までは知っている人物がいた方がいい。

「まず、私達の補佐官は全員ね。」

「そうじゃのう。モモコもワシらも動きやすい。」

「大将達もな。」

「モモコは有名だからな。軍部にや大人しくしてもらわんと。」

「奥は私とリンドウ君で抑えるわ。」

「執政部とその他の部は問題ないだろ。元々モモコとは接触が少なえし。」

トツプダウンからの指示には、おかしいと思いながらも隊士達や職員達は従ってくれるだろう。

ホクガンは他に知らせておいた方がいい人物は……. . . . .  
ながら、ふと、目の前に並んで座るガツクとモモコを見た。

それにしてもすげえ体格差だな、まるで大人と子ども…….

ズガアァン!!!!

その時、ホクガンのド頭たまに稲妻が奔った。

天啓である。

いや……. . . . .いやいやいや!! マズい!! これはマズい!! これはマズいな俺!

このままじゃ……. . . . .ガツクが変態の烙印を押されちまう!!

この顔でロリだなんて世界滅亡クラスだろ!!!  
警戒レベル5どころじゃねえよ!世界全体でどうにかせにやアアア  
ア!!!!(混乱中)

この世界から見たモモコは童顔や身長の高さも手伝って14、15  
歳ぐらいしか見えない。

そこに37歳のガツクが並ぶと・・・完璧にロリコンの域である。  
猫のモモコを抱っこしたガツクは見る人の良心に最大限に訴えて「  
異常な猫好き」で救ってもらえるが、人間のモモコを抱っこしたガ  
ツクはどんなに好意的に見ても性犯罪者以外の何者にも見えないだ  
ろう。それはガツク本人が軍人なのにすぐさま通報したくなるほど。

「モ、モモコよう・・・お前いくつなんだ?ま、まさか小等部(こ  
つちで言うところの小学生)とか言うなよ。」

ホクガンは近年にないほどドキドキビクビクしながら一応聞いてみ  
た。

モモコはホクガンから珍しく無難な事を聞かれたので、小等部と言  
われたのにもかかわらず機嫌よく答えた。

「20歳だよ。小等部だなんて失れ」  
「嘘つけ。」

ホクガンは自分の望んだ結果だったのにもかかわらずモモコにツッ  
コんだ。

「う、嘘じゃないもん。ほんとに20さ」  
「モモコ・・・背伸びしたい年頃なのはわかるが20歳は言い過ぎ  
じゃ。心配せんでもモモコはきつとええ女になる。ワシが保証する  
ぞ。」

ダイスにまでいらん保証を付けられ、モモコはムカツとした。

「本当に20歳なんだってば！車の免許だって持ってたし大学は・  
途中でやめちゃったけど、就職だってしてたんだからね！」

「もうそれ以上はイタイだけだからやめとけ。な？・・・おい、  
これだけは言わせてくれ。」

「・・・なに。」

「・・・12歳は過ぎてるんだよな？」

コ、クロス・・・

モモコが猛然とホクガンに言い返すのを見てダイスはため息をついた。とガツクとテンレイが黙ったままなのに気付く。

「どうしたんじゃ、2人とも。お前からモモコに本当の年齢を  
言うように促さんかい。」

ガツクとテンレイは顔を見合わせた。

「・・・モモコが言っている事は本当だと思うわ。」

「何？」

テンレイがややぎこちなく首を傾げるとガツクが続けた。

「モモコは成人しているだろう。なぜならば」

「わあああああああああ！！！！」

ガツクが何を言おうとしているか気付いたモモコから大音量の声が  
発せられ、ホクガン達は突き抜ける様なうるささに耳を押さえた。



「……つるせえな！何だいきなり！」

ホクガンが真つ赤になったモモコを睨みつける。

「ガツク、さつき何を言おうとしたんじゃ。」

「ガツクさん！言ったらダメだからね！絶対ダメだから！」

「なぜだ。構わんだろう、お前が」

「わああうおおおー！！」

「猫の姿から変わったと」

「ぎゃあああああ！！」

「ベッドから飛び出したお前の」

「わあー！わあー！わあー！」

「……完璧に遊ばれとるのう、モモコ。」

「まあ、大体何があったかはわかったけどよ。つつかうるせえ。」

「可哀相なモモコ……。」

ゼエ、ハア、ゼエ、ハア……

モモコは叫び過ぎて息切れした呼吸を整えながら、ガツクを弱々しく睨んだ。

またガツクが何か言おうとしている。

オノレ ガツクさん！いい加減にしてよね！

「ガツクさん！それ以上言ったらタダじゃ置かないから！」

「ほう？どうタダでは置かないんだ？」

ガツクがニヤリと笑ってモモコを見下ろした。

「うっ！えーと・・・ガツクさんの弱点・・・弱点・・・」

・・・ガツクさんに弱点なんてあるか！？

頭を捻ってない脳みそを絞るが全く思い浮かばない。ガツクの弱点というかその気になればガツクをいいように従える事が可能なモモコだが、自分にそんな事が出来るとは露ほどにも思っていない。まあ、モモコらしいと言えればいいのだが。

「どうしたモモコ。俺をどうにかするのだろうか？」

ガツクはモモコの頤を軽くつまんで自身の顔を見るように上向けた。余裕たつぶりの顔。おとがい

その目はモモコのどんな表情も見逃すまいと鋭くだが熱く射抜く。面白いようにモモコの顔が赤くなり、困ったように眉が顰められガツクにいい様にされる口惜しさで目が潤んで来る。

それを見てガツクの胸も早鐘を打つ。背骨をゾクゾクとした感覚が駆けた。

「モモコ・・・。」

ザラリ

ガツクはややざらついた声で愛しい者の名を呟くと、モモコの顎をもっと上向けた。

「はい 終了ー！！時間切れです！戻って戻って！」

ピンクの霧がかかり始めた所で、いい加減イライラしたホクガンが強制的に終わらせた。

「チツ！なぜいる。」

「オメーが呼んだからだよ！！」

「もう帰れ。」

「ふざけんな！！おいお前らな、俺の許可なくイチャつくんじやねえよ、ウゼーんだよ。んなこたあ誰の迷惑にもならん所でやれ。」

ホクガンが毒づき、ダイスが話を軌道修正した。

「それにしても・・・本当に20歳なんか。童顔にも程があるじゃろ。」

「世の中には不思議な生き物がいるもんだな（取りあえずセーフだ。何も解決してなさそうだが法律はクリア）。」

「若々しい・・・と言うのはちょっと違うわねえ。」

そ、そんなに？

モモコは元の世界でも年相応に見られる事は少なかったが、そこまです言われるほどじゃないと思っていたので地味にシヨックを受けた。ホクガンがジロジロとモモコの頭の天辺から足の先まで観察するよつに眺める。

「な、なにさ。」

「お前さあ、俺達が勘違いするのも無理ねえんだぞ。なんだよその完璧な幼児たいけ・・・」

そこまでホクガンが言いかけた時、両サイドに座っていたダイスと

テンレイによつて腹部を強烈な肘打ちで同時に打ち込まれ、ホクガンは黙つた。

・・・そのまま静かに前のめりになるとテーブルに突つ伏す。

「あ、あの・・・」

「ごめんなさいね、モモコ。お兄様にはあとできつちりお仕置きしておくから。」

「あ、うん。いや、そんな事よりホクガンだいじよ」

「モモコは心の優しいええ子じゃのう。女心どころか人の心も知らんような奴じゃて、今更じゃが許してやってくれ。」

「は、はあ・・・」

その後もガツクにゲンコツで起こされたホクガンをまじえながら、ガツク達はああだこうだとモモコの今後の生活ために話をしているのだが・・・

(眠い・・・眠い・・・ふぁー・・・ねむい・・・パトラッシュ・・・僕もう眠いんだ・・・)

某有名な号泣必死なアニメのセリフをリターンしながら、モモコはうつらうつらと船をこいでいた。

「モモコ、眠そうねえ。」

テンレイの呟きにモモコのあれこれを模索しているホクガンから苛立ちの聲が上がる。

「・・・このヤロ・・・おい、モモ」  
「静かにしろホクガン。」

ガツクが低い声でホクガンを制す。

「だあってよ、コイツの意向も聞かにならんだろ。俺達だけで決めるもんじゃねえし。コイツのこれからの人生がかかってんだぞ。」

ホクガンは何も感情的な事でモモコにイラついているのではない。ホクガンなりにどうせならモモコもそして周りの者にも納得でき、支障ない地盤を整えてやりたい、何とかしようと思つたのだ。

猫のモモコが消えた今、それらを完璧にしかも早急に成すには一時の時間も惜しい。なのに肝心のモモコに頑張ってもらわないと進展する物も成らない。

「お前の言いたい事はようわかるがモモコは疲れきつとる。大変な経験をしたんじゃ、じゃけエ、そこを考慮せえ。」

宥めるようにダイスにまで言われるとそれ以上はホクガンも言えない。舌打ちするとモモコの意向は後で聞くとしてとんとん案件を詰めていった。

(ううん・・・ホクガンうるさい・・・いつもだけど・・・それにしても眠い・・・あと何か寒いなあ・・・寒々・・・暖ったかいモノ・・・ガツクさんの膝に乗る。)

モモコは半分眠りかけのボケた頭のまま、隣に座るガツクの腕と太股の間を通り抜けた。

ビシッ・・・





「た、他意はネエぞ？咄嗟に手が出ただけじゃ・・・こ、転ばんよ  
うに支えただけじゃて！だ、大事なつちゆうんはそういう意味じゃ  
のうて！だからそれ以上はねえと言っとするじゃろ！！！」

違うの！続きがあつたんだからね！聞きたいか！？っーか聞いて下  
さい！！

（ダイスの）心の叫びが聞こえてきそうな形相で。

ため息を付いて見つめるテンレイとオロオロするモモコ。

そして冷静にそれらを観察していたホクガンに・・・

またもやこなくてもいい天啓がキタ。

しかも最悪の。

コ・・・コレ さっきのよりヤベンじゃね？

猫の時にさえ触っただけで殺されそうなほど異常にヤミー（美味し  
いという意味ではなく。諸君ならわかるであろう）だったのに人間  
の女なんて・・・ど、どうすりゃいいんだ・・・

ホクガンは今にもダイスを殺害しそうなガツクの顔に戦慄した。



(どつする・・・どーすりゃいいんだ。さすがの俺も簡単にどつにかできる問題じゃねえぞ。)

モモコの今後の生活を固めるよりも遥かに難関なミッションに行き当たったホクガンと巻き込まれ必死人々。

彼らの苦難は始まったばかりである。

その四日後。

「皆さん、お早うございます。今日は訓練の前に連絡事項があります。」

壇上に立ち、硬い表情でカインは告げた。

隊士達は何事かと言う風な顔付きをしたが私語はもちろん身じろぎさえせずカインの言葉を待つ。

シン・・・と静まりかえることは、雷桜隊専用屋外訓練場。

整然と並ぶ屈強な隊士達。彼らは今、何か尋常じゃない何かが起ころうとしているのを肌で、と言うか目で見て知っていた。

じわじわと締め付けられるような緊張感。

それはもちろんカインから出ているのではない。

カインの背後に腕を組んで立つ彼らの大将ガツク・コクサからだ。

その威圧感溢れるデカイ体には何かが足りない。

「・・・皆さん、気付いておいでかと思いますが、えー、ガツクさんの・・・いえ、モモコさんが居ません・・・実は先日モモコさんは・・・本当の飼い主の元へと帰られました。」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

ええー！ええええー！

隊士たちの驚愕を余所にカインは続ける。

「実はモモコさんは・・・さる令嬢の飼い猫だったのですが、家人が目を離れた隙に悪人によって連れ去られ、紆余曲折を経てガツクさんの元へと渡った。と言うワケです。先日のレセプションでモモコさんの記事が載り、令嬢の家族から総所へ連絡がありましたして綿密な調査の結果、モモコさんの飼い主だという事が判明しましたので・・・ガツクさんは涙を惜しんでお渡ししました・・・。皆さんもモモコさんの幸せを陰ながら祈って下さいね。」

カインが厳かに言い切ると訓練場は墓場のように静まり返った。

今までモモコが原因で起こるガツクの鬼の様な形相と破壊神の様な行動を目の当たりにしてきた彼ら。

これから起こる事態を想定して恐怖のあまり隊士達の理性がグラグラと崩れかかる。

しかし理性は失われようと国内最強部隊。ガツクによって日々、戦場の方がマシな訓練を課せられ、最近もメンタルに多大な被害・・・いや試練を乗り越えた彼らの隊列は崩れない（だからなんだと言わないように）。

カインの話に何らおかしい部分はない。

そうこれがモモコの事でなければ。

それを証拠に訓練場の空気は

ぜっつつったい嘘。

裏だ裏だ裏だ裏の裏のそのまた裏があるに違いない！！！！

そう言っていた。が、

「この件について何らかの質疑がある者は直接俺の所まで来るように。」

この男のこの一言が放たれた瞬間からモモコの件は闇に葬られたも同然、絶対不可侵領域となった。

どんなに真つ黒な暗黒神でもガツクが「これは白」と言えば純白の天使長になるのだ。

「それと、モモコの件は安全性も考え、他言無用とする。・・・わかったな。」

「はっつ！！！」

「では、皆さんが納得した所で（全然していませんよお）、もう一つ連絡事項があります。」

こ、今度はな・・・に・・・

6・3 ほんとうです(後書き)

本当に何一つ解決してないな。

## 6 - 4 ヤンテレ発動です

ザワザワザワ……

カインの次なる連絡事項に隊士達はざわめき始めた。が、ガツクの目が少し狭まると

シン……

それだけで隊士達は物言わぬ像と化す。(一応言つとくけど恐怖だけで抑えてるんじゃないよ？ちゃんと尊敬もされてるからね。決してそうは見えなくても)

「軍部と奥が和解してからしばらく経ちますが両方の橋渡しと言いますか間をとりもつ部署がなく、おおいに皆さんにご迷惑をかけておりました。が、この度漸く最適な部署、責任者が決まり、皆さんの不満も解消できるかと。それでは紹介しましょう。軍部特別広報課課長、モモコ・クロックスさんです。」

隊士達からして右側から小柄な女の子(にしか見えない)が、タタタタ……と駆けて来て、壇上の前で止まる。

「モツモツモモコ・クロックスです！じゃ、じゃ若輩者ですが！」「クロックスさん、マイクを使わないと皆さんに聞こえませんが。」「ゲツ！」

ド緊張のあまり盛大にどもりながら挨拶したモモコだったが、事前の取り決めをパニくって忘れ、冷静にカインにツッコまれる。くうっくうっく！

モモコは真つ赤になりながら、あたふたと壇上にえっちらおっちら（大きな体躯の者共に合わせて作られた壇上はモモコにとってアスレチック）上った。

「す、すみません・・・」

「気にしなくていいですよ。隊士達は（あなたの姿に）驚いて気にする余裕はないでしょうから。」

カインはガツクに決して睨まれない程度に、しかしモモコを気遣うという芸当をやつてのけた（ガツクの補佐官は最早お前にしか務まらないであろうカイン。雷桜隊はお前のおかげで8割ガタもっているぞ）。

「み、皆さん 初めまして！モモコ・クロツクスです！若輩者ですが精一杯頑張りますのでよろしくお願いします！」

マイクを握ったままモモコは深く頭を下げて自己紹介を終えた。

そして、静かすぎる場内に気付いた。

慌てて顔を上げると雷桜隊の面々が驚きの顔で自分を凝視している、中には口をぽかんと開けている者がいたり、指差している者までいた。

（な、何だろう・・・何か大袈裟に驚かれてない？・・・ポツと出のあたしなんか重要な役職についてるんで驚いてるんだらうか。やっぱこういうのってダメなんだらうな・・・そりゃそうだよな思いつ切りコネだし。）

鈍いというか相変わらず斜め思考のモモコだが、隊士達は勿論そんな事に驚いているのでない。

それどころかモモコの姿を見た途端カインの言ったことなど頭から根こそぎすっ飛んでいた。

裏の裏の裏の裏のそのまた裏が……出た。

日の光に煌めくピンクが混じった茶色の髪。

小さな顔に不釣り合いなほど大きくちよつと垂れた瞳。

その目の色はよく見ればあの小さな猫と同じ色合いなのができる。

真新しい軍部の黒い制服から伸びた標準程度の白い手足。

そしてこの世界では異様に低い身長。

中等部……いやまさかの小等部？ いやいやいや！ そんな事より！！！！

モモコちゃん……？

「あ、そうそう。クロックスさんは不慮の事故でご両親を亡くされてまして、そのご両親と親交の深かったガツクさんが後見人をしていきます。ちなみにモモコさんは軍部に在籍してはおりますが隊士ではありません。なぜならば奥やその他の部署と改めて交流を持つに当たり、我々軍人ではなく、一般の感覚を持った方があちらの気持ちも、我々の言いたい事もうまく伝えてくれるのではないかと思うからです。全てはドミニオンのさらなる繁栄と安定のための国主直々の推薦ですので皆さんもクロックスさんにご協力お願いしますね。

あとクロツクスさんについて何か質問したければ（ガツクさんに行きつくのを覚悟で）どうぞ、個人でなさって下さい。」

カインは軍部きつてのジョーカーをいまだショックから抜けきれない隊士達に提示した。

こうなれば彼らはどんなに言いたい事があるうとも、どんなに不可解に思っていたとしても沈黙のうちに沈む他はない。

モモコは沈黙を訝しげに見ながらチラツとガツクを見上げた。

視線を感じたガツクはモモコを見下ろす。

その眉間にはこの事が決定してから刻まれ続けている皺があった。

（まだ怒ってんのかな。でも！これだけは譲らないぞ！）

（前回の続き）

激化必至のガツクのヤンデレ問題はひとまず嚴重に封をしてマントルに到達するまで埋め込み、当面のもっと建設的な問題に超前向きな（見ない振りともいう）ホクガンは、モモコが完全に目を覚ましたのを見るとこの世界で生活していくうえでの重要な事を再び検討し始めた。

「取りあえず、後見人がどうしても必要だ。この世界に居るお前に当然だが身寄りがいねえ。酷な事を言うようだが天涯孤独の身にや、何をするにしても保証人、しいては後見人が必要だぜ。」



ホクガンが懸念する表情で言うのをモモコも神妙な顔で頷いた。

「俺がやる。」

ガツクが低い声で名乗りを上げた。

「え……」

だろーな。

モモコだけがいいの？みたいな声を上げる中ホクガン以下2名は思った。

ガツクがモモコに関するありとあらゆる事を他人にゆだねる筈がない。

(でもあいつが「やる」「つっ」と「殺る」って脳内で変換されて聞こえるんだよなあ、しかも自動変換。)

どうでもいい事を考えるホクガン。

「……ガツクさん、無理しなくてもいいんだよ？あの……飼い主としての責任とかだったら、もうすごく良くしてもらったし、だからその……」

モモコはガツクがいの一番に申し出てくれた事が何より嬉しかったが、責任感で引き受けようとしているのでは……と言いかけるがこの男に責任感とか謙虚とか譲る精神があるはずもない。

「いいや、俺にはお前に関する全ての事に関わる義務がある……  
・お前と約束したではないか……それとも俺では不満か？」

お前は俺のモノなのだから面倒を見るのは当たり前。

あの約束はお前が人間に変わったとしても履行は当然。  
俺に代わる者があるのならここに連れて来い……。直ちに存在す  
らなかつた事にしてくれよう。

(裏の声が聞こえそうだぜ……)

ガツクと長い付き合いのホクガンは腕を組んで仁王立ちする、想い  
人に向ける態度ではないガツクを半目で見て正確にガツクの心の声  
を読んだ。

「そ、そんな事！不満なんてあるわけないよ！あ、あの身に余るっ  
ていうか……。本当にいいの？」

ちよつと顔を赤くしながら上目遣いで躊躇うモモコ。

たちまちガツクの空気が重く濃密なモノになり、目はモモコを溶か  
してしまいそうなほど熱が宿る。

「いいに決まっている……。お前のためならば……」

「じゃあ世界征服してくれるう？」「お前が望むならいいとも！」  
「やったア！手始めにゼレンからね！キャハ」「フツ！塵も残さ  
ん。」「素敵！」なんつって。

ホクガンのバカげた妄想と(だって暇なんだもん！)

それは逆効果にしかならんぞ、モモコ。

モモコ……。これ以上は危険よ！やめておきなさい！

2人の忠告も空しく

「……ありがとう……ガツクさん。」

はにかみながらも嬉しそうに笑うモモコ。

グハアツ！

痛恨の一撃！

ガツクは56814ポイントのダメージを受けた。

ホクガンはモモコの笑顔にやられ、ヨロヨロと立ち上がったかと思  
うと両膝を付いて何やらブツブツとつぶやき始めたガツクを見て、  
また勝手に付け足した。(セリフ付き)

「ガツクさん？大丈夫？」

ガツクのHPを大幅に奪ったモモコだがそんな事知らないので普通に  
心配する。

「気にすんなモモコ。勝手に復活するから、ほっとけ。それより、  
この中から一つ選べ。壹、学生をやる。貳、働く。参、俺のパシリ  
をする。四、何もしたくない。」

「取りあえず、参だけは絶対嫌。」

モモコはなぜそんな事しなくてはならんか！と言わんばかりに顔を  
顰めた。

そしてうーむと腕を組んでこれからの事をどうするか改めて考え始  
めた。

これからこの世界で生活していくに当たって、何はなくとも先立つ  
物が必要なのではないか。どうしても学業をしたいわけではなく、  
働く方が自分にはあっていると思うし、むしろ好きだ。

猫の時はともかく、人間に戻った今ではガツクの世話になっている

訳にはいかないだろう。

当面はガツク達に厄介をかける事になるかもしれないが、

(自立できるようになったら・・・できるように・・・になったら。)

モモコはそこまで考えて、今まで側にいるのが当たり前だったガツク達ともしかして離れる事になるかもしれない事に気が付いた。

急に心細く、不安になるのを、目をギョツとつむって堪える。

もう充分な事をしてもらってる。これ以上は考えられない程良くしてもらった。今だって自分の今後を真剣にどうにかしようとしてくれる。

(甘えちゃダメだろ。五体満足だし、頭だってそんなにバカじゃないつもりだ。一人でだって・・・)

そして、無理に笑顔を浮かべると、皆を見渡して元気よく返事をした。

「働きたいかな。(働くの)好きだし、早く自立しないとね!いつまでもガツクさんの世話になっている訳にもいかないし。」

「どういう意味だ?」

本当に勝手に復活したガツクが間を置かずモモコに問いかける。

え、あれ?

ガツクの妙に険しい顔に面くらいなながらもモモコは返事を返した。

「いや、あの・・・猫の時は保護してもらってたけど、人間に戻ったからにはそうはいかないでしょ?自分一人の力で生きて行かないと・・・アレ?」

シーーーーーー。

モモコが言い終えた瞬間、空間は凍りついた。

あ、あれ？どうした？

モモコは、もしかして心配されたり、もしくは励ましてくれたりする場面を思い浮かべていたので想定外の静まりかえった部屋の空気に戸惑った。

それに発言したモモコではなく皆いつの間にか近くまで来たガツクを注視している。

？

モモコもつられてガツクを見た。

何となく、なーんとなくだが若干ガツクの影が濃くなったような気がする。

空気が渦巻いている様な寒いんだか熱いんだかよくわからない感覚。恐る恐るモモコはガツクに声をかけた。

「どうしたのガツクさん。眠いの？」

この状態が眠いワケねえだろ！！見てわかんねえのか！魔王様降臨だよ！！どうしたのはお前の頭だ！！

ホクガンからエア・シャウト版ツッコみが入った。

ガツクはモモコの脳天気な質問には答えず、

「モモコ……お前が働く必要はない。」

受け取る者によっては心肺停止な声で言った。

「え。でも、働かないとお金だって稼げないし、お金がなかったら自立だって難しいでしょ？」

ガツクの予想外の言葉に戸惑いを深めるモモコ。

「自立？何のために。働かなくとも、金が欲しいのならいくらでもやるう。欲しい物があるのならは何でもくれてやるうではないか。だが、俺から離れる事だけは許さん。」

ガツクは無表情で言い切った。

ハイ

ヤン発動です。

帰りたいけど無理だよー超無理だよーだって軍部半壊させるわけにもいかないじゃん？俺らが止めねーとどうなるかわかんねーだよ。むっちゃ嫌だけど。ていうかなんでお前平気なワケ？普通はビビりまくって気絶してるトコだよココ。

「な、何言ってるんだよガツクさん！お金が欲しいとかそんなんじやなくて！あたしも猫じゃないんだよ？このまま・・・このままお世話になりつ放しなんてイイわけないじゃん！」

「何か問題あるか？お前は俺とずっといる、お前の面倒は俺が一生見る。今までと一緒だ。」

マントルに埋めたはずのヤンデレはそんな封印、歯牙にもかけず浮上すると（ホクガンの脳内でだけどね）結構早めに炸裂した。

モモコは？然と固まったまま何処かでこれと同じ経験をしたの思っ出した。

（・・・ここ、これ前にもあった。あたしが・・・そうベントさんの頬をペロツとした時だ。あの時もワケわかんない事言われてガツ

クさんとケンカっていうか追いかけてっこしたっけ・・・懐かし・・・  
がってる場合じゃないだろ！)

「あたしは。」

ガツクは胸を焼き尽くさんばかりに暴れる想いとどうやったらモモコを困い込む事が出来るかを冷静に考える想いとを同時に感じながらもモモコの小さな小さな声を聞く。

こんなにも俺の中は相反しているというのに・・・お前は。

ガツクはモモコの強い意志の籠った目を見つめ続けた。

ガツクはモモコのどんなに小さな言葉や仕草でも絶対に無視できない。

はにかむ様に笑い、困ったように首を傾げ、自分の名を呼ぶ時は少しだけ上ずるその声。

その全てがガツクの五感を揺さぶる。

ガツクにとってモモコはかけがえない存在だ。

なのにモモコは簡単にガツクから離れると言っただ。

その口で。

ガツクと共に在ると約束したその口で。

俺の半分もない脆い体の。抱き締めたら易く壊れるだろうとお前は・・・

・なぜこんなにも。

「あたしは、ガツクさんにずっと守られてるわけにはいかないよ。そりゃね、ガツクさんに全部任せて、おんぶに抱っこなんてむっちゃ楽だろうけどさ、でもこんなのあたしじゃない。そんなのあたし耐えられない。ガツクさんに今までたくさん良くしてもらって、こんな事言っのって生意気だし、何様って感じだろうけど、でも、

でもあたしにだって意思がある。何でもかんでもガツクさんに従うんじゃないから。」

モモコは頭ではなく心で思った事をガツクにぶつけた。猫の時はそもそも言葉事態が通じないので半ば諦めていたものだが常にそれはモモコの中にあった。ガツクの事は好きだが（もちろん異性として）だからと言ってガツクのいうままになったり、任せっきりにするのは違う。

（ガツクさん責任感強いからそう言ってくれらるんだろうけど（違うぞーどつちかと言ったら邪な事しか考えてない）、あたしはそんなふうに見て欲しくない。あたしを一人の人間として一人の女性として見てもらいたい（見てる。お前が猫だった時から超見てる、立派な変態だ）。無理だろーがなんだろーがガツクさんと対等になるんだから（確かに対等じゃないな。お前がその気になれば世界征服できそうなほどガツクを従えているから）。）

あたしという一個の存在を認めてもらいたい。特にあなたから。

ガツクのともしれば相手を目茶苦茶にしまっほどの激情とモモコの一途に想いながらも相手と共に立ちたいという心のぶつかり合いは結局のところ……

「わかった……。」

モモコには思いもよらない程深くモモコを想うガツクが負けた。

「だが条件がある。」

だが、膝をついたとしても只ではついてやらないのがガツク。



「働くから。」

用心深そうにモモコが先手を打つ。

「心配するな、働くななどとはもう云わん。だが俺の目が届く所、軍部で働いてもらう。」

軍部・・・かあ。

うーん、と腕を組んでモモコは考える。

隊士っていうのはないだろうな。軍人など自分とは対極にある職業だろう。

ドミニオンの軍部はいわゆるそれ専門の仕事というものがない。

それはなぜかと言うと、フリフリのフリルが付いたエプロンを付け、甘味を欲しがる者達のためにモンブランやガトーショコラを作るパティシエ（身長3m越えの敵ついおっさん）も、洗濯バサミを啜えながら真つ白なシートを干すランドリーマン（顔に十字の傷がある鋭い顔付きの青年）も、窓ガラスをハアーツと息を吐いてキュッキュツとクロスで磨くクリーナー（スキンヘッドの眉なし強面野郎）も、皆隊士達であるからだ。彼らは自分達で出来る事は全て自分達でローテーションを組んで実行している。軍部で働く全ての者が隊士。

国の有事には最前線で戦う事が職務である彼らは隊士になるための体力とペーパーの試験がある。

ちなみにジエン率いる武器開発製作部隊、雪董隊は特別枠で体力テストはないがその代り超難関なペーパーテストがあり、他の部隊よりも受かる確率は断トツで少ない狭き門と評判である。雪董に入れたとしてもひとたび有事が起これば隊士として前線へ配備され、常に武具の具合や防具などの修理、補強、そして要望があればその場

で製作なども担当する結構体力も使う専門職だ。  
他にはカイン達補佐官のように固定された仕事もあるがそれでもちやんと隊士として前線に立つ。

「あの・・・言い返すようで心苦しんですけど、軍部にあたしに来る仕事ってあるのかな？そもそも軍部って隊士じゃないと入れないし。そのための試験だってあるんでしょ？あたし受かる自信ゼロだよ・・・」

「俺の補佐官。」

「カインさんがいるでしょ。言つとくけど無理矢理規則を捻じ曲げるのはなしだから。大将のガツクさんがそんなことしちゃダメだよ。勧めてくれるのは有り難いけど・・・軍部は無理なんじゃないかな。」

「補佐官の補佐。」

「ガツクさん、あたしが言った事聞いてた？」

なおも諦めないガツクに呆れた視線をモモコは送った。

「確かに軍部は難しいかもなあ・・・お前んとこどうよ。」

黙って2人の会話を聞いていたホクガンが隣のダイスに聞く。だがダイスも眉間を寄せながら顎に手をやって唸った。

「ない・・・じゃろうなあ。というかモモコのこの体の小ささではできる仕事は限られてくるんじゃないか？」

この世界の平均身長を遙かに下回るモモコの身長。

だいたいのが平均が男性が2m越え、女性は1m90cm程だ。

平均でこれなのだから身長が高い奴はうんと高い。

ただでさえガツク達高身長者は他の者が小さく見える。その平均

身長の者たちからさらに低いモモコはまるで少女と言ってもおかしくはなく見える。

「ただどなくモモコが軍部に居てくれた方が何かと対処しやすいのは確かだよな。特にガツクの側に置いといた方がいいのはな。」

たいていの事ならひと睨みで解決してしまうだろう。

「モモコ、向こうの世界で就職しottaゆつたな。どんな仕事だったんじゃ？」

ダイスからナイス提案が出された。

「出版社。地元中心の広報とかコラムとか載せた情報誌みたいな雑誌とかガイドブックとか作ってたの。あたしなんて入りたての新人だったから雑用ばかりさせられてたけど、たまには小さな記事を書かせてもらってました。」

「そう。じゃあ文章を書くのが好きなのね？」

「うん。色んな所に取材に行ったり、いろんな人にインタビューしたりしてそれをたくさんの人に読んでもらうの夢だったから・・・大学の途中だったけど来てもいいって言われた時は迷わず仕事を取りました。」

えへ、と笑うモモコの顔を見てテンレイは閃くものがあった。

「隊士じゃなくても軍部に居られて、尚且つモモコが好きな仕事が出来ること・・・簡単じゃない。職種がなければ作ればいいのよ。」

あっさり言っとホクガンに向き直り、

「前から言ってたアレ、モモコに任せたいんだけど。」  
「アレ？何それ。」

は？としたホクガンにたちまちテンレイの目が氷点下まで下がる。

「……………何か言ったかしら国主。」

「あーっ！！アレね！はいはい！」

「……………忘れてたのね？どつりで返信がないはずだわ。」

「いやいやいやそんな事ねえよ？おつかしいなー行き違いってヤツ？よくあるよねー。」

「………………………………………」

素直に謝っちゃえばいいのに……………

モモコは氷の刃と言う圧力に晒されるホクガンを呆れて見た。

「このボンクラは放っておけテンレイ。今に始まった事ではない。それよりモモコに合った職種を作ると言う話は？何か案でもあるのか。」

ホクガンなど野となれ！とガツクはテンレイの方に身を乗り出す。

「……………国主、この件はまた後でじっくりお話ししましょうね？逃げたりしたらどうなるかわかってるわよね。」

テンレイはホクガンにトドメを刺すとガツクとモモコに視線を移した。

「軍部と奥が和解してから少したつけど、あまり進展がない様なの。」

「

テンレイは頬に手を当て困ったように眉尻を下げた。

「どついう事じゃ。因縁などつけとらんじゃろ？部下共にはきつく言うてるぞ。」

「俺も同様だ。特に何かあったと言う報告はないが。」

「そうなのよねえ・・・でもどつやらそこが問題なようなの。」

「??？」

今度ははっきりとテンレイがため息が落ちた。

「慇懃無礼すぎるんだよ。」

ホクガンが手を組み頭の後ろに廻しながら大きく伸びをした。

「そう。隊士達は何を遠慮してるのか必要以上に奥に接してこなくなったのよ。多分距離感がわかってないだけだと思うけど、何か用事があったても丁寧過ぎるほど畏まるの。あんなにそっけないと言うか無言と言うか逃げ足が速いと言うか。ただでさえ可愛くない顔でそんな態度をとられると職員達も不気味がっちゃって・・・なんだか前より軍部を怖がってるのよ。」

「・・・中間と言うモノがないんだろうか・・・」

モモコは極端な態度しか出来ない隊士達に呆れた。

不器用と言うか一直線と言うか戦う事に関してはエキスパートである彼らも人間関係の（特に奥は女性が圧倒的に多い）機微は苦手なようである。

「どつにかならないかってテンレイに相談されてたんだよ。すっかり忘れてたけ・・・あ、ヤベ。」

「…………お話は長引きそうねえ お兄様。」

ウフフ……と笑うテンレイに顔が蒼白になるホクガン。

「それとモモコの件がどう繋がるのだ？」

「前にモモコに奥と軍部の架け橋になつてほしいと言つた事覚えてる？」

「いや。」

コイツら…………

モモコはテンレイの美しい額に青筋が浮かぶのをヒョエエとしながら見た。

「テ、テンレイさん抑えて！あ、あたしは覚えてるよ！テンレイさんがあたしに猫用の服を持って来てくれた時でしょ？」

テンレイはあの時の可愛いコート姿のモモコを思い出したのか機嫌を直し、ニツコリ笑つて頷いた。

「そうよ。モモコはこのバカどもと違つてお利口さんね。」

本当に容赦ないよねテンレイさん。

モモコは引き攣つた半笑いで応えながら思った。

「奥とその他の部、軍部の相互理解を深めるため、モモコの職業のため、広報紙……みたいなものを作つたらどうかしら。互いの良さとか軍部はこんな所、全体的に可愛くないけど特に害はないわよ、みたいに紹介してやる情報誌。それをモモコが担当するのよ。」

「え……ええーっ!!!」

モモコは仰天して思わず大きな声が出た。

(そんな・・・ちょっと大事すぎない？あたしみたいな素人に毛が生えた程度のペーパーにそんな事任せていいのかな)

「あたしに・・・できるかな？そんな大事な仕事。」

自信なさそうにモモコが呟く。

「大丈夫。出版社に勤めてたのなら多少の流れは習ったでしょう？私達もサポートするからきつとできるわよ。」

「まずはやってみたらどうじゃ？無理ならまたその時考えればええじゃろ。」

「そうだな、その時は俺のパシリでもやってもーらお。」

うぐ・・・それだけはイヤだ。

「どつするモモコ・・・やはり諦めるか？俺としては願ったりだが。」

モモコはガツクを見上げた。

意地悪そうにニヤついている。

いつものモモコならムカつくはずだが今回はそうはならなかった。なぜなら反対しつつもガツクの目が後押ししているのがわかったから。

わざと意地悪な言い方をして背中を押ししてくれている。

だからモモコも・・・

「べーっ！そんな事にはなりませんよ！やってやる！死ぬ気でやり遂げて見せますとも！見てろ！ガツクさん！」

モモコはビシッ！と人差し指でガツクを指し宣言した。

やる気に満ちたモモコの真っ直ぐな目を暖かい眼差しで受け止めつつも少し残念に思ったガツク。

モモコの再出発がほぼ決まり、ほのぼのとした所で幕は降ろされる。

………はずだが、これだけで終わるほど奴のヤンデレ具合は甘くなかった。

「では次の条件だが。」

はい？



6 - 4 ヤンデレ発動です（後書き）

前回と同じ終わり方だなオイ。

6 - 5 初仕事は迷子です

ガツクの条件は意外とシンプルなものだった。

「仕事以外の時間は俺と過ごす。」

うーむ、シンプルだが奥が深い。いやむしろ深すぎて底が見えないくらい深い。

(うーん。)

モモコは腕を組み、難しい顔でガツクの無茶ぶり条件を熟考すんなよ。しなくてもわかるだろ) した。(

「あの……。」

全身にガツクの圧力を感じる。

モモコは汗をかきながらも果敢に言うてみた。

「あ、あの、質問があるんですけど。」

ヤンデレの圧力が増す。

それはリビング一杯に広がり、モモコだけでなくホクガン達も容赦なく晒された。

「……なんだ。」

「ね、眠る時はどうするの?」

「無論、一緒にね」

「イヤです。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

うおっ。

モモコは拒否られたガツクの顔がトンデモナイ事になったのに怯んだが、恋する乙女の恥らいパワーはそんなモノには屈しなかった。

「い、いいい一緒になんて眠れないから！無理！」

「・・・・・・・・なぜ無理なんだ。」

「えっ・・・・・・・・は、は・・・・・・・・から。」

？

「聞こえんぞ。」

「・・・・・・・・は・か・いから。」

ガツクはフウと息をついて

「言えんのなら了承したと」

「恥ずかしいからですっつ！！！！」

モモコは大音量で叫んだ。

「・・・・・・・・恥ずかしいだと？何を言っている、一緒に寝る事の何が恥ずかしいんだ。猫の時はいつも一緒だったし、最近などお前から俺の体にくっついてくるではないか。」

「あ、あの時は猫だったし！それに寒いんだもの！今は人間だから！無理！」

「何が言いたいのかさっぱりわからん。順序立てて話せ。」

モモコはしどろもどろになりながらも、何とか添い寝だけは回避しようとして懸命に説明する。

要するに猫の姿の時はペットとして己を認識していたので特に意識もせず抵抗もなかったが、人間に戻った今、しかも好きな異性と恋人でもない（ここは省いた）男女が一緒のベッドで眠るなど羞恥過ぎてとてもではないが休む事などできない。

ちなみに誤解のない様言うておくが、くっ付いていたのは寒い冬に暖かいモノにすり寄るのと同じで、はつきり言うて湯たんぽ代わりだ！と断言し、ガツクにとってシヨックを受け・・・る事はこの男にとってないので「ああ、そうか」と普通に返され、返されたモモコの方が「え。」となる場面もあった。

諸君も薄々わかつているだろうがガツクは「事、男女の仲に関してはものすっごい鈍い上に斜め思考」の持ち主だ。

自分も相手も好意を持っている男女が一緒のベッドでナニをするかと聞かれれば、

「寝る。姿勢は隙間なくくっ付いて寝るのが好ましい。」

と、お前の嗜好は聞いてねえよ的答えが返ってくるのが奴なのだ。

何らかの拍子にスイッチが入り、本来のナニに移行する事も、まあ、成人の男なのであるにはあるが、基本ガツクはモモコが常に己に触れているだけで満足する男だ。

「・・・だからその・・・眠る時は別々で・・・それ以外だったら・・・っていうかあたしどこに住めば」  
「俺から離れる事は許さんぞ。」

斜め思考だがヤンだけはすかさず入れるややこしい大男。

「お前は（ガツクから離すとガツクが）危険だからよ。ガツクの家に住め。なあに後見人の家で暮らすんだ、誰もなんとも思わねえよ（思ったとしてもガツクが怖ろしくて指摘できねえだろうし）。部屋なら余ってたんだろ。」

ガツクがモモコから目を離さず頷く。

「さてと、俺とダイスは新部署を立ち上げっから、ガツク、お前はモモコの事情を必要だと思った奴らに話してコイツと引き合わる。あんま脅しすぎるなよ。テンレイはモモコに付き合って入用なもん揃えてくれ。言わなくてもわかっと思っけど奥の方は任せたぞ。」

（あ、あの・・・）

ガツクはホクガンが言い終らないうちに、財布からカードを取り出しテンレイに放り投げる。

その、黒く輝くカードを上手くキャッチしたテンレイはにこっと笑って

「これって・・・」

「いくら使っても構わん。必要ならば何でも買え。」

「ですって。よかつたわねえモモコ。」

(えっ?えっ?)

「モモコ・・・俺も付いて行ってやりたいが仕事がある・・・終わったら迎えに行くからな。」

来なくていいわよ。

何を言う。また攫われたらどうする。

そんなにしょっちゅう攫われてたまるか!

護衛でもつけるか?霧藤は隠密活動もできるぞ

(みんな・・・)

自分の意向などないかのようにガンガン進められるモモコの今後。だがモモコはああだこうだと話しあう4人に不快感はなかった。それどころか暖かい気持ちで胸が満たされた。

(こんなに甘えちゃっていいのかな?ダメだよな?ダメだけど・・・ヤバい。嬉しくてニヤける。)

モモコは頑張って真剣な顔をしようとしてついつい上がる口角を手で隠し、まだ買いい物に護衛が必要か話しあうガツク達を見た。

突然降ってわいたような出来事にも、変わらぬ態度で自分に接し、親身になって考えてくれる仲間達を。

「そーだ、そーいやお前に言う事があつたんだ。」

モモコのキラキラ感激をホクガンの間延びした声がいつもの様にぶち壊した。

だが続けた言葉は真剣である。

「いいか、これだけは肝に銘じておけ。・・・絶対、誰に対しても卑屈になつたり、自分を卑下したりするんじゃないぞ。はつきり言つてお前はこの世界じゃ異質な存在だ。体も小さえし顔も子供にしか見えねえ。ガツクの庇護があるとはいえ、周りの奴らにやガツクや俺らと並ぶとお前は明らかに貧弱で劣つて見えるだろうよ。」

「ホクガン。」

ガツクから刺す様な視線と鋭い声が跳ぶが、ホクガンはそれを真つ向から受け止めた。

「黙れよガツク。俺は一般から見て当たり前の事を言ってるんだぜ。いいかモモコ、どんな嫌な事があつても小さくなるなよ。やいやい言う奴らは必ず出てくる、俺らもフォローはするが奴らを黙らせるのはお前自身がしないと意味がねえんだ。そんな時やあ死に物狂いになつてお前を認めさせてやれ。お前がやるんだぞ？わかつたな。」

モモコはホクガンの睨みつけるような強い眼に圧倒されたが、やがてその目を見つめたままゆっくり頷いた。

ホクガンはモモコの覚悟を確かに見てとる満足そつにニヤリと笑う。

「まあまあ、そんな力まんでものう、もっと気楽にやりやええ。強

くなるのはええ事じゃ、じゃがなモモコ、一等大事なんは一人で抱えこみ過ぎん事じゃ。オメエは一人じゃねえんだぞ。」

ダイスの諭すような静かな声。

「そつよモモコ。無粋な男共にはわからない繊細な困りごとがあったら真つ先に相談しなさい。遠慮なんてしたら許さないわよ。同じ女性として、先輩としてドーンと頼りなさい。いいわね？」

テンレイが慈しむように目を細めてモモコに微笑む。

ヤバイよ。ほんとに。なんでそんな嬉しい事言ってくれるかなあ。我慢できなくなっちゃうじゃん。

「ほんとに・・・あたしみたいな得体のしれない奴にここまでしてくれてありがとう。あたしに・・・何の恩返しができるかわかんないけど。」

喉の奥からこみ上げる塊をなんとか押し込みながらモモコは続ける。

「何の役に立つか、それとも立たないのか、今は全然思いつかないけど。この世界で、あたしにできる事全部して、そしてそして。」

モモコは泣き笑いの顔で、震える声でやっとの思いで言葉を紡ぐ。



「みんなと、ガツクさんと一緒に、思いっ切り楽しむよ。あたしの新しい人生を。」

モモコの頬をとうとう我慢しきれずコロコロと涙の粒が転がり落ちる。

ガツクは長い指でそれをそっと拭くと

「・・・まったく・・・笑ったり怒ったり泣いたり・・・忙しい奴だな。」

この男にしては優しい声で言い、ホクガン達でさえ初めてみる穏やかな顔でモモコに微笑んだ。

それにもっともっと胸が熱くなったモモコ。

「ガツク、ちょっと来い。ダイスも。」

ホクガンは訝しげなガツクとダイスをリビングの外、廊下に連れ出した。

「何だ。」

「残る問題はお前だよ。ガツク。」

ホクガンはビシィ！とガツクを指差して言った。

「問題？俺がか？何も問題は・・・」

「あるに決まってるんだろ！！モモコに甘いのもいい加減にしゃがれ！」

「・・・モモコは唯一だ。俺が守ってやらねば・・・」

「言うな。お前の気持ちはよくよく、わかりたくねえほどわかってる。モモコを真綿で包んで側に置きたいんだろ？だがな、今までの事を思い返してみろ。あいつが黙ってされるタマか？しかもニヤンコの時はともかく今のモモコは人間なんだぜ？モモコが動く前にお前がゼーんぶ片付けてちゃモモコのためにはならんだろ？」

「・・・」

「お前のモモコ大事はよお、ともすればアイツの人権を無視する事にもなりかねないんだぜ？アイツは人間なんだ。お前や俺らと同じ感情を持ったな。お前に守られたままなんてそんなの自分じゃねえつつたあいつの声をさつき聞いたばかりだろ。・・・いいか、これからのお前はアイツが猫だった時より相当の我慢を強いられる事になるだろうよ。モモコが時には傷ついたり、挫折したりした時も、アイツが自分で立ち上がるまで手え出さんで見守る我慢がな。その、せつまい心によく刻むこつた。」

「・・・」

ホクガンは黙りこんでしまったガツクを気遣わしく見ながら言った。

「モモコもやる気になってる。その芽をお前が摘まん事を祈るぜ。」

俺はお前らみたいに好きな女がいるわけじゃねえけど、もしいたとしてもそいつの道の邪魔だけはしたくねえ。例え俺自身の心を殺す事になってもな。」

「・・・」

「・・・厳しい事言うのう、ホクガン。確かにその通りじゃが・・・ガツク、モモコから助けを求められたら遠慮のう守ってやりやえ」

え。お前の場合やり過ぎるんが玉に傷じゃからの。加減は考えんといかんぞ。・・・そうじゃの・・・取りあえず、仕事に関しては口を挟まん事から始めてはどうじゃ？モモコからSOSがくるまで放つといたらええ。」

ホクガンは言い過ぎだと自分でもわかっていたが、ガツクの暴走しやすいモモコへの思慕にはこれくらいの縛りがあった方がいいと思いい敢えて厳しく言った。

だが、これが後に裏目に出るとは思わなかった。

こうしてモモコは第三の人生をスタートさせた。

その後、テンレイと共に大量の買い物にしたり、シラキ達やカイン達に引き合わされ、すったもんだしたりされたり、部署の部屋を決めたり、それらの準備に明け暮れた4日間が過ぎ(この間にさすがというかどうかしようもないというかガツクの指示によってモモコの部屋の増改築が行われた。例えばガツクの寝室とモモコの居室との間の壁をぶち抜き、一つの部屋にしてしまったり・・・ヤンデレに栄光あれ！お前のゴリ押しに乾杯！)、雷桜隊隊士全員との今日を迎えた。

挨拶が済み、ぎこちなさが取れない隊士達の訓練が再開されると、モモコは邪魔にならないように訓練場を後にした。

絡みつく様なガツクの視線を感じたがかなり頑張って無視した。

次にモモコは奥とその他の部に挨拶に向かい、行く先々で驚愕と好奇の視線を浴びながらもそれを乗り切った。

「何からした方がいいかな・・・うーん。まずは軍部の事をしよーじきどう思っているのか奥の職員さん達に聞く事から始めてみようかな。」

モモコはガランとした、一人の部員しかいない割には広い部屋で一人ごちた。

よし！と意気込み、テンレイの執務室へと向かった。

二時間後。

「ぜえぜえ・・・こじ・・・どじっ?」

モモコ、就職一日目にして迷子になる。

「・・・遅い。」

ガツクはモモコのために用意した昼食を前に不機嫌そうに指を打ち付けていた。

移動中の連絡手段として当然モモコにも連絡機を持たすつもりであったが、ジエンのどうせならモモコ仕様にカスタマイズしてみたらどうでしょうという提案を受け、モモコはまだ連絡機を持っていなかった。

「カイン、午後の予定はどうなっている。」

「あとで調整できますが・・・モモコちゃんを捜しに行きますか？」

カインからゴーサインが出るやいなやガツクは返事もせず飛び出していった。

「一応疑問系だったんだけどな・・・まあいいけど。ハア・・・」

ため息をついてカインは昼食にフードを被せた。

「ここ一体どこよ！総所ってこんなに広がったの〜！」

モモコは誰もいない東屋で力なく叫んだ。

ガツクさん怒ってるかなあ・・・カインさんに八つ当たりしてなきやいいけど・・・

モモコはガツクとできるだけ一緒に過ごす事を約束していたので今日も昼食を取る予定であった。

「この所お互い忙しくてあんまり顔を合わさなかったからなあ・・・楽しみにしてたのに。」

グウ〜ルルルツキュルルル〜

「・・・フツ、腹の虫よ。お前もあたしに同意か。」

・・・空しい。

腹の虫に話しかけた所で残り少ないHPをさらに削ったモモコは、  
生き倒れにならうちによるよると東屋を後にした。

「歩き続ければどこかに出るだろ・・・ガツクさんには後で謝ろう。」

ナンカクレと主張する腹を押さえながら少し歩いた時、手前の植え込みがガサガサと揺れた。

！

モモコが固まっているとそれは更に騒々しく揺れ、いきなり本当にいきなり男が飛び出てきた。

「あゝ！くそっ！やってられっかよ。」

男は盛大に毒づくくと髪の毛に絡まった葉や小枝を手でぞんざいに払い落した。

そしてそのまま歩きだそうとして・・・

「ん？」

自分を指差し口をパクパクさせたえらく小柄な女の子（会う奴会う奴・・・ガンバレモモコ！明けない朝などないぞ！）に気付いた。

「お前・・・迷子か？・・・あれ？今日軍部の見学会あったっけな？・・・おい、お前何処のクラスだよ。見たことない顔だな、転校生？」

訝しげにモモコを見やる人物・・・それはかつてモモコを誘拐した4人のうちの一人レイレスだった。

「ダイス、シヨウを借りるぞ。」

ガツクはダイスの執務室にいきなり乱入するとダイスの足元で寛いでいたシヨウを見下ろした。

「なんかあつたんか。」

ダイスはデスクに乗せていた足を下ろすと今度は頼杖をついた。

「モモコが昼食に來なかつた。部署にもおらん。」

ガツクが眉根を寄せて言う。

「テンレイの所にもおるんじゃねえか？」

「めぼしい所に連絡を入れたがいなかつた。アイツ、迷つたに違いない。早く探し出さねば。」

「そりゃ心配じゃの。総所は入り組んどるからな。よしワシも・・・」

「お待ち下さい。ラズ大将。まだ仕事が残ってます。」

リコが冷たいく遮る。

「後でもできるじゃろ。今はモモコ優先・・・」

「後に廻す時期はもうとつくに過ぎてるんですが。これ以上待てないぐらいに待ってます。それはこの書類だけではありません。」

「ガツクだとしてサボっとるじゃねえか。」

「堂々とサボると言いましたね。コクサ大將はあなたと違って日頃からきちんとして職務をこなしていますから余裕があるんです。あなたには1ミクロンもない余裕が。」

「邪魔したなダイス。」

ガツクはリコに絞られているダイスをあっさり見限るとシヨウに声をかけてモモコの部屋まで移動した。

「シヨウ、頼むぞ。」

ガツクは言いながらシヨウに屈むとモモコの部署部屋にあったハンカチを差し出した。

シヨウはしばらく記憶するようにそれをクンクン嗅ぐと時折地面に鼻を付けながら歩き出した。

「あ、あなた……どうしてここに……?」

モモコが信じられないように言うと、レイレスもモモコの顔をじっと見て記憶を探るように目を細めた。

「お前……俺とどっかで会った事ある?」

今度はモモコがギクツとする。



「しよ、初対面だと思っけど・・・ていうかあたし、あんたより年上だから。」

モモコは事件の後、クーザ達と会う事はなかったが（ガツクとテンレイが大反対、特にモモコも希望しなかった）、クーザ達が13歳だと言う事、モモコを攫ったその理由ぐらいいは聞いていた。

ちなみにその後のクーザ達だももちろん無罪放免になるわけもなく、ホクガンが統括する執政部と、テンレイの君臨する奥の【何でも笑顔で言う事を聞くパシリ】にされていた。期限は半年。

「ガツクに殺させるわけにもいかんからなあ。仕方ねえ、代わりの罰として俺とテンレイで言い様にこき使ってやるから喜べ。あ、軍校はちゃんと行けよ？サボったら（パシリ期間を）倍に増やしちゃうぞ」

獲物を寸前で取り上げられ、不機嫌そうに睨むガツクを前にクーザ達は青ざめながら頷くしかなかった。

なので、軍校が終わった後や、休みの日は総所の執政部と奥に向、様々な雑用などをして、夜八時ごろ寮へ帰る毎日を送っていた（もちろんそれぞれの親と、軍校の教官達には許可を取った）。

「俺より年上？嘘つけどう見ても中等部だろ。しかしおかしいな・・・それ、軍校の制服じゃねえよな。かといって軍部の制服でもないし・・・お前何者だ？」

レイレスが怪訝そうな表情から険しい表情へと変わるのをやましい所はないはずのモモコは焦った。

「何者って・・・べ、べべ別に怪しい者じゃないよ！今日赴任したばかりで・・・」

両手を大きくバタバタさせ、汗をかきながら慌てるモモコをますます疑うレイレス。

「ならなんでそんなに慌てて・・・!!」

レイレスはそこまで言いかけるといきなり踵を返し、出てきたばかりの茂みにもう一度ダイブした。

???

モモコがワケもわからず呆気にとられているとやがて。

「今度から誰かに案内してもらえ。」

独特の低い声が聞こえたと思ったらガツクに抱きあげられた。

「ガツクさん！シヨウさんも！」

モモコは今度は嬉しい驚きに声を上げ、思わずガツクの首に抱きついた。

ガツクはそれにビクリとなるも、空いた右手でモモコの小さな頭をそっと撫でた。

が、

「……………」

ガツクは無言でモモコを下ろすと静かにといつように口元に指を当て、茂みに近寄った。

あ……バレてる！バレてるぞ！少年！

モモコが（あわわ……）と焦る中、ガツクがその長い腕をさっと伸ばして引き揚げると……青ざめたレイレスがその手にぶら下がっていた。

……………。

ガツクの相手の魂を削り取るような黒い眼差しがレイレスを容赦なく決る。

「ここは軍部敷地内だが……なぜお前がここにいる。奥で働いているはずではないか？……もしかと思うがサボっているのではないだろうな。」

今ここで獄門の刑を言い渡す。とでも言われているかのような声音で言われ、レイレスは冷や汗を滝のように流しながら震えた。恐怖のあまり悲鳴すら出てこない。

「答える。」

ガツクがレイレスを持った腕をまるで体重を感じないかのように上下に振る。

お、俺今日、死んだかもしれん・・・

およそ人間にする扱いではない事をされ薄れゆく意識の中、レイレスは死を覚悟した。

「ガ、ガツクさん！」

いい加減痺れを切らせたガツクが今度は頭上で振りまわそうとした時、モモコが呼びとめた。

「どうした。」

「そ、その人！ああたしと一緒に迷っちゃったんだって！奥に行こうとしていたみたいだよ！ねっ！」

モモコの懸命なフォローだったが、身近にサボリ魔が2人いるガツクにとってきかず、バレバレな嘘なのはわかった。が、

「本当か？」

モモコが言うのなら話は別である。反対にモモコ以外のどんな奴が言ってもガツクに言い訳は通らない。

「・・・ゲホッ！ゲホゲホ・・・は・・・はい。み道に迷って。す、すいません。」

「・・・いいだろう、今回は見逃してやる。だが・・・次はないぞ。」

ガツクがレイレスを持ち上げていた手を緩めると九死に一生を得たレイレスは重力に従って落ちた。が、屑折れるのではなく片膝をつ

いて着地し、荒い息を吐く。  
意地の様なものだ。これ以上目の前の大将に無様な所を見せたくない  
かった。

「シヨウを付けてやる。行け。」

「ありがとうございます・・・失礼しました。」

レイレスは最後、ガツクに向かって敬礼するとモモコをチラッと見  
てシヨウに続いた。

「ガツクさん・・・あの子・・・」

「言つてなかつたな。お前を攫つたあの4人は執政部と奥で放課後、  
休みの日は無償で働く事になった。

未成年の、しかも13の小僧共とあつてはさすがに法で裁くのは忍  
びないとホクガンがな。」

「そうだったんだ！。さつき偶然会つただけどあたしすごい疑わ  
れちゃつて。」

「・・・まあ、一見何処の部署かわからんからな。」

モモコの軍部の制服はガツク達の様に文様がない。

真っ黒な制服の胸に小さな桃が刺繍されているだけである。

モモコの文様を考えるにあたつていろいろな形が考案されたがどう  
しても軍部寄りになつてしまい、中立の立場には相応しくないもの  
になる。なので、思い切つて全く関係のない桃の実を、しかも刺繍  
という形にしてみた。ちなみに刺繍に下深い意味は特でない。桃の  
文様を肩から背にかけてしまつといかにも子供っぽく、ただでさえ  
童顔なモモコをさらに幼くさせてしまい、モモコから猛烈な拒否が  
出たため。

「そうだよね・・・総所の外から来た人は何コレ？って思うよね。」  
モモコは胸の桃を小さな人差し指で撫でつけちよつと淋しげに呟いた。  
と、その指をガツクの大きな手がそつと握った。指どころかモモコの手全体がすつぱり収まる。

「なら、ちゃんと仕事をして外であろうが内であろうがその文様を誰からも認められんといかん。お前の頑張り次第だ。」

モモコはモモコの手を握るためであろう膝をついたガツクを見上げた（それでもモモコより数十センチは高い）。ガツクの励ますような眼がある。

「うん。ドミニオン中に認められるようになる。」

モモコの強い眼と決意を込めた言葉にガツクはクツと口の端を上げて笑い、

「国中に広めるか。大きく出たなモモコ。それでいい。」

そう言うともつと笑みを深くして、モモコの手をさつきよりも少しだけ強い力で握りしめる。

重ね合う手と手は触れ合った分だけ熱くなった。

軍部の無骨と言えば無骨、実用一点張りの「え・・・庭園？」と疑問系で始まる庭園（花壇など軟弱！と言わんばかりにキレイさつぱり皆無、実のなる木の群れとベンチはないのになぜか東屋があって、かろつじて芝生だけは敷いてある庭園の定義を問いただした

い庭園)で少女にしか見えない女と、人外にしか見えない男は見つめ合い微笑む。

ガツクのもう一方の手がモモコの頬に添えられ、親指で小さな唇の輪郭をゆっくり撫でる。

「……紅いな。それに柔らかい……………モモコ。」

少し掠れたガツクの声。

モモコの目が大きく開き頬に熱が集まり始める。ガツクが上体を少し倒した……………

グウウツ！キユルルウル！

その時、モモコの腹の虫が「イチャつく暇あったらナンカ食わせろや！こちとらもう限界なんだよ！テメエらしい加減にしろや！」とばかりに盛大に鳴った。

「……………そういえば昼食がまだだったな……………」

「……………うん……………」

モモコは今度は別の羞恥で顔を赤くさせた。

と、ガツクはモモコの膝裏に手を入れるとそのまま抱き上げ、立ち上がった。

「ガ、ガツクさん！」

「腹が減って死にそうなんだろう？ここから俺の執務室まで少し距

離がある。お前の足で歩くよりも俺が抱えて歩いた方が早い。それに・・・もう体力もさほど残ってないように見えるが。随分歩いたのだろう?」

ガツクの合理的な話しにモモコは頷くしかなかった。

ガツクはモモコが恥ずかしそうに自身の胸に寄りかかるのを満足そうに見やるとやや速足で執務室へと向かった。





モモコは手の中にある巨大なサンドイッチを四苦八苦しながら食べていた。

軍部は規格外にデカイ体躯を持つ者が多く所属する。当然と云うか必然と云うか食事のポリウムが多いメニューが並ぶ。それは、メガ！とかジャンボ！とか地球でなら「ラーメン10人前！これ完食できたらお代は要りません！」的なチャレンジャー級ばかり。比較的量が少なめのパン類でもモモコの両手からは完全にはみ出し

ている。  
縦も幅もあるサンドイッチにモモコは口が裂けそうなほど大きく開け、齧り付いていた。

「ごちそう様です。」

モモコが手を合わせて食事を終える。

「それだけでいいのか？」

ガツクは焼き魚定食を食べていた手を止め、モモコのトレイを見た。サンドイッチの2つあったうちの1つが残り、サラダもデザートも手つかずだ。

「うん。もうお腹いっぱいだよ。満足です。」

背もたれにもたれ、爽やかなレモンティーを飲むとモモコは満足気にため息をついた。

「モモコちゃんには多かったようだね。明日からは半分減らすよ  
う食堂に言っておこうか。」

「折角用意してもらったのにすいません。」

「いや、ガツクさんの用意もあるし、俺のメシだってある。2人も  
3人も一緒だよ。気にしないで。」

「ありがとうございます、カインさん。・・・あ！あの！食器はあ  
たしが返してきます！」

ガツクとカインは顔を見合わせた。

ガツクは完食した定食の器とカインの器、モモコの残した食事が乗  
った大きなトレイを見やる。

「・・・やめておいた方がいいのではないか？お前にはかなりの重  
さになるぞ。」

「ガツクさんの言う通りだよ。モモコちゃんには無理・・・」

「いえ！せめてこれくらいの事はさせて下さい！食堂への道も覚え  
たいし。それに・・・こう、なんていうか、できるだけ隊士の皆さ  
んと知り合いになりたいんですよね。その・・・なんか警戒されて  
るらしくて・・・」

ちよつと困った顔で俯くモモコを見て、ガツクとカインはまた顔を  
見合わせた。

モモコは迷子になって恥ずかしかった・・・

だが、いつまでもウロウロしている訳にも行かず、恥を忍んで、た

またまに出会った隊士に道を尋ねようとしたところ、

「ヒイイ！」

と悲鳴を上げられ全速力で逃げられてしまったのだ。

見る見るうちに遠ざかる隊士の背中を呆気に取られ、見送ったモモコだったが次に出会った隊士にも

「勘弁して下さい！」

とか

「まだ死にたくない！」

とか

「俺は何も見えていないぞ！断じて！あれは錯覚だ！しんきろー！」

とか言われ、道を尋ねるところか話しかける事も出来なかった。

(・・・何だか怖がられている？でも軍部だし・・・あたしみたいなへなちよこ、相手にもならないだろ。うーん、怪しいとか変な奴とか思われてるのかなあ・・・まいったな。)

隊士達はもちろんモモコではなく、その背後の、モモコに異常な程の執着心を見せる彼らの上官に怯えているのだが……

「広報課として、これから軍部の皆さんを、奥やその他の部の皆さんに知ってもらいたいのに肝心のあたしが警戒されるのは問題じゃないかなって・・・だからあたしから積極的に隊士さん達に働きかけないと。」

話を聞き終えたカインはガツクをじと目で見た。  
ガツクが目を逸らす。若干気まずさげだ（珍しい、というかこんなガツクを見るのは初めて）。

くテレパシー開始く

”・・・明らかにガツクさんのせいですよね”

”・・・”

”コレ、モモコちゃんの仕事の邪魔してると思いませんか”

”軟弱者共が・・・”

”軍部最強の男に鬼の様に暴れられたら大抵の男はその元凶・・・失礼、原因には近づきませんよ”

”・・・”

”わかっていただけたようでホッとしました。以後はなるべく（ヤンデレ）控えて下さい”

”・・・やっってはみる”

くテレパシー終了く

カインはため息をついた。

モモコが人に戻ったお陰でガツクのモモコへの対応が変わったように（言うほど変わってないか・・・）カインもホクガン同様の懸念を持ち、それまで放置とはいかないがガツクに押し切られていた事を細かく、めっちゃ細かくガツクにソレ（ヤンデレ）を自覚するよう必死になって働きかけた。その結果、ある程度までは話を聞いてもらえるまでにはなった。

ただそれだけではあつたが以前の問答無用で誰の意見も聞かず、モモコのストップしか利かなかった頃に比べると格段の進歩である。

（モモコちゃんが人に戻ってよかった・・・）

ガツクの暴走をある程度までは抑えられる・・・かもしれない。

その前には猫から人に変化など些細な事だ・・・いや、これはこのままではいつか起こるかもしれないハルマゲドンを想定しての神の奇跡に違いない。カインは心底そう思っている。

「モモコちゃん、そのやる気に水を刺すようで悪いけど食器も大きいし、量だつてあるんだ。ここは俺が・・・」

「いえ！大丈夫ですつて！ほらっ！」

モモコは渦高く積まれた食器をうめぬつと持ち上げ歩きだそうとした瞬間。

「あっ！」

想像以上の重さにバランスを崩し、食器もろとも転んだ・・・かに見えたが。

「モモコ・・・頼むから今回だけはカインの言う通りにしてくれ。」

ガツクは片手でモモコの体を支え、もう片手で食器が乗ったトレイを持ちながら言った。

トレイから零れ落ちた数枚の食器はカインが救った。

「そ、そうします・・・」

モモコは若干、顔を赤らめ頷いた。

(猫の時も困ったけど・・・)

ガツクは風呂上がりそのままガシガシと髪の毛をタオルで拭いているが、その姿は上半身裸、下はスウェット。

(ガツクさんって・・・恥ずかしくないのかな？いや、そもそもあたしの事なんて眼中にないからするんだろうな・・・だって、仮にもあたし女の子だし、意識してくれたら、裸になんてなれないと思う・・・うわ、ちょっとへこむかも・・・でも正直これは・・・目のやり場に困るからやめて欲しい。)

違つぞ、モモコ。

眼中にないどころかお前さえいれば他はどうなってもいいし、関心すらない。

だがお前を女と意識はしても残念ながら羞恥心は欠片もない。多分、モモコが「真<sup>ま</sup>っ裸<sup>は</sup>でもいいよ」と言うなら全裸すら厭わない。モモコはガツクが寝る時は服を着る派である事を神に感謝すべきである。

裸族じゃなくてよかつたな（ちなみに我が家では家で真<sup>ま</sup>っ裸<sup>は</sup>派の人を裸族と言いますが諸君ん家ではどうだろうか）。

モモコは見まいとしてもチラチラと視界に映る鍛え上げられた大きな体にドキドキした。

今この瞬間襲撃があつたとしても即座に相手を仕留められるガツク。戦う事のみの特化した体は常に暴力の気配を纏っている。

ごく一部を除く、その他の人達にとって、その気配<sup>オーラ</sup>はガツクが意識して消さない限り同じ部屋に長時間居たくない程の圧力となつて発せられる。

だが、モモコという時は不思議な事にその圧も鳴りを潜める（モモコは緩衝材、衝撃吸収材、なくてはならない最終防波堤）。

「？」

ガツクはモモコが己を見ないようにしているのは気付いたが、それが何なのかはわからない。

素肌タオルを引つ掛けたまま、モモコの真向かいに腰を下ろした。

「モモコ 今日の事だが・・・」

ビョイイン

ガツクは話しかけた途端モモコが跳び上がり、走ってリビングを出て行ったのを呆気にとられて見ていたが「もはや逃げたか」と思い（重傷だなコイツ）、すぐさま捕食者の様な気配を滲ませて立ち上



がった所にモモコが走って戻ってきた。  
そして手に取った黒いTシャツを顔を背けたままガツクに向かって  
差し出す。

「こ、これっ！あああの・・・風邪っ！そう風邪引くと大変だから！湯上りって体温奪われやすいし！」

ガツクはどもるモモコに？となりながらも

「風邪など引いた事はないが・・・」

「・・・な、何でも最初があるんだよ！今日がその日かも！体調管理は軍人さんは必須！」

「?・・・まあ、そうだが・・・」

ガツクは腑に落ちないながらもシャツを受け取り、それを着た。

モモコはホツとした。

が、袖から覗く太くて血管が浮き出た腕、ガツチリした首から広い肩のライン、鍛えた筋肉が覆う厚い胸、服の上からでもわかる割れた腹筋（人間ってあそこまでハラ割れるモンなの!?）。

（ガツクさんってホントに・・・闘う男の体だよな）

好きな男の体である。気にならない方がおかしいがスーツを着た時とはまた違う男臭さ。しかも常に鍛錬を欠かさずストイックな程極められている。

モモコはポケットとガツクに見惚れていたが、話しかけていたようなガツクが怪訝そうに

「モモコ？」

と言うとハッと我に返り

「ななな何？」

慌てて顔をガツクに上向けた。

「どこか体調でも悪いのか？顔が赤い。お前こそ風邪を引いたのではないか？」

「あ・・・大丈夫・・・うん、大丈夫だから。ごめん、なんの話だったっけ。」

「謝らずともいいが・・・頼むから病など罹るなよ、苦しむお前を見るのは辛い。」

「ガツクさん・・・。」

モモコは困った顔で笑うガツクにきゅーんと胸が締め付けられた・・・  
・けど傍目から見ると鬼が獲物を逃してちよっと口惜しそうにしているみたいに見える。

・・・恋は全てのモノを、本っ当に全てのモノを覆い尽くす摩訶不思議な感情。盲目とはよく言った物だ。

「今日、お前が迷った件だが。」

ガツクは本題に入ると傍らに置いた紙束から数枚抜き出し、テープルに置いた。

「これって・・・」

「そう、総所の地図だ。」

総所は地下10階、地上40階建ての超巨大な城である。

その中には、軍部施設や訓練場を始め、その他の部の施設、中庭、病院、スーパーマーケット、レセプション会場、宿舎等、それ自体が小さな町の様なドミニオンの心臓部、総所。その大きさはごく一部の人間を除き誰にも把握できない程広大だ。ちなみにガツク達4人は総所のありとあらゆる道、施設、部屋、抜け道に至るまで全てを網羅、記憶している。彼らが総所の化け物と言われる理由の一つだ。

「一応お前が行動するだろう範囲のものを用意した。だが、これはほんの一部だ。この地図以外に行きたくなったら俺を呼べ。連れて行ってやる。」

「でも・・・ガツクさんだって仕事があるし・・・いいよ、そんな」  
「気にするな。俺の仕事なら何とでもなる。」

「ガツクさんったらあたしを甘やかし過ぎだよ・・・でもありがとう。」

(よし、なるべくそんな事ないように頑張って地図を覚えるぞ！)

恐縮しきりのモモコだが奴の本音は会えない仕事中、少しでもモモコの側にいたいだけ。

健気というか何でもするなというか・・・ちよっと涙の一つでも浮かんでくる・・・ないな。ない。

「ねえ、ガツクさん。」

「なんだ。」

「奥と軍部ってどうして仲が悪かったの？」

「知らんな。」

「えっ!?!?・・・知らないの?」  
「ああ。」

モモコはあっさり言い放つガツクに?然とした。

「知らないでケンカっていうか仲違いしてたの?」

「その話だが、仲違いなどしているのか?周りが言うには向こうが突っかかって来るんだそうだが、俺はそんなものされた事はないぞ? (お前にんな事出来るか。精々がテンレイぐらいだ) 確かに部下達からは冷たいだの無視されたのだのと聞く。が、正直任務に支障がない限りどうでもいいと思っていた。だからどうしてと言われてもな・・・全く思いつかん。」

首を捻るガツク。

奴らしく、興味のない事にはとことんないのがわかる返答。気にも留めていなかったようだ。

モモコは頭を抱えなくなつたが堪えて違う質問を試してみた。

「じゃあ、いつから仲悪かったの?」

「いつから・・・さあな。」

ガツクは自分の答えに「え?それも?」となるモモコの顔に慌てた。

「ま、待て!それに関する一番古い記憶は・・・ううむ、そうだな・・・奥に何かされた様なキングの愚痴を聞いた事がある。それが軍部に入って間もない頃だった。だから少なくともその頃はあつたと言ふ事になるだろう、俺とキングは同期だから15年以上前の話だ。」

「ふーん。ガツクさん達の世代より前・・・結構根深いのかな。」

モモコは解決できるかなと思うが、レセプションの準備中や最中に奥と軍部がぎこちないながらも協力し合っていた事を思い出した。

(切欠きっかけさえあれば何とかかなりそうなんだよな・・・ちよつと希望的観測混じってるけど。それにしても気になる・・・一体軍部と奥に何があつたんだろ)

悩むモモコに

「奥と軍部の過去が気になるならシラキさんを尋ねたらどうだ。」  
ガツクから提案がなされる。

「シラキさん？」  
「シラキさんなら何か知っているかもしれないぞ。何せ軍部に在籍して40年以上になるからな。先人から何か聞いているかもしれない。」  
「なるほど、シラキさんか・・・うん！明日アポイント取ってみる！ありがとうガツクさん！」

満面の笑みでこたえるモモコにガツクはモモコの役に立ったようでホツとした。

これ以上モモコに呆れられたくない。

モモコが人になり、こうして直接会話したりクルクルとよく変わる表情を目の当たりにするようになると自分がどう思われているかものすごく気になる。

他の奴らに何と思われても気にもかけなかった自分が・・・

それは少しの苛立ちとくすぐられる様なむず痒さをガツクにもたらした。

ガツクは何だかモヤモヤしたものを抱えながらモモコが今日した事思った事を手振り身振り話すのを晩酌片手に楽しんだ。

そして、ガツクの寝室まで短い距離を抱きかかえられて（ガツクが自然に抱っこ。モモコは小さな子供の様に思われて気に入らないが、嬉しい事には変わらないのでそのまま）仲良く入り、

「今夜は一緒にね」

「イヤです。」

と断り、断られ、がつくりしてムスツとなるガツクとそれを「可愛い（！！！！）」と思いながらカーテンの（説得に2時間費やす）向こうの部屋に入り、寝る支度をするモモコ。

「おやすみなさい、ガツクさん。」

とガツクに声をかけ、しばらくしてモモコの部屋の明かりが消えると、ガツクの低い声が

「おやすみ、モモコ。」

と短く答える。

これが2人の日常になりつつある。

ありきたりだけれど確かな温度と幸せ。

モモコはそれがとても好きだ。いや、大好きだ。

朝元気よくガツクと出勤し、なるべく多くの隊士達に笑顔で挨拶。だが、隊士達の顔は引き攣り、直立不動で挨拶を返されるのには閉口した（お前の背後に何がが）。

広報課部屋前までガツクに送ってもらい、「お仕事頑張ってー！」と手を振ると背を向けながらも軽く手を上げて応えるガツクにニマニマしながら部屋に入ると頬をペチペチ叩いて気合を入れ直し、早速シラキの執務室に電話を入れた。今日窺いたい旨を伝えると午後一なら空いているとの返答。互いの微調整をしてモモコは受話器を置いた。

それから昼食まで地図を取り出し周辺の道を覚えたり、隊士達に挨拶したり（逃げる事ないと思う・・・）した。

シラキの執務室まで送ると言い張るガツクを何とか説得し、ギリギリの時間でシラキの執務室の前まで来たモモコ。緊張して上がる息を深呼吸を何度もして整えると薄茶色のドアをノックした。

「・・・どちら様で。」

長い黒髪を片側にさらりと垂らした秀麗な隊士に静かに聞かれ、モモコはどもりながらも聞かれた事に答えた。

「モモモモコ・クロックスです！あ、あの、1時の約束で来ました  
！」

「あなたが・・・ようこそいらっしやいました。デイグニー大将がお待ちです。こちらへどうぞ。」

黒髪の隊士は柔らかく微笑するとモモコを促し、モモコが部屋に入った後、隣の応接室の扉を軽くノックした。

「クロックス課長がお見えです。」

「通しておくね。」

シラキの穏やかな声がかぐもって聞こえ、黒髪の隊士は大きく開けたドアへとモモコをまた促した。

「よく来たね、モモコ。そこに座んな。」

笑顔のシラキが真向かいのソファを勧めた。

「・・・来ると言う連絡を受けてから予想はついていたけど・・・昔の奥と軍部の事だね？」

「は、はい。・・・あの・・・私、過去を知らなくても今の軍部と奥は絶対仲良くなれると思っています。でも、どうしても気になっちゃって・・・あ、あの！でも決して野次馬的なモノはありません！」

ハツとなり、慌てて付け足すモモコに

「わかってるよ。そんなに構える程の話でもないしね。」

シラキは声を立てて笑い、入れた茶をモモコの前に置くと足を組んで当時を語りだした。



この国の歴史は知っているね？

そう、60年前の大戦の後ゼレンの属国になった……ドミニオンに軍隊がなかったわけじゃあない。だが生来争い事が嫌いな国だ。加えて楽観的な国民性も手伝って今の5分の一ほどの規模だった。その頃勢いのあったゼレンにたちまち攻め込まれてしまっただけ……軍は崩壊したが代わりに怒りに燃える抵抗勢力が生まれた。その中には密かに武器を運んだり、潜伏場所を逃えたりと彼らをサポートする人達もいた。そう、これが奥の前身だ。

今の軍部の基礎時代に奥も存在していたんだよ。その頃は時代が時代だったからねえ、両者共互いに協力し合って友好的雰囲気だったそう。ただ、軍部は相次ぐ戦闘で力をつけ、数が多くなっていくうちに戦う事を至上とし、周りをかえりみない事が多くなった。……何年も続く戦闘は人の心を安く変える。優しさなんぞ持つてたら敵の命なんて奪えない、無事屯所に帰って今日一日生きていたからってさっきまで殺し合っていたんだ。さあ終わったぞって切り替えのできるほど単純でもない。

仕方がない事だったかもしれない……穏やかになるには時代が許さなかった。

奥はそんな彼らの我が儘を文句ひとつ言わずにサポートし続けた。わかっていなかったからね。

でも奥だって人間だ。ぞんざいに使われると不満もたまる。

奥は爆発寸前だった。

それを大噴火させたのは……稀代の英雄、そしてドミニオンの大馬鹿男、シス・フェザランだ。おや？シスの事を知っているの

かい、それなら話が早い。

あの馬鹿はある日奥の職員を公衆の面前で、あるうことが尻を引っ張叩いたのさ。

子供にするように膝に乗せてね。しかもあの男の力だ、加減はしていたんだろつがかなり痛そうだったね。

恥をかかされた奥は責任者はおるか職員達全員大激怒。

当り前さね、シスの叩いた理由つてのが彼女が酌をした酒が服に掛つたつてえ些細な事だったからね・・・奥と軍部は急激に仲が悪くなった。互いの仕事はきちんとなすが雰囲気は最悪だった。特にシスが率いていた雷桜とシスの親友が大将をしていた霧藤とは犬猿の仲。寄ると触るとケンカしていたつけ。

それからしばらくしてシスはあるの大事件を起こし国を追われ、残された軍部と奥は互いに歩み寄れないまま。

・・・ただねえモモコ、シスは只のイラつきでこんな事を仕出かしたんじゃない。ちゃんと理由があつたんだ。

尻を叩かれた職員だがあれはゼレン側の間者だったんだよ。

酒に毒を混ぜて軍部の幹部を毒殺しようとしていたのさ。

聞かされた時は耳を疑つたもんだよ、それほど彼女は憤ましく優しく愛国心に満ちて周りから好かれてたからねえ。

だがあの時シスに正体がバレタのを察した彼女は翌日には居た堪れなくなつたからという書き置き一つ残して消えてしまった。

・・・雨牡丹隊が密かに調べた所、残念な事に証拠が上がつたよ。

潜伏先で追い詰められた彼女は毒を呷つて死んだ。

全てが終わつてシスにこう言つたよ。「奥に伝えるか」と。

だがアイツは首を振つて

「このご時世だ、疑心暗鬼に陥らせるな。ドミニオンは団結力が売りだぜ？それを揺らがせるのは敵の思う壺だ・・・なあに、俺が

憎まれ役を引き受けるからよ……隣の奴が間者かもつて互いに疑うよりはマシだろ。それよかシラキ、間者はまだいるかもしれねえ、お前の部隊に任せるぞ。それからこの事は他言無用だ。」

……これで奥と軍部の昔話はお終いだ。

まあ、今は両方とも随分柔らかくなつてホツとしている所だよ。モモコのお陰だね。謙遜しなさんな、話は聞いてるよ。

……さて、ちよいと長かつたかねえ、疲れたろ、茶のお代わりはどうだい。

シラキは美味しそうに茶を啜るモモコを目を細めながら見た。よくそこに座つて仲間達と歓談していたあの馬鹿を思い出す。

シスには想い人がいた。

当時の奥の責任者だ。

極度の照れ屋でもあつた彼はうまく好意を告げられず絶えず空回りしていたが、何となく責任者は察していたと思う。だがあの一件で責任者とは口をきく事さえなくなり、やがて彼は去つた。

本当に馬鹿な男だよ……アンタの想いは届いていたのに。

シラキはシスが去ったあの晩、泣きながら自分を訪ねてきた幼馴染を思い出す。

シスの事がずっと好きだったと泣きじゃくる責任者を。

結婚したばかりの旦那と一緒にあって慰めたっけ。

今頃何処で何してるんだか・・・あの無責任の大馬鹿野郎は。

シラキが懐かしくもほろ苦い過去を思い出していた頃。

すっかり冬支度がすんだ中庭を見下ろしながら一人の男が呟いた。

「最近ヒマヒマだな～・・・ドカンと祭りでもねえもんかね。」

6 - 6      またもや出ました（後書き）

何気ない日常書いてみました。

・・・そして久々にきた、この男。

「密着取材？」

いつもの昼食時間、モモコは昨日から思っていた事をガツクに打診してみた。

「はい。今度野外訓練があるでしょ？それに同行させてくれないかなって。」

「・・・広報関係か。」

「うん。第一号で何を発信するか漸く決まったの。」

昨日テンレイからかねてより依頼していたアンケートが届き、モモコはそれを読んである結論に達した。  
ちなみにアンケートの冒頭はこうだ。

『あなたの軍部の印象ズバツと言っちゃって！愚痴でもOK！被害届けでもOK！呪いの言葉でもOK！思いつ切り罵って！匿名記名何でもオツケ！』

・・・趣旨が違う様な気がする。「印象」は何処へ。

それはともあれ奥の職員達は真面目にアンケートに答えた。・・・  
・真面目に。

そして気になるその内容だが・・・

「ゴツイ。でかい。顔が怖い」

・・・まあ、うん、否定はできない。

「仕事を受け付ける時必要以上に威圧的。言葉も軍隊調で声が大き過ぎて耳鳴りがした」

・・・加減がね、わかってないっつーか。

「目が合うとフンツ！と逸らされ非常に不愉快」  
たぶん・・・照れてるんじゃないかなと。

「持っていた資料をいきなり奪うと全く関係ない部署に置き捨てにされ、仕事を妨害された。」  
手伝いたかっただけなんですよ・・・たぶん。余計なお世話どころか完全に邪魔してますけどね・・・。

「終始無言」

「薄ら笑いが怖いです」

「私より料理が上手いのがムカつく」？

「依頼人は一人なのに連隊全員で来ないで下さい」

「奥の廊下で国歌歌うな」

「奥の廊下で喧嘩するな」

「奥の廊下で紙相撲するな」

「奥の廊下で雄叫び上げるな」

・・・あんたら何してんだ！！？

モモコは頭を抱えた。  
たぶん隊士達にも何某かの事情があったのだろうと思うが、其処を考慮してもこれは酷い。

「怖がられるし嫌がられるし不気味がられるわけだよ。」  
自分だって隊士達の事を知らなければ奥の職員達と同じ反応だろう。  
ん？待てよ？知らなければ？・・・あ・・・そっか。

「まずは隊士さん達の事、もっと奥の人達に理解してもらおうと思つて。隊士さん達がどんな人隣か、さわりでもわかってもらえたらもう少し距離が縮まると思う。・・・で、思いついたのが奥にいる時みたいに奇抜な行動している軍部じゃなくて、真面目に恰好よく軍務をこなす、尚且つ自然な感じの彼らを紹介したらどうかと。」

モモコは考え考え、昨日から頭を占めていた事をガツクとカインに話した。

ガツクは顎に手をやってモモコの話聞いていたが、やがて。

「ふむ・・・カイン、明日の予定表を持ってきてくれ。」

ガツクは受け取るとそのままモモコに差し出した。

「その訓練だが近くの無人島を使って対ゲリラ戦（訓練です）を行う。時間は朝四時から夜半一時まで。取材は構わんが・・・つ



いて来れるか？」

うっそーん!!?」

モモコの口があんぐり開き、有り得ないという目でガツクを見た。

「……無理そうだな。だが問題ない。」

え？

……嫌な予感がする。めっちゃ カイン

「隊士達に密着取材……間近で取材すると言っ意味だろう？ならば俺がお前を抱きかかえて隊士達と並走しようではないか。」

ばくだーん投下っ！

「えーっ！」

驚くモモコとは対照的に、カインは胃の辺りをを押さえて蹲つづくまった。

「何を驚く。お前の体力では小半時（約30分）も持たんぞ。取材どころではない。」

「それは……そうだけど。」

「俺が抱きかかえて運べば万事解決だ。」

解決どころか壊滅なんですが。

貴方の隊が。

伝統ある雷桜隊が。

「うっ……じゃあ、迷惑にならない程度でお願いします。」

「任せる。」

任せられませんンンン！！

「あ、あのガツクさん、モモコちゃん……それはちょっと。」

カインが死ぬ思いで勇気を出して声をかけるとモモコがしゅんとして謝った。

「あ……そうですね。対ゲリラ戦なんて訓練でも大変なのに……あたしみたいな素人が……すいませんさっきのはなしで！ワ  
ガママ言っちゃってごめんなさいカインさん。あ、じゃあ別の日に」

809

「カイン……。……。……。」

ガツクはモモコ言葉を遮るとモモコと、カインの間に立ちほだかり、遙か頭上からカインを睨んだ。  
睨まれたカインの顔色が瞬時に青から白へと変わった。

「モモコのこの取材は軍部と奥の今後が、しいてはドミニオンの未

来をも左右する大事な仕事なんだ。それをお前はやめると言うのか？」

いつからお前の楽しみがドミニオンを左右する事態になったのだ？  
ガツクよ。

暴走した魔王ガツクを打ち取れるのは勇者モモコだけだが、そのまさかの勇者からの打診。まさにガツクにとって願ったり叶ったり、鬼に金棒である。魔王がこの機会を逃すはずがない。  
そして生贄は雷桜隊隊士全員だ。

ガツクさん大袈裟だよ」と呆れるモモコを余所に、ガツクの眼光に生命の危機を感じたカインは、心の中で、魔王を止められなかった事を同僚達に謝りながら「わかりました」と返事をした。

そして当日。

前もってカインから事情を聞いていた隊士達は、モモコがよろしく  
お願いしますと頭を下げるのを何とも言えない表情で見ている。

確かに奥に対する自分達の態度は、無礼を通り越してどうしてこう  
なった的にマズいモノがある。

だからモモコのこういった取材は歓迎すべきものだが・・・もの  
が・・・。

無駄に緊張を煽る大将がもれなく付いてくる・・・。

最初の生贄はくじ運の悪いダイナンがいるグループだった。

当たりを引いたダイナンにグループの皆が「ドンマイ！」「ドンマ

「イ！」と言いながら腹への肘打ちやケツへの容赦ない蹴りが入りまくる。

「モモコちゃん何してるの？」

せめてガツク達に同行して被害の拡大を防止しようと健気に頑張る軍部一の苦勞人カインは、モモコが何やらリュックをこそこそするのを見て問いかけた。

モモコはかばんを漁る手を止めて顔を上げると

「あ、あのーカインさんがどうしてストップをかけたのか理由がわかって・・・ホントそういうつもりじゃなかったんですけど。すいません、カインさん。」

気付いてくれたんだね、モモコちゃん。謝らなくてもいいんだよ。だってもう遅いから。

「で、どうにかしてガツクさんの怖さを柔らげないかなと、あたしなりに考えていいアイテムを持って来たんですよー！あっ、これです！ガツクさん！これ着けて下さい！」

モモコはソレをガツクに差し出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・面か？」

ガツクの手にはよく縁日なので売られているあのプラスチックの平たい面があった。

もうこの時点でいろいろ間違っているが、さらにそのキャラクター・

長い耳があった。

目の部分がキラキラしている。

寂しいと死んでしまいうらしい都市伝説があつて。

愛らしくも「テヘツ」とばかりに舌を斜めに出しての笑顔が白銀に映える。

「ウサギ・・・・・・・・・・ピンク」

極めつけはカラーがピンク。

本来なら懐かしさ、子供らしさを感じさせてくれる何の変哲もない祭りの面が、当代随一の呪いのアイテムにアラ早変わり。

もちろん呪われるのは隊士達だ。

・・・・・・・・なんてモノをチョイスするんだ君はっつ！！！！！！  
もつと選択肢あつたらう！！

ソレを着けた大将は何かに・・・・何かに進化するぞ！！ホントにもう人間じゃなくなるんだからな！！！！

ハッ・・・・待てよ・・・・軍務に関しては鬼の様に厳しいガツクさんだ。「遊びは駄目だ」と着けない方向へ・・・・

「これはどうやって装着するんだ？」

「あ、ここのゴム紐をね」

着けちゃうんだ！！？アナタやっちゃうんですね！！！！

「ああああああの！ちよちよちよつと待って下さい！！！！」

カインがこれだけは！とばかりに声を張り上げる。

隊士達の一縷の望みを含んだ視線がカインに注がれまくった。

モモコは大声を出したカインを見て「あ」と何かに気付いた顔をした。

カインの目が安堵のために潤みだす。

ホッ、わかる子だと思つてたよモモコちゃん。頼むからその呪いのアイテムを暗黒世界に返してくれ。

隊士達も間にあつたか・・・まさに危機一髪だったな・・・今世界は救われた・・・と思いきいに安堵した時。

「大丈夫ですよカインさん！ほらココ！口元と鼻の部分に小さな穴があつて！だから呼吸はバッチリ確保です！」

そこじゃないっ！！！！

大将の呼吸はどうでもいい！！！！大将なら24時間潜水出来そうだし！！確保するのはそのヤバいブツだ！！！！

あ・・・やめ・・・やめ・・・やめてええええ！！！！

「これでいいかモモコ。」

「うんバッチシ。」

!!!!!!!!!!!!

うおおおおおおお!!!!!!

面を付けたガツクを中心に、隊士達のナニ力をなぎ倒す衝撃波が巻き起こった。

限界まで鍛えられた大きな体躯に凄まじいほどの威圧感。

しかも野外訓練のためいつものスーツではなく白いミリタリージャケットに白いミリタリーズボン、白いコンバットブーツは周囲の景色に同調する為のモノだろうが……ウサちゃんの面のお陰で何やら混沌<sup>カオス</sup>。

……大将おおおおお!!!!!!

その後、対ゲリラ戦の激しい訓練をこなすあちこちのグループに出没するウサちゃん魔王と抱えられたモモコが見られた。

最強&最凶タッグの誕生である。どうやらモモコは勇者でありながらも、ガツクが単体にいる時よりもパワーアップさせるスイッチでもあったようだ。今日ソレが証明された。

2人に怯えつつ「俺達の大將つて……」と遣<sup>や</sup>る瀬<sup>せ</sup>無い思いを抱いた雷桜隊。

しかし彼らはまた強くなった。

「何に？」と聞かないのは人間としての優しさだと心得てくれ。b  
y 雷桜隊

この後、モモコの初仕事なる広報紙第一弾「軍部通信」が創刊となる。

これが意外と好評を受け、モモコはホツと肩を撫で降ろした。  
一番人氣が「君の素顔に密着！」コーナーのあの問題の野外訓練記事だった事は追記して置く事だろう。

” 軍部を少し見直しました ”

” 男らしくて素敵です ”

” もっと訓練時の彼らを見てみたいです ”

嬉しい感想と共に（恐怖の）アンコールまでもらったモモコは、定期的に軍部の訓練時同行取材するようになった。

あのウサちゃん魔王と共に。

名だたる列強に一目も二目も置かれるドミニオン軍部。

彼らは国土を国民を守るため今日も額に汗を流し、味方であるはずの大将に精神的に追い詰められながらも任務や訓練を頑張ります。

栄光あれ！ドミニオン軍部！

お前らの・・・明日はどっちだ！



モモコの「仕事やってますよ！お飾りじゃありません！」的話を考えたら出て来ました。

カイン！雷桜隊の皆様！そして軍部！ゴメンね

モモコが広報紙第一弾を創刊してしばらく後。ある奥の一室でモモコは困惑していた。

「あの・・・テンレイさん。」

モモコは楽しそうに腰のリボンを整えるテンレイに、戸惑いがちに話しかけた。

「なあにモモコ。もうちょっとこうフワツとならないかしら、そうしたら完璧なのに。」

「あの・・・本当にこの恰好が必要なの？」

モモコは鏡に写る自身の姿を大いなる疑問を持って見つめた。その顔はやや引き攣っている。

簡素な丸襟に赤いリボン。パフスリーブの長袖、腰元できゅっと絞られた紺色の膝丈ドレス。その上からこの恰好につきもののフリツとした白いエプロンドレス。

今では使いこまれた感がある古き良き萌えな職業の方々の戦闘服。

メイド服D A Z E

奥にはメイドの部署もあるが、彼ら（少ないながらも男性も在籍している）彼女等の制服はいわゆるメイド服ではない。紺色なのは一緒だがその格好は詰襟のすっきりとした上着にメイド部を示すポピ―を誂え（部長、副部長のみ、他は腕章）ボトムはストラックスであ

る。

間違ってもモモコのように実用性に不向きなモノではない。

「もつちろんよ！この緊張高まる事態にこそモモコみたいな癒しが必要なのよ？」

ほんとなあ？癒しじゃなくて笑いじゃないの？じゃなかったらア  
イタタタ・・・みたいな。

今度は微妙な表情を浮かべたモモコに

「はい、これで完成よ！・・・きゃあああ！可愛いー！！」

モモコの肩につくかつかないかの髪の上部に、これまたお馴染みの  
フリルとレースのカチューシャが乗せられた。アレがないと起動し  
ないのか？と常々作者は思っている定番のメイド用カチューシャ。  
途端にはしゃぐテンレイ。

これ・・・猫の時の着せ替えと同じノリだな。諦めるしかないね、  
うん。

モモコは他の職員と一緒にになってきゃっきゃつするテンレイを見て  
ため息をついた。

今頃会議室では痺れを切らしたガツクが乗り込もうとするのをホク  
ガンとダイスが引き止めているに違いない。

モモコは窓の外を見た。

1週間前から天気が崩れ始め、昨日は風が強いなと思っただら今日に  
はブリザードが吹き荒れていた。

部屋は閉め切っているのに轟々と鳴る音はいやがうえにも不安を搔  
きたてる。

毎年、ドミニオンの冬はこういつたブリザードが時たま訪れる。毎度の事で慣れてはいるが災害時なのは変わらないので、総所は今24時間体制で待機している。既にあちこちから軍部に緊急要請が出ていた。

災害対策本部に出ると言うガツクに連れられて、ホクガンの執務室隣の会議場にやってきたモモコであったが、途中で見かけた奥の職員達が忙しそうにバタバタと働いているのを見て「お手伝いしてくるね。1時間ごとに顔出すから。」と渋るガツクを振り切ってテンレイに申し出た所、「モモコにぴったりの制服がある」とアレを引っ張り出してきた。顔を青くして辞退するのを、逃してたまるかと迫るテンレイ以下職員に押し切られ、哀れモモコはメイド服に身を包む事になった。

「そろそろガツクがキレル頃だから顔を見せてらっしゃい。そうそう、モモコの仕事は対策本部の皆にお茶をサーブしたり、奥用の連絡係をしてもらうわね。他は自分の判断で決めて頂戴。わからない時はきちんとそれを言っておく事。いわゆる雑用だけとできるかしら。」

優しく言い聞かせるテンレイにモモコは大真面目で頷いた。

「わかりました！頑張ります！」

真剣なモモコに頬が緩むのを抑えきれないテンレイ。

「可愛いわねえモモコは。そんなに力を入れなくてもいいのよ。自分で出来る範囲で構わないわ。あ、サム！」

呼ばれた壮年の男が振り返る。

「モモコが本部の方を受け持つわ。モモコお茶は入れられる？」  
「はい！元の・・・え、えーと向こうの会社で覚えました。」

あつぶね「・・・元の世界でって言うところだった。」

「そうですね。では一通り入れてもらえますか？」

おおつ。

焦ったが、なんとか合格ラインに達したモモコは、お茶の道具を積んだワゴンを押しながらメイド部部长サム・コディに道々アドバイスをもらいながら本部会議室まで来た。

「いやあ、正直ここを引き受けてくれて本当に有り難いよ。クロツクス課長ならわかると思うが中々個性的な面々が多いからねえ、総所の中心人物達は。お陰で担当がコロコロ変わって人選に困っていた所なんだ。」

悩み深そうにため息をつくコディ部長に、モモコは同情を込めた苦笑いを浮かべた。

「何時でも呼んで下さい。あまり役に立たないかと思えますけど、猫の手もって感じで。」

そう言うと、コディは意味深な眼で頷いたが扉の向こうの騒ぎに気付くと顔を引き締めた。

「・・・どうやら早速借りる時が来たようだ。よろしく頼む。」

モモコは自分の恰好を見下ろした。

・・・取りあえずホクガンには笑われるな。  
モモコはため息を堪えるとワゴンの横に立って扉を開けた。

・・・そこには。

ホクガン、ダイスに羽交い絞めにされたガツクがそれでもなお、出て行こうとしている所だった。

扉を蹴破ろうとでもしていたのか片足は振り上げたままである。シラキとグレンを除くその他は壁際に避難していた。

「ガツクさん・・・」

モモコが呆れた声で名を呼ぶと、ガツクの動きがピタリと止まり、信じられないモノを見るようにモモコを凝視した。ホクガン、ダイスもモモコを見る。ついでに部屋中の視線がモモコに集中した。

・・・な、なんか居た堪れない・・・

やっぱりアイタタタの方だったかとモモコが消えたい、と思っていると

「モモコ・・・遅いと思ったら・・・そんな恰好を俺のために」

「ううん違う。テンレイさんが用意してくれたの。」

ガツクがやけに艶っぽい声で呟くのをバツサリ否定するモモコ。

「テンレイが？ああ・・・着せ替えか。」

「テンレイの趣味全開じゃの。」

モモコに否定され両手両膝をついた鬱ガツクに、ちよっと同情しながらホクガンとダイスはコスプレの域に達しそうなモモコの恰好に納得した。

「・・・くっ。」

ガツクはモモコを取り囲んで楽しそうにするテンレイ以下職員達の  
図を簡単に想像できた。苛立ちと嫉妬心で眉間に皺が寄る。

俺のモモコで遊ぶとは・・・己テンレイ羨ましい！・・・しかし  
・・・くそ・・・正直可愛い。

モモコは割合あっさりした服装を好むのでこういった格好は珍しい。  
ガツクはいかにも女の子らしいちんまりとしたモモコの可憐？な姿  
に胸が高鳴った。同時にほーっほほほと高笑いするテンレイの残  
像がチラつく。

何だか負けた様な気がして口惜しいやら嬉しいやらで複雑な表情の  
ガツクに

（そんなにアイタタな恰好なのかな。でも着替える時間もないし・  
・ええい！仕事仕事！これは仕事だ！）

モモコは今にも脱ぎ捨てたい気持ちを男らしく切り替えると、ガツ  
クにっこり笑いかけ

「ガツクさん、お茶入れるからどうぞ会議を進めて下さい。」

まずはガツク達を座らせた。

それからそれぞれの好みの飲み物を順番にサーブして周り、最後、  
ガツク達の番までやってきたところ

「おら、美味しく入れるよ。」

ニヤニヤ笑いながら偉そうにのたまうホクガン。

モモコのデコに青筋が浮かぶ。

モモコはポットを高く、自分の頭上近くまで掲げるとその位置からお茶を注いだ。零れたお茶は当然、勢いよく、カップどころかホクガンの手にまで容赦なく飛び散る。

「うお熱つちやああ！・・・モモコオ！何すんだテメエ！」

「え？ああこれ？元居たせか・・・所のお茶の入れ方だけどナニカ？」

「嘘つけ！他の奴らは普通だったろ！」

「一番偉い人に入れるやり方ですう。」

「わかりやすい嘘だなオイ！」

モモコはベーツと舌を出し、今度は普通に入れた。

「これは・・・」

「テンレイさんがダイスさんにはこれがいいでしょうって。あの・・・」

なぜか驚くダイスにモモコは首を傾げ、次いで困った顔で「・・・替えます？」と言うと

「・・・そうかテンレイが・・・いやこれでええ。・・・ええ香りじゃ。ありがとうモモコ。」

嬉しそうに口に含むダイスにホツとする。



そして。

「ガツクさんは緑茶がいいかな。」

ワゴンから急須を取る。

「お前が入れるのなら八頭やづめ眼茶ちや（毒草茶。ひと匙で致死量）でも飲む。」

でーたー であー なんかでたー

真顔で言えるのがすごい37歳独身大将。 オプション・人類最強。

「それ死んじゃうから。」

モモコがさくつとツッコむ。

（ツッコミ合ってるけどそっちはスルーか。しょうがねえかモモコだし）

ホクガンはモモコが緊張しながらガツクに茶を注ぐのを馬鹿らしく思いながら見た。

ガツク達全員に配り終わるとモモコは彼らの補佐をしている人達にもお茶を入れ始める。

その背にグサグサ突き刺さるガツクの熱視線。

（何か刺さる……）

ジュー……と刺さるところか会議場を真っ二つに切断しそうなガツクの視線を、やりにくいなあと思いつつもガツクに慣れたモモ

コは普通に動いた（隊士達の驚愕的な「それで動けるモモコちゃんスゴイ」的尊敬の眼差しもついでに注がれた）。

その後も他の隊士や補佐官らに混じってモモコも忙しく立ち働いた。そうこうしている内に真夜中もとうに過ぎ、だけれども変わらない忙しさにモモコが馴れてきた頃、突然明かりが落ちた。

一瞬の空白の後「電線がやられた！」「補助電源ONにしろ！」と言う声がする。

モモコはその時ちよつと3回目の茶を配り終えた所であった。

「きゃっ！」

突然の暗闇にトレイを抱えて呆然とするモモコに誰かがぶつかった。

「あつ悪い！」

謝る声が聞こえたが、ぶつかった拍子に落としたトレイがコロコロと転がり慌てたモモコは聞いていなかった。

（誰かが足を引つ掛けたら大変だ！早く回収しないと！）

おぼろげに光るトレイを追いかけるが暗闇の中、しかも皆が右往左往するので中々追いつかない。その内トレイがスツと消えた。

「あ、あれ？」

戸惑うモモコの前にズツ・・・と質量を伴った大きな影が立ちはだ

かり、覆いかぶさった。

影はそのまま軽くモモコを抱きしめる。首筋に湿った何かが軽く触れた。途端ジツ・・・と痺れにも似た何かが奔る。

あ・・・え？なに・・・誰なの・・・

突然の事に動転するモモコにふわっと慣れ親しんだあの人の匂いが・・・した。

あ・・・この匂い・・・ガツクさんだ・・・

影がガツクだと確信したモモコの手が衝動的に動いた。

影の白いワイシャツを一旦ギュツと握り締めると、そのまま背中の方に廻す。縋りつくようにして影に抱きつく体重を預けた。暗闇がモモコを大胆にしている。

熱い・・・熱くて熱くて燃えちやいそうだよ・・・何も・・・考えたくない。ガツクさん・・・

一瞬硬直した影だったがあやす様にモモコの背をゆっくり撫でた。その優しい仕草とは対称的にモモコの首筋にある熱は一層強くモモコに押し付けられる。

影の熱を感じたちまち目も眩む様な、爆発し溢れる様な感覚が体中に広がりモモコを揺さぶった。

・・・ガツクさん      ガツクさん

・・・スキ。大スキなの。ガツクさんだけ。

モモコは想いの丈を込めて影の胸に顔を押し付けると震える息をついた。

同調するように影も息を荒げて。

モモコの小さな体を抱く手に力が籠る。こも

周囲は相変わらずバタバタしているが2人の周りは別世界の様に静かな闇があつた。

優しくて秘密の闇。

やがて影は大きく息を吸うと吐き出し、モモコの背をポンポンと二度軽く叩いて、今の状況をモモコに気付かせる。

モモコはハツとして顔が火の様に熱くなった。急いで影から身を離す。

クスリと影が笑つた様な気がした。羞恥に顔ばかりか体中が熱くなる。

「あ、あの・・・」

焦って何か言おうとするモモコに影はそつとトレイを渡すと、モモコの頭をクシャリと撫でた。

そのまま気配が消え、モモコの周りに喧騒が戻ってきた。

間を置かずパツパツと光が瞬き部屋に明かりが点くと、明かりが消える前より少し散らかつた部屋を照らした。

モモコがおおずとおおずとガツクの方を見ると。

ガツクは明かりが消える前と全く変わらない姿勢でテーブルに座っていた。

デスクで重ねた手の甲から熱さを含んだ艶やかな黒い眼が真っ直ぐモモコを射抜く。

今、あたし絶対顔が赤い。シャレになんない程真っ赤だ。

「やるのうガツク。」

ダイスが意味ありげにガツクに向かって話しかけた。

「・・・何の事だ？」

「しらばっくれちゃって。ヒューヒュー恰好いいねえ。」

ホクガンもニヤニヤ笑いながらからかう。夜目が利く2人はガツクとモモコの刹那な逢瀬にも似た短い時間を見ていた。呆れる気持ちと「あのガツクが」と言う感慨深い気持ちで半々と。

ガツクはうるさく囁きたてるホクガン達の声聞きながらも頬を赤く染めたモモコを見つめ続ける。

やがてモモコの唇が声には出さずゆっくりと動いた。

”ア・リ・ガ・ト”

言い終ったモモコははにかむ様に微笑んだ。

「フ・・・何でも言え。」

ガツクはホクガン達にそう返すとモモコに伝えるように薄く笑った。

6 - 8 秘密の間(後書き)

Loveしてみました。イエイ。

あれってどういう意味なのかなあ……。

モモコは広報紙に載せる写真や半端に書いた記事をそのままに、  
の思いに耽<sup>ふけ</sup>っていた。

先日ブリザードで停電した際 影<sup>ガツク</sup>に抱きしめられた件である。

意味なんてないのかも。あたしが落ち着くようにつて。確かにホッ  
とした。すごい……安心して。

でも……首に押し当てられたアレは……アレは？

モモコは指先でそつと其処に触れた。

まだ……感じる。まだ残ってる……影<sup>ガツクさん</sup>の熱。首筋に。

落ち着かせるだけであんな事しないよな？普通はしないよね？

……でもガツクさんだからな……

「あーあ。」



モモコは椅子の上で仰け反って大きなため息をついた。

何か・・・勘違いしちゃうじゃん。ガツクさんもあたしの事・・・  
なんて。

・・・それとも・・・期待してもいいのかな。

モモコはあの夜、自分を見つめて微笑むガツクを思い出す。

あの、あの唇があたしの首に・・・

「ぎゃー!」

モモコは自分の妄想に激しく羞恥しデスクに突っ伏してバシバシ叩いた。

「うるせえぞモモコ。静かにしろよ。」

ホクガンが顔を顰めてモモコの方を見た。

「……………」

モモコはデスクを叩くのをやめると、さっきとは打って変わったうんざり顔でホクガンを見た。

「……あのさ。」

「んあ？」

「なんでいんの？今日で3日目だよ。」

ホクガンはモモコの部署部屋にソファがない事を知るや勝手に持ち込んだソファに寝転びながらモモコを見た。

「いいじゃねえかよ。固い事言っな。」

「いや言っよ。仕事はどうしたのさ。忙しいんじゃないの？」

「ううん全然暇。」

「へー。えつと、デユスカさんの番号は……っ」と

「待て待て待て。話合おうじゃねえか。早まんな。」

ホクガンは受話器を取ったモモコの手を上から抑えた。

モモコは抑えられた手を見た。

ガツク同様大きな手である。モモコの手など手首から先がないかの様、すっぽり収まるのも一緒だ。

「でも何も感じない。」

ホクガンの手が抑えてる。ただそれだけだ。ガツクの時の様に体が熱くなる様な事もない。

ホクガンを見るとキョトンとした顔をしている。ガツクの様にか何かを含む様にして自分を見るあの眼差しでもない。

「どうした？」

「うづん、何でもない。」

モモコはガツクとホクガンの違いを見て、ガツクが向けるあの眼差しは意味があるのかないのか考える。

「あ、やっぱり何かある。」

「何だよ。」

「あのさあ……でもホクガンに聞いてもなあ。」

「よし、二度と俺に話しかけんな。」

ホクガンは手を離すとソファにドスッと座った。

「あのよ。」

話しかけるなど言っておいて自分から話しかけるこの男。

「何、帰る気になった？ドアはそこだよ。」

モモコも大概酷い。

「全然……あのよおモモコ、俺……おかしいんだ。」

「頭が？」

「バカ。んなワケねえだろ。そうじゃなくて俺、病気みてえなんだ。」

「……サボリ病？」

「ちげーよ。それは俺の特性だ。もつと深刻なモンだ。」

モモコはいつになく真剣なホクガンの顔に少しだけ真面目になった。

「・・・マジ？どこが悪いの？」

ホクガンが俯いてため息をつく。その顔は険しい。

モモコは何だか先を聞くのが怖くなった。

よく見ると細かくホクガンが震えているではないか。

嘘・・・嘘でしょ？きつとからかってるんだ・・・ホクガンの事だもん。

・・・でももし本当だったら？それが治らない病気だったら？ホクガンが・・・死んじゃったらどうしよう。

ガツクさん！

モモコがちよつとだけ泣きそうになった時ホクガンが叫んだ。

「祭りー！ー！！！」

「だ〜か〜らあ〜もーイベントがやりたくてやりたくてしようがないんだよ。暇で暇で頭ボーンになりそうなのケ。わかる？」

ホクガンはモモコが投げた電話を元通りデスクに置きながら続けた。

「わかんない帰れ。」

「ま・つ・り！マ・ツ・リ！」

これがあたし達の国主・・・

イベントやりたい病に罹り、拳を振って「祭り」を連呼するホクガンにモモコは過去感じた事もない様な疲れを感じた。ついでにリコールの手続きはどうだったかも考えた。

「やればいいじゃん。一人で。」

「つめたっ！お前薄情モンだな！なあ〜付き合えよ〜 一緒にやるうぜ。」

ウザい。超ウザい。

モモコは首を傾げてウィンクする37歳独身国主に心底そう思った。

「イベントやりたいんならテンレイさんに許可もらえばいいじゃん。でもその前に溜まった仕事片付けないとね。」

「やだー！遊びたいよおー！」

「ホント帰ってくんない？いい加減にしないとデユスカさん呼ぶから。」

「あっ！そついやお前ガツクに言ってねえだろうな！アイツにバレたらどんな殺され方されるかわかったもんじゃねえからな。」

「そつだな、今日の気分は撲殺だ。」

ガツクはホクガンの左頬を破壊力満点の右ストレートで殴った。ホクガンがバウンドして壁にぶち当たり跳ね返ってゴロゴロと床を転げる。

.....

「俺でさえモモコの仕事中は（会いたいのを）我慢していると言っのに貴様はココで・何を・している。」

「い、いやあ、モモコに広報の進具合を尋ねようと思って〜。」

「わざわざ国主自身が赴いてか？お前の執務室に補佐官はおらんのか？スタッフはどうした。電話はないのか？あ？」

ガツクは転がってきたホクガンの襟元を素早く掴むと頭上高く持ち上げ尋問を開始した。

その顔は倫理委員会がストッ プ！ストッパー！R18！と中止をかけるほど険しい。

「ガ、ガツクさんいらっしやい。」

モモコは恐る恐るガツクのただっ広い背に話しかけた。

「モモコ。」

「は、はい。」

ガツクはホクガンを締め上げたまま低い声で今度はモモコに訪ねた。

「ホクガンは何時から此処にいる。」

ゲッ！

モモコは青ざめながらホクガンを見た。

ホクガンも青ざめながらモモコを見ている。

必死に何かを訴える様に目配せしようとするがガツクの締め上げが増すと沈黙した。

「え、あ、あの」

「・・・モモコ。」

「は、はいいい！」

「誤魔化そうとするのなら部屋に監視カメラを取り付」

「今日で三日目です！！」

ホクガンごめんっ！モモコは心の中で手を合わせながらガツクに皆まで言わせずチクった。

久々のヤン発動はそれ程怖かった。

モモコが即答した後「チツ」という舌打ちがガツクから出たのは・・・聞かなかった事にしよう。

「ちよつと話をしてくる。」

ガツクはホクガンを引き摺りながらモモコに告げると部署部屋から出て行った。そのすぐ後。

バキィツ　ボキツ　ドザアツ　ドスツ

等の痛い系擬音語がしばらく続いた後、ぼろ屑の様になったホクガンは迎えに来たデュスカとレキオスに医務室に連行された後、本来

の政務に戻った。

モモコは小柄な体をもっと小さく縮めながら目の前に仁王立ちするガツクを見上げた。

「いいかモモコ、ホクガンを甘やかすな。アイツはボンクラの様に  
見えて比類なき才能を持った男だ。だが、生まれ持った怠け者の性  
格ですぐ遊びに走る。俺達総所の者はアイツに仕事をさせるために  
時には厳しく接しなければならん。わかったな。」

「・・・はい。ごめんなさい。」

ガツクはしゅんとなるモモコに燃え盛る嫉妬心が少し静まるのを感じて表情を緩ませた。

ホクガンがモモコに全く恋愛感情がないのはわかってはいるが3日も  
2人つきりで過ごしたとなると我慢ならん。だが意外な事に、ガツ  
クがモモコに言った事に私情は一切なかった。

ホクガンは有事や騒動がない単調な毎日飽きると自分から傍迷惑  
なイベントを起こそうとしたり、脱走に心血を注ぐ様になるのだ。

国主としてずば抜けた才能は確かに、確かにあるが・・・  
・・・  
・・・  
超面倒くさい男。

これがホクガンの身近にいる者達のホクガンの評価である。

「でもあそこまでやる事ないと思うな。ホクガン大丈夫かな。」

「・・・モモコ。」

「あつ 何でもないです！」

再びガツクが黒いオーラを纏う前にモモコは慌てて誤魔化した。



次の日。

「……………あのさ、その見上げた根性を政務に向けたら？速攻で自治領がとれてドミニオン国になれると思うよ。」

モモコは朝出勤してあのソファに寝転ぶホクガンを見て言った。  
ホクガンはのそりとデカイ体を起こし、

「おつす。質問があんだけど。」  
「なに。」

モモコはため息をついてからデスクに座った。  
どうやってホクガンを執務室に送ろうかと考えながら。

デウスカさんに連絡取るのが一番早いけど昨日みたいに抑えられたらなあ……………結構目敏いんだよねこの人。

モモコは昨日ガツクに仕置きされ、腫れ上がり青紫や黄色のまだら模様になったホクガンの顔を見ながら思った。

「大丈夫？」

「ん？ああこれ？痛えけどすぐ治まる。あのよお前の世界に冬にやる特別なイベントってねえか？」

……………

ホクガン。

本当にそのイベントにかける情熱というか執念というかなぜそこまで？的なパワーをもっといろんな建設的な偉業的な事に向かわせる・・・と言っても無駄。もしここでうまくホクガンを執務室に送還する事に成功したとしても、ヤツは脱走してしてくるだろう。何度でも。

モモコはホクガンの真剣な顔を見て諦めた。

仕事の邪魔になる事はもちろんこのままではガツクに監視カメラを付けられるのは必至。

ならばエサを投げるしかない。

「わかった。特別なイベントね。あるよ。」

「マジかー！どんなヤツだ！すっげえ面白いんだろーな！」

たちまちホクガンの目が少年の様に輝く。

「教えてもいいけど条件がありません。」

「・・・・・・・・お前段々ガツクに似てきたな。」

ホクガンはため息をつくと屈んでいた上体を起こした。

しばらく首の後ろに手をやって逡巡していたが、やがて超上から視線でのたまった。

「しょうがねえなあ。オラ、聞いてやるから言ってみろ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ム力つくウー！超ム力つくウー！何様だお前は！！ああ猫だったら！

！この斑顔まだらに新たに模様を入れてやるのに！！

モモコは何本もの青筋を浮かべながらもウギギ・・・と耐えた。

「溜まってた仕事ぜーんぶ終わらせたら教えてあげるよ。あたしが知ってる事詳し」

「よっしやあ！！！何だそんな簡単な事かよ！待ってる、午後一で会いにくっからよ！じゃあな！」

ホクガンは喜び勇んでモモコの部屋から出て行った。

一人残されたモモコは

「なんか・・・なんか負けた気分なのはなんで・・・」

ガランとした部署部屋で力なく呟いた。

ホクガンが4日分の仕事をたったの3時間で全て片付け、スキップでモモコの部署部屋に入った・・・後クルリとドアに向かった。

「モモコに用があるのだろうか？」

「いやいやいやいや。全然ねえよ。あれ？俺どうしてこんな所に・・・  
いつけねー執務室と間違えた！。んじゃ。」

ガツクにすぐさま襟元を引っ掴んで戻されたが。

「心配するな・・・今すぐには殺さん。」

さらりとしかし凄んだ声で言うガツクに

「モモコオー！！！！何だよコレエー！！この裏切りモンがあああ！！」

ホクガンの悲痛な叫び声が響き渡った。

「ちゃんと教えるつて。別にいいじゃんガツクさんが居たって。」

モモコはブーたれるホクガンとその真向かいに座るガツクに熱いお茶を出しながら言った。

「お前に教えてもらったつて実現できなかつたら意味ねえだろ！ガツクが居たら全部潰される！」

「お前のくだらん遊びに巻きこまれるこっちの身にもなってみる。総所の皆のためにならん事だつたら潰すのは当たり前だ。」

ガツクは冷ややかにホクガンに正論を討う。

「まだ聞く気ある？」

モモコがホクガンに聞くと仏頂面で

「……あるよ。」

「んー……冬にやる特別なイベントかあ」

クリスマスとか関係ないだろうなお正月も違うだろうしバレンタインなんか興味なさそう。

じゃあ冬にする遊びとか・・・雪だるま かまくら 札幌雪まつり  
ああ あたしまだ雪像みてない〜見たかった うーん後はクロスカントリースキーとかスキージャンプ スノボにフィギュア キリがないからスポーツはナシ。あっこれは外せないよな雪合戦。した事ないけど。後何があったっけコタツでみかんか。猫は丸くなって犬は走るんだっけ。

「オイ。口からダダ出てるぞ。犬と猫つてのはなんだ。」

連想するモモコにホクガンから呆れた声が出て思考はストップした。

「あ、あれ？出た？犬と猫は別に・・・そ、それよか、何か気になる単語とか出てた？」

つくろう様にやははと笑うモモコにバカ？という視線を向けた後ホクガンは

「雪まつりって何だ」

「雪まつりはねえ、寒い地域でやるイベントなんだけど。まず一番の目玉は大きな雪像。何十メートルの雪の塊を建築物とか人物とか動物、アニメのキャラクターとかとにかくチームの好きなテーマで形作っただのが雪像。えーと後は」

「モモコ、ユキガッセンとは？合戦の事か？冬に行く戦争か？」

「あ・・・いやいや。子供の遊びだから。チームに分かれて雪の玉を投げ合ってギブアップした方が負け〜っていうシンプルな遊びだよ。でも最近は国際ルールもあるほど本格的なスポーツになってるって聞いた事あるよ。これはもちろん大人がするんだけど。」

モモコが言い終わるか言い終わらないかの時ホクガンから

「これだな。」

「コレ？」

「総所中を使って雪まつりしようぜ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・規模おつき過ぎない？」

「また面倒な事を考えおって・・・・。」

モモコが呆れガツクがうんざりしたような声を発した。

「絶対面白いつて！そうだな・・・よし、チームは混成にしよう。」

軍部も奥もその他の部も皆ゴチャ混ぜにして、雪像作ったり雪合戦したりしようぜ。優勝チームには豪華な賞品をつて。・・・ほら、レセプション中とかよ、中々いい雰囲気だっただろ？チームにして協力させりゃ軍部との関係も善くなるんじゃないかねえか？」

あ・・・

モモコはなるほどと思った。

軍部という世界は普通とはかなり違う環境にある。

それは、軍部に入りたてのまだ普通の神経を持った新米隊士達が皆、軍部施設に寝泊まりし、一日のほとんどを軍部施設で過ごし、過酷な任務をこなしたり、特殊な訓練を何日も続けたり超個人的な上官と接したりしている内に・・・アラ不思議一年を待たずに（世間では）奇怪な行動をする立派な変なヒトの出来上がりが見られるほど。

特に雷桜隊と霧藤隊にその傾向が多い。

比較的（スタートラインで比べるのがこの二隊と言う時点でなんかな）まともな他の部隊だが、波桔梗隊のある男は守護にこだわるあまり、総所全体のセキユリテイシテムを雑菌レベルで反応するほど高性能な機械を雪董隊の隊士と共同開発したり、雨牡丹隊のある女性隊士は自分の飼っている猫が可愛くてたまらず猫について色々情報を漁ったり、勉強している内にペット界の覆面カリスマになるまでになったり、（アレ？まとも？）雪董隊の男性隊士は恋人の誕生プレゼントに、痴漢どころか地下組織全体を殲滅できそうな超法規的痴漢撃退アイテムを送った。

ただ雷桜と霧藤よりは目立たないだけで充分ヘンな者もいる。

モモコが広報紙を発行するようになってまだ3回目だが確かな手応えを感じていた。

モモコは奥やその他の部にも取材に行つて軍部にどうして欲しいか職員達に聞いて回つた事があつた。その際、

「もつと普通に、常識の範囲で行動して欲しい。突発的に行動するのではなく理由があるならそう述べて断つてから行つて欲しい。」

という声がほとんどであつた。もつともな意見である。

だがしかし、その普通ができない。

その理由がもう不運と言うかどうかでしょうもないというか、彼らは自分達がちょっと（どころではないが）普通とは違う事は認識（こ

こ大事)しているので公共の場所で普通であろうと意識し過ぎるあまり奇異な行動に走ってしまうという・・・笑っていいのか同情して泣いてやればいいのか・・・いや泣くのはないな。

とそんなワケでこれはもういっそ周囲に理解し慣れてもらうしかない。  
ドン引きしたくなる気持ちはわかるがこんな奴なんだと、珍獣を見るかの如く生温い目で生温く見守って欲しい。

そのためにはチームで協力してお知り合いになるのはすごくいい案かも！ついでに仲良くなっちゃうかも！念願の雪合戦してみたい！

ホクガンはまだ引き攀れが残る顔でガツクに向かってニヤリと笑った。

それにガツクは顔を顰める。

モモコがその気になった時点でホクガンのイベントは成ったも同然。モモコの話は聞くテンレイと割とホクガンのイベントには乗ってくるダイス。

そしてモモコに一番甘いガツクはモモコに頼まれたら絶対に嫌とは言うまい。

実質ホクガンの完全勝利であろう。

「モモコ・・・その遊び・・・やりたいか？」

ガツクはダメモトで聞いてみた。

「えっ・・・うん。こういうイベントって結構距離縮めてくれ



そうだし、それに戦略的な事も必要だから軍部の皆が頼もしく見えると思うし……ガツクさん……ダメ？」

モモコは小首を傾げて不安げに揺れる瞳でガツクを見上げた。

くっ……か、可愛い。

ガツクはたちまちモモコのお願いに降参した。

「ダ、ダメな訳ないだろう……お前が望むのなら……俺は」

何でもしてやる。

ガツクはモモコの頬に手を伸ばした。が。

「いやー！ありがとうなガツク！お前が協力してくれるんなら成功間違いなしだぜ！一緒に頑張ろうな！」

モモコに伸ばした手だったがホクガンが横から掴まえ無理矢理握手する。

ガツクはわざとらしい笑顔を浮かべるホクガンをジロリと睨んだ。

「お前の為ではない。モモコの為でなかったら誰が協力などするものか。」

振り払う様にホクガンから手を外す。

「誰の為でもいいもんねー要は祭りが出来ればいいんだからよ。」

ホクガンは立ち上がると気合を入れる様に両手でガッツポーズを取った。

「よっしゃあああ！久々の祭りだぜえ！楽しむぞお！」

「そうか・・・いや、俺も今から別件の用がある・・・ああ。頑張れよ。」

ガツクはモモコが電話を切った後も受話器を耳に押し当てていた。まだモモコの声が残っているような気がする。

”ゴメン、ガツクさん。雪像が安定しなくて・・・で、バタバタしちゃって昼食間に合いそうにもないんだけど、後で・・・あ、そ、そう？うん・・・わかった。じゃあ後でね！うん、ありがとう！”

気付けばツーツーと鳴る受話器を、10分以上も握りしめていたガツクはため息をついてフックに戻した。

「モモコちゃん、忙しそうですね。」

カインがガツクの昼食をサーブしながら気遣う様に言うと、

「・・・・・・・・ホクガンを殺してやりたい。」

物騒な事を呟く上官に今度はカインがため息をついた。

『寒いだとお！そんなモン熱い魂で溶かしてやんな！！Viva！雪まつり！！！！』

.....

相変わらずセンスもくそもない異次元なネーミングセンスだ。名付けたのはもちろんホクガン。

雪まつり開催が本格的に決まり、実行委員の一人としてモモコは多忙を極めていた。

雪像の事や雪合戦を知る唯一の者としてあちこちからレクチャーを頼まれたり、ない脳みそを絞って一度しか見た事のない（しかもテレビで）雪合戦のルールを教えたりとその他にも本来の広報の仕事も抱え、ガツクと昼食も共にできないばかりか夕食さえもままならない程の忙しさ。

しかも連日連夜モモコはホクガンの執務室に詰めて、開催の成功の為、調整あるいは変更などを検討し合っていた。

当然ガツクは抗議した。

抗議と言うよりはブレイドを出してホクガンの首元に押し当て低い声で「いい加減にしろ」.....と本人が言うからには抗議した。

が。

「待て待て。俺は呼んじやいねえよ。モモコが俺の所にやってくるんだ。しかも内容は祭りの事だけだぜ？真剣になって祭りを成功させようとしてるアイツにお前が寂しがってるから帰れと言えるか？」

「ぐ.....」

「はぁ.....お前さぁ、これからずっとモモコと一緒に居るつもりなんだろ？」

「あぁ。」

「なら、こんな場面いくらでも起こると思わねえか？例えはだ、モモコを連れて行けない様な任務とか広報課の仕事が詰まっつてとか何とか何日か会えない時もあるだろ。」

「……………」

「それを一々自分の側に居ないと駄目だの、ご飯はいつも一緒だの、夜は抱っつこで部屋まで送るだの（ナゼシツテイルンダ。ホクガン）駄々をこねる気か？お前アイツよりいくつ年上だよ。申告が正しくてもだ（まだ疑ってる）17も上なんだぞ？」

ガツクは眉間に皺を深く寄せながらもホクガンの言う通りなので何も言い返せない。

「もうその位にしておけホクガン。あまりガツクを苛めるんじゃない。」

ダイスから仲裁が入り、2人は促されるままホクガンの執務室、いつものソファに座った。

今夜は久しぶりに皆で顔を合わせるのだがそこにモモコの姿はなかった。

夜も深まった頃、ホクガンから今夜集合の連絡を受けた。それにはと返事をしてガツクが家に帰ると明かりが点いていた。

（モモコがいる！）

この所祭りに忙殺されていたモモコは、ガツクが帰ってくる前に疲れて先に就寝してるか、後にモモコが帰って来ても碌に会話しな

いまま食事をしてすぐ寝てしまうと言うサイクルだったので、家は大体真つ暗な状態でガツクを迎えた。

急いで玄関を開けリビングに入ると……ソファで爆睡しているモモコがいた。

手には祭りの概要だろうか。数枚の用紙が握られたまま。一部は床に落ちている。食べかけの夕食、飲みかけのお茶、風呂に入ったのか髪はまだ湿っていた。

「モモコ……」

ガツクは手をそっとモモコの額に当て幾筋かの髪をそっと払う。下まぶたが少し窪んでいるように見える。

疲れているんだな。しかしこんな所で寝ては風邪をひくではないか。何故ベッドで休まずに……

その時ガツクの脳裏に猫のモモコが玄関で丸くなって寝ていた姿が今のモモコと重なった。

「俺を……俺を待っていたのか。」

激しい喜びがガツクの胸を苦しいほどに満たした。

思わずモモコを掻き抱きたくなるのを理性を総動員して堪える。

今、想いのままに行動してしまえばモモコを壊してしまいそうだ。額に置いた手が少し震えている。

ガツクは何度か深く深呼吸して自身を落ち着かせると、モモコの肩

と膝裏に手を回し、そっと抱き上げた。力を入れ過ぎないように己の胸へと抱き寄せる。

しばらくじっとモモコの柔らかな肢体と体温を感じていた。

モモコ・・・お前は時に心臓に悪い。

まるでお前だけが俺を殺せ、お前だけが俺を生かすようだ。

俺の人生にこんな事が起きるとは・・・全くお前は・・・

ガツクは暴走しようとする心をモモコのふにやっとした寝顔を見る事で抑え、モモコを部屋へと運んだ。

ベッドへと下ろし自身は片膝をついて丁寧に毛布を掛けてやる。柔らかな頬をガツクの節くれだった大きな手がゆっくり撫でた。

この気持ちをどうやって表わせればいい。

俺はお前の為になんか出来る。

お前は俺になんか望む。

モモコ・・・

ガツクは静かに状態を屈めると眠るモモコの頬に耳に首に手首に口付けを繰り返した。

甘やかな匂い。唇に感じる素肌。モモコの緩やかな鼓動。時折漏れる小さな吐息。

・・・・・・・・それらがまたガツクを狂わせる。

(これ以上はやめておいた方がいいな。歯止めが利かなくなる。)

少し息が乱れたままガツクは身を起こし立ち上がった。

このままずっとモモコの寝顔を見ていたいが・・・・くされ国主が呼んでいる。しかもモモコもいると思つて行くと返事してしまった。無視することも可能だが少し抗議 (彼の中での少し抗議は武器を持つての脅迫) しよう。モモコを働らかせ過ぎだ。起きているモモコにも会いたい。

そして、先程の執務室の場面に戻る。

「ガツク。」

「なんだ。」

「この祭りが終わつて落ち着いたらよお、モモコとくっ付けば？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

ホクガンはガツクのポカンとした顔を見て

(レアな表情だけどポカンとしても怖い顔だな)

と余計な事を考えた。

「だからー、嫁にしちまえて言つてんだよ。お前もいい歳だし(お前もな)モモコだつて成人してるし見た目は性犯罪者と誘拐された子供にしか見えねえとしてもだ、互いが想い合つてんだ。何の問題もないだろつて・・・・オイ、俺の話聞いているか？」

ガツクは聞いてなかった。



モモコを嫁にする……………  
モモコと結婚する……………  
俺がモモコの夫……………

祝福の鐘が鳴る教会でバージンロードを歩いてくる真っ白なウエディングドレス姿のモモコ。

やがて誓いの言葉が取り交わされ、

「それでは誓いのキスを。」

ガツクがヴェールをゆっくりと上げる。

ガツクを見上げて恥ずかしそうに微笑むモモコ。

”ガツクさん……………ううん、これからは旦那さまって呼ばないとね”

(注：ガツクの妄想です)

……………

「俺、普通の事言っただけだよな。最近周りが思ってた事。」

「ああ。今回お前に非はねえ。こいつがおかしいんじゃない。」

「まだ近づかない方がいいよな。」

「いくらワシ等でも死ぬのう。」

ホクガンとダイスは嬉しさが脳天突き抜けたガツクの狂喜乱舞と言  
う名の破壊活動を、巻き込まれないよう執務室の壁にピツタリくっ  
付いたまま静かに見ていた。

「アイツのあんな顔初めて見るなあ。珍獣発見した気分。」

「全開笑顔はやはり恐いか・・・さすがガツク。」

その後遅れてやって来たテンレイの怒号によって、漸く活動をやめ  
たガツクであったが・・・

「・・・ガツク。」

「なんだ？」

「その顔やめてもらえないかしら。」

モモコとの新しい関係に胸を躍らせニヤニヤが止まらないガツク。  
その締まらない顔はやはり絶望的に怖かった。

「見なければいいだろう。」

「視界にチラチラ入って来てイラつくのよ。うっとおしいの。止め  
られないんだったら貴方、向こう向いてて頂戴。」

酷い事をさらっと言うテンレイ。断っておくがテンレイは普段は慈  
悲深い。ただガツク達3人には氷河の様に冷たいだけだ。

「お前が向こうを向け。」

だが、テンレイが氷河ならガツクは絶対氷壁。

2人の不毛な争いはどちらかがくたばるまで続く事だろう。

「まあまあテンレイ、そう言うなよ。ガツクがやっつとモモコを嫁に

する気になつたんだからよ。」

その気になつたのではなく漸く気付いただけ。

「それであるの惨状？貴方つて本当迷惑な生き物ね。モモコが可哀相。

」

「弁償するからいいではないか。」

「そういう問題じゃないでしょ。いい、モモコは繊細な子なんですからね、扱いは細心の注意を払って頂戴よ貴方が粗暴でガサツな事は」

また始まった……

キター 過保護ママテンレイスイッチ キター……

小言が長くなければ最上のええ女……いやこれもテンレイ……

男達は止めても無駄なテンレイの小言をこの後小1時間聞く破目になる。

「早速今夜……起こすのは可哀相だな。では明日モモコに申し込むか。」

はやっ

「ガツク……今モモコ忙しいからよ。祭り終わってからにしたら。ってさつき言ったよな俺。」

「急いで仕事をし損じるぞ。」

「お前は石橋を叩き過ぎだ。」

「う、うるせえっ!」

「ホントだよな〜何時になつたら渡れるようになるんだか。」  
「ワシの事はええじゃる！今はガツクの」  
「ガツクの事が済んだらお前だな。」  
「そうだな。仕方がない、俺も協力してやろう。」  
「！！！！ いらん！お前らはええっ！ワシ一人で」  
「そう言い続けて早や ン10年。そろそろ引導渡すかガツク。」  
「ああ。楽しみに待ってるダイス。」

人の悪そうな笑みを浮かべた親友2人に言葉もなく青ざめるダイス。これでただでさえ（ヘタレによる）成功率が低い彼の想いは一気に底辺まで落ちた。

「くだらない話の途中悪いけど。」

それまで何か考え事をしていたテンレイが酷い言葉で輪に加わった。

「ガツク、私も今貴方がプロポーズするとモモコは煩わしいと思うわ。（うおおおテンレイ姉さんんん！）そこでね？どうせならロマンチックな状況で一生忘れられないプロポーズにしてみたら。」

「何？」

「おーそれいいねえ。サプライズな感じよくなかね？」

「せめてプロポーズぐらい人並みに経験させてあげたいわよねえ。」

「どういう意味だ。」

「そのままの意味だけ。」

無表情な男と笑顔なのに笑顔に見えない女が火花を散らしている。

「ママと婿の戦い再び。」

「モモコが居らんとすぐコレだからの〜」

こんな時傍観者に徹する事しかできない2人はモモコの不在を嘆いた。下手に口出ししようものなら被弾は免れない。

「雪像どうよ。」

「雪像？」

「像は何でもいいけどお前が雪像を手作りしてその前でプロポーズ。」

「あらいいわね。モモコそんなの喜びそう。そうね・・・タイミン  
グは祭りが終わった後、がいいわ。」

「ふむ・・・なぜそんな回りくどいやり方をせねばならんのかわからんが、これでモモコは俺の申し込みを受けるのだな？」

顎に手をやり難しい顔をしてガツクが呟く。

「まあな・・・。」

「モモコに気付かれんようにせえよ。」

「わかった。」

「なぜ内緒にしなきゃいけないんだなんて思ってるでしょ。」

「理解はしている。」

「モモコに同情するぜ・・・マジ。」

まアこれがガツク・・・海のように広い心で受け止めてやってくれ。  
モモコ。

次の日からガツクはモモコに秘密で像を作り始めた。

相変わらずモモコは忙しい様で僅かな時間しか会えない。

ガツクの心が悲鳴を上げる様になっていったが、ガツクはそれを像

を作る事とモモコの寝顔を見て触れる事で紛らわせていた。

モモコが自分を待ち切れず寝てしまったあの日から唇でモモコの肌を探らずにはいられなくなっている。

時々眠りが浅いのか「……ん。」と吐息にも似た声を上げるモモコに体が熱くなる事もあった。

もうすぐ……もうすぐ……モモコの全てが手に入る……モモコとずっと一緒に居られる……

ガツクは白い息を吐きながらせつせつと雪の塊を何かの形に仕上げていった。

しかし……

「お前の芸術的センスが明後日のモンだって事忘れてたぜ。」

ガツクのほぼ出来上がった雪像を見て開口一番ホクガンは言った。超忙しい合間を縫って漸くガツクの仕上がり具合を見に来たのだが、あまりの出来にしばし声が出なかった。

ぐちゃぐちゃで何がどうなっているのかというワケではなく、むしろその逆で職人技の様に精巧に出来ているんだが……いるんだが……だが。

「これ……」

ホクガンはある生き物を指差した。

「カタツムリだ。」

「だよな。．．．．．なんでケーキの上にあんの？」

「2つともモモコが好きなモノだ。」

「．．．．．」

莓やらオレンジやらが乗ったデコレーションケーキの上になぜか何匹ものカタツムリが来襲している。

．．．．．

像は等身大のモモコを中心にモモコが好き、もしくは好物、関係がある物が並べられているのだが、その組み合わせといかなぜその並びに？と首を傾げなくなる有り様になっていた。

例えば、モモコは今でもショウウが大好きでたまに会いに行っているのだが、そのショウウの下半身をなぜかレインボーフィッシュユが飲み込んでいたり、この前着ていたメイド服をゾンビが着ていたり（ホラー映画はゾンビに限ると言っていた）、巨大な満月（冬場の月は素敵だそうだ）をガツクの武器、ブレイドが貫いていたりしている（ブレイドを初めて見せた時「カ、カッコいいね．．．」と若干引き攣り顔で言っていた）。それらが全てガツクの鬼気迫る技で本物そっくりに作られているのだ。

さすが魔王様は違う。何かが違う。決して余人には理解できないしではならない頭の中身になっている。

「この像の前でプロポーズ？」

「ああ。」

「マジで!？」

「そのために作っているんだろうが。」

このままいけば祭りが終わった夜中、ライトアップされたこの像の前でモモコはガツクのプロポーズを受ける事になる。

(あまりの衝撃に肝心のプロポーズがブツ飛んじまわないか?)

「これ、誰かに見せたか？」

「作業中にカインが来た。」

「何か言ってた？」

「いや。」

「……………あつそう。」

「カイン、ガツクの雪像見たって？」

「国主…………。」

ホクガンはわざわざカインを捜してあの像に関する一般的な意見を聞いてみた。

不吉な事に顔色が悪い。

「見た事には見ました。」

「……………で？どう？」

カインは真っ青な顔で俯くと話し始めた。

「俺……………あの像を見てから眠れないんです。」



夢を見るんですよ。

俺、夢の中で真夜中にあの像の前に居るんです。

あれ？部屋で寝てたよな？なんで？て思っ、只でさえ怖いじゃないですかだから引き返すんです。

でも歩いて走ってもいつの間にかあの像の前に行き着くんですよ、もう本当怖くてパニックになって「うわああああ！！」なんて軍人にあるまじき悲鳴なんて上げちゃってるんですけど、それとも気にならない程の恐怖なんです。そして何度目かの時走りだそうとした俺の・・・俺の肩に・・・！！！！

カタツムリが

「ギヤアアアア！！！！」

ホクガンはたまらず悲鳴を上げた。

その後何とか心臓を落ち着かせたホクガンは作業中のガツクの元へ引き返し、怪訝そうにするガツクに「万が一にもモモコに見られなように」と嘘っぱちで言いくるめ、作業中はシートで周りを囲み、終了後はシートを被せる事をガツクに約束させた。

豊饒な海に囲まれそれぞれ個性のある島々が点在し、陽気な気質とバイタリテイ溢れる国民性を併せ持ち、強力な軍隊と優秀な奥とその他の部がそれらを守るドミニオン自治領国。

今日も、もちろん平和です。

例え真夜中に国主の部屋から大音量の悲鳴が聞こえていても。

ガツクに相手の為に自分が何をしてやれるかという想いが漸く芽生えました。

それでもコレも個人のエゴだと作者は思っんですけどね。

恋とか愛とかってエゴだらけですからね。それをどれだけ受け入れてもらえるか、受け入れられるかで今後の関係は変わってくると思っんですよ。

それは突然だった。

たまたま通りかかった。

ただそれだけなのに時にそれは今まで当たり前だった事を全て覆す事がある。

ガツクはカインを連れ定例会議に出席する為、軍部内を歩いていたところ、ワイワイ騒ぐ集団に出くわした。

「・・・・・・・・モモコ。」

いくつかの雪像を製作している連中に埋もれる様にして小柄なモモコがいた。

何かを指差して笑い合っている。

何の憂いもなく大口を開けて笑う姿は常にはないものだった。

「あいつ・・・・・・・・あんな顔でも笑うのだな。」

ガツクが見た事のない、向けられた事もない笑顔で男も女も混ざり合い、ああだこうだと何か話している。

「ああ・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・こうして見ると年相応の顔してますよね。周りが同年代のヤツばかりだからじゃないですか。」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ガツクは眩しそうにモモコのはしゃぐ様を見た。勝手だが何だか置き去りにされたような気分になる。

「モモコちゃん、普段から大体、年上に囲まれてますからねえ。あまり同年代と関わる事がないから楽しんじやないでしょうか。」

カインが続けた言葉にガツクの何かが軋んだ。

「……………そうか……………そうだな。」

カインはガツクの静かな声にハツとなり慌てて取り繕う。

「あつ、でもガツクさんという時の方がモモコちゃん、嬉しそうですけどねっ！やっぱり好きな人が」

「行くぞ。」

ガツクはカインの言葉を遮るとモモコ達に気付かれないようそこを通り抜けた。

なんだこの気分は……………

いきなり不確かな何かに放り込まれたようだ。

モモコに満足に会えないので苛立っているのか。

……………いや違う……………

俺は……………俺は……………

ガツクは比べてしまう。自分に向ける微笑みと先程の楽しげな笑い顔のモモコを。

あれが・・・あれがモモコの素の顔だったら？  
もしかして俺は・・・モモコに無理を、我慢を強いているのではな  
いか？

ガツクは今までの数々の自分の行いを思い出す。  
猫のモモコに激しく拒絶された事、人になったモモコが困った顔に  
なったり頑なになったり、呆れ顔になった事。

あの時本当は嫌だが俺が押し切ったから我慢していた・・・のか？

疑い出すとキリがない。

ガツクはモモコの想いまで疑い出す。

モモコの好意が感謝の気持ちのすり替えからだったら

只の頼りたい気持ちの刷り込みだったら

・・・そうだ。俺は17も歳の離れた、女が喜ぶ事も皆目わから  
ん無骨な軍人だ。

その俺にモモコが惚れる？本当に？モモコが優しいのを利用して・・・

・・・俺は・・・

モモコの本当の幸せの邪魔をして  
いるのではないか？

会議場では、いつにない静かで考え込むようなガツクに周囲は訝し  
げな表情を浮かべたが、問う者はいなかった。

モモコが殺人的なスケジュールをこなし、家には寝に帰るような生  
活がしばらく過ぎて後、総所初の雪まつり当日を迎えた。  
祭りは、国民達もやって来て趣向を凝らした雪像を鑑賞したり、接  
戦を繰り広げる雪合戦を観戦するなどして盛況を催した。  
ガツクとダイスは雪合戦には参加しなかった。その存在自体が違法  
な彼らが参戦したら戦場になるとの判断の元だ。ホクガンやテンレ  
イ、モモコ達は忙しくあっちの会場こっちの施設と飛びまわってい  
る。

「いよいよ、始まったのう。」

ダイスがのんびりした口調で隣に居るガツクに話しかけた。  
今2人は雪合戦が行われている会場の一角で観覧席に座って雪玉を  
ぶつけ合う部下達を見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ダイスは静かなガツクの顔をチラリと見て、不安げに眉を寄せた。最近ガツクの様子がおかしい。塞ぎこんでいる、という程のものではないが静かすぎるのだ。話しかけても最低限の言葉しか返ってこないし、何かを考え込んでいるようにじつと一点を見詰めていたりするのも気になる。モモコと触れ合う機会が極端に減ったせいとも考えられるが・・・それにしても様子がおかしい。

「ガツク、聞いてちよるんか。」

「・・・・・・ああ。」

何度か話しかけても黙ったままのガツクに、痺れを切らしたダイスが少し険しく問いかけるとやっと返事が返ってきた。

「最近のお前はおかしいぞ。・・・モモコとなんかあったんか？」

コイツがおかしくなるのはモモコが原因の場合が99%なのでダイスは躊躇わずモモコの名を出した。すると、

「お、噂をすれば、じゃのう。」

モモコが会場に姿を現し、何やら連絡機で喋っている。トラブルだろうか。難しげに顔を顰めていたがやがて解決した様でホッとした顔になった。

と、ダイスとガツクに気付き手を振った。

それに振り返してから隣のガツクを見ると・・・

ダイスが思わず腰を浮かして身構えるほど暗く淀んだ目でガツクがモモコを見ていた。



「・・・・・・・・ガツク？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

モモコも様子のおかしいガツクに気付いたのか小首を傾げたが、運営委員の一人が呼ぶとこちらを気にして振り返りながらも行ってしまった。

「おい・・・・・・・・どうしたんじゃ？」

「・・・・・・・・・・なんでもない。」

ガツクは立ち上がるとコートを翻しながらその場を去った。  
モモコとは反対の方向へ。

その広い背に言いようもない不安をダイスは抱いた・・・・

その後、1週間雪まつりは続き、その間ダイスは不安に動かされガツクとなるべく行動を共にしたが、不安はなくなるところか日に日に増し、それにつれ焦る気持ちを抑えきれないでいた。  
ホクガンやテンレイにもこの事を話したがいかんせん忙しい。モモコに聞く事も考えたが動揺させるだけかと思つて黙つていた。

（プロポーズでもするんで緊張しとるんか・・・・いや・・・・ガツクに限ってそれはねえ・・・・いくらモモコの事でも。）

ダイスが一番ガツクに違和感を感じる時はモモコを見かけたガツク

だ。

無表情だが、それがまずおかしい。以前なら僅かに喜びを表し、熱い目でひたと見つめる筈だ。だが・・・何か怖ろしいモノを内に抱え込み、無理に抑えつけているかのように苦しげだ。

それにモモコに話しかける事も合図を送る事もない。近づこうともしないのだ。そればかりか狂おしいようにモモコを見た後避ける様にして踵を返してしまう。

おかしい。何かがおかしい・・・

祭り最終日、ダイスはガツクを捜しまわっていた。

朝から見つからない。誰も見ていない。ホクガンやテンレイにも捜す様に連絡を入れていたが見つかったと言う返事はなかった。

夕方頃になり、諦めかけたその時総所の北の方、人気のない建物の屋上で黒い人影を見つけた。

沈み始めた太陽が最後の光を地上に落とす。

それは血の色の様に赤く白銀を染めた。

ダイスが屋上に着いた時、ダイスは息を飲んだ。

紅い残照の中佇むガツク。凍えるような風がハタハタと黒いコート  
の裾をはためかせる。

どれくらいの間ここに居た？

ガツクまで続く足跡は乱れた様子もなく等間隔で、屋上を歩き回った形跡もない。

「・・・・・・・・ガツク。」

小さく声を掛けるとガツクが視線だけ振り返る。

「・・・・・・・・なんだ。」

「搜したんじゃぞ。」

「・・・・・・・・そうか」

「・・・・・・・・なあ、ガツク・・・・・・・・どうしたんじゃ？お前・・・・・・・・おかしぞ。」

「・・・・・・・・何も。おかしな事などない・・・・・・・・以前の俺に戻っただけだ。」

「な・・・・・・・・に・・・・・・・・？」

どう言う意味かを問いかける前にガツクはダイスの横を通り過ぎた。

「待てガツク！今夜・・・・・・・・今夜モモコに言うんじゃろ？」

ガツクは戸口まで足元乱れる事なくたどり着くと、背を向けたままダイスに聞いた。

「・・・・・・・・ダイス・・・・・・・・モモコは知っているのか？」

プロポーズの事だろうか。

「いいや。驚かせる予定じゃったろ。お前が雪像を作った事も知らん筈じゃ。」

「・・・・・・・・・・なら、いい。そのまま黙ってる。」

「・・・・・・・・・・ガツク!!!」

ダイスが呼び止めるが既にガツクは影を残して消えた後だった。

深夜。

ガツクは一人あの雪像の前に佇んでいた。

モモコの姿はない。

今頃何をしているだろう。

優しいモモコの事だ、俺が帰るのを寝ずに待っているかもしれんな。だが、それも・・・・・・・・

ガツクが自嘲するようにフ、と笑った。

口は口角を上げただけで笑みの形にはならなかったが。白い息がガツクから漏れ出る。

ドガッ!

唐突にガツクは拳を振り上げ像の一つに当てた。

像はあっけなく崩れ落ちる。

それを皮切りにガツクは次々と拳を当て像を破壊していく。息一つ乱す事なく。

やがて、雪像はモモコの像だけを残して全て只の雪の塊となった。拳を振り上げるが・・・・出来るわけがない。

雪像でも・・・モモコだ。

ガツクは振り上げた手を降ろし、そつと雪像のモモコの頬に伸ばした。

冷たい・・・当たり前か。

ふと、人になつたモモコの頬に初めて触れた時の事を思い出す。

暖かで・・・柔らかくて・・・ガツクが笑いかけるともつと熱が上がった。

あの柔らかな甘い熱。

モモコ・・・

ガツクはゆっくりモモコの冷たい像に手を回し抱きしめる。

モモコ・・・俺では・・・お前を

徐々に力を入れていく。像にヒビが入り始めた。

だが……愛しているんだ……お前を

ガツクは完全に壊れた、モモコだった像を抱きしめていた。  
ずっと。

その姿を満月が見ていた。

モモコが好きだと言っていた冬の冷たい満月だけが。

6 - 1 1      それは突然に（後書き）

ブレない男がブレブレです。グラグラキてます。

番外編 『7』はシリーズな章になるだろうたぶんの前の息抜き(前書き)

お気に入りか2000件を突破した記念の番外編です。  
諸君に少しでも楽しんでもらえたら。



番外編 『7』はシリアスな章になるだろうたぶんの前の息抜き

『やっつてはいけない』

ワシの名はシヨウ。

今年6歳になる、ドーベルマンの雄じゃ。

大国「ベリアル帝国」と肩を並べるドミニオン軍部「霧藤隊」に所属する軍用犬じゃ。

飼い主であるダイス・ラズは最高位にいる「大将」を務めている。

ところでワシは今・・・生命の危機に瀕しておる・・・。

「シヨウウさーん！」

見知らぬ小さな女の子が主の執務室を開けるなり、ワシに抱きついてきた。

この匂い・・・モモコか！？まさか！しかし・・・

モモコの説明を聞き驚いた・・・じゃが不思議なほど警戒心が沸かなかった。

そう、まるで・・・長い知り合いに久し振りに会うような感覚でそちの方がワシにとって驚きじゃ。

モモコはワシの言葉がわからんようになって、ずっと友達だと涙ぐみながら言うてくれた。

正直、前の様にモモコとの楽しい会話が出来るのは寂しかったがモモコその言葉は嬉しかった。人の言葉が出せんワシだが好意を示す事は出来る。ので、尾を振り、モモコの頬をペロリと舐めた。

いきなり、本当にいきなり冷気が後方から吹き荒れた。

しまった・・・この大将がモモコ一人を出歩かせるはずねえのに・・・人のモモコに気を取られうっかり忘れておった・・・ワシはこの冷気を知っておる。振り向かのうてもわかる。

主の補佐官であるリコ・クアンの白い顔が真っ青になっているのは、ソレを直接見てしまったからじゃろう。

「モモコ・・・シヨウに舐められたぞ。」

地の底から響くような重い声が「ソレ」から発せられた。

「え？ 知ってるよ？」

モモコがだから何？と言う風に小首を傾げる。

ソレの冷気が凍気へと昇格しおった。いや、昇格はおかしいか・・・ともかくレベルアップした。

「舐められたんだぞ？シヨウに。お前の頬が。」

ソレ・・・霧藤と双璧をなす雷桜隊大将、軍部最強の男であり、主と国主の親友でもあるガツク・コクサが・・・国家の一大事！と言わんばかりにモモコに詰め寄った。

「だから知ってるよ？・・・あのねえガツクさん、犬は好意を示すために人の顔を舐める習性があるんだよ。シヨウさんがあたしにわ

かっただって返事してくれてるんだよ。嬉しいよね、ありがとうシヨウさん。」

モモコが満面の笑みで最後はワシに言った……………。

……………モモコ。

ええか、世間にはのう。心に思つとる事でも言わねえ方がええ状況があるんじゃない。それは大人でも子供でも同じなんじゃぞ…………

「……………好意?……………嬉しいだど?」

「ガ、ガツク……………落ち着け。モモコはそんな意味で言つてるんじゃないのうてな?」

果敢にも主がコクサ大将を止めようと割つて入るが

「黙れ。」

その一言で沈黙する。

「モモコ……………シヨウがいいなら俺もいいな?」

「何が?」

「俺がお前の頬を舐め」

「ええっ!やだよ!」

……………。

主の執務室はかつてない程冷え切った。

「シヨウは」

ここで串刺しになれそうなほどの視線がワシに刺さる。

「いいのに俺はやだ？・・・なぜだモモコ。」

「だって・・・何かさ、犬と人は違うっていうか・・・ガツクさんが舐めるのは違うでしょ？あ、ガツクさんだけじゃないよ？なんて言うか・・・皆そうだと思うし。」

「ではシヨウだけはいいのか？」

「うん。シヨウさんはいい。」

ねー！とモモコがワシに同意を求めるがそんな余裕はねえ。

モモコ！モモコ！モーモーコー！

ワシの！ワシの背後で！コクサ大将が何かに！何かに変身しそうじやあああああー！

刺さつとる。なんか刺さつとる。ガクガクと震えるワシの体。いまだくつ付いているモモコが「あれ？地震？」などとボケをかましているのが遠ざかろうとしている意識の中聞こえた。

しかし、そんな現実逃避を大将が当然許すはずもなく、モモコからワシをベリツと剥がし持ち上げた。

こっ！怖えええええ！主とは比べモンにならんほどの覇気、見る者を石に変える（リコはとつくに石像になつとる）黒い眼は憎々しげにワシを睨みつけ、薄い唇は怒りのため思いつ切りへの字じゃ。

「ダイス・・・今日、シヨウの散歩はまだだな？・・・俺が引き受けてやるう。」

！！！！！！！！

主！主！早よう！早よう止めんかああー！固まつとる場合じゃねえ！ワシの！ワシの生命活動の危機なんじゃぞ！プリシラに好きの

言葉もまだ言つとらんのだじゃ！死んだら化けて出てやるからのう！  
いいや！アンタの飼い犬やめてラウンド管理官の所に家出してやる  
けえの！

その後、散歩というより地獄の行軍をさせられ、約7時間後帰宅し  
たワシには・・・記憶がなかった。

唯一記憶に残つとるのはせめてものと付いてきた主が最後の方、シ  
クシクと泣いているのだけじゃ。

もう二度とモモコの類は舐めてはいけん。というより最初からわか  
つとつた事なんじゃが・・・はあ。

人になつた事でモモコも周りの人間も苦勞するのう、アレじゃあな  
あ。

それにしてもモモコ、小さえ体じゃつたなあ。ちゃんと食つとるん  
かのう。成長期じゃけえ栄養のあるモンをバランスよく摂取するん  
が大事じゃぞ、モモコ。

モモコが成長期なんぞとつくに過ぎており、既に成人しておつた事  
を知つた衝撃は・・・並みのモンではなかった。

『最強伝説・・・RETURN』

いつもの集合。

モモコは早めにホクガンの執務室を訪れた。まだ皆来ていない。  
ホクガンから

「ちつと用事があつからよ、そこら辺の飲みモンでも飲んで待つてろ。」

と言われた。

そこで冷蔵庫を物色していた所……運命の再会を果たす事になつた。

「あれえ？この飲み物……前に飲んだアレじゃん。」

「ん？モモコじゃねえか。一人たあ珍しいのう。ガツクはどうした？」

ダイスはこちらに背を向けてソファに座るモモコに話しかけながら、モモコの横に立った。  
そして衝撃的な光景を目の当たりにする。

「こ！これはっ！」

モモコはグラグラする頭と気持ちのいい浮遊感の中、ダイスに気付いた。

「ん？あれえ、ダイスさんじゃーん！こーんーばーんーわー！  
！！」

満面の笑顔、大きな声で挨拶した。

反対にダイスの顔は青ざめ、視線はテーブルの上に転がった……  
3本の「カルーガ」の酒瓶に注がれている。

「なに騒いでんだ？……げっ！！」

「どうした……！！！！」

連れ立って入って来たホクガンとガツクも固まる。

「ホクガンおっす！！ガツクさんもっ！！いらっしゃいありますっ！！！！」

モモコはフラフラと立ち上がり、定まらない手で敬礼らしきものをする、にやははー！と笑った。

「なに固まってるの。邪魔よ。」

最後に入ってきたテンレイが、突っ立ったままのデカイウザい男共に眉を顰めて見やると、

「テンレイさんだっ！！！！」

モモコがホクガンの腹に鋭い突きを当ててどかすと（痛くねえけど何かダメージ……）テンレイに抱きついた。

「モモコ？」

「ふにゃっテンレイさん柔らかっい！かつたっいガツクさんと大違いだね！ねーねー！ダイスさん！羨ましいっ？」

最後ダイスの方を振り向き、いいでしょとばかりにフンと笑った。

ダイスから脱水症状になりそうなほど大量の汗が流れ出る。

「ダイス・・・あなた私の事そんな目で見ていたの？・・・女なら誰でもいいのね。最低。」

脳天撃ち抜かれたダイスがヨロヨロとソファに倒れ込み、そのまま白い灰になった。

親友2人が無念とばかりに屍から顔を逸らす。

「モモコ？」

「なあゝにいゝ？」

「ガツクに抱きついた事があるの？一応進展はある」

「ううんゝガツクさんが抱きついてきたゝ」

ゴゴゴゴゴオオオオ・・・

「ガツク？もしかして無理強いでいないでしょうね。」

「す、するわけないっ！モモコ！誤解を招くような」

「だってあの時」

ガツクはテンレイからモモコを引き剥がすとその口を大きな手で塞いだ。

「あーあ。こんなに飲んじまって・・・それにしても猫だった時も強烈だったが・・・人間のこいつは半端ねえな。おい生きてるかダイス。」

「・・・最低・・・最低・・・最低・・・」

「だめだこりゃ。」



虚ろな目で同じ言葉を繰り返すダイスにホクガンは合掌してからソファに座った。

「あのさ」

「うおっ！」

いきなり耳元でモモコの声がしてホクガンはビビった。

い、いつの間に・・・ガツクの方を見ると愕然としている。両手はモモコを捕えていた恰好のままだ。

人間になっても酔拳のスキルは健在だった。

驚いているホクガンに構わずモモコは続けた。

「ホクガンさ」

「な、何だよ。」

「まえっつから思ってたんだけど。」

「はいはい。」

「ホクガンて」

「ンだよ。早く言え。」

ダラダラと喋るモモコにイライラしながらビールの缶を手取る。

「女の人より男の人の方が好きってホント？」

ブシューウウ！！

ホクガンは手に持っていた中身が入ったままのビールの缶を思いっきり握り潰した。

向かいに座っていたダイスがまともに浴びる。

「……ん？な、なんじゃ！？なぜわしはビール塗れに……」

お陰で正気に戻ったようだ。

「……なんだとコラ。誰が言ってたんだ。」

「えゝみんな噂してるよゝホクガンがいい年して独り身（ここで37歳独身国主と大将2名に矢が刺さった）なのは男の方が好きだからなんじゃとかゝでどうなの？」

「どうなのもこうなのもねえ！！男なんか好きなワケねえだろ！！  
気持ち悪い事言っな！」

「女の人の方が」

「当たり前だろ！」

「じゃなんで彼女いないの？」

「ぐっ……い、忙しいから、女作る暇なんてね」

「暇がなければ自分から作るくせに？」

「うっ……」

「ねゝねゝなんでいないのゝデリカシーがないから？国主のくせに威厳が欠片もないから？顔はいいのにおちゃらけた性格が全部残念な感じにしてるから？イベントが絡むと超ウザいぐらいはしゃぐから？ホント迷惑だよねゝあれゝ。特別手当貰いたいくらいゝ37歳にウインクされる身にもなれモモコ……」

「モモコ……その辺でやめてやれ。」

まだまだ出そうなモモコの口を押さえてガックが止める。

ソファからはホクガンのシクシクという泣き声がする。

「モモコって酔うところなるの？面白いわ。」

テンレイがモモコの新たな一面を見て興味深そうに目を輝かせた。

「猫の時一度カルーガを飲んでな……」

ダイスがため息をつきながらあの最強伝説を話した。

「その場に居たかったわ。……ねえモモコ。私にも何か言う事ある？」

男3人はギョツとした。

「テ、テンレイやめておけ！回復不可能なダメージを受けるぞ！」

「本当じゃぞ！しばらく立ち直れん様になる！」

「あら、ますます面白そう。」

「テンレイさんは言う事なし〜綺麗だし優しいしいい匂いするしあたしの憧れ〜！」

テンレイがフフンと慌てる大男達にどや顔を見せると

「でも着せ替えがな〜だんだんコスプレちっくになってきたのは勘弁〜正直バニーちゃんはキツイ。」

……

「ホクガン、ダイス、【バニーちゃん】とはなんだ。」

……

「お前は俺のモモコでいったい何を……」

説明を受けたガツクは眉間に皺をよせながら呆れたようにテンレイを見た。

「可愛いんだもの。」

「そういう問題か？そんないかげわしい恰好させおって。」

「あら、見たくないの？モモコのバニー姿。」

「ぐっ……み、見」

「でも、お前がバニーガールなんて恰好しても色気もへったくれもねえだろうなーハハハ。その幼児体型じゃ。」

ガツクが葛藤に満ちた返事をしようとした時、空気を読まない男から爆弾が投下された。

カツ！！！！

モモコの目から怪光線が放たれた。

シクシクシクシクシクシクシク……

部屋の隅でホクガンのうっとおしいすすり泣く声が聞こえる。

ダイスが青ざめてモモコの仕打ちに怯えている。ガツクは額を押さえ、テンレイは感心したようにモモコを見た。

「ねえ、ガツク。」

「……なんだ。」

「モモコ、またカルーガを飲もうとしているわ。」  
「なにっ!」

ガツクが急いで酒瓶を取り上げようとするのをモモコはするりとか  
わす。

「・・・モモコ、ソレをこっちに渡せ。」

傍から見ると脅迫しているようにしか見えないが、ガツクにしては  
珍しく緊張したマジな顔だ。

「ええ〜!!やだ〜!もつと飲〜み〜た〜い〜!」

「呑み過ぎ!呑み過ぎじゃモモコ!もうやめ」

「はあ!?!」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ダイスはソファで蹲つづくまり出来るだけ体を縮めた。デカイ体がウザった  
い。

「・・・わかった。だが、もうその一本で終わりだ。いいな。」

モモコはガツクのそうは見えないが焦った顔とカルーガの瓶を交互  
に見ていたが

「う〜ん〜・・・わかった〜でもじよ〜けんがあまりま〜す!」

いいこと思いついた!と言わんばかりにクスクス笑いながらモモコ  
が頷く。悪寒がするのはなぜだろう。

「どんな条件だ？言ってみる。」

しかし解決策を提示され、ガツクは飛び付くように言った。さすがガツク。雷桜隊大將は何者も今この場で最強のラスボスをも恐れない。きつと心臓は鉄塊で出来ているに違いない。

「んふふ〜ガツクさんが〜」

・・・あれ？鉄塊がドコドコいつてる・・・

「か〜わ〜い〜く〜こつやって〜」

モモコは顔の横で両手を組んでニッコリ笑った。

タラ・・・

ガツクの背に冷たい汗が流れる。

おいっ！鉄塊がふにやふにやし始めたぞ！どうしたガツク！

「『オ・ネ・ガ・イ』って言うてくれたらこの一本で諦める。」

パリーーン！！ガツクの鉄の心臓は碎け散り中からピヨコがピヨピヨ鳴き始めた。

.....

「.....断ったらどうなる？」

固まった空気の中、ガツクはどうか声を絞り出すと交渉の余地はないかと尋ねる。

HPはもう残り僅か。賢者はとうに死に絶え、剣闘士は戦意喪失、そして白魔道士は勇者を助ける気は更々ない。

「冷蔵庫の中の・・・これ「カルーガ」？全部飲んじゃうかも〜うへ〜」

孤立無援の勇者は無言で冷蔵庫を開け、目視確認だけで20本はあるカルーガを見た。

ホクガン・・・・・・・・

ガツクは隅つこで膝を抱えて顔を伏せたホクガンを死ね！という風に睨みつけた。

いや・・・知り合いに大量に貰ってよ・・・

お前のせいで俺は・・・

俺だっけ見たくねエよおお！！

ワシも見たくなああいいいい！！

「どうしたの〜？」

ラスボスが痺れを切らしたのか、ちょっと眉間に皺を寄せて思念だけで会話する勇者パーティに不機嫌そうに尋ねた。

やるしか・・・やるしかないのか・・・オノレ　ホクガン・・・  
後で覚えておれよ・・・

無茶ぶりしているのはモモコなのだがなぜか矛先はホクガンに向かった。

ガツクは震える拳を更に握り締めると両手を組んだ。ソレを顔の横まで上げる。

モモコの目がキラキラ輝く。

ホクガンのHPがマイナスになった。

ダイスがワツと泣き崩れ、

テンレイがプツと口から吹き出し慌てて口を押さえた。

「あつ！笑顔でね〜かわいく〜」

止めというか追い込みというかラスボスの技に半端はない。

ガツクはヒクヒクする口元を無理矢理上げ、笑顔というか見た者を即死させるような壮絶な顔になり、

「オ・・・オ・・・オ・・・オ・・・オ・ネ・ガ・イ・・・」

2m78cm、37歳独身大男が震える両手でお願いスタイル。

そのオーラは苦渋に満ちている。そしてその声は世界破滅を願っているかのようにしわがれた。

「俺は今なら貝になれる。」

「ワシなんて無機物になれる。」

ホクガンとダイスから感情を根こそぎとった声がした。

直視するには死と引き換えにせねばならない程衝撃的な姿だったが

「か〜わ〜い〜い〜!!!」



ソレを要求した全ての混乱の原因、ラスボス最終形態モモコは違  
た。  
ドコをどう取ったらアレが『可愛い』のかそう言つとガツクに抱き  
つく。

ガツクがそのままの姿で固まる（嫌な固まり具合だ）。

「も〜しよ〜がないからこの一本で終わりにするね〜ガツクさんだ  
からだよ〜特別だからね〜聞いてる？」

「き、聞いてる。そうか特別か……」

ガツクが最低な石像から復活を遂げ安堵した時、

「ごちそうさま〜！」

モモコがカルーガをペロリと飲み干した。

はやっ！

はえ！

……。

瞬きしている内に無くなったわね……。

この調子ではあの20本も……大男3人は戦慄した。

モモコはそんな男達には構わず眠くなってきたのか目を擦ると

「ね〜む〜い〜！ガツクさん抱っこ〜」

ガツクにトロンとした目を向け上気した顔で両手を伸ばす。ガツクは

「そうか、帰る気になったか。」

安堵したのかまたもや斜めに考えた。

そうじゃない

そうじゃないのう

そうじゃないでしょ

他の3人から無言のツッコミが入った。

ガツクはモモコを抱き上げると3人に声を掛けることなく部屋を出た……その直後。

「モモコ? ……どうした? ……降ろせ? なぜだ。」

「……っ! モモコ! ここで服を脱ぐんじゃない!」

「モモコ待て! その格好で走るな!!」

「違う! ソコは家じゃない! 隊士達の詰め所だ! モモコっつ!!!」

ガツクの今迄に聞いた事もない焦った声。

それが聞こえてきたホクガンとダイスは……深いため息をつくと部屋を出てガツクを助けに向かった。

その明くる朝。

「お早うガツクさーん! 昨日の集合なんだった? あたしなんか途中で寝ちゃったみたいで覚えてなくて。あれ? ホクガン……? ダイスさんまで……昨夜泊ったんだ?」

爽やかな笑顔でリビングに入って来たモモコは、そこでぐったりし

ている大男3人を見て首を傾げた。

「……モモコ……昨夜の事覚えてないのか？」

「うん。何かあったの？」

「……………」

「……………」

「……………あったにはあったが。」

”もついい……………”

モモコは声を揃えて疲れたように言った大男達にもう一度首を傾げた。

『コレくらい』

ここはベリアル帝国。

ガツク達は年に数回行われる両国の合同訓練にベリアル帝国を訪れていた。

その日も過酷な演習の後、疲れた体を癒すため温泉に入った。

「カーッ！いいねえ〜！俺達の国にも温泉はあるが山に囲まれるのもオツだな。」

ホクガンが長い腕を露天風呂の岩縁にかけながら言った。

「俺はアンタんとこの温泉好きだぜ。海を見ながらなんて最高じゃねえか。」

ローが手拭いで顔を撫でながらホクガンに返した。

軍事演習とは関係ない国主ホクガンがなぜベリアルを訪れているかというところ、ワイズムにテンレイと共に招かれたからである。

「いつも苦勞を掛けているテンレイにたまには羽を伸ばさせてやれ。優秀なスタッフであると共に妹にな。」

「ガツク!!その軍略では敵に後方を突かれるぞ!!俺ならば!!」「うるさい。お前の意見は聞いてない。」

ガツクは今日展開した布陣を熱く語るベントを冷たく遮ると、湯の中に入った。

「ガツク!!話はまだ終わってないぞ!!」

「黙れ。これ以上騒げばここから放り投げる。」

ガツクは露天風呂の、真っ白な雪原が広がる外を親指で指し示した。

「望む」

「旦那、猥褻罪で捕まりますぜ。帝国軍の名折れなんでやめて下せえ。」

うぐぐぐぐ……

ローの呆れたような声がベントを遮り思い止まらせた。

『わー！！広ーい！あつ！露天風呂だ！！』

その時、岩の仕切り向こう側から可愛いらしい女性の声がした。

『まあ……素敵。風情があつていいわねえ。』

『ありがとうございます。我がベリアル自慢の天然温泉です。持病や美肌にも良いそうですよ。』

淑やかな中にも艶のある声が聞こえ、続けてきりつとした声が続いた。

モモコ！？

テンレイ！？

エルヴィか！？

すぐさま反応する男達。男湯はいきなり静かになった。しばらくすると声が近くなった。湯に入ったのだろう。

『テンレイさんいいなあ。』

『ふふ……何が？』

『胸だよ胸ー！大きくて形も良くてホント羨ましい！あたしもそうならないかな……』

ダイヤが不必要に前屈みになるのを周りの男達は黙殺した。

『まったくです……。』

エルヴィのため息混じりの静かな声がする。ホクガンが仕切りの岩にピタツと体を寄せた。

『モモコもエルヴィも申し分ないぐらいあると思うけど。』

『あたしは体が小さいからそう見えるだけで実際はそうサイズないよ。』

『私も半分は筋肉で底上げしているようなもんですよ。』

『ありがたいじゃない。大きい小さいの問題じゃないわよ。』

抗議するように騒ぐモモコとエルヴィにテンレイの諭すような声が聞こえる。

『いいこと。バストの大きさなんて手のひらにすっぽり収まるくらいがちょうどいいの。』

『すっぽりかぁ……。ガツクさんの手にはコレくらいかな？余裕で収まるな。ガツクさん手大きいもん。』

ガツクは思わず手をお椀形にしてじっくり見た。

それに他の男共の視線が集中する。

そして自分だったらこの位……。という想像に手をガツクのように曲げてしてしまった。

「そうか、モモコはこれ位か……」

ベントから余計なひと言が洩れる。

ホクガンを始めドミニオン側とロー達ベリアル側は……  
・ハツとした。

瞬間、感覚的に湯が氷水に変わった。ブリザードも吹き荒れている。  
凍結したような空気の中……

「全員……歯を食い縛れ。」

直後、男湯から破壊音が轟く。

そして、ベントだけは雪原に放り投げられた。

……

「ねえガツクさん、男湯騒がしかったけどなんかあったの？」

帰り道、湯冷めすると大変！というガツクの強硬により懐に抱かれ、  
コートに包まれたモモコは聞いてみた。

「……何もなかった。」

それにガツクはブスツとして答える。  
モモコはガツクの後ろに続く、片頬を腫らした集団を見て首を傾げた。

その日の夜。

「モモコ、お前の胸の大きさは俺にとっては充分だと・・・」  
「何の話!？」

という会話があった様ななかったような・・・



番外編 『7』はシリアスな章になるだろうたぶんの前の息抜き（後書き）

時系列は人間になった直後、人間になった中間、本編終了後となっ  
ています。

7-1 これは現実ですよ？

あ・・・また寝ちゃったんだ、あたし・・・

モモコはシバシバする目を擦りながらベッドから身を起こした。昨夜、雪まつりの最終日。打ち上げが行われた会場にガツクの姿はなかった。

（来てねってメモ残したけど・・・お仕事だったのかな？）

モモコは服に着替えながらガツクの事を考える。

（最近ガツクさんおかしいんだよね・・・あ、あれ？あたし・・・）  
そしてある事に気付きに愕然とした。

「話してない・・・もう1週間以上ガツクさんと話してない。」  
忙しさにかまけてガツクと会話が皆無なのを気付いてなかった。

モモコは慌てて仕切りのカーテンを開けガツクの寝室を覗いた。  
ベッドに人が寝た形跡はなく、室内は昨夜見たのと何ら変わりはない  
かった。

「・・・・・・・・・・。」

モモコは力なくカーテンを元に戻すとガツクの寝室を出、リビング  
に向かう。  
廊下に出た途端に朝食のいい匂いがしてホッと息をついた。

(よかった。ガツクさんまだ居たんだ。)

モモコは笑顔を浮かべ、いつものように元気よくガツクに朝の挨拶をする。

「お早うガツクさん！」

「お早う。」

・・・・・・・・あれ？

モモコは浮かべた笑顔を戸惑うようなものに代える。

(なんか・・・違う？ガツクさんの・・・なんだろコレ)

「どうした。」

「あ・・・ううん・・・き、今日お仕事なんだ。」

「ああ。」

本来は休みに日だが何らかの任務があるのだろう。そこでモモコは最初の違和感に気付いた。

モモコが休みの日は必ずガツクも休みを取って一日中ずっと一緒に居るのに。

(・・・よっぽど大事なお仕事なんだな・・・でも・・・いつもなら教えてくれるのに)

モモコは何かがおかしいと思いつつも大人しく朝食の席に着いた。

「モモコ。」

「・・・なあに？」

「この世界・・・ドミニオンや軍部には慣れたか？」

「うん！どうにかこうにかだけど・・・知り合いも友達もたくさんできたし。えへへ。」

モモコがふにやっとして笑うとガツクはそれに目を少し狭めながら・・・言った。

「・・・そうか。それはよかったな。ではそろそろ独り立ちする時期だな。」

・・・  
え・・・

モモコは目を見開いて固まった。

ガツクが言った事が頭に入っていない。

イマ ナンテ イッタノ？

「・・・ガツクさん？」

「お前も成人した女だ。後見人とはいえ独り身の男の家には何時までも居るわけにはいかないだろう？そろそろ別に家を借りたらどうだ。テンレイ辺りにでも相談してみる。」

そう言うと茶を啜り、頭が真っ白になっているモモコを残して席を立った。

ちよつと、ちよつ・・・と待つて。  
あれ？引つ越す？誰が？あたしが？ガツクさんから離れて？え？テンレイさん？居るわけにはいかない？

モモコは玄関が開かれる音にハツとなつて呆然自失から覚めると、急いで向かった。

開かれたドアの向こう、ガツクはスリムな旅行鞆を、迎えに来たのだろうかカインに渡している所だった。

「・・・ガツクさん？」

・・・呼ぶ声が震える。

「出張で1週間ほど留守にする。自由にしていいが節度は守れよ。ではな。」

ガツクはそういうとそのまま背を向けて歩き出す。強張った顔のカインが何か言いたそうにモモコを見たが、結局何も言わずにガツクに従った。

後にはモモコだけが残された。

どれほどそうしていただろうか。モモコはゆっくりとドアから離れると無意識にリビングへと戻り、テーブルに座った。向かいにはさつきまで座っていたガツクの幻影が見えるようだ。

まるで見知らぬ他人を見るかのようにモモコを見下ろしていた。黒いガラス玉の眼。

ガツクさん……あたしに出て行けって……うん、違う、違うでしょ……独り立ちしろって、言ったんだし……でも、なんで？なんで急に？わかんない……どうして？ガツクさん……どうして……どうして……

モモコはテーブルに思いつ切り突っ伏し額を打ち付けた。ゴツツと鈍い音がして、痛みが込み上げてきたが気にならなかった。

モモコの混乱の日々が始まった。

モモコは相談したテンレイからここ数日のガツクの異様な変化を聞かされ、益々不安に思ったがまだ信じられずにいた。当り前である。想ってくれる、とはいかないまでも過保護だな、過干渉だなと思うほど構われまくっていた人から突然の拒絶とも取れる態度。

信じられない。信じたくない。……どうして？

グルグルグルグル

モモコの思考は行ったり来たり。そこから抜け出せない。

モモコが混乱にいる内に彼の人は1週間の予定を超え2週間ほど後<sup>のち</sup>、漸く帰って来た。

「出迎えご苦労。．．．それで？進展の程はどうだ？」

コレが苦しく逸る気持ちで出迎えたモモコへのガツクの第一声。  
モモコは大きな目を更に開きながらガツクの言葉を聞き．．．今にも零れ落ちそうな涙をギュツと抑える様に瞑ってから

「．．．ごめ．．．なさ．．．まだ．．．き、決まってな」

「ふむ．．．そうか。」

何かの塊で塞がれたような声で答えようとするモモコをガツクは途中で遮った。

頂垂れるモモコにまるで出来の悪い部下に対するように嘆息してからガツクは、モモコに一瞥もくねずに雷桜隊の将校達と共にそこから歩き始めた。

ハツとしたモモコが追いかけてよとするが．．．コンパスの違いかガツクとの距離はあつという間に開き、遂にはその広い背は視界から消えた。

そのモモコを雷桜隊の面々が気の毒そうに見ていたが、やがて彼らも去った。

ガツクさん．．．

一人残されたモモコ。

やがて歩きだす。

どこをどう歩いてきたのか。モモコは歩いている感覚がないまま自分の部署部屋まで来た。

あれ・・・いつ座ったんだっけ。

モモコは纏まりのないグチャグチャな文が連なる原稿を見ていた。ふと気付くと部屋はオレンジの光が溢れている。

あ・・・夕方だ。

壁の時計を見ると終業の時間だ。

モモコはまた1週間前からちつとも進んでいない原稿を見た。

・・・仕事しなきゃ。

ペンを取って原稿用紙に手を置くがそこから動かせない。

文面が出てこない。まともに頭が働かない。

暖かな動きをしばらく続けてから1時間、モモコは仕事にならない事を認め、帰宅の途に就いた。

どうしようか。

家に帰る・・・？あのガツクさんがいる空間へ？怖い・・・これ以上無関心な態度を取られたら・・・



呆れたような空気のガツク。初対面かのような無関心な目。

帰る？帰れる？居れる？ご飯食べれる？眠れる？

信じたくない。今までとは全部が違う、180度違うガツクの態度にモモコは混乱の極致にいた。

どうしてどうしてどうして？

あんなに優しいかったのに。あんなに優しい目で見てくれたのに。笑ってくれたじゃない。

何時までも側にいろって言ってくれたじゃない

なのはどうして？

どうして今になって離れろっていうの？

ガツクさん世間体なんて気にする人じゃ ないじゃない。  
なんでなんでなんで？

どうしてどうしてどうして？

ガツクさんガツクさんガツクさん

気が付けばずっと堪えていた涙が溢れて流れ地面に黒い染みを作っていた。染みはどんどん増える。

「うっ……うっ……うっ……」

モモコは堪え切れず声を漏らし、しゃがんで肩を震わせて泣いた。

わかんないなら聞いてみようか。

ふと冷静な声がある。

え……聞……く……？

上手く働かない頭で反芻する。

わからないなら聞いてみるのが手っ取り早いじゃん。ホクガンが前に教えてくれたでしょ？

呆れたように言うもう一人のモモコにモモコは……

「いやっ!?!?!」

聞いてみる?それでは決定的な言葉が返ってきたら?

かろうじて繋がってるこの想いが切れてしまったら、あたしはあたしは……あたしは!?!?!

キキタクナイ!?!!

「……どうすればいいんだろ……ガツクさん……」

モモコはさつき鍵を掛けた部署部屋のドアを再び開け、部屋に入っ  
た。

「お願い……嫌わないで……ガツクさん……」

モモコは小さく呟くとデスクに置きっ放しだった原稿を捨て、新  
たな原稿用紙を置いた。

棚から資料を引っ張り出し、かばんからメモや写真の束を取り出し  
てデスクのライトを点けた。椅子に座ってメモや資料を片手にゆっ  
くりだがちまちまとマスを埋めていった。

せめて仕事はできていればいいかも。

カリ・・・カリと小さな明かりを灯しただけの部屋にペンの音だけがしていた。

「どういってもりなんだガツク。」

ホクガンは自身の執務室でガツクを詰問していた。

睨みつけるかのようなホクガンの鋭い目にガツクは何の感情も浮かんでいない。黒い目を向けた。

「何の事だ。」

平坦な声でガツクが返すと

「貴方!!!・・・っ・・・モモコの事に決まってるでしょ。惚けてないで。」

テンレイが激昂したように叫び・・・我に返って静かな声でガツクに言った。

「・・・ガツク・・・お前の中で何があったんじゃ？なぜモモコに冷たくする。なぜ家から出て行けなんて言う・・・」

ダイスが心配そうに眉を顰めてガツクを見やる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ガツクは座ったソファの肘かけを人差し指でトントンと暫く叩いていたがやがて口を開いた。

「・・・・・・・・本来なら俺個人の事だが・・・・・・・・そうだな、お前達には言っておいてもいいだろう。」

ガツクは肘かけに肘を置くとその手に顎を乗せ淡々と話した。

「モモコに感じていた特別な感情だが・・・・・・・・あれはただの勘違いだったようだ。今はもう何の興味もない。」

しん・・・・・・・・とした部屋。時間が止まったかのようなようだ。触れられそうな、やけに濃密な空気の中、ホクガンの静かすぎる声が静寂を滑る。

「・・・・・・・・嘘つけ。なんだ、拗ねてんのか？新たなやり方か？どこでどうねじ曲がった。え？ガツク。」

「嘘？何故そんなモノを付く必要がある。お前の言う意味がわからんな。」

首を捻って本当に訳が分からないと言うガツクにテンレイが怒鳴った。

「わからないワケなんかないでしょ！あんなにモモコの事を大切にしていたじゃない！あんなに慈しんでいたでしょう！？今になつて何を・・・言っているのよ！？今更・・・今更・・・！モモコは貴方の事が！！！」

怒りのあまり喉を詰まらせるテンレイ。憤りのあまり言葉が出てこない。

呆然自失でテンレイの執務室にやって来たモモコ。今にも涙が落ちそうな大きな目は激しく瞬きを繰り返し、説明する声は震えて要領を得なかったが、大体の事は理解できた。が、その内容はとても信じられるものではなく、テンレイは急いでホクガンとダイスに連絡を入れたのだった。

ホクガンにとっては寝耳に水、ダイスは嫌な予感が最悪な事になって当たったのを知った。

勿論、どうなっているのかと聞いていなかった出張に出たガツクに連絡を入れるが「任務中」とバツサリ切られ、モモコ同様不安な2週間を過ごす事となった。

漸くの帰還の後も「忙しい」を理由にホクガン達を突っぱねたガツクであったが、「国主令」まで出してきたホクガンに渋々従った。

「のう ガツク、お前・・・お前、あのモモコの姿が目に入らんのか。お前にあんなに冷たくされて・・・シヨックで呆然としとるんだぞ？今にも泣きそうなモモコを見て、もう何も感じんと、何の感情も沸かんと本当に言い切れるんか？何を我慢しとる、何を考えとるんじゃガツク。」

ガツクは横目でダイスをチラッと見るとため息をついて立ち上がった。

た。

「呼びだした用事はこの事だったのか？下らない・・・俺は帰る、仕事があるんでな。」

ドアに向かって歩き始める。

その背に「待て！まだ話は済んでねえぞ！」「待ちなさい！！ガツク！」と呼び止める声があるがガツクは無視してドアを開けた。

「・・・モモコ。」

そこには蒼白になったモモコが佇んでいた。

何時からそこに居たのか

どこまで聞いていたのか。

嘘だろ・・・

何てこと・・・

・・・最悪じゃ

・・・

「……あ、あの……き……記事の……し、資……料を……」

つつかえつつかえそこに居た理由を話そうとするが最後まで続かずモモコは黙った。

ガツクはモモコの俯いた顔が無表情で見ていたが、やがて。

「モモコ、何処まで聞いた。」

!!!!

モモコは目を見開いて固まった。唇が震えて言葉が出てこない。頭上からはガツクの無言の圧力が掛かっている。

待たせてる……ガツクさんが待つてる……答えなくちゃ。

モモコは張り付く舌を何とか動かしガツクの容赦ない質問に答えた。

「……わか……んな、いです……ガ……ツクさんが……勘違  
いだっ……て言った……と、こちら。」

ホクガン達が黙りこむ。

ガツクのあの言葉を全部聞いたのか。

色を失くすホクガン達とは対照的にガツクは特に驚く事もなく、ホクガン達に対するのと同じように淡々とモモコに告げた。



「そうか。話す手間が省けたな。モモコ、あの時感じていたものは一時的なものだったようだ。お前には迷惑を掛けてばかりですまなかつたな。だがそれももう終わった・・・これからは軍部の一員として扱う。」

「ガ・・・ツクさん・・・」

継るようにモモコはガツクを見上げた。

決定的な事を言われているのにまだどこか信じられないでいる。

浅はかなアタシ。

どこからか自分を嘲る自分の声がする。

「そうだ、ホクガン。」

ガツクはそんなモモコを無視するようにホクガンに話しかけた。

「・・・なんだよ。」

「これからは集合時にモモコは加えないようにしろ。」

・・・

「・・・な、なんだと？」

ホクガンが立ち上がり、怒りを抑えるかのように低い声でガツクに詰め寄った。

「モモコはたかが軍部の一員だ。しかも隊士でもなく、階級もないに等しい。そんな人間が俺達中枢の人間と対等に話し合うのか？ 国の機密に関わる事だとしてあるのだぞ、子供の遊びではない。」

度重なるガツクの暴言とも取れる言葉に、とうとう我慢がならなくなったホクガンはガツクの襟元を締め上げると食ってかかった。

「てつめえ……よく言えるな！ 最初にモモコを連れてきたのはお前エじゃねえか！ 今更何言ってやがるんだよ！？」

ガツクは語気を強めるホクガンの手を易々と外すと。

「そうだな。それについては悪かった。これでいいか？」

「……俺を本気で怒らせるなよ ガツク……」

「ほう？ 怒らせたらどうなると言うのだ 国主。俺の言っている事が間違っているか？」

ホクガンはモモコを庇おうと口を開きかけたが寸でで止めた。また何か言ってガツクに否定されたら。モモコはどんなにか……！ギリギリと2人が睨みあう。テンレイは涙がにじむ目でガツクを睨みつけ、ダイスも立ち上がった。ガツクに詰めよろうとした……その時。

「あっ！ あったあー！ これっ！ ねえコレ借りてっていいですか。国主。」

緊迫する場に異様に明るい声が響いた。

国主……？ モモコがホクガンを国主と呼んだ。

「モモコ……」

テンレイがやり切れない様にそつと呼んだ。

モモコは顔一杯に笑顔を張りつけ、小走りにホクガンに近づくと紙の束を見せて確認を取ろうとする。

「あのですね国主、どうしても今度の記事に少し必要で。あの……  
・今夜中に模写して明日出来るだけ早く返しますから。」

モモコはまたホクガンの事を国主と呼ぶ。その声は少し上ずっている。

「あ、何か貸出証とか書くものあるのかな」と呟きながらキョロキョロするモモコをホクガンは険しい顔で見っていたが

「……いいぜ。持ってけよ。返すのは何時でもいい。」

モモコは蒼白な顔のまま、どこを見るときもなしに頷くと無言で執務室の出口に向かった。と、戸口に立ち、クルリとガツク達に向き合う。

「あの……もう、皆とは……皆さんとは……その……あの！う、上手く言葉が出てこないんですけど。とにかくここにはもう来ませんから！……よ……呼ばないで下さい。」

呼ばれたら来なくなるから。また困らせるから。だから。

強張る顔を無理に微笑むとモモコは一礼してから消えた。振り向いた瞬間涙が溢れてきた。見られたくなくて走る。

バカバカバカバカバカバカバカ！

あたしはバカだ！バカだ！バカだ！

一時的！終わったって！たかが一員。代わりはたくさんいる！？

言われるまでわかんない！？どんだけ皆との差があるのか？ガツク

さん呆れてた？ホントは？何時から？

恥ずかしい！恥ずかしい！口惜しい！恥ずかしいよ！！

「あつ……」

ズザザアア……

モモコは芝生に足を取られてスツ転んだ。

抱えた紙の束がバサバサと夜中の庭に散らばる。

「………つ……うぐつ……うつつ」

モモコはヒラヒラと舞いながら落ちる紙を転んだ体勢のまま見ていた。嗚咽が零れる。

なんだろ。なんかの罰でも当たったのかな。あたしなんの為にここに  
いるんだっけ。

あたし……もう少し……なんかあるのかもって思った。

……特別な……ガツクさんだけの人間になれると思っ  
た。

でも、違った？

自惚れだった？

タダの勘違い……優しくされて舞い上がって、自分の都合のい  
いように……夢みただけ……？

見透かされて。

モモコはこのところ血の気のなかった顔を恥辱に真っ赤に染めた。

年下の。後見人を引き受けただけ。なのに……

困った？厄介になった？手に負えないって？メイワクに……？

嫌われてないって思った。嫌われたわけじゃない。そこまで酷く  
ないって。

そう。たぶんガツクさんには嫌われてない。でもその一歩手前？煩  
わしくなってる？

モモコは涙が流れるに任せ嗚咽は出るだけ出した。

しばらくして涙が止まりだした頃、ぎこちなく立ち上がると目をこ  
しこしと擦って震える息を零しながらあちこちに散らばった資料を  
集め始めた。その時連絡機が震えた。

ギクリ

体が強張る。

ゆっくりと取り出して画面を見るとテンレイからだった。

フ．．．．ガツクさんなワケない。モモコは自嘲するように笑う。

「．．．．．もしもし。」

掠れた声が出てモモコは喉が痛い事に気付いた。

『モモコ．．．大丈夫？』

「うん．．．大丈夫。ゴメンねテンレイさん．．．あたしのせいで」

『モモコのせいじゃないわ！！バカ言わないで！』

ほら、あたしの為に怒ってくれる人がいる。心配してくれるんだ。まだ．．．ガンバレるだろ。

「テンレイさん。あたしは大丈夫だから．．．でも今夜は一人にしてくれる？まだ記事が上がってないんだ。」

『その状態で仕事なんて！』

クスツ．．．今度は苦笑がモモコから出た。怒るテンレイは目に浮かぶようだ。

「もう少しで終わりそうなの。無理はしないから。」

向こうでホクガンやダイスの声がする。テンレイを宥めているのだろつ。

『・・・わかったわ。ちゃんと寝るのよ。』  
「うん・・・ありがとうテンレイさん。じゃあね・・・」

淡く光る画面をしばらく見ていたがため息をつくると再び拾い始めると、ぬつと目の前。俯くモモコに紙の束が差し出された。

え・・・なに？

モモコは繁々とその手を見詰める。日焼けした太い指は大小の傷がたくさんついているが爪は短く案外綺麗だった。モモコはその手を伝ってどンドン視線を上げていった。

「そんなに俺はいい男かい？嬢ちゃん」

モモコは男に揶揄されるまでソレを不躰に見ていた事に気がつかなかった。

ハツとし、謝ろうとして、男が間違いなく見た事もない部外者だと確信する。咄嗟に大声を上げようとしたモモコだったが。

トンッ

首に軽い衝撃を感じると同時に意識が急速になくなっていく。

薄れゆく意識の中、モモコは男の碧の目が気遣う様に眉根を顰めたのが見えた。

へんなの・・・あなたが・・・やった・・・く・・・せ・・・に・・・

モモコの意識はそこで途絶えた。

モモコが不躰に見ていたソレ。

その男には本来なら2つあるもの・・・片目がなかった。



7 - 1 これは現実ですよね？（後書き）

いよいよ最終章まできました。

辛い事が今後も続きますがどうかお付き合いください。

7-2 驚き、そして驚きです

「・・・酒はねえのか。」

「ないですね。お茶ならありますが。」

「茶あ？まだ縁側で日向ぼっこは早いだろ。」

「もう充分お年を召して・・・」

「何か言ったかコラ。」

(・・・ん・・・)

モモコはボソボソと話す声に意識を浮上させた。

「お、嬢ちゃんが起きたぜ。」

ハッ

モモコは寝ていたソファから急いで身を起こした。サッと辺りを見渡す。

(あ、あれ？ここ・・・もしかしなくても広報課の部署部屋！？)

てつきり何処かに拉致されたと思ったモモコは、見慣れた部屋で目覚めた事に軽く混乱する。

「おいおい大丈夫か？」

かけられた声に驚く。と、テーブルをはさんで向かい合うソファに先程の男が一人、そしてもう一人、壁にもたれる様にして腕を組んだ男がいた。

たちまち恐怖がせり上がり、手足が冷たくなっていく感覚に捕らわれたが、怯える態度は見せまいとモモコは目の前の奇妙な2人組を睨みつけた。

座っているのは整っているとは言いが不思議な魅力を湛えた壮年の男。彼が先程モモコを意識喪失させた男だ。潰れた片目は横に削いだような傷になっていて、残った目の色は濃い緑。日に晒され、元は黒かっただろう短い髪の毛は白髪が大半を占めている。

もう一人は細身の男で柔らかそうな銀髪にはシャギーが多く入り細面の顔には銀縁の眼鏡を付けている。サファイアのように濃い青い目が印象的だ。

「・・・あなた達一体何者？・・・何の目的が。」

モモコは震えそうになる声を叱咤しながら男達に質問した。

(あたしを気絶させた後、ここに連れてくるなんて・・・)

偶然じゃなかったらモモコの事を広報課の事も知っている事になる。隻眼の男はそんなモモコを面白そうに見ていたが

「まあまあ・・・そう身構えんな。嬢ちゃんに何かしようとしているんじゃないからねえからよ。・・・それに目的なんて言うほどのモノもねえ、面白い噂を聞いたからちよっくら寄ったまでだよ。」

ふざけているのかからかうような口調で答える。その後、「さつきは悪かったな、あそこで騒がれちゃ困るんだよ。でも悪者じゃないぞ」と胡散臭い顔で謝られた。

なんなのこの人・・・。

モモコはチラッと銀髪の男を見上げた。銀髪の男はモモコと目が合うと肩をすくめてため息をついている。

(面白い噂・・・？そんな理由で軍部のこんな奥まで侵入するかな・・・信じられない・・・)

モモコが疑う様になおも睨みつけていると隻眼の男はまいったなという風に頭を掻いた。

「ガツク・コクサを知ってるだろ？」

！

モモコは息を飲んで固まった。

ガツクの感情のない顔が浮かぶ。

思わず身を竦ませるモモコを隻眼の男と銀髪の男は目配せし合った。

「俺はアイツの古い知合いなんだが・・・あいつが嫁を見つけたつてえ笑い話にもなりやしねえ噂を聞いてよ？どんな奇特な女かと面あ<sup>つ</sup><sub>は</sub><sup>い</sup><sub>は</sub><sup>い</sup>に<sup>ら</sup>来<sup>た</sup>んだが・・・嬢ちゃん？」

モモコはポカンとした顔で隻眼の男を見た。

ガツクさんが、よ、嫁！？

嘘・・・うそ・・・ナニソレ・・・いつ・・・誰が・・・そんなの聞いてないよ・・・

何がどうなっているのか。

ガツクに想い人がいるというのも初耳だ。モモコの混乱に一層、拍

車がかかる。

・・・ううん・・・聞いてないじゃない。

気付かなかったんだ。

だから・・・だから・・・ガツクさんは？・・・

モモコはガツクの突然の豹変を最悪な方向へ位置づけた。

ガツクさんは正直な人だ。

嘘とか建前とかないし思った事を思った通りに実行する・・・

ああ・・・そっか。

・・・そういう事か・・・ガツクさん好きな女性ひとが。

そ・・・う、だよね、奥さんにしてもいい人が出来たんならあたしなんか・・・邪魔もいとこ。

目障りだ。

隻眼の男は俯いたモモコの白い頬を涙が伝ったのを見てギョツとした。

「おっおい！どうした！？なんで急にっ！こっこれどうしたらいいんだステルス！」

「これはアレですね、貴方の顔が恐いんじゃないですか？いかにもな凶悪な人相してますし。性格も悪いですよね。良いところありませんしね、全部悪い。」

「それ部下が言っている言葉か！？」

「え。私貴方の部下だったんですか？」

「おいつ!？」

クスツ……

モモコは漫才のような2人のやり取りにジクジク痛む胸をしばし抑え、思わず笑ってしまった。

隻眼の男はモモコが弱々しいながらも笑うのを見てホッと息を付いた。

「やあ、笑ったな。俺は子供の悲しい顔には弱いんだ……勘弁してくれよ?とこ所で嬢ちゃん、嬢ちゃんがモモコ・クロックスだろ?ガツクの嫁さんって……アンタじゃねえのか?……にしても歳が離れ過ぎているような……これで20歳って本当か。」

……は?ヨ、ヨメ?あたしが!?

モモコは隻眼の男の言葉に驚き涙も引つ込んだ。我に返ると慌てて首を振る。

「あの……名前と歳は合ってるけど……ガツクさん……コクサ大将の奥さんは……違う。あたしじゃない……。」

そうだったならどんなに良かったか。

ガツクのお嫁さん……もしそうなれたらモモコはきつと幸せ。ガツクへの愛を気持ちのまま毎日表すだろう。大好きと言ってしょっちゅう抱きついてるだろう。ガツクの為に料理をしたり、手を繋いだり、たくさんお喋りするのだ。ガツクはあまり話す方ではな

いのでほとんど自分の話だろうけど。……そして2人だけの秘密の夜。その後自分はガツクの寝顔に小さくため息を付くのだ……それはとても……とても満ち足りたため息で……

モモコは東の間幸せな想像に浸る。

”……一時的な感情……勘違いだったようだ……今はもう何の興味もない……”

天気の話をしているかのような平坦な声だった。

ピシヤリ！

モモコには……知らない誰かにいきなり頬を叩かれたような衝撃だったというのに。

ガツクにとって自分は……一体なんだったのだろうか？

「おかしいな……コクサに他の女の影なんてなかったですよね。」

「ああ。アイツ、人間おかしいからな。人間っていうか人外。」

「貴方と一緒にですね。さすが師弟。」

「何言っただ。俺はマトモだ。」

「はいはい。自分は正気だって言い張るのがねえ……ええ……そうですか。」

「だからマトモだっつうの！」

「あ、あの・・・」

何時までも続きそうな掛け合いにモモコはもの思いから覚め、遠慮がちに声を挟んだ。

「お、悪い。・・・まあ・・・なんつーか悪い事聞いたようだな？・・・嬢ちゃん、ガツクの事が好きなんだろ。」

隻眼の男は残った目を暖かさで一杯にしながら優しく聞く。

男はモモコが泣きながら走ってきたところから見ていた。

転んでも暫く動かなかったので心配して近くまで寄ったところ、よるよると起き上がり書類を集め始める。その姿は少しの風にも飛ばされそうなほど弱々しく見えた。

と、体を強張らせて連絡機に出、「テンレイさん」という懐かしい名を耳にする。小生意気な女の子がたちまち目に浮かんだ。

しばらくして、モモコがしょんぼりしながらまた紙を集め始めるともう我慢しきれずに近づいた。

ある強力な筋から聞いた話に部下になるはずだった、己自ら跡を継がせるはずだった（奴が自力で大将に就任した時、嬉しいような面白くない様な複雑な気持ちだった）男の祝い事に、ステルスには反対されたが陰ながらも祝おうと駆けつけたところ・・・何やら様子がおかしい。

ガツクの相手のこのモモコという少女・・・いや女性は今もつとも華やいでいるだろう結婚を控えている様にはまるで見えず、それどころか酷い混乱と打ちひしがれた様子だし、ホクガン達も動揺が激しい。



肝心のガツクだが・・・異様に警戒心が強い。以前はなかったものだ。ステルスの忍びの術をもつてしても身辺に近寄る事は出来なかった。

想い合っていると聞いたが・・・一体コイツ等に何があつたんだ！？

男は潤んだ目で自分を見ているモモコに微笑むと、

「・・・よかつたら何があつたか聞かせてくれないか。悲しい事や辛い事口に出すだけでもな、楽になるぞ。・・・えーとな？俺達はあるに危害を加える者でもないし、ドミニオンに仇成す奴らでもない。そうだな・・・只の流れ者・・・通りすがりのジジイだと思つてよ、」

「充分怪しいですね。私ならとつくに通報してますね。壁に聞いてもらった方がマシですね。」

男は余計なツツコミを入れるステルスを片目で睨んだ。

「うるせえぞステルス！今口説いてる最中なんだ、静かにしろ！」

「お可哀相に・・・」と小さくだが聞こえる声にイラつきながら男はモモコに向き直り、もう一度微笑んだ。

モモコは昔はさぞかし強面だっただろうが、今は不思議な魅力が湛えた男の顔をまじまじと見た。

なぜだろう。この顔を見ていると不思議な親近感が湧いてくる。会った事ないのに。

「あの・・・あたしと会った事ありますか・・・？」

こんな強烈なキャラ一度見たら忘れないはずだ。なのに……  
男はニヤツと笑う。

「いいや会った事はねえな、それは間違いねえ。だが……俺の昔話は聞いたことあるんじゃないか？」

悪戯っぽく笑う顔はガキ大将そのものだ。  
昔話……

「あつ！？えつ！ウソ……」

思い当たったモモコが驚き慌てる様子を楽しそうに見て男は告げる。  
20年以上前、確かにその名で生きていた。今は名乗らない名を。

「そう。シス・フェザーランなあ……俺の事さ、嬢ちゃん。」

こうしてモモコはドミニオンーの大馬鹿男、シス・フェザーランと  
運命の邂逅を果たした。

この男との出会いが自分の人生の大きな転機になるとは……今  
はまだ知らない。

7・2 驚き、そして驚きです（後書き）

隻眼の男の正体はシスでした。

諸君の予想はどうでしょうか。ビンゴ！な方も多かったと思いますが。

さて、次回から大馬鹿が引っ掻き廻し始めます……

7 - 3 貴方とだけ。

「・・・あのバカに何が起こったのかわからねえが・・・これだけは言える、アイツは今でもお前の事を大事に思っているぜ。」

ガツクから決定的な言葉を聞いた夜の翌日、昼ごろホクガンはモモコの部署部屋に来て開口一番こう言った。

「ホクガン・・・」

モモコはホクガンを出迎えようと立ち上がったまま、黄金色の長髪を無造作に後ろに結わえた大男を見上げた。  
強い光を宿した眼はモモコを真っ直ぐ見ている。

「何一つ、疑うんじゃない。」

ホクガンはモモコの前を通り過ぎるとドスンとソファに座った。  
ムスツとしたままなのはどうやらガツクの態度にイラついているからようだ。

モモコは傷ついた心がまたほんのり暖かくなるのを感じる。

「あたしは・・・大丈夫だよ。」

モモコはホクガンに熱いお茶を出すと向かいに座った。

「・・・ホントかよ。」

ホクガンが顔を顰めたまま疑わしそうに見るのを苦笑して受ける。

「そりゃ・・・全然ってわけじゃないけど・・・今朝ね、テンレイさんとダイスさんが来てくれてホクガンと同じ事言ってくれたんだ。皆だけじゃなくて、カインさんや仲良くなった雷桜隊の皆、他の隊士の人達、大将さん達、奥の職員の皆さん・・・」

今朝から電話、連絡機は鳴りつ放し、訪問も相次いでいた。

さりげに慰めたりあからさまにガツクを罵ったり（主にテンレイ。奥の職員、軍部の数少ない女性隊士等）関係のない話をして気を使ってくれたり。

「へえ・・・」

「だから、大丈夫。ホクガンもありがとう、心配してくれて。」  
「フン！・・・もつと感謝しろ。もつと俺を称えろ。」

偉そうにふんぞり返るホクガン。

だがコレはホクガンなりに何でもなさげを装っているからだ。

モモコはそれには出さず笑顔で頷いて返した。

あれこれとガツクとは関係ない話を続けるホクガンを見ながら、モモコは昨夜の侵入者達の事を思い出していた。

（ホクガンに教えてあげたいけど・・・）

シスに口外するなときつく言われている。

モモコはこれまでの事を時に詰まりながら全て話した。が、自分が異世界人で猫の姿だった事は話がややこしくなるし関係ないので省

いた。

「ハア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

話を聞き終えたシスは額を抑え、長々とため息をついた。  
ステルスを見ると眉を顰めて呆れた顔だ。

「あ、あの・・・それだから・・・あたしがガツクさんのお嫁さん  
とかっていうのではないと思います。」

モモコは満ちる、何とも言えない空気になりながら話を結んだ。  
シスがモモコを見た。なんとなく生温かい視線なのが気になる。

「コクサって【バ・カ】だったんですね。あの人を人と思わない人  
でなしにこんな感情があるとは意外でしたが・・・歩く兵器にも  
弱点がありましたか。」

ステルスはバカを区切るように大きく言っただ後結構失礼な事をすら  
つと言った。（否定できないところが何とも・・・）

「え。あ、あの」

「話はよくわかった。で、これから嬢ちゃんはどうしたい。」

「・・・・・・・・・・正直・・・・・・・・わかりません。いえ、あの、ガツク  
さんに、・・・だ、大事なひ、人が出来たのなら、もちろんあの家  
から引越さなくちゃいけないし、分をわきまえるのも・・・当  
り前です。でも今は・・・何から手を付けていけばいいのか・・・。」

「

モモコは首を振って項垂れた。その顔は迷子のような途方に暮れた  
ものである。

シスはうんうんと頷きながら話を聞いている。しかしてその頭の中身は

(ダイジョーブだモモコ。あの人外小僧にそんな甲斐性あるわけねえ。アイツがんな器用な男だったら俺なんか今頃、あっちこっちにハーレム作つとるわ)

とか思っていた。ちなみにステルスは

(そんな奇特で特殊な女性は、世界中で貴女ただ御一人だと確信を持って思われるので、無用な心配なのは)

と相変わらず失礼な事を考えていた。

そしてシスはおもむろに口を開く。

「そうかそうか、そりゃそうだよなあ。ならよ、ちょっとくら俺らと世界中を旅してみねエか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・はい？

何が「ならよ」なのか。

モモコは聞き違えたかと思ひ、

「……あ、あのー……よく聞こえなかったんですけど、えーと一緒に、」

「おう、俺らと世界中を回ってみねえかって言ったぜ。」

聞く前に肯定された。

「せ、世界中……ですか。」

しかもちよつと其処までという感じでもない。

シスは悪戯っぽく笑い、目を輝かせてモモコを見、頷いた。

目の端でステルスが額を抑えているのが見えた。何やら呪詛を呟く声も聞こえる。

世界中……

モモコはドミニオンから一步も出た事がない。世界がどんなところかどんな人達が居てどんな暮らしをしているか実際に目で見て触れた事はなかった。友好国であり、隣国のベリアル帝国にすら行った事がない。

「楽しいぞお、見るもの聞くものドミニオンにいたら一生体験できない事ばかりだ。お前の事は俺がしっかり面倒見るからよ、不自由はさせねえぜ？こんな嫌な目に合ってる国なんて逃げ出そう。な、いいだろ。行こうぜ。」

シスは大袈裟な身ぶり手ぶりをしながら屈託なく笑うとモモコを誘った。



愛おしむあの光が見えない

圧倒的な熱を持って自分を見ると訴えてくるあの目が見えない

取って代わったのはガラス玉のような何の感情もない黒い目

そこに写っているのは否定され蒼白になり呆然としている自分だ

逃げる・・・ココから逃げれる・・・

軍部から出れば総所から出れば・・・ドミニオンから出て行けさ  
えすれば

もう嫌な事はなくなる？・・・

もうあたしに関心がないガツクさんを見ないでいい・・・

声を掛けてくれないかと目を向けてくれないかと儂い期待もしない  
でいい

モウ・・・モウ・・・キズツカナイデスム

モモコは瞬間、「行きます」と声を上げそうになった。が、テープ

ルにきちんと揃えた書類が眼に入った。  
ホクガンの執務室から借りてきた資料だ。  
何でもいい、取りあえずあの場を収めようと手当たりしだいに持つてきた物だった。が……

”俺を本気で怒らせるなよ、ガツク。”

”大丈夫？モモコ。”

”泣きそうになつとるモモコを見て何も感じんのか。”

皆……

モモコはギョツと目を瞑ってゆっくり開いた。スツと顔を上げシスを静かに見上げる。

「私……行きません。」

「……」

シスが目を少し狭めた。そこからは何を考えているかは窺えない。モモコはそんなシスを見て目を逸らすとゆるゆると首を振りながら続けた。

「やな事ばかり、でもないですよ。まだここには居場所が……仲間がいますから。任された仕事もやつと手応えを感じ始めた所なんです。……ガツクさんの側にはいらなくても……私、ココが好きです。」

モモコは光を戻した目を向けて微笑む。頼りなさげな光だ。だが確かにある。

シスは「ガツクさん」のところでモモコが少し震えた事に気が付いたが何も言わずに微笑んだ。

「まだ頑張れそうだな」

「そうか。」

「はい。」

「一緒には行かねえか。」

「はい。」

「ガツクに邪険にされてもか。」

「・・・はい。」

「お前の事、気に入ったぜモモコ。」

「はい。・・・って！ええっ!?!？」

シスは今度は人が悪そうにニヤツと笑って

「いい女だな、ガツクにや勿体ねえ。なあ、ガツクに見切りがついたらよ・・・俺の仲間にならねえか。お前に・・・世界を見せたいな。いろんな経験をさせてやりてえ。そしたらお前・・・もっとイイ女になるぜ。」

ポカンとしてシスを見たモモコだったが、急激に顔が赤くなりシスをまともに見れなくなった。

「何本気で口説いているんです。」

「いや〜いい眼してるぜ。育てたくなった。」

「言動が変態オヤジそのものですよ。死んで下さい。」

「ヒデエ!!!・・・どうしてお前はこう人の胸を抉る事ばかり言うんだよ？オジさんのピュアなハートをなんだと思ってるんだ。」

「オジさんではないでしょう、クソジジイの間違いなんじゃないですか。それから貴方のハートは私にとってボロ雑巾です、靴の汚れを拭くには最適ですクソジジイ。」

「滅多打ちつてこの事!!?」

ギヤーギヤーと喧しく、しかし小声で器用に騒いでいる2人を見てガツク達3人の何時もの光景を思い出した。

「フェザーランさんは」

「シスでいいぜ。」

「お待ち下さい、通り名のほうがよろしいでしょう。」

すかさずステルスから待ったが入る。

「いいじゃねえか、固い事言つな。」

「貴方の身はあなた一人のものではないんですよ、弁えて下さい。」

若い女の子に本名を呼ばれて見つとも無く浮かれる気持ちもわからなくは・・・いえやはり下衆ゲスの気持ちはわかりませんが

「おいしい!」

「とにかく自重して下さい。」

「ちえっ・・・わかつたよ。モモコ。」

「はい。なんて呼んだらいいですか?」

「龍牙りゅうが。爺臭い名前だろ?」

「ジジイじゃないですか。」

「そ、そんな事ないですよ!カッコいいです!・・・で、あの・・・」

モモコはまた始まりそうなじれ合いに慌てて口を挟んだ。

「・・・小僧どもの事か?」

「ええ・・・何故・・・会いに行つてあげないんですか。ガツク

さん達・・・龍牙さんに会いたがってました。シラキさんだって・・・

「・・・」

「俺は・・・去った人間だ。それだけでいい。」

・・・・・・・・

会いたくない、わけではないだろう。ガツク達を我が子の様に可愛がっていたとシラキに聞いた事がある。会えない理由か何かがあるのだろうか。静かに微笑むシスにモモコはそれ以上言えなかった。だがしかし、話を聞いてみると何年か前からちよくちよくドミニオンに來ているようだった。シス達はしばらく雑談した後また來ると言って静かに出ていった。

いつか・・・会ってくれればいいなあ・・・ガツクさん、喜ぶだろうな。

「お前・・・人の話聞してるのか。」

あ。

モモコはホクガンの不機嫌そうな声に回想から還った。

「ゴメン聞いてなかった。」

「アツサリ言うな。・・・たく。一ヶ月後、年末恒例の【夜会】がある。着飾って出るよ。」

「夜会？着飾る？・・・なにそれ。」

「日頃から頑張っている総所の職員達を労う大規模なパーティだよ。総所のあちこちの会場で色んな催し物をしたり踊ったり、美味しいもんを食ったりして楽しむんだ。毎年年末ごろやるんだよ。」

（忘年会みたいなものかな・・・？）

「あたしも？」

「お前は一応今年の顔でもあるんだぞ。自覚ねえのか、お前がいたら盛り上がるんだ。」

「・・・。。。」

でも・・・ガツクさんにも会う、のかなあ。だったら・・・どうしよう。

「ガツクの事なら気にすんな。」

うっ・・・気付かれてる。

「アイツはこんなもんに興味ゼロだからよ。一応顔だけは出すがほんの10分、20分程度だ。目も合わないだろうぜ。」

ホクガンは尚も続ける。

「おい、お前がこの仕事をやると決めた時、俺が言った事覚えてる

か。」

！

モモコは何時にない、強い目で己の覚悟を聞いたあの日のホクガンを思い出した。

「……うん、覚えてる。」

「まさかあのガツク対して示す事になるとは思わなかったが、誰が相手だろうと同じだ。わかってるよな。」

誰に対しても卑屈になるな、自分を貶めるな、それでもわからねえ奴には死に物狂いで認めさせてやれ。

モモコはまた少し目に光を戻す。

「わかってる……ちゃんと準備するね。」

「……それでいいんだよ。」

ホクガンは満足そうに笑うとクシャリとモモコの頭を撫でた。

「あ、恋愛的意味合いはないぞ。どっちかっていうと末っ子の妹と  
か出来の悪い弟子に対して感じる感じだからな。」

「ホクガン誰と話してるの？」

モモコはあらぬ方を見て妙な事を言うホクガンに首を傾げた。

モモコは前から歩いてくる人物に息を飲み、固まった。

ずば抜けて大きな体躯。肩で風を切り、隙のない身のこなしで歩いてくる。黒い髪に黒い眼、それは何処までも鋭く周囲を圧倒した。

ど、どかなくちや。

モモコはぎこちなく体を動かし廊下の隅に身を寄せた。顔は俯いたまま。

彼が通り過ぎる、その一瞬。

黒のコート、袖口から覗く大きな手が見えた。

風を残して彼が去っていく。



「……お疲れ様です……ガツクさん。」

モモコはやっとの思いで口にしたがきつと聞こえなかっただろう。それほど小さな声だった。

モモコがガツクの元から引越し、一ヶ月が経とうとしていた。ホクガン、ダイス、テンレイだけでなく、他の皆は変わらずモモコに接してくれたがガツクだけは違った。「一員として扱う」と言った言葉に誇張はなく、広報課に用事があればカインや書類で済ませ、モモコがガツクに用があればきちんとアポイントを取ってから行われる。今のところそんなアポはなかったが。

「……あつ！遅れる！」

モモコはしばしボーッとしていたがハツと時計を見て慌てて駆けだした。

「ごめんなさいテンレイさん！」

「あら、いいのよ。そんなに急がなくても時間はまだ充分あってよ。」

テンレイは最終点検を終えて振り返って言った。（これがホクガン達ならば小一時間の説教が待っているのだが）

「わぁー・・・」

モモコは完成した夜会用のドレスを見て感嘆の声を上げた。

「こんな綺麗なドレス・・・ほんとにあたしなんかを着てもいいのかな。なんか・・・気後れしちゃう」

モモコが少し不安そうにテンレイを見る。

「何言ってるの。モモコのサイズに合わせて作られているのよ？モモコ以外誰が着るの・・・大丈夫、このドレスに負けないぐらい素敵にしてあげるわ。まずはお風呂に入ってらっしゃい。もう女の戦いは始まっているのよ？」

悪戯っぽく笑ってテンレイはモモコを浴室へと促した。

モモコの姿が消えると、

「ガツク・・・モモコを例えどんな理由があるにしろ手放した事・・・今夜はたっぷり思い知らせてやるわ。」

メラメラと碧の目を燃やしてテンレイはあの「冷酷冷血流れる血は絶対青い鉄仮面人でなし注意報発令中男」に戦線布告した。

今夜は夜会当日。

今日と明日、総所は休みを取って一年間のお互いの労をねぎらう日だ。皆、一か月前からウキウキとタキシードやスーツ、煌びやかなドレスを用意してこの日を待ちわびていた。

お風呂から上がったモモコはプロのスタッフによって（テンレイも勿論嬉々として混ざった）頭のてっぺんから爪先まで徹底的に磨き上げられた。

「す・・・すごい！！すごいよ皆さん！！魔法使いだよ！マジでミラクル！！」

モモコは鏡に映った完成された自分を見て、どや顔で立つテンレイとスタッフを褒め称えた。

光沢のある生地で作られた濃いブラウンのドレス。袖はパフスリーブ、襟元はハイネックだが後ろは肩甲骨の下まで開き、モモコの真っ白な肌を晒している。

スカートは踵まであるが中央を開け、そこは透けるレースが幾重にも覆い、チラリと見える白い脚が扇情的だ。

今夜はモモコの髪もドレスに合わせクルクルと巻き、ブラウンの小さなリボンを沢山散らした上、真珠、濃いピンクの蝶と黒の蝶をあしらったヘッドドレスを頭に飾った。

仕上げに薄くメイクを施しピンクのルージュとグロスを引いて完成だ。

「可愛いー！！可愛いわ！！ザマ・ミセラセガツク！臍を噛んで口惜しがればいいわ！！バーカバーカ！！ホオーツホツホツホー！！」

「テ、テンレイさん・・・」

モモコは明後日に向かって高笑いするテンレイを焦った気持ちで一応止めた。

このままだとドコかに行ってしまうそうなテンレイを漸く止め、テンレイの支度が済むともう始まっている会場へと足を運んだ。

「おー！可愛いじゃねえかモモコ。お前も綺麗だな、さすが。」

ホクガンは入って来たモモコとテンレイに世辞ではなく、褒めた。

「モモコは何着ても似合うが今夜は特別だの。」

ダイスも恥ずかしくなるほど褒める。

「フフフフ……もっと褒め称えなさい。崇めなさい。靴の裏でも舐めるといいわ！」

……

「……どーしたコイツ。」

ホクガンは今夜も相変わらず美しい、けど、目が恐い事になってる

妹を見てモモコに訪ねた。

「いや・・・あたしにもわかんないけどテンションは高いよ。」

「テンレイはどんな姿でもええ女じゃ。」

うつとりとテンレイに見惚れるダイスを、シラーとした目で見てからモモコはこっそり会場を見渡した。

「ガツクならまだ来てないぜ。」

ホクガンが目敏く言うとモモコは首を竦めた。

「・・・あ・・・うん。ほんとに嫌いなんだね、こういう催しとか。」

「嫌いつていうか意識の欠片にもないと言った方がいいな。なぜ出席しなければいけないかではなく夜会そのものが頭に入ってない。

天気予報の方が覚えてるんじゃないか？訓練や任務に少し影響するからな。」

ああ・・・ありそう。

モモコは苦笑した。そしてもう一度会場を見渡す。

色とりどりのドレスを着た綺麗な女性達。ビシッと決めたタキシードやスーツに身を包んだ男性達。大袈裟にならない程度にまとめられたロマンチックな会場。グラスを交わす音や笑いさざめく笑顔の人達。中央では楽団の音楽に合わせて優美にだがリラククスしてダンスを楽しむ人達で混み合っている。

「踊るか？」

頭上からホクガンの声がするもモモコは首を振った。

「ううん。」

「何だよ。ガツクじゃなきゃダメってか。」

ギク。

「あゝ．．．うん、それもあるんだけど、えへ．．．。実は昨日ダンスの練習中に少し足首を捻ったみたいでちよつと痛いんだ。だから今夜は無理して踊らないでいようかなって。あんまり上手くもないし。」

モモコは否定してもホクガンにはお見通しであろうと素直に肯定した。

「ったく、お前は．．．。でもよ、センスがなくなつたってダンスはノリだけ。ちつとステップ間違えてもいいじゃね？．．．おっ、見るよ。」

ホクガンが行儀悪く顎をしゃくつた先にはダイスがテンレイをエスコートして中央に進んでいるところだった。

楽団が楽しげなワルツを奏でると銀黒と白金が一礼して踊り始めた。

「ふわあー！凄ーい！息ピツタシ！」

そこには普段憎まれ口を叩きあっている2人はいず、微笑み合つてダンスを楽しむひと組の男女がいた。

「ふーん．．．何か進展でもあつたのかねえ。」

モモコはホクガンの何気ない言葉にズキッと心が痛むのを感じた。

もし・・・もし、ガツクさんが変わらなければあそこで踊っていたのは自分だったかも・・・いいなあ。

考えても仕様のない事だと思いがモモコはテンレイが羨ましくて仕方ない。

（ハア。あたしなんて嫌な奴だろ。あんなによくしてくれるテンレイさんに嫉妬しちゃって・・・ダメダメ！気分入れ替えよう！）

「どうした？」

ホクガンは側を離れようとするモモコに声をかけた。

「・・・ちよつと人に酔ったみたい。バルコニーに出てくる。」

「大丈夫か？テンレイ呼ぶか。」

「大した事ないよー大丈夫。テンレイさん達が戻る頃にはあたしも戻るよ。」

モモコはヒラヒラと手を振りながらバルコニーを目指した。

ホクガンはその後ろ姿を何とはなしに見ていたがある事に気付いた。会場のそここでモモコを目で追っている若い男達が何人かいる。

ふーむ。

ホクガンは改めてモモコをじっくり見てみた。なるほど、ガツクの超合金のガードが外れたモモコは中々魅力的に映っているようだ。元から小柄な体は儂い印象を与えているが、今夜のモモコはテンレイの力作も手伝ってまるで甘いチョコレートソースに包まれた美味しそうなモモ。しかもガツクとの事で愁いを帯びている顔は男の庇護欲を大いにソソるだろう。

「ガツク・・・このままだと取り返しのつかねえ事になんぞ・・・誰かに攫われた後じゃあ・・・何もかも遅いんだぜ？」

ホクガンは眉間に皺を寄せながらまだ会場に現れない、頑なな馬鹿男に向かって一人言を言った。

綺麗な月だな。

バルコニーに出たモモコは冬の清冽な空気を胸一杯に吸い込んだ。

ガツクさん・・・夜会には来ないのかな？

会いたいけど・・・会ってもどうしたらいいかわかんない。

きつと・・・何にも言えずに俯いているだけ。縮こまってガツクさんの目に入らない様に息を殺してるだけ。



モモコはガツクをできるだけ避けようになっていた。恐がっていると書いてもいい。

傷つきたくない

シスに「まだやれる」と感じさせたモモコだったが、いざガツクに会う事を考えると無意識に体は竦む、足は止まる。ガツクの執務室はもちろん、行きそうな施設や訓練場、雷桜隊の皆とでさえ接触を避けるまでに。

960

そつとガラスの扉から会場を窺う。まだテンレイ達は踊っているようだ。

扉を閉ざしていても楽団の音楽が聞こえてきた。

誘われるようにモモコはそつと体を揺すりステップを踏み出した。

ガツクさんはおっきいから右手は肩には届かないなあ・・・この辺・・・？

モモコは目を閉じてガツクと踊っている想像に浸った。ガツクのやや強引なリードは自分には大変なものになるだろう。

でも……今はその強引さが欲しい……自分をきつく抱きしめてずっと放さないで欲しい。

誰とも踊りたくない。

ガツクさんとずっと……見つめ合って。

モモコは月が照らすバルコニーで一人踊る。

だが、微笑み、軽くステップを踏む様はまるで誰かと踊っているようだ。

「あっ」

片足に体重を掛け過ぎたのかズキツと痛みが走った。

「……………これ以上はやめた方がいいかな……………」

モモコは確かめるように少し歩いてみて、大丈夫そうだと確認すると暖かい会場に戻った。

「……………」

モモコが戻って数分経った頃、植え込みの陰から大きな体軀の影がそっと出てきた。影はしばらくモモコがいた辺りに佇んでいたがやがて音も立てずに去った。

モモコはその後戻ったテンレイ達や親しくなった職員や隊士達と暫くワイワイと楽しんでいたが・・・

(うーん。ちょっとヤバいかも)

1時間経った頃、足首の痛みが無視できない程になってきた。歩けないほどではないがこれは早く部屋に戻った方がいいかもしれない。

「テンレイさん。」

モモコはシラキと歓談するテンレイに声を掛け、部屋に戻る事を伝えた。

「まあ大変。今すぐ送るわ。」

「大丈夫大丈夫、一人で戻れるから。歩けないほどじゃないし。」  
「でも」

「テンレイさんが抜けたら困る人がいるかもしれないよ？あたしはホント大丈夫だから。」

「誰かに・・・」

それでもテンレイが渋っていると

「いいって。皆楽しんでるんだし、部屋だってそんなに遠くないから。だいじょーぶっ！」

明るく笑ってモモコは断った。

心配そうに見送るテンレイとシラキに手を振り、ホクガンとダイスに挨拶をすると（大男2人にもうるさく言われたがモモコは同じ理由で断った）

モモコは部屋に戻る回廊を歩きながら考える。

（最近なんだか皆が過保護になって来たような気がするなあ・・・  
気使ってくれてるのかな？うーん、しっかりしないと、あたし）

フウ・・・とため息をついて目の前を見ると、

「あれっ？ココ何処だ？」

見慣れた場所とは全く違う回廊に出てしまった事に気がついた。

「ヤバい！考え事なんかするから！あたしのバカ！」

急いで踵を返した途端、尋常じゃない痛みが足首から起こった。

「痛っ！！」

痛みが抜けそのまま転倒してしまっ。

「うっ。」

モモコは転んだ痛みにも呻きながら上体を起こし、足の具合を見てみる。酷く捻ったらしくジンジンと痺れるような痛みだ。が、やがてそれはズキズキと脈打つように変わる。ためしに動かしてみたが立つのも無理そうだ。

「どうしよう・・・うーん。テンレイさんに・・・迷惑掛けるなあ・・・って！」

こうなつてはテンレイに助けてもらおうと連絡機が入ったクラッチバックを・・・会場に忘れた事に気がつく。

「あたし・・・超バカだ。超絶バカ。自分で自分の首を絞めてやりたい。」

項垂れながら回廊の壁に寄りかかる。

ハア・・・こうなつたら誰かが通るのを待つしかないか。

モモコがズキズキと痛む足を堪えながらヒールのストラップを緩めようと身を屈めた時、俯いた視界に黒い靴が入ってきた。

急いで顔を上げた先には。

「ガツクさん……」

黒いコートを着たガツクが無表情で立っていた。

7 - 3 貴方とだけ。(後書き)

ホクガンが主張しているのは諸君に。  
シスとステルスにはまったく気付いていません。

7 - 4 ここからがスタートです

モモコは呆然と目の前、いや遙か頭上から見下ろす、愛しくもあり恐れてもいる男を見上げた。

ガツクはそんなモモコに構わずしゃがむと、挫いた方の足をそっと手に取った。

「っ……う……」

ガツクは注意して触れているのだろうがモモコは呻き声を洩らさないように歯を食いしばった。

「……歩けるか。」

無理。

即座に思ったが、ガツクの望んでいる答えではない事は何となくわかったのでモモコは壁に手を付きながら何とか立ち上がるうとするが、履きなれないヒールを履いている事もあり、ズルズルと体は滑った。

「もういい。」

ガツクはため息交じりに言つとモモコを有無を言わさず抱き上げた。そのまま歩き始める。

「あ……あの！」

「……」



「あの、ガツクさん。」

「・・・・・・・・・・。」

「あの・・・・・・・・何処に行くんですか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・。」

移動する振動に安定感を求めて、だが小さくガツクのコートの襟を掴んだモモコはガツクに話しかけた。が、何度話しかけてもガツクが無言でいるうちに諦めた。

（もう、話もしたくない・・・・・・・・のかな）

モモコの眉が八の字に下がり、目も潤む。モモコは震える息を大きく吸って涙を堪えた。

顔は沈んだ気分そのままに俯く。だから知らなかった。

そんなモモコをチラリと見てガツクが顔を少し歪めたのを。

人目を避ける様にしてそのまま2、30分ほど歩いただろうか、ガツクがある建物の前で止まった。

（え？ここって・・・）

モモコが不思議がっているとガツクがドアノブに手を掛ける。

ドアは開かなかつた。当然だ。診療時間はとくに過ぎ、鍵が掛かっている。

「・・・・・・・・・・。」

ガツクはもう一度ドアノブを引っ張った。

バキッ

(ええー！)

ガツクはドアを破か・・・いや少々強めに開けると中に入り、待合室を通って処置室に入るとベッドにモモコを寝かせた。サラサラとドレスの衣擦れの音がする。

ガツクはベッドの横に椅子を持ってきて座ると息を詰めるモモコに構わず、挫いた足を持ち、ゆっくりヒールを脱がせた。そして、

「破くぞ。」

一応断って(返事は聞かない)ストッキングを裂く。

ピリリ・・・

静かな室内にストッキングが裂かれる音がして、やがてガツクはモモコの白い脚を露わにした。

「・・・・・・・・・・。」

一拍置いて、モモコの片足を持ったまま大きな手で爪先をそっと握った。親指から小指まで丁寧に触る。

「っー」

ドキン・・・・・・・・ドキンドキン・・・

「・・・あ、あの、」

モモコはガツクのなすがまま、呆然としていたがその光景とガツクの手の感触に心臓が高鳴りだす。

「痛むか？」

ガツクはモモコを見ない。低い声で聞いた。

「あ・・・いえ。」

「では・・・ここは？」

ガツクは指を滑らせ土踏まずをきゅっと押さえた。

ひくん

妙な感覚に体が動いてしまう。

「・・・んん・・・あっ、い、いえ、少し痛いような・・・」

声も変だ。じわつと頬に熱が集まり、手は何か縋る物を探して診察台のシーツを掴んだ。

（やだ・・・なんか変・・・ガツクさんは足を触っているだけなのに・・・）

「・・・もう少し上か。」

今度は包み込む様に足首を太い指が掴み探る様に動いた。ゆっくり

と。

「ふっ……んんっ……痛いっ。」

モモコは痛みと同時にお腹の底から沸き上がってくる熱い何かを抑えられず、高い声が出てしまう。が、ある部分を押しされて鋭い痛みが奔った。痛かったがお陰で我に返り、慌てて手で口を覆うが。

「やはり足首を捻ったようだな……ここだと……。」

ガツクは更に上、モモコの脰脛（けい）に手を這わせる。痛みを宥める様に擦りながら上へ上へと向かう。暖慢な動作……モモコの肌を味わっているかのよう……。

「~~~~~~~~っ！……ガツクさ、ん？……んっ」

手で抑えても洩れ出てしまう声に羞恥しながら困惑気味にガツクの名を呼ぶ。

「脰はどうだ？」

対称的にガツクは至極冷静にモモコに聞いてくる。だが……少しだけ。ほんの少しだけ声が掠れて聞こえるのは……気のせいだろうか？

「い、いえ……す、脰は大丈……。」

ガツクはモモコの膝裏まで指を進めるとそろりと撫で上げた。

「ぎゃっ……」

敏感な場所への・・・まるで愛撫の様な指の動きにモモコから小さく叫び声が上がった。

壊れそうなほど高まる鼓動、頬は真っ赤に、目は潤んでいる。

なんで・・・あたし・・・変・・・だ。

フツ・・・ン・・・フツ・・・

小さな部屋にモモコの抑えた呼吸がやけに響く。

「・・・・・・・・・・。」

ガツクはモモコの足を放すと無言のままいきなり立ち上がり、狭い処置室の中を歩き回る。

ガツクが離れたからかモモコにひんやりとした感覚が来て少しだけ冷静になれた。

やがて氷水が入ったボウルや包帯やら冷湿布やらを集めたガツクは傍らのテーブルに置くと、再び座り、モモコの足を掴んだ。

ボウルに浸した布でそつと患部を覆う。何度か繰り返してから、さつきとはまるで違うテキパキとした動きでモモコの足首に冷湿布を貼り、器用に包帯を巻いた。手際がいいのは応急処置に馴れている軍人だからか。

ハア・・・

ガツクは浅く息を吐き出すと白い包帯が巻かれた足を何枚にも丸めたタオルの上に置き、モモコの顔を一瞥だにせず背を向けると、デ

スクの上にあつた電話の受話器を取つた。

「・・・カイン、誰にも気付かれず奥西棟の第二診療室まで来い。」  
それだけ言うと返事も聞かずに切る。

ガツクは再びため息を漏らすと髪を掻き上げ、そのまま手を首の後ろまで回すとモモコをチラリと見た。  
それまでボーツとガツクの動きを目で追っていたモモコはハツとした。

（お礼！）

慌てて起き上がろうとしたがガツクに制される。

「起きるな。足は心臓より高い位置に置いた方がいい。」

あ・・・そうなんだ。

ガツクは低い声で捻挫の応急処置方をボソボソ話すと、処置室の壁に凭れ、両腕を組んで目を閉じた。  
ガツクが目を瞑っているのを確かめるとモモコはガツクを盗み見る。

ああ・・・ダメ・・・やっぱり・・・

あたしやっぱりガツクさんが好きなんだな・・・  
どんなに無視されたって迷惑そうに見られたってやっぱりこの人が好きだ

だって

ガツクさんを見ているだけでこんなに胸が苦しい  
ガツクさんのどんな小さな声も聞き逃したくない  
ガツクさんに触られるとドキドキして体が熱い  
こんな熱、知らない　ガツクさん以外知らない

それ全部……この人を、もうどうしようもないほど愛してるか  
らだ

だから……もういい

ガツクさんに何とも思われなくても　嫌われてもいい　呆れられて  
もいい

あたしはあたしでいる　ガツクさんを好きなあたしでいよう

だって、仕様がな

い好きなんだもん

貴方が隣にいらなくても

やっぱり好きなの

ストン

と戻ってきた気がした。

ガツクから否定され混乱し恐れ、どこか浮遊感すらあった心がある  
べき所に収まった気がした。

ああ・・・なんかすつきりした気がする。

開き直ったモモコは盗み見る事をやめ、首を傾けると堂々とガツクを見詰めた。

視線に気がついたのかガツクが俯けていた顔を上げ、モモコの方へ目を向けた。

と、モモコがこちらをじいっと見ているので驚き、わずかに身構える。

そんな動揺したようなガツクを余所に目が合ったモモコは

「ありがとうございます、ガツクさん。連絡機が入ったバックを会場に忘れて来ちゃって・・・とても困っていたんです。処置までしてくれて・・・ありがとうございます。」

少しはにかみながらもニッコリ笑ってお礼を言った。

ガツクは少し目を見開いたが・・・元の無表情に戻ると、

「誰でもそうする。」

淡々と返す。

感情を見せないガツクに落胆するも

（ちゃんと目を見て話せた。ちょっと前と比べたらスゴイ前進じゃん）

モモコはほろ苦い気持ちと嬉しい気持ちで微笑んだ。

ガツクはニコニコするモモコに訝しげな視線を送ったがまた元の体制に戻った。



どれくらいの時間が経ったのか

「ガツクさん！」

表の方でカインの聲がして、ガツクはフツと息を洩らすと足早にドアへと向かい開けてカインに声を掛けた。

表の方で2人が話す声が聞こえ、モモコは長かったような短かったような夢のような時間が終わった事を知る。

（でもこれが最後じゃないもんね。ガツクさんと話せる機会はまた来る！ううん！自分から作る！）

モモコは処置室の白い天井を見上げながら拳を作って気合を入れた。

「モモコちゃん、大丈夫？」

モモコが密かにガツクを入れているとカインがドアからヒョッコリ顔を出した。

「カインさん！はい、ガツクさんのお陰でだいぶ楽になりました。」

カインはモモコが横たわるベッドまで歩み寄る。

「家まで送るよ。起き上がれるかい？」

「ガツクさんは……」

カインがちょっと困ったような顔になったのでモモコは察した。

「……………帰ってしまったわね。」「

カインはまるで自分のせいのかの様に頭を掻く。

「うん……………君を家まで送るようにと。」「

「他にも何か言われませんでした?」「

カインはバツが悪そうに「あー」とか「うー」とか言っているのをモモコは面白そうに見て、最初に疑問に思った事を話した。

「ガツクさんに連れられていた時に、意識して他に人に会わないようにしているのに気付いたんです。暗がりを選んで移動したり……………。カインさん、私の捻挫を手当てした事、誰にも言わないようにって言われませんでした?」「

カインが観念したように頷くとモモコはやっぱりという様に苦笑した。

「わかります、ガツクさんの考えてる事。私とガツクさんが一緒にいる所を見られたら……………また騒がしくなるかもしれない。」「

「……………モモコちゃん、」「

カインが何か言おうとするのを手で制してからモモコは上体を起こした。

「私を誰かに任せてもよかったのに。医務室まで運んで、手当までしてくれて……………それだけで充分です。すごく嬉しい。」「

モモコはガツクが手当してくれてくれた部分をそっと撫でた。

「カインさん。」

モモコはカインを真っ直ぐ見た。その目には以前と同じ強い光が宿っている。カインは知らず息を飲んだ。

「私、やっぱりガツクさんが好きです。」

静かな部屋にモモコのきつぱりとした声が響く。

「モモコちゃん・・・君って子は・・・でもそれは・・・ガツクさん相手だと辛い事かも知れないよ？現に今だって」

「いいんです。ガツクさんにどんなに素っ気なくされても。だって・・・誰を好きでいようと私の自由だし。それはさすがのガツクさんにだって止められないもの。ここからですよ。ここからが私のスタートなんです。」

強い。いや、強くなったのか。

カインは笑顔のモモコを眩しそうに見て思った。そして人の話を聞くこととしない上官を思い出して軽いため息が出る。

（どういつ思考回路で今の状態になったか知らないけど・・・ガツクさん、あなたこのままだと後悔する事態になりますよ？・・・いい加減目を覚ましてもらいたいなあ・・・）

「で、あの・・・こんな事今更カインさんに言うのって生意気だとは思っんですけど。」

さつきとは打って変わり、急に情けなさそうにモモコの眉が八の字に下がる。ガツクの無表情な顔を思い出していたカインはモモコの言いたい事がわかって微笑ましくなる。

「ガツクさんの事、よろしくお願いします。ガツクさん、体力あるばかりに無理しちゃう時があるから・・・人の言う事聞くような人じゃないと思うんですけど。そこを何とか堪えてですね、あ、あの、こんな事とづくにわかってると思うんですけど！うう、もう何言ってもいいかわかんないですけど・・・ついて行ってあげて下さい！」

モモコは最後ペコリと頭を下げた。

「わかってるよ、モモコちゃん。心配しないで。ガツクさんのサポートはしっかりやるから。それに・・・今更だから。」

顔を上げたモモコはカインがため息をつくのを見て

「・・・ホント今更って感じですね・・・み、皆さん本当にお疲れ様です、アハハハ・・・」

ガツクの鬼の様な仕事ぶりとそれに振り回されるカインや隊士達を思い出し・・・乾いた笑いが出た。

冷たい外気の中、カインの苦勞話やモモコの仕事の話をしながらおぼわれたモモコは家に帰った。カインは明日は病院に行く事、今で

はモモコの保護者的役割をしているテンレイに伝えておく事を話すと最後に無理はしないように言って帰って行った。

モモコはベッドに座り窓から見える青白い月を見上げた。

「あれ？そういうえば・・・あたし挫いたってガツクさんに言っただけ？しかも右足だって。うーん・・・言わなかったような・・・ガツクさんぐらいの軍人さんになるとパツと見てわかるもんなのかなあ・・・。」

モモコはふと思いついて疑問に思ったが、肩を竦めるとテンレイを待った。

物陰に隠れていた大きな影は、テンレイが急ぎ足でモモコの部屋へと入るのを気配を殺して見ている。しばらくして何やらモモコに言い含めながらテンレイが出てきて帰って行く。

やがてモモコの部屋の明かりが消える。影はそれを見届けたかのようになんか静かにそこから離れた。

7 - 4      ここからがスタートです（後書き）

恋する乙女を舐めんなよ！

## 何やら水面下です

応急処置が良かったのか早めに足が治り、開き直りという名の復活を遂げたモモコは精力的に広報課の仕事をこなした。

そこで少し困った事がある。

モモコの広報紙には「君の素顔に密着」というふざけた名の隊士達の訓練時の様子を取材したコーナーがあるのだが、最近掲載が危ぶまれていた。

広い部署部屋にモモコのため息が落ちる。

「・・・あたしみたいな普通の人間が付いていくレベルじゃないからなあ・・・」

隊士達の訓練は容赦とか温情という言葉を何処かに置き忘れてきた大将以下将校達によって、一般人がドン引きするほど過酷なモノである。とてもドンくさいモモコがついて行くレベルではない。それでも前はウサちゃん魔王が抱えてくれたので何の苦勞もなく存分に取材できたのだが・・・

「ガツクさんをお願いする訳にはいかないし・・・言う勇氣ないし・・・」

ていうか今までよく平気だったな！意識はしてたはずなのに・・・あの頃の自分が恥ずかしい！！

モモコは一頻り過去に悶えてからこの問題に取りかかった。

「うん．．．最大の問題は隊士さん達が移動とかした時に一緒に  
についていけない事なんだよな．．．。」

人間の限界に挑戦しているようにしか見えない移動時の彼らの速度。

移動がなあ．．．移動．．．移動かあ．．．．．  
あつ！

「何か乗り物に乗ればいいじゃん。」

モモコはポンつと手を叩いて名案（．．．おそつ！）を思い付い  
た。

「あ、でも待てよ。許可されるものかな？．．．まあ．．．それは後  
で検討するとして．．．何に乗ろう。」

普通に車かな？一応前の世界でも乗ってたし．．．

「バギーなんかどうだ？」

いつ！！！？



一人しかいないと思っていた部屋に聞こえた声にギョツとしてモモコが顔を上げると・・・

「よっ！」

軽く手を上げてニカツと笑ったホクガンと持参した茶菓子を開けてぱくついているダイスがいた。

「一体いつの間に・・・さっきまで誰もいなかったのに。」

モモコがデスクから離れ、2人の側まで来ながら呆然と呟いた。

「お前がグダグダどうでもいい独り言を言ったり何か気持ち悪くネクネ身体をくねらせていた時からだ。」

「帰れ。」

ムキー！となったモモコがホクガンに罵声を一頻り浴びせた後。

「移動手段に悩んでるんじゃない？」

モモコは「酒！」と言うホクガンに「勤務中だよ！バカ！」と返し、「じゃあ甘いモンくれ」と返されると「ホクガンは無視」と口に出して言ったが、結局は「くれくれくれくれくれくれ・・・。」と永遠に言いそうなホクガンに負け、ココアを入れてやった。ダイスには熱いほうじ茶だ。

「そう。以前はガツクさんに運んでもらったでしょ？だけでもう言えないし。って私って・・・。」

甘えだ・・・これ完璧甘えだな・・・口でいくら成人してるって言

つても中身は子供のころと大差ない。本当は全部自分でやらなくちゃいけない事なのに・・・コレがあたしの仕事なのに・・・言われるがまま頼っちゃて・・・

ため息を付いて反省しきりのモモコ。

「いいじゃねえか 別に。んな落ち込む事でもないだろ。」

「でも、もっと早くなんかできたはずでしょ。皆に頼ってばかりで情けないよ・・・」

「まあだ始めたばかりじゃねえか。何もかも自分でやるこたねえ。あんまり力入れ過ぎると周りが見えんようになるぞ。」

ホクガンとダイスがもつともな事を諭す様に交互に言うが仕事をサボり、それぞれの補佐官に鬼の形相で追いかけられたり、ブリザードもかくやの冷たい声で説教されたりとの2人の姿を日常的に見かけるので効果のほどは限りなく低い。

（この2人の言うのを真面目に聞いてたら怠け者になっちゃいそう。話半分に聞いとこ）

モモコはヘラヘラ笑う大男2人をじと目で見ながら思った。当然だ。

それはともかく、2人の提案を受けてモモコはジエン・ガトウ率いる武器製作開発部隊・雪董隊に自分専用のバギーの製作を依頼した。そんな物をしかも彼らからしたら規格外に小さい乗り物はメカ狂いの興味を大変よく引いたようで、依頼書にサインしているモモコの

耳に、

「ここからミサイル出したらどうだ。」

「ばか！クロックス課長の体ごと飛ぶだろ！そうじゃなくてここは  
やっぱガトリングガンだろ！」

「違う！訓練時は何かがあるかわからないですよ！ここから煙幕出  
たり油が出たり撒菱まきびしが出たりしてですねェ！」

等と不穏な会話が聞こえてきた様な気がするが・・・やはり軍部は  
変わった者が多い。と言うだけに留めておこう。

依頼は快く引き受けられ、それと同じくして各部隊の補佐官らに訓  
練時の取材時にバギーで同行させてほしい旨への（国主の認が降り  
た）書類を提出、受理された。

そして早くも（あまりの早さにモモコの胸に不安の二文字が浮かん  
だ）2週間ほどでモモコ仕様にカスタマイズされたバギーの試作品  
が出来上がり1週間ほどで細部を補強改修、新たなモモコの相棒が  
誕生した。

「あの・・・・・・・・この色は一体。」

モモコは隊士達のバイクと比べれば格段に小さい自分の可愛い相棒

をボーゼンと見つめた。

ピンク。ピンクピンク、ピンクピンク。

そこにはグラデーション豊かな様々なピンクに彩られた小さなバギーがちんまりと……いた。

この前見た時は黒かったはず……

「いやぁ……こんなに可愛いバギーを製作したの初めてだったんで隊士達が張り切っちゃいます……つい調子に乗ってしまったというか……あの、すいませんやり過ぎてしまいました。」

自分も混ざっていたジエンは面目ないとばかりに頭を掻いた。

あ、でも記者は目立った方が誤射されにくいと思いますし（されてたまるか！）、コレくらい派手な方がいいんじゃないでしょうか？と笑ったジエンの首をモモコが締めたいと思ったのは内緒だ。

その後、バイク専用の訓練場で同じように練習していた隊士達に吹き出されたり、クスクス笑われたり、指を刺されて写真を撮られたり、まあ全体的に笑われながら、それでも練習するモモコが心の中でジエン以下雪董の隊士達を激しく呪っている

「えらいかわええモンに乗っとるのうモモコ。」

「ダイスさん……」

ニヤニヤ笑うダイスがこちらを見下ろしていた。

「あ、あたしが希望したんじゃないですよ！ジエンさん達が勝手に！」

自分の趣味だと思われては爆死もんだ！とばかりに必死になって訴えるモモコにダイスはどうどうと肩を叩いた。

「わかつちよる、わかつちよる。モモコは可愛ええ外見とは違って案外あっさりしたモンが好きじゃからなあ。大方調子に乗ったジエン達にええようにされたんじゃる。」

首が？げるかという程首を激しく上下に動かし肯定したモモコは、ダイスの横にウィンドニクが停車しているのを見た。

「ダイスさん程の人でもここで練習するんですか？」

モモコが今いる訓練場は主にバイクに乗りたての者が使う場所。ガツクと同じ位運転の技術に優れているダイスの来る場所ではない。

「うん？ここでお前が練習しとる聞いての、いっちょワシが見てやるうとな。」

「ええー！いいんですか！？」

運転の技術に関してはガツクにも引けを取らない（他にもあるわ！）ダイスからの提案にモモコは驚くと共に素早く喰いついた。早く上達すればそれだけ早く現場に行けるし同行させてくれる隊士達にも迷惑をかける事は少なくなる。

モモコは訓練の過酷さでは部内一の雷桜隊にも同行取材するつもりだ。後れをとるわけにはいかない。

「今のままじゃ確実に足手まといー」

「よろしくお願いします!!!」

広い訓練場にモモコの高い声が響いた。

そのから1週間ほど、ダイスの厳しい訓練をみっちり受け（半ベソで頑張っ・・・バイクに乗ったダイスは別人だった・・・）、多少デコボコした道でもスムーズに乗れるようになったモモコは

「次の段階。」

と言うダイスに導かれるまま、知らずに上級者用訓練場に乗り入れた。

どうして・・・

モモコは、ピンクの小さなバギーに跨り、これまた小さなヘルメットとゴーグルを付け、スタートの合図を待っていた。

隣からは黒光りする化け物バイクが轟音を響かせてスタンバっている。ガツクの愛車「レイマド」だ。

もちろん乗っているのはガツク。

戦闘用バイクの名に相応しく戦う事に特化した躯体は持ち主であるガツクによく似ていた。

即ち、ずば抜けて大きく、厚くて、俊敏。他を容易く掌握する程の圧力、そして冷徹。

その巨体の横に並ぶモモコのバギーは……チヨロQに見えるほど小さい。

2人と2体は今……『勝った方が訓練場使う権利あげちゃうレス』を行おうとしていた。

モモコは充分距離を取っているにもかかわらず、レイマドから発せられるエンジンの熱を感じながら心の中で叫び続けている。

どおしてこうなったのおおお!!!

「……何のつもりだ。」

ガツクはピンクのバギーの横に首を竦めて立つモモコと

「何って……ここはバイクの練習場じゃろうが。モモコがバギーに乗る練習しにきたに決まっとうっ?」

腕を組んでニヤニヤ笑うダイスを睨みつけた。

「ここが何処かはわかっている。今日この時間は雷桜隊が使う事になっっているはずだ。何故今お前達がここにいるかと聞いているんだ。部外者は退け。」

圧力の掛かる声と目で言ったガツクであつたが長年の親友には効かなかつた。

「それがどういう事かのう、モモコも今日この時間ここで練習する事が決まっておるんじゃ。ほれ、コレがその証じゃ。」

ダイスは着崩したスーツの内ポケットから一枚の書類をペラッとガツクに差し出して見せた。

それをひったくる様にして受け取つたガツクはじっくり目を通してダイスの言っている事が本当の事だと知る。

今日ガツク率いる雷桜隊第1分隊から第5分隊は高度なバイク操縦の訓練の為、起伏に富み、ありとあらゆる地形を模した二輪専用の練習場を集っていた。

そこで今回の訓練内容を話していたところ、ピンクのバギーを押すモモコとウィンドニクを軽々と押すダイスが現われたのだつた。

2人を見た途端ガツクの眉間に深い皺が3本もでき、これから起ころだろう展開に一気に張りつめた空気になる隊士達を、押しつけるようにしてガツクは2人に近寄つた。

「ズブの素人が俺達の横でバギーに乗るだど?・・・死にたいのか。



「ガツクは睨みつけるようにモモコを見下ろした。」

「ひいっ！」

モモコはビクついて体が震えたが目だけはなんとか逸らさない。

「だ〜いじょ〜ぶだて。ワシが付いちよるんじゃぞ？お前等なんぞ寄せ付けんわい。」

「ダイスはヘラヘラしながら尚も言うが、

「お前が付いていようが付いていまいが関係ない。俺達と素人どちらかが同時に使うとなれば優先されるは当然俺達だ。・・・帰れ。」

「ガツクは腕を組んでダイスを睨め付けた。」

「それは聞けんのオ、ワシもモモコも今日を逃したら今後の予定が立たんのじゃ。・・・それとも雷桜は素人が横におられちゃ訓練に集中出来んほど下っ手クソ揃いか。」

モモコはダイスをパチクリと目を開いて見上げた。

「えっ・・・このあと何かあったっけな・・・あ、そっかあたしにはなくてもダイスさんにはあるよね・・・何かダイスさんに悪いなあ・・・あれ？「モモコも」って言った？ていうか今ケンカ売らなかつた？」



モモコは今の状況を黒猫が知ったら何て言うだろうかとクスクス笑った。

「余裕だな、クロックス。」

・・・へっ？

「俺に勝てる自信があるのか、それとも・・・つまりぬ意地か？」

はい!?

モモコは訳が分からず目を白黒してガツクを見上げた。

か、勝っ!?!誰に?意地って何のっ!?!えええー!ちょっとほのぼのしてる間に何か進んだ!?!

モモコは半ば呆れるように自分を見下ろすガツクとダイスを交互に見上げた。

背を汗が気持ち悪いぐらい流れていくのがわかる。

ダイスは少し意外そうにモモコを見下ろしていたが、

「モモコが勝てばお前らには退いてもらうぞ、ええな。」

ちよちよちよっと!?!?!だから!勝手に話し進めないで!説明して

よ！

青ざめたモモコがダイスの袖を強く引つ張る。

「大丈夫じゃ、ハンデは付けるから安心せえ。」

それにニコニコと返しダイスはモモコの柔らかな髪をクシャクシャツと優しく撫でた。

そんな優しさいらないから！そ・じやなくて！セ・ツ・メ・イ！！何がどうなってるのか説明しろお！！

パニック寸前のモモコは目を？いて抗議するようにダイスの手を握り締めるとブンブンと上下に振った。

「なんじゃ話を聞いとらんかったんか？お前とガツクがレースをして勝った方がココを先に使う事になっただけじゃて。3周して先にゴールした方が勝ちじゃ。ガツクはお前が2周した後にスタートになるハンデじゃ。ええじゃろ？」

「よくないよくないよくないよ！！何でそんな事勝手に決めちゃうの！？あたしがガツクさんに勝てるわけないじゃん！」

「ええからええから。」

「ええくないっ！！！！」

先程いた場所から少し離れて内緒話をするようにくっついて喋る人。

ーガツクの目が僅かに狭まり、組んだ腕に指が少し食い込んだ。

僅かな動きだったが注意深くガツクを観察していたダイスにはわかった。

く回想終了く

やばいつ！抜かれちゃう！

モモコはあっさりハンデ分の周回を走られ並んだガツクに抜かれた。

モモコは焦ってグリップを強く回した。

ギョルツ！

バギーの前輪が地面に出来た瘤に滑った。

え。

グルン。

反転する視界。

モモコとモモコのバギーは宙に投げ出され、泥の地面に叩きつけられようとしていた。

……が。

「ぐえっ！」

胸をものすごい力で引つ張られ締め付けられてモモコの肺から空気と共にへしゃげた声が漏れた。  
硬い何かに押し付けられ抱えられたと思ったら下の方からドオオオンン……という重い振動が体を揺さぶる。

な……なにが……

「……モモコ……」

小さく、

聞こえた。

ガツクさん……………？

気付けばモモコは胸に押し付けられるような形でガツクの前に座っていた。

あ……………

体の下からはドツドツドツ……とレイマドのエンジンが轟く様に振動しているのが感じられる。

あたし……

頬にサラツとしたワイシャツの感触と熱いほどのガツクの体温、彼の匂いがする。

そして。

ドクンドクンドクン・・・

愛しい男の心臓の鼓動に・・・心と体全部が揺さぶられる。

ガツクさん・・・

モモコはそつと目を閉じた。そして深呼吸を一つしてからガツクの胸に手を置いて身を離す。  
目の端にダイスが近寄って来たのが入った。

ピク・・・

ガツクの腕に力が一瞬入ったが、ダイスがモモコを引き寄せせるままに任す。

・・・



重苦しい沈黙が落ちる。

「……………勝負あつたな……………アレでは続行は無理だろ  
う。」

やがてガツクは忌々しげにダイスを……………強いてはモモコを睨みつけると背後を顎をしゃくつて示す。

！

息を飲んだモモコの目にスピードに乗ったままに地面に激突し、フロントフォークが折れて軸の曲がり、へしゃげたバギーが映った。

ああ……………

モモコは相棒の無残な有様に、ジエンや雪董隊の皆や指導してくれたダイスのこれまでを思い落胆した。

「アレを使って訓練に付いて来るつもりらしいが……………身の程を知るがいい。お前など邪魔なだけだ。」

ガツクがダイスの腕にぶら下がったままのモモコに、冷たい目を向けながら付き離す様に放った。

だが何時もの調子を取り戻したモモコは怯むどころかムツとなつて逆にガツクを睨んだ。

「邪魔になんかならないくらい上手くなりますっ！それにこれはあたしの仕事のやり方です……………いくら大将のガツクさんの言う事でも聞けません。」

モモコは常より低い声で応酬した。

「……フン……目障りだ。その玩具を持ってさっさと消えろ。」  
吐き捨てるよう言うとレイマドのハンドルを回してさっさと隊士達が整列する場へと戻った。

ダイスは肩を竦めるとモモコを降ろし、バギーの方へ歩いた。そして小さいが重量はあるバギーを軽々と持って戻りモモコの前に置いた。

「そうしょぼくれるな。惜しかったじゃねエか。」

「でも……追い出されるし、何より壊れちゃった……。」

さっきとは打って変わってモモコはがっくりと肩を降ろした。

「悪いだけじゃねえぞ。ガツクの隣で走るつちゅう貴重な経験も出来たし、このコースだって走れたじゃねエか。確かにもう少し練習が必要じゃがのう。バギーはまだ改良が必要じゃな。お前は軽いからもうちつと軽量化したらええかもしれん。ビデオカメラに収めたからジエンと構造から練り直したの。あと」

まだ何かつらつらと喋っているダイスを後にモモコはため息を付くとガクガクするハンドルに四苦八苦しながら訓練場を後にした。

「興味ないと言ったわりにはスゲー良い反応だな。」

ホクガンはダイスが撮って来たあの時の映像を見ながら、半ば呆れたようにあと半分は・・・嬉しげに呟いた。

スピードを増したバギーがでこぼこした地面に出来た瘤の一つにぶつかり、ハンドルを取られ宙に浮く。

と、前を走っていたガツクがレイマドごと後方宙返りをして空中でモモコの胸を捕まえ胸に抱きこむ。

轟音を立てて着地するレイマド。

その前方をバギーがもんどりうって転がって行くのが見えた。

大事そうに片手でモモコを抱きしめるガツク。

そのややうつむき加減な顔がモモコを愛おしげに見ている様に見えるのは・・・自分達の願望が混ざっているからだろうか。

ここはホクガンの執務室。

テレビに映った映像を見ているのは3人。ホクガン、テンレイ、ダイス。

「どう思う?」

ホクガンが自分と同じように食い入る様に画面を見ていたテンレイに話しかけた。

「お兄様と同じ意見よ。」

テンレイは顔を顰めながら答えた。

「お前は？間近で見た感想はどうよ。」

ダイスは足を組んでソファの肘かけに腕を置くとため息をついた。

「ワシがワザとモモコと接触しとるとのう……殺気がまあ、刺さる刺さる。モモコも周りのモンも気付かんほど上手く隠していたが……うんざりするほど長い付き合いじゃからなア　ワシの目は誤魔化せんで。」

それに、と続ける。

「訓練時に小っこいバギーなんかに乗ってちよろちよろすんなア　危ないからやめると言いたいんじやろが……見事にツンデレな事言っとったぞ。」

「気持ち悪ッ！」

ホクガンがうげ、という様に口から舌を出した。

このダイスの一連の行動は実は試験的な意味合いがあった。ガツクの注意してみなければわからない奇妙な行動に気付いたホクガンとダイスはガツクを試してみる事にする。モモコが目の前で男と親密そうにしたり、危ない事になったりしようとしたらどういう行動に出るか、と。もちろん、モモコにバギーの正しい乗り方を教える必要もあったが、教えるのは何もダイスでなくてもいい。が、ガツクの反応を拾いやすいのと、気付かれることなく自然にできそうなダイスになったただけだ。

結果は予想通り。

やはりあの斜め上思考だが一度喰いついたら死ぬまで喰らいつく執着心が人一倍、いや百倍ほど強いヤンデレ魔王がモモコへの想いを翻すはずがなかった。

「このまま静観する？」

まだ顔を顰めたままのテンレイが尋ねる。

ホクガンは姿勢を正すとニヤと笑った。悪巧みしている顔である。

「いや。この気持ち悪いツンデレ大将を追い込んでやろうぜ。不必要なくらいにモモコと接触させてやろう。どんな恐れー顔が見れるか楽しみだぜ。」

「じゃな。ワシ等をやきもきさせた代償じゃ。」

「でも……」

ガツクに意趣返しなど真つ先に率先して嬉々としてやるだろうテンレイは意外にも口に指を当てて心配そうに呟いた。

「やりたくねえのか？」

超意外という様にホクガンが軽く目を見開いてテンレイを見た。それに首を振って懸念を口にする。

「違うわよ。ガツクなんてどうなるかと知った事ではないけど、それに利用する形になるモモコが……心配なの。」

「ふーむ。……それもそうじゃな。だがテンレイ、このままの状態は多分長く続かんぞ。」

「え？」

「そうそう。」

ダイスが両手を組んで考え込む様に言うとそれを肯定する感じでホクガンがうんうんと頷いた。

「ガツクの野郎が我慢できなくなるに決まってる。奴お得意の鉄の意思でめっちゃセーブしてるんだろうが、最近じゃそれがポロポロポロポロ綻びてきてる。」

ガツクはよく巧く隠しているが目敏いホクガンやダイス、注意深く2人を見守っているカインや他の幾人かの隊士や職員達に……その……えーと……そうだな……例えば、

モモコが夜遅くまで記事を書いているその部署部屋。

窓の外、モモコからは死角になつて見えないが全身を真っ黒にした特殊作業員姿のガツクが壁にへばり付いてそつ……と覗き見……いや見守っている姿が目撃されたり、モモコがちょっとバタバタして朝と昼を取り損ね、空腹のあまり貧血で転びそうになったのを偶然通りかかったみたいにして支えたり（その際「きちんと飯を食わんからそうなるのだ。周りが迷惑だ。」とドコから見っていたアンタ。とツツコミ入れたくなるツンデレを披露したりして……

わかる人にはわかる、はつきり言うたとストーカー行為をしていた。（ちなみにモモコはわかっていない人の方）

「このまま見ても面白いがどうせならもつと面白くしようぜ。モモコにもいい方に向かうんだ、利用するにしてもハッピーエンドになるためだ。大丈夫だよ。」

本当に2人の事を思っているのか疑わしいセリフでホクガンはテンレイの心配を杞憂だと蹴飛ばす。

「そう・・・ね。」

それに納得がいかないまでもテンレイは頷いた。

自分が参加しなくてもこの男達はやるであろうし、行き過ぎる悪戯にストップをかけるのは自分しかない。モモコを守るためには、  
(テンレイの脳内にガツクを気遣うという文字は一文字たりとも、似た様な文法も、類義語もない)

「よし、決まりだな。」

憂さ晴らしに最適な、しかもあのガツクに仕掛ける悪戯を既にいくつか思いついたホクガンがニヤニヤ笑いながら言うと、ダイスとテンレイも頷いた。

これからとんでもない目にあう事になる2人の、もう片方は自宅のベッドでぐっすり眠り、もう片方はそれを窓の外側からジッと見ていた。

怖えーよおおおお!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1750o/>

---

偏屈さんと一緒

2011年10月22日01時06分発行